

---

# 白鳥姫

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白鳥姫

### 【Nコード】

N6683D

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

白鳥の呪いを解くためには永遠の愛の誓いが必要。オデット姫は王子の真実の愛を得られるか？魔王ロットバルトVS魔女娘クラリスの戦いの結末は？「黒魔女カラベラス物語」第2編。純愛物語。

## ブログ 伝説(前書き)

「私版眠れる森の美女」の続編です。そちらを先に読んでいただけることより楽しみます。

地図を作りました。

画像(600\*450px)はこちら <http://eiggatwo.up.seesa.net/image/MAP.gif>  
ブログの記事はこちら <http://eiggatwo.seesa.net/article/83461215.html>  
です。

\*長いですが、お願いですからこの作品に関しては最後まで読むのはどうかお止してください。全部読んでほしい！ですが、せめて第41章からお読みくださるよう切にお願いいたします。

作者はこれが自分のベスト作だと思っています。

## プロローグ 伝説

昔々。

美しい湖がありました。

湖には一匹の妖精の娘が住んでいました。

あるとき湖の岸を美しい王子様が通りかかりました。

妖精の娘は隠れて王子様を眺めているうち、すっかり王子様を好きになってしまいました。

あんまり王子様を好きになってしまった妖精の娘は思いあまって、王子様がどこかへ行ってしまうないように王子様に魔法をかけて目が見えないようにしてしまいました。

そうして妖精の娘はとても強い力を持った魔女のところへ行き、自分を人間にしてくれるように頼みました。

娘の話を聞いてすっかり同情した魔女は娘の願いを聞いて娘を人間の娘にしてくれました。

しかしそれにはとても大きな代償が必要でした。

真っ白だった娘の肌はながねん日にあぶられた老婆のように浅黒いさがさの肌になり、赤くつやつやと美しかった唇は血が凝り固まったような紫色になってしまいました。

娘は水に映った自分の姿を見て、これはあんまりだと嘆き悲しみ、魔女に元の姿に戻してくれと頼みましたが、魔女は今度は言うことを聞いてくれませんでした。

実は魔女はひどい意地悪な嫌な女だったのです。

妖精の娘の話に同情している振りをして、実は内心おろかな娘をあざ笑っていたのです。

すっかり美しくなくなってしまった娘はとぼとぼと重い足取りで湖に帰ってきました。

娘が無くしたのは美しさだけではありませんでした。

妖精の魔力もすっかり魔女に奪い取られていたのです。

娘は王子様の目を治してやることもできず、なんと申し訳ないことをしてしまったのだらうと、王子に合わせる顔もないように思いました。目が見えなくなっただけです。すっかり途方に暮れている王子を見ると放っておくこともできず、正体を隠して王子の世話をしなくてはならないとしました。

王子は最初娘のさがさの手に触れて年老いた老婆だらうと勘違いしたのですが、世話を焼かれているうちにそれがまだ若い娘であり、しかもきつと美しい娘に違いないと思うようになりました。

意地悪な魔女が哀れな妖精の娘の姿をあざ笑ってやろうと湖にやってきました。

しかしなんと娘と王子は仲むつまじく暮らしているではありませんか。

しかも王子様は魔女から見てもとても美しくりりしい王子様だったので魔女はすっかり悔しくなっていました。

魔女は王子を自分の物にする策略を練りました。

魔女は妖精の娘が用を足しに出かけている間に魔法で王子の目を見えるようにしてやり、娘になりすまして王子のところへ行きました。

目の見えるようになった王子は魔女の美しい姿を見てすっかり娘と思い込み、結婚を申し込みました。

娘に化けた魔女は快く結婚の申し出を受け、二人は結婚することになりました。

帰ってきた妖精の娘は王子が魔女と婚約したことを知って王子の裏切りに激しく怒りましたが、自分の醜い姿を恥じて名乗り出ることができず、嘆き悲しみながら王子の下を去りました。

魔女と婚約した王子でしたが、すぐにこの女が自分の世話をしてくれていた女ではないことに気づきました。

魔女はとても傲慢で威張ることしか知らず、とてもとても人の世話をできるような女ではなかったからです。

王子は自分が恩のある娘を裏切ってしまったことに思い至り、娘を捜し求めました。

しかし王子は娘の姿を知りません。

娘を恋しく思うあまり、王子はきつく目隠しをし、目の見えなかったときと同じようにしてみようと思いました。

王子は湖の岸边を歩いていると、足を滑らせ、湖に落ちてしまいました。

それでも王子は目隠しを取ろうとはしませんでした。

自分が苦しんでいればあの心優しい娘がまた助けに来てくれるような気がしたのです。

そうでなければ、二度と娘に会えないのならこのまま溺れ死んでもいいと思い詰めていました。

心通じるものがあつたのでしょうか、娘は王子の危機を知って湖に駆けつけました。しかしその頃には王子は湖の真ん中でなかば溺れ死にかかっていたいました。

娘が王子を助けたい一心で湖に飛び込むと、その姿は美しい白鳥となり、王子をすくい上げることができました。

岸边に運ばれて目隠しを取った王子は、自分を見つめる白鳥の悲しそうな目を見て、今度こそはそれが娘の化身した姿であると見抜きました。

王子は白鳥に永遠の愛を誓いました。

すると奇跡が起き、娘は美しい妖精の姿に戻りました。

王子は妖精に愛を誓いましたが、妖精と人間では結婚することはできません。

妖精は王子の下を去ろうとしましたが、今度は王子は絶対に娘を放そうとはしませんでした。

そんな二人の様子を見た魔女は嫉妬に狂い、魔力で嵐を起こし、湖の水を氾濫させ、二人とも湖の底へ沈めてしまいました。

二人は死にました。

しかし二人の魂は結びついたまま天に昇り、天上で永遠に結ばれ

ました。

## 第1章 運命の出会いその1

「王子！ ジークフリート王子！」

音楽の彼方から呼ぶ声が聞こえていました。王子は知らんぷりを決め込んで娘たちと踊り続けました。ワインが程良く回って体はぼかぼか暖かく、足取りは宙に浮くように軽やかで、自然と笑みがこぼれてくるように最高に楽しい気分でした。

「王子、王子、王子！ ジークフリート王子！」

ルービン卿はしつこく精一杯の大声で呼び続けています。

「ご苦労なことだ・・・」

どうせ母上に言いつけられて僕を連れ戻しに来たのだろう。

ジークフリート王子はなおも無視してダンスに興じ続けましたが、王子王子と呼ばう卿の声が絞め殺される鶏のように悲愴なものになってきたのでさすがにかわいそうになって手を高く上げて分かった分かったと合図してやりました。

王子はみんなのダンスの邪魔にならないように巧みに流れをぬってルービン卿の方へ移動していきましたが、器用なことに両手に二人の娘を引き連れたままでした。

二人の娘たちもそうとうワインが回っているようで王子にくるくる回されてケタケタ笑っています。

卿のところへやってくると卿は大声の出しすぎでげっそりしていました。

「ああ、なんて顔をしているんですルービン卿？ 楽しいお祭りですよ、さああなたも一杯おやりなさい」

王子はテーブルからジョッキを取るとボトルからワインをなみなみとついでルービン卿にあてがいました。

ルービン卿は太い眉をちらりとしかめましたが、よほどのどが渴いていたでしょう、勧められるままにグイと大きく一口あおりました。どろどろに濃い液体がかすれたのどに貼り付いて卿はゲホン



ゲホンとむせて、王子は笑いながら背をさすってやりました。

「下々の酒は卿の上品なお口には合いませんか？ 僕は城のワインよりこつちの方が断然好きだがなあ」

王子は今度は子供用のぶどうジュースをついでやって飲ませてやりました。

「さあ、音楽だ音楽だ！ さよなら楽しい夏よ！ 実りの秋に向かって景気づけだ！ 太鼓を叩け！ 笛を高らかに！ さあみんな、おおいに踊り狂おう！」

おー、と歓声が上がリ、高い空に音楽がいつそう高らかに鳴り響きました。

卿は慌てて王子を遮ろうとしました。

「王子、城にお戻りください。母上様が・・・」

「さあ、卿も踊りたまえ！」

王子は娘の一人を卿にあてがい、酔った娘はケタケタ笑って卿の丸いほっぺにブチューツとキスして踊りの輪に向かって卿の手を引っ張りました。

「王子、お願いです・・・」

卿のほとんど悲鳴のような声はけたたましい音楽とわき返る踊りの渦の中へかき消えていきました。

それから三曲も代わる代わる娘たちにダンスに引きずり回された卿はへとへとになって這うようにして踊りの輪から逃げ出しました。「まったくなんだってこのわしがこんな坊やお守りをしなければならぬのか」

ルービン卿はすっかり物悲しくなつて楽しそうに踊り続ける王子を眺めていましたが、やがて意を決するとずかずか王子に向かって突進していくと、ガバと王子の腰にすがりつき、

「城にお戻りください。私はもう女王様の癩癩にはつきあい切れません」

と、ほんとうにうつすら涙を浮かべて哀願しました。

これにはさすがに王子もまいって、

「分かった、行くよ、行けばいいんだろう?」

と、両手を広げて降参しました。

ほっとして機嫌の直った卿に先導されながら、王子はすぐにいたずら心を起こし、右手と左手にそれぞれ手近な娘を捕まえました。

「あんなところに一人で帰るのはつまらない。いっしょにおいでよ、極上のワインをごちそうするよ」

酔っぱらった娘はキヤーと歓声を上げました。

王子は仲間の若者にも声をかけました。

「君たちもいっしょに来ないか? 向こうで踊り直しといこうじゃないか?」

しかし若者たちは首を振りました。

「俺たちは王子は好きだが、身分はわきまえているよ」

王子は一瞬しらっとした目をしましたが、すぐに笑みを浮かべると「いいさいいさ、君たちは君たちで盛り上がってくれよ。僕らもあつちで盛り上がるからさ」

と、両手の娘を引き寄せてそれぞれ頬にキスしてやりました。

ルービン卿は、何か言いかけてましたが、肩をすくめて黙って王子を促しました。

麓の村からお城まではちよつと距離があります。

卿は待たせていた馬車に王子と、仕方なく二人の村娘を乗せて出発しました。王子は自慢の愛馬に乗ってきていたのですが、酔っていましたし、娘たちだけ馬車に乗せるわけにもいかないので馬車に同乗しました。

最初初めて乗る豪華な馬車にはしゃいでいた娘たちでしたが、お城への坂道を上っていくうちにだんだん不安が湧いてきてすっかりキヨロキヨロ落ち着かなくなっていました。

「ねえ王子、わたしやっぱりお城へなんて行けないわ」

とうとう娘の一人が口になると、二人いっしょに泣き出しそうな

顔になってしまいました。

「大丈夫だよ、あつちもお祭りなんだよ、お客がいっぱい集まっ  
てごちそうがいっぱい並んで豪華な西の楽団がいて、愉快な出し物も  
あるんだよ」

王子は相変わらずへらへらした笑いを浮かべていましたが、その  
瞳には緊張のかけろいが揺らめいていました。

娘たちはルービン卿に救いの眼差しを向けました。

卿も先ほどまでの無邪気な様子を思っ  
て娘たちを哀れに思いま  
したが、これ以上お城への帰還が遅れるわけにはいきません。

「そう、大丈夫だよ、お嬢さんたち。けっしてひどい目にあつたり  
はせんよ」

卿はため息をつきたくなるのを我慢しました。

馬車は解放された門をくぐり、厚く高い石壁の中に入りました。  
しばらく細い道路をぐるぐる巡り、また門をくぐるとようやく車止  
めに止まりました。

「この城は古いんだよ。今時こんなのは流行りじゃない」

王子は言い訳するように言い、先に馬車を降りると娘たちが降り  
るのに手を貸してやりました。

卿が降りると、馬車はさっさと先へ行ってしまいました。道路は  
狭いので馬車は置いておけないのです。

娘たちはもうガタガタ震え、王子にすがりつくようにしてやっと  
立っていました。

「ほら、聴いてごらんよ」

王子に肩を叩かれ気づいてみると、石積みの重厚な通路の向こう  
からまるで聞き慣れない不思議な音楽が流れてきていました。

なめらかな音の波が重なり合っ  
てなんと優雅にゆったり深みを  
持って響いてきます。

「あれが西のワルツという音楽さ」

「さよう、これぞ本物の音楽というものですな」

得意満面の卿に王子は皮肉つぽく口の端を引きつらせましたが、二人の娘はこの夢のような音楽にすっかり魅せられたようで王子の肩を握りしめた手も緊張がほぐれてきたようです。

儀典用に華麗に盛装した番兵に守られた通路を進んでいくと、さわさわと人の軽やかな笑い声が聞こえてきました。

中庭にしつらえたパーティー会場に色とりどりの華麗な衣装に身を包んだ紳士淑女が集っていました。

華麗なワルツを奏でる楽団もしつぽの長い燕尾服でびしっと正装し、指揮者の振るタクトに会わせて整然と楽器を操っています。

お客たちはどちらかといえば年輩の者が多いようですが、中には年頃の娘も何人かいて、特にひときわ目立って豪華に着飾っていました。

お客たちがちらほら王子の姿を認めてしだいにさわさわした談笑が収まっていききました。

微妙な雰囲気の変化を察知した指揮者は楽団に合図を送り、静かな穏やかな曲に切り替えました。

「あらあら、ようやく息子が戻ってまいりましたわ」

ちよつと失礼いたしますわね、と談笑していたお客に詫びて女王が王子のところへやってきました。

女王はちらつと二人の娘に目をやると鋭い視線をルービン卿に突き刺しました。

ルービン卿は蛇に睨まれた蛙のようにすくみ上がったのどの奥でグウと鳴きました。

女王は手で王子に出るように促しました。

王子は素直に前に出るとお客たちに向かって深々とお辞儀をして顔を上げるとニコツと愛想良く笑っていました。

「ベルーシア国王子のジークフリート・エージレです。本日は豊穰祈願祭に国内はもとより広く外国からも多くのお客様にお集まりいただきまことにありがとうございます。我が偉大なる母上ベルーシア国女王マリア・エージレが精一杯頑張って皆様のおもてなしの準

備をいたしました。どうぞ存分に楽しんでいってください」

王子に紹介されて母王は誇らしそうに笑顔で挨拶し、お客たちは盛大に拍手を送りました。

「ところで」

王子が高々と手を上げて皆の注目を集めて言いました。

「豊穰祈願祭といえは農民たちが主役です。我々貴族が毎日詩を詠んだり音楽や乗馬や狩りに興じていられるのも農民たちが毎日額に汗して労働にいそしんでくれるおかげであります。そこで、麓の村を代表して二人の娘さんに来ていただきました。さあ、皆さん、感謝を込めて盛大な拍手をどうぞ！」

お客の貴族たちは、さて、どういつ反応をしてよいものやら、戸惑いつつも王子に促されてパラパラと拍手しました。

王子は得意満面でしたが、当の娘さんたちは真つ青になって今にも泣き出しそうになっていました。

「さあ音楽だ音楽だ。楽団諸君、高い演奏料をもらっているのだから？ ひとつ盛大なやつをやってくれたまえな！」

楽団長は頭を悩ませつつ団員に合図を出してそこそこ軽快な舞曲を演奏し出しました。

「さあ、踊ろっ！」

「ジークフリート！」

女王はさすがに我慢しかねて精一杯押し殺した声で息子に言いました。

「いいかげんになさい！ あなたはなんのために今日の集まりを催したと思っっているのです！ あなたの・・・」

「僕は」

ジークフリート王子はまっすぐ母親を見つめて言いました。

「つまらない結婚などする気はありませんよ」

王子はもう母親など無視してさっさと音楽に合わせて娘たちとダンスを始めようとしました。

女王は怒りをぶちまけそうになるのを歯を噛みしめて耐え、ブル

ブル卒倒しそうに震えました。

巨大な影が王子に向かつてのっしのっしと迫ってきました。

王子も二人の娘もその巨大な人物を呆気にとられて見上げました。  
「王子様、ちよいとこのお嬢さん方をお借りしますよ」

その熊のような大男は巨大な手で二人の娘の手を包み込むと有無を言わず引つ張っていきました。

「さあさあ皆さん、道をあけていただきますよ。はいありがとうございます、さあーて、皆さん、ご注目なあ！」

二人の娘を引きずった大男は大地の精霊に捧げる祭壇の前に出るとお客たちに向かつて大仰にお辞儀してみせました。

「紳士淑女の皆様方、これよりひとつお祭りの余興をご覧いただきますしょう。」

「ご紹介します、奇跡の天才魔術師カラベラ・ロヴィーナ嬢でありますー！」

さていつからそこにいたものか、大男の背後から黒いマントに身を包んだかわいらしい少女が現れました。

少女もニコツと魅力的に笑って丁寧にお辞儀すると羽織っていたマントを脱ぎました。

少女がマントを宙に放り上げ、人差し指を右へ左へと振るとそれに合わせてマントも右へフワリ、左へフワリと宙を泳いで、動くたびに虹の七色をキラキラ振りまきました。

お客さんたちはこの華麗な魔術におおと歓声を上げましたが、少女がぐるんと指を回して二人の娘の方にマントを放ると、なんと、一瞬にして二人の服は七色を大胆にあしらった可憐な絹のドレスに変わっていました。

おおっと大きなどよめきが起きましたが、一番驚いたのは当の二人だったでしょう。

ニコニコ笑顔の少女が指さすと、楽団が弾むような楽しい舞曲を奏で始めました。

これまた楽団員もびっくりで、こんな曲、今まで一度も演奏した

ことありませんでした。しかし勝手に指が弦を押さえ、腕が弓を引き、まるで迷うことなく一度も聴いたことのない音楽を完璧にひきこなしているのです。

娘たちが曲に合わせて踊り出しました。けっしてお上品とは言えませんが、リズムカルなステップに大きな腕の振りが付いて、二人の息もぴったりで、見事な舞踏でした。

呆気にとられてぼーっと見ているだけだったお客さんたちも途中からリズムに合わせて手拍子を打ち出し、みんなニコニコ笑顔を溢れさせました。

曲が終わって娘さんたちがお辞儀をすると「ブラボー！」と声が飛び、盛大な拍手が弾けました。おそらくお上品な貴族の皆さんがこんなに熱狂的に拍手をしたことなんてないでしょう。

「さあ、皆さんもごいっしょに楽しく踊りましょう！」

大男の音頭で楽団が新たに楽しい舞曲を奏で始めるとみんな自然とコンビを組み、楽しそうに踊り出しました。

その様子を眺めながら、

「やれやれだ」

と、大男は少女にウィンクを送りました。

「さ、今のうちだ」

大男は娘さんたちを手招いて建物の影に連れていきました。

二人の服はいつの間にか元の粗末な繊維服に戻っていました。

大男は体に似ぬ優しい笑顔で話しかけました。

「あんたらも災難だったな。どうする、まだここで楽しんでいくかい？」

二人はとんでもないと首を振りました。

「それじゃあ俺の馬車で村まで送らせよう。後ろの荷箱にたっぷりニシンの薫製が入っているから好きなだけ土産に持っていくといい」

「ぜーんぶ持っていつちやっついていいわよ」

少女が言いました。

「すごい臭いなんだもの」

「おいおい、俺の好物をそれはないだろう？」

と、そこへジークフリート王子がやってきました。

「君、僕の連れを勝手にどうするつもりだ？」

王子は怒っていました。両手を腰に当て、挑戦的に大男を睨んでいます。

「うーん・・・」

大男は眉を上げ、口をゆがめて王子を見下ろしました。

「さて、それじゃあ訊くがな、王子様。

あんたはこの子たちをどうするつもりだったんだ？ 別に村娘を城に呼んじやいけねえとは言わない。が、それなりの準備をしてやらなければあ好奇の目にさらされるだけだ。あんただってこの子らに惨めな思いをさせたくはねえだろ？」

男の言葉は分別のある大人の言葉でした。しかし王子はその大人の言葉に反発しました。

「好きなように思わせておけばいいだろう。貴族なんて気取っただけのつまらない連中だ」

「まあ、そうかもしれないがなあ・・・」

男は苦笑いを浮かべてぼりぼり頭をかきました。

その様子がまた王子の心に障りました。

「君はいつたい何様のつもりだ、雇われた道化のくせに！」

「ほう？・・・」

男の目がちよつと怖くなりました。

「貴族をくだらんとおきながら道化をバカにするのかい？」

男は腰を折つてずいと顔を王子に突きつけました。

そこへ真つ青になった女王が慌てて駆けてきました。

「この大馬鹿者！」

王子は母が出過ぎた道化を叱りつけたのだらうと思いましたが、女王が怒りに燃えた目を向けたのはおろかな息子にでした。

「おまえはこの方をどなただと思っているの！」

母親の剣幕に驚いて改めて大男を見ると、あんまり大きいの



でそれと気づきませんでした。地味ながら着ているコートは、ずいぶん高級な仕立てのものでした。

「この方はラピスとカザリンの特務外交官ルピネー・ラズベリー子爵様よ！」

王子はポカーンとして、しばらくしてようやくサーッと青ざめました。

## 第2章 運命の出会いその2

ルピネー・ラズベリー子爵。

ラピス国は大陸の東およそ半分を占める大陸一の大国。

カザリン国は内海ノール海の対岸にある小国ながらここ数年海上貿易によって急速に国力を伸ばし、ノール海沿岸諸国の信頼も厚い名士的な国。

ルピネー子爵はラピスの国王もしのぐ実力者として名高いラズベリー大伯爵の長男でありながらどういふ事情でか遠く離れたカザリン国で育ち、十七歳でラピスに帰国後両国を結ぶ貿易でカザリンを今の地位に押し上げた立役者であり、抜群の行動力と実績による信頼と大貴族の血筋によって国際的な諸問題を数多く解決し、ラピス国からは子爵位を、カザリン国からは侯爵位をそれぞれ授与され、同時に両国から特務外交官という役職を託される国際的な最重要人物。

ではありませんが、

まだ三十五歳の若さで、まさに熊のような愚鈍そうな大男で、とてもそんな大人物には見えません。

「では子爵様」

大魔術師の美少女がからかうように言いました。

「私はお二人をお送りしてきますわね」

少女はキラキラ憧れの眼差しをルピネー子爵に向ける娘たちを促して門に向かいました。

ルピネー子爵の名は今や村の女どもにまで知れ渡っているのです。

「こ、これはたいへんな失礼をしてしまいました。申し訳ありません」

ジークフリート王子は真っ青になって頭を下げながら、それでも本当にこの大男があの名高い英雄かと半分疑いの気持ちで拭い切れ

ませんでした。

「いや、別にいいさ。俺はただの何でも屋、そんなたいそうな人間じゃあない。それに、生まれは立派でも育ちは粗末なものでね、貴族様の行儀作法なんてまるで心得ちゃいねえ。無礼の段はこちらこそ許してくれよ」

ルピネー子爵は肉の厚い顔にニーツとなんと優しそうな笑顔を広げました。

王子はほっとして、やはりこの人こそ大人物であると認めざるをえませんでした。

しかし母親の方はそれで済ませるわけにはいきませんでした。

「いいえ、ルピネー様、どうかこの子を甘やかさないでくださいませ」

女王はルピネー子爵とは対照的に薄いこめかみにヒクヒク怒りを張り付けて息子を睨みつけました。

「ちょうどよろしいですわ、ルピネー様、どうかルピネー様からもこの子に言ってやってくださいませ。

この子は来月の今日で十八歳になります。十八ともなれば立派に独立しなければならぬ年ですが、この子の場合には特にしっかりともらわなくては困るのです。

前国王である夫はこの子が五歳の時に亡くなりました。以来私が王としてこの国をまとめ、母としてこの子を育ててまいりましたが、正直私にはどちらか一人では手に余る重責でございました。ずいぶん気を張って頑張つてまいりましたが、長年の心労の積み重ねでございましょうか、このところ体調の思わしくない日が多く、健康に不安を感じることが多く、いつなんどきもしもの事があるかと思ひ、そつなつたらこの子はどうなってしまうのだろうと思つとまた胸の辺りが痛んで、ますます悩みが深まるばかりでございます」

ルピネー子爵は正直女王の女性特有のねちねちした物言いに辟易する思いでしたが、王子の方はあからさまにうんざりした顔をしていました。

女王は息子をジロリと睨み、話を再開しました。

「今日こうして盛大な集まりを催しましたのは、ご存じでしょうが、来月の王子の十八歳の誕生日に向けて花嫁候補を選ぶためでございます。年頃の娘さんがいらっしやる名士の皆様には特別にお願いして娘さん共々出席していただきました。それだというのにこの子ときたら・・・」

女王のこめかみの怒りの血管がブチツと切れそうに青く膨れ上がりました。

「まあまあ、そう興奮なさらずに」

ルピネー子爵は本当に心配になって女王を落ち着かせようとしませんでした。

しかし当の息子は子ども丸出しで食ってかかりました。

「だから僕はつまらない結婚なんてしないと言っているでしょう！僕は僕が命がけで愛するに値する女性に巡り会うまで結婚なんてする気はありません」

女王は呆れて口を丸くして、ハッ、と胸から息を吐き出しました。「子どもだ子どもだと思っていました、ルピネー様お聞きになりました？ ハッ、命がけで愛する女性ですって？ あらまあそういうば子ども頃ベッドでそんなおとぎ話を聞かせて上げたことがあったかしらねえ？ おやおやまああ」

王子はむっとして顔を真っ赤に怒らせました。

「まったく、しょうがねえなあ・・・」

と内心呆れ返りながらルピネー子爵は王子に言いました。

「王子、その心がけは大いにけっこう。しかしそれならまずは今日集まってくれたお嬢さん方のダンスの相手をしてあげなさい。貴族の令嬢といえは日頃深窓にこもってめったに遠出なんてできない。せつかくの心浮き浮き楽しい外出に花を添えて上げなさい。それに彼女たちだって運命の白馬の王子様との出会いを夢見てやってきているんだ、彼女たちにとっちゃあ今日という日は十分特別な出来事なんだ」

そう言われると王子も彼女たちのことが気になり出しました。見てみればみんなどこかしらそわそわと王子の方に視線を投げかけています。もしかしてこの中に運命の姫がいないとも限りません。

「そうですね、騎士たるもの淑女に恥をかかせるものではありませんね。ダンスのお相手をお願いしてきましょう」

王子の後ろ姿を見送りながらルピネー子爵はやれやれと肩を落としました。

王子は最初に出会ったお嬢さんにお辞儀してやがて手を取り腰を抱いて曲に合わせて踊り出しました。

「ああ、さすがはルピネー子爵様ですわ」

やれやれまだこっちがいたかと、ルピネーはにっこり笑って女王に向き合いました。

「父親が生きておりましたらあの子ももう少ししっかりしていただでしように、それなりに厳しく育ててきたつもりではおりますが、やはり女親と男親とでは厳しさの種類が違いますのでしょねえ」  
「そうご心配なさいますな。悪い子ではありませんよ。王子は高貴な理想を持っている。いずれは良い王におなりになる」

ルピネーは女の子と踊る王子を父親のような暖かい笑みを浮かべて見守りました。

魔術師の少女が戻ってきました。

「王子の馬は濃い茶色よ」

「ああそうかい」

「ニシンはみーんな二人にあげちゃったわよ」

「おいおい、冗談だろ？」

「冗談よ」

少女はクスクス笑いました。

健康的にほのかに赤みの差した白い肌、お人形のように整った綺麗な顔立ち、紫がかった青い大きな瞳、つやつやの赤い唇、柔らかな茶色のくるくるの巻き毛。年の頃は十二三でしょうか、見れば見

るほど美しい少女です。

その美しさに見惚れてでしょうか、じーっと少女を注視する一人の人物がいました。

午後の日もそろそろ陰ってくる時刻、高い塀に囲まれたお城の庭は特に暗さが気になるようになってきて、女王が奮発して無数に立てられたろうそくに使用人たちが火をつけ始めました。

その人物は、陰った日の中で真っ黒な人型の中に目玉だけが大きく光を発しているように見えました。

「気になるか？」

ルピネーが少女に訊きました。

「向こうもだいぶ君を気にしているようだな」

少女は少女らしからぬ冷静な目つきで黒い人物を観察しました。

「私を呼んだのはあの人のため？」

「そうだ。かなりのくせ者だぞ」

ろうそくの灯の中にぼうつと浮き上がった姿は、かなりおしゃれなものでした。

丸い裾の黒いマント、光沢のある紺色のジャケットの衿は模様の入った鳥の羽がたくさん植えられ、流行りのお尻のふっくらした乗馬パンツに細くとがった長靴。

一番目をひくのは、まるで二本の角のようにピンと立った真っ黒な髪の毛でした。

男は給仕になにやら注文して大小二つのグラスを用意させるとそれを持って二人の方へ歩いてきました。

年はちょうど四十くらいでしょうか、ルピネーほどではありませんんがかなりの長身で、口元に友好的な笑みを浮かべた顔は目鼻立ちのくつきりしたなかなかの美男子でした。

「ラズベリー卿、お嬢さん」

男は小さいグラスをルピネーに、大きいグラスを少女に手渡ししました。

「ルピネーでいいよ。ラズベリーの名はどうもおやじどのが近くに

いるようで落ち着かん」

ルピネーはグラスを受け取りながら言いました。

「ではルピネー卿、お口に合いますかな？」

グラスの薄い赤色の液体からはっーんと鼻を突く匂いが立ち上り、グイとあおったルピネーは舌を鳴らしてウームとうなりました。

「かなり強烈だな」

「スピリットというウォッカの一種です。ルピネー卿にはワインのような甘ったるい酒よりこちらの方が好みかと思ったのですが、合いませんでしたかな？」

「いや、なかなかのものだ」

本当は口の中に火がついたように辛くてしょうがなかったのですが、どうやらルピネーはかなりの負けず嫌いのようです。

少女のグラスは果物のジュースでしたが、様々な果物に香辛料も加わって、今まで飲んだことのないおいしいものでした。

この人物はかなりの食通のようです。

つつい夢中でジュースを飲んでいた少女はじーっと見ている男に気づいて急いでにつこり笑いました。

「とつてもおいしいですわ」

「それはよかった」

男も負けじと魅力的になっこり笑いました。

「お嬢さん。先ほどの魔術は見事でしたな。いったいどういう仕掛けですか？　まるで本物の魔法のようだった」

少女は真剣な顔になって人差し指を口に当てると声をひそめて言いました。

「実は私、魔女なんです」

「ほお、魔女？」

男も真剣な顔を作って少女を覗き込みました。

少女はじいっと男を見つめて、ニツと悪戯っぽく笑いました。

「そういうことしておいてください。種が分かったら手品なんてつまらないものですわ」

「ハツハツハツ、これは失礼した」

男は白い歯を見せて笑いました。

「時に、カラベラ・ロヴィーナ嬢と申されたか？」

「ロヴィーナと申されるとロヴィーク王家の血縁の方であらせられるのかな？」

「いいえ、とんでもない。でもロヴィーク王家のオーロラ姫には仲良くしていただいて、特別にこの姓を名乗ることを許していただいたのです。」

えーと、紳士様？」

「いやいやこれはまた失礼した。」

私はとなりのユークリナ国の宰相を務めますモダニス・ロットバルトと申します」

どうぞよろしくと、ロットバルトは貴婦人にするようにカラベラの手を取って口づけしました。

カラベラは小首を傾げてルピネーに尋ねました。

「ルピネー様はユークリナで何かお仕事をなさっているのですかね？ なんでもたいへんな事態になっているとか？」

と、カラベラは無邪気な目をロットバルト宰相に向けました。

ロットバルトは頷き、神秘的な顔つきで言いました。

「さよう、国王陛下と王妃殿下が事故で亡くなられてな、一人娘の姫殿下が王位を継がれたのですが、行方不明になってしまわれ、それから早半年、姫殿下の行方は知れず、王は不在のまま、かといって政治を滞らせるわけにもいかず、そこで我がユークリナ国の盟主であるラピス国よりルピネー特務外交官を派遣していただいて我がユークリナの行政を監督していただいているわけですね」

お分かりいただけましたかな？ という感じでロットバルトは悲しげに力無く微笑んで見せました。

「監督なんて余計なおせっかいだろうか？」

「とんでもない。私どものような田舎の国にルピネー卿のような国際経験の豊富な方が見えられてどれほど心強く思っているか」



「そうかい？ 豪腕の宰相殿がなんでもかんでもすべて取り仕切つてずいぶん政治もおさかなようじゃないか？」

ロットバルトは目を細めてただ微笑み、ルピネーも負けじと不敵に笑ってにらみ返してやりました。

二人の大男の間で小さなカラベラは子どものあどけない顔で両者のにらみ合いを見比べていました。

忙しくお客たちの間を飛び回っていた女王が二人の大物の組み合わせをめぐりとく見つけてやってきました。

「まあまあ、ルピネー卿にロットバルト殿。まさか難しい政治の話なさっているではありませんまいね？ いけませんわよ、このお祭りの日に、楽しく飲んで食べていただかなくては。さあさあこちらに席が空いておりますわ、お座りになつて狩りのお話でも聞かせてくださいましな」

女王はさあさあと二人とカラベラをたくさん用意してある丸テーブルの方へ促しました。腰を落着かせて二人の大物とこの際じっくり懇意になる腹づもりのようです。

テーブルの上には大皿が数枚、色とりどりのつまんで一口で食べられるお料理が奇麗に並べられています。席に着いたルピネーは早速ひとつつまんで口に放り込みましたが、大人のお酒の肴みたいなものばかりでカラベラは果物の盛り合わせからオレンジを取って食べました。

皆が席に着いたのを認めて女王はにっこり笑いました。

「そろそろおなかもすく時刻でしょうけれどダンスが終わるまで肉料理はもうしばらく辛抱くださいましね。料理長が腕によりをかけて特別の料理を用意しておりますのよ。」

我が国は森が多くて、ほとんど森の中に国があるようなものですわね。ですから新鮮な肉には事欠きませんのよ。明日は皆さんを狩りにご案内する予定でありますの、お二人もぜひご参加くださいましね。お二人ならきつと大物をお仕留めなさいますわね」

女王は男性の趣味といえば狩りとすっかり思いこんでいるようです。

「さようですな、ルピネー卿などいかにも大物を仕留めそうだ。これは明日が楽しみですね」

ロットバルトが調子を合わせて持ち上げました。

「いやいや」

ルピネーは大仰に手を振って否定しました。

「俺は海育ちでね、獲物といったらもっぱら魚の奴だ。櫓をこぐのは得意だが馬の手綱はとんと苦手だね。第一俺を乗せる馬がない。すぐにつぶれちまう。」

ま、狩りといえば、この子だな」

と、ルピネーは大きな手でポンポンとカラベラの頭を叩いて、カラベラはすごく嫌な顔をしてルピネーを睨みました。

「ほう、カラベラ嬢は狩りをなされるのですか？」

ロットバルトが大いに興味を示しました。

「自分が食べるときだけですわ」

カラベラはあんまりしゃべりたくなさそうで不機嫌そうに言いましました。

「この子は変わった子だね」

ルピネーは酒が回ってきたのかすっかりおしゃべりになっていました。

「ふだんはぜんぜん肉は食わないんだ。それが月に一度、城の料理人を全員引き連れて山に狩りに出かけるんだ。みんな死んだ後の肉を調理する狩りの素人ばかりさ。朝早く出かけて、山に入ると最初から獲物の居所が分かっているみたいにズイズイ先頭に立って奥深く分け入っていく。途中なにがいようと小物はみんな無視だ。道なき道を、って感じで最初からみんなへとへとさ。ようやく立ち止まると、ピタッと一点を指し示す。そこにいるのさ、でっけえ角を生やした立派な牡鹿がさ。目と目が合ってバチバチツツと火花を散らす。少女はまるで宣戦布告するみたいにまっすぐ弓を構えてパツと矢を

放つ。ま、逃げられるわな。真つ正面だ。だが、そこから狩りが始まるのさ。一匹、これと定めた獲物を追って追跡行の始まりだ。連れるのは運動不足の素人もだ。とても狩りの役になんて立ちやしねえ。みんなヒーヒー言っただけの付いてくるのがやっつとだ。すると少女はあなたはここ、あなたはここと、途中で一人ずつ場所を決めて置いていく。そうやって一日中山の中を歩き回る。もの凄い早さで歩いていると思うといきなりつと立ち止まって空に向かって遠くの方に弓矢を放つ。それでまたもの凄い早さで移動の開始だ。たまに人を置きながら、また歩いては時たま空に向かって矢を放つ。そうやってまるまる一日過ごすんだ。いいかい？ 一度逃げた野生の牡鹿が二度と捕まるわけはねえと思うだろう？ ところがだ、日が暮れかかろうって時刻に岩場に出ると、そこにちゃんとな奴がいるのさ。夕日がカーッと赤く辺りを照らし出す。まっすぐ立っただけが一日中かけずり回って奴ももうぎりぎりまでへばってやがる。少女はそこで最後の弓矢をまっすぐ奴に向けて振り絞る。奴はその様子をじーっと見つめてくるりと後ろを向くと最後の力を振り絞って全力で駆け出す。二十人もいた料理人どもはその頃には一人か二人になっている。逃げ出した牡鹿を見てあまた逃げられたとがつかりする。しかしだ、少女が放った矢はもの凄い勢いで飛んでいくとスコーンと牡鹿の後頭部を直撃する。牡鹿は瞬間もの凄い高さに飛び上がって、地面にばったり倒れ伏す。連れどもがやっつとと歓声を上げて駆け寄ると牡鹿はまだピクピクいれんして生きていやがる。おつきい黒い目ん玉に涙を浮かべてな。それを見ると、料理人どもの顔が急にしんみりしたものに変わる。少女が歩いていつてひざまずいて牡鹿に口づけしてやるとな、そこでようやく牡鹿は涙をポロリとこぼしてなんだか安心したような顔をして死んでいくんだ。そんな時やあどうしたわけか料理人どももいつしよになつてポロポロ泣いてやがる。だが、そこからまた大変だわな。そこから城に帰らなけりやいけねえ。別な意味で泣きたくなつちまうわな。でっけえ獲物を担いでヒーヒー死にそうになりながら夜道を途中置いて

いった仲間を拾い上げながら山を下っていくんだ。真夜中過ぎに城にたどり着いて獲物を台所に運び込むとそこでみんな倒れ込んでグーグーいびきの大合唱だ。で、翌日獲物をさばいて少女と料理人とびつきり旨い最高の肉料理を城のみんなにごちそうしてくれるってわけだ」

ルピネーは話の間に強烈なスピリットをグイグイあおってもう顔は真っ赤になっていました。

「それはまたなんとも素晴らしいお話ですな」

ロットバルトは心底感心したように大きくうなずいてカラベラを見ました。カラベラはもう恥ずかしくって、お酒を飲んだわけでもないのに真っ赤になっていました。

「これはますます本物の魔女のようだ。」

ところで、まことに失礼ながらカラベラ嬢はおいくつになられま  
すかな？」

「ほんとに失礼。十五ですわ」

「ほお、十五？」

ロットバルトは意外そうにカラベラを眺めました。

「いやいや、これはどうも失礼した」

何がどう失礼なのか、ロットバルトはしきりに恐縮しました。その方がよっぽど失礼です。

「うむ、まったく大したものだ。狩りの天才ですな。それほど獲物の行動を読みとれるのなら戦でも將軍になれますな」

「ほお？」

ルピネーがとろんとした目をロットバルトに向けました。

「宰相殿にはそういう野心があたりか？」

「とんでもない！」

この平和なご時世になんのそんな物騒なことを考えるものですか。ゲームの話ですよ。チェスのね」

「フム、ゲームねえ・・・」

ルピネーはとろんとした目をしながら何か腹に一物ありそうなニ

ヤニヤした笑いを浮かべていました。

なにやらじーっと考え込んでいた女王が難しそうな顔をしてルピネーに尋ねました。

「ルピネー卿。料理人がみんな出かけてしまったら、誰がお城の料理をしますの？」

「は？」

ルピネーはきよとんとして、アハハと笑いました。

「そりゃあ姫や王妃様が料理するんですよ。なかなか上手いものですよ」

「まあ、本当に？」

女王はひどくびっくりして、それから嬉しそうに笑いました。

「そうですよ、姫様や王妃様ご自分でねえ、それはそれはいへんですこと」

オッホッホッホッ、と女王は笑いました。

このパーティーに集まったお嬢様方は十五人ほどいました。王子は一人一人丁寧に誘いして一曲ずつ踊っていただきましたが、正直なところ、どのお嬢さんも皆似たり寄ったりで心ときめくものはありませんでした。

さてこれで全員のお相手が出来たかなと思うともうほっとする気持ちでした。

庭をぐるりと見渡してみると、

一人、真っ赤な、ひらひらのたくさん付いた派手なドレスを着たお嬢さんが向こうの端に立っていました。

ああ、まだ一人残っていたのか、と王子が視線を向けると、お嬢さんはぶいと横を向いてしまいました。

お嬢さんは明らかに王子がこちらを向いたのを見た上で横を向きました。

いい加減疲れていた王子はちょっとむっとして、なんだか気取った風なその娘を知らんぷりすることに決めました。

王子が横つちよを向いてしまうと、娘はひどくびつくしして、怒りにふるふる震えだしました。

この私を無視するなんて信じられないと顔が言っているようです。王子が母親に全部の娘と踊りましたよと報告に行くと、同じテーブルにルピネーと立派で派手な格好をした紳士が給仕のつぎ足すグラスを交互にぐびぐび飲み干していました。二人とも火の出そうな真っ赤な顔をして、どうやら相当強い酒で飲み比べの勝負をしているようです。

「この私とここまで勝負できるとはさすがは豪傑で鳴らすルピネー卿だ」

「いやいや宰相殿こそ海の男相手にたいした飲みっぷりだ」

王子は大人がバカなことをやっているかと近づきたくなくなりま

した。他のテーブルにもだいたいお客たちがついて、そろそろ本格的な夕食を待ちかねている様子でした。

そのテーブルの間に、あの魔術少女が、今度は子ども遊ぶまりくらいの大きさの銀色の玉を使った手品を見せていました。

開いた手と手の間に玉を浮かせてお客さんに手を差し入れさせて糸でつっているのではないことを確認させています。

お客さんたちは不思議がって喜んでいます。

王子は悪戯心を起こしてそちらの方へツカツカ歩いていきました。「僕にも見せてくれよ」

どうぞ、と少女がにこやかに笑って手を差し出すと、王子はニヤリと笑っていきなり銀色の玉をつかんで引つ張りました。少女は玉と引っしょに引つ張られてキャツと悲鳴を上げました。玉は糸でつられていたのではなく、黒いマントの胸のあわせから黒く塗った細い鋼で持ち上げられていたのです。

「なるほど、こういう仕掛けだったのか」

王子は得意になって笑いましたが、誰一人王子に賛同して笑う者はいませんでした。

恥をかかされた少女でしたが、

「まあ、ご慧眼おそれいりましたわ」

と、胸から仕掛けを外して玉をブラブラさせてお客たちを笑わせました。

王子はゾクリと冷たい視線を感じて振り向くと女王がまた怖い目をして王子を睨んでいました。

さんざん飲み比べをしてべろべろに酔っぱらっているはずのルピネーと立派な紳士も薄笑いを浮かべて冷めた目で王子を見ていました。

王子は自分のしでかしたこととはいえ急激に居たたまれなくなつて何かに救いを求めました。

ついと、真っ赤なドレスが王子の横を通り過ぎました。

あの向こうにいた気取った感じのお嬢さんです。

お嬢さんは女王たちのテーブルの前に立ちました。

「お父様」

お嬢さんが呼びかけたのは立派な紳士の方でした。

「私、まだ誰とも踊っていたいておりませんのよ。お父様お相手をしてくださらない？」

王子は慌ててお嬢さんに駆け寄りました。

「それならぜひ僕と踊ってください」

お嬢さんはどうしようかしら？という感じで王子を横目で見ました。

ロットバルトは笑って娘に言いました。

「ぜひ踊っていただきなさい。

ジークフリート王子、ルピネー卿、女王様、紹介いたします。

私の一人娘、オデールです」

オデールは女王、ルピネーに挨拶して、王子に向かって大仰に挨拶してやりました。

「よろしく、ジークフリート王子」

「こちらこそ、よろしく」

父親譲りの真っ黒な艶のある髪、真っ黒な大きな瞳、おでこの広い真っ白な肌に、真っ赤な小さな唇。オデールはツンと上を向いた鼻が小生意気そうでしたが、まあまあそこそこ美しい娘でした。

軽やかな舞曲が流れ出し、庭の中央に歩み出た二人は改めてお辞儀をして、腕を組んで踊り出しました。

ルピネーが立ち上がってカラベラのところへ来ました。

「一曲お相手願えませんか、お嬢さん」

「大丈夫？ おじさまに倒れ込んでこられたら私、ペシャンコになっちゃうわ」

「足下が揺れるのには慣れてるよ」

カラベラはハアとため息をつくるとルピネーと手をつないでテーブルの邪魔にならないところへ出ると踊り出しました。

お客たちはかわいらしい少女と大男の無様な踊りにクスクス笑いながらくつろぎました。

「さーて、どう思う？」

無様に踊りながらルピネーはおどけた口調でカラベラに尋ねました。

「バカね。あんなのが跡継ぎじゃあこの国の将来も知れたものね」

「ハッハッハッ。たしかにこっちはこっちで頭が痛いな。だが俺の関心はあくまであの男でね」

ルピネーは見ないでロットバルトを示しました。

カラベラは踊る王子とオデールを見ました。

「娘を使ってこの国を狙っていると言うこと？」

「やっぱりおまえは頭がいい」

ルピネーは後は黙ってお気に入りの少女とのダンスを楽しみました。

さて、そのロットバルトは、すっかり昼の色が消えてきた空を見上げ、控えていた従者を呼ぶと何か言いつけました。

空には、一群の白い鳥が南に向かって飛んでいました。



### 第3章 運命の出会いその3

踊り終わると王子とオデールは連れだつてテーブルにやってきました。オデールは王子に腕を絡めて心なし体を斜めに預けてなんだかすっかり恋人気分のようなようです。そんなオデールに王子は幾分迷惑そうな感じでしたが、先ほどの失態からの救いの女神ですから邪険に突き放すわけにもいきません。

ルピネーとカラベラも戻ってきました。

女王は王子とオデールの仲良さそうな様子を見て上機嫌でした。

「それではお食事にしましょうねえ。ジークフリート、オデールさんのおもてなしは任せましたよ」

と、席を立ち、お客たちに晚餐を始めましょうと宣言し、お料理の指示に館に入っていきました。

「素敵なお城ね。あそこにもここにも、どこもかしこも高貴な方たちの長きに渡る思い出や物語がしみこんでいるようだわ。こんなところに住んだらまるでおとぎ話のお姫様にでもなったような気分がするでしょうねえ」

と、オデールは実に具体的にそこに住まう自分の姿を想像しているようでした。

王子はいささかうんざりしたように、

「たしかに歴史は長いね。長すぎてあちこちすっかり風化してすきま風と湿気だらけだ」

と言いましたが、

「あらそう？ それでは職人を雇って修繕させましょうね」

と、オデールは将来の計画を立て始めました。

ロットバルトの従者がなにやら持つてきました。

「ジークフリート王子。これはほんのお近づきの印ですが、どうぞお受け取りください。明日は狩りだそうですね。食後にもちよつと試してみるといいですよ」

そう王子に手渡したのはピカピカに光る見事な黒塗りの一張りの弓でした。筒に入れられた矢も立派な大型の矢羽のついた高級品でした。

王子は目を輝かせ、すぐに夢中になりました。

カラベラはじいっと弓矢を見つめました。

「そうそう、こちらのカラベラ嬢は弓矢の名人だそうですねですからご教授願ってはいかがですか？」

ロットバルトに言われてカラベラをちらと見た王子は何をつまらない冗談をとまるで信用せず、すぐまた夢中になって弓を撫でたり矢羽をつまんでみたりしました。

「ああ、すごいなあ。なんて手触りだろう！」

ああ、今すぐにも試し打ちしてみたいなあ！」

「それなら少し出かけてきてはいかがかな？　なあに、母上様ももうそううるさいことは言わないでしょう」

ロットバルトは不満そうな顔をしている娘に目配せしてみせました。

「そうかなあ？　行ってしまってもかまわないかな？」

王子はもう嬉々として今にも飛び出していきそうなそぶりをしました。

ルピネーは呆れ顔で、

「おいおい、本当に行く気じゃないだろうな？」

と言いましたが、王子はどうやら本気で行く気になっているようです。

「料理さえあれば誰がいてもいなくても構わないだろう？」

「あのなあ・・・」

ルピネーが何か言いかけてましたが、

「いいじゃない、行ってくれば」

とカラベラが制止しました。

「ここで試し打ちなんて始められたらたまらないわ」

「そうさ、やっぱり表で獲物を狙ってみないとね！」

王子にはカラベラの嫌みもまるで通じないようです。

「それじゃあちょっと行つてくるよ。」

ありがとう、．．えーと、ロットバルトさん！」

喜びを隠しきれずに早足で門に向かう王子の後ろ姿をルピネーはこめかみを押さえて見送りました。

「ああ、王子、湖へ行つてごらんさい。きっと素晴らしい獲物がありますよ」

ロットバルトの声が聞こえたのかどうか、王子はもうアーチの通路に消えていきました。

香ばしい肉の焼けた匂いやよく煮込んだスープの豊饒な匂いが漂つてきました。

イライラしていたカラベラが突然すつくと立ち上がりました。

「ちよつと失礼します」

「なんだい、どうした？」

「婦人が失礼しますと言つたら行く先なんて訊くものじゃないわよ！」

カラベラはギロリとルピネーを睨んでさつさと館に入つていきました。

「なんだ、便所か」

ルピネーが言つとオデールがケラケラ笑いました。

ジークフリート王子は厩に行くとき馬にまたがり掛け声と共に勢い良くむちをくれました。愛馬は村に置いてきてしまったので予備の馬ですが、王子は乗馬には自信がありました。石壁の狭い通路をすごい早さで駆けさせていきます。外門をくぐると坂道をさらにむちをくれて全速力で駆け下りさせました。

東の空は青みがすっかり消え、西の空は日が黄色く膨れ上がり周りを赤く染め始めていました。

王子は坂道を下つてしまうと村への道を折れ、森に向かいました。ベルーシアは森の国です。それも太古から続く円熟しきつた森で

す。非常に密度が濃く、種種様々な大小の樹々が分厚く層を成して彼方に広がっています。

王子は馬を森に入らせました。森の内部はすでに夜に近い暗さですが、王子にとっては勝手知ったる庭のようなものです。迷うことなく馬を進めていきます。

目指すは、湖。

何か声が聞こえたような気もしますが、最初からそこしか考えていなかったようにも思います。

なんだか心浮き浮き踊らせる、素晴らしい出来事が待っているよ  
うな、そんな気がするのです。

森の湿気とは別の、新鮮な水の匂いがしてきました。

王子はどおどおと馬を止め、近くの木に手綱を結わえると弓矢を握りしめて歩き出しました。

繁茂する低木をそつとかき分けて進んでいきます。

視界が開け、静かに湖が広がっていました。

王子は姿勢を低くし、弓の準備をしながら油断なく湖と岸とに視線を走らせていきます。

残念ながら獲物の姿は見あたりません。

しかし王子には何か心の内に閃く確信がありました。

「必ず何かある」

王子は狩人となって周囲の自然と一体になり、何かが起こるのをじいっと待ちました。

明るさはさらに失われていき水面と岸との境が消えていきました。

暗がりに慣れた視界にパツとまぶしい光が射しました。

それはほんのちよつと、視界の端に引っかかった程度のものでしたのですが、王子は自分でもドキリとするほどの強い反応を示しました。

夕闇の濃くなった空から白鳥の群が舞い降りてきます。

いえ、白鳥たちは用心深く湖の周囲を一周し、安全を確認しています。

王子はじりじり低木の枝陰に身を寄せて白鳥たちに発見されないようにしました。

白鳥たちは一周してようやく安心したのか、いよいよ水面に向かって降下を開始しました。

美しい白鳥たちでした。

しかし、

中に一羽、特に光り輝くような美しさの白鳥がいました。

それはまったくなんという美しさでしょう。

王子の心はすっかりその美しさに捕らわれてしまいました。

「あれは、僕のものだ」

王子は細心の注意を以て位置を決め、体勢を整え、矢をつがえて弓を構えました。引き絞ると、なんと滑らかに力強いことか、まだ一度も使っていない弓矢でしたがこれなら思いのままに的を射抜けると王子は心が躍る思いでした。

王子はいよいよ白鳥に狙いを定めました。

緊張と喜びが最高潮に達し、矢羽を押さえる指が解放されようとなりました。

背後で小枝を踏む音がしました。

王子は矢を放ちました。

矢はシューッと鋭く風を切りまっすぐ飛んでいきました。

当たった、

と、王子は思いました。

しかし狙った白鳥の前に別の一羽が横から飛び込んできました。

すると矢は急にクイツと上に反れて、飛び込んできた一羽の翼をかすって空へ消えていきました。

翼をかすった白鳥は、射抜かれはしませんでした。矢のもの凄い勢いに普通以上に羽根を痛め、宙でもんどり打つと、クルクル水面に落下しました。

「ちっ」

思わず舌打ちして立ち上がった王子と、世にも美しい白鳥とが真

っ正面に視線をぶつからせました。

なんてひどい人！

「え？・・・」

王子には白鳥の声が聞こえたような気がしました。

「なんてひどい人なの！」

ハッキリ声が聞こえて王子はぎよつと振り返りました。

カラベラが怒りもあらわに王子を睨み付けていました。

「おまえ、いったいどうやってここへ来たんだ？」

「そんなことどうだっていいわよ」

カラベラはものすごく怒っていました。

「なんで白鳥を射つたりするのよ！」

王子もむっとして怒りがムラムラわき起こってきました。

「君が邪魔したんだな！ 君さえ邪魔しなければあれを打ち落とせていたのに！」

白鳥たちはガーガー声を立て遙か上空に避難しています。

「白鳥を射るなんて最っ低！」

「ここは僕の領土だ、何を射ろうと僕の勝手だ！ 鳥の一羽がどうだって言うんだ？ それとも何か？ 君はカモは射ってもいいが、美しい白鳥を射つてはいけなと言っのか？ ハン、まったく美しい博愛主義だな？」

カラベラは軽蔑しきった目で王子を見やって言いました。

「あなた、白鳥を食べるの？」

王子は思わずうつつとうなって言葉に詰まりました。

「遊びで生き物の命を奪うのがひどいと言っているのよ。

私は狩りは嫌い。

動物も他の動物の命を奪うわ。でもそれは生きていくために必要だからだわ。人間も、生きていくための他の生き物の命には敬意を払うべきだわ」

王子は何か言い返してやろうと考えましたが、頭にカーッと血が上ってしまって何も思いつきませんでした。

「フン」

王子は負け惜しみに鼻を鳴らして一人でさっさと帰りだしました。暗い森に一人取り残されてもカラベラは少しも怖じけることはありませんでした。

カラベラは水べりにしゃがんで水に手を差し入れました。すると、傷ついて落下した白鳥の体がまるで糸でたぐられるようにすーっと岸に引っ張られてきました。

気を失っていた白鳥は手を伸ばす少女に気づくと慌ててガーガー鳴いて逃れようとしました。

「だいじょうぶよ、今手当してあげるから」

カラベラが軽く手を触れると白鳥は途端に動けなくなり、しかしすぐに緊張を解いてカラベラにされるままになりました。

カラベラが優しく羽根の傷を撫でてやると、手のひらから柔らかな桃色の光があふれ、驚いたことに傷はすっかり癒えてしまいました。

「良かったわね、かすり傷で済んで」

カラベラが微笑むと、白鳥は翼とカラベラとを不思議そうに見比べました。

「あなた方ももう降りてきて大丈夫よ。ここはもう安全よ」

白鳥たちはカラベラの言葉を理解してか、次々降りてきて仲間の周りに集まってきました。

あの王子が狙っていた特別に美しい一羽がカラベラの前に進み出しました。

白鳥は黒い大きな瞳でじいっとカラベラを見つめました。

カラベラは白鳥がお礼を言いたいのだろうと思いましたが、どうやらそれだけではないようです。

カラベラも不思議に思っつて白鳥の目をじいっと見つめました。

「今夜、ここに来いっていうこと？」

白鳥は一段と大きく目を開いて長い首を大きく頷かせました。

「分かった。きつと来るわ」

カラベラが約束すると白鳥は安心したように湖の真ん中の方へ泳ぎだし、他の白鳥たちも後に続き、最後に傷を負った白鳥がリーダーにならってちょこんとお礼をして泳いでいきました。

カラベラはもう一度湖を見渡し、危険のないことを確認しました。立ち去ろうとしたちょうどその時、

向こう岸の木々の上に黄色い巨大な月が現れました。

満月です。

白鳥たちも何やら特別な思いがあるのか、首を上に向けてじいつと見つめています。

カラベラはその様子を小首を傾げて眺め、約束を確認して湖に背を向けました。

危険はない、とカラベラは判断しましたが、湖の遙か上空、黒い大型の鳥たちが油断のならない目をしてじいつと白鳥たちとカラベラを見張っていました。

カラベラが歩き出すと、意外なことにジークフリート王子が馬をひいて待っていました。さすがに女の子一人森に置いてけぼりにすることに躊躇したのでしょうか。

「君がどうやってここに来たのか知らないが、来いよ、送っていつてやるよ」

と、王子は馬の背を示しました。

「けっこうよ」

カラベラはフンとそっぽを向きました。

「ナージャ」

カラベラが呼ぶと王子の後ろからぬつと闇に輝くばかりの真っ白な馬が現れたので王子はうわあつと悲鳴を上げてひっくり返りそうになりました。

「い、いったいどこから現れたんだ？」

王子は信じられない思いで白馬を凝視しました。

「また種を見破ったらいか、王子様」



カラベラは馬の首を撫でてやりながらすまして言いました。手品を台無しにされたことを実は内心かなり根に持っていたようです。

カラベラはひらりと身軽に馬の背に飛び乗りました。馬は小さい馬具を付けていません。カラベラは手綱の代わりにふつつより倍も量と長さのあるたてがみを柔らかく握っています。

カラベラが馬を歩ませ始めたので王子も仕方なく自分の馬にまたがって後を追いました。

「道は分かるのか？」

と尋ねましたが、どうせ知っているに決まっています。

王子は細い道に無理やりとなり並んで馬を歩ませました。

カラベラの馬はスラリと細身で脚が長く、まるで人間の女のような美しい顔をしていました。

王子はチラチラ横目で盗み見て、すっかりこの馬が欲しくてたまらなくなりました。

「それはいったいなんという種類の馬だい？」

「知らない。馬に種類なんてあるの？」

「君、それほどの馬を素性も知らないで乗っているのかい？それはきつと純血のアンブロー種だね。いや、脚に力強さがあるからアリ一種も掛けてあるようだ。その毛の長さはなんだろう、シャイ口種も混じっているのかな？」

王子は得意になって解説し出しましたが、カラベラはまったく興味ありませんでした。

「この子はヌアージ・ブランカ。呼びやすくナージャよ」

「つまらない女の子みたいな名前だなあ。もっとかっこいい名前を付けておあげよ、たとえば、サンダー・アロー号とかホワイト・シヤープネス号とか」

「バツカみたい」

カラベラと白馬ナージャはいつしよにプイとそっぽを向きました。

「ねえ、えーと、カラベラ嬢」

王子は物欲しそうな顔で一生懸命会話を続けようと思いました。

「君、何か欲しいものはないかなあ？ もちろんお金だってかまわないんだけど、君くらいの女の子が大金を持ってもしようがないだろうし、宝石はどうだろう？　きれいな指輪や首飾りや髪飾り。それともペットが良ければブルーシアヤマネコの子どもを捕まえてあげよう。ここにしかない特別なネコだよ。縞模様の毛がふわふわしてとってもかわいいんだよ・・・」

言ってるうちに王子もだんだん情けなくなってきました。

「ねえ、お願いだよ、その馬を譲ってくれないか？　正直に言うよ、そんな素晴らしい馬見たことがない。僕のものならなんでもあげるから、どうか譲っておくれよ」

「そうねえ・・・」

カラベラは顎に指を当ててかわいらしく小首を傾げました。

「9000億ルーシってところかしら？」

「おいおい子どものままごとみたいな事は言わないでくれ」

王子は困った顔で笑いました。

「君もおかさんのお使いくらいしたことあるだろう？　一粒のダイヤモンドがいったいいくらするのか知っているかな？」

カラベラはすまして言いました。

「だから、9000億ルーシなら売ってあげる」

「冗談じゃない！　僕は本気で話しているんだ！」

王子はつい声を荒げて馬がビクリと暴れました。

「いや、すまない。まじめに答えてくれよ。9000億ルーシと言ったらこの国の30年分の国家予算だぞ」

「あら良かった、ちゃんとお金の勘定ができるのね？」

カラベラは笑って、ちよっと調子に乗りすぎたかなとごめんなさいと頭を下げました。

「でも、ラピスの王様なら買うと言うのじゃないかしら？　まあ、周りに止められるでしょうけれど。うかつに言えないわね」

「つまり、売る気はないと言うことか」

「そういうこと」

王子はなかなかあきらめ切れません。

「もったいないなあ。そういう馬は僕のような者に乗ってもらってこそ真価が発揮できるんだ。言っちゃあなんだが君みたいなお嬢ちゃんの散歩につき合われるだけじゃあせつかくの素質が台無しだ」

「あら、わたし、乗馬は得意なのよ」

「へえーえ？」

王子はいいことを思いつきました。

「それじゃあ僕と競争しよう。ここから城まで勝負だ。もちろん君に100メートルばかりハンデをあげよう。もし僕が勝ったら、その馬を売ってくれよ」

「いいわよ」

「本当かい？」

王子は嬉々として叫びました。

「よし、それじゃあ行きたまえ。君の姿がすっかり見えなくなったら僕は出発するから」

「そう。それではお言葉に甘えて」

ハイッ、と合図してカラベラはナー ज्याを駆けさせました。

そのダッシュを見て王子は青くなりました。100メートルという約束でしたが、白い体が木に隠れて見えなくなると我慢できずに急いで鞭をピシリと鳴らしました。

王子は全速力で馬を駆けさせました。暗くて視界の狭い中、もの凄い早さで真っ黒な木々が迫ってきて恐怖を覚えました。どうしても勝負に勝って白馬を手に入れたくて、我慢して鞭を振るい続けました。

走り続けてとうとう森を抜けました。

日はすっかり落ち赤焼けをかすかに残すほどでしたが、代わりに次第に高さを増してくる満月が白く輝きだしています。

王子は城への一本道に出て前方に目を凝らしました。

カラベラと白馬の姿は見えません。

王子は勝ったと思いました。いくらなんでもあの早さで森を駆け抜けて、姿が見えないほど差がついているはずありません。きつと森の中で別の道を通って追いついてしまったのでしよう。

王子はもう意気揚々と城への坂道を上っていきました。しかし城の山門が見えてきたとき、王子の表情が驚愕に変わりました。

カラベラと白馬はそこに悠々と立っていました。

「どうしてだ？ なんてだよ！」

王子にはこの現実がとうてい信じられませんでした。

「こんなはずがあるものか！ やい、君、ズルをしたんだろう？」

大人げない王子に少女はすまして言いました。

「私は手品師ですからね。ズルはズルとは言わないの」

言っておいてなんですが、いったいどういうズルをしたら勝てるのか王子にはさっぱり見当もつきませんでした。

王子とカラベラがいつしよに戻ってくるのを見つけるとオデールは不機嫌に頬を膨らませました。でも王子がひどく不機嫌でカラベラを嫌っている様子なのを見てちよつと機嫌が良くなりました。

「ジークフリート王子。おじさまたちのお相手ばかりで退屈だったのよお」

オデールは王子が席に着くなりベタベタしだしました。

「よお、ずいぶん長い便所だったな」

酔っぱらいのおじさまがまるで遠慮なく言いました。

「ロットバルト様は？」

テーブルにはルピネーとオデールだけでロットバルトの姿がありませんでした。女王は相変わらず精力的にあちこちテーブル外交を続けています。

女王は戻ってきた王子をチラと見ましたが、特に陰のある顔はしませんでした。

「あいつも便所だ。そっぴやあいつも長い便所だな」

ロットバルトはお城を巡る城壁の屋上に立っていました。階段の出入り口には一応見張りの、というか案内役の兵士が立っていました。まるでロットバルトに気づいていない様子でした。ロットバルトは、塀に止まった一羽の大きな黒い鳥と話していました。

もちろん鳥が言葉をしゃべるわけありませんが、グウとかガアとか言う鳴き声でロットバルトには話の内容が分かっているようです。なるほど、ただの小娘ではあるまいと思っていたが、やはりな」  
ロットバルトは庭にいるときとはまるで違った鋭い険しい目つきをしていました。

「引き続き白鳥どもを見張っている」

ロットバルトが命令すると黒い鳥はバサバサ大きな翼を羽ばたかせて飛び上がり、森の方へ飛んでいきました。

満月が白銀の光を強く照らしてきています。

「そろそろか。さて、あの魔女娘め、これを知ってどう出るか？」

ロットバルトは不敵に笑い、いきなり10メートル以上ある城壁から下の通路に飛び降りました。そしてごく当たり前に着地して内門をくぐると中庭に戻ってきました。

険しかった顔つきはすっかり元のニコやかな美男子に変わっています。

「いやいやこれは失礼」

テールブルにつくとロットバルトは笑顔で皆に頭を下げました。

「ルピネー卿にはかかないませんな。どうにも我慢できずに酔い覚ましに城を一巡りしてきましたよ」

「そうかい。それじゃあ酔いも覚めたところで飲み直しといこうか？」

「いやいやどうかもうご勘弁を。これ以上飲んでは明日馬に乗れなくなってしまう」

まだ飲み続ける気であるルピネーにカラベラはすっかり呆れ返っています。

「それはそうと、ジークフリート王子」

ロットバルトはにこやかに王子に話を振りました。

「弓の試し打ちはいかがでした？ 何か大物に出会えましたかな？」

「ありがとうございます、ロットバルトさん。あんなすごい弓矢は射ったことありませんよ。でも・・・」

と、王子はカラベラを睨んで、

「邪魔が入りましてね、獲物は仕留めそこなってしまうました」

「まあ残念。獲物はなんでしたの？」

うるさいオデルにも王子はちよつと機嫌良く自慢しました。

「白鳥です。素晴らしく美しい白鳥がいますね。本当に惜しかったですよ。本当に後ちよつとで命中していたのに」

「あら残念！ そんなに美しい白鳥の羽根ならぜひ私のドレスに使いたかったですわ！」

王子はけばけばしいオデルがあこの白鳥の羽根のドレスを着ている姿を想像してちよつと打ち損じた悔しさがまぎれました。

「そうですか、それは残念でしたな」

父親のロットバルトも言いました。

「しかし、明日はきつと大物を仕留められますよ」

「はい。僕もとても楽しみです」

「カラベラ嬢は、参加なさらんのかな？」

「お断りです。この人も、使い物になりそうもありませんわね」

ルピネーはとうとうテーブルに突っ伏して大いびきをかき始めました。

## 第4章 月光の幻影その1

晩餐会は次々料理が運ばれてきて長く続いていたようですが、カラベラはもう眠いと言って途中で退席しました。すっかり酔いつぶれてしまったルピネーも（いびきがやかましくて他のお客さんの迷惑になるので）客室に運ばれましたがあまり重いので担架に乗せて大の男が十人がかりでうんうんうなりながら運んでいきました。

カラベラは客室に向かう振りをしてこっそり厩に向かいました。

厩ではさかんに誘いをかけてくる雄馬どもと嫉妬に狂った雌馬どもものいなきにつんざりしながらナージャが待つていました。厩にはお城の馬ばかりでなくお客さんたちの馬もたくさんつながらいて、さすがにお金持ちの貴族たちの馬は皆立派なものばかりでしたが、ナージャほど気品に満ちた美しい馬はいませんでした。

「ごめんなさいね。王子といっしょだったから自由しておくわけにはいかなかったのよ」

カラベラは謝りながら柵を開いてやりました。

ナージャは喜んで出てくると、ツンとすましてカラベラと並んで歩きました。

二人が出ていくと、もう一人、それを見すましてこっそり厩に忍んできた影があります。

ジークフリート王子です。

「あの娘、動物と話ができるのか？」

まさかと思いつながら、もしかしたらとも思っています。

王子は湖でカラベラと白鳥が話しているのを聞いていたのです。それでカラベラが退席すると王子も適当に言い訳してこうして後をつけてきたのです。

王子は貴族たちの立派な馬をうらやましく思いながら良く慣れた自分の馬を連れ出して静かに城門へ向かいました。

城門には見張りの兵士二人が眠そうにあくびをしながら立ってい

ました。

「おい、今ここに白馬と女の子が来ただろう？」

王子が訊くと門番二人は目を瞬かせて「いいえ」と答えました。

「おい、居眠りしていたんじゃないか？ 絶対に来たはずだぞ」

「いいえ、誰も来ちゃいませんよ」

二人は心外そうに抗議しました。

王子は疑いの目もあらわに「通るぞ」と馬を進めました。

頑丈で分厚い門をくぐって表に出ようとしたとき、頭上を白い大きな影が通り過ぎ、見上げた王子は思わず目を見張り、口をあんと開けました。

天馬です。

大きな翼を広げた白馬がまさに空を駆けていきます。

その背にはカラベラがまたがっています。

白馬ナージャはペガサスだったので。

まさかペガサスなんてものが本当にこの世にいるとは思いませんでした。

あつという間に小さくなっていく後ろ姿に見惚れながら、王子は先ほどの勝負のことを思い出して「くそっ」と言いました。

「やっぱりインチキじゃないか」

今さらそんなことどうでもいいようなことですが、やっぱり王子は腹が立って仕方ありませんでした。

「ハイヨー！」

王子は盛大に鞭をくれてやり、馬はヒヒーンと大きくいなないて坂道を駆け下り始めました。

満月は天高く上り夜の世界を白銀に照らし出しています。

カラベラはことさら銀色に光を反射させている湖目指してナージャを駆けさせました。

すると、湖の上空高く円を描いて群れ飛んでいた黒い大きな鳥が三羽、群から離れてこちらに向かって飛んできました。

三羽は矢の形になってまっすぐ突っ込んできます。



ナージャが驚いて空中に立ち往生すると、頭の上ギリギリをかすめるように飛んでいきました。カラベラも慌てて頭を引っ込めました。

カラベラが振り返って正体を見極めると、それは白鳥と同じく首の長い、黒鳥でした。

黒鳥三羽はグルンと急カーブを描くと今度は横から突っ込んできます。首をまっすぐ突き出して、今度はよけてやるつもりはないようです。

「ナージャ！」

カラベラの掛け声でナージャはすごいダッシュで駆け出しました。黒鳥はずっと後を追いかけてきましたが、どうやら速度は互角のようです。すると黒鳥はクワツクワツと甲高く叫び、すると湖の上で旋回していた群からさらに二羽の黒鳥が天馬追撃に向かってきました。

スピードはいつしよでも黒鳥たちの方が飛ぶのは上手く、小回りが利きました。双方向から攻め立てられて、ナージャは次第に進路を狭められ追いつめられていきました。

「ただなわばりを守るために襲ってきたわけではないよね」

カラベラは右の指を二本そろえると「シュツ」と迫ってきた一羽に何かを投げつけるような仕草をしました。すると黒鳥は途端に空中に停止し、まるで溺れているようにガーガー悲鳴を上げてバタバタ羽を暴れさせました。暴れても暴れてもまるで翼が空気を捕らえられないでちつともその場から動くことが出来ないのでした。

カラベラは次々黒鳥たちに指先から魔法を飛ばし、残りのものもみな空中でバタバタ溺れだしました。

改めてナージャを湖に向かわせると、黒鳥たちの旋回の輪が乱れ、どう対処しようか迷っているようです。

「面倒くさいわね。ちよつとどいててもらおうかしら」

カラベラは額に指を当てると頭の中のイメージを指先から飛ばしました。

黒鳥たちめがけてゴーツと火の玉が飛んできて、パツと弾けると巨大な獅子の顔になって「ガオーツ」と吠えました。

黒鳥たちはびっくり仰天してガーガー喚きながら逃げまどい、吠え立てる獅子に追い立てられて逃げていきました。

ナージヤは勝ち誇り悠悠湖の上空に達すると、今さら隠すこともないだろうと、湖の真ん中に降り立ちました。

翼の起こした風が湖面に静かに大きく波紋を広げていきます。

カラベラはぐるりと見渡しましたが、白鳥たちの姿は見あたりません。

「デートの時間を間違えちゃったかしら？ それとも今の手品で白鳥たちもびっくりさせちゃったのかしら？」

カラベラがちよっと心配すると、岸から湖に張り出した大樹の枝陰から白鳥たちがバタバタ飛び立ち始めました。

白鳥たちは白銀の月光の下に飛び出ると、カラベラとナージヤの周りを巡り、岸に向かって飛んでいきました。

と、白鳥たちがまるで月の光を吸収したように銀色に輝きだし、その形を変え始めました。

王子は天馬を追って森の中を夕刻の湖に向かって馬を走らせていました。

『あれはいったい何なのだろう？』

折り重なる枝影から切れ切れではありましたが空の上での天馬と鳥たちの異様な戦いが見えました。

いえ、天馬を駆る少女と黒い鳥たちの戦いです。

「本物の魔女なのか？」

背筋にゾクリと震えが走りましたが、恐ろしいというより、好奇心というか、不公平な怒りの方が強く感じられました。

「天馬に乗って空を飛んで、おまけに魔法使いだなんて狡いじゃないか」

ぶんぶん怒っている王子は、たぶん、自分が天馬に乗って剣を振

るい、かつこよく悪者と戦いたかったのでしょうか。

湖が近づくと王子は馬を下り、こっそり忍んでいきました。

湖面の反射がキラキラ見えてくると木影に身を潜め様子をうかがいました。

すると、白鳥たちが次々岸に向かって飛んできて、まぶしく銀色に光り輝いたかと思うと、人間の女の姿となって岸に降り立ちました。

王子は目を丸くしてその女性を見つめました。

先頭に降り立った女性は、まさに神話の美の化身でした。

細い長身に絵画に見るような純白の襜々の衣をまとい、黄金の長い髪をなびかせ、古代の彫刻のような完璧に美しい顔立ちをしていました。

女神の後にも白鳥から化身した女性たちは続き、十数人、ちよつと年輩の者もいましたが、だいたいみな若い女性で、子どもも三人ほど混じっていました。

全員が岸に降り立つと、湖に向かい女神を先頭にみな膝を折り天馬にまたがったカラベラを迎えました。

カラベラも岸に上がると地面に降りました。

「まあ、びっくり」

あんまりびっくりしていないような口振りですが、人間あんまりびっくりするところなものかもしれません。

「どうぞお立ちになって。皆さん顔をお見せくださいな」

白鳥の化身たちは立ち上がると尊敬と親しみを込めてカラベラを見つめました。中にはウルウル目に涙を溜めている者もいます。

先頭の女神が名乗りました。

「わたくしはユークリナの王女、オデットと申します」

『ユークリナの王女だって？』

じいっと聞き耳を立てていた王子は忙しく頭を巡らせました。

『えーと、たしかとなりのユークリナ国の王女は父王と王妃様が事

故で亡くなつたお姫様がなつたばかりで、そのお姫様も行方不明になつているんだよなあ?」

それがあの美しい女神様なのか、と王子は今後は姿しか見えないのを残念がつて、なんとかお顔を見られないものかといっしょうけんめい体をあつちこつちにひねりました。

「それでは白鳥がお姫様になつたのではなくて、お姫様が白鳥になつていたのね?」

と、カラベラは女の子らしい感想を言いました。

「それはいつたいどういうことなのかしら?」

はい、と答えてオデット王女は長いまつげの目を閉じて、美しい眉を悔しそうに寄せました。

「私はじめ、私に身近に仕える城の女たちは悪魔によって呪いを掛けられてしまったのです。呪いにより白鳥の姿となり、月の輝きが最も強くなる満月のこの数時間しか人間の姿に戻れないのです」

「まあ、それはお気の毒。」

それで、あなた方に呪いを掛けた悪魔とは、何者です?」

「悪魔、それは」

オデット王女は目を開くと怒りのこもった瞳でその者を睨み付けるように言いました。

「我が国の宰相、ロットバルトです」

なんとか王女様の顔を見ようと伸び上がっていた王子は、その言葉聞いて思わずギョツと体勢を崩し、慌てて近くの枝をボキリと握り折つてしまいました。

「誰!」

オデット王女は鋭く声を上げ、女たちは怯えていつせいに振り向ききました。

「いててて」

ずっこけた王子はかっこ悪く打った肘をさすりながら起きあがり

ました。

睨み付ける女たちにギョツとして、

「誤解しないで、僕はけっして怪しい者ではありません」

慌てて手を振って弁解する王子に皆をかばって前に出たオデット  
王女は

「あなたは」

と言つて鋭く睨み付けました。

その後ろでカラベラは首を傾げてクスクス笑っていました。王子  
がそこで盗み聞きしていたのはとくに承知していたようです。

王子はむっとして、パンパンとお尻を払って立ち上がると胸を張  
り、威厳を以て自己紹介しました。

「僕はこのベルーシア国の王子、ジークフリート・エージレです」

しかしオデット王女の反応は冷たいものでした。

「そうですか」

一言言っただけ冷たい目を向けるばかりです。

王子はドギマギして、いったいどうしたのだろうと不安になりま  
した。

「魔女様」

オデット王女はカラベラに言いました。

「邪魔が入ってしまいましたわ。場所を変えてお話の続きを」

「そんなあ！」

と王子は慌てて、

「僕は王子ですよ！ きつとあなたの、いえ、皆さんの不幸を救う  
お手伝いが出れます！」

しかしオデット王女は冷たい不審の目を向けるばかりでした。

「私はあなたが私どもの助けになってくれるとはとても思えません」

「そうよそうよ！」

子どもの一人が言つと、子供たち三人揃つて「そうよそうよ」と  
責め立てました。

「あんたお姫様を狙つて弓矢を射つたじゃない！」

子供たちに同調してみな白い目で王子を睨みました。

王子はたじたとなり、

「ぼ、僕は白鳥を射ったんだ、お姫様を射ったんじゃない」と弁解しました。

「私たちはもう長く白鳥の生活を続けておりますのでね、鳥たちにはすっかり同情的になっておりますの」

王女の皮肉に王子もすっかり落ち込んでしまいました。

見かねてカラベラが助け船を出してあげました。

「お怒りはごもっともですけど、王子というのは確かですから、まあ、もしかしたら、何かの役に立たないとも限りませんわ」

オデット王女は承伏しかねる様子でしたが、ため息をつき、

「そうですね。私たちには時間がありません。確かに、助けは出来る限り多く欲しいですわ」

となかばあきらめるように言いました。

「王女様に呪いを掛けたのはロットバルトに間違いないのですか？」

王子の問いにオデット王女は頷きました。

「そうですね。私たちに呪いを掛けたのはロットバルトです。おそらく、事故に見せかけて私の父母を殺したのも彼の仕業でしょう。あの男は我が国を自分の物にしようとしているのです。

父母が亡くなり、私の王位継承の戴冠式が行われようという日、あの男は恥知らずにも私に求婚してきたのです。いいえ、求婚などというものではありません、自分の妻になるよう強要してきたのです」

「ロットバルトは独身なの？ 娘がいるようだけれど」

ああ、そういえばそうだ、とカラベラに王子も同意しました。

「奥さんはずいぶん前に亡くなったそうですね。もっとも、愛人はいるようですけれど」

とオデット王女は汚らわしそうに言って話を続けました。

「あの男の求婚など私はもちろん断りました。証拠はありませんが

父母を殺した憎い敵です。誰があんな男と結婚などするものですか。しかし、するとあの男は自分は強い魔力を持った魔王であると自ら名乗ったのです。

とうてい信じられるものではありませんでした。確かにある意味あの男は有能な政治家でした。素性に関しても謎の部分が多くありました。陰で何をしているか分からないような男でしたが、まさか魔王などと。これがラピスやロヴィークのような大国の宰相ならそれも有り得ない話ではないでしょう。けれど我がユークリナは決して大きくも豊かでもない国です。その小国の宰相が魔王などと、せいぜいインチキな魔術師でいどのものでしょう。

しかし、あの男の話は嘘ではありませんでした。

その力も、魔王と名乗って偽りのないものでした。

私があこの男の求婚を断ると、あの男はその魔力によってまず私の身の回りの世話をする侍女たちを白鳥に変え、それでも私が拒否すると女中たちまで白鳥に変え、とうとう私まで白鳥に変えられてしまったのです」

「でも、それほど恐ろしい魔王なら、殺されなくて良かったですね。王子がお気楽に言いました。

「国を支配するためです。あの男は宰相ではありませんが、王ではありません。国を完全に自分の物にするためには王にならなくてはなりません。そのためには王女である私の夫とならなくてはならないのです。」

あの男は言いました、元の人間に戻りたかったら自分の妻となれ、と。

そのためにあの男は呪いが完全なものとなるまでに半年間の猶予をもうけました。

すなわち、私の二十歳の誕生日までです。

二十歳の誕生日までに自分の妻となる決心をすればよし、さもなければ完全に白鳥となり二度と再び人間には戻れなくなる、と」

王子はそうかオデット姫は自分より二歳年上かと思いました。

怒りに燃えていた王女の目が力無く曇りました。

「呪いを受けたのが私一人ならこのような屈辱けつして受け入れたりはいたしません。けれど、こうして私に仕える者たちまで同じ呪いを掛けられて私と運命を共にしなければならぬとなると・・・」  
弱気になった王女に女たちは何をおっしゃいますと言い募りました。

「私たちは日頃より姫様にすべてを捧げる覚悟でお世話させていただいております。姫様を犠牲にして自分たちが救われようなどと我らはけつして思いはいたしません」

年輩の者から三人の子供らまで、みな意を同じくして頷きました。  
オデット王女は忠義な召使いたちを愛しそうに見渡しましたが、やはりすまなさを感じないわけにはいきませんでした。

王子が尋ねました。

「オデット姫、二十歳のお誕生日はいつなのですか？」

「今日よりひと月後の明日です」

「やあ、それは偶然ですね！ 僕の誕生日はひと月後の今日なんです！」

王子の感動に対してオデット王女はあらそうですのただけ答えました。

カラベラが尋ねました。

「呪いというのは常に両方向に作用しているものです。」

「呪いを解く方法などご存じではありませんか？」

「それは・・・」

オデット王女はちらつと王子を見て、なぜかものすくしく言いづらそうにしました。

「それは・・・」

永遠の愛の誓いですわ。

永遠の愛の誓いが邪悪な想いを退け、呪いを無効にするのだそうです」

「永遠の愛の誓い、ですか・・・」



カラベラは繰り返し、女たちと揃って「ハアー・・・」と深いため息をつきました。

「永遠の愛の誓いですって！」

王子が張り切って答えました。

「そんなことならわけないことです」

王子はたたずまいを正し、王女の前に膝をつき、深々とお辞儀しました。

「オデット姫、どうか我が想いを受け入れてください。

どうか僕の妻となってください。

僕は永遠にあなた一人を愛すると名誉に掛けて誓います」

静寂が漂いました。

月光に湖が細かくキラキラ輝き、最高に美しい情景でした。

王子は力を込めて言いました。

「これでああなたは邪悪な魔王の呪いに思い悩む必要はありません。

あなたが僕の真心を受け入れてくださればなんの悪も僕たちを不幸にすることはできません」

オデット王女は、それでも王子の真心こもった求愛を一応は感謝しました。

「ありがとうございます。ジークフリート王子。

けれど、おそらくロットバルトの呪いが消えることはないと思います」

「なぜです？」

「それは、私がああなたを愛していないからです」

王女にこれ以上なく率直に言われて、さすがに夢見がちで脳天気な王子も青くなりました。

「そ、それは・・・」

それはあなたが僕のことを知らないからです。

無理もない、ついさつき出会ったばかりですからね。けれどひと月あればきつとあなたも僕のことを理解して、僕の愛を受け入れてくれるようになるでしょう！」

「そうでしょうか・・・」

わたくしには、その自信がありません」

率直にふられた王子は「う・・・」とうなって見るも哀れにしょげてしまい、他の者はみな無理もないと改めて深いため息をつきました。

「いいんじゃないありません？ チャンスくらいあげても」

惨めな王子を哀れんでカラベラが言ってあげました。

「とりあえず他に方法がないのなら王子に掛けてみるしかないでしょう。それとも、オデット王女には王子以外に心に思うお方がいらつしゃいますの？」

王子はわらにもすがる想いでオデット王女の顔を伺いました。

王女は目を伏せ、とても残念そうにいいえと答えました。

「そういうことなら仕方ないでしょう。さあ、もう時間があまりないのでしょう？ 王子と二人でそこらへんを散歩していらつしゃいな」

オデット王女は不満そうでしたが、王子はすっかり回復して嬉々として

「さあごいっしょいたしましょう」

と、王女をお誘いしました。

王女は大変心残りなご様子ならなかばあきらめて本当に仕方なく王子のエスコートに従って歩き出しました。

## 第5章 月光の幻影その2

二人が歩き出してその姿が木影に消えると、カラベラは一人、王女に次いでカラベラに強い視線を送ってきていた女性に向き合いました。

「あなたが、あの勇敢な白鳥さんね？」

「はい」

女性は背が高く肩幅があり、とても意志の強そうな男性的とも思える精悍な顔つきをしていました。

「近衛女官のレスリーと申します。先ほどはありがとうございます。ました」

それから、カラベラはもう一人、ニコニコ穏和そうな笑顔で落ちて着いた雰囲気が一番年輩の女性に目を向けました。

「あなたがこの中では一番偉い方なのかしら？」

「偉いと言うほどの者ではありませんが。」

女中頭のマリシア・ハイドと申します」

と、一番偉い女中頭マリシアは貫禄を笑顔に包み込んで答えました。

「他の皆さんもご紹介したいところだけれど」

と、特にかわいらしい三人の子供たちを残念そうに見て、

「先に必要なことを話してもらわなくては。」

あの永遠の愛の誓いが呪いを無効にすると話す話、どこから出てきたの？」

「それは・・・」

口を開いたレスリーがマリシアに遠慮して一瞬口を閉ざしましたが、マリシアの了解を得て説明しました。

「灰色の魔女に聞いたのです」

「灰色の魔女？」

「はい。」

私たちが白鳥にされてひと月後のことです。

その頃私たちはこの突然の不幸な状況に途方に暮れて毎日毎日野生の鳥としてやっとの思いで生きておりました。

最初の満月の夜、初めて人間の姿に戻れたときはみな抱き合っておいおい泣いたものです。しかし我がオデット王女は毅然とこの運命に立ち向かおうと皆を励まし、呪いを打ち破る何か良い方法は無いものだろうかと相談されました。その時になってそうしましたのは、白鳥である間は鳥の言葉しか話せず、難しい人間の話は出来なかつたからです。

相談しますと、こちらのマリシア殿が西の白い魔女のことを話されたのです」

「西の白い魔女？」

話をふるとマリシアはニコニコ笑顔で説明しました。

「はい。噂なんですからですけど、西の国にそれはそれは力の強い白い魔女が住んでおられると聞いたことがございまして」

と、マリシアはニコニコしながら目の奥でじつとカラベラの顔色を観察しました。

「ああ、そうなの。それで」

と、カラベラは白い魔女の話は置いておいて、レスリーに話を先を促しました。

「それでその白い魔女に力を借りようということに相談がまとまったのです。その夜はそれまでで、月が傾いて光が弱まると、私たちはまた白鳥に戻ってしまいました」

その時のことを思い出したのでしよう、女たちは悔しそうな、悲しそうな、泣き出したような顔をしました。

「翌日、私たちは西の国に向かって旅を開始しました。

しかし、その旅はすぐに終わってしまいました。

ロットバルトの手下の黒鳥どもが襲ってきたのです」

「ああ、あいつらね」

カラベラの魔術に追い払われた黒鳥たちはまた集まってきて上空

を旋回しています。

「奴らはずっと私たちを見張っていたのです。けれどそれまでの私たちは与えられた住みかである城のほとりの湖から外に出ようなどまるで考えませんでしたから、奴らがあれほど凶暴な連中であるとは知らなかったのです。」

私たちは奴らに襲われ、必死に逃げまどいました。奴らは王女様には決して手を出そうとはしませんでした。他の者たちにはくちばしや爪で容赦なく攻撃を仕掛けてきました。五人が傷を負い、私たちは西への旅を断念せざるをえませんでした」

その時傷を負った五人でしょう、申し訳なさそうにうつむきました。三人の子供たちは抱き合って上空の黒い影を恐怖にゆがんだ顔で見上げています。

カラベラは三人のところへ行くと抱き寄せて、大丈夫よと微笑みかけて安心させ、レスリーに話の先を促しました。

レスリーは頷き、

「奴らの攻撃から逃れるため私たちは森に降りました。地上ではずいぶん動きが鈍りましたが、奴らは森の中までは追ってこようとはせず、上空を飛びながら監視を続けていました。」

私たちは非常に惨めな想いで傷ついた仲間をかばい、身を寄せ合っただけで危険が去るのをひたすら待つことしかできませんでした。

そこへ、灰色の魔女が現れたのです。

灰色の魔女は、本当の名はなんといいのか名乗りませんでした。まさに灰色の魔女でした。灰色のフードをかぶり、灰色の肌をし、灰色の髪をしていました。かといって醜い女ではなく、むしろ顔かたちは美しいと言ってさしつかえない美貌を持っていましたが、目が、非常に険しい女でした。瞳も、やはり灰色をしていました。

彼女は私たちに付いてこいと促し、私たちは言われるまま付いていくしかありませんでした。

連れて行かれた場所は、そこはもちろん森の中なのですけれど、少し開けたところにきれいな円形にまっすぐの白い木が立ち並び、

その中に小さな丸太小屋がありました。私たちが円形の木々の内側に入ると、なんと、私たちは人間の姿に戻ったのです！

私たちは呪いが解けたのかと喜びましたが、そこは魔女の力の陣地だから一時的に呪いが利かなくなっているだけだと教えられました。

魔女は険しい目をしていましたが、案外優しく、薬草で傷ついた者たちの手当をしてくれました。

魔女は私たちの境遇を承知しているようでした。

とても同情的に感じていたのですが、白い魔女のことを話すと突然怒り出しました。

あんな女のところへ行くのはやめろ、邪悪な呪いを解くのは永遠の愛の誓い以外にない、と、きつく言われました。

それから五日間私たちはその決して広くはない陣地の中で過ごしましたが、その間魔女はあまり私たちと話してくれませんでした。

そして五人の傷がだいたい癒えると、私たちは追い払われるように魔女の陣地を出、また元の白鳥に戻り、森の中の湖から湖へ、黒鳥どもの影に怯えながら以来こうして過ごしてきたのです」

「なるほどねえ・・・」

カラベラは彼女たちの境遇を思い、感慨深く頷きました。

「永遠の愛の誓いが呪いを打ち破るといっているのは合っていると思うわ。その灰色の魔女さんはなかなか力のある方ですね。人格的にはどうかと思うところもあるけれど」

肩をすくめるカラベラを、マリシアはやはりニコニコ優しい笑顔で見つめていました。

ジークフリート王子とオデット王女は並んで・・・ジークフリート王子が半歩前を歩いて、うつむき加減のオデット王女が王子に従うように、湖の岸を歩いていました。

「申し訳ないですが僕はまだあなたの国に行ったことがないので、ですからあなたのような美しいお姫様がいらっしやるなんて知りま

せんでした」

王子は緊張しながらも運命の・・・とすっかり思いこんでいる理想以上の美しいお姫様といっしょに歩いている幸せに自然と顔がほころんでニコニコ笑顔になっていました。

邪魔な枝を払い、地面に張り出す大木の根をまたいで手を差し伸べるとオデット王女は素直に手を預け、王子はその細くて白くてちよつと緊張に硬くなった指に触れるとジーンと感動に胸が震える思いがしました。

「一度だけ、お会いしたことがありますのよ」

オデット王女が静かに言いました。

「こちらの国王様、王子のお父上がお亡くなりになった時、お葬式にまいりましたのよ」

「そうだったのですか？　ありがとうございます。あのおきのお客さんたちは、えーと、思い出せるかなあ？」

「あなたはおおぜいのお客の前で子どものように、・・・事実子どもだったのですけれど、父上父上と大泣きして、王妃様に叱られて、お付きの者にあやされて、たいへんでしたのよ」

「そ、そうでした・・・でしょうか？　よく覚えてないなあ」

そういえば母上にさんざん叱られて、爺やにあれこれ慰められたような気がします。

王子は子どもの頃とはいえとんだ恥ずかしいところを見られていたのだなと真つ赤になりました。

「ウフフ」

オデット王女が口許を押さえて笑いました。

「ごめんなさいね。わたくしもあのとときのことを思いだしてしまつて・・・」

脳裏に閃くものがあって、王子は「あつ」と声を上げました。

「どうかしまして？」

「あ、いいえ・・・」

そうでした、王子はオデット姫のことを思い出しました。

さんざん泣きわめいて、爺やに

ほら、かわいらしいお嬢様が王子のことを見てらっしゃいますよ、と教えられて、向こうの列にいるそのお嬢さんを見たのでした。

喪服を着てきれいに髪の毛を結び上げたお嬢さんは、王子の顔を見て鼻の上にしわを寄せて「イーツ」と歯を見せて、それで王子はますます大泣きしたのでした。

あのときの意地悪なお嬢さんが、オデット姫だったのです。

「わたくし、王子があんまり大泣きするのですっかり怖くなってしまつて」

「は？」

「父上にしがみついて、ねえ父上は死んだりしませんよね、って必死にお尋ねしたのですよ。父上は、ああ死んだりするものか、とおっしゃつてくださつたのですけれど・・・」

あのととき、わたくし王子と目が合ったような気がするのですけれど、どんな顔をしましたかしら？ 覚えてらっしゃらないでしょうねえ」

「覚えてますとも。」

あなたはこういふ顔をしたんですよ」

と、王子は王女に「イーツ」とやつてやりました。

「まー！」

オデット王女は驚いて頬を真っ赤にして、

「まさか、そんな顔いたしませんわ」

「いいえ、あなたは確かにこうしたんですよ。それで僕はますます大泣きしてしまつたんです」

「そういえば、そうでしたかしら・・・」

王女は真っ赤になって、恥ずかしそうに下を向きました。

「わたくし、意地悪な子どもでしたのね」

「ええ！ とつても」

と、王子は笑つて、王女も救われたように笑いました。

王子は王女の笑顔を見てとても幸せな気分になりました。



王女がふと、不思議そうな無防備な顔になりました。

「どうかしましたか？」

「い、いいえ」

王女は慌てて顔を背けましたが、  
思い出したのです、

王女が意地悪にイーッとやった理由を。

父親にそつと言われたのです、

もしかしたらあの子がおまえのお婿さんになるかもしれないよ、

この国の王子様だからね

と。

王女は不思議そうにこちらを見ているジークフリート王子をそつ  
と振り返って、

『これが運命なのかしら？』

と、ちよつと、情けない思いがしました。

『本当にどうしようかしら？』

と王女も思っていましたし、

『ああ、いったいどうしたら僕のこの真心を知ってもらえるのだろ  
うっ。』

と王子も思っていました。

オデット王女は、自分の不幸は我慢するにしても、自分に仕える  
者たちの人生まで自分の不幸に従わせるわけにはいきません。

今のところ、けつきよく、

ロットバルトを選ぶか、

ジークフリート王子を選ぶか、

二つに一つ、どっちの方がまだましかというと、実に消極的な条件  
の選択を迫られているのです。

この人がもう少し大人ならまだしも・・・

と、王女はつい恨めしく王子を睨んでしまうのでした。

『体くらい中身ももう少し立派ならいいのに・・・』

王子は同じ年頃の男子と比べても背が高い方でしたし、日ごろ馬を乗りこなして体もしっかり作られていました。顔もお坊ちゃんらしいわがままそうなところと緊張感の乏しい脳天気そうなところが気になります。目もパツチリして眉が高く、鼻筋も通って、厚めの唇も形がよく、顎がちよつと突き出た骨格もまずまずバランスよく、カッコをつけて片方にピンと跳ね上げた茶色の髪もなかなか若者らしくて、まあ、ともかくまずまずの好男子でした。

でも、見た目だけを言うならばずいぶん年上にはなりますがロットバルトもなかなかの男前で、子どもの王子なんかよりずっとシャレ者でした。

けつきよくのところに、  
『どっちも中身がイヤ』  
なのでした。

正直なところを言うと、今回の事件さえなければ、王女はロットバルトにはむしろ好意を抱いていたくらいです。

まさか結婚など考えもしませんでした。  
それに比べ、

王子の若さと純真さの方がずっとましに思えますが、やっぱり王女には王子の子どもっぽさが

『バカ』

に思えてならないのです。

幼い子どもの頃、父親を亡くしてあんなに大泣きしていたことを思い出すと、絶対に悪い人ではないのだろうと思うのですが、ようするに、

『あの頃から全っ然、成長していない』  
のです。

自分が父母の死によっていきなり王国を背負わなければならなくなった今と比べてみると、いずれは同じ運命にある王子がこれでは困ると、強く、思うのです。

ましてや幼い頃父王を亡くした王子はなおさらそのことを考えて

いなければならぬはずではないでしょうか？

『それなのに・・・』

ジークフリート王子を見ると、やっぱり、オデット王女はため息をつかないわけにはいかないのです。

一方ジークフリート王子にしても、オデット姫ほど深刻ではありませんでしたが、あのおつかない母上に次の誕生日には花嫁を決めるとうるさく言われています。

王子にしてみるとこれはもうまたとない絶好の好機です。

期限を切られた花嫁選びにオデット姫という呪われた不幸な運命にある絶世の美女が現れたのです。

『僕の妻になる人はこの人以外には絶対いない！』

と、王子は熱っぽい目でオデット姫の横顔を見つめました。

完璧な美。

スラリと細身の、女性にしては高い背。それに年頃の王子には目にまぶしい、清楚な純白の衣装を押し上げている大人のふくよかな胸の膨らみ。花の蜜のようなとてもよい香りが胸の奥底をくすぐります。触れた指先の感触が蘇り、この美の化身が決して幻ではないことが奇跡的なことに思えて神に感謝したくなります。

なんと美しい横顔をしているのでしょうか。

女性らしい額の丸み、まっすぐ伸びる鼻筋、くつきり浮き上がった唇、丸く細い顎先、ぴったり引き締まった喉元、細く長い首。細い眉は意志が強そうに凜と端が上向いて、くつきり二重に長い睫毛がそよぐ目は瞳の緑が宝石のように輝いて、端がキュッと引き締まった唇は淡い桃色で、肌は抜けるように白く、黄金の髪を長くまっすぐ背に流して・・・

王子の熱っぽい目はいつしか夢見るようにボーっとなつて

『ああ、おとぎ話って本当にあるんだ・・・』

となんとも幸せなフワフワな気分になるのです。

「王子」

振り向いたオデット王女の強い視線に見つめられて、王子は思わず「ハイッ」

と、気を付けの姿勢になりました。

「わたくし決めました。」

ジークフリート王子。

あなたにわたくしの夫になってもらいます」

「ほ、ほんとうですか!？」

王子の顔にパーッと笑顔が広がって、飛び上がらんばかりの喜びがわき上がってきました。

「待って」

王女は王子の喜びを押さえるようにピタッと手のひらを王子に突きつけました。

「王子にはわたくしの夫になってもらわなくては困るのです。しかし形だけの夫では意味がありません。わたくしがわたくしの夫として心から尊敬し、お慕いし、生涯に渡ってずーっと愛し合える、そういう夫になってもらわなくてはロットバルトの魔法は解けないでしょう。」

残念ながら今のあなたはわたくしの夫としては失格です」

「そ、そんなあ・・・」

王子はまた見るも哀れに落ち込んでしまいました。王女は言葉を思い出し、

「では、僕はあなたの夫となるためにどうしたらいいのでしょうか？」

と、力を込めて尋ねました。

「それです。」

私たちがこういう形で会えるのはまたひと月後の満月の夜までありません。その満月の夜に、わたくしに王子の愛が真実永遠のものであるという証をお見せくださいませんか？」

「永遠の愛のあかし？」

「王子は考えましたが、」

「それはいったいどういふものですか？」

「わかりません。それは王子がご自分で考え、見つけだし、わたくしを納得させてください」

「それはまたずいぶんと難しそうだなあ・・・」

「大丈夫です」

王女は優しくにつこり笑いかけ、

「王子のわたくしへの想いが真実のものであるならばそれは必ず見つかります。」

ただし、

と、王女は真剣に念を押すように、

「チャンスはその夜一度きりしかありません。その時に必ずその証をわたくしにお見せくださいね」

「わかりました。」

約束いたします。次の満月の夜、私のあなたへの思いが真実永遠のものである証を、きつとあなたにお見せします」

王女は満足そうに頷き、ちよつと悲しそうに天頂をとくに過ぎた満月を見上げました。

「そろそろ戻りましょう。皆にこのことを報告し、これからの手はずを整えなければ」

三人の子供たちはオデット姫のお相手役で、名前をジェニー、キヤシー、ドミニクと言いました。特にこれと言った仕事があるわけではありませんでしたが、姫様のお話相手が出来るよう日頃から一生懸命勉強してなかなか賢い子たちでした。今は七歳六歳五歳と、ほんの子どもですが、いずれ将来は王女のお側近くに控えて本当の意味の相談役を務めるであろう、エリートたちでした。

でもやっぱりまだ子どもで、せつかく人間に戻れたのだから精一杯楽しみたいのですが、もう眠くて眠くて、カラベラに肩を抱かれたまま三人とも寄りかかり膝に倒れ込み、まぶたがくつつきそうになるのと必死に戦っていました。

「夢の中でだって遊べるから、無理しないでお眠りなさい」

カラベラにそう言われてやだやだとだだをこねていたのですが、とうとう一番下のドミニクが眠り出すとお姉さん二人も我慢できないでスースー眠り始めました。

「おやまあカラベラ様、すみませんねえ」

とマリシアと女中たちがそつと三人を受け取りました。

「ところでカラベラ様」

とマリシアは女中に子どもを預けて

「カラベラ様ほど力のある魔女ならさぞ評判も高くていらっしやるのでしょうかねえ。このような田舎にまではなかなか評判も聞こえてきていないようですけれど、でもそっくりな小さな魔女の噂は聞いたことがございますのよ。同じく真っ白な天馬に乗ったとてもかわいらしい魔女さんの噂をね。まあわたくしの思い違いかもしれませんけれど、魔女は自分の本当の名前は隠すものだとも聞きますし・

」

「ああ、別にかまわないの。騒がれなくなかったただだから。私はカラベラはちょうど帰ってきたオデット王女とジークフリート王子にも向かって名乗りました。

「クラリスって言うの。さっき話していた西の白い魔女というのは私のお母さん、白薔薇の精カラベラ、またはカラベラスのことじゃないかしら？」

「カラベラスだって!？」

王子が叫びました。

その時です。

木々の間の暗がりにも一つの大きな影が立っていました。

それは、鳥の姿をした人でした。

いえ、人間の顔をした鳥かもしれません。

人間と同じ背丈をした黒っぽい巨大な鳥が大きな二つの人間の目でじいっとこちらをうかがっているのです。

「だれっ!？」

クラリスも思わず鋭い声を上げました。

鳥人間は大きな翼を広げると、バサリバサリ、大きく羽ばたいて、浮き上がったかと思うと見る間に高く飛び上がり、折り重なる枝葉の向こうに消えていきました。

「前にも見たことある？」

レスリーは首を振り、答えました。

「いいえ。あのような不気味なものを見るのは初めてです」

レスリーは顔を青ざめさせ、他の者たちは抱き合ってブルブル震えていました。無理もありません、あれは黒鳥たちのように直接身の危険を感じるよりも、内面の、魂を冷え凍らせる、この世ならざる存在を思わせるものでした。

クラリスは顎に指を当て、じっと考え込みました。

「確かに、不気味ね・・・」

「おいおい、今のはいったいなんだ？」

王子が騒ぎ出し、クラリスは寝ている子供たちを気遣ってしーっとやりました。

でも王子は大騒ぎをやめようとしなくて、

「まさかおまえの母親の仲間なんじゃないか？」

だって」

不審そうなオデット王女に向かって、

「カラベラスと言ったら悪名高い黒魔女じゃないですか！」

クラリスはムツとしながら、

「ええ。そうよ」

と答えました。

「でもあんな奴、お母さんの仲間のわけないわ」

オデット王女はいきなり飛び出したこの名前に困惑しながらマリシアに「そうなの？」と尋ねました。

マリシアもさすがに緊張して、

「そのようですわね。でも今は白魔女となってロヴィーク国の守護

者となつてゐるとか」

オデット王女は心配そうにクラリスに視線を送りました。

クラリスはオデット王女によくやく困つたように笑いかえし、

「うーん、それはどうなのかしら？」

と言いました。

「私のお母さんは人間のやることなんかもうぜんぜん興味ないの。毎日お父さんといちゃいちゃしているだけよ」

オデット王女はなんとなくぼつと赤くなり、ジークフリート王子は何を考えているんだか実に恐ろしそうな顔をしました。

「ところでそつちの方はどうなの？　少しは歩み寄りがあつたのかしら？」

「ああ、もちろん！」

王子が張り切つて答えました。

「僕たちは婚約したんだ！」

女たちはびっくりしてオデット王女の顔を覗き込みました。

「あら、まあ、びっくり」

クラリスもびっくりしました。

「オデット王女、あんまり思い詰めてはいけませんよ」

そつですそつです、と女たちも言い募りました。

「私たちのために無理をしないでくださいませ」

王子は心外そうにムツとしました。

オデット王女がまあまあと皆をなだめました。

「婚約はあくまで仮のものです。形ばかりの結婚では呪いは解けないでしょう？」

王女に視線を向けられてクラリスはその通りと答えました。

「ですから王子にはこれからひと月の間にどうあつてもわたくしの夫にふさわしい方になつていただきます。クラリス様」

と、王女は両手でクラリスの手を硬く握りしめました。

「どうかこの人を真に立派な王子に鍛えてやってくださいな！」

クラリスは王子を細い目で見やつてニンマリ笑いました。



「そう言うことでしたら、もう思いっきりビシバシ鍛えてさしあげましょう」

「ああ、クラリス様、どうかどうかよろしくお願いいたします」  
女たちも両手を合わせてクラリスを拝みました。

「おいおい、君たち、この僕をいつたいなんだと思っっているんだ！」  
王子はブンブン怒りましたが誰も相手にしませんでした。

雲が出てきました。

もうだいぶ傾いていた月は雲がさしかかると急激にその光を弱めました。

「ああ、呪いが・・・」

オデット王女をはじめ女たちの姿が白くぼやけてきました。

「オデット王女！」

クラリスは慌てて王女に駆け寄ると手を引いて腰をかがませ、その額に口づけをしました。

「祝福の口づけよ。いつか役に立つときがあるかもしれないわ」

「ありがとう」

オデット王女は微笑み、親愛の口づけをお返ししました。

「クラリスさん。偉大な小さな魔女よ。どうか私たちの力になってください」

女たちは次々白鳥の姿に変身していき、オデット王女もその姿をぼやけさせていきました。

クラリスは王女と白鳥たちにしっかり頷きました。

「ええ。私はあなた達の味方よ。」

ひと月後、きつとまた会いましょう」

王女も頷き、白鳥に変身しながら皆の待つ湖へ駆けました。

その後ろ姿に王子は叫びました。

「僕の誕生会にあなたをお招きします。そして僕はきつとあなたを僕の妻としてお迎えします！」

## 第6章 狩りその1

クラリスは天馬ナージャに乗って王子より一足早くお城に帰ってきました。王子にはいろいろ言いたいこともあったのですが、ナージャに乗せる乗せるとうるさいものですから森に置いてきました。黒鳥たちの仕返しを考えてナージャにはまた城の厩で我慢してもらうことにしました。

自分のあてがわれた客室に行こうとすると、なんとなく騒がしい気配がします。

まだ宴会が続いているのかと思って声のする方に行ってみると、なんと台所でルピネーが城の使用人たちと宴会を開いていました。

「よう、クラ・・・」

クラリスに睨まれてルピネーは慌てて言い直しました。

「・・・カラベラ。散歩は楽しかったか？」

「呆れた。酔いつぶれて寝てたんじゃなかったの？」

「腹が空いて目が覚めちゃった。貴族のお上品なお口は小食と見えな、たっぷり料理が余ってる。もったいねえんでな、みんなといっしょに酒盛りのやり直しだ」

使用人たちはみな顔を真っ赤にしてすっかりよい気分のようにです。驚いたことにルービン卿まで真っ赤な顔でテーブルに突っ伏してグーグー眠っています。ときおり

「なんでこのわしがこんな・・・」

などと寝言を言っています。

どうやら晩宴会自体は明日のことも考えて思ったより早く終わっていたようです。

クラリスはため息をつくと腰に手を当て、大食いのルピネーに言いました。

「保存の利くものは残しておきなさい。この城の大事な財産なんだから」

「わかつてるよ」

ルピネーはおどけて歌うように言いました。

「女王様はだいぶ無理して今回の祭りの宴を準備したよugdだからな。この国の経済状況はちゃんんと調べてあるよ」

「だったら・・・」

「でもよー、やっぱり腹は空くじゃねえか」

眠れないんだよーと子どものように言いました。

「分かったわよ。そのもも肉持ったままでいいからこっちにいらっしやい。話があるの」

ルピネーはおとなしくクラリスについて台所を出るところの宴会で仕入れたネタを披露しました。

「あの使用人たちはみんな臨時雇いでな。給仕だの難しい仕事をするのは商人の屋敷なんかから借りてきて、突っ立ってりやいような役は離れた村から村人を借り出してきたんだ。ふもとの村からじやあ何かと不都合なんだ。料理人もこの城の者じゃねえ、貴族の屋敷から借りてきてるんだ。

ふだんこのでっけえ城には必要最低限ほんの数名の使用人しかないんだ。女王と王子の食事は女王が手ずから用意してな、ま、粗末なものらしい。

それでも格好だけはつけたがる。あのルービン卿は王家の儀典を取り仕切るという名目でわざわざ高い金を払ってラピスから来てもらったまずまず名門の一族なんだが、儀典どころじゃねえ、内政外交取り混ぜて、ゼーんぶあのおっさん一人でやってるんだ。高い給料もらっても割に合わねえ。おまけにあの王子の教育係まで任されてる。酔いつぶれるまでにさんざん愚痴を聞かされたぜ。

この国が貧しいってのもあるが、あの女王様が極端な締めり屋なんだな。将来への不安がどうにも強いらしい」

「ルービン卿がロットバルト宰相みたいな人でなくてよかったわね」  
「そうだな。ちよいと欲があればいくらでも自分の都合のいいようにこの国を操作できる立場にはある。それをしないのは、やっぱり

好人物なんだな」

「王子も女王様ももうちょっといたわってあげればいいのにね」

「王子はともかく、女王には卿に頼りつきりで、そこまで考える余裕がねえんだな」

などと話しているうちに二人は館の大塔を上って最上階の見張り部屋に出ました。

昔はともかく、見張り部屋とは言ってもお飾りの展望室です。

でもここからは窓から城壁の向こう、丘のふもとに黒々とした森が広く見渡せました。

「あそこに湖があるの。そこでね・・・」

と、クラリスは夕刻から先ほどまでの出来事を話して聞かせました。

鳥のもも肉を頬張りながら呑気そうに聞いていたルピネーの顔が次第に引き締まってきました。

「白鳥の呪い、な」

肉をすっかり平らげて指をペロペロやりながら、ルピネーの目はすっかりギラギラ輝いていました。

「ただ者ではあるまいと思っていたが、奴が、ロットバルトが魔法使いとはな」

「魔王ですって。大いばりで名乗ったそうよ」

「フウン、魔王か。魔王と言うほどにはおまえさんのおっ母さんほど名が通ってねえな？」

「そうね。黒魔女カラベラスはジークフリート王子でも知っていたわ」

なんでそういうつまらないことばかり知っているのかしらとクラリスはブツブツ言いました。

「でも、ロットバルトの名前は知られていなくても過去に何か大きな事件を起こしていた可能性はあるわ」

「そうだな・・・」

ルピネーは顎をボリボリやってしきりに考えていました。

「だいたい奴がユークリナみたいな小さな国に収まっているのが気に入らねえんだ。何をたくらんでやがるんだか」

「あら、ユークリナは小さな国じゃないわ」

クラリスが納得いかない顔で反論しました。

「広い大地の広がる豊かな国じゃない？」

オデット王女もユークリナを小さな貧しい国のように言っていました。

「その通りだ。ユークリナは農業国として豊かな国だ。だが、その農業をやめちまったら、何もねえ」

クラリスはますます分からない顔をしました。

ルピネーは笑って大人の説明をしました。

「畑を耕す農民よりも馬に乗ってぶんぞり返ってる貴族様の方が偉いってことさ」

「ユークリナの盟主、ラピス国ってこと？」

「まあな。ラピスばかりじゃねえ、ユークリナみたいな豊かな土地はこの国も欲しがらさ。だが土地は耕さなければなんの実りも得られない。ユークリナの間人は一生懸命田畑を耕す。他のことをしている暇なんかねえ。そうやって得られた実りを、なんにもしねえ馬に乗った奴が何かと口実を付けてかすめ取るうってわけだ」

「ラピスもそんなことやってるの？」

「うーむ、まあ・・・」

ルピネーは困りました。

「見ようによっちゃあ、そう言えなくもねえかなあ・・・」

失敗だったなこりやと頭をかきました。

クラリスはプンプン怒りました。

「知らなかったわ。わたし、ラピスが嫌いになりそう」

「そう言わんでくれ。これも国際政治ってやつでな」

と、ルピネーはすっかり弱ってしまいました。

「さて、となると明日の狩りはすっぱかすわけにはいかねえな」  
ルピネーはそらっとぼけて言いました。

「二日酔いを理由にさぼろうと思ってたんだが、奴は必ず出るだろうし、ちよいと鎌掛けてみるか。おまえさんはどうする?」

「さあ、どうしようかしら? 考えておくわ」

クラリスはすっかりご機嫌斜めになってしまっていました。

お城は四階建てで、二階から四階が客室に当てられていましたが、ルピネーの部屋は最上階、ロットバルトの部屋は二階でした。まあだいたい客室の割り当ては偉い順に上から割り当てられているのですが、ロットバルトほどの実力者が二階というのは、彼の貴族としての位が高くないからです。しかしそこは考えられていて、階は低くとも城で一二の広くて豪華な部屋でした。

「気にいらんな」

それでもやはり気位を損ねられたのかロットバルトは不機嫌そうでした。

ロットバルトは窓から外を見ました。

城壁が邪魔で景色も何もありません。

と、そこへ上空から大きな影が降ってきました。

森の中でクラリスと白鳥たちの様子をうかがっていたあの不気味な鳥人間です。

ロットバルトは無表情に窓を開き、鳥人間を中に入れてやりました。

「少女は王女に会ったか?」

「はい」

鳥人間ははつきり人間の言葉をしゃべりました。

けれど立っている姿はなんとなくこちなく、人間の真似をしているのが不自然に感じられます。

「それで、あの少女が何者なのか、分かったか?」

「白薔薇の精カラベラの娘、クラリスと名乗っております」

「白薔薇の精?」

「またの名をカラベラス」

「あの女か！」

一瞬ロットバルトの顔がギリリと怒りを刻み、魔王と名乗る本性を見せました。

しかしすぐにロットバルトは落ち着いた貴族的な顔立ちに戻りました。

「なるほどな、あの女、人間などと結婚して子どもを産んだと聞いたが、あれがその娘か」

ロットバルトはじつと遠くを見るような目をしていましたが、やがて鳥人間に言いました。

「会見の様子を詳しく聞こうか」

鳥人間はクラリスが天馬で舞い降りてから発見されて退散するまでのことを詳しく報告しました。

この鳥人間は非常に頭が良いようです。

「見つかつて、その後の手はずはなしか？」

「意識がずっと私に向けられていました。近づけば、いろいろ差し障りがあるかと」

「それまで気づかれずにいただけで上出来か。さすが、あのバカな黒鳥どもとは違うな」

鳥人間はロットバルトに褒められてかしこまりました。

「そうか・・・、王子も王女に会ったか・・・」

「そうし向けられたわけではありませんか？」

ロットバルトはニヤリと笑いました。

「あのアホな王子と比べればこの俺がどれほど素晴らしい人間か分かるかと思つてな」

鳥人間は黙つてうなずきました。

「不服か？」

「いえ」

「この俺が人間の女などに執着するのが滑稽か？」

「いえ」

ロットバルトは小馬鹿にしたような目で鳥人間を眺め、ニヤリと

笑いました。

「俺は愛に飢えているんだよ」

ロットバルトはハハハと笑いました。

「おまえのその目といっしょだ。俺たちはバカにしながらもやはり人間に憧れているのさ」

鳥人間はうつむき、じつと床を見つめていました。人間の顔をしながら鳥のように無表情で、いったい何を思っているのかうかがうことはできません。

「面白くなってきたじゃないか」

ロットバルトは不敵に笑いました。

「おまえも、あの女に復讐するチャンスがあるかもしれないぞ。引き続き娘を見張れ。と言ってもおまえは夜しか働けんか。昼間は仕方ない黒鳥どもに見張らせるしかないな。ろくに役にたたんアホどもだが、頭が良すぎるとも考え物だからな」

ロットバルトは意味ありげに鳥人間を見つめ、鳥人間は、相変わらず無表情のままかしまっていました。

翌日、日が昇ると夜半から広がった雲も徐々に薄れ、早めの朝食を済ませる頃には澄んだ青空の広がる絶好の狩り日和となりました。貴族の旦那方は自慢の愛馬にまたがり、奥様と娘さんは馬車に乗って城の丘のふもとまで下りてきました。

森の入口に祭壇が作られ、そこに、あらかじめ捕らえられていたウサギが心臓を突かれて殺され、銀のお盆に乗せられて清らかな乙女（ロットバルトの娘オデルが務めました）によって捧げられました。

今日の狩りが大猟になりますように、今日最初の獲物を森の神に捧げる儀式です。

それを顔をしかめて見ているクラリスがいました。

狩りなんかに参加するつもりはないのですが、どういつ風の吹き回しか朝早くにジークフリート王子に起こされて無理やり連れてこ



られたのでした。

王子はなんだかひどく興奮気味でやたらと上機嫌でした。

この集まりの中にはルピネーとロットバルトもいました。

ルピネーは眠そうにあくびばかりして、ロットバルトはピンと羽根の立った帽子をかぶって今日もとてもお洒落に決めています。

儀式が済むと旦那方は三組に分かれて成果を競い合うことになりました。参加するのは三十名ほどで、ちょうど十名ずつくらいにに分かれ、ルピネーはロットバルトと同じ組に入り、ジークフリート王子も同じ組に入ろうとしましたがクラリスと女王に止められました。どうせまたるくでもないことをしでかすだろうと警戒されていることですが、意外と王子はあっさり引き下がり、その代わりにクラリスに狩りに参加するようしつこく要求したのでクラリスも仕方なく、お目付役ということで、つき合うことにしました。

出立に先立って旦那方はご夫人や娘さんから無事を祈つての口づけを送られ、クラリスはルピネーの頬にしてやりました。

ジークフリート王子には、オデールが当然のように口づけしました。

「王子、わたくしのために大きな獲物を仕留めてくださいね」

腕を王子の首に回して顔をくつつけんばかりに甘い声でおねだりするオデールは、甘い香水の香りをプンプンさせて、今日は緑色の絹のドレスで豪華に着飾っていました。

参加者たちが馬にまたがると、

「それでは、皆さま、ご幸運を」

の女王の合図で狩りはスタートしました。

三組はそれぞれ猟犬を連れた案内役に率いられた森に入っていきました。

組はさらに獲物の追い立て役と仕留め役に二組三組に分かれて、案内役に率いられてそれぞれの持ち場に向かいました。

王子とクラリスは仕留め役グループに入ってわりあい開けた場所に位置を決めて動きがあるのを待つことになりました。

王子はクラリスの愛馬ナー ज्याの純白とは対照的な真っ黒な馬に乗り、昨日ロットバルトから贈られた黒塗りの弓を持っていました。「素晴らしい馬だろう？ 君の馬みたいに空は飛ばないがね」

王子は黒馬の毛艶のいい首を撫でてやりながら自慢しました。

「豪商のハーヴェイ氏に借りたんだ。気に入ったら譲ってあげてもいいなんてね。彼も娘を僕と結婚させたがっているんだなあ」

「ハーヴェイ氏の娘さんで、どんな方だったかしら？」

「うーん、どうってことない子だったなあ」

「あっそう」

クラリスはまともに聞くのも馬鹿馬鹿しいという感じで投げやりに言いました。

「それにこの弓、見れば見るほど惚れ惚れするなあ」

王子は弓を構える真似をして大いに満足げでした。

「ねえ、君。」

この弓でロットバルトの奴を射抜いてしまったらどうだろう？」

クラリスはギョツとして王子を見ました。

王子はへらへら笑いながら、目つきは怪しい感じで鋭く光らせていました。

「だってそうだろう？」

あいつがオデット姫に呪いを掛けたんなら、さっさとあいつを倒してしまったらいいじゃないか？」

「そうはいかないわ。相手を殺したからと言って呪いが解けるとは限らない。かえって怨霊となって呪いが強くなってしまふことも考えられるわ。呪いというのはね、掛けた相手が心底負けたと認めなければ完全には解けないものなの」

それにね、とクラリスは言いました。

「もしここでロットバルトを殺したりしたら、あなた、ただの人殺しよ？ 相手はとなりの国の宰相よ。王子が宰相を殺したりしたら、ひどければ、戦争になるわよ」

クラリスは脅すように王子の目をきつく睨みました。

「分かったよ。言ってみただけだよ」

王子も本気で言ったのではないのでしょうか、やっぱりふてくされてしまいました。

クラリスは、それにその弓では絶対ロツトバルトは射てない、と教えてやるうかと思いましたが、なんだか面倒なのでやめて、

「ねえ、王子」

なだめるように訊きました。

「オデルのことはどう思ってるの？ ずいぶん親しそうだったけれど」

王子はハハンと鼻で笑いました。

「あんな子、好みじゃないね。向こうは僕のことだいぶ好きみたいだけれど、ベタベタされて鬱陶しいったらないね」

あらまとクラリスはあさつての方を見ました。

「かわいそうに。まあ、たしかに、あんまりお友達になりたいタイプでもないけれど、男の子から見たらかわいいんじゃない、ああいうの？」

「冗談じゃないよ」

王子はまた鼻で笑いました。

「僕は子どもは好きじゃないんだ。大人の完成された女性が好きなのみ」

ついでに君のこともなんとも思っていない、と王子は余計なことを言いました。

「でも、たしか同い年じゃなかったかしら？ 彼女はもう十八歳で

王子よりちょっとお姉さんよ」

「中身の問題さ。精神年齢ってやつだよ」

と王子は自分のことは棚に上げて得意になって言いました。

「へえ。中身の問題ねえ。胸はオデット王女と同じくらいあるみただけだ」

王子は真顔でまじまじクラリスを見つめて言いました。

「君、子どものくせにエッチだな」

クラリスは恥ずかしさに真っ赤になりました。

王子はニヤリと笑ってクラリスの小さな胸をじろじろ見ました。

「それとも、なにかな？ 君、オデット姫に嫉妬してるのかい？」  
大仰に驚くふりをして、

「もしかして君も僕のことが好きなのかな？」

「バ、バツカじゃないの？」

クラリスの実に女の子らしい反応に王子は声を上げて笑いました。近くに待機している仲間にオッホンと咳払いされて王子は慌てて声を潜めました。

「残念だけれどね、僕の心はオデット姫一筋と決まっちゃっていいんだ。どうやら僕が君の失恋第一号になってしまったらしいね」  
もうどうでもいいという感じでクラリスはぶすつと黙ってしまいました。

「ああ、ごめんごめん、ちよつとからかっただけだよ」

王子は笑いながら、ちよつとまじめな顔になって言いました。

「君を誘ったのは相談があつたからなんだ。」

きのうオデット姫と約束したことがあるんだ」

そう王子はオデット王女と交わした

『永遠の愛の誓いの証』  
のことを話しました。

「ふうん。まあ、たしかにそれくらいしてもらわなくちゃとてもあなたみたいなお坊ちゃんとは結婚する気にはなれないでしょうね」

クラリスは腕を組んでうんうん分かる分かると頷きました。

王子はまた何か言いたくなるのをぐつとこらえて、

「そこで僕は考えたわけだよ、

女性が愛の証として望むものはなんだろう？とね。

女性が欲しがると言ったら、そりゃあやっぱり、決まってるよねえ？」

と、王子はクラリスの顔を覗き込みましたが、クラリスはきよとんととして王子の顔を見返しました。

「やれやれ、やっぱり子どもだなあ・・・」

王子は大げさに肩をすくめ、ため息をつきました。

「女性が欲しがるものと言ったら宝石、それも、ダイヤモンドに決まっているじゃないか！」

クラリスは眉を寄せて変な顔になりました。

「それで、いいわけ？」

「他に何かある？」

王子は間違いないと自信満々です。

「もちろん、ただのダイヤモンドじゃないさ。世界一大きくて、世界一美しいダイヤモンドでなきゃ駄目さ！」

「だから、ね、王子。」

そういうことでもいいのか、って訊いてるの

「は？」

クラリスは王子の心底間の抜けた顔を見て、

「いいわよ。分かった。そういうことにしましょう」と言いました。

「たしかに世界一大きくて美しいダイヤモンドを贈られたら王女も心動かされるかもね。」

「で？ どうやって世界一のダイヤモンドを手に入れるつもりなの？」

「それなんだよ。ねえ、君」

王子は猫なで声でクラリスに言い寄りました。

「君はルピネー子爵と親しいんだろ？ 卿に頼んで僕をペテロブラーグに連れていってくれないか？ ついでにお父上の大伯爵に紹介してもらえるとありがたいんだがなあ」

「言っていていいかしら、王子？」

クラリスはニコニコして王子に言いました。

「そうやって他人任せで品物を手に入れて、それでオデット王女の心が手に入ると思ってるの？」

クラリスはものすっごく怖い目で王子を睨みました。

「そ、そんなこと言ったって・・・」

王子はクラリスの怖い目についたじたじとなりました。

「他にどうすればいい？ 僕だって馬鹿じゃない。世界一のダイヤなんてのが手に入るとは思っっちゃいない。でも、オデット姫を納得させるだけのダイヤは、こんな田舎にいたんじゃ絶対手に入らないだろ？ 世界の中心であるペテロブラーグに行って世界に名高いズベリー伯爵の紹介で手に入れたダイヤモンドなら、王女だって、喜んでもらってくれるだろう？」

王子の最後の方の言葉は小さく、自信なさそうで、クラリスもちよつと心動かされました。

『王女に喜んでもらいたいという気持ちは本当らしいわね』

クラリスは肩をすくめて言いました。

「そんなこと、ルピネーおじさんに直接頼めばいいじゃない。王子の考えが的を得たものなら、きつと手助けしてくれるわ。でもね、」

クラリスは意地悪そうに目を細めて王子を見ました。

「ラズベリー伯爵はそんな甘い人じゃありませんよ」

うっふっふっ、とクラリスは訳有りげに笑いました。

「君は、すごいなあ・・・」

王子は感心し、ちよつと途方に暮れたように言いました。

「ルピネー卿と知り合いと言うだけでもすごいのに、ずいぶん親しそうだし、おまけにラズベリー大伯爵まで知り合いなのかい？ 僕なんかとは、世界が違うんだなあ・・・」

珍しく弱気な王子をクラリスは優しい目で見つめました。

「そう思つのも無理ないわね。」

いいわ、ルピネーおじさんには私からも頼んであげる。自分の目で実際に世界を見てみるといいわ」

「ああ、ありがとう！」

王子は心から嬉しそうに言いました。

「でもそうになると、大変な旅になるわよ。行って、帰ってくるとなると、ひと月はギリギリね。かなりの強行軍になるわよ。その覚悟

はある？」

「もちろんさ！」

王子は張り切って答えました。

「でも、」

と、王子はまたいつもの癖で、

「いざとなつたらナー ज्याを貸してくれよ。ペガサスならペテロブ  
ラーグも一つ飛びだろう？」

「ダーメっ！」

クラリスはまた怖い目で王子を睨みました。

「わたしは旅の手助けなんてしてあげませんからね。王女に頼まれ  
たから付いては行きますけれど、これはあなたが自分で成し遂げな  
ければならない旅なのよ。そここのところの覚悟もしっかりなさい！」  
「わかった。わかったよ。でもさあ・・・」

「ナー ज्याは置いていきます」

「そ、そんなあ！」

「連れていけばどうせ乗せる乗せろってうるさいでしょ？ ナージ

ヤはロヴィークに帰します」

「ちえっ」

王子はうらやましそうにナー ज्याを眺め、クラリスは愛しそうに  
白馬の首を撫でてやりました。

耳元に口を寄せて、

『あなたには白鳥さんたちの守りをお願いね。相棒を付けてあげる  
から、ね？』

ナー ज्याは了解という風に軽く首を頷かせました。

ピーッ、ピーッ！

と、鋭い口笛が聞こえました。

と同時に犬の鳴き声がいくつも重なって聞こえ、駆け立て役が獲  
物をこちらに追い込んできたようです。

「さあ、今度こそ僕の本当の腕を見せてやる！」

王子は弓矢を準備して張り切つて仲間合図を送り、頷き合つてそれぞれの位置に着きました。

やがて、追われて現れたのは明るい茶の肌をしたなかなか立派な雌鹿でした。

こちらで待ちかまえていた犬たちが恐ろしい声で吠え立て、横に反れて逃げようとしたところへ王子が自慢の矢を射ち込みました。矢は見事肩の辺りに命中しましたが、雌鹿の逃げ足は鈍らず、今度は反対側に走りました。そこで待ちかまえていた仲間がさらに矢を射ち込み、逃げてはさらに射込まれ、犬たちに吠え立てられて逃げる方向は狭められていき、ズブリズブリと何本も矢を射ち込まれ、とうとう雌鹿はよろよろめき、倒れました。

「へたくそ」

クラリスはその様子を遠くからただ眺めていました。

ふと、茂みに潜む獣と目が合いました。

狐です。

この狐も駆り手の包囲に巻かれてここまで逃げてきたのでしようが、人間たちが大物に気取られている内にうまく包囲をすり抜けたのでしょうか。

狐はすつくと立ち上がると、音を立てずにサーツと森の奥へ駆けていきました。

「頭のいい奴」

クラリスは感心しながら、なぜか不吉な思いがしました。

クラリスは思いました、もし今弓矢を持っていたら、どうしたらどうするか？

「射たないわね」

特に理由もなく生き物の命を奪いたくはありませんでしたし、結果どうなるかと、それはこの自然の中における運命なのだろうと、そう思ったのです。



## 第7章 狩りその2

ルピネーとロットバルトも別の場所で仕留め手としてのんびり獲物の狩り立てられてくるのを待っていました。

ロットバルトはスラリとした真つ黒な馬にまたがっていました。真つ黒な肌が木漏れ日を受けるとルビーのように赤く輝きました。

ルピネーも馬に乗っていました。くすんだ渋皮色と灰色のまだらの肌の、やたらと足の太くて短い牛のようにまるまる太った、お世辞にもかっこいいとは言えない馬でした。

「この組の獲物はどうやら牡牛のようですよ」

ロットバルトがにこやかに情報を囁きました。

「なんでえ、狩りは始まったばかりじゃねえか、どうして分かるんだ？」

「ルービン卿に教えていただきました。狩りで獲物がいなくてはずまらないですからな」

「なんだ、仕込みかい？」

「こつという狩りでは常識ですな。地元の手練れの狩人たちが一週間も前から今日の獲物たちをうまい具合にこの辺りに集めておるらしいです。中にはあらかじめ捕らえておいたものを放してもいるようですが。ま、客人のおもてなしのお遊びです、素直に喜んであげようじゃありませんか」

「あほらし」

「いや、馬鹿にしたものではありませんよ、獲物たちは必死ですからな、逆に襲いかかってくる猛者がいないとも限りませんよ」

「なるほど、そりゃそうだ。となるとこつちも命がけだな。狩りの最中思わぬ事故で命を落とした貴人の話というのものもあるからな」

「さようですな。獲物を狙って放った矢がたまたま当たった事故でしたかな」

「意図的な事故だったって噂もあったがな」

「まったく、人の口というのは悪い噂ほど好むものですか」

ロットバルトは物わかりの良さそうな顔で頷いています。

「ところでな、昨日カラベラが狩りの名人だつてことを話したる？ 見つけたそうだが、あなたの大事な捜しものを」

「ほお？ それはなんですか？」

「あなたの大事なご主人様、オデット王女さ」

「ほお！ それは素晴らしい！ いったいどちらにおいでだったのかな？」

「湖で泳いでいたそうだが」

「はて？ 水浴びの季節にはちと遅いような気がします？」

「いつまでしらばつくれやがる」

ルピネーに睨まれてロットバルトはニヤリと白い歯を見せました。「それではどうぞオデット王女をお連れ願えませんか？ こちらが王女様であらせられますと皆の前にね」

ロットバルトは余裕たつぷりに微笑みました。

ルピネーは苦々しげに口をひん曲げて目を細めました。

「てめえはやつぱり悪人だな」

「何をおっしゃる」

ロットバルトは口許に微笑みを浮かべたまま目をギラリと攻撃的に光らせました。

「わたしはせいぜい平和的に事を進めているつもりですよ。」

「ご覧なさいな、あのアホ面どもを」

と、ロットバルトは離れたところで軽く談笑している紳士たちを顎で指しました。

「貴族の家に生まれたと言うだけでなんの苦労もなしに贅沢三昧の暮らしを楽しんでいる。貴族が何様なものか、本を正せばたいがい盗人の頭領みたいなものだろう。てめえらに都合のいい身分なんぞというものを作つててめえらに都合のいい法律を勝手に作つて利権を食い漁っている。あんなクソどもにいったいなんの価値がある？」

端整な顔立ちからは考えられない汚い言葉を吐くロットバルトを、

ルピネーはなんとなく痛ましい思いで見ました。

「それで、前国王と王妃を殺したのか？」

「あれは不幸な事故ですよ。狩りの最中の事故同様にね」

「証拠はねえというわけか」

「言いがかりですな」

「前国王は悪い人間ではなかったようだが？」

「悪い人間でなくても、王たる者、無能であるというだけで十分罪なのですよ」

「それで、おまえが王になって世直しでもするつもりか？」

「その通り。私が国王になればユークリナは良い国になりますよ。

まずは無能な貴族どもを一人残らず国外追放にしましょう。土地はすべて国、つまり私が管理し、私の選んだ優秀な部下によって具体的な仕事は行われる。けっして不正は許さない。けっして搾取は許さない。国民はただ一人、王たるこの私の為だけに働けばよい。私ももちろん搾取はしない。ただ一国の王として恥ずかしくない程度の暮らしが出来ればそれでよい。そう、祭りは国を挙げて盛大なものにしよう。すべてとは言わないが順番に国民たちを宮殿に招待しよう。みな国に誇りを持つようになる。王たる私を讃え、日々の暮らしを楽しみ、幸福な生涯を送るようになるだろう！」

ロットバルトは自分の王国の輝かしい未来を思っつとっとり微笑みました。

「そんなのはたんなる独裁国家じゃねえか」

「それが、何か問題ですか？」

「ああ。まず、俺はあんたを信じられねえ。あんたの選ぶ優秀な部下つても信じられねえ。言っちゃあなんだが、ユークリナの国民も信じられねえ。それに、今の状況も信じられねえ」

「はて、今の状況とは？」

「貴族どもがおとなしく言うことを聞くとは思えねえ。ユークリナ国内はもちろん、周りの国の貴族どももな」

「たとえば、盟主ラピスの、ですか？」

「ま、そうだろうな」

ロットバルトは、フム、と考えました。

ルピネーは重ねて言いました。

「もしこのままオデット王女が現れなければどうなると思う？」

「どうなりますかな？」

「ラピスが代わりの王を送り込むだろうな」

「オデット王女の遠い親戚の誰それとかいう訳のわからん貴族殿をですか？」

「そういうことだな」

「で、特務外交官であるあなたはそれを承知するのですかな？」

「そうせざるをえんだろうな」

「これは驚きだ、ここに私という真に国王にふさわしい優秀な人材がいるのに、ユークリナという国の何も分からん馬鹿貴族を王にするというのですかな？」

「てめえで言うなよ」

「いいや、言わせていただきますとも。それで国民は幸せですか？ 外から来た王様など、どうせラピスの収税役人のようなものでしょう。あなたほどの方が、それを良しとするのですかな？」

「仕方あるまい。だからだ、夢みたいなのはあきらめて、おとなしくオデット王女を元に戻しやがれ」

ルピネーは珍しく真剣な目でロットバルトを見つめました。

ロットバルトはそんなルピネーを目を細めて眺めながら、また口許をニヤリと笑わせました。

「それではどうしてもオデット王女には私の妻になることを承知してもらわねばなりませんな、ユークリナの国民のためにもね」

「それだから俺はおまえを信じられねえんだ。口ではきれいな事を並べ立てて、やってることは暴力と脅迫じゃねえか」

「結果それで多くの国民が幸せになれるのなら、致し方ないでしょう」

「目的のためには手段を選ばずと言う訳か」

「ま、なんとでも」

「それでも王女が結婚を拒んだらどうする？」

「新しい王にはまた事故で亡くなってもらいましょう」

「同じ手が通用するか。それを口実に、ラピスは直接ユークリナを支配するようになるぜ」

「させるかよ、人間などに」

吐き出すように言っつて、ロットバルトは馬鹿にしたような笑いを浮かべました。

「私は出来るだけ平和的に事を進めたいと願っていますが、邪魔だとするなら、排除するまでです」

「ラピス相手に戦争する気か？ 勝てるわけねえだろ」

「私の力を見くびってもらっては困りますな。その気になればラピスを滅ぼすなど造作もないことですよ」

「とてもそうは思えねえな」

ルピネーは元々ロットバルトをただ者ではないと睨んでいましたが、魔力は本物としても、ラピスを滅ぼすなどさすがにただの妄想狂としか思えませんでした。

「ラピスを滅ぼすのに何も武力を用いる必要はない。例えば一年中ありとあらゆる自然災害に襲われたと思いなさい、大国ラピスが一年もちこたえたとしても二年三年と続くかどうか？」

「おまえにそれだけのことがやれると言うのか？」

「ええ。私はなにしろ、魔王ですから」

ロットバルトは余裕たつぷりで、まさかと思いつつルピネーは額からじつとり脂汗が浮いてくるのを禁じ得ませんでした。

ロットバルトはふと首を傾げました。

「あなた先ほど面白いことをおっしゃいましたな、

自分はユークリナの国民も信じない、と」

「ああ」

「ほう、これは面白い。何故ですか？」

「俺は人間は好きだ。だが信じねえ。貴族は平民の悪口を言っつ、平

民は貴族の悪口を言う。どっちも立場が違っただけで同じ人間だ。逆の立場ならどうせ同じ事をするに決まってる。おまえさん流に言うなら、人間なんて貴族も平民もみんな同じクソだ」

「ハッハッハッハッ」

ロットバルトは大喜びで笑いました。

「素晴らしい！ あなたは私がこれまで出会った中で最高の人間だ。どうです、私と手を組みませんか？ あなたと私が組めばユークリナどころかラピスを支配することも難しくはない」

「お断りだね。俺はあんたを信じねえと言っただろ」

「残念ですなあ。」

ところで、私はあなたよりよほど人間を信頼して愛している。私はさっき言ったようなやり方でラピスを攻める気はない。無駄に命が失われますからな。戦争なら兵士を殺すだけでいいが、国を滅ぼすとなると政治とは無関係の女ごともまで殺すことになりますからな。私はそういうことは好まない。昨夜のカラベラ嬢の話のように私も必要なら命を奪うことも躊躇しないが、命の尊厳は大切に思っているつもりですのぞな」

ロットバルトは値踏みするようにルピネーを眺めていましたが、やがて真顔になり言いました。

「私と賭をしませんか？」

私はあくまでオデット王女との結婚を王になるための手段とする。猶予はひと月、それまでユークリナを好きに動かすのは控えましょう。もし私が王女との結婚に失敗したら、その時はすべてをあなたにお任せして私はユークリナを去りましょう。その代わり、それまでのひと月間、あなたの権限でラピスの干渉は退けること。いかがですか？」

「あんたと王女の結婚が失敗したら、王女はどうなる？」

「かわいそうですが、その時は一生白鳥の姿でいることになる」

「そいつは賭の賞品にはならないのか？」

「これは譲れません。解けることを前提とした呪いなど、意味あ

りませんからな。万が一、呪いが解けるようなことがあれば、それはあなたでも私でもない、王女の勝ちと言うことです」

ルピネーは黙って考えましたが、やがて「いいだろう」と答えました。

「元々俺の問題じゃあねえ。あくまで王女との関係で決着を付けようと言うならそれでいいだろう。ラピスの方は、ひと月くらいなんともなるだろう。ただし、俺は王女の味方に付くぜ。クラ・・じやない、カラベラが王女の味方に付くと決めたからな」

ロットバルトはおかしそうに笑いました。

「クラリス・ロヴィーナ。カラベラスの娘だそうですね？」

「なんでえ、知ってたのか」

「まさかとは思ってましたがね。」

しかし、ずいぶん親しくしておいでのようなのだが、あの母親にはあなたは恨みがあるのではありませんかな？」

ルピネーが故郷ラピスを遠く離れたカザリンで育ったのは黒魔女カラベラスの計略によるものだったのです。

「俺は別に恨んじやいねえ。俺はどこでだって生きていける人間なんでな。むしろ面白い人生をプレゼントしてもらったと感謝してるくらいだ。恨みに思ってるのは、父上殿と母上殿だな」

ルピネーは思い出して困ったように笑いました。

ロットバルトは上機嫌で、すっかりリラックスしたように馬の背でくつろぎました。

「つくづく面白い人だ、あなたは。まったく、人間にしておくのが惜しいですな」

「俺もおまえさんがもう少し謙虚な奴だったらと思うよ。確かにおまえさんと組めば面白いことが出来そうだ」

「まったく、残念ですな」

「ああ、まったくな」

ルピネーもほとんど頑丈なだけが取り柄のような馬の背で頭に腕を組んでのんびり木々の向こうの青空を眺めました。

甲高い口笛が鳴り響き、犬たちの吠える声が聞こえてきました。

「お、いよいよお出ましか」

ピピッピ、ピピッピ、

短く鋭い口笛が二度響き渡りました。

案内役の狩人が緊張した面持ちで告げました。

「獲物は二頭。どちらも大物で、大変危険です。旦那方、十分気をつけてくださいまし」

ブモオーツ……

と、野太い獣の吠える声がこだましました。

と、目を凝らす前方の木々の間から真っ黒な牡牛の突進してくる姿が見えました。

荒い息をし、全身の筋肉を躍動させて地響き立ててものすごい勢いで走ってきます。目は血走り、開いた口から涎を垂れ流し、凶太い二本の角を怒らせています。

ルピネーたちと別の紳士たちはその恐ろしい姿を見てすっかり怖じ気づき、馬の手綱を引くと急いで逃げ始めました。

狩人が犬を放ちました。

犬たちは勇敢に猛然と牡牛に襲いかかっていきましたが、怒り狂った巨大な角にあえなく跳ね飛ばされてしまいました。

「駄目だ、旦那方も逃げなせえ！」

プロの狩人も獲物のあまりの怒気に恐れをなし、退散を決めました。

「どうするよ？」

ルピネーが決めかねてロットバルトに訊きました。

「逃げますか。ここで魔力を使うのもまずいのですのでな」

ロットバルトも逃げを決め、手綱を引きました。

ルピネーも続こうとしましたが、何しろ馬が馬です、のろのろしてる間にすぐそこに猛り狂った牡牛が突進してきました。

「危ねえ！」

ルピネーはぶつかられるのを覚悟して身構えました。



目の前に巨大な真つ黒な顔が迫ってきたかと思うと、  
「ブモオオー！」

牡牛はぶつかる直前地面を蹴って飛び上がり、なんと馬に乗った大男のルピネーの頭上を飛び越えていきました。

牡牛は地面に着地すると、そのままの勢いで猛然と走っていつてしまいました。

馬から転げ落ち、どっと脂汗をにじませたルピネーが見ると、ロツトバルトは少し離れたところでこちらを見て悠然と笑っていました。

「おまえさんの仕業かい。助けてもらってありがてえが、いいのかい、俺を助けちまって？」

「なあに。英雄ルピネーをこんなことで死なすのは惜しいですのにな」

バキバキツと木の碎ける音が響きロツトバルトの横の茂みからイノシシが飛び出してきました。これまた牛かと思まごうほどの黒くて大きなイノシシです。

「危ねえ！」

ルピネーがまたも叫びました。

イノシシは巨大な岩石が転げるようにロツトバルトの乗馬目がけて突進していきます。

さしものロツトバルトも驚愕に顔が歪みました。

ルピネーはとっさに手元の岩をむんずと掴んで地面から引っこ抜きました。

「食らえ！」

ものすごい剛速球が大イノシシの側頭部を直撃し、イノシシはものすごい勢いでひっくり返り、ゴロゴロゴロと転がって、大木に激突するとそれきり動きませんでした。

「ヒヒーン」

ロツトバルトの黒馬が肌を赤く光らせてグルグル踊っています。その背にロツトバルトの姿はありません。

「いやいや、これは見事」

上の方から声がして見上げると、ロットバルトが木の上からスルリと降りてきました。

「どうどうどうと馬を落ち着かせ、

「石つぶてで・・・つぶてというにはずいぶん大きいが、あの大イノシシを仕留めるとは、つくづく人間離れたお方だ」

「これで貸し借りなしだな」

得意そうなるルピネーにロットバルトはきよとんとした顔をして、

「あなたが助けたのは馬の命だ、私の命ではない」

と言いながらも笑って、

「まあよいでしょう。お礼を申し上げますよ、ルピネー卿。あなたは私の馬の命の恩人だ、ありがとう」

「やな野郎だ」

と言いながらルピネーも豪快に笑いました。

結局今回の狩猟大会で一番の大物はルピネーの仕留めた大イノシシでした。その他には野牛や鹿やイタチなどの獲物がありました。

夕刻、狩りに出ていた者たちは森の入り口の広場に集まってお酒のグラス片手に獲物の品評をし合い、ご婦人方に狩りの様子を話して聞かせたりしました。

ジークフリート王子は雌鹿を仕留めた後、今度は牡鹿とアライグマを仕留め、今、もう得意の絶頂になってお嬢さん方に手柄話を披露していました。

クラリスはあの後もう馬鹿らしくなって帰ってきましたのでその後のことは知りませんでした。

「よお、クラリス、あんまり機嫌良さそうじゃないな」

さっそくお酒に酔って真っ赤になったルピネーが声をかけてきました。

クラリスは横目でチラリと見て、

「おじさまは大物を仕留めてずいぶんご機嫌のようね」

「まあな、正直言つてやつぱり気持ちいいわな」

「ロットバルトともずいぶん親交を深めたご様子ね」

こちらに帰ってきてからもルピネーとロットバルトはグラス片手に仲良さそうにおしゃべりしていました。

「まあな、正直言つて、俺はあいつのことは嫌いじゃあねえ」

と、ルピネーはちよつと困つた顔をして正直に言いました。

「いつそ王女と結婚させてあいつをユークリナの王にしてもいいんじゃないか、とも思っている」

クラリスはさすがに目を丸くしてまじまじとルピネーの顔を見つめました。口元をへらへらさせながらも、ルピネーの目は案外まじめでした。

ルピネーは森でロットバルトと話したいたいのところをクラリスに話して聞かせました。

「というわけでな、俺はあいつがどんな王様になるのか見てみたい気がするのさ」

「どうせそんなの口先だけよ。王様になってみんな自分の思いのままにしたいだけよ」

「うん、まあ、そうなんだろうけれどよ・・・」

と、ルピネーは煮え切らない顔をしました。

クラリスはそんなルピネーに不満顔ながら今度は自分と王子の約束について話しました。

王子をラピスの首都ペテロブラーグに連れていくという話です。

「なるほど、ペテロブラーグにねえ」

ルピネーは顎をさすりながら考えました。

「永遠の愛の証にダイヤモンドというのはちと単純すぎる気もするが、ま、いいだろう。この際だ、あの王子も外の世界を見てみるといいわ」

どうせ俺も野暮用があるしなあ・・・とルピネーは目を反らしてせいぜいさりげなく言いました。

「なに？」

「いや、別に。」

それより、そうとなれば明日にも出発しなけりゃひと月で行って帰ってくるなんてとても間に合わねえぜ。ここからペテロブラーグまでふつうは三十日片道だけでかかっちゃう」

「それじゃ間に合わないじゃない？」

「ふつうじゃない方法があるんだよ。金が、かかるがな」

「どうするの？」

「まだないしよだ」

ルピネーはニイツと笑い、クラリスはどうするのだろうとワクワクしました。

「世の中金がありゃあたいていのことはできるもんだ。」

ところで王子は本当にペテロブラーグになんて行けるのか？ 旅費もそうだし、ダイヤを手に入れるつもりなんだろう？ 金はあるのか？

「女王様におねだりするんだって」

「まあ、それしかあるめえな。だが、あの締めり屋の女王がそんな大金だしてくれるものかねえ？」

「ねえ？」

二人はそろってまだまだ自慢話に花を咲かせている王子を見やりました。

王子の周りには花嫁候補のお嬢さん方がたくさん集まっていますが、その中にオデルの姿はありませんでした。

オデルはみんなから離れて一人ぼつんと木の下にたたずんでいました。ずいぶん無理して王子の方を見ないようにしていますが、ときどきどうしても気になってちらりちらりと横目で覗いています。クラリスの視線に気づいてルピネーもオデルの方を見ました。

「オデルはどうしたんだ？ 王子にべったりするのはやめたのか？」

「そだね、すねてるみたい」

クラリスは一人狩りから帰ってきて、ここでご婦人方のおしゃべ

りを眺めていたのですが、前からそうなのか昨日からの一日でそうなったのか、いくつかの派閥ができあがって、その派閥の中でしかおしゃべりをしないような雰囲気ができあがっているようでした。

娘たちの方はもう少し無邪気でみんなが集まってまんべんなくおしゃべりしている様子でしたが、実は、娘たちの方が陰湿で、こちらでは両極端な二つのグループに分かれて、すなわち花嫁候補の有力者、となりの国の宰相の娘オデルと豪商の娘マーゴの二つのグループに分かれて勢力争いを繰り広げているのです。地元の有力量者マーゴの方が最初から優勢のようでしたが、午後のお茶の時間になると勝敗は明らかで、みんなマーゴの方に付いてしまい、オデルは独りぼっちになってしまっていました。親の方は後々のことも考えてあからさまに敵味方に分かれて対立するようなこともありませんでしたが、子供たちにとっては一種のゲームでしたから、はっきり結果を出してしまいました。

王子が帰ってくると勝者のマーゴ一派は結束して王子を取り囲み、オデルが近づけないようにブロックしているのです。

「なるほどね」

説明を聞いてルピネーがいやいな顔をしました。

「まったく人間てのはどいつもこいつも徒党を組みたがるものだな。あんなかわいい顔をして、みんな心の中に小悪魔を飼ってやがる」  
お嬢さんたちにしてみればあくまでゲームで、この場限りのものでしょうが、負けたオデルの恨みはいつまでも尾を引きそうです。  
オデルは平気そうなふりをしていましたが、クラリスにはずいぶん無理して強がっているように見えました。

本当は木の陰に回って泣き出したいのではないだろうか、と。

「わたし、ちよっど行ってくる」

クラリスはまっすぐオデルのところに行きました。

クラリスが歩いてくるのに気づくとオデルはふいとよそを向きましたが、ずんずん近づいてくるクラリスに面食らって

「なによお？」

と睨みました。

クラリスはニッコリ笑って「ハイ」と後ろ手から真っ白なバラの花束を差し出しました。

オデールはびっくりして「まあ！」という顔をしましたが、ニコニコしているクラリスの顔を見るとフンと横を向いてしまいました。「鬱陶しいわね、あっち行きなさいよ！」

でも、いつぱいの花束を持ったクラリスが泣きそうな顔をするとう慌てて、

「いいわよ、よこしなさいよ。私はね赤いバラが好きなの。どうぞせなら真っ赤なバラを出しなさいよ」

まったくこんなもので私が喜ぶと思ってるの？ やっぱり子どもね、などとブツブツ言いながら、バラの花束を持ったオデールはついつい頬がゆるんでくるのを頑張ってごまかしていました。

クラリスはまたニコニコしてオデールのとなりに木に寄りかかりながら言いました。

「ねえ、訊きたいことがあるんだけど？」

「なによ？」

「ジークフリート王子のいったどこが好きなの？」

オデールは大きな目をまん丸にして頬をカァツと真っ赤にしました。

「バ、バカねえ、なんてことを訊くのよ」

とうつむきながらバラの花に顔を埋めて、

「だって・・・、かつこいいじゃない」

と小さな声で言いました。

それを聞いてクラリスは『ハア？』と口を半開きにしました。

クラリスは眉をしかめて王子を眺めました。

あれのどこがかっこいいんだろう？

と、クラリスにはさっぱり分かりませんでした。

「あ、分かった！」

オデールがガバツと顔を上げてクラリスを睨み付けました。

「あんたやっぱり王子が好きなんでしょう？ だから私に近づいて様子を探るつもりなのね？」

クラリスはため息をつきました。

「あのねオデール。世の中は広いのよ。言っただけで、王子くらいのかっこいい人なんて、いくらでも、いるものよ」

「だったら私の王子様に手を出さないで！ あんたは広い世界で他の王子様を見つけないさい」

クラリスはなんだか面倒くさくなってしまって、王子なんてオデールと結婚してしまえばいいんだわ、と思ったりもしましたが、そうなるとおデット王女の呪いが解けなくなってしまいます。

「言いつらいんだけど・・・」

クラリスはオデールの顔を申し訳なさそうに覗き込みました。

「王子には他に好きな人がいるのよ。もちろん私じゃなくって、あなたでもなくて・・・」

「そんなはずないわ！」

オデールはキツとクラリスを睨んで言いました。

「ジークフリート王子は私と結婚するのよ！ だって、だって・・・」

オデールは急に心細そうに視線を逸らしました。

「お父様が王子はきつと私を花嫁に選ぶっておっしゃったんだもの・・・」

クラリスはロットバルトに腹を立てました。大事な娘を利用して国を乗っ取るうなんて、なんてひどい父親でしょう。

「そうよ、そうだわ！」

オデールが自信を取り戻して言いました。

「この私が好意を寄せてやっているのよ、この私を振る男なんてこの世にいるわけがないわ！」

オーツホツホツ、と、オデールは片手を口に当てて高笑いしました。

何事かとみんなに注目されてクラリスはひどく恥ずかしい思いをしました。オデールの王子に負けにくいぐらいの脳天気さには救わ

れた気がしました。

クラリスは思い切って言ってみました。

「王子が好きな人を教えてあげましようか？」

オデルの高笑いが止まり、真顔になってクラリスを見つめました。

「だれ？」

「あなたのお父さんが再婚を考えているのは知ってる？」

「ええ、それとなく・・・」

「お父さんがプロポーズした相手が、王子の思い人よ」

「なんですつてえ!？」

オデルの顔に猛然と怒りがわいてきました。

あんまり怖い顔になったのでクラリスは失敗したかなと思いましたが。

「誰よ、だれなのよっ!」

オデルは掴みかからんばかりの勢いでクラリスを問い詰めました。

「私の口からは言えないわ。お父さんに訊くのね」

オデルはギラギラした目でクラリスを睨んでいましたが、顔を上げて父親の姿を探すと、ズンズン歩いていきました。

ルピネーが来ました。

「おいおい、何か余計なことを言ったんじゃないか？」

「言っちゃったかも」

クラリスはペロリと舌を出しました。

「でもねえ、ルピネーおじさんじゃないけれど、王子の結婚相手に関してはおもオデルの方に肩入れしたくなっちゃうわね・・・」

「そうだろう？」

二人は揃って腕を組んで「うーん・・・」とうなりました。



## 第8章 旅立ち

白鳥の三人の子どもたち、ジエニー、キャシー、ドミニクは明るい光のあふれる見たこともない美しい森の中にいました。

森の木はすべて白いバラの花を咲かせていました。

幹のものすごく太い巨木がバラバラと生えて天を覆う広い枝葉を広げ、その屋根の下に中くらいから背丈くらいの小さな木まで、親子のように仲良く生え、みんなきれいな生き生きした白バラを咲かせています。

「白バラの森だわ・・・」

三人は感嘆して思わず声を出し、そのお互いの声にはっとして顔を見合わせました。

「わたしたち、人の姿に戻っている」

「でもこれはきつと夢だわ、だってこの世にこんな美しい森があるわけないもの」

「でも、これは誰の夢？ わたしのかしら？ それともあなた？」

三人が揃って不思議がつっていると、向こうの方から背の高いのと低いのと、二人の女の人歩いてきました。

「あ、あれ！」

三人は歓声を上げて二人に向かって駆け出しました。

その二人はオデット姫とクラリスでした。

三人はオデット姫に抱きついて、オデット姫は三人をぎゅうっと抱きしめてあげました。

「ねえ姫様、これはいったい誰の夢なの？」

「誰の夢？」

「だって、こんなことが本当のわけないもの」

賢そうな顔でそう言う年長さんのジエニーは、笑いながらちよつと悲しそうでした。

「ここは私の夢の中よ」

クラリスが教えてあげました。

「私がみんなを私の夢にご招待したの」

「それじゃあわたしたちみんなが同じ夢を見ているの?」

「そうよ」

「それじゃあわたしは夢の中だけの私じゃなくって、夢の中で本当にみんなと会っているのね?」

「ええ、そうよ。ほら、湖で夢の中でも遊べるからって言ったでしょ?」

子どもたちは嬉しくって、なおいつそうオデット姫にぎゅうっと抱きつきました。

「これは私の夢だけど、この場所は本当にあるのよ」

「本当? どこにあるの?」

「私の国、ロヴィークにある白バラの森。私のお母さんとお父さんの森。ほら、あそこ」

クラリスの指さす先、森で一番の大木の、まっすぐ横に伸びた太い枝に、白い人影が二つ、腰掛けてこちらを見ていました。

「私のお母さん、カラベラと、お父さん、アイリス」

女の人の方が手を振って挨拶し、オデット姫は腰を折ってお辞儀し、三人の子どもたちも習ってお辞儀しました。

カラベラが両手を広げて差し伸べました。

すると、三人の子どもたちの背中に白い蝶々の羽が生えて、パタパタ、三人は空中に浮き上がりました。

「あらあら、あなたたち妖精にされてしまったわよ」

クラリスが笑って言って、三人は大喜びで辺りをパタパタ飛び回り始めました。

クラリスはその様子を楽しそうに眺めて、オデット王女に言いました。

「三人は遊ばせておいて、私たちはちょっとお話ししましょうか」  
.....

クラリスはベッドから起きあがりました。

歩いていって窓を開けると外に向かつて念を送りました。するとすぐに大きな翼を広げたナージャが窓の下に来てくれました。

クラリスはナージャにまたがると、森の湖に向かわせました。

湖に近づくと、王子がそうするように少し離れたところにナージャを降りさせ、そっと湖に近づきました。

すると岸に美しい白鳥が来て待っていました。

オデット王女です。

後ろで一羽おそらく近衛女官のレスリーが控えています。

月は今夜も美しい銀色の光を降らせていましたが、やはり満月でなくてはロットバルトの呪いを打ち消すことは出来ないようです。

クラリスは王女に顔を寄せ、囁きました。

「それではあの件、よろしいですか？」

王女はうなずき、クラリスもうなずくと、二人は額をくつつけてしばらくそうしていて、やがて離れました。

「それでは、どうぞよろしくお願いします」

クラリスが言うと、オデット王女の白鳥はうなずき、レスリーの待つみんなの眠っているところへ泳いでいきました。

翌朝。

ルピネーとクラリスが約束の七時に馬車置き場に来ると、ジークフリート王子はもう来ていて、腰に手を当てて

「遅い！」

と大いばりで言いました。

別に遅れてもいないのですが、大張り切りの王子に二人は苦笑して「はいはい」と謝りました。

王子といっしょにルービン卿もいました。

「出来ましたら本日もお発ちのお客様方のご挨拶を済ませてからご出立していただきたかったですか・・・」

昨日でお祭りが終わってお城のお客たちも朝からだいたいお昼過ぎまでにはみな帰途につく予定のようです。

「準備の方も何しろ急なことでしたもので満足な物を取り揃えることが出来ませんでしたし・・・」

と言いながら王子のために大きなトランクを二つ用意していました。

しきりに困った困ったと言いながら、なんだかルービン卿も嬉しそうで、きつと子どもか孫を外国に遊学にでも出す気分なのでしよう。

ちなみにルービン卿はもうけっこうなお年でしたがずっと独身でした。

「挨拶もろくにしないで悪いが、なにしろ急ぎの旅なんでね、女王には昨夜のうちに挨拶しておいたが、他のお客たちには卿の方からよろしく言っておいてください」

ルピネーは握手してていねいにお願いました。

ルピネーの馬車は特になんの装飾もない黒塗りの大きな車体で、通常四頭立てのところを、なんと六頭立てに増やしていました。

「超特急仕立てだ。なにしろ今日のうちにカカッサスの麓に到着する予定なんでな」

「カカッサス!？」

王子がびっくり叫んで、

「おお、ルピネー卿、なにとぞ無理はなさらずに」

ルービン卿も顔を青くして嘆願しました。

「大丈夫。スピードは出すが、俺は安全第一なんでね」

ルピネーはさっさと御者台に上って二人を促しました。

お供はなしで、三人だけの旅行のようです。

「それじゃあ、ルービン卿。行ってくるよ」

「ええ、行ってらっしゃい。しかしくれぐれもお気を付けて良い旅を」

クラリスも窓から手を振って、ルービン卿一人に見送られてルピ

ネーの操縦で馬車は動き出しました。

馬車は高い石積み壁の狭い通路をぐるりとお城を一周して城門に到着しました。

「通してくれよ守衛諸君。この城の王子様の旅立ちだ！」

ルピネーが張り切つて言い、王子は窓から敬礼する守衛たちに挨拶を返しました。

城門をくぐると、朝の白い日の光が目にもぶしくさしています。

冷たい空気の中、馬たちは体をほぐすように楽な動きで坂道を下つていきます。

王子は窓から森を見下ろし、その先の村を思い、振り返つて朝日を浴びて輝く城の高い城壁を見上げ、毎日見ている風景なのに何とも感慨深い思いが胸にあふれてきました。

王子の、生まれて初めての旅の始まりなのです。

馬車は城の坂道を下りると、北へ向かう道に入りました。

王子は森を通つてさしている横向きの白く煙る光の筋の重なりを眺めながら、ふと、となりに座るクラリスに尋ねました。

「ルピネー卿は馬車の操縦は得意なのかい？ たしか馬に乗るのは苦手じゃなかったか？」

「馬車の操縦は好きみたい。見ている人がいないと御者を客席に座らせて自分で手綱を握つてるもの。陸にいと船に乗れなくてつまらないんですって」

「船かあ。船にも乗つてみたいなあ。僕はまだ海も見たことがないんだあ」

王子はじろりとクラリスを見ました。クラリスは驚いてなによと見つめ返しました。

「いや、また僕のことを馬鹿にするんじゃないかと思ってね。どうせ君は海にだつて行つてるんだらう？」

「ええ、ルピネーおじさまのご自慢の帆船に乗せてもらったわ。でも、」

と、眉をしかめて、

「船酔いでたいへんだったわ。青くなつてずーっと船室で寝ていたわ」

「それは見たかったなあ。じゃあ君、海は嫌いなんだ？」

「いいえ。小型のボートを降ろしてもらったの。風を操って自分で操縦するのはとっても楽しかったわ」

「なんだい、また魔法か。ずるいなあ」

「そう言いながら王子はニコニコしていました。」

「そうさ、僕だっていつかは海だつて行ってやる。そうだよユークリナはノール海に面しているじゃないか！ オデット姫と結婚したら僕はユークリナの王だ！ 海だつて僕のものだ！」

「海は誰のものでもないけれど」

とクラリスは苦笑して、

「そうなりたかつたらまずはこの旅を成功させなくちゃ。」

「そうだわ、よく女王様が王子の旅行を許したわね？」

「ああ、それはだね」

王子は得意になって言いました。

「花嫁にするお姫様が決まったからぜひ高貴な彼女にふさわしいすばらしい贈り物をしたい。そのためにペテロブラーグに行かせてくださいと頼んだのさ。それとルピネー卿の名前を出したら一発さ」

本当は女王様はそれほど甘くありませんでした。

昨夜部屋を尋ねてきてその話をした王子に、相手はどこ誰かとしつこく訊いたので。最初は何かごまかそうとした王子ですが、あんまりしつこいので、つい、となりの国の高貴な身分のお姫様だと言ってしまうました。女王はなお詮索しましたが、これ以上なく身元の確かな人で、母上もよく知っておいではずの方だからと、後はひと月後の誕生会で必ず発表するからそれまで待つてくれと頭を下げてお願いして、なんとか許してもらったのでした。

女王様はとなりの国の高貴なお姫様というのをロットバルトの娘オデールと思ひ込んでいるようでした。

王子も特にそれを否定しませんでした。

オデールは権力者宰相ロットバルトの娘ではありますが、特に高貴な出でもお姫様でもありませんでした。しかし他に思い当たる若い娘さんもいませんでしたし、夢見がちの王子のことですからそういう物語を頭の中で思い描いているのだらうとさしてこだわりませんでした。

オデールなら花嫁として申し分ありませんでしたし、旅にルピネー卿も同行するとなれば卿のお墨付きを得たも同然です。

こうして女王様はすっかり納得し、満足し、大いに喜んで王家の蓄えから金貨の小袋を三つも渡してくれたのでした。

ニヤニヤ黙っている王子の良からぬ考えを思っただけクラリスはじつと白い目で見ていましたが、

「そつえば、オデールは見送りに来なかつたわね」と言つたので王子はギクリと跳ね上がりました。

「彼女だけは見送りに来ると思つただけねど・・・」

「朝早くだったからねえ。きつとまだ眠っているのさ」

クラリスはうーんと考えました。

「知らなかつたのかしら、王子が旅に出ることを」

「ああ、そうそう、きつとそうだよ」

それもたぶん嘘でした。

女王様の部屋を訪ねて出てきたところ、廊下でばったりロットバルトと出会つたのです。

誰もいない廊下で一対一で向かい合つて、王子はドキンとしましたが、思い切つてツカツカ歩いていくと面と向かつて言つてやりました。

「ロットバルトさん。オデット姫は僕のものです。けっしてあなたには渡しませんよ」

王子は心臓が飛び出るほどドキドキ高鳴っていました。ロット

バルトは温和な笑顔を浮かべたまままるで幼い子どもを見るようにしていました。

「王子。あなたの勇気と騎士道精神は買いますが、姫はお譲りできません」

ロットバルトはあっさりオデット姫の今を知るところを認めました。「何故ならば、あなたには私の娘オデールと結婚していただきたいのです」

ロットバルトは王子にとっても魔王とは思えないニコニコ優しい笑顔を向けて、胸の内ポケットからピカピカ光る金のメダルを取り出しました。ふつうの金貨の三倍も大きさと厚みのある金メダルです。「ルピネー卿に聞きましたぞ、はるばるペテロブラーグまで花嫁に贈る世界一のダイヤモンドを買い求めに行くとか」

人に言われると「世界一のダイヤモンド」というのがいかにも子どもの夢のようで気恥ずかしくなりましたが、ロットバルトは馬鹿にした風でもなく、

「たいへんけっこうなことですな。贈られる花嫁はさぞかし喜ぶことでしょう。その花嫁が、是非、我が最愛の娘オデールであることを期待しておりますよ」

と、すっかり良い父親の顔になっています。

「あの子はそれはそれは喜ぶことでしょう。贈り物とは何より込められた真心が肝心。王子の贈ってくれるダイヤモンドは真実世界一のダイヤモンドであることでしょう」

王子はすっかり感動してしまって、この人はなんて心の広いい人なんだろうと思いました。

「さあこれを」

ロットバルトは金メダルを王子の手に握らせました。

ずしりと、重みと純金の冷たさを感じられました。

「別にダイヤモンドのお礼というわけではありませんぞ。ただ、ペテロブラーグは遠い。急ぎの旅となれば危険も多いことでしょう。旅の安全のお守りとして、どうぞ持って行ってください」



金の重みにすっかり魅了された王子は素直に受け取って、  
「ありがとう、ロットバルトさん。あなたのお心はとても嬉しいですが、ご期待に添えないことは申し訳なく思います。でもきつと、将来、あなたの真心は決して裏切りません」  
ロットバルトはちよつと困った悲しそうな顔をして、  
「そうですか。残念ですが、人の心だけはどうにもなりません。ただ、知っていていただきたい、あの子は本当にあなたのことが好きでたまらないのです」

そうして二人は握手を交わして別れたわけですが、その金メダルは大事に王子の胸のポケットにしまわれています。  
そつと手を触れると、大金持ちになった喜びと、オデールへの申し訳なさがちよつぴり感じられました。

オデールはたぶん父親から聞いて今日の旅立ちのことを知っていたでしょう。

どうして見送りに来なかったのかそれは分かりませんが。

でも、やっぱり王子はオデールのことはあんまり好きではありませんでした。

『子どもつばいし、いばりんぼうだし、わがままだし、なれなれしいし、甘ったれだし・・・』

と、それほど親しく話したわけでもないのに王子は勝手にそう決めつけていました。

『まあ、かわいいと言えばかわいいかもしれないけれど、やっぱりオデット姫ほどの美人でもないしなあ・・・』

とこれまた男の欲望丸出しの品定めをしているのです。

『やっぱり僕にはオデット姫しかない！ ああ、愛しい姫よ、待っていてください、きつときつと永遠の愛の証を携えてあなたの元に帰ってまいりますからね』

王子はうっとり物語の主人公になった気分でこれからの冒険を夢見ました。

「あ、そうだ！ カカツサスだ！」

夢から覚めたように王子は叫びました。

「ねえ君、僕らはカカツサスを越えるのかい？」

「そうみたいね」

とクラリスは答えましたが、どうせこの子に聞いても詳しくは知らないだろうと、王子はルピネーに聞いてみようと思いましたが、気がついてみると馬車はすでにけっこうなスピードで走っていて、丘や畑の間を通っていた道は、だんだんと深い森の中に入っ  
ていました。

なるほどルピネーの馬車の操縦の腕は大したものようですが、怖くて声がかげられません。

王子はあきらめて席に腰を落ち着け、窓から景色を眺めました。角度が悪いですし木々がじゃまで見えませんが、北のこの先、青い大カカツサス山脈がそびえているはずです。

カカツサス山脈は城からはるか遠くに眺めることが出来ました。青く、まるで空に描かれた絵のように東西に見渡す限り長く壁のように連なっています。相当な高さがあるのでしょう、頂は一年中白く雪をかぶっていました。

王子にとってカカツサス山脈は外の世界の象徴でした。

王子の世界の果てがああ青い壁であり、その先は話にしかなかったことのない未知の世界でした。もっとも王子は生まれてから一度も自分の領土を離れたことはなく、ユークリナにさえ行ったことはありませんでしたが、北のカカツサスの向こうは特別でした。

カカツサスから北は世界の中心大ラピス国だからです。華やかな憧れと未知の恐れの世界です。

少年の頃からどれほどカカツサスを越えることを夢見たことでしょうか。

「そうかあ、いよいよあのカカツサスの壁を越えるんだあ」

王子の胸に旅に出た実感がふつふつとわいてきました。

ちなみに、王子のベルーシアの北隣がカカツサスのふもとの小国

ウロル国で、南隣がオデット王女のユークリナ国、ユークリナ国は南を内海のノール海に面して、ノール海の向こう岸にルピネーの育ったカザリン国があります。

「王子にカカツサス山脈が越せるかしら？」

クラリスが意地悪な横目で王子を見て言いました。

「なんだい、君は越すつもりなんだろう？ 君が越せて僕が越せないわけじゃないか？」

王子はバカにした笑いを返してやりました。

「王子、高山病って知ってる？」

クラリスは訳知り顔で王子を見つめました。

「あれくらいの高さの山になるとナージャでも慎重にルートを選ばないと越せないのよ。上の方は空気が薄いから、調子に乗って一気に上つちゃうと体力が落ちたところに必要な空気が得られなくて、急激に体が駄目になってしまうの。頭が割れるように痛んで、あまりの痛さに吐き気がして、のたうち回るほど苦しくて苦しくて、まさに地獄の苦しみね」

この娘はなんて恐ろしいことを口にするのだろうと王子は青くなる思いがしました。

「だから相当慣れた人でもゆっくり慎重に登らなければならないの。王子みたくにお城より高いところに登ったことのない人なんて、簡単にやられてしまうわね」

王子はすっかり馬車に酔ったように気持ち悪くなってしまうしまった。

「ハハハ、大丈夫さ」

天井から大声が降ってきました。ルピネーの地獄耳は二人の会話をちゃんと聞いていたようです。ふつうは絶対聞こえません。

「無理せず徐々に体を慣らしていけば乗り越えられるさ。山小屋に泊まりながら四日かけて山を越える。もちろん歩きだ、馬は使えないぞ。馬で行けるルートもあるにはあるんだが、ずうっと遠回りになって十日以上かかっちゃう。だからな、無理してでも今日中にふ

もとにたどり着いて、山越えはゆっくり時間をかけなくちゃならねえ」

ハイヨーとルピネーは手綱を打ち、馬たちをますます駆けさせました。

「おじさま、あんまり無理しちゃ駄目よ」

「おうさ、任せておけ」

六頭もの馬を整然と走らせるのはかなり難しいはずですが、ルピネーは非常によく見える目と鋭い勘を持っているようです。

「ですって。よかつたわね」

と、クラリスが声をかけましたが、王子は青くなって本当に馬車に酔ってしまったようです。

「朝ご飯は食べてきたの？」

「いや、出発が待ち遠しくて何も・・・」

食べ物のことなんて今は考えたくもないという様子。

「私もまだなの。台所からパンとチーズをもらってきたからいっしょに食べましょう」

「いいよ。君一人で食べてくれ」

王子は開けたバスケットから漂ってくるチーズのにおいをかいでますます気持ち悪そうになりました。

「何か食べてお腹を落ち着ければ酔いも治るわよ。それじゃあこれどうぞ」

と、クラリスは棒の先についた丸いキャンディーを差し出しました。

「酔い止めよ」

王子は面倒くさそうにしましたが、鼻先に突きつけられるとハツカのさわやかな香りがしましたのでパクツとくわえました。

「あ、おいしい」

口の中にミルクとハツカと何か花のような甘さと香りが広がりました。

「でしょっつ？」

クラリスが嬉しそうに笑いました。

「ロヴィークのおみやげよ。ありがたくいただきなさい」

「ふっん、ロヴィークっていいところだなあ。いつか行ってみたいなあ」

キャンディー一本でいいところとほめられるのもなんですが、もちろんほめられて悪い気はしません。

「オデット姫とめでたく結婚できたら新婚旅行にいらっしやい。オーロラ姫に紹介してあげるわよ」

ちなみにロヴィークはブルーシアのずーつと西の方です。

王子はすっかり酔いが治っていっしょにお弁当を食べました。

馬車は猛スピードで順調に森の中の道を進んでいきました。

本当にほとんどずーつと森の中で、時たま視界が開けると、何か野菜の青々茂った畑が見られました。でもあまり大きな畑はないようです。

「ブルーシアではね、何より森を大切にしているから、大規模な開拓はしないんだ。森の豊かさが国の豊かさだと、みんなそう思っているんだなあ」

「まあ、すてきな考えね」

「そうかねえ」

王子はこの考えにはあまり賛成ではないようです。

「もったいないよ。いくらでも大きな木が生えているのに、材木として売れば大儲けできるよ。畑だって広がって、一石二鳥じゃないか」

「たしかにふっつうはそうするでしょうね。私はこのままの方がいいと思うけれど、どうしてかしら？」

また天井から大声が降ってきました。

「そりゃあ女王が頭がいいからさ」

王子はこっそりクラリスに、あの人の耳はどうなってるんだ？と囁きました。

「王子も女王の賢さを見習うんだな」

「どういうことですか？」

王子も天井に向かって大声で言いました。

ルピネーは笑って、

「あの人はいい君主だ」

と言っただけで説明してくれませんでした。

道は、森の中ですから、まして森を大切にすればロシアの人たちの作った道ですから、ずいぶん अच्छ ちと蛇行していました。乗っている二人は気づきませんでした。外からこの馬車の暴走ぶりを見ている人がいたらなんと恐ろしいことをしているのだろうと肝をつぶすに違いありません。

頑丈だけが取り柄に見えるこの馬車、実はルピネーの設計による特別製で、船乗りらしく大きな揺れに耐えられるように上部の部屋部分と下部の基礎部分の間に、横揺れ用縦揺れ用、さらに揺れ軽減用と、車体をまっすぐに保つ用と、いくつものバネが組み合わされて、この無茶な運転も快適なものに保っているのです。

しかし、

ガンツ、と底に何かぶつかる音がして、ギギギギ、と物のきしむ嫌な音がして、車体がグラリと傾きました。

「うわあっ」

王子が悲鳴を上げ、クラリスもとっさに座席の肘置きにしがみつき、馬たちのヒーンと騒ぐ声がし、ルピネーの馬たちを必死にんだめる声がありました。

ガガン、と車体が落下し、ガリガリ地面をこする音が響いてきて、馬たちの騒ぐ声がして、ルピネーの叱りつける声がして、王子が悲鳴を上げて、やがて馬車は停止しました。

「どうしたの!？」

クラリスが外に飛び出すと、車体は木の根の盛り上がりに乗りに乗りに上げて斜めに止まり、見ると、後輪が消えていました。

後輪は後ろの方に車軸ごと転がっています。

「どつどつどつ」

ルピネーが馬たちの落ち着いたのを確認して下りてきました。

「ちつくしょう、頑丈が取り柄の馬車がいっただうしちまったんだ？」

ブツブツ悪態をつきながら後ろに回って故障の原因を調べ出しました。

「やっぱりスピードの出し過ぎなんですすよお」

王子の非難に、

「そうかもしれないなあ・・・」

と答えつつ、ルピネーはどうにも納得いかない様子です。

見たところ車軸を納める枠と車体に乗せている大バネの間の小型のバネが一つ破損してしまっただようです。

「ちゃんと点検はしたんだがなあ、やっぱり無理のし過ぎかなあ・・・」

ルピネーはまいったなあという顔でボリボリ頭を掻きました。

「国王と王妃の事故と同じじゃない？」

クラリスが怖い顔で言いました。

「あの馬車の事故も、何かの原因で部品が壊れて車輪が外れたために起こったんだわ」

「君、詳しいねえ」

王子が感心しました。

「そうだ。確かにその通りだ。一つ違うのは、今壊れたのは後輪の部品だが、国王の馬車は前輪の部品が壊れたことだ」

ルピネーも真剣な顔で確認しながら言いました。

「そして前輪が外れて、後輪に巻き込まれ、大破し、車体が激しく投げ出され、しかも運悪く土手の上のカーブだったため加速が付いて土手下に落下し、国王、王妃、御者の三人は即死した」

ジークフリート王子は聞きながらブルンと震え上がりました。

「クラリス」

ルピネーが真剣な目をクラリスに向けました。

「これがロットバルトの仕業だと思うか？」

クラリスは難しい顔で考えました。

「出来るとは思うわ。この部分に魔法で印を付けておいて、道に破壊の魔力を込めた石を置いておく。馬車が通ったら、印に石が引き寄せられてバネを破壊する・・・。」

確信はないけれどね。印を付けるのはほんの小さな魔法でいいし、石はおそらく粉々に砕けてしまっているでしょうし。証拠は、見つけれないでしょうね」

「そうか・・・」

ルピネーは腕を組んでうーむとうなりました。

「俺も確信はねえが、たぶんこれは奴の仕業だろうと思う。と、なると、奴の目的だな」

ルピネーは口をひん曲げてそこにロットバルトがいるように宙を睨みました。

「俺たちを殺すつもりなら、国王の馬車同様前輪を狙っただろう。すると狙いは、足止めか。」

「なんのためだ？　ただ単に時間を稼いでペテロブラーグ行きを邪魔するためか？」

「それとも、他に目的があるのか？」

「そこは森のまっただ中です。」

道は一本切り。近くに町や村があるのか、とりあえず一軒の家でもあるものか、まったく分かりません。

ルピネーとクラリスは難しい顔で考え込み、王子はただただ途方に暮れるだけでした。



## 第9章 旅の道連れその1

「へへーん、どうだ、ざまあみやがれ！」

ルピネーは得意になって大声を上げました。

後ろの荷箱から工具と材料を取り出して、あれから二時間ほどで馬車を修理してしまいました。

「完璧とはいかないがな、とりあえず今日一日くらい保つだろう」

「見かけによらず起用ねえ」

クラリスが褒めてあげました。

「馬で行った方が早いと思うんだけどなあ・・・」

王子は自分の意見が採用されなかったのでちよつとふてくされています。

王子は馬車を捨てて、馬に荷物を背負わせて、馬に乗っていった方がいいと主張したのですが、ルピネーが馬車を修理した方が早いと決めてしまったのです。たしかに王子とクラリスの二人なら馬に直接乗っていった方が早いでしょうが、ルピネーを乗せる馬がかわいそうです。馬車を引いているのはスピードの速い足長の細身の馬ばかりで、狩りの時に乗っていたずんぐりむつくりの馬ではありません。

「さあさ、ぶーたれてないで乗った乗った」

二人を乗せるとルピネーは馬車を出発させました。

二時間の遅れにプラスしてさっきまでのように無茶な運転は出来ないのです。目的地への到着は真夜中過ぎになってしまいました。

「おまえたちは暗くなったらいつでも寝ちまえ。宿に着いたらそのままベッドに運んでやる」

ルピネーが何より心配しているのは二人の体力です。明日はカカツサスに登り始めなければならぬので、出来たら宿でゆっくり眠らせてやりたいのですが、大型の馬車ですのでソファが十分ベッド代わりになるでしょう。どうせスピードも出せませんし。

空がだんだん暗くなってきて夕焼けが広がってくる頃、恐れた通り馬車は目的地の半分程度しか来ていませんでした。

「こりゃあ朝までかかりそうだな。山はとりあえず登ってみて、様子を見て四日かけるか・・・」

ルピネーがブツブツ計算しているうちに、森は急激に暗さを増し、空にかすかに茜を残しながら森の木々は真っ黒な影になってしまいました。

馬車の中では、まだ明るいうちに夕飯のバスケットを平らげた王子は、朝早くから張り切っていた疲れが出たのでしょう、夕日が射す頃にはぐーぐーいびきを立てていました。

向かいの席に移ったクラリスもやがてゴトゴト言う馬車の振動に揺られながらウトウトしだし、そのうち横になってマントにくるまってスー・スー寝息を立て始めました。

横になると王子は足を縮めなければなりませんでしたが、小さなクラリスは十分足を伸ばして寝ることが出来ました。

空が完全に黒くなって、星が瞬きだし、ルピネーは慎重に目を凝らして手綱を操っていました。

道が大きくカーブしているところ、木々の間からちらちら見える向こうの道で、ルピネーは何か黒い影を見て緊張しました。

「どつどつどつ」

手綱を引いて馬車を止めます。

耳を澄ますと、何か動物の騒ぎ立てる甲高い声と、その声に混じって若い女性の悲鳴がかすかに聞こえました。

「王子！ 起きろ！ 剣を持って！」

ルピネーの怒鳴り声で王子はびっくりして跳ね起き、突然の暗さに慌てふためいて床にずり落ちました。

ルピネーは王子を待たずに御者台から飛び降り、

「うおおおーっ！」

と雄叫びを上げて剣を振りかざして走り出しました。

「剣、剣、剣はと・・・」

寝ぼけた頭で王子はソファの後ろの台をガチャガチャかき回し、剣の代わりにお気に入りの黒塗りの弓矢を掴むと慌てて外に飛び出しました。

クラリスも行きかけて、王子の残していった剣をくるんでいたマントごと持って、後を追いました。

カーブを回った先では、一人の女の人が黒い大きな鳥たちに襲われていました。

雄叫びを上げて駆けつけたルピネーはまず剣の鞘を鳥たちに向かって投げつけました。ルピネーの計算ではそうして鳥たちがひるんだ隙に女の人の元へ駆け寄るつもりだったのですが、相手の数が多すぎました。四五羽かと思っていた鳥たちは、上からどんどん下りてきて、三十羽にもなりました。

しかもこの鳥たちはずいぶん頭がいらしく、上と下、左と右といったように連携してルピネーを襲ってきました。飛ぶのも非常に上手く、素早い動きで剣を避け、宙で停止するのもしば返りも思いのまま、隙あらば腕や脚を鋭いくちばしでついばんできました。鳥たちの正体はカラスでした。

それもかなり大型で凶暴そうなやつです。

真つ黒なカラスたちの素早い動きにさすがのルピネーの目も付いていけませんでした。

「ちくしょうつ、カラスつてのは夜目が利くんだっただか？」

ルピネーはやけ気味に剣をブルンブルン振り回しましたが、頭の良いカラスたちに背中を襲われ、振り返るとまた背中を襲われ、服がぼろぼろに破れてきました。

「ルピネーさん！」

すっかり目の開いた王子が弓矢を構えてルピネーの頭の上目がけて矢を放ちました。これだけカラスが飛び交っているのですから狙いも何もあったものじゃありませんが、王子にはこの弓矢なら当たる確信がありました。

矢は勢いよく飛んでいって、カラスたちをかいくぐり、勢いよく向こうへ飛んでいってしまいました。

「あ、あれ？」

王子はもう一度構え、今度は手前のカラスの動きをよく見て矢を放ちました。

矢は、また外れました。

無理ないところですが、なんだか変でした。

「今度こそ！」

王子は矢をつがえ弓を構えました。

「無駄よ、その矢はあいつらには当たらないわ！」

クラリスの予言通り矢はカラスを逸れて茂みへ飛び込んでいきました。

「な、なんでだよお!？」

「その弓矢にはロットバルトの魔法がかかっているのよ。ロットバルトに都合の悪いものには当たらないようになってるの。あいつらは、ロットバルトの手下よ！」

二人に目を付けたカラスたちがものすごいスピードで襲ってききました。

「ひゃあっ」

王子とクラリスはとっさにしゃがんで突進をやり過ごしました。

「お、おい、あれをやってくれよ!」

「あれ？」

「湖で黒鳥たちにやったやつだよ、君お得意の魔法だよ!」

クラリスは立ち上がり、カラスたちの動きを追いながら右手を構えましたが、ふと動きが止まり、襲ってきたカラスに慌ててしゃがみました。

「どうしたんだよ？」

「はい！」

クラリスは持ってきた剣を王子に差し出しました。

「これはあなたの試練なのよ。自分で何とかしなさい」

「そんなあ！」

クラリスは問答無用に剣を押しつけ、

「私はあの女の人をなんとか助けるわ」

と、王子のマントを持ったまま低い姿勢で駆け出しました。

「えーい、ちくしょう、こうなりやヤケだ！」

王子もルピネーをまねて「うおおお」と雄叫びを上げて剣を振り回しながらもかくルピネーの元へ走りました。

「いいぞ王子！ 背中合わせになりやなんとか奴らの攻撃はかわせる」

二人は背中合わせになつてカラスたちの攻撃に構え、とにかく一羽、なんとしても叩き落としてやると剣を握る手に力を込めました。そうすると不思議なもので、さっきまで断然有利に人間たちを翻弄していたカラスたちの攻撃が、急に迷いが生じて攻める隙を見いだせず、カーカーやかましくわめくだけでまるで動きが止まってしまいました。

カラスたちは攻めやすそうなところ、か弱い女二人に狙いを集中させました。

「クラリス！ 危ねえ！」

ルピネーの叫びに振り返つたクラリスは、襲いかかってくるカラスたち目掛けて王子のマントをブワアツと広げて投げかけました。

「クワアツ！」

襲いかかってきたカラスたちがドドドツとマントに突っ込みました。

「えーいっ！」

クラリスはマントの端と端を持って袋にすると思い切り地面に叩き付けました。

「クワア・・・」

マントから転げ出したカラスたちはたまらず目を回してよたよた歩いて退散しました。

しかしカラスたちはまだまだいます。

クラリスはカラスたちを見ると全力で頭を抱えてしゃがみ込んで  
いる女の人に駆け寄り、今度は自分のマントを広げて二人ですっぱ  
り頭からかぶりました。

『お願い、私たちを守って!』

クラリスの黒いマントの内側はきれいなピンク色の柔らかな羽毛  
が植えられていました。そのピンクが暖かに光り出しましたが、外  
の黒い布を通すとそれは真っ赤な炎となって舞い上がり、蛇のよう  
にのたうって敵、カラスたち目がけて襲いかかりました。

カラスたちはたまらず、悲鳴を上げて逃げ出しました。

「うおおおお!」

勢いづいたルピネーと王子が剣を振り上げて駆けつけ、カラスた  
ちは完全に戦意を失って空へ逃げていきました。

「クラリスー、大丈夫かあーっ!」

ルピネーの大声にクラリスはほっとしてマントを上げました。

「さあ、もう大丈夫よ」

ピンク色の光がまだほのかに残って、その光の中でクラリスはそ  
の女の人を見ました。

長身を折り曲げた細い体、乱れた長い黄金の髪の毛、弱々しく振  
り向いたその顔は……

「! オデット姫! ……」

そう、それはオデット姫でした。

「あれれれれれ、オデット姫じゃないですかあ!」

立ち上がった二人に駆けつけた王子が驚きの声を上げました。

「どうしてここに? それにその姿、呪いが解けちゃったんですか  
あ?」

「あの、わたしは……」

怯えきつたか細い声が何か言おうとしたその時、

ギヤアギヤアと再びカラスたちの鳴き声がうるさく聞こえたかと  
思うと、ドドドドドド、猛烈な勢いで馬車が突っ込んできました。

「危ねえ!」

ルピネーがクラリスとオデット姫をかばって道の端に転がり、王子も悲鳴を上げて飛び退けました。

ものすごい勢いで駆け抜けていく馬車、その周りをカラスたちが追い立てるように飛び、御者台には、なんと、あの不気味な鳥人間が乗っていました。

「ちくしょう、やられた！」

ルピネーが走り去る馬車の背に悔しそうに言いました。

「あなたは、いったい誰？」

クラリスはきつい目でオデット姫を問い詰めました。

「わ、わたしは・・・」

オデット姫は怯えて唇を震えさせ、声が出てきません。

「おいおい、何言ってるんだよ」

王子が怒ってクラリスに詰め寄りました。

「見ての通りオデット姫じゃないか。きっと僕の真心が通じて呪いが解けたんだ。ね、そうですね、姫？」

「わたし、わたし・・・」

オデット姫じゃありません！」

オデット姫、と思われていた女性はやっとの思いで言いました。

「わたしは、わたしは、オデーレという者です」

「は？ オデーレ？ オデットじゃなくって？」

王子がずっこけました。

「馬車を追わなきゃ・・・、イテッ、」

ルピネーが歩き出そうとして、太股を押さえてしゃがみ込みました。

「おじさま、無理しないで、ケガしているのじゃない？」

クラリスが駆け寄ると、ルピネーの脚は裂けたズボンの間から血がだらだら流れていました。

「たいへん！ 手当しなくちゃ！」

「こんなのはたいしたこたあねえ、と言いたいところだが、参った

な、あいつら思いつきりついばみやがって・・・」

強がっていますが相当痛そうですね。」

「待って。わたし、やってみる」

クラリスが手を当てる目を閉じ、一心に念じ始めました。

『痛みよ止まって。肉体よ、頑張って再生して・・・』

「お、いいぞ、痛みが引いてきた」

ルピネーはそう言って笑いましたが、脂汗がだらだら流れて、とてもそうは見えません。

「ごめんなさい、おじさま。傷が深すぎて私の力では駄目みたい」

「そんなことはねえ。おまえにそうしてもらってるとすぐく気持ちがいい。なーに、こんな傷、朝になればふさがってるさ。それよりもだ、今夜はここで野宿するより仕方なさそうだな」

「金貨！」

王子が素っ頓狂に叫びました。

「馬車には母上からもらった大事な金貨が積んであるんだ！どうしよう、あいつらに盗まれちゃった！」

どうしようどうしようと王子は哀れにうろたえてうろろ歩き回りしました。

「慌てるな。カラスが金貨を盗ったりするか。

・・・いや、カラスは光り物が好きか？」

「うわあー、どうしよう！」

王子はますますうろろしました。

「落ち付いて。トランクの中に大事にしまつてあるんだらう？」

頭のいいカラスだってトランクを開けはしまい。

もっとも、あの不気味な御者はどうだか知らねえがな。あれが例の鳥人間か？」

クラリスがうなずきました。

王子はまだ騒いでいます。

「ああ、うるさいうるさい。奴らは別に盗みが目的じゃあるまい。

どこかこの先に馬車は乗り捨ててあるだらう。近くじゃあねえだろ



うがな。他の人間に先に見つけられなけりゃあ金貨も無事だろう。  
それよりもだ、」

ルピネーはぶるぶる震えているオデーレと名乗ったオデット姫そ  
つくりの女に目を向けました。

「そうよ、あなたいったい何者なの？　なんであいつらに追われて  
いたの？」

再びクラリスがきつく問いただし、見かねたルピネーがまあまあ  
とクラリスを抑えました。

「まずはゆっくり落ち着こうや。どこか適当な場所を見つけて火を  
起こそう。森の夜は冷えるぞ」

というわけで、ルピネーがちよっと木のばらけた場所を見つけて  
そこに場所を定め、みんなで薪を拾い集めました。

オデーレは、まだシヨックが治まらないのか、ぜんぜん手伝いま  
せんでした。

組んだ薪に剣で削った木屑を乗せ、ルピネーがポケットから取り  
出した火打ち石をカチカチ打ちました。しかしどうもうまくいきま  
せん。実は腕もひどくケガをしていて上手く動かせないのです。

「王子、頼むやってくれ」

火打ち石を渡された王子はカチカチ打ち合わせましたが、こちら  
はただへたくそで、ちっとも火は付きませんでした。

「あー、面倒くさい！　おい君、魔法でちゃっちゃと付けちゃって  
くれよ」

クラリスはこの程度のことだと顔をしかめましたが、指先を木屑  
に向け、じーっと強く見つめました。

『火よ起これ、火よ起これ・・・』

するとポツと赤い点が灯り、やがて広がって薪に火が付きました。  
「ほーら、ついたわ！」

クラリスは得意になっていばりました。

「何言ってるんだい。君は史上最強の黒魔女の娘なんだから、このくら  
い出来て当然じゃないか」

王子は文句を言うだけでぜんぜん感謝しませんでした。

火が付いたところでみんなでたき火を囲み、さて、注目がオデーレ一人に集まりました。

「さあ、今度こそきちんと話してくれるわね？」

オデーレはうなずき、自分を落ち着かせるように一つ大きく息を吐きました。

「私はハルメイユーで母と二人で暮らしておりました」

ハルメイユーとはカカツサス山脈の西の果ての国で、北の海にも面しなかなかな豊かな国です。

「母は、特に仕事をしているわけでもなく、まずまずの屋敷に住んで、ひたすら私の教育のみに日々の暮らしを過ごしていましたが、生活もまずまず不自由することもなく、毎月どこからかお金が届けられているようでしたが、それがどこから送られてくるものやら私には分かりませんでした。ただ、母はよく私に

『おまえはいつかお姫様になるかもしれない娘なのよ』

と、話していました。私はその話を子どもの頃は無邪気に信じていましたが、この頃はさすがに母の夢の中のお話だろうと思っていました。それというのも・・・

私はどうやらどこかの貴族の隠し子であるらしいことにそれとなく気づいてしまったからです。

私には幼い頃から父はおりませんでした。母は、お父様は外国で大切なお仕事をしていらっしやるの、と言っていましたが、それではなぜ私たちがその外国で父と一緒に住めないのでしょうか？

要は、追い払われたのです。

おそらく父の屋敷にお手伝いか何かで働いていた母が、父の恋人となり、私を身ごもったのでしよう。ところが母が私を身ごもると父にとってはしよせん愛人の子で、邪魔な子どもだったのでしよう、母をハルメイユーに追いやり、母はそこで私を生んだのです。

生活費と私の養育費は毎月送られてきていましたが、母は父と何か約束していたらしく、ずーっと父が迎えに来てくれるのを待って

いたようです。

その時に貴族の娘として恥ずかしくないようにずっと私の教育に力を入れていたのでしょう。

しかし、けつきよく父の迎えは来ず、母は一年前に急の病で亡くなりました。

私は途方に暮れてしまいましたが、お金だけはきちんと送られてきていたので生活に困ることはありませんでした。でも私はなんとか父のことが知りたくて、お金を運んでくれる人に送り主のことを訊きました。でもその人は弁護士とかいうお仕事の方で、送り主のことは絶対秘密だからと、どんなに頼んでも教えてくれませんでした。

ところが、半年前になって、ぷっつりお金が送られてこなくなっていました。

私は今度こそ本当に途方に暮れてしまいました。私は上流階級のたしなみを教育されていただけで、日々の生活のための知識はまるで持ち合わせていませんでした。

あっという間に蓄えはなくなり、私は泣く泣く生まれ育った屋敷を売り、いくらかのお金を得たのですけれど、それもいずればなくなってしまう。

私はなんとか私を教えてくださいださっていた先生のとてを頼ってさる商家のお屋敷にお手伝いとして雇っていただきましたが、私はそこで先輩のお手伝いたちにひどくいじめられて、こんな惨めな思いをするなら死んだ方がましだと、毎日一人になるとは泣いておりました

オデーレはそのつらさを思い出してか、指を目に当ててぐっすんとやりました。

「ああ、なんとひどい話だ！」

王子が怒りに震えて立ち上がりました。

「自分の愛した女性とその女性との間にできた自分の子を遠くに追いやって顧みもしないなんて、その父親は最低だ！ 騎士の風上に

も置けない人でなしだ！」

王子は憤慨してその父親をののしりましたが、ルピネーはおいしいのか？という顔で眺め、クラリスはどうしたのか顔を蒼白にこわばらせてじいっと火を見つめていました。

「それで、それからどうなった？」

と、ルピネーが王子を座らせてオデーレに話の先を促しました。

「はい。」

一週間前のことです、お屋敷に父の代理という方が私を訪ねてきました。

私はその頃にはすっかり父を恨んでいましたが、正直なところ、この不幸な境遇から救い出してくれる希望の光に感じました。

その方は立派な服を着た紳士でしたが、目がとても大きくギョロリとしていて、ちよつと不気味に感じました。

しかしその方の言った言葉！ 私は天にも昇る気がしました！

その方は言ったのです、

『あなたに王家を継ぎ、我がユークリナ国の女王になっていただきたい』

と！

「でたらめよ！」

今度はクラリスが猛然と立ち上がりました。

「それじゃああなたはオデット姫の姉妹だというの？ そんなのあり得ないわ！」

クラリスは怒りにぶるぶる震えてオデーレを睨み付け、オデーレはそんなクラリスに怯えて真っ青になって震えました。

「ああ、オデーレ姫、ご安心なさい」

王子がオデーレに駆け寄り、その震える肩を抱き、冷たい手を握りしめました。

「あなたの不幸な境遇には心からご同情いたします。大丈夫この僕がきつとあなたをお守りいたします」

「ジークフリート王子！」

クラリスは今度は王子に怒りの矛先を向けました。

「あなたはオデット姫に永遠の愛を誓ったのじゃないの？」

「それとこれとは話が別だろう？」

王子も怒ってクラリスを睨み返しました。

「騎士たるもの麗しき淑女の不幸を見過ごしになどできるものか。ましてやこの人は、オデット姫のお姉さんか妹さんじゃないか！」

「だから！ それがでたらめだっけ言うのよ！」

「なんでだ？」

クラリスの激昂にルピネーが割って入りました。

「なんでその人がオデット姫の姉妹じゃいけねえんだ？ そっくりなんだろう、オデット姫と？ 姉妹と考える方が自然じゃねえか？」

オデーレはほっとして、王子の胸に寄りかかりました。その目がちらつと勝ち誇ったようにクラリスを見上げました。

「そ、それは・・・」

ルピネーの指摘にクラリスも苦しそうに反論を探しましたが、

「オデット姫はそんなこと一言も・・・」

「そりゃそうさ」

王子もオデーレを抱きかかえながら得意になって言いました。

「オデット姫がそんなことわざわざ言うわけないじゃないか。それにきつと知らなかったんだよ。それはきつと国王一人の秘密で、だから事故で急に亡くなって仕送りが途絶えてしまったのさ」

まあそう考えるのが自然のようです。

オデーレがオデット姫の姉妹だという話を信じるならば。

クラリスもあきらめて座りました。

とても承伏しかねる顔ですが。

「それで、それからどうなったの？」

「それから・・・」

オデーレはクラリスは完全に無視して、ルピネーと、胸にもたれかかった王子の顔を間近に見上げながら話を続けました。

「私はさっそく迎いの馬車に乗せられてユークリナ国に向かって旅立ちました。久しぶりにきれいなドレスを着せられて、ああ、まるで夢のようでした！」

オデーレは今裾がずいぶん汚れてしまっていますが純白の地に赤で華やかな柄が染められたスカートと、胸に細かな黒の刺繍の入った腰回りの締まった細身のドレスを着ていました。

「馬車の中で紳士に父が半年前に亡くなり、跡を継いだわがままな姫も」

と、やっと意地悪な目でクラリスをちらつと見て、

「仕事を放つぽりだしてどこかへ雲隠れしてしまって、国はたいへん迷惑していることを聞かされました。生前父と個人的に懇意であった宰相が見るに見かねて秘密であった私の存在を明かし、私に王位を預ける決断を下したそうです」

話が怪しくなってきましたが、王子はいつまでもオデーレの柔らかい背中を胸に感じたままデレデレとうんうんとうなずいています。「ところが！」

突然オデーレがガバツと起きあがり、両手を握りしめて怒りのポーズを取りました。

「この話には裏があつたのです！」

明日にはユークリナに着こうという今になって、あの男は私が王位につくための条件を出してきたのです！

つまり、私が女王になるためには、宰相のロットバルトの妻にならなければならぬ、と！

「なーんてひどい奴だ！」

と、王子が憤慨しました。

「私は怒りました。だって、ロットバルトという人はもう四十五歳にもなるおじさんだそうじゃないですか！ 私はまだ十八歳ですよ！」

ロットバルトは四十五歳でオデーレは十八歳のようです。

「ああ、王子様あ」

と、オデーレは再び王子の胸にしなだれかかり顔をすり寄せました。

「ひどいですわ、私はその男が国を自分のものにするための道具に利用されようとしていたのですわ」

「うーむ、許せん！　なんて非道な奴だ！」

王子のロツトバルトへの評価はコロコロ変わっています。

「私、彼らの隙をついて必死で逃げ出しました。花の命をそのような男に摘まれてなるものですか」

「ええ、そうですね！　よくぞお逃げ出しなされた！」

二人は息ぴつたりに見つめ合い、クラリスとルピネーはしらーっとした目で眺めていました。

「で、彼らってというのは、何人いたの？」

「敵はちょうど十人いましたわ」

オデーレはもうまっすぐ見つめながら王子にしか話していません。「馬車の中にその紳士を装った男と、その召し使いらしい男、私のお世話係の二人の女、馬車の前に御者と、後ろにもう一人召し使い、それと馬車の前後に騎馬兵が二人ずつ。私が妙に思っていたのはその紳士風の男以外誰も一言も口をきかなかったことです。それもそのはず、彼らは人間ではなかったのです！」

私は少し休憩したいと馬車を止めさせ、あの、その・・・  
と、ポツと頬を染めて、

「用足しをしたいと・・・申しまして・・・」

きゃっ、恥ずかしい、とオデーレは王子の服を揉んで顔を埋めました。

「それで、その、道から奥に入って彼らの姿が見えなくなると、私はそのままどんどん走って逃げました。走るなんてはしたくない真似をしたのはこれが初めてですからもう苦しくて苦しくて。でも我が身の純潔を守るために必死になって駆けたのです。やがて彼らは私が逃げたことに気づくと後を追ってきました。それも、自分たちの本性を表して。」

彼らは空を飛んで追いかけてきました。

彼らは、真つ黒な鳥だったのです！

私は恐怖に悲鳴を上げて、とにかく必死で逃げました。鳥たちは恐ろしく汚い声で鳴きながら私の髪や服をくわえて私を連れ戻そうとしました。私はそれを必死で振り払い、たまたま道に躍り出ました。

そこへ、王子様！

と、ぱっちり目を見つめ合わせて、頬を染め、

「あなた様が救いに現れたのですわ。ああ、あのときの王子のお姿のなんと凛々しかったこと！」

そう言いますがオデーレはたぶんキヤーキヤー悲鳴を上げている真つ最中で王子の姿なんてまるで見えていなかったと思われれます。

が、そんなことを気にする王子ではありません。

「はい」

と力強く答えてぎゅっとオデーレの両手を握りしめました。

「ああ、ありがとう王子様。あなたは私の乙女の純潔を悪漢どもからお守りくださったのですわ！」

どうもこのオデーレという女性は、姿形はオデット姫と瓜二つでも、中身の方はだいぶ違うようです。

「なるほどなあ」

ルピネーが言いました。

「ロットバルトの奴、オデット姫が結婚を承知しなかった場合を考えて国王の隠し子をオデット姫に仕立てて彼女と結婚するつもりだったのか」

クラリスがじろりとルピネーを睨みましたが、

「だってよ、これだけそっくりなんだ、オデット姫だと言われれば、はいそうですかと認めるしかねえじゃねえか」

クラリスはまだ疑わしそくにオデーレをじろじろ見えています。

オデーレはもう周りのことなんてどうでもいいようで、王子にべったりくっついて、うっとりしていました。



王子もそんなオデーレにすっかりデレデレだらしくなっています。

「さてどうする、ロットバルトに追われているとなると放っておくわけにもいかないが・・・」

「いっしょに連れていきましよう！」

王子が張り切って言いました。

「オデーレさん、いっしょにラピスの都ペテロブラーグに参りましよう！」

「まあ、ペテロブラーグへ！ 夢みたい！ 王子様、どうか私をいっしょにお連れください」

行きましよう行きましよう、王子とオデーレは手を取り合って喜びました。

クラリスは思いつきり不満そうな顔をしましたが、

「仕方あるまい。この辺りはまだロットバルトの目が光っているよ。うだ。少なくとも安全だと確信が持てるところまでは連れて行かぬやあなるまい」

「どうぞお好きなように。でも、彼女にカカッサなんて越えられるのかしら？」

クラリスはパイと横を向いてしまいました。

## 第10章 旅の道連れその2

「寒い」

と、オデーレが言い出しました。

無理もありません、夜も深まり、木々が冷気を発して、たき火に手をかざしても背中からひんやり寒さが染み込んできます。ましてオデーレは首周りの大きく開いたおしゃれなドレスですから寒さも肌に直接触ってきます。

「ああ、これは気づかず失礼」

王子が慌ててマントを脱いで肩に掛けてあげました。

それでもオデーレはまだ寒いと言いました。

「私は生まれてから一度もお屋敷の外で夜を過ごしたことなんてないのよ！ ああ、暖かいふわふわのベッドで眠りたいわあ」

商家のお屋敷でのつらいお手伝いの生活やここまでの馬車の旅はどうだったのでしょうか？ オデーレはそんなことはすっかり記憶から消えてしまったようで、寒い寒いとだだをこねました。

「なんにもねえ所で暖を取るにはな、裸で抱き合っのが一番なんだけ」

「は、はだか!？」

王子とオデーレは真っ赤になりました。

「そうさ。雪山で遭難したり、海で溺れたりした者は人の肌の熱で凍えた体を温めてやるんだ」

王子とオデーレは目を合わせて、パツと横を向きました。

「でも・・・」

オデーレがなんだか悩ましい横目で王子を振り返りました。

「ジークフリート王子様となら、私、いい、かしら・・・」

王子はゆで上がったみたいにかアーツと真っ赤になって、

「いいい、いけません、あなたのような淑女が、そそそ、そのようなことを・・・」

と、必死に若い欲望と戦って言いました。

「王子様の、バ・カ」

と、オデーレはマントにくるまった体を王子に預け、頭をちょこんと肩に乗せました。

「そ、そうですね、こ、これくらいなら・・・」

王子はせいぜいさりげなくオデーレの肩に手を回しました。

しばらくそうして大人しくしていましたが、そのうちまたオデーレが寒そうに体を揺すりだし、じーっと、マントにくるまったクラリスを見つめました。

「なによ?」

視線に気づいたクラリスが問いました。

「そのマント、とても暖かそうね?」

「まあね」

「貸して」

クラリスは白い目でオデーレを見つめて黙り込みました。

「おいおいオデーレ。それは我慢しろ」

ルピネーがさすがに注意しました。

「自分より小さい女の子からマントを取るこたあねえだろ。俺の服で良ければ貸してやるが」

ルピネーはマントは羽織らず、コートを着ていました。

「けっこうです」

と言いながらオデーレは王子に寒い寒いと駄々をこねました。

「オデーレさん、我慢してくださいよ」

と言いながら、王子もついちらちらクラリスを見てしまいました。クラリスがすっくと立ち上がりました。

マントを脱ぎ、黙ってオデーレに差し出しました。

「まあ、ありがとう!」

オデーレは飛びついてマントを受け取ると王子のマントを脱いでクラリスのマントを羽織りました。

「まあ、あったかい!」

それはそうでしょう、そのマントの内側に植え込まれているのは世にも珍しい火龍の羽毛なのです。

オデーレはすっかり満足してまた元のように王子の肩により掛かりました。

「おい、クラリス」

ルピネーがさすがに苦い顔をしてクラリスに呼びかけました。

「いいの。私は史上最強の黒魔女の娘ですからねー」

と王子に向かって嫌みを言っ

「私は自分にふさわしい寢床を探すわ」

と、森の奥に向かって歩き出しました。

「おい、クラリス、気を付けるんだぞー」

クラリスが行ってしまうと、ルピネーはむすっとして王子に言いました。

「ジークフリート王子。おまえ、男として最低だぞ」

王子も気にはなっていたのですが、面と向かって言われると恥ずかしくて気持ちが悪くなりました。

「いいじゃない」

オデーレが言いました。

「あの子、魔女なんですよ？ 魔女と言ったら深い森の中に住んでいるものだよ」

オデーレは薄笑いを浮かべて、さっきまでのおどおどしたかわいそうな娘はすっかりどこかへ行ってしまったようです。

オデーレの脱いだ王子のマントがありました。

「僕、これを彼女に渡してきます」

王子がオデーレを肩からどかして立ち上がりました。

「うん。そうしろ」

「もう、放っておけばいいのに」

と言いながらオデーレはさして気にする風もなく、眠そうにあくびをすると、快適なマントにくるまって横になりました。

「おやすみなさーい」

まったくなんの心配もないように、オデーレは気持ちよさそうに目を閉じました。

「まったく、どういうお嬢様だ」

ルピネーは不審の目を向けつつ、それよりも呆れ返ってしまいました。

クラリスはどこか眠れるところはないかしらと探して歩きました。ふと、静寂を感じる場所がありました。

夜の森は静まり返って、ときおり響く夜鳥の声や枝の風で揺れる音、藪ががさごそ動く音が不気味に感じられますが、森全体の静かさの中にも活気が隠れているような雰囲気とは別の、精神的な静けさを感じるのです。

広い地面に大きく根を張った大木がありました。

けれどその大木は幹が半分縦に割れ、枝を失い、もう片方の枝もまだそんな季節でもないでしょうにしおれた葉をほとんど失っていました。

雷にでも打たれたのでしょうか、その大木は弱って、死にかけていました。

幹の下の方に大きくうろが開いていました。

小さなクラリスが寝るにはちょうどいい大きさのようです。

「ねえ、大きな木さん」

クラリスは大木に話しかけました。

「私に一晩宿を貸してくれないかしら？ お礼に少し私の元気を分けてあげるから」

クラリスは両手を幹に当て、一心に念じ始めました。

『生命よ、蘇れ。死した体を捨て去り、新しき体に生まれ変わらせ、生命を取り戻せ』

クラリスが一生命念じて両手に力を込めると、暖かな桃色の光があふれ出し、かさかさに乾いた幹に広がり、染み渡っていきました。木は体内に太陽を得たように力を取り戻し、地中に張り巡らせ

た根より精力的に水を吸い上げ、枯れかけていた葉を元気に青々茂らせ、白茶けていた幹に黒々とした精気がみなぎってきました。

クラリスは満足そうにポンと幹を叩き、

「よかったわね」

と、ニツコリ微笑みました。

うろを覗き込み、

「何か欲しいわね」

と、辺りを見回し、

「できるかしら？」

と両手を差し伸べると風を起こし、落ちていた枯れ葉を集めました。両手に抱えてうろに投げ入れると、また両手をかざし、何か念じると、枯れ葉は柔らかな繊維となり、ふわふわの布団ができあがりました。

「これでよし！ 快適に眠れそうね」

クラリスがうろに潜り込もうとすると、

「へえー、やっぱりたいしたものだなあ」

王子がやってきました。

「あら、オデーレちゃんは放っておいていいの？」

クラリスの機嫌はやっぱり直っておらず、つい嫌みを言っていました。

「これ」

王子は自分のマントを差し出しました。

「君のマントをオデーレに貸してくれて、ありがとう。代わりに僕のを使ってくれよ」

「いらないわ」

「いいから、使ってくれよ」

王子はマントをクラリスに押しつけるようにして、さっさと走って帰っていきました。

「本当にいらぬのに」

クラリスは走っていく王子の後ろ姿とマントを見比べて、ま、し

ようがないか、と一応借りて、掛け布団にして寝転びました。

見上げると、開けた空にいっぱい星と、少し欠けた白銀の月が見えました。

「三日目の月か・・・」

オデット姫たちはどうしているだろう？・・・

「おやすみなさい」

クラリスは目を閉じました。

さて、何時頃でしょう、顔に当たるヒヤリとした冷気にクラリスは目を覚ましました。

外はまだ真つ暗ですが、なんとなく勘で朝が近づいているように思いました。

マントを引つ張り上げ、ふと、

『王子たちは大丈夫かしら？』  
と思いました。

森の中でこれだけ快適な寝床を得た自分が寒さに目を覚ますので、外で寝ているだろう王子たちはもつと、ずつと、寒いはずです。クラリスは気になって、マントをかぶって様子を見に行きました。たき火がかるうじてチロチロ、小さな炎をくすぶらせていました。

「えい」

クラリスは指先から魔法を発して火を大きくし、残りの薪をくべました。

案の定王子は肩を抱いてガタガタ震えながら、それでも疲れでグーグー寝ていました。オデーレは、クラリスのマントのおかげでスーッと眠っています。

ルピネーは脂汗を流してうんうんうなっていました。

「まあ、たいへん」

クラリスはハンカチで顔の汗を拭いてあげました。

ルピネーが森の真ん中で、王子とオデーレがいながら獣の襲来も忘れ火も絶やして眠り込んでいるなんて、よっぽど傷の具合が悪い

に違いありません。

「そうだ、さつきは上手くいかなかったけれど、今なら」

クラリスは手をかざし、傷のありかを探り、見つけると、一生懸命を送りました。

枯れ木にしたように、桃色の光があふれ、今度は上手くいったようです。

「これでよくなってくれるといいんだけど」

こころなし顔色も良くなったようで、うなり声も静かな寝息に変わり、後はルピネーの体力に任せるしかありません。

「さて、こっちは・・・」

寒さにガタガタ震えている王子ですが、

「やっぱりとりあえずこれしかないか」

と、王子のマントを掛けてあげました。

「風邪ひかないように気を付けるのよ」

と言ってクラリスは自分の寝床に帰りました。

夜が明けて、

朝靄の中、小鳥たちのさえずる声に目を覚ましたクラリスは、うんと伸びをし、気持ちよく目覚めました。

「おはよう。快適な寝床をありがとうね」

クラリスは大木にお礼を言っつてうろから飛び降りました。

振り返ってみると、大木は見違えるように緑が輝いていました。

みんなの所に戻ってみると、

困ったことになっていました。

王子が横になったまま真っ赤な顔をしてうんうんうなっています。

「まいったな、こりゃ」

ルピネーが頭を掻いています。

「よう、クラリス。俺たちよりかはるかによく眠れたようだな」

ルピネーがニッコリ笑って挨拶しました。

なんだか傷はすっかり治ってしまったようで、元気いっぱいです。



それに比べて王子は・・・

「駄目だ。風邪をひいちまったらしい」

タベクラリスが心配したとおり、王子はひどい風邪をひいて起き上がれなくなっていました。

「ああ、王子様、しつかりしてえ」

オデーレがべたべたくつつきました。王子はうんうんうなうなうるさそうに反対を向いてしまいました。

「王子は動かせそうもねえし、どっちみちしょうがねえ、クラリス、ここは任せた。俺は馬車を探してくる」

ルピネーがさっそく歩き出そうとしました。

「おじさま、体は大丈夫？」

「ああ、もうピンピンしてるぜ。俺様の体力は大したものだろう！」  
と言つて、クラリスに小さく、

「夜中来てくれたんだろう？　ありがとうよ」  
と耳打ちしてウインクしました。

「じゃあな、頼んだぜ」

ルピネーは道に出て、ズンズン歩いていきました。

「ねえ」

オデーレが非難するようにクラリスに言いました。

「王子様を治してよ。あなた魔女なんでしょ？」

そう言われると面白くありませんが、クラリスは素直に王子の横に膝をつき、手を喉と胸の辺りにかざして桃色の光を当ててやりました。

王子の容態は、変わりないようです。

「ぜんぜん駄目じゃない」

オデーレが恨みがましく睨みました。

「その顔で睨まれるのは嫌だなあ」

クラリスはそっぽを向いて、ため息をつくつと、仕方なくオデーレに向き合いました。

「風邪の場合はケガの場合より難しいのよ。風邪というのはね、体

の中に入った悪い空気を体が追い出そうとして戦っている。熱や咳はそのため。だからむやみに症状を抑えようとしては駄目なの。体が悪い空気に負けないように力を与えてやるくらいしかできないわ」

「じゃあその悪い空気というのを追い出してやってよ」

「相手が空気ですからね、どこをどうするってことも出来ないのよ。オデーレは大げさにため息をつきました。

「あんまり役に立たない魔女さんね」

「どうも、すみません」

クラリスはフンと横を向きました。

何もなく時間が過ぎて、

「ねえ」

クラリスが思い切ったように尋ねました。

「あなたのお母さんで、どんな人だったの？」

オデーレはビクンとして、疑わしそうな目でクラリスを見ました。

「なんでそんなこと訊くのよ？」

「なんでって・・・、知りたいから・・・」

じーっと見つめられて、クラリスはいらいらしたようにつつけどんに言いました。

「私はね、あなたがオデット姫の妹だっていうのをまだ疑っているの。だから、あなたのお母さんが本当に国王の愛した人なのかどうか、知りたくて・・・」

「そんなことあなたの知ったことじゃ・・・」

「いいわよ、教えてあげる。」

私のお母様はね、それはもう美しい人で、優しくて教養があつて、お菓子を作るのが上手で、何より私を心から愛してくれていたわ。ちよつと少女のように夢見がちなところがあつたかしら？ よく外国の歌をきれいな声で小さな女の子のように楽しそうに歌ってくれたわ」

オデーレはフフフンとメロディーを鼻で歌いました。

「それがまたかわいらしくて、国王に愛されるのだって当然の本当  
にすばらしい人だったわ」

オデーレは誇りを持って心から言っているようです。

ちよつと嘘をついているようには見えません。

クラリスは本当なのかもしれないと、打ちのめされたようにうつ  
むきました。

「正直言つて、シヨックだわ。オデット姫のお父さんにそんな秘密  
があつたなんて・・・」

「私だつてそうよ。私なんか生まれてからずーっと自分が誰なのか、  
教えられずにきたんだから」

クラリスはそれもそうかと思いました。

どこかの貴族の娘かもしれないというあやふやな期待と、本当は  
邪魔者扱いされて捨てられたんだという惨めな思いと・・・、オデー  
レがこんな裏表のあるわがままな娘に育ってしまったのも当然かも  
しれません。

いえ、オデーレの場合、自分に正直すぎるのかもしれない。

「私あなたのことを誤解していたみたいね。ごめんなさい」

クラリスは笑顔を作つてオデーレに手を差し出しました。

「あらためてよろしく。私はクラリスよ」

オデーレは差し出された手を指先で軽く握つて、

「それじゃあ王子と姫に仕える魔法使いさん。よろしく頼みますね」  
といんぎんに挨拶しました。

クラリスは勝手に召し使いにされて内心カチンとしましたが、疑  
つていた後ろめたさもありません、なんとか腹の中だけで我慢しました。

王子と姫のしもべにされた魔法使いのクラリスは、お姫様の「お  
腹がすいたあ」のお言葉で辺りを探して木の実を集めてきました。  
豊かな森であり、知識も豊富でしたから、わりあい楽にたくさん集  
めることが出来ました。

水はすでに王子のために竹を使って即席の井戸を掘つてやってい

ました。

「魔法使いがいるって便利ねえ」

とオデーレは大喜びで山葡萄やたき火で蒸した豆をパクパク食べました。

王子は冷やしたハンカチを何度も取り替えて額を冷やしてやりましたが、熱は一向に下がりませんでした。

お昼を回った頃、パカラツ、パカラツ、と馬の走ってくる足音が聞こえてきました。

馬に乗ったルピネーが、あと二頭馬を従えて帰ってきました。

ルピネーの乗る馬はズんぐりむっくりの農耕馬で、馬車を引いていた馬とは違っていました。

「遅くなって悪い。近くに村があった。馬車は見つからなかったが、とりあえず王子を村に運ぼう」

ちよつと乱暴ですがまだうんうんうなっている王子を一頭の背中に縄でくくりつけ、もう一頭にクラリスとオデーレが相乗りしました。

オデーレは

「あーあ、王子様といっしょに乗りたかったなあ」

と文句を言いましたが、仕方ありません。

三頭は病の王子とルピネーの体重のためにゆっくり歩いていきました。

近くとは言うものの、けっこうな時間馬に揺られて、一行はようやく小さな村に到着しました。

ルピネーは入り口近くに一件ぼつんと建つ家に皆を先導し、馬を下りるとドアをノックしました。

呼びかけに答えて小さなしわくちやの狡そうな目つきをした老婆が出てきました。

「約束の半金だ。それから、とりあえず一晩分の宿代。ついでに食い物も何か頼む」

ルピネーはコートの内ポケットから財布を取り出し、けっこうな

額の硬貨を老婆に渡しました。

「ああ。この家は好きに使いな。あたしや妹の家に泊めてもらうからよ。後で向こうの嫁に食事を運ばせるわ」

老婆は年に似合わぬしゃきつとした姿勢でルピネーの乗ってきた以外の二頭の馬を引つ張って歩いていきました。

「もう少しまでもそうな人に頼めなかったの？」

クラリスが胡散臭そうに老婆の後ろ姿を見てルピネーに言いました。

「いやあ、最初に訊きに入っただがこの家でな、そしたらあの婆さん、さつさと段取りを決めて馬を借りに行つちまっつてな、断るわけにもいかんだろう？ けっこうなやり手婆だ」

お金も払ってしまったことですし、あきらめてここに宿を決めるしかありません。

ルピネーがかついだ王子を一つしかないベッドに寝かせ、クラリスがタオルを濡らして額に乗せてやりました。オデーレは、ああ王子様しつかりなさってね、とうるさいだけで何もしませんでした。

やっと落ち着いたところで、

「ねえ」

と、クラリスがルピネー一人を部屋の隅に呼んで言いました。

「きのう言い忘れたんだけど、あの御者」

例の鳥人間のことです。

「あれがオデーレの言っていた一人だけしゃべっていた紳士よね？ そうすると、一週間前からハルメイユーからこつちへ旅していたわけよね？ すると、私が湖で見た鳥人間とは別の鳥人間ということよね？」

「そういうことだな」

「そうよねえ・・・そつくりに見えたんだけど・・・あんなのが、もしかして他にもいるのかしら？」

「さしずめ魔王に仕える鳥軍団の幹部たちってところか？」

「そうか、白鳥に黒鳥にカラスに鳥人間。ロットバルトって鳥たち

の総大将なんじゃない？」

「そうか、奴の正体は案外鳥の化け物かもしれないねえな」

クラリスとルピネーが深刻に話しているところ、オデーレは王子のベッドの横に座って、ひたすら何もしないで王子の回復を祈っていました。

夕刻になって、老婆の妹の家の嫁というのが夕食を運んできてくれました。口はニコニコ笑っているながら目は猫のように意地悪そうな、老婆に負けず劣らず狡猾そうな女でしたが、嫁は一人で来たのではなくありませんでした。偉そうな警察の制服を着た男二人がいつものでした。

「怪しいよそ者が紛れ込んでいるという通報があつてな、身許改めするから出てこい」

二人は制服に負けず劣らず偉そうな鼻ひげを生やし、負けず劣らず偉そうな態度で命令しました。

奥の部屋からルピネーが慌てて戸口に駆けつけました。

「これはこれはお役人様、いったいどんなお調べで？」

警官たちは出てきた男のあまりの大きさに一瞬ひるみましたが、物腰の低さにすぐに威厳を取り戻し、オッホンと偉そうに咳払いしました。

「おまえ一人ではないだろう？ 他の者も皆出てこい」

ルピネーはいかにも困ったという風に頭を掻きました。

「いるにはいるんですが、ひどい熱を出しておりまして、ちよつとお見苦しくて旦那方のような立派な方々の前にお出しできる状態じゃありませんで、へい」

「女がいるだろう？」

「へ、女？」

ルピネーは、はて？と、とぼけました。

「旦那方は女をお捜しなんで？」

「いるんだらう？ さっさと出せ！」

「さーて、女、女、と・・・

ああ、おりやした！

「おい、クラリス！ お役人の旦那がお呼びだ。すぐに出てきなさい」

クラリスが出てくると警官たちはじろじろクラリスを観察しました。

「わたしの姪っ子でして、見ての通りまだまだガキで、女なんて呼ばた代物なんかじゃありませんで、へい」

クラリスがジロリと睨み、ルピネーが我慢しろと困った顔をしました。

「おい、もう一人いるだろう？」

嫁が狡そうな目でヒヒと笑いました。

「すみませんね旦那。なにせあたしら庶民は、ほら、お役人様にはさからえませんがねえ」

「おい、さつさと出さんか！」

ルピネーはチツと舌打ちすると、丸めていた背筋をシャキッと伸ばし、揉み手を両脇にぐつと下ろしました。

「お役人さんよ。ちよいと確認しておきてえんだがな、ここはまだベルーシアの領土だよな？」

「そ、そうだ」

警官たちは伸び上がった巨体に見下ろされて腰が逃げそうになるのをやせ我慢して答えました。

「じゃあ勝手に中を調べな。ただし、その結果どうなっても俺は知らねえぜ」

「な、なんだ貴様、その態度は、ぶ、無礼であろう！・・・」

「ん？」

「ヒ・・・」

警官たちはルピネーに一睨みされて完全に肝が縮んでしまいました。だが、なんとカルピネーの横をすり抜けて中に入ると、

「き、貴様こそ、その、た、態度、た、ただで済むと思うなよ！」

とわめいて奥の部屋に駆け込みました。

「なんなのかしら？」

「なあ？」

嫁の方はルピネーの怖い顔にすっかり震え上がってしまって、食器に乗せたお盆をガタガタ揺らしました。

ルピネーはひっくり返される前に引き取って、

「料金は十分払ってるよな？ まさか、不足だなんて、言わねえよな？」

「ハ、ハイ、もう、もちろんけっこうでございますわ」

嫁は逃げるように帰っていきました。

奥の部屋に踏み込んだ役人たちは、部屋中を見渡して、というほどの広さありませんが、ベッドが一つに、小物を置いた棚に、衣服を入れる行李が一つあるきりで、女の姿は見あたらず、ただベッドの上に若い男が赤い顔でうんうんうなっているだけです。

二人は目配せし合って行李を開けましたが、粗末な服がしまわれているだけでした。

となりの台所もざっと見回してみましたが、隠れられるような場所もありません。

「逃げたか？」

一人がおいと王子を示しました。もう一人もうなずき、

「おい、起きろ！」

乱暴に王子の掛け布団をはぐりました。

そこにも女、オデーレはいません。

「起きろ！ お・き・ろ！」

耳元で大声を出し、肩をガクガク揺さぶりました。

「ちよつと！ やめさないよ！」

部屋の隅から声がして二人はギョツと振り返りました。

壁がペロリとめくれて、・・クラリスが魔法でマントを壁に変身させていたのですが、オデーレが飛び出し、ベッドに飛び上がって



ガバツと王子をかばって覆い被さりました。

「見て分かるでしょう！ ひどい病気なのよ！」

警官はニヤリと笑いました。

「怪しい術を使いおつて、やはりおまえだな！」

オデーレの腕を掴んで王子から引き剥がそうとしました。

「いやっ、何するのよ、放して！」

「その手を離さない！」

クラリスが怒りにギラギラした目で警官たちを睨みました。

「怪しい術を使うのは、私なの」

指を向けると、オデーレの腕を掴んでいた警官の指がグニヤリと骨抜きになって曲がりました。

「うわああ」

警官は悲鳴を上げてひっくり返りました。

「おい、おまえら」

ルピネーがぬつと入ってきました。

「その男が誰か分からねえのか？」

「へ？ だ、誰なんでしょう？」

「あなた方、自分の主人の顔も知らないの？ ま、知らなくても無理ないけれど、その紋章くらい分かるんじゃない？」

クラリスに示されて警官たちは王子の剣の柄の紋章を見ました。

盾の半分に市松模様・色が付くと緑と白なのですが、の旗、半分に針葉樹の枝の交差した柄、そして盾の上には王冠が乗っています。

「こ、これは、我が王家の……」

「ついでにこっちの紋章もね」

見ると、ルピネーのコートの胸に、紺色の上に同じ紺色なので見づらいますが、天秤と船の帆をデザインした丸い刺繍がされています。

「ど、どこかで見たような？……」

「そ、有名よね？ ルピネー・ガドウ・ラズベリー子爵」

「ヒッ……」

二人は真っ青になって固まって、慌てて床に「へへー」とひね伏しました。

ルピネーがズイと顔を突き出しました。

「なあ、おまえら。自分たちが何やったのか、分かってるよなあ？  
あん？とすぐおまれて二人は

「ど、どうかご勘弁を」

と、床にめり込みそうなくらい額をこすりつけました。

「勘弁してほしいけど、どういふことなのか、説明してもらおうか  
？」

「そ、それは、その、あ、あの女です。あ、あの女を至急捕らえて  
連行せよと伝達がありました」

必死の思いの警官に指さされ、ベッドで王子に寄り添うオデーレ  
は真っ青な顔をし、ルピネーとクラリスは不審そうな顔でそんなオ  
デーレを見つめました。

## 第11章 女怪盗

「ハルメイユーのリムサコフ王家よりさような怪しい女を捕まえるように要請がありました」

と、警官は平伏しながら答えました。

「ハルメイユーから？」

ルピネーとクラリスは疑いの目でオデーレを見ました。

オデーレは慌てて、

「王家となんかなんの関わりもないわよお！」

と手を振りました。

「で、さような怪しい女というのは、どういう怪しい女なんだ？」

二人の警官は一人は痩せて骨張って、一人はがっしりして四角張っていましたが、同じ偉そうなピンと立った鼻ひげと同じ陰険そうな奥まった目をして、驚くほど印象がijsselよでしたが、主に痩せた方がぺらぺら流暢に話しました。

「年は二十歳くらい、スラリとしたかなりの美人で、黒髪で黒い瞳、ラピスかユークリナに向かったと見られております」

「おい、待て。おまえらの目は節穴か？ この女のどこが黒髪、黒い瞳なんだ？」

オデーレの髪は金色、瞳は明るい緑色です。

しかし、問われて警官はニヤリと笑いました。

「変装をしている可能性があります。それもかなり巧みに。何しろその女……」

いやいや、これは内密なんですがね、特別ですよ、といやらしい笑いを浮かべて小声で言っ

「怪しい術でニコライ王子をたぶらかし、まんまと王家の家宝『白鳥の涙』を奪い去った女怪盗ですからな」

「白鳥の涙？」

ううーん、と王子がうなって目を開けました。

「な、なんだ、それは？」

「おお、これは我が敬愛するジークフリート王子殿下、さきほどは知らぬことはいえたいへんな失礼を、なにとぞなにとぞお許しを  
「……」

王子は面倒くさそうに「いいから」とガラガラ声で言って

「詳しく話せ」

「ははー」。

『白鳥の涙』と申しますのはリムサコフ王家に代々伝わる家宝で、滅多に人前には出さないという秘宝であります。大きなダイヤモンドで、その輝きは中に星が入っているのではないかといわれるほど可憐な美しいものだそうで、女性用の銀の頭飾りに埋め込まれ、特に特別な行事のおりにお若い王妃様がまれに飾ることがあるのかないとか。まさに秘宝ですな」

「本当にあるのかどうか怪しいな」

とルピネー。

「はい」。

ところがその秘宝が盗まれたというので王家では大騒ぎ、ということも内輪の内々のことなんですがね。

それと言いますのは……」

と、王子を見て、ヒヒと、いやらしく笑って、

「あちらのリムサコフ王家でも王位継承者の長男ニコライ王子がお年頃、十七歳になられるそうですが、その花嫁候補を集めたパーティーをお開きになったそうで」

どこかで聞いたような話です。

「そこに、ふらりと、一人の女が現れたそうなのですな。もちろん、そのような素性の知れない女、なんの紹介もなしにお城に入れるわけはありませんが、とにかくその女、たいへんな美人であったそうで、おまけに、自分はお忍びで旅をしているユークリナ国のオデット姫であると名乗ったそうなのですな」

「なんだって!?!」

これにはみんなびっくりです。

「ユークリナで王女が行方不明になっているというのはハルメイユにも伝わっておりましたから、これは万が一のこともあると、もしこれが王女の名を語った偽物であるならばそれはそれでけしからんと、とにかく城の中に通じたそうです。ところが」

と、警官もすっかり得意になって、

「花嫁を捜しているニコライ王子がこの女を一目見てすっかり気に入ってしまったわれて、もう他の女など目にも入らぬご様子で」  
クツクツクツ、と笑って、

「王子はその女にべったりまとわりついて、女の方でも王子の気を引くようなそぶりを見せて、すっかり親密になってしまわれたんですな。」

そこで、女が『白鳥の涙』の話を出したのです。

こちらのリムサコフ王家には世にも美しい特別のダイヤモンドがあるそうで、ぜひ一目見てみたいものだ、と。

最初は王子も渋っていたのですが、女の気は引きたいし、女が、実は私は国を任せられる力のある頼りがいのある立派な王子様を捜している最中で、そのような宝をお持ちの王子様ならぜひ国をお任せしたいものです、なーんて言いましたもので、王子はもうメロメロで、それならば特別にお見せしましょうと、奥の宝物庫へ案内したのだそうです。

嚴重な鍵を開け、見張りの屈強な兵士を二人表に立たせ、中に入って、その秘宝を、見せてしまったのだそうです。

ところが女はあまり喜ばなかったそうで、なぜなら宝物庫の中では暗くて、ろうそくの小さな明かりだけでは本当の輝きが分からないうい、・パーティーは夜行われていましたのでね、もっと明るい場所で見たい、と言ったのだそうで、

王子も悩みに悩んで、女がすっかりすねてしまったので、仕方なく、会場へ持っていくことを承知したそうで、

女は大喜びで、それならば自分が頭に飾って他の方々にも見ても

らいましょう、これは若い王妃が身につけるものなのでしょう？と言われましたもので、それはつまり王子の妻になることを承知したということだろうと、王子はすっかり有頂天で、得意になってテイアラを付けた女をエスコートして会場の広間に戻ったのですな。

ちようどそこへ表で花火が上がりました、

・・・エー、王子殿下は花火はご存じで？」

王子は風邪がつかいのか「知らない」とブスツとして言いました。「はあ、さようで。我が国では花火を上げる習慣はございませんな。火薬という特別の薬品を丸めた物を空高く打ち上げまして、火薬が破裂し、大きな音と、美しい赤や青や白の光を発するという物です。よその国ではお祝い事のおりに打ち上げる習慣があるようですね。

エー、それで・・・

ちようど花火が上がりました、お客様方は皆窓にお寄りになつて花火見物を始めたのですな。

ところがこれが妙でして、花火というのはたいへん高価な物です、この日のパーティーで打ち上げは予定されていなかったのだそうです。それで警備の者が慌てて打ち上げていると思われる場所に行ってみたのですが、どこにも何も誰もいない。ただ空の上で見事な花火がポンポン破裂しているんですな。これはいったいどうしたかとだと怪しんだのですが、広間に集まったお客様方はそんなことはまるでご存じない、ただただああ見事なものだと感心して喜んで見物しておられたのですな。

ところが、そのうち様子が変わってきた。破裂した花火がピカピカ赤や青を光らせたまま、一向に消える様子がない。これは珍しい新型の花火かと喜んだのも束の間、一向に消えない光はやがてなにやら獣の姿に変わってきて、空を自在に駆け始めたかと思うと、窓に向かって突進してきた。お客様方がキャーッ・・・と逃げ出すと、花火の怪物は窓ガラスをすり抜け中に入ってきて、あっちこっちへ駆け回り人々を脅かし始めたのだそうです。

お客様方は逃げ惑い、警備の者たちは警棒やら槍やら繰り出して退治しようと、会場はもう大混乱で、ろうそくはみんな吹き消されなぎ倒され、真っ暗になってしまったそうです。で、真っ暗になったのと同時に花火の怪物の姿も消えて、新たに灯が運ばれてきて、ようやく会場は落ち着いたようですが、

その時になって気付いたので、例のあの女が王家の秘宝『白鳥の涙』のティアラごと消えてしまっていることに。

ここで考えが分かれましたな、

すなわち、花火の化け物が宝石ごと女をさらっていったという意見と、

実はあの女は魔女で、花火の化け物を操って会場を混乱させ、その隙に乗じて宝石を盗んで逃げたのだという意見。

さて、殿下、閣下、どちらだと思われれますか？

「そりゃあ、女が盗んで逃げたんだろうなあ」

とルピネーが言うと、王子はただ「うーん」とうなりました。

「はい、さようぞうで。」

ふつうそう思いますですな。

が、ニコライ王子は女は怪物にさらわれたのだと、頑固に主張しまして、よほどその女が気に入ってしまったわけなんですなあ。早く怪物から女を救出せよと、臣下に命令し、女と宝石を無事取り戻した者には報奨金を取らせると、お触れまで出しましてな、こうして我々も要請を受けてましてその女の行方を搜索している次第であります「ふーん、面白い話だな。」

まあ、話は分かったが、その女ってのは王子の思い人なんだろう？ それにしちゃおまえら、その女

と、ルピネーはオデーレを指して、

「の扱いは乱暴過ぎやしなかったか？」

「そりゃあ、だって、閣下」

と、警官はすっかり居直った感じで、

「誰もその女を本物のオデット姫だなんて考えてはおりませんので。」

実際のところニコライ王子だってそう信じているわけではありません。まい。見つけ出したってまさかお后に迎えるわけにはいきませう。せいぜい側室にするか愛人にするかくらいのもので・・・おっとこれは失礼」

とオデーレとクラリスにいやらしく笑って、

「オデット姫もそれは綺麗な方だったらしいですが、まあ残念ながらどこかでとくに殺されているだろうというのがおおかたの見方です・・・おっとこれはここだけの話にしてくださいよ。オデット姫は見事な黄金の髪、抜けるような白い肌、宝石のような緑の瞳をしている、というのは有名なところで、そもそも黒髪黒い瞳のあの女を本物のオデット姫だなんて思っていた城の者は一人もおりませんで、最初っからこの詐欺女を城に入れて逃げ道を断ち、動かぬ証拠を突きつけてご用である神妙にいたせと、こういっつもりでおりましたんでしよう」

「だがこの女がその偽オデット姫だったとして、どうしてこの姿で城に現れなかったんだ？ この姿で行けば本当に本物かとも思われたんじゃないか？」

「そこがその女の頭のいいところで、

女は最初から宝石を盗むつもりで、自分が疑われることは分かっていた。だったら、最初から疑われていたってかまわない、いやむしろ後で変装して逃げることを考えれば出来るだけ注目を集める印象的な格好をしていた方がいい。

それにもし、本当に本物のオデット姫が現れたら、どうなります？」

「そりゃあ、やっぱり大騒ぎになるか？」

「そうでしょう！」

警官は我が意を得たりと大得意です。

「別の意味でたいへんな騒ぎになってしまいます。かえって身動きできない状態になって盗みには不都合です。だから、女はわざとぜんぜん別な姿で現れてオデット姫の名を語ったんですよ。最初から



いかにも怪しいと睨まれながら、まさか大胆に王家の秘宝を盗み出そうなんて思いませんかでしょうからなあ！」

「どうやらこの警官、ただの小役人かと思っただら、なかなかどうして頭のいい男のようです。」

「そうかなあ、なんか話をややこしくしているだけみてえに思うがなあ・・・」

ルピネーは眉をしかませ顎をボリボリ掻きました。

「じゃあなあ、

おまえの睨んだ通りこの女がその女怪盗だったとして、もしこの女が、本物のオデット姫だったら、どうする？」

「へ？」

警官は一気に間の抜けた顔になりました。

「だってなあ、金髪に緑の目に美人と、オデット姫そっくりじゃねえか。おまけにいっしょにいるのが俺と、おまえらのジークフリート王子殿下だ。ついでに怪しい術を使う魔女までついてる。この女が実は本物のオデット姫で、何か理由があってリムサコフ王家から家宝を盗み出したんだとしたら、どうする、この女を逮捕してハルメイユーに突き出すか？」

警官たちは一瞬考え、顔を見合わせ、ブルブルと首を振りました。

「い、いえいえ、そんな、閣下のお連れの方を、まさか、盗人などと、いえ、とんでもないことで、はい」

「へへー、と二人はまた平伏しました。」

「じゃあこの女の疑いは晴れたんだな？」

「それはもちろんであります、はい」

「そうか。」

「よかつたな、オデット姫」

警官たちはオデールを見てまさかと顔を青くしました。

ルピネーは腰をかがめ、二人にそつと耳打ちしました。

「実はな、ユークリナで王位を狙っている悪い奴がいてな、身の安全のために俺たちが保護しているんだ」

いいか、これは絶対秘密だぞ！と念を押されて二人はまたへへーと言いました。

ルピネーは立ち上がるとクラリスにウィンクしました。

「おっといけねえ。さっきの話だがな、泥棒は俺たちじゃねえぞ。俺たちは今朝城を発ったばかりだ。」

「そうだ、それはいつの話なんだ？」

「はい！五日前の晩であります」

「五日前か。なるほど、こっちに向かってりゃあちようどこの辺りか。おまえらなかなか優秀な警官らしいな？」

「ははー。光荣であります」

「その優秀なところを見込んでだ」

ルピネーはポンと二人の肩を叩きました。

「昨晚俺たちは悪党どもに襲われてな、馬車を奪われちゃった。どこかこの先に乗り捨てられているだろうからおまえたち、ぜひ至急探し出してくれないか？ でかい馬車だ、見つければすぐに分かる」

「は！ ただちに捜索にかかります！」

警官たちはやっと解放されると、最敬礼して急いで出ていきました。

「どうしてオデーレをオデット姫だなんて言ったの？」

クラリスが尋ねました。

「あいつらは、どうせしゃべる」

ルピネーはおかしそうに言いました。

「ひと月後俺たちが戻ってきて本物のオデット姫が現れたとき、これまで姿を消していたことをどう説明する？ 命を狙われて逃げたということにしておいた方が話が楽だろう。それに俺たちがオデット姫といっしょにいるということになれば万が一泥棒の件でもアリバイが成り立つ。」

「と、いうことだな」

「と、オデーレに、」

「よろしく頼むぜ、オデット姫」

オデーレはフンとすねてそっぽを向きました。

「いやよ、私、姉さんの影武者なんて」

「ハハハ。別に何もしなくていいさ。周りに勝手にそう思わせておけばいいんだ」

ルピネーはふと心配になって、

「おいおい待てよ、もしかしておまえ、本当にその女怪盗なんじゃあるまいな？」

「違うわよ！」

オデーレは怒って言って、

「だいたいね、こそこそ隠れるからあらぬ疑いを掛けられるのよ！」と、クラリスを睨みました。

「あなたがどうしようどうしようって私に助けを求めたんじゃない」クラリスも両手に腰を当てて頬をふくらませました。

「ひとのせいにするの？」

「あなたこそ」

うーんと王子がうなったので皆黙って王子に注目しました。

王子はいつの間にかまた眠っていました。

三人はしーつと言い合い、王子を残してそつとなりの部屋で夕食にすることにしました。

翌日早朝。

「ダイヤだ、幻の『白鳥の涙』だーっ！」

と叫ぶ王子の声で三人は目を覚ましました。

となりの部屋でルピネーはごろんと床に直に寝転び、クラリスは得意の魔法で蜘蛛の糸のハンモックを作って宙で寝て、王子の寝室でオデーレは行李に入っていた衣服を全部引っぱり出して布団にして王子のベッドの隣で寝ていました。クラリスのマントは、オデーレがすっかり気に入ってしまったってまだ返していません。

「ダイヤだ！ 幻の『白鳥の涙』だーっ！」

と叫んでベッドに立ち上がった王子は、ふらふら揺れて、へなへ

な倒れ込んで、眠い目をこすって起きたオデーレに慌てて支えられました。

「なんだなんだ、どうした？」

とルピネーとクラリスが駆け込みました。

「や、やあ、おはよう、みんな」

王子はすっかり体力をなくしてへなへなになっていましたが、目は爛々と輝き、口元は危ない感じでへらへら笑っていました。

「僕はすごいことを思いついちゃったよ。そのダイヤモンドだよ、女怪盗を捕まえて、ハルメイユーの王子に渡して、お礼にその『白鳥の涙』というダイヤモンドをもらうんだ！」

「どうしてそうお気楽な発想が出来るの？」

クラリスがあきれて言いました。

「泥棒を捕まえたって、盗まれたダイヤモンドをくれるわけじゃないやない」

チツチツチツ、と王子はカッコつけて指を振りました。

「その王子は心からその女怪盗を愛してしまっているんだろう？」

だったら彼女を手に入れるためにダイヤモンドを差し出すくらいするさ！ 愛する女性のためにもっとも大切な宝を犠牲にするなんて、その女怪盗も王子の真心にきつと感動して王子を心から愛するようになるさ！」

「それで、あなたは彼女を人質にして、彼女が欲しければこのダイヤモンドをくれ、と言うの？ それじゃ強盗じゃない？」

「イヤなこと言うなあ」

と王子はちよつと顔をしかめました。自分のすばらしい思いっきの方にうなずきました。

「これはね、気持ちの問題さ。その王子だって僕の話の聞けば同じ境遇にある者どうし、きつと気持ちよくダイヤモンドを譲ってくれるさ」

一方は愛する女のためにダイヤモンドを失い、一方は愛する女とダイヤモンドを両方手に入れようと言うのですから、ちよつと不公平に思われま

す。

でも王子はそんな些細なこと気にもとめないで、さーてどうやって女怪盗を捕まえようかと知恵を絞り始めました。

「で、どっちに行くんだ？」

とルピネーが訊きました。

「女はラピスかユークリナに行くつもりだと言っていたそつだ。さて、どっちに行くかね？」

王子はうーんうーんと考えて、

「どっちにしよう？」

とクラリスに訊きました。

「なんでわたしに訊くのよ？」

「いや、なんとなく・・・」

と王子は自分で首をひねりました。

「それじゃあ言っただげるけど、ユークリナに向かった方が無難ね。どうせもうペテロブラーグなんて行けっこないでしょう？」

「うーん、そつだなあ・・・でもなあ・・・」

王子はどうにも煮え切りません。

「ペテロブラーグよお！」

オデーレが断固として言いました。

「ねえ、王子様あ、ペテロブラーグに連れていってくれるんでしょっつ。」

と、またオデーレのお色気作戦が始まりました。

「うーん、どうしよう？ ペテロブラーグに行きたいことは行きたいんだけどなあ・・・」

「王子」

ルピネーが言いました。

「本気でその女怪盗を捕まえたいんなら、やっぱりペテロブラーグに行くべきだな」

「どうして？」

クラリスが不満そうに訊きました。

「ラピスに行くと言っただからってペテロブラーグに行くとは限らな

いじゃない？ 他にも行きそうな大都市はいくつもあるわ。だいたい、これからどうやってペテロブラーグに行くって言うの？ 日程は遅れている、馬車もない。ひと月後に間に合わなくっちゃ意味ないのよ？」

「そうだなあ。」

だが、俺は女はペテロブラーグに向かったと思うね。女が宝石を欲しがるのはそれを身につけて人に見せびらかしたいからだろう？ と、オデーレに同意を求めると、オデーレはもちろんと答えました。

「だがそれだけ名の通った宝石となるとそうそう人前に出せるものじゃない。じゃあ金にしようかと思えば、やっぱり買い手は限られてくる。金庫の奥にしまって自分一人で眺めて楽しんでいる大金持ちのコレクターだ。女が誰かに頼まれて盗んだのならまだしも、そうじゃなく、これから買い手を捜すとなれば、そういう怪しげな取引を請け負う宝石商は、やっぱり一番の大会ペテロブラーグだろう。あそこならその手のコレクターの貴族もいくらでもいるだろうしな」

「なるほど」

と皆感心しました。

「さて、王子殿、どうする？ どっちにしるこれは賭だ、安全策を採ってユークリナに向かって引き返すか、一か八か女を追ってペテロブラーグに行くか？」

王子はうーんと考えて、

「行こう、ペテロブラーグへ！」

と力強く言いました。

「でも、間に合うの？」

クラリスはまだ不満でした。

「ただでさえ力カッサスは難所なのよ？ 病気でフラフラの王子とお屋敷から出たことのないようなオデーレお嬢様を連れて、いったいどうやって力カッサスを越えられるって言うのよ？」

王子もすぐるようなまなざしでルピネーを見つめました。

ルピネーは腕を組んでもつたいぶって、

「ま、手はある」

と、ニヤツと笑いました。

「秘密のルートがあるのさ。ただし、金がいるがな。クラリスの分は俺が出すが、オデーレの分と自分の分は、王子が出すんだぜ」

「お金……」

王子は情けない顔になりました。

「僕の金貨は無事戻って来るんだろうか？……」

「それ、出しちゃいなさいよ」

クラリスが行李の上に畳んである王子の上着を指さしました。その内ポケットにはロツトバルトからもらった大きな金のメダルがしまわれています。

「ただのお金じゃないわよね？ それ一枚で金貨二十枚くらいの価値はあるんじゃない？ ルピネーおじさまに預けて両替してもらいなさいよ」

「い、いやだよ！」

王子は思わず身を乗り出して上着を抱え込みました。

「これは僕の宝物なんだ。これだけは最後の最後まで手を着けないぞ！」

「あっそ。それじゃあ無事金貨ごと馬車が見つかるのを祈っているのね。そうでなきゃ、旅はここまでね」

朝食を終えるとルピネーは馬を借りる商談に出かけていきました。馬車が見つからない場合に備えて、カカツサスのふもとまでか、お城までか、とりあえずそれだけの距離を走れる馬の用意です。

しかし、間もなく、昨夜の警官二人組が大いばりでルピネーの六頭立ての馬車を率いて戻ってきました。

「森の奥に乗り捨ててあったのを一晩がかりで探し出してきましたぞ」

自分で探したのかどうか知りませんが、まあお手柄です。

「金貨金貨、僕の金貨！」

王子は外に飛び出すと大急ぎで馬車の後ろの荷台のふたを開けました。

王子の大きな二つのトランクがありました。

「ああ、あつた」

王子は安堵の息をつき、金貨の袋を入れてあつた方を引っぱり出し、ふたを開きました。

「あれ、あれ、あれ？」

王子は中の服だの下着だのを引っぱり出しました。

「そんな、嘘だ！」

もう一方のトランクも調べてみましたが、

「ない・・・、僕の金貨が、ない・・・」

王子はすっかり呆けた顔でへなへたとへたり込みました。

「そ、そうだ、おい！ おまえたち！」

王子は警官たちに詰め寄りました。

「おまえたち、僕の金貨を盗んだらう！」

「と、とんでもない、王子殿下のお持ち物に手を着けるなど、とても恐れ多くて。どうせ盗むのなら分らないように一二枚・・・、あ、いやいや嘘です、絶対に我々ではありません！」

二人は必死に否定しました。バックにルピネーが睨みを利かせていることですし、嘘ではないようです。

「そんなあ、ああ・・・」

王子はすっかり打ちのめされ、クラクラ倒れそうになるのをオデレに支えられました。

「ちくしょう、僕の、僕の金貨・・・、いったい誰が盗んだんだ？・・・」

クラリスはたぶんあの鳥人間が盗んでいったのだらうと思いましたが、目的は分かりませんが。

「どうするの、王子？ あきらめて帰る？ それとも胸のその金貨



を出す？」

王子は服の上から金メダルを握りました。

王子が初めて持った自分の財産です。

お金を持つことの嬉しさを教えてくれた王子の大事な宝物です。

肩を支えてくれていたオデーレが心配そうに王子の顔を覗き込んでいます。

王子はオデーレに弱々しく微笑みました。

「安心してください。僕はあなたをペテロブラーグにお連れしますよ」

王子は胸から金メダルを取り出し、金メダルは昼の光を浴びてまぶしくピカリと光りました。

王子はそれをルピネーに渡しました。

「これで僕とオデーレさんをペテロブラーグに連れて行ってください」

ルピネーは金メダルを受け取り、手のひらに載せて重さを確認しました。

「うん、こりゃあ金無垢に間違いなさそうだな。これなら百ルーシ金貨三十枚の価値はある。確かに預かったぜ、王子。旅費に關しちやもう心配はいらないぜ。」

「・・・うん？ こいつは・・・」

金メダルを調べていたルピネーは裏側を見て眉を険しくしました。

「こいつは、間違いねえ、ジャローム將軍の戦勝記念メダルだ！」

おい王子！とルピネーは怖い顔で王子に問い質しました。

「これは城の宝物庫から出た物じゃあるまい？ これを渡したのは、ロットバルトか！？」

王子はルピネーの気迫に押されてただうなずきました。

「そうか、あの野郎、あの話をしたから・・・」

なんなの？とクラリスも心配そうに訊きました。

ルピネーは顔をしかめ、うん・・・と言葉を濁しました。

「面白い話じゃあねえ。あいつがどういいうつもりで王子にこれを渡

したのか知らねえが、ま、そのうち話してやる。ただな、これは王子が持っているべき物じゃねえ、これは血塗られた忌むべき金メダルだっただことだ」

## 第12章 カカツサス越え

馬車を取り戻した王子一行は昼から出発し、真夜中過ぎ、予定より二日遅れてカカツサス山脈のふもと、ウロル国のモロロフ市に到着しました。

カカツサス山脈の登山口として宿屋の多いなかにぎやかな町のはずですが、真夜中ですのでそのにぎわいは感じられませんでした。

ただ、眠い目をこすって馬車から降りると、満月から四日月の光に照らされて目の前に青い巨大な岩の連なりが天に向かって遙かに伸びていました。

王子は眠気も吹っ飛び口をあんどりと開けて、

「こりゃあ、無理だ、と、思いました。」

翌朝になって表に出て見てみると、改めて山脈越えの困難さが見えて分かりました。

岩ばかりと置いていた山肌も、下の方は緑の木々が覆っていました。それが三分の一ほども上がるとぱったり緑がなくなって、白い岩肌が露出するようになって、さらに上に行くと白が空に混じるように青に変わっていき、一番上、のけぞるように見上げると、白い雪がギザギザの頭を覆っていました。

「てっぺんは涼しいぞ。見ての通り冬だからな」

ルピネーも出てきて王子に並んで山を見上げました。

「本当にこれを越えられるんですか？」

「ああ。俺は嘘は言わねえ」

王子はルピネーがまた六頭立て馬車の暴走運転のような無茶をするんじゃないかと心配になりました。

ルピネーは笑って、

「オデーレに無茶をしろつたつて無理だろう。それじゃあ俺は山越えの算段を付けに行ってくるから、二人にも言っちゃんと腹ごしらえしておけよ」

と、一人出かけていきました。

「ううん、王子様あ、いけませんわー・・・」

などと寝言を言いながらオデーレがぼんやり目を覚ますと、クラリスがニコニコしながら覗き込んでいました。

二人は相部屋でした。

「なによぉ〜」

オデーレはムスツとして睨みました。

「あなたのこと少し見直しちゃった。警官たちが王子を無理矢理尋問しようとしたときあなた飛び出してきて王子をかばったでしょう？」

「それが何よぉ。そんなの当然じゃない」

「うん。だからね、あなたのこと見直したの」

クラリスはニコニコニコしながらオデーレを見えています。

オデーレはなんとなく頬を赤くして

「なんなのよ、この子」

と、布団を鼻まで引っ張り上げました。

「オデーレは本当に王子が好きなのね？」

「そうよ。王子様はわたしの王子様だもの」

「うん・・・、そうなんだあ・・・」

クラリスは困った顔をしました。

「でも王子がオデット姫を好きなのは知っているでしょう？」

「そんなの関係ないわ。私の方がずーっと王子様を好きなのに決まっているわ」

「王子がどうしてもオデット姫と結婚しなくてはならないとしても？ それが王子自身が決めたことだとしても？」

オデーレは黙ってしまいました。そんなこと、信じないのか、考

えたくないのか・・・

「オデット姫はあなたのことからやましいでしょうねえ」

「なによ、それ」

オデーレは怒ってクラリスを睨みました。

クラリスは静かな目で少し悲しそうなほほえみを浮かべてオデーレを見ていました。

「オデット姫は好きな人なんていないって言っていたわ。信じられる、二十歳にもなる娘が恋をしたことがないなんて？」

「王女になる人ですものね、どうせわたしたちふつうの娘とは心の造りが違うのよ」

「うん、そうね。でもね、きっとオデット姫は自分で自分をそういう風に作っているんだと思うわ。だって、王女は勝手に人を好きになつたりできないから」

オデーレは眉をしかめてクラリスを見ました。

「王女の結婚は国の将来をかけた大事なお仕事ですものね、どんなにすてきな人がいてもそれが王女の結婚相手としてふさわしくなければ、あきらめなくてはいけないわ。逆に、王女の結婚相手としてふさわしい人ならば、それが心になわなない相手であつたとしても、王女としてその人と結婚しなくてはならないわ。だから、オデット姫は自分で恋をすることを禁じていたのじゃないかしら？」

「いやね、そんなの・・・」

オデーレは布団の中でポツリと言いました。

「だから、オデット姫は素直に人を好きになれるあなたがとつてもうらやましいと思うわ」

クラリスはまるで姉のようにオデーレを優しく見つめました。

オデーレはそんなクラリスのまなざしにポーツとなつて、

「なんなのよ、あなた、子どものくせに」

と睨みましたが、なんだかとてもかわいらしく見えました。

クラリスはニツと笑って、

「さ、お嬢様、起きてください。朝食を取って、旅立ちのご準備を」

パアーツとオデーレの布団をめくりあげました。

三人で朝食を済ませると、上機嫌のルピネーが帰ってきました。

「さーて、めしめし。おまえたちは出発の準備をしておけよ。早めに昼を食ったら出発だ。王子、荷物は一つにしておけ。馬車はここまでだ。残りは宿に預けておけ。クラリス、オデーレを連れてもう少し歩きやすい服と靴を買ってやってくれ。山越えは全部歩きだからな」

ルピネーはやけにのんびりしていました。

「いい加減に教えてくれない？」

クラリスが三人を代表して言いました。

「どうやってカカツサス山脈を越えるの？」

「うん、まあ、しょうがねえ、教えてやるか。」

山の中を通る秘密の抜け穴があるんだよ。多少登ったり下ったりはあるが、山を登ることを考えたらぜんぜんどうってこたあねえ」「なーんだ」

みんな拍子抜けしました。

「そんな便利な道があるなら何も心配することなかったじゃない」

「それがそうもいかねえんだな。後は実際行ってみてのお楽しみだ。さ、俺に朝飯を食わせてくれ」

ルピネーはクラリスに銀貨を三枚渡すと手を振って追い払いました。

みんな揃って早めの昼食を取ると、ルピネーはみんなを町外れの薄汚れた暗い感じのする狭い通りに案内しました。

看板も何もないボロ家のドアをノックすると、のぞき穴から目つきが悪い目が覗いて、ルピネーを確認するとドアが開けられました。狭い宿屋の食堂みたいところに三人のやせ細ったギョロリと白目の多い目つきの悪い若い男と、ドアから覗いたこの家の主人らしき初老の男がいました。

「四人だな？」

初老の男がしつかり確認して言いました。

「六百ルーシ、前金だ」

やせ細った節だらけの手を差し出すと、ルピネーは金貨六枚を乗せてやりました。

「まいどうも」

男は無愛想に言ってさっさと奥の部屋に入って行って金庫にしまいました。

「ずいぶん高いな。なんのお金だろう？」

と、王子はクラリスに耳打ちしました。

オデーレは目つきの悪い男たちにすっかり怯えて王子にべったりしがみついています。

男が戻ってきました。

「それじゃあ旦那方、こいつらが案内いたしやす。お若い旦那さん、荷物はこいつらに預けなせえ」

三人のうち一人がズイと前に出て手を出しましたが、王子は用心して渡そうとしません。

「王子、大丈夫だよ、荷物を渡しな」

ルピネーに言われて渋々渡しましたが、王子はついついルピネーも仲間になって盗賊仕事をやるうというんじゃないだろうかと疑ってしまいました。

「それじゃあ裏からどうぞ。どうぞ、お気を付けなすって」

一人が先頭に案内し、ルピネーたちが続き、後から荷物を持った一人ともう一人が続きましたが、王子はいつ背後から襲われるかと気が気ありませんでした。

裏口のドアを開けようとして先頭の男がふと振り向きました。

「旦那、でけえなあ。こんな馬車しか用意できなかったが、怒らねえでくだせえよ」

と、念を押してドアを開きました。

そこには狭い裏通りにわらやら樽やらを積んで走る荷馬車が用意

されていきました。引く馬はずんぐりむつくりの農耕馬です。

「まあ、別に怒りゃあしねえがな」

ルピネーは苦笑して、

「俺が乗るのは無理だろう。俺は歩きでいいよ」

「やっぱり。すみやせんねえ」

男はひくひく不気味に顔をひきつらせましたが、どうやら愛想笑いしているようです。

「さ、おまえらは乗れ」

「えー、こんなのに乗るのー？」

オデーレが思いつきり不満そうに言いました。

「どうしてあの馬車を使わないのよお？」

オデーレがブーブー言いましたが、

「いいから、乗れ！」

ルピネーに命令されて、先に乗った王子に手を引つ張り上げられて、仕方なく乗り込みました。

クラリスも乗りましたが、王子の重いトランクを肩に担いだ男を見て、

「あなたは乗らないの？」

「滅相もねえ。お客様方と同じ席になんて乗れやしませんよ」

「そう？　じゃあ荷物を載せなさいよ。わたしは歩くから」

と、荷台から下りました。

「そんな、お客さん、困りやす」

と、男は本当にどうしようか困りましたが、

「いいよ、載せるよ。こっちの荷物は俺が運ぶから」

と、ルピネーはひょいとクラリスを肩に担ぎ上げました。

男はびっくりして仲間と顔を見合わせ、

「お客さんたち、いい人たちだなあ」

と感心して、荷物を載せさせてもらうことにしました。

出発した馬車はどんどん寂しい方へ進んでいき、建物が途絶えて森の中に入ると、鬱蒼と繁った樹木までなんだか真つ黒で湿ってい



て、陰気な、いかにも山賊でも出てきそうな雰囲気になってきました。

馬車はゴトゴトゴトゴト、やがて緩い坂道を上っていったかと思うとどんだん坂がきつくなつて、荷台に座っている王子とオデーレは滑り落ちそうに体が斜めになりました。

山頂が見えないほど巨大な岩の隆起が間近にどーんと迫り、そこはもうカカツサス山脈の一部なのでした。

そうして二時間くらい進んだ頃、

「旦那方、着きやしたぜ」

杉の大木の間にはシダやら何やら塗れた緑がびっしり生い繁った中、巨大な鉈でばつさり切り削ったように岩が背丈の三倍ほどもバツクリ割れているところがありました。

「おい、交代だ、お客様だ」

一人が声をかけると、岩の割れ目の中から同じようにひよるひよる痩せて目つきの悪い男が一人出てきました。

出てきた男は王子とオデーレが下りると馬を引いて今来た道を引き返していきました。

「それじゃああつしはここで。親切なお客様さん方、どうぞお気を付けて」

一人はここに残るようで、見ると割れ目の内側にちょっとした窪みがあり、粗末な木の椅子が一脚ありました。

クラリスの不思議そうな視線に、

「間違つて人が入り込まねえように見張ってるんですよ。中は、危険でやすからねえ」

と、リラックスしたのか割とふつつの笑顔で答えました。

入り口からもう鬱蒼とした木に日差しを遮られて割れ目の奥は真つ暗です。

「こんなところに入るのお？」

オデーレは早くも怖じ気づいて王子にしがみついています。

「大丈夫ですよ」

と言いながら王子もかなり緊張して、硬くオデーレの手を握りしめました。

先に立って男がランタンに灯を入れて先を照らしました。

「足下はかなりでこぼこしてしておりやすんで、十分気を付けてくだせえやし」

と、王子とルピネーにも灯を入れてランタンを渡しました。

「さあ、行きやすよ」

男を先頭に一行は洞窟の奥へ進んでいきました。天井も高く、道幅も二人分くらいはあって、それほど狭い感じはしません。ただ道が右へ左へ緩やかに蛇行しているのですが、その曲がるいちいちにゴツゴツした岩の壁がせり出してきた、ランタンの明かりも届く範囲に限られてもいて、先がどうなっているのか見えず、入口が遠くなるにつれだんだん不安が増していきました。

しばらくすると穴が二つに分かれていました。

先頭の男は手に変わった道具を持っていました。

木の枠に縦に細い軸が十五本ほど並び、横に板の仕切りが三十枚ほども並んでいます。横の板に仕切られた縦の軸に丸い玉が通されていますが、仕切りによってその数が二つであったり三つであったり五つであったりと違っています。最初の仕切りは二つで、黒く塗られた玉の左の方に白く数字の「1」が書かれています。男がその玉をクリツと回すと、カチリと音がして玉がひっくり返って白い玉に黒く「1」と書かれた姿になりました。

男は左に進み、ルピネー、クラリス、オデーレ、王子、それからトランクを担いだ男が続きました。

しばらく行くとまた道が分かれ、今度は三つの穴が開いていました。

先頭の男は木枠の二番目の仕切りを確認し、今度は三つの玉の真ん中の「2」と書かれた玉をカチリとひっくり返して白くして、真ん中の穴に進みました。

「おいおい、もしかして・・・」

後ろから様子を覗き込んでいた王子が不安に駆られて尋ねました。

「この先こうしていくつもの道に分かれているのかい？」

「その通りで、お若い旦那」

道案内の男が怖い声で言いました。

「この穴は自然にできた道でやして、あつしらもどの道がどう続いているのやら全ては分かっておりやせん。ですから旦那方、絶対にあつしの後を付いてきて、絶対にはぐれちゃあいけやせんよ。もし一つでも間違つた道に入ってしまったら、迷うだけ迷って餓死しちまいますからね」

王子とオデーレは「ひゅっ・・・」と震え上がりました。

道はどんどん下っていき、乾いていた地面がだんだんと湿つてきて、冷気が重く肌にまとわりついてくるようになってきました。

疲れたー、と、例によってオデーレが言い出しました。

「休みたいー、戻りたいー、お日様を浴びたいー、もうイヤ、ペテロブラーグなんて行かなくていいー！」

「まったく面倒くせえな。置いてっちまうぞ」

「エーン！」

オデーレは大声を上げてペタリと座り込んでしまいました。

「オデーレさん、泣かないで、僕がいるじゃありませんか」

王子はギョツとオデーレの手を握って励ましました。

オデーレはヒックヒックとしゃくり上げながら、

「でも王子様あ、わたし、もう疲れちゃった」

クラリスがあきれて言いました。

「そんなんでよく力カツサスを越えようなんて思ったものね。あきらめて立ちなさい」

オデーレはヤダヤダと駄々をこねて、

「おんぶ」

と王子に甘えました。

「やめとけ」

ルピネーが言いました。

「こんなところで転ぶと大ケガするぞ」

「お若い奥様」

案内の男が言いました。

「もう少しでも辛抱くだせえ。この先をもう少し行くと、お嬢様に喜んでいただけそうな物がございますんで」

奥様と呼ばれてオデーレはちょっと機嫌が良くなりました。王子に手を取られて立ち上がります。

歩き出すと、

「よく耳を澄ましてごらんせえ」

耳を澄ますと、ピチヨン、ピチヨン、と水滴の落ちる音がします。

歩いていくと、

「まあ！・・・」

オデーレばかりでなくクラリスも王子も感嘆の声を上げて立ち尽くしました。

ランタンの黄色い光を浴びて、開けた空間につるつるの乳白色の何とも奇妙な形をした柱が幾本も天井と床から伸びています。

「これは鍾乳石という物でござえます」

土に含まれる白い石が地下水に溶けだして岩肌からしみ出し、長い長い年月を重ねて固まっていった物です。

天井から冬のつららのようにぶら下がってきた物、地面にしたたり落ちてタケノコのように生えだしてきた物、ろくそくを何百何千と溶かし落としたような、自然ではあり得ないような、それでもやつぱり自然の驚異を感じさせる奇観が展開されています。

「この先にもっとすごい物がありやすすんで」

自慢げな言葉通り、その先には高い天井の亀裂から大量の水が流れ落ちた瞬間を固めたような鍾乳石の滝がありました。

ただ、怖いのは、その滝は地面の亀裂の底に果ても見えずに流れ落ちていて、もし滑り落ちたら地獄の底まで落ちていってしまいそうな気がします。

オデーレは当然王子にしがみつき、王子も「大丈夫大丈夫」と自分にも言い聞かせながらオデーレの肩を抱きしめました。

それを冷ややかな目で見ながらクラリスは、「新婚旅行には打ってつけの場所ね」

と言つて、オデーレを大いに喜ばせました。

「もうちよつとでござえやすよ。今晚の宿に着きますんで」

「まあ、宿屋があるの？」

すっかり新婚気分のオデーレは疲れなんかすっかり飛んでいつてしまったようで、目をキラキラ輝かせました。

外の景色がまったくくないので時間の感覚が狂ってしまいましたが、六七時間は歩いたでしょうか。

「いや、まだ四時間どころだな」

ルピネーは胸ポケットからジャラリと鎖の付いた金の懐中時計を取り出しました。

「時計じゃないですか！ いいなあー」

王子の城には懐中時計どころか日時計だけで機械時計は一つもありませんでした。

時刻はちよつと六時になるところでした。

洞窟の中の宿屋は、乾いた岩をくり抜いて作られていました。元々あった穴を使い勝手がいいように形を整えたのでしょう。鍾乳石は洞窟全部にあるわけではなく、岩のトンネルの所々、地下水脈の通っている近くに出来ているようです。

宿では床の敷物、椅子の腰掛け、敷き布団に掛け布団と、布の代わりにすべて獣の毛皮が使われていました。湿気が多いため布はすぐにじめつと冷たくなってしまふのです。

明かりも最小限に抑えられ、これは換気が悪いせいです。

宿は女の人たち三人で営業されていました。

やっぱり痩せて目がギョロリとしています。それがこの人たちの人種の特徴で、男の人たちの目つきが悪く感じられたのはこの人

種を見慣れないのと、暗いところでの生活が長く、外の光が眩しかったせいでした。彼らにもお客たちに対する警戒心が強くあったのかも知れませんが、うち解けた今では表情もおだやかで、目も暗いところでパツチリ開いて、純朴な好青年と見えました。

食事はハムとチーズとワインがメインで、なかなかの味でした。

「ここは冷たいんで肉や酒の保存には打ってつけなんでやすが、乾き物は駄目でしてね」

というわけでパンはありませんでしたが、ルピネーと王子は旨いワインに大満足で、オデーレもお付き合いで軽く飲んでほろ酔い気分で見るとはしゃいで、お酒の飲めないクラリスは一人仲間はずれになってしまいました。でも女将さんがソーダ水のヨーグルトアイスを作ってくれたのでクラリスもすっかり満足しました。

「なーんだ、それで六百ルーシか。これならそう高くもないな」

王子も浮かれ気分で存分に旅の楽しさを味わっていました。

「すみませんねえ。あつしらは土地もねえ、他に職もねえで、こういう稼ぎ方をするしかねえんで」

案内の男、ジローという名だったので、恐縮して言いました。「なーにを言うんだい、最高じゃないか！ 観光地で売り出せばお客なんていくらでも集まるぞお！」

王子がお酒の勢いで言いましたが、ルピネーはうむとうなずきましました。

「そうだよな、そろそろ考えてもいい時期だろう」

ルピネーはジローに笑顔を向けました。

「良ければ親父殿に話してみるが、どうだ？」

「親父殿・っってえと、大伯爵さままで？」

ジローは嬉しいのと不安なのと、複雑な表情で女将さん、彼女はジローの奥さんで、もう一人の案内人のお姉さんだったので、彼女に意見を求めました。

「あたしは、そうしていただいた方がいいと思うよ。子供らにずっと穴の中の生活はさせたくないからねえ」

鍾乳洞がどんなに神秘的で美しくても、ずうっと地下の穴の中で生活しているのは体の健康には良くないでしょう。二人の間にはまだ子どもはいないようですが、子どもにとってはなおさらでしょう。「じゃあ、いいな？」

「へい。爺様にはあっしから話しておきやす」

爺様というのはあのがめつい老人のことでしょう。

ルピネーはがっしり大きな手でジローの手を握り、ジローも嬉しそうに笑ってしっかりと握り返しました。

今ひとつ事情の飲み込めないクラリスは隙を見てそっとルピネーに尋ねました。

ルピネーは言いづらそうに言葉を濁し、

「まあ、なんというか、俺たちは彼らには借りがあるんだ」

とだけ言いました。

俺たちというのがルピネーのどの範囲を指すのか、クラリスには分かりませんでした。

四人は木のベッドの上で大きな熊の毛皮の布団で寝ましたが、寝転がってみると起きていたときにはさほどに感じられなかった冷気が首から、足から、じわじわ沁みてきました。

「ああ、寒いわ」

とオデーレはまだクラリスからマントを借りっぱなしのくせに言っ  
つて、

「王子様あ、いつしよに寝ましょおー」

と、簡単な仕切りの向こうの王子に甘えた声で誘いをかけましたが、王子もさすがにそこまで新婚ごっこにつき合えず、真っ赤になっ  
つて黙っていました。

代わりに、クラリスがさっさとオデーレの布団に潜り込んできま  
した。

「こら、なんなのよ？」

「寒いよ！ わたしだってー！」

クラリスはオデーレの巻いている火龍の毛のマントに潜り込んで、オデーレに体をくっつけました。

じーっとしていると、

「あんだ、いい匂いがするわね」

とオデーレが言いました。

「そりゃあ、わたしはバラの精の娘ですからね」

「フーン・・・」

またしばらくして、

「あんたって、けっこうかわいいわね」

「それはどうもありがとう。光栄だわ」

「あたし、姉さんより妹が欲しかったわ」

「わたしも姉さんが欲しかったなあ」

二人はなんとなく手を握り合って、なんとなく微笑んで、幸せな気分で眠りに入っていました。

ルピネーも旨いワインにありつけて幸せでしたし、王子は旅の楽しさと綺麗な女の子といっしょにいる嬉しさに興奮して顔が火照ってニヤニヤ笑いが止まりませんでしたし、ジロー夫婦と一族たちは良いお客に巡り会えて将来への明るい展望も開けてやっぱり幸福な気持ちでいっぱいでした。

明日一日歩くと、夕方にはカカッサスの向こう、いよいよラピスの領土に出るはずです。



### 第13章 灰色の魔女

お話戻って、王子たちが旅立った日の森の湖。

朝が来ると、身を寄せ合って眠っていた白鳥たちは目覚めて朝食の水底の藻を食べ始めました。

「まずい」

オデット王女の白鳥が言いました。

「こんなもの食べるのはもううんざり！」

「王女様、どうかご辛抱を」

侍女のニーナが言いました。人間のときのニーナは黒髪をいつもぴったり後ろにまとめ一見地味な印象の娘でしたが、大きな目がクリツとかわいらしく、太い眉が子どものもようでも親しみの持てる感じで、よく気が付き、それでいて決して出しゃばらず、オデット王女はもちろん侍女仲間の皆から慕われている人気者でした。

「先の柔らかな部分だけ食べれば口の中でとろけるようで、これはこれでなかなか乙なものかと・・・あら?・・・」

「そうよ！ 私はお城にいた頃湖の白鳥たちにパンや麩を撒いてやっていたじゃない！ この国の人間は白鳥に餌をあげるということをしないのかしら？」

「それではお城の湖にお戻りになりますか?・・・じゃなくって、私たちふつうに話しておりますわね？」

「当たり前じゃない、それがどうしたの？」

「だって、昨日まで私たちガーとかクワツとか、そんな風な鳥の言葉しか話せなかったじゃないですか？」

「あら、そういえばそうだったわね」

他の白鳥たちもこの異変に気付いてそれぞれおしゃべりを始めました。

「これはきつとクラリス様の魔法のおかげですわね！」

ニーナが感激して言いました。

「ああ、嬉しいですね、王女様とこうしてまたお話しできるなんて！」

「ええ、そうねえ。でも、今は・・・」

オデット王女はみんなにも向かって宣言するように言いました。

「このまずい食事を何とかしなくては！」

白鳥たちは静まり返り、ポカーンと王女を見つめました。

「王女様・・・」

ニーナがおそろおそろ言いました。

「なんだかお人柄が変わられたような・・・」

「そ、そりゃあそうよ」

オデット王女は取り繕うように咳払いしようとしたが、鳥のくちばしではやっぱり「クワツクワツ」としか音が出ませんでした。

「白鳥でいるのはもううんざり。味のない藻を食べるのも、お腹を水につけて寝るのも、いちいちあいつらの顔色をうかがうのも」

と、早くも上空を群れ飛んでいる黒鳥たちを首で示して、

「みんなみーんな、ウ・ン・ザ・リ、よっ!!」

白鳥たちは王女様はいつたいどうされてしまったのだろうと顔を見合わせました。

「あたしたちももうイヤ！」

ジェニー、キャシー、ドミニクの子どもたち三人組も声を上げました。

「あたしたち昨日、クラリスお姉さんと姫様といっしょに白バラの森に行ったの。とつても楽しかったわ。早く人間に戻ってまたあそびに遊びに行きたいわ！」

白鳥たちはなんのことか分からないのでオデット王女は昨夜クラリスの導きで夢の中でみんなで白バラの森に遊びに行ったことを説明しました。

「失敗だったわ、こんなことならジークフリート王子と交渉して毎日おいしい食事を持ってくるようにしてもらったわ」

王女はまだ食事の不満をブツブツ言って、白鳥たちの不安をかき

立てました。

その視線に気付いて、

「だって、みんなだってこんな食事には飽き飽きでしょ？ 私はちやんとみんなのことを考えているのよ」

と言いましたが、今ひとつ説得力がありません。

「いい、みんな、こんな鳥の生活に慣れてしまっただけじゃないわ。私たちは人間なのよ！ 心まで鳥に成り下がってはいけないわ！」

「おお、やっぱり我々の姫様ですわ！」

と白鳥たちは羽で水面を叩いて拍手しました。

オデット王女はほっと息をついて、

「だからね、どうやってみんなでおいしい食事にありつけるかと・

」

と、ジエニーに突っ込まれてしまいました。

「どうやって早く人間に戻るかを考えなくちゃ。それとも姫様、あの頼りない王子様を本気で当てにしているの？」

子どもにまでこんな言われ方をして、王子は本当に立つ瀬がありません。

「いやー、私も頼りないなあと思ってはいるんだけどお、一応約束しちゃったし・・・」

「ヤダヤダ、姫様はもっとかっこいい人と結婚してくれなきゃ！」

と、キャシーにも言われてしまいました。

「ここで妥協して後で後悔しても王女様じゃ離婚は難しいわよ」

と、五歳のドミニクにまで言われてしまいました。

「だからね、クラリスさんに頼んで立派な人に鍛えてもらおうと・

」

「元があればあ高が知れてるわね」

と、ドミニクがまたニヒルに言いました。

「新しい王子様を捜しに行こうよ！」

と、キャシーがとっても良い考えだと嬉しそうに言いました。

「いいえ、カラベラス様よ！」

ジェニーが断固として言いました。

「カラベラス様ならきつと魔王の呪いなんて解いてくださるわ！」  
昨夜夢の中で遊んでもらってジェニーはすっかりカラベラスの信  
奉者になってしまったようです。

「カラベラス様、白バラの森、ロヴィーク国があ・・」

遠いわよ、とオデット王女は言いました。

「みんなはどう思う？」

と、まず近衛女官のレスリーに目を向けました。

「遠いですね。危険が多いと思われませう」

女中頭のマリシアも、

「そうですね。王子様ともそうでございますが、クラリス様とも  
ひと月後にきつと会おうと約束しております。ひと月でロヴィーク  
とここを往復するのは私たちにはかなり難しいかと思ひます」  
と否定的でした。

「さーて、ではどうしましょうかしらねえ？」

と、オデット王女はがっかりしている子どもたちを見て考えまし  
た。

「それじゃあまず灰色魔女さんに会いに行きましょうか」

オデット王女は明るい声で言いました。

「あの人はロットバルトのことも、カラベラス様のこともきつと知  
っているわ。もう一度、是非ともよく話を聞かせてもらわなくち  
や」

それからカラベラス様に会いに行くかどうか決めましょうね、と  
三人に言つと、三人は嬉しそつにならずきました。

「でも、首尾良く灰色魔女さんに会えるかしら？」

オデット王女が小首を傾げると、

「場所は覚えております」

とレスリーが頼もしく答えました。

「ただ、問題はやはり奴らと、それと・・・」

と、申し訳なさそうにマリシアと子どもたちを見て、

「奴らはクラリス様のことでもあって我々への監視を強化している模様です。灰色の魔女のことも承知でしょうから、我らが彼女の元へ向かうとなると、相当厳しく妨害してくることが予想されます。灰色の魔女に会いに行くのでしたら、王女様お一人と我ら近衛女官が護衛に付いていった方が良いかと思えます」

近衛女官はレスリーを筆頭に五名いました。いずれも武芸に秀で立ち居振る舞いのきびきびした立派な護衛官たちです。

オデット王女はマリシアと三人の子どもたちを見ました。

マリシアはいつもの通り・・・白鳥になってさえ・・・ニコニコ温和な笑顔をたたえ、子どもたちは、こちらは連れていってもらえないのに明らかに不満顔でした。他の侍女、女中たちもやはりがっかりしたような顔をしています。

みんな灰色の魔女の陣地に入れば人間の姿に戻れることを覚えているのです。

オデット王女は皆を見渡し、

「みんなで行きましょう」

と言いました。

レスリーには、

「私が皆の上を飛びましょう。奴らも私にだけは絶対手出ししないでしょうから。あなたたちも他のみんなを守るように外側を飛んでもらいます。やはり、私たちは常にいっしょに行動していた方がよいでしょう」

と言いました。

レスリーは不満そうでしたが、オデット王女にじっと見つめられてうなずきました。

「オデット王女」

マリシアがニコニコした顔のまま前に出ました。

「皆が行くとなれば私も行かないわけにはまいりませんが、一つ、

言っておかなければなりません。私たちは王女様のために生きております。王女様にお仕えするのが私たちの生きる喜びであり、生きている意味なのです。そのことを王女様ご自身も決してお忘れになりませんように。レスリー殿も、私たちのその気持ちをご理解の上、もしものときは、何より王女様の身の安全を最優先されますよう、あなたには言われるまでもないことでしょうけれど、なにとぞよろしくお願いいたします」

マリシアはいつもニコニコ温和な笑顔をたたえていて、それがすっかり顔の筋肉になじんでしまっていて、今さら他の顔を思い浮かべることもできませんが、常に自分に厳しく、部下たちをまつすぐ正しく教育し、辛抱強く努力を怠らず、実は誰よりも芯の強い人でした。

今王女を見つめる目は、優しく親愛に溢れつつも、そうした芯の厳しさを、王女自身にも求めるものでした。

王女は真剣に顔を引き締め、しっかりとうなずき、レスリーも同様にしっかりとうなずきました。

灰色の魔法の小屋はここベルーシアまで続く森の中にありましたが、大きな森で、小屋のある場所は故郷ユークリナの領内でした。

おいしくない朝食を我慢して食べて、一時間ほど後、お腹のこなれてきた頃、白鳥たちは湖を飛び立ちました。

白鳥は大きな鳥なので水面からいきなり宙に浮くことは出来ず、水面をバタバタ滑走して大きく広げた羽を精一杯羽ばたかせてようやく体が浮き上がります。

レスリーを先頭に若い白鳥たちが続き、三人の子どもたちを中心に挟み、残りの若い白鳥たちが後に続き、一番最後にマリシアが自ら名乗り出て続けました。四羽の近衛女官が列の左右に、一段上空に飛び、オデット王女も列の真ん中、三人の子どもたちの上を飛びました。

特に急ぐことはせず、これまでたびたびしてきたのと同様別の湖

へ餌場の移動に見せかけました。

監視の黒鳥たちは十羽ほど。白鳥たちの飛び上がったのを見て自分たちもその上空を移動し始めましたが、最初のうちは特に何をしてくるわけでもありませんでした。

頭の良いレスリーは湖を見つけるといかにも良い餌場を探している風にそちらの方に向かって飛びました。しかし一応湖の上を回ってみて、やっぱり気に入らないように次の湖目指して飛び去りました。

そのようにして三つ四つと湖を通り越しましたが、やがて黒鳥たちが怪しみ出しました。

仲間どうし相談して一羽がちよっかいを出しに下りてきました。

狙われたのはやはり遅れがちになるマリシアでした。

黒鳥はわざと離れた後ろについて様子をうかがいながら、マリシアが遅れ出すとガンとスピードを上げていかにもつついてやるぞという風にプレッシャーをかけました。

マリシアは精一杯頑張っていました。息が上がってしまったんだん遅れがちになり、黒鳥にあわやつつかれるということが多くなってきました。

近衛女官の一羽が急激に速度を落とすと黒鳥のとなりに付き、思い切り翼で翼を叩いてやりました。見事な急襲だったので黒鳥はくるくる回って後方に流れていきました。

仲間がやられたのを見て上空の黒鳥たちがガーガーやかましく鳴き出しました。

オデット王女はマリシアや下の子供たちの疲労度合いを見てレスリーに呼びかけ、いったん近場の湖に下りましようかと合図を送りました。

しかし魔女の小屋までだいぶ近づいています。黒鳥たちもやがて気付いて小屋の辺りをマークすることでしょう。今ここで休んでしまっただけの苦勞が水の泡ともなりかねません。

一か八か、レスリーはオデット王女の隣まで下がってくると王女

に提案しました。

「このまままっすぐ飛ぶと魔女の小屋の円形の白い木立が見えてきます。私の代わりに王女が先頭に立ち皆を率いてください。我らが奴らを抑えます」

オデット王女は頷き、スピードを上げて先頭に立ちました。

「頑張るのよ」

レスリーは下の子供たちについて他の四羽の近衛女官たちに合図を送るとグンと上昇して黒鳥たちとの中間の高さに位置を取りました。

オデット王女率いる下の列がスピードを上げたのを見て黒鳥たちもはつきりその目指す場所を知りました。

「クワー！ クワー！ クワーツ！」

恐ろしげな声を上げて黒鳥たちは白鳥の列目がけて急降下を始めました。

逆にレスリーたち近衛女官は急上昇して黒鳥たちの群に突っ込みました。鋭く翼と翼が交差し、腹を打たれた黒鳥が二羽三羽グラリと傾き、よろよろ体勢を整えました。レスリーたちは素早く反転し、残りの群目がけて今度は上から襲いかかりました。逃げる黒鳥たちの背をバシツと水掻きの平手で叩いてやります。黒鳥たちは完全に頭に血が上り、下の列などもうどうでもよく、レスリーたちに襲いかかってきました。

レスリーたちがうまく黒鳥たちの気を引いてくれている間にオデット王女はみんなを励まし魔女の小屋目指して急ぎました。

やがて、こんもり繁った緑の木々の中に、ポコンと丸く落ち込んだ部分が見えてきました。よく見ると、見覚えのあるまっすぐな白い幹が柱のように等間隔に並んでいます。

「みんな！ 見えたわよ！ 頑張つて！」

希望がわき上がり、疲れた体を奮い立たせて力強く羽ばたいた、その時、

前方のこんもりした緑の中から無数の黒い影が飛び立ちました。



オデット王女はギョツとして叫びました。

「危ない！ 引き返して！」

それは真つ黒なカラスたちでした。

ロツトバルトの手下は黒鳥たちだけではなかったのです。

一度接触した灰色の魔女の小屋にはロツトバルトの命を受けたカラスたちが待ち受けていたのです。

近くに小さな湖がありました。小さくとも宝石のような青い水をたたえた美しい湖です。それはすぐにオデット王女の目に入り、王女は列をそちらに向けました。

カラスたちがギヤーギヤー鳴きながら急速に近づいてきます。

「あの湖へ！」

オデット王女は後ろの侍女に叫ぶとグンと後ろに下がりました。

オデット王女は最後尾、マリシアのとなりに付きました。

「王女様、いけません。私の言葉をお忘れですか」

マリシアはせいぜい荒い息の中で王女をしかりました。

「私は誰も見捨てたりしません。私のために命を懸けようというのなら死ぬ気になって飛びなさい！」

マリシアは王女を愛しそうに見つめ、頷くと、力を振り絞って羽ばたきました。

黒いカラスたちはぐんぐん迫ってきます。

そのピカピカ光る黒いくちばしが迫ってくると、王女の中にある自分だけは大丈夫という安心が急激に萎え、恐怖がわき上がってきました。

引き裂かれる、死の恐怖です。

「カアッ」

威嚇の鳴き声がものすごく大きく耳に響きました。

思わず身がすくみ、一瞬羽ばたきを忘れ、その一瞬が体を大きく後退させました。

カラスが、一羽、二羽、三羽、となりに並んでいました。

カラスはその頭の良い、意地悪な真つ黒な目でギョロリギョロリ

王女を見回しました。

カラスたちが無情に王女を飛び越えていきました。

真っ黒なくちばしたちがマリシアに向かって突き進んでいきました。

バチン！

突然火花がはせてカラスは悲鳴を上げて目を回しました。

「ヒヒーン」

馬のいななきが空を駆け登ってきて、クラリスの愛馬ナージャが真っ白な翼を広げて現れました。

カラスたちは一瞬その巨体にギョツとしましたが、すぐに大勢で襲えば大した敵ではないと踏んで集団で襲いかかってきました。

「なめんなよ、馬鹿カラスども！」

ナージャの頭から小さな赤い玉がひゅんひゅん飛んできてカラスたちの目の前でバチンバチン派手な火花を散らして爆ぜました。カラスたちは目がくらんで立ちすくみ、仲間どうしぶつかって危うく落下しかかりました。

「ハハハ、ざまあみる！」

白いナージャの頭の上で小さな赤い人影が得意になって笑い声を上げました。

「あたいはクラリスの友だちの火の精ヴァイオレット。ここはあたいとナージャに任せて早く逃げな」

ナージャとヴァイオレットはカラスたちに向かって悠然と飛んでいきました。

「それぞれそれ！」

火の精ヴァイオレットは次々火の玉を飛ばしてカラスたちの目の前で火花を散らせました。

カラスたちはそれがただの目くらましだと気付きましたが、しかし目をやられても困りますので遠巻きにして様子をうかがいだしました。

その隙に白鳥たちは次々湖に下りていきました。

そこへ黒鳥が一羽猛然と突っ込んできました。

一羽は最後に飛んできたマリシア目がけて突っ込んでいきました。最初にマリシアにちょっかいを出してきたあの黒鳥です。仲間たちの劣勢を見てせめてもの腹いせに一番弱いマリシアを襲ってきたのです。

マリシアは体勢を崩し、湖に降り立つ前にブレーキがかかってしまい手前の木々の間に落ちてしまいました。

「このおっ！」

怒ったオデット王女は翼で黒鳥の顔をまともにぶん殴ってやり、黒鳥もきりきり舞いして森の中に落下していきました。

クワーツ……

恐ろしい悲鳴が上がりました。

「マリシア！」

オデット王女は急ぎ湖の側から回ってマリシアの落下した辺りに降り立ちました。

狐が白鳥の長い首をくわえていました。

白鳥はもうぐったりして、動いていませんでした。

「このお……マリシアを放しなさいっ！」

オデット王女はくちばしを突き出し、ドツドツと突進しました。

しかしこの狐、ロットバルトの手下ではありませんでした。

狐は白鳥の首を放すと次の獲物向かって飛びかかりました。

王女はしまったと思い、頭の中が真っ白になりました。

殺される、

そう思ったとき、狐はキャンと鳴いて横の茂みに飛び込むとそのまま逃げていってしまいました。

シウルシウルシウルと鞭のように狐をぶった木の杖が元に戻っていきました。

そこに、灰色の魔女が立っていました。

「駄目だね。首の骨が折れて、もう息をしていない」

白鳥、マリシアを調べて灰色の魔女はそう診断しました。

「ああ、マリシア、なんてことに・・・」

王女はマリシアのぐったりした首に首をすり寄せ泣きました。

白鳥たちも岸辺に集まってきて沈痛な面持ちで頭を垂れ、とりあえずカラスたちを追い払ったナー ज्याとヴァイオレットも下りてきてこの情景に心を痛めました。

「大人しくしていればいいものを。ロツトバルトの力を見くびっていたね」

灰色の魔女は白鳥の死骸を見下ろし冷たく言いました。

オデット王女は涙に濡れた目をきつと上げて灰色の魔女の冷酷な目を睨みました。

「それでは教えていただけませんか、ロツトバルトのことを。あの男がどれほどの力を持っているのかを、あの男の正体を」

灰色の魔女は非常に皮膚の薄い顔をしていました。全てが灰色という色のせいもあるのですが、まるで贅肉がなく、非常に厳しい印象を与えました。でも特別痩せている印象はなく、それは頬の丸い骨格のせいでした。目がパツチリ大きく、本当ならばとてもかわいらしい顔立ちをしているはずなのでしょうが、薄い皮膚が目の窪みと鼻の隆起の骨にびったり張り付いて邪悪な陰を表しています。灰色の瞳はなんの温かさも感じさせず、意地悪と言うより、人生というもの、人というもの、命というものにすっかり冷め切ってしまったような、そんな、とても寂しい印象を感じさせました。

「知ってどうする？ 無力なおまえたちにあの悪魔に対抗する術などあるはずもなからう。邪悪に対抗する唯一の方法、それは決して何ものにも負けない永遠の愛の誓い以外にない」

灰色の魔女はこの世に永遠の愛など存在するものかというような顔をしながら、執拗にそう言い切りました。

「本当にそうのですか？」

オデット王女は恨めしそうな目で灰色の魔女を見つめました。

「私も一度はそうなのだろうと思いました。けれど、愛とはそんな簡単なものではないでしょう？ あなたの言う永遠の愛の誓いは、呪いに負けないための方法であって、呪いを打ち消す方法ではないのではないですか？」

「どうということかな？」

「永遠の愛の誓いなど、言葉だけなら誰にだって出来ます。でも、それを証明するには永遠の時が必要です。それは、人間には無理です。人間に出来るのはただそれを信じることに。どんなことがあるうとも、どんな境遇に落ちようとも、愛は永遠であると、そう信じ続けることだけです。たとえ呪いが実現して生涯鳥の姿であろうとも、愛は真実であると、そう信じ続けることで心は呪いに負けない、そういうことなのではないですか？」

死したマリシアは白鳥の姿のままでした。

ぐったり力の抜けた肉体は眠っているときは明らかに違い、体温は急速に失われていき、生命のない、ただの肉の固まりになり果てていこうとしていました。

「呪いは解けるよ」

魔女は静かに言いました。

「確かにおまえの言うとおりさ。本当に永遠の時など存在するはずはない。しかしそれを心から信じ切れた時、奇跡が起きるのさ。心には外の世界の時間など関係ない。信じれば、それは永遠になる」

この灰色の魔女がいったいどういう人なのか、計り知れないところがありました。

この冷めきつた目で、永遠の愛など、本当に信じているのでしょうか？

オデット王女は自分を納得させるように頷きました。

「では正直に言いましょう。私は、永遠の愛など手に入れる自信はありません」

それはオデット王女が自分を客観的に見つめたときの結論でしたが、灰色の魔女はそんなオデット王女をちよっぴり哀れみの色を浮

かべて見下ろしました。

「では、ロットバルトの言い分を受け入れるか、でなければ、人間に戻るのはあきらめるのだね」

「それは出来ません！」

オデット王女はきつぱり言い切りました。

「私には彼女たちに対する義務があります。彼女たちも私のために命を懸けてくれています。私たちは、呪いに屈するわけにはいかないのです！」

オデット王女と背後に控える白鳥たちの強い決意も灰色の魔女の冷めた表情を突き崩すことはありませんでした。

「では、呪いが成就する前に、奴らに戦いを挑んで皆殺しにされるんだね」

魔女の言葉は冷たく鋭利な刃物のように白鳥たちの胸に突き刺さりました。

目の前に、親しい友の死骸が転がっています。

オデット王女は負けじと食い下がりました。

「教えてください、ロットバルトの正体を。あの男は悪魔などではありませんね？ 心と体を持った生き物ですね？ けっして別の世界からやってきた者ではない、私たちと同じこの世界の者ですね？ 彼の正体は、なんなのですか？」

「さーて、なんだろうね？」

灰色の魔女は薄笑いを浮かべるとぼけて言いました。その意地悪な顔は初めて見せる彼女のまともな表情でした。

オデット王女もまともに敵意を以て魔女を睨みました。

「あなたは、彼の仲間なんですか？」

魔女の薄笑いが消えてギラリとした敵意が芽生えました。

「仲間なのに、彼はあなたの意志を無視して行動している、違いますか？」

魔女は黙り込んでこの生意気な白鳥になんと言ってやろうか考えました。

オデット王女はさらに言いました。

「私はあなたに似た感じの顔を知っているんですよ。私と同じくらしい若い娘。名前を言ってあげましょうか？」

「黙れ！」

魔女の無表情の奥に隠されていた激情が一気に爆発しました。

魔女は剥き出しの怒りのまま王女を睨み付けました。

睨み合いは、王女の方が折れました。

「私は私たちにかけられた呪いを解きたいだけです。この呪いが私たちにとっていかに理不尽なものかあなたにも汲み取っていただけると思いますが。どうかこの呪いを解く方法を教えてください、あなたならご存じなのではありませんか？」

「そんなものはない！」

魔女は王女の訴えかける眼差しが邪魔でそっぽを向きました。

「この呪いは魔法によるものです。魔法は魔力を使った方法です。方法である限りその方法を解いて呪いを解く方法が必ずあるはずですよ！」

「人間のくせに小賢しいことを言うね？　だがそんなものはありませんよ。力のある者には思うだけで魔法は使えるのさ」

「そんなはずはありません。それは無意識のうちにその方法を使っているだけです。そう、それはあのカラベラスだって同じです」

灰色の魔女の眉がぴくりと動きました。

「真に力のある者はその力の本質を知るものです。あなたに分からなくても、彼女なら、史上最強の黒魔女と恐れられたカラベラスならこの呪いの方法も解けるでしょう」

「やめろ、馬鹿め！」

灰色の魔女は再び怒りを露わにオデット王女を怒鳴りつけました。「あんな女に関わるな！　そうだ、あいつは黒魔女だ！　人を不幸にする魔法は誰よりも上手だろうさ、だがね、人を幸福にする魔法なんか金輪際持ち合わせちゃいないよ！」

カラベラスにいったいどれほど深い恨みがあるのか、灰色の魔女

は恐ろしい憎悪の表情でオデット王女を睨み付け、白鳥たちを見渡し、自分自身その憎悪に耐えきれず横を向いてしまいました。

オデット王女は言いました。

「私たちはあなたを頼りに危険を冒してここまで来ました。でも、あなたが助けてくれないのなら、私たちはカラベラスを頼るしかありません」

「勝手におし。どうせ後悔するに決まっているよ」

オデット王女は一応狐から助けてくれたお礼に頭を下げました。

「私たちは行きます、カラベラスのところへ。」

彼女は、今は白魔女として平和に暮らし、人々から尊敬されているそうです。その昔黒魔女としてどれほど恐れられていたのか私は知りませんが・・・」

「ちゃんちゃらおかしいね。あの悪党の性根が白く変わったりするものか」

「あなたは、昔、どんな色をしていたのです？」

灰色の魔女はその名の通り、全身灰色に覆われていました。肌も髪も目も。でもわざわざ灰色のマントを羽織り、灰色のフードをかぶる必要があるでしょうか？ それは自ら灰色の魔女を名乗り、自らまとった色なのです。

「私は昔・・・」

灰色の魔女は膝を折り、白鳥の死骸に手をかざしました。すると白鳥は白く輝き、形を変え、人間のマリシアになりました。

「マリシア・・・」

オデット王女の白鳥はマリシアに覆い被さり、頬をすり寄せて泣きました。

「灰色の魔女さん、ありがとう」

灰色の魔女は立ち去り際、後ろを向いたまま言いました。

「私を灰色にしたのは、カラベラスだ。昔の私は、おまえたちのように美しかった・・・」

去っていく灰色の後ろ姿を見送りながら、火の精ヴァイオレット



がオデット王女の耳元に飛んできて言いました。

「あの人、あたいと同じオーラを感じる。きつと昔はあたいと同じ妖精だったんだよ」

## 第14章 脱出

白鳥たちは苦勞してなんとかマリシアの遺体を大きな木の根本に埋めました。

マリシアの冥福を祈り、湖に戻ったところで火の精ヴァイオレットが自己紹介しました。

「あたいはクラリスの友達で火の精ヴァイオレット。クラリスにナージャといっしょにあんたらを守るよう頼まれたんだ。これからはあたいらがあんたたちを守ってやるから安心しな！」

「火の精、じゃなくって、火花の精、でしょ？」

オデット王女が言うくと天馬ナージャがフッフと笑いました。

ヴァイオレットはムツとして、

「そうだよ、あたいは火の一族の火花の精ヴァイオレットだよ」

ヴァイオレットは人間の手のひらに立てる大きさと、かわいいピンクの肌ピンピン立った真っ赤な髪の毛をして、真っ赤なミニドレスを着て真っ赤なブーツを履いていました。いたずらっぽいくりくりした大きな目をした子どもで、背中に妖精の象徴である赤いチヨウチヨミみたいな羽根を生やしていました。

「ねえヴァイオレット」

オデット王女がグンと顔を寄せて言いました。

「本当に、クラリスさんが私たちを守るように言ったの？」

「そうだよ」

「ほんとーに、本当？」

「ほ、ほんとだってばあ」

ヴァイオレットはなぜか疑り深いオデット王女にたじたじとなつてしまいました。

王女はため息をつきました。

「しょうがないわねえ。夢の中での打ち合わせではあなたはクラリスさんに付いていってナージャはやっぱりロヴィークに帰すという

ことになっていたのに」

「いいじゃんかよー、あたいたちのおかげでカラスどもを追っ払えたんだろっ？」

「そうね、一応はね」

そう、いったん追い払われたカラスたちでしたが、今は湖の周囲のそこかしこの木々に陣取り、上空の黒鳥たちとともに白鳥たちの動向を厳しい目で監視していました。

「火花の目くらましなんてもう通用しないでしょうしねー」

「カラベラスが悪いんだよー！ あたいとナー ज्याを元に戻しちゃうたからあ」

以前ヴァイオレットとナー ज्याはカラベラスの魔法で合体して火龍ヴァイオレットとして生きていました。クラリスの羽織っている火龍のマントはその火龍ヴァイオレットの毛を植え込んだものです。

「あの頃のあたいたちはそりゃあもー強かったのになあ」

なっ、とヴァイオレットは相棒ナー ज्याに同意を求めましたが、ナー ज्याはどうでもよいようにあくびをしました。

ねえねえ、と子どもたちが寄ってきました。

「ヴァイオレットちゃんはカラベラス様と仲いいの？」

「カラベラス様って本当はどんな人？」

「旦那様とラブラブなの？」

へー、とヴァイオレットは横目でオデット王女を見ました。

「なーんだ、クラリスよりカラベラスの方が人気あるんじゃない？」

子どもたちに向かって、

「あたいはねー、クラリスが生まれるずっと前からのカラベラスとの付き合いでね、そうそう旦那、あれとくつつくまでのあいつときたら、そりゃーもう、とんでもないワルでね」

イツヒツヒツ、とヴァイオレットは笑いました。

「それじゃあ愛の力がワルの道からカラベラス様を更生させたのね？」

「あいつも強面のくせにけっこう乙女チックだったりするんだよね」

「ヴァイオレットと子どもたちはキャツキヤと盛り上がりました。」

「ここらあんなたち」

オデット王女が四人を睨みました。

「私たちは今マジな話をしてんのよ」

王女はみんなをできるだけ近くに集めて首を寄せ合ってどうやって敵の包囲を破ってこの湖を脱出するか作戦会議を開きました。

まず近衛女官のレスリーが現実的な意見を述べました。

「全員でロヴィークに向かうのは無理です。王女と我ら近衛官の精銳がまずカラベラス殿と会うべきです」

ニーナが他の侍女たちに推されて侍女を代表して固い決意を述べました。

「私たち侍女は何があるうとも決して王女様の側から離れはいたしません」

それを聞いてマリシア亡き後暫定的に女中頭の任に着いた一番年長の女中イヴリンが女中たちの不満を言ってやりました。

「近衛女官だの侍女だの、いかにも自分たちこそが王女様の忠義の僕であるみたいに言うけれど、お城の生活全般を切り盛りしているのはあたしたち女中だよ。あたしたちだって王女様の立派な忠義の僕だよ。そのあたしたちを邪魔者扱いみたいな言い方は我慢がならないね！」

温厚でみんなに慕われていたマリシアが亡くなってしまったせいで、三者三様自分たちの主張を繰り返すばかりで、作戦会議は難航し、無駄に時間ばかりが過ぎていきました。

大人たちの言い争いを見ていた子どもたちは自分たちはいったいどのグループの仲間なんだろうと不安になって、とうとうシクシク泣き出してしまいました。

「ストップ！」

オデット王女が会議を中断しました。

「私は誰も後に残してどこへも行く気はありません！」

「しかし王女、現実に・・・」

レスリーが言いかけるのを、

「おだまんなさい！」

ピシヤリと止めて、

「レスリー、お願いだから、みんなでここを脱出してロヴィークに行ける方法を考えてちょうだい。一番頼りになるのはあなたなんだから、ね？」

王女に懇願されて仕方なしにレスリーは言いました。

「方法がないわけではありません。決してお勧めはできませんが。

やはり王女と体力のある者だけで湖を脱出します。と、見せかけて、敵の注意を逸らしている間に他の者は森の中を通過して湖を脱出します。」

ただし、お勧めできないと言うのは、森を通過して逃げるのはかえって危険かも知れないからです。地上では動きが鈍くなりますし、また狐のような獣に襲われる危険性もあります。黒鳥たちはともかく、カラスたちは平気で森の中へ下りてくるでしょうし、見つければ我々が助けに下りるのはまず不可能です。

残念ながら私にはこれくらいの作戦しか思い付きませんが、それでも、やる覚悟がありますか？」

皆シーンとなってこの作戦が成功するだろうか考えました。王女への忠義の心は決して偽りではありませんが、やはり死への恐怖は拭いたいものでした。

「じゃあさー」

会議の様子を眺めていたヴァイオレットが言いました。

「あたいらみたくない用心棒をもっと雇えばいいじゃん」

おお、と声が上がりました。

「なるほどねー、なかなかいいこと思い付くじゃない」

オデット王女はなぜかヴァイオレットには言葉遣いがぞんざいになっってしまうようです。

「いいわ、用心棒を雇いましょう！　で、誰を雇ったらいいかしら

「？」

「あたいに任しときな」

ヴァイオレットが胸を張って言いました。

「ちよっくらこの辺りを回ってきてみるよ」

ピューンと、赤い光の筋を残してヴァイオレットは森の中へ飛んでいきました。

一時間ほどしてヴァイオレットが戻ってきました。

「やっぱりさー、でかくて、うんと強いのがいいよねー？」

「そりゃあそうだけど、誰かいたの？」

「いたことはいたんだけどね、もしかしたら、逆に食べられちゃうかなあ・・・なんてね」

何者だろうと皆震え上がりました。

「熊さん。子連れのママさん熊」

「そりゃあ、強いでしょうねえ・・・」

森で子連れの母親熊ほど強い者はいません。

「で、交渉はうまくいったの？」

「それがさー、妖精のあたいにさえすっごい警戒しちゃってさー、たぶんあのカラスどものせいだと思っただけど、まずいことに、この湖も熊さんたちの縄張りになっていろいろらしいんだよねー。だからあ、ここでたむろしていると、襲われちゃうかもよ」

ヒーと悲鳴を上げて白鳥たちはバタバタと湖の中央へ逃げ出ししました。

「い、いいんじゃないの？」

オデット王女が顔をひきつらせながら言いました。

「カラスたちに反感を持っているなら交渉しやすいじゃない。いいわ、私が交渉してくる！」

「い、いけません！」

ニーナが慌てて止めました。

「そうです」

レスリーもとんでもないと反対しました。

「相手は野生の獣です。狐同様、王女様もただの餌に過ぎません」

「でも用心棒にするなら最高じゃない。とてもあきらめられないわ」

「では私が行ってまいりますよ」

レスリーが言いましたが、さすがに彼女も顔がこわばっていました。

王女はうーんと考えて、

「やっぱり私が行くわ。だってね、あなたが行ったら喧嘩になってそれこそ食べられちゃうような気がするの」

大丈夫よ、とヴァイオレットを見て、

「危なくなったら頼りになる妖精さんがいるから」

レスリーとニーナはさんざん言葉を尽くして止めようとしたが、王女の決意は固く、絶対に無茶はしないとこの約束で王女とヴァイオレットの二人が交渉に赴くことになりました。

ヴァイオレットの見たとき母親熊は肩を怒らせて見るからに不機嫌でした。小熊は二頭いて、幼い子どもを連れた母親熊はたださえ神経を尖らせて周りに攻撃的に身構えているものですが、頭のいいバカなカラスたちが退屈しのぎにちょっかいを出したりしたものですからすっかり怒ってしまっ、近づいてくるものはなんでも張り手を食らわさせてやろうと身構えていました。

熊に思い切り張り手を食らわされたら、ふつ々の生き物はだいたいの死にます。

今、日の射す草原の上でクルクルじゃれ合っている二匹の小熊を見守りながら、母親熊はわずかに中腰になりかけて、何かあれば即座に攻撃に移れるような準備態勢を取っています。

まだだいたい離れた茂みの陰から親子の様子を盗み見ながらオデット王女はうーんとうなりました。

「なるほどー、これは手強そうねえ・・・」

王女は考えました。

「踊って子どもたちを喜ばせて手なずけちゃうってどう？」

「逆効果だと思つなあ。ママさんはそんな気分じゃないだろうからなあ」

「それじゃあ・・・、熊と言つたら死んだぶり！」

「それって迷信だつて聞いたぞ」

「えーい、考えてもらちがあかない。とにかく行つてくるから、いざつて時はフォロー頼むわよ」

オデット王女は茂みの陰から出るとゆっくり慎重に歩いていきました。

ヴァイオレットはその様子を見ながら、

「ふーん、王女様つてずいぶん行動派なんだなあ」

と感心しました。

とことこ歩いていくオデット王女はやがて母親熊の視界に入りました。

母親は体を立て、力の固まりのような両腕を構えました。

白鳥はぎよつとして、その迫力にやられたようにフラフラと足下がおぼつかなくなり、右にフラフラ、左にフラフラして、やがてばったり倒れました。羽を震わせて二度三度地面を掻き、起き上がるそぶりを見せながら力が足りずに地面にふせり、ずりずりと前進し、悲しそうに首を振り立て羽を天に差し伸べ、ブルブル震えてバタリと伏し、また同じ動作を繰り返しました。

じゃれ合つて遊んでいた小熊たちは白鳥の不思議な動きに興味を持ってじーつと見つめました。

その後ろから子どもたちをかばうように足元に抱き寄せて、母親熊が言いました。

「それはいつたいたいなんの真似だい？ このあたしに食べてくださいつて言うのかい？」

白鳥は地面に伏した首をむっくり起き上がらせました。

「あらよかった、ちゃんとお話ししてくれるんじゃない。いきなりガブリと来たらどうしようかと思つたわ」



オデット王女は起き上がるとことこ親子に近づいていきました。母親の手の伸びるギリギリのところまで立ち止まり、片方の羽を広げてていねいにお辞儀しました。

母親熊は感心したように言いました。

「バカじゃあないようだね」

「私はユークリナの女王オデットと申します。どうぞよろしく」

「なんだいそりゃ？ それじゃああたしはこの森の女王閣下だよ」

「はい、女王閣下。それに王子殿下。実は閣下と殿下のお力をお借りしたくてまいりました。実は閣下と殿下を悩ませているあの無礼なバカカラスどもは私どもを監視しているのです。そこでなのでございませうが、」

と、オデット王女は熊の親子に自分たちが湖を脱出するための手助けをしてくれるよう頼みました。

子どもたちはキャツキャと面白そうにはしゃぎましたが、母親熊の方はそう簡単には頷きませんでした。

「それじゃあおまえたちが消えればあのうるさいカラスどもも消えると言うことだね？ だったら、この場でおまえをくびり殺して死骸を湖の真ん中に放り投げてやればそれですむことじゃないか？」

母親熊はほんのちよつと体を前傾させましたが、それだけで巨大な岩がのしかかってくるようで、オデット王女はぞーっと無力に震えました。

「ちよつと待ったーっ！」

慌ててヴァイオレットが飛んできました。

「この人はクラリスの友だちなんだよ」

「クラリス？ あの狩人のかい？」

「そうそう、カラベラスの娘のクラリスさ。この人を殺しちゃったからクラリスがあんたを狩りにやってくるぞ」

母親熊はヴァイオレットとオデット王女を見比べて考えました。

動物たちの世界では狩りの名人クラリスの名は広くはるかこんな遠くにまで知れ渡っているようです。

「フン、クラリスだろうが、このあたしを仕留められるものかね。返り討ちにしてくれるさ」

「クラリスさんは子どもを連れた母親は絶対狙いません。何があつても」

母親熊はじつとオデット王女を見つめました。

「お礼はいたします」

オデット王女は言いました。

「私がユークリナの女王の座に返り咲いた暁には小熊は絶対に殺してはならないと制令を出します。と、約束はしますがこれは果たせるかどうか確実にはお約束できませんので、まず現物で取り引きいたしましょう。湖に大きな鯉がたくさん泳いでいましたが、あなたもさすがに水の深いところを泳ぐ鯉は捕まえられないでしょう？」

まるまる太った大きな鯉を十匹。それで脱出のお手伝いをお引き受けただけませんか？」

まるまる太った大きな鯉。子どもたちはよだれを垂らして母親熊におねだりしました。

「いいだろう」

母親熊は頷きました。

「だが白鳥のおまえたちに漁なんか出来るのかい？ 十匹だ。一匹たりとも負けてやらないよ」

「ええ、どうぞ見ていてください」

オデット王女は胸を張りました。

「クラリスさんに負けなくらい見事な漁をしてご覧に入れますわ」

翌日の朝。

湖の底で目覚めた鯉たちが朝食を探しに泳ぎ始めると、水面から射し込む光に影があるのに気付きました。

見覚えのない小さな浮島が漂っています。

見慣れないものには警戒心を持つ鯉たちでしたが、仲間の鯉が三匹、浮島の下に取り付いて何やら熱心に食べています。

ぼろぼろ取りこぼした食べかすをパクリとしてみると、それは鯉たちの大好物のタニシでした。

鯉たちはこれは見つけ物、他の仲間たちに全部取られてなるものと、我先にと浮島の底へ取り付いていきました。

浮島は岸辺の草の根が絡みついたものが流れてきたもののように絡みついた根っこを口先でほじると大好物のタニシが面白いようにぼろぼろこぼれてきました。鯉たちは大喜びで夢中になってどんどん浮島の底に潜り込んでいきました。

そうして夢中になっていっているうちに仲間たちが一匹二匹、どんどん居なくなっていくのに気付かずに・・・

浮島を湖の中央に流したのはもちろんオデット王女率いる白鳥たちでした。昨日のうちに二手に分かれて一方は草の根っこを集めてきてうまく自然に見えるように根っこを絡ませ合って浮島を造り、一方は出来るだけ多くタニシを集めてきて作った浮島に植え込んでいきました。

仲間たちにその指示をしておいて、オデット王女はヴァイオレットといっしょに偽物の鯉を作りました。材料は重りの小石と芯の小枝と表面の形を作る草でした。仕上げに自分の白い羽根と拾い集めたカラスの羽根を混ぜて本物っぽく植え込みました。くちばしでは細かい作業は無理なので指示をしてヴァイオレットに作らせました。ヴァイオレットは特に器用でもありませんでしたが何しろ小さいので細かい作業もふつうに出来ました。さんざんオデット王女に文句を垂れていました。

浮島は白鳥が三羽十分乗れる大きさで、翌朝、オデット王女と、手先、というか、口先の器用な若い女中が二人、乗り込みました。

オデット王女が口と両の羽で作り物の鯉を器用にまるで生きているように操って池の底の鯉たちをおびき寄せ、鯉たちがタニシを食べるのに夢中になって浮き草の中に潜り込んでくると、他の鯉たちに気付かれないように素早く二羽の女中がくちばしで鯉をくわえ上

げました。

他の白鳥たちは湖の反対側からやわやわと水掻きで波を起こし、浮島を少しずつ岸の方へ追いやっていきました。そうして岸に近づいたことに気付いた鯉たちが浮島から離れて水底に帰っていく頃には、浮島の上には見事十匹のまるまる太った鯉たちが白鳥たちによって釣り上げられていました。

岸で待っていた白鳥たちは大喜びで浮島を引き寄せ、釣った鯉を岸に運び上げました。

さーで、久しぶりにごちそうにありつけたとはしゃいでいるところに、親子連れの熊が現れて逃げ上がった白鳥たちがガーガー非難する中ゆうゆうと獲物を奪って森の奥へ帰っていきました。

と、いうのはもちろんお芝居。

なにしろ湖の上には黒鳥たちとカラスたちが監視の目を光らせていますから、彼らをごまかす必要があります。

オデット王女はこっそり森に入って熊の親子に会いました。

小熊たちは大喜びで滅多にありつけないご馳走にかぶりつき、厚く引き締まった肉と脂の乗ったトロりとろける皮を味わっていました。

「見事なものだ、まるで人間みたいだね」

母親熊はオデット王女たち白鳥の手際を褒めてくれました。

「だからね、私は人間なんだってば」

オデット王女は苦笑して、

「人間の知恵も大したものでしょう？」

「そうだね。でも忠告しておくよ、けっしてその知恵に溺れちゃいけないよ。人間の浅知恵なんてこの自然の大いなる知恵に比べれば赤ん坊のようなものだからね」

「はい。心得ております。ですから約束通りきっちり十匹ですわ」  
「まったく抜け目のない奴だね」

母親熊はまいったというように笑いました。王女に対してはすっかり警戒も解けたようで、優しい母親の笑顔でした。

「で、どうするね？　いつ脱出を開始するんだい？」

「出来るだけ早く。出来れば、今すぐにでも」

「分かったよ。この子らの食事が終わったら残りの獲物を隠して、そしたらこっちはいいよ」

と言っている間に小熊たちは鯉を一匹ずつまるまる食べ終えてしまいました。

「あら、もう終わっちゃったわ」

とオデット王女は言いましたが、小熊たちはおかわりをねだってもう一匹ずつ食べ始めました。

「あらあら。それじゃあ私は仲間たちと打ち合わせしてくるわ」

と、オデット王女は湖に戻りました。

午後二時。

一番日差しの強い時を選んで作戦は決行されました。

オデット王女と近衛女官の五羽、それに侍女と女中の中から若く体力のあるものが十羽、総勢十六羽がキラキラ日光を反射する湖面の中央に集まりました。

残りの十三羽は岸辺の木陰に身を寄せて中央のオデット王女と精鋭たちの行方を見守りました。優しく力に自信のないニーナはこっちの組、子どもたち三羽ももちろんこっちで、こちらの組のリーダーは女中頭のイヴリンが努めることになりました。

ヴァイオレットとナージャコンビは遊撃手として岸辺で待機しています。

レスリー率いる近衛女官隊が水面を駆けて宙に羽ばたきました。

湖の周囲を回り、黒鳥とカラスたちを威嚇します。

機を見てオデット王女が羽ばたき、他の者たちも王女に続き羽ばたき始めました。

カラスたちが団体を組んで突撃してきました。

小回りの利いて器用なカラスたちは王女以外は皆撃墜する気です。

バシバシバシツとぶつかり合い、白鳥、カラス、双方数羽ずつ体勢を崩して隊列から離脱しました。

敵はその離脱者を集中して襲いました。

オデット王女は「クワーツ！」と激しく鳴いてその敵のただ中に隊列を突入させ離脱者を拾い上げました。

レスリーたち近衛女官隊も攻撃態勢を取って王女の周りの敵たちを襲っていきました。

ヴァイオレットとナー ज्याも離脱者を救うために出撃していきました。目くらましの火花ですが、当たり所によってはけっこうなダメージを与えることが出来ます。ナー ज्याの強靱な蹄も強力な武器になりました。

下から見上げると黒と白の影が湖の周囲を渦を巻いているようで、戦闘は予想以上に激しいものになっていました。

その渦はやがて北を向いて流れていきました。ロヴィークは西の方ですが、下の者たちを逃がすため、王女たちはいったん北のベルーシアに戻る方向を目指すのです。

上空の鳥たちの姿がまばらになったのを見越して木の陰から母親熊が地上組の白鳥たちを手招きました。白鳥たちは大きな熊におっかなびつくり、イヴリンを先頭に付いていきました。小熊たちもいっぱしの用心棒気取りで白鳥たちを挟んで歩きましたが、白鳥たちはかえって怖くて仕方ありませんでした。

作戦は成功したようで、敵の鳥たちは皆オデット王女たちを追って飛んでいきました。

オデット王女は敵の目が完全に自分たちに向いたのを知ると敵を引き離すためひたすら全力で跳び続けました。鳥たちがいったいどこまでついてくるのか、もしかしたらずーっと付いてくるのかも知れません。でもこの精鋭メンバーならなんとか力だけでロヴィークに向かうことが出来るでしょう。地上組と落ち合う場所は一日目の場合、二日目の場合、三日目の場合と、いくつも候補を立てています。今は出来るだけ敵を引き離し、地上組の安全を確保するのが肝

心です。

オデット王女の隊列を守って敵に執拗に攻撃を繰り返すレスリーたち近衛女官隊は全員傷だらけで赤い血をあちこちににじませていました。オデット王女はそんな彼女たちに心を痛めました。彼女たちの決死の頑張りに答えるためにもオデット王女は皆を励まし全力で飛び続けました。

ヴァイオレットとナージャのコンビも期待以上の働きをしてくれていました。二人の息はぴったりで、ヴァイオレットの火花攻撃を警戒して飛び込んでこれない鳥たちに、ナージャはドカドカ踏み込んでいき、強烈なキックを食らわせていきました。やはり馬の脚力は鳥たちには思いの他の脅威でした。

数時間休みなしに飛び続け、追っ手の鳥たちの数も徐々に減っていきました。

ついに西の空が夕焼けに変わっていく頃、森の中に湖が見えました。王子と出会った湖ではありません。そこよりだいぶ西の方の別の湖です。追っ手の圧力のせいで徐々に方向がずれている風を装って実は計画通り大きく迂回してロヴィークのある西の方へ向かっているのです。

オデット王女は迷いました。仲間たちはもうだいぶ疲れて限界が近づいています。敵の数もだいぶ減ったことですし、今日は地上組との合流はあきらめてここで休むことにするか、それともこのまま行けるところまで行ってとにかく敵を振り切ってしまうか・・・

そんなオデット王女の迷いが伝わったのか隊列は微妙に速度を落としました。その微妙な減速が敵を懐に招いてしまいました。一羽のガラスがレスリーたちの隙を縫って隊列に突っ込んでくると、まともに最後尾の一羽の脇腹にくちばしを突き刺しました。

白鳥、若い女中の一人は悲鳴を上げて列から落下し、よろよろともかく湖を目指しました。

敵はまだ思った以上の戦力を有しているのです。オデット王女は自分の甘さを悔い、落下していく仲間を救いに向かおうとしました。

「いけません！　ここで速度を落としたり確実に奴らに追いつかれ  
ます」

レスリーが王女に並んで警告しました。

「でも！・・・」

「王女は飛び続けてください。ここは私が」

レスリーは後に続く近衛女官に合図すると一人下へ向かって飛び  
ました。

レスリーは落下する仲間を羽で支え、その傷の思った以上に危険  
な状態を見て飛び続けるのは不可能と判断しました。残念ながら彼  
女とはここでお別れです。けれどせめて安全な所に降ろしてあげな  
くてはなりません。

しかしそんな二人をまた新たなカラスたちが襲いました。

レスリーはなんとか敵を払いのけ、湖の上に達しました。

湖に下りるため立ち止まった二人に敵が大拳して襲いかかりまし  
た。

オデット王女はヴァイオレットを呼びました。

「あなたが先頭でみんなを導いてちょうだい。私は二人を助けに行  
きます」

「待つてよ、もうあの二人は・・・」

「見捨てられないわ！　あなたなら分かってくれるでしょ？　私は  
大丈夫、やつらは私だけは絶対襲わないから」

オデット王女は後をヴァイオレットに託して通り過ぎた湖に急降  
下して戻りました。

湖面に黒い影が群れて立ち騒いでいます。

オデット王女がその中に突っ込んでいくとカラスたちはパーツと  
飛び上がり、湖面には傷つきぐったり意識のない二羽の白鳥が浮い  
ていました。傷口から溢れた血が湖水に流れ出しています。

オデット王女は水掻きでばしゃばしゃ水の上に立ち、いたずらを  
仕掛けてくるカラスたちを怒りも露わに羽で追い払いました。

調子に乗った一羽が急降下してきてまともに王女の羽に殴られま



した。

空に戻ったカラスは怒りにカーツとなり、ロットバルトの命令も忘れて王女目がけてくちばしも鋭く突っ込んでいきました。

その空間に一陣の黒い風が巻き起こったかと思うと、そこに背中に大きな羽を生やしたロットバルトが現れました。

ロットバルトは腕の一振りでもカラスを水面に叩き落とし、他のカラスたちは恐れおののきいつせいに周囲に散りました。

ロットバルトは背中の羽を優雅に羽ばたかせ、王女を見下ろし微笑みました。

「私の部下がたいへん失礼をしました。申し訳ない。なにしろ離れば離れるほどバカな鳥の頭では私の命令が徹底しなくなってしまう。私から離れるのはたいへん危険ですぞ。さあ、安全な我が宮殿へおいでください」

ロットバルトが手を差し伸べると王女の周りの空気が渦を巻いて上昇し、王女の体をロットのバルトの元へ運び上げました。

王女は暴れてなんとか空気の渦から逃れようとしていましたがロットバルトの腕に抱きかかえられると、ふうっと、意識が飛んでしまいました。

## 第15章 ロットバルトの晚餐

オデット王女が目を覚ますと、そこはとてもよく見知ったところでした。

すっかり夜になってしまったのでしよう、そこかしこに目に馴染んだガラスのフード越しのろうそくの灯りが広がっています。

そこはオデット王女の寝室でした。

湖の畔に建つ美しい白い宮殿。三階建ての建物の、最上階、南側の湖に面した一番良い部屋。

オデット王女はベッドに起き上がり、何気なくそうした動きをして、王女は自分が人間の姿に戻っているのに気付きました。

天蓋から下がる薄布をめぐってベッドを下り、久しぶりの自分の部屋を歩きました。

涼やかな青い漆喰の上に乗るでレース刺繍のように華麗に浮き彫りの施された大理石の板がはめ込まれた壁、今はちよつと腹立たしい白鳥の物語が描かれた天井、可憐な丸い天蓋に覆われたベッド、銀の鏡台、はめ込み細工の文机、遠くノール海の向こうの国の神秘的な幾何学模様の絨毯、豪華で上品なオデット王女のお気に入り部屋でした。

歩いて、触れ、ろうそくの黄色い灯りの中で鏡に映る自分の顔を覗き、今夢から覚めて当たり前の日常に戻ってきて、これまでの白鳥の生活は全て夢だったような気がします。

「そんなはずはない」

オデット王女は鏡に映る自分の顔をきつい目で睨みました。

「早くみんなのところに戻らなければ」

窓から夜の湖を見下ろしました。

大きな湖です。周囲を森に囲まれ、二本の川が流れ出て、流域に田畑が広がっていきます。宮殿の湖と反対側にまっすぐの道路が延び、ユークリナの首都の街並みが広がっています。

月はまだ出ていないようです。

「ということはまだ7時半になっていないわね」

今日の月の出はだいたいその頃のはずです。

「さて、困ったわねえ」

人間に戻りたくてしようがなかったのに今はこの窓からみんなのところへ飛んでいくことが出来ません。

「いったいどうしてこうなったのかしら、というのは考えるまでもないわね」

ロットバルトの仕業です。

オデット王女をさらってここへ連れてきて、なんのつもりか人間の姿に戻したのでしょう。

ドアの方を見ました。

「私が現れたら城のみんなはどう思うかしら？」

ロットバルトに魔法を掛けられて白鳥になっていたなんて言ってる誰も信じないでしょうねえ、などと思っているとそのドアがノックされました。

オデット王女はネグリジエを着ていましたが、ま、いいかと思つて「どうぞ」と呼びかけました。

「失礼いたします」

と入ってきたのは王女の知らない女中でした。

「お着替えを持って参りました。晚餐の準備が整つてロットバルト様がお待ちになつております」

女中の持つてきたドレスは王女のドレスではありませんでした。

「ロットバルト様が王女様のために注文なさつて作らせた新しいドレスでございます」

広げて見せられたドレスは肩とスカートのふんわり広がったオーソドックスな形が凝つた裁断の布で縫い合わされ、淡い水色の絹地に青の組み紐が飾られた、いかにもおしゃれなロットバルトの注文らしい物でした。

王女は着替えると女中に先導されて廊下を歩き、何人か奉公人に

会いましたが、どれも王女の知らない者で、彼らも王女にお辞儀しながら特にこれといって不思議そうな顔もしませんでした。

「ねえ、あなたは最近入った人よね？ どこから来たの？」

「私はツエーザリ大臣閣下のお屋敷に奉公していた者です。他の者たちもだいたい皆そうです」

「ツエーザリ大臣ねえ」

いちいち口うるさく偉ぶっていて、王女の嫌いな大臣でした。

「大臣はお元気かしら？」

一応社交辞令で尋ねると、

「大臣は解任されてツエーザリ家は国外追放になりました。土地家屋は国に没収になり、行き場を失った我々はそっくりロットバルト様に雇われてこちらに移りました。お屋敷はこれから外国の大使など大事なお客様をもてなす施設に使われることになり、お城の方々はその準備にそちらに移られました」

と、女中はすらすら説明して、元の主人ツエーザリ卿にはなんの感慨も持ち合わせていないようです。

ツエーザリ大臣は国の政治全般の調整役で大臣たちの中でも一二を争う有力者です。その失脚はたいへんな政変のはずで、王女の居ない間にロットバルトはずいぶん大きく政治を動かしているようです。

「ねえ、それじゃあ私はどうということになっているの？ あー、私が誰かは分かるわよねえ？」

王女は自信なさそうに尋ねました。

「もちろん存じておりますわ。オデット王女様。なんでもたいへんな大病をお患いだそうで、お気の毒でございます。今日は気分がよろしいそうで、お元気そうなお顔を拝見できてほっとしております」

この娘が本当にそう信じているのかどうか分かりませんが、国民に対して王女が居なくなっただのはそういうことで説明されているようです。

王女は特別の時に使う湖に張り出したテラスの食堂に案内されま

した。

「おお、これは美しい！」

テーブルに着いていたロットバルトが立ち上がって両手を広げてオデット王女を迎えました。王女とお揃いのつもりか同じ水色の裾の長いジャケットを着て、女性のように大きなサファイアのはまつたブローチでスカーフを留めています。ずいぶん若作りの派手ななりですが、さすが伊達男、それほど不自然でもなく着こなしています。

テラスの壁はいつの間にもやら全面ガラス張りに改修されていて、ほぼ360度、湖が見渡せるようになっていました。

「びつくりですわ。これ、ずいぶんお金がかかったでしょう？」

「誤解なさらんでくださいよ、私の金でやったことだ、あなたを喜ばせるためにね」

さあさあとロットバルトは向かいに用意した椅子にオデット王女を座らせました。テラスは八角形をしていて、ちよつとした楽団を入れてダンスが出来るくらいの広さがありましたが、奥の窓際に小さな丸テーブルを一つ置いたきりで、壁際にずらりと色とりどりの花の鉢植えを並べ、ずらりと金の燭台を並べてクルクルねじり上げた細長いろうそくに火が付けられていました。

オデット王女は見渡して思わずため息をつきました。

「あなたは王様になったら毎日こんな晩餐会を開くつもり？」

「毎日はいたしませんよ。こういうことはたまにするといいのです。今日のような特別の日だね」

ロットバルトは立ち上がって鉢植えの中から選んでごく薄いピンクの肉厚の花びらの花を一輪だけ摘んで、テーブルの中央に置きましました。

花からぷーんと果実の甘い匂いが漂ってきました。

「いつもの食卓にはこれで十分。何しろこの上なく美しい花が目の前に咲いているのですからな」

王女は半眼になって、

「あなた、どこでそういうセリフを覚えるの？」  
と訊きました。

「胸の内から自然にわいてくるのですよ、あなたのように美しい乙女を見るとね。どうやら私は根っからのロマンチストのようだ」

何事も度が過ぎると滑稽なものです。王女は危険を感じました。ここまでべつたべたに気障だとなんだか愉快になつてきて敵対心が薄れてしまいます。

王女は内心いけないいけないと自分をいさめて、  
「城の者たちをすっかり入れ替えたようね？」

と、硬い口調で問いました。

「他に思わぬ豪華な屋敷が手に入りましてな。もちろん国の物ということですよ。公務にはそちらを使うことにしましてね、こちらの宮殿は王家の私邸にいたしました。城の者たちには大事な任務を担つてもらつたためにあちらに移つてもらいました」

「この宮殿をまるごと王の私邸にするですって？ そんなもつたないこととても許可できないわ」

「まあまあ、そんなブルーシアの女王のようなケチくさいことは言わないで、そうだ、晚餐を始めましょう、お腹がお空きになったでしょう？」

王女はかっこよくけっこうですと断つてやろうとしましたが、お腹が鳴きそうでした。

ロットバルトが合図の鈴を鳴らすと渡り廊下で待機していた給仕がカートを押してきました。

お肉の薄切りの前菜とグラスと赤のワインが乗っています。

「カラスの肉です」

王女がイヤな顔をするのをいたずらっぽく笑って、

「冗談です。鴨肉のローストです」

それでもオデット王女はとても手が出ませんでした。

「あなたはこれを食べるの？ 鳥はあなたの部下でしょ？」

「カモは使えません。群の意識が強すぎる。使えないものは、私

にとつては旨いかまずいかでしかない」

ロットバルトはそれを証明するように鴨肉を口に放り、

「これは旨い」

とおいしそうに味わいました。

「さあどうぞ、食べてごらんなさい」

オデット王女も以前は鴨肉は好きでしたが、鳥になった自分を思うとどうにも手が出ませんでした。

けれどもお腹は正直で、とうとうキュルルルル、とかわいい音を立ててしまいました。

ロットバルトはニコニコ王女を眺めています。

王女はヤケになってフォークを取ると鴨肉を口に運びました。

肉汁の溶けだしたソースが舌の上にトロリと乗って、肉を噛みしめると香ばしい香りがジワリと口いっぱいに広がりました。

こんなに美味しい鴨肉料理は初めてでした。

いえ、お肉がこんなに美味しいものだったなんて、まるで今初めて味わったような感動がジーンと胸に広がりました。

王女はもう我を忘れる感じでパクパク鴨肉を口に運びました。

ロットバルトは笑って、

「料理はまだまだ続きますから、そう慌てずに、ワインも召し上がりなさい」

給仕がグラスにワインをつぐと、王女はグラスを掴んでゴクゴク飲み干しました。

ロットバルトは王女のそんな様子を微笑ましく眺めて、ルピネーにも話した例の国を挙げてのお祭りの話をしました。

「ねえ王女様。どうか私を良い王様になるとお認めくださいませんか？ よろしければぜひ良い夫とも」

王女はロットバルトの話なんかどうでもいいように次の料理を催促しました。

ロットバルトはやれやれと楽しそうにあきれて次の料理の指示を出しました。

次の料理はロールパンを添えられた野菜たっぷりのクリームシチューで、王女の好物でした。

王女は湯気の立つシチューをスプーンにすくってそのなつかしい味に大感激しました。

「どうです？ 人間とは良いものでしょう？」

「うるさい。あんたも食べなさい」

ロットバルトはハイハイとワインを口に含んでシチューを味わいました。

ちよっぴり、王女はこんなに口が悪かったかと疑問に思いながら。王女はペロリと一皿平らげておかわりしました。

「ああ、美味しいわあー」

「ええ、そうでしょうとも。水底の藻ばかりでは飽き飽きでしょう？」

ロットバルトは意地悪に言いました。

「意地を張らずに今すぐにもこの素晴らしい人間の生活に戻ってきませんか？ もちろんロヴィークに向かったお仲間も呼び戻して」

オデット王女はシチューをもぐもぐ頬張りながら、ロットバルトの余裕たっぷりの微笑を見つめました。

「次」

「はいはい、女王様」

ロットバルトは指示してメインディッシュの鹿肉のスープ煮込みを運ばせました。

「これはあなたのジークフリート王子が仕留めた雌鹿の肉をおみやげに分けてもらったものでしてな。どうぞとくとご賞味あれ」

王女はスープのよく染み込んだ厚い肉をスプーンでサクサク切っ  
て口いっぱい頬張りました。舌に乗せたたん肉の繊維がパラパ  
ラほどけてスープの濃厚な甘さがトロリと口中に心地よくまとわり  
つきました。

「うーん・・・」

王女は鼻にこもる香りをうっとりして味わいました。



王女は一切れを十分堪能するとサクサクサク切り分けて、パクパクパクがつきました。

「そんなに慌てなくても・・・」

ロットバルトもさすがにあきれ顔になりました。

王女はあつと言う間にお肉を平らげてしまつて、

「デザート」

と催促しました。

ロットバルトはため息をついてデザートを持ってくるよう指示しました。

王女と二人切りのロマンチックな食事を期待していたのに、当てが大外れです。

「だってね」

口直しにワインを飲みながら王女が言いました。

「私は早くみんなのところに帰らなくてはいけないもの」

「おやおやなんともつたいない。あなたはまたたいへんな白鳥の生活に戻りたいのですか？ それではせめてまたここへ戻っていらつしゃい。あなたがしていたように、私があなたの方白鳥に美味しい餌を撒いてあげましょう」

「あなたの保護の下おとなしく安全に暮らせということ？ ハン」

王女は芝居がかって両の手のひらを天に向けました。

「まっぴらごめんよ」

王女は急にきつい目になってロットバルトを見つめました。

「一つ訊きたいの。」

私の父と母はどうしても殺されなくてはならなかったの？」

ロットバルトは顔をしかめて太い息を吐きました。

「あれは事故だとさいさん申し上げたはずですよ」

「ごまかしはウンザリ。私はこの国の王女として訊きたいのです。」

前国王は殺されなければならぬほど悪い王だったのですか？」

王女はがぶ飲みしたワインが回ってきたのでしよう、目の周りをうつすら赤くして、ちよつと危ないうるんだ目をしてロットバルト

を見つめていました。

ロットバルトもあきらめて言いました。

「悪い人ではありませんでした。だが、王としては無能で、失格だった。ツエーザリ大臣のような悪党の言いなりになってまたも貴族にとつて都合のいい法案を承認しようとしていた」

「ツエーザリ大臣ですか。あなたはあの人を追放したそうですね？ 国王を殺さずに最初からそうすれば良かったではありませんか？」

「私は無能な王というのが許せなかったのですよ。ツエーザリのよ  
うな輩はいくらでもいる。そのような輩は宰相である私にとっては  
明白な敵であったが、王は違う、敵ではない。が、私にとっては邪  
魔でしょうがなかった！」

ロットバルトもせいぜい怒りを押し殺した目で女王を見つめ返  
しました。

「王妃まで殺すことはなかったでしょう？」

「生きていればまたツエーザリどもに利用されます」

「では私は？ 私も殺したら良いではありませんか？」

「出来ませんな。私が王になるために必要だ。それに、私はあなた  
が好きだった。あなたを愛しているのですよ」

ロットバルトはそれが生来の気障なポーズなのか、それとも本当  
に心からのものなのか、熱っぽく、ちょっと悲しそうな憂いを含ん  
だ目で微笑みとともにオデット王女を見つめました。

「私は国の味方で国民の味方で、あなたの味方だ。オデット王女よ、  
どうか私を受け入れてはくれまいか？」

「イヤです」

王女は明確に答えました。

「私、あんまり年上過ぎる人は範囲外なの」

ロットバルトはため息をつきました。

「確かに私はあなたよりはるかに年上だ。見た目以上にね。この姿  
は気に入りませんか？ 私は気に入っているのですがね。ちょっと  
頑張れば王子くらいに若い姿になることも不可能ではないが、それ

は私のプライドが許さない。好きになつてもらえないのは悲しいが、この姿こそが、今の私の精神をズバリ表したもののなのですよ。

しかし、あなたは一国の姫として国のためどんな相手とでも結婚する覚悟が出来ておいでだと思つていましたが？」

「私もそのつもりでしたが、あなたのおかげで私も欲が出ました。私も、すてきな旦那様と結婚したいですわ。あなたの妻になるのはイヤです」

酔っぱらった王女は調子に乗つてアツカンベーと舌を出しました。ロマンチストのロットバルトは王女のはしたない姿にムツとなつてしまいました。

「王女よ。私は紳士で相当我慢強い方だが、それにも限度がある。私とその気になればあなたを無理矢理にでも花嫁にすることは容易いことなのですぞ」

と、テーブル越しに手を伸ばしましたが、その腕はグンと伸びて鱗に覆われた龍の手となり、指先は黒い恐ろしい鉤爪になりました。ロットバルトの手は王女の顔を掴み取るように伸びましたが、すると、王女の額がキラキラ銀色に輝きだし、触れようとした鉤爪はブスブス焼けて煙を吐き出し、ロットバルトは慌てて手を引っ込めました。

「おのれ、妖精の祝福の口づけか」

ロットバルトは憎々しげに王女の額の銀色の唇の痕を睨みました。今度は王女が余裕を持ってロットバルトを嘲りました。

「それがあなたの正体ね。魔王だなんて、本当はただの鳥の大將なんでしょう？」

ロットバルトは不適に笑い返しました。

「魔王の正体が鳥だったというだけのことですよ。私にはそう名乗るだけの力がある」

「でもカラベラスにはかないそうもないわね。娘の魔力の印にさえそれだけのダメージを受けるのだから、母親の伝説の黒魔女にかないつこないわ」

「あの女は今や無力だ。はるか遠いロヴィークの地から動けなくなつてしまったというではないか？ あなた方にそこにたどり着く力はない」

「あなたが邪魔するんでしょう？」

「最初の白鳥を殺したのは私の部下ではない」

ロットバルトのこの言葉は王女の胸にグサリと突き刺さりました。「自然の世界がいかに敵しいものであるかあなたも身を以て知ったはずだ。これ以上無駄に僕たちの命を危険にさらすべきではありませんな」

「無駄ではないと信じています」

「では教えてあげましょう、

伝説の黒魔女カラベラス。

あの女は確かにあくどい女だが、伝説に言われるほど大した魔女ではない。伝説とは時間を掛けて人の口が作つていくものです。真実は、ただの卑怯な悪女と言うだけのことです」

ロットバルトはたつぷり侮蔑を含んだ目でそう言いました。

「あなたはその悪女にずいぶんひどい目に遭わされたようね？」

王女は探るようにロットバルトの顔を見つめました。ロットバルトはその手には乗らないと無表情を装いました。

「そうそう、森でああなたの奥さんにお会いしたわ。奥さんもずいぶんカラベラスのことを悪く言っていたけれど、夫婦揃ってどんなひどい目に遭わされたのかしら？」

ロットバルトはフンとバカにした笑いを浮かべました。

「私の元妻ですな。ひどい女でしてな、別れて清々しておりますよ」

「奥さんはまだまだあなたに未練たつぷりなご様子でしたけれど？」

「嫉妬深いだけです。お気を付けなさい、下手に近づくと引っ掻かれますよ」

ロットバルトはハッハッハッと笑いましたが、オデット王女は初めてふつうにロットバルトを嫌な男だと思いました。

時間を掛けてようやくデザートが運ばれてきました。

それはバニラのアイスクリームでした。

「ちよつとついですがありましてな、カカツサスの頂から氷を運んできたのですよ」

自分で行ったわけではないでしょうが、大した手間です。

アルコールに火照った体にシャキシャキ氷の粒混じりのアイスクリームはたまらなく気持ちよく美味しいものでした。

ロツトバルトも王女のご機嫌な様子を眺めて自分のグラスを取りアイスクリームを食べ始めました。

食べながら王女はトローンとした目をし始めました。

ロツトバルトは胸の内ではくそ笑いました。

王女のアイスクリームにはたつぷり眠り薬を仕込んであるのです。ワインの酔いと相まってその心地よい感覚から絶対逃れようがありません。

ロツトバルトは眠り込んだ後のオデット王女にいったいどんなイタズラをしてやるのか、考えると愉快でなりませんでした。

「ごちそうさま。あー、おいしかった！」

オデット王女は手をパチンと叩いて立ち上がりました。

ロツトバルトはギョツとしました。立ち上がった王女がフラフラ床に倒れ込んでしまうかと思いきや、しっかりした足取りで立って、ニコニコロツトバルトを見えています。

いったいどうしたのだろう？

ロツトバルトの額に冷や汗が伝いました。

と、急に視界がぼやけてきて、慌ててハツとして、ロツトバルトは驚愕しました。

「ま、まさか、そんなはずは・・・」

「あらあら、私のグラスとあなたのグラス、給仕さんが間違えて置いてしまったようね？」

オデット王女はニコニコ笑っています。

「そんなバカな、絶対にあり得ん、絶対に・・・」

ロツトバルトは味覚に絶対の自信を持っていました。眠り薬の混

じつた微妙な変化が舌に引つかからないわけはありません。

事実、今になってようやく眠り薬の雑味が舌のしびれに感じられてきました。

「なぜこれに気付かなかった？・・・」

何故だ？・・・

ロットバルトは自分の失態に信じられない思いでテーブルに倒れ込みました。

「あー、いけないいけない、やっぱりフラフラするわ。調子に乗って飲み過ぎちゃったわね。こんなのが癖になったらいへんだわ」

ぼやけていく視界の中でオデット王女が背を向け、表へ出る扉を開きました。

そこは船遊びの船着き場になっているのです。

「ま、待て、行くな、行かないでくれ・・・」

ロットバルトは必死に手を伸ばし、空を掻きました。

「頼む、私は、本当に、あなたを愛しているのだ・・・」

オデット王女は振り向いてニッコリ笑いました。

「さようならロットバルトさん。お食事、とっても美味しかったわ」  
王女はちよつと下がって、腕を構えてダダダッと湖向かって駆けました。

ポーンと飛ぶと、その姿は白く輝き、白鳥に変身して空に舞い上がりました。

抜け落ちたドレスがひらひら舞って落ちてきました。

ロットバルトはがっくり意識を失って床に崩れ落ちました。

空に舞い上がりながらオデット王女は反射的に湖面を探しました。もちろん落下した二羽の姿はありません。それははるか北西の湖なのですから。

オデット王女は悲しい気持ち振り切って西を目指しました。

自分を待っている仲間たちの元へ。

薄曇りの中、満月から四日目の月が黄金に輝いていました。

## 第16章 世界の入り口その1

洞窟を抜けて外に出るとちょうど夕日が辺りを真っ赤に染めていました。

「これが、ラピス・・・」

ジークフリート王子は予想外の光景に何も考えられずただ立ち尽くしました。

そこには何もない裸の荒野が見渡す限り広がっているだけでした。オデーレも王子のとなりに来てぎゅっと腕を掴みましたが、それはいつもの甘える態度ではなく、その寒々とした景色になんともいえない孤独と恐怖を感じてのことでした。

クラリスもこの景色を眺めて眩きました。

「何度見ても慣れるということがないわね。ここは嫌いだよ」

「ここもな、昔はこんなじゃなかったんだ」

ルピネーが厳しい顔で夕日を眺めて言いました。

「確かにカカツサスの山からこっちは南側とは比べものにならない厳しい気候だ。だが、見てみる」

ルピネーはみんなに東の方を指さして示しました。

「あっちの方にはまだ森が残っている」

ベルーシアの森とは比べものにならない貧弱な、すかさかの森でしたが、一応山裾に森が広がっています。

「ここをこんな寂しい景色にしちまったのは、こいつさ」

ルピネーは胸ポケットから例のロットバルトから王子がもらった金メダルを取り出しました。

黄金が夕日を受けて血塗れたように真っ赤にぬめぬめ光りました。「今ここはラピスの領土になっているが、およそ五十年前には小さいが立派な独立国があったんだ」

ルピネーは厳しい口調で語り始めました。

「その国の人々はラピスとは違ったところから流れてきた人々だっ

た。ラピスだつて元々あつちこつちから人が流れてきて出来た国だが、ラピスは主に西から来た人々が中心になつて作つた国で、その国は東の、さらに東から流れてきた人々によつて作られた国だった。ラピスは北からほとんど勢力を増して大きくなつていったが、西の方、ロヴィークや周辺の国々が平和的な同盟関係を築いていくとラピス一國が野蛮な領土拡大戦争を続けていくわけにはいかなかった。それでその国はかろうじて独立を守つていたんだ。

しかしやはり端っこにちょこんと存在するこの国は目障りだった。カカツサスの向こう側との通商ルートにもかかつていたからな。それにラピスとは文化も習慣も大きく異なつていた。それが、一部の高慢な貴族には我慢がならなかった。

そして五十年前だ、その国に大規模な盗賊集団が攻め入つた。ラピスはその盗賊討伐のために軍を出し、みごと盗賊どもを追い払つた。ラピス軍は警戒のためその国に駐留し続けた。すると、また盗賊どもが攻め入つてきた。ラピス軍は彼らを皆殺しにしたが、盗賊どもを恐れて国を出ていった国民たちは誰一人帰つてこなかった。それで仕方なくその国はラピスが管理するようになり、そのままラピスの一部になつた……

この話、分かるかい？」

ルピネーの怖い笑顔に見つめられて王子は首を振りました。

「盗賊たちを追つ払つたんでしょ？ それでいいじゃない？」

オデーレが言いましたが、そのオデーレもこの話の真実が何か恐ろしいものである予感を感じていました。

「種明かしはこうだ。

最初にやってきた盗賊は実はラピスの軍隊で、二度目にやってきた盗賊はラピス軍から国を取り戻すためにやってきたその国の人々だった。

ラピスは自分で戦争の種をまいて、国を乗っ取り、その国の人々を皆殺しにしたんだ」

オデーレは恐ろしさに震え上がり、ジークフリート王子は憧れの



ラピスの卑怯なやり口に信じられない思いで立ち尽くし、クラリスは激しい怒りに押し黙りました。

案内人のジローと義理の弟は皆の後ろでこの話を聞いていました。「俺はこれまで何度か国同士のいがみ合いを調停してきた。そういうとき俺が一番に考えるのはこうだ、絶対にこれを戦争にしちゃならねえ、戦争になつちまったら負けだ、つてな。戦争になれば確実に人が死ぬ。戦争にいいも悪いもねえ、戦争そのものが駄目なんだ。だがその戦争を、てめえの欲望のためにわざわざ起こして、それを正義だと演説しやがる。そんな奴は絶対に許せねえ、そんなクソ正義に拍手を送る奴もだ！」

その作戦を指揮したのがジャローム將軍だ。ジャロームはその国の人々を憎む貴族グループの一員だった。奴はなんの躊躇もなく人々を殺しまくった。ここ一帯にあった森に火を掛け、人々を追いつめ、逃げ場を失ったところを女も子どもも容赦なく皆殺しにした。まさに鬼畜だ」

ルピネーも怒りを抑えきれずつい声が荒くなりました。

「それだけのことをやりながら、奴は英雄として喝采され、国王よりこの金メダルを贈られたんだ」

夕日に赤く染まった金メダルは、まさに血塗られた金メダルだったのです。

「もちろんラピスの人々は真実を知らなかった。知らなかったが、その後その国の人々がどうなったかなんて気にする人間がいなかったのも事実だ。上級貴族の間でこの作戦の真実は公の秘密だったが、それを非難する者も、表面的にはいなかった。人々は英雄ジャローム將軍を褒め称え、ジャロームもこの金メダルをいつも持ち歩いて事あるごとに自慢していたそうだ。

だが、そんな奴にある日、天罰が下った」

ルピネーは凶悪な笑みを浮かべました。

「奴は戦争と狩りが趣味のような男だった。狩りの最中どこからか

飛んできた流れ矢に喉を突き刺され、血の泡を吹いて苦しむだけ苦しんで死んでいった。

狩りではたまに起きる事故だ。その時そこに居合わせたのは奴の仲間の上級貴族ばかりだったから特に誰に責任が問われることもなく不幸な事故として決着した。

が、一つ不思議なことがあった。その時も奴は金メダルを持ってきていて、仲間に見せびらかしていたそうだが、遺体は金メダルを持っていなかった。どこかに落としたりしたのだろうかとさんざん捜されたが、結局見つからなかった。

以来ジャローム將軍の戦勝記念金メダルが世に現れることはなかった・・・つい先日までは」

ルピネーは王子に金メダルを放るような仕草をしましたが、王子は尻込みして受け取るうとはしませんでした。

「ところで滅んだその国の民だが、実は全て殺されたわけじゃない。燃えさかる森を抜けて力カツサスにたどり着いた者たちがいた。だが、彼らがそのまま生き延びたわけではない。そのままそこにいたのではいずれ軍隊が駆けつけて皆殺しにされてしまう。そこで地獄に通じる穴として恐れられていた洞窟に逃げ込んだ。つまり、ここだ」

こちら側の出口は反対側よりずっと小さく、かがまなければ通り抜けられない大きさでした。周りにはゴツゴツした凍てついた岩があるだけ。

「それまでこの洞窟を反対側に通り返けた者はいなかった。歩いてきて分かるだろうが中はとんでもねえ複雑な迷路だ。彼らはひたすら命の危険から逃れるために奥へ奥へと進んでいったんだ。俺たちみたいに灯りがあるわけじゃねえ、真っ暗な中をだ。

最初はけっこうな数の人間がこの穴にたどり着いたが、迷路にはまって迷った挙げ句に飢え死にしたり、俺たちも歩いた鍾乳洞の穴に滑り落ちたり、絶望して自ら命を絶ったり、半数以上がこの中で死んでいった」

洞窟は、全体が彼らの墓場のようなものだったのです。

「頭のいい奴がいて、みんなで手をつないで一本につながって穴の探検を始めた。一本の穴に入っていった、駄目なら印の岩を置いて元に帰り、また別の穴に入り、駄目ならまた戻り。このまま死んでたまるものか、なんとしても生き延びてやる、そういう執念の鬼となり、ついに、反対側の出口にたどり着いた。いったい何日穴の中にいたのか、日の光の下お互いの姿を見たときにはやせ衰えてまるで人間じゃねえみたいになっていたそうだ。途中でも何人も力尽きて死んでいき、生きてたどり着いたのはわずかに十五人だったそうだ」

まさに壮絶、鬼気迫る話で、みんなシーンと黙り込んでいました。「で、向こうの宿屋にいた爺さん、あれがその生き残りの一人で、彼らがその孫たちだ」

と、ルピネーはジローたちを親指で指しました。

ジローたちは、他人には伺い知れない思いを胸に抱いて、じつと立っていました。

「そうなの、ちゃんと生き続けているのね」

オデーレがほっとしたように言いました。

「だがな、問題はまだ終わってねえんだ」

ルピネーがさらに追い打ちを掛けるように言いました。

「ジャローム將軍の事故死以後、事の真相が囁かれるようになっていった。周りの国からの非難でジャロームの所属していた貴族グループはラピス国内での立場を悪くしていき、どんどん権力の中枢から追いやられていった。」

さまあ見ろつてところだが、じゃあその国がその後どうなったかっていうと、これがどうもなっていないねえ。今も生き残りの民は外国で細々と隠れ住んでいるような有様で、国は今もラピスの領土のまままだ。ラピスの誰も彼らに国を返そうなんて思いもしねえ。今や恥ずべき暗黒の歴史として口をつぐむばかりで、領土は領土、自分たちの物を今さら他人に返そうなんて気はさらさらねえ。まったく

てめえ勝手なものだが、実は俺もその考えが分からねえでもない。

人間の歴史はしょせん殺し合いと奪い合いの歴史だ。後ろ暗えところをほじくり出したら切りがねえ。どっかであきらめて線を引かなきゃ永遠にいがみ合い殺し合いが続いちまう。だがどこで線を引くかつてのがまた争いの種になっちまう。人間はどうしたって自分の利を多く守りたがる。結果不利益を被る方はやっぱりそれが許せねえ。それでも、やっぱり線を引かなきゃならねえ。

だからな、

ルピネーはジローと弟に向き合い、

「すまん。許してくれ」

と、深々頭を下げました。

「今さらあんたらに国を返せばまた争いが起きる。だから、あんたらはラピスの民として生きてくれ。ラピスの民であることを受け入れてくれるならば、俺と親父殿が責任を持ってあんたらの生活を成り立たせる。この洞穴もあんたらの財産として権利を確保する。だから、どうか俺たちを受け入れてくれ」

ルピネーは大きな体を精いっぱい小さくして頭を下げ続けました。ふだん陽気なルピネーですが、その胸の内にはこんなにも重いものを秘めていたのです。

「あなたのせいではない、と我々も思いましよう」

ジローはルピネーに歩み寄り、肩を抱いて頭を上げさせました。

「あなたはいい人だ。伯爵様も信用できる人のようだ。我々もラピスを憎むのはやめましよう」

「そうか。すまねえ」

ルピネーが顔を上げると、

「もちろん、きちんといたただくものはいただきますがね」

とジローは笑いました。

「あなたの交渉術を学んだんですよ」

「こいつは手強そうだな」

ルピネーもようやく肩の荷が下りたように朗らかに笑いました。

「でも、それじゃあ・・・」

王子が言いました。

「何故ロツトバルトがその金メダルを持っていたんだろう？ どこから手に入れたのかな？」

「断定は出来ねえが、」

ルピネーが考えながら言いました。

「ジャロームを殺したのはロツトバルトじゃなかったのかな」

「でも、それは五十年前の話でしょ？ 彼は、まだ五十にもなっていないでしょう？」

「あいつは人間じゃねえ。百年、いや、二百年も生きているかもしれねえ。な、クラリス？」

「そうね。見た目通りの年ではないでしょうね」

クラリスの母カラベラスも百年以上生きているはずですが、見た目は二十歳くらいの娘です。

「ねえ、それじゃあ・・・」

オデーレが言いました。

「ロツトバルトって、正義の味方なんじゃない？」

なんとなく浮き浮きした嬉しそうな声です。

「おいおい、おまえさんをだまして花嫁にしようとした男だぞ」

と、ルピネーは言いながら、

「だがまあ、確かにそうとも言えるな。ジャロームみたいな奴は殺されて当然だ」

「でも・・・人殺しはいけないわ・・・」

クラリスが言いましたが、

「本当に、そう言いきれるか？」

ルピネーに問われて黙ってしまいました。

「許されねえ悪行が権力によって正義とされてしまったら、その犠牲になった者たちはどうしたらいい？ たとえ悪と見なされようと、凶行に走るしかあるまい。それは悪を許しちまった社会の責任だ」

「それじゃあおじさまは、」

クラリスは目を潤ませてルピネーを睨みました。

「ロットバルトが正義だと言うの？ 国王と王妃を殺したのも、正義だって言うの？」

ルピネーは苦しそうにうなづいて、すまなそうにクラリスを見つめました。

「正直言つて、俺には分からん。二人を殺したのは明らかに悪だ。

だがそれを以て奴が何をしようとしているのか考えると、やっぱり、俺にはまだ判断が付かん」

「そんなの、私は許せないわ」

クラリスは悔しそうにルピネーから目を逸らしましたが、眼前に広がる真っ赤に染まった荒野を見ると、どうにもやりきれない怒りと悲しみがわき起こってきました。

「ここに、森があつたのね。彼は、そこに居たのかしら？・・・」

「」

ルピネーは平らな岩を見つけると金メダルを置き、ガンガン思い切り靴底で踏み付け始めました。メダルは潰れて一回り大きくなり、表面の文字や模様はすっかり消えてしまいました。

ルピネーは懐中時計を取り出し、潰れた金メダルと並べてジローに差し出しました。

「契約成立の前金だ。どっちがいい？」

ジローは断りましたがルピネーは強引にどっちか選べと突きつけました。

「それじゃあ・・・」

「よし」  
ジローは本当にいいのかなと迷いながら懐中時計を指さしました。

ルピネーは時計のふたを開け、ナイフを取り出して「親愛なる山の民へ」と署名と共に刻みました。

「これでこれはおまえさんたちの物だ。洞穴のホテルにちょうどいいな」

とジローに渡しました。

王子は懐中時計をうらやましそうに見ました。

洞穴の出口から麓まで三十分ほど歩きました。そこにジローの仲間が馬車で待機していて、ジローたちとはここで別れました。四人はお礼を言い、馬車が動き出すと笑顔で手を振りました。

馬車に揺られているうち夕日は地平線の彼方に消え、夜の闇が広がってきました。

山裾の森に入っていく、しばらく行くと、向こうに町の灯が見えてきました。こちらが本来の登山路の登り口で、なかなか活気のある町のように、馬車で通っていくと荷物を担いだ人の往来が多く、道沿いの建物のあちこちから食べ物匂いが温かい湯気と共に立ち上り、にぎやかな人の笑い声や楽器の音色や歌声が聞こえてきました。

馬車はルピネーの定宿に到着し、馬車を操縦してきた山の民ともここで別れました。

宿は大きくはありませんでしたが造りはがっしりしていて調度品も高級そうで、なかなか格式の高い宿のようでした。

王子とオデーレとクラリスは疲れて眠いのを我慢してとにかく夕食を半分眠りながらお腹に納め、部屋に案内されるとベッドに倒れ込み、三人ともグーグー寝息を立てて一気に深い眠りに落ちていきました。

少し時間をさかのぼって。

王子一行が山を下りて、夕日が沈むと、洞窟の出口より一つの影がぬっと出てきました。

あの鳥人間です。

ルピネーもクラリスもまったく気付きませんでした。鳥人間は一行の後をつけて洞窟に入り、どうやら日光の苦手らしいこの鳥人間は、日の沈むのを待って今洞窟から出てきたのです。

頭のいい鳥人間はルピネーたちが向かった方角を見極めるとその

山裾の森に向かって飛びました。

森に入ると高い木の枝にとまり、何やら力を込めてブルブル震え出しました。すると、かなり変ではありましたが、人間に近い形をしていた口が尖って鳥のくちばしになりました。

鳥人間はくちばしで、ホーホー、と鳴き出しました。

どうやら鳥人間の正体はフクロウであったようです。

しばらくホーホー鳴いていると森のあちこちからフクロウの仲間たちが集まってきました。

「我ら鳥族の王ロットバルト様の命である」

鳥人間はフクロウたちに王子とルピネーの一行を捜すように命令しました。

「朝になつたら昼の鳥たちにも伝えよ。ただし見つけても手出しはせぬように。私に知らせるだけでよい」

フクロウたちは各々思う方角に散っていき、鳥人間も大きな翼を広げて森の上に飛び上がり、目星をつけていた町に向かって飛んでいきました。



## 第17章 世界の入り口その2

翌早朝。

まだ朝も明け切らないうちに三人はルピネーにたたき起こされました。

「起きろ起きろ。さつさと朝飯を掻き込みませ。馬車の中でならいくら寝てもかまわんぞ」

「じゃあごはんにらないから馬車に乗って寝る」

とクラリスが言うと、

「じゃあそれでいいや」

と三人は無理やり馬車に詰め込まれ、ルピネーは御者台に乗るとさつさと馬車を走らせました。今度の馬車は濃い緑のエナメル地に金の装飾が施された豪華な大型馬車で、これが本来の特務外交官用の公用馬車でした。四頭立てで六頭立てに改造する余裕もなくルピネーは不満でしたが、客室の三人はふかふかのソファで安心して気持ちよく眠り治すことが出来ました。

再びルピネーに起こされるともうお昼をとつくに回っていて、そこは整然とした都会の街でした。

「ここ、どこ？」

たっぷり眠って気持ちよく伸びをしながらクラリスが訊きました。

「ガルボリースだ」

「ガルボリース？ それはまたずいぶん飛ばしたものね」

「なんにもねえ真つ平らの道だからな。気持ちよかつたぜ」

「ふーん・・・、って、ちよつと待ってよ」

クラリスは記憶を確認しながら眉をしかめて言いました。

「なんか遠回りしてない？ ペテロブラーグまでまっすぐ向かう道があるでしょ？ ここってかなり東に偏ってない？」

改めて見てみればカカツサスの山並みがそびえ立ち、今朝からあんまり離れていません。

これぞ思い描いていたラピスの街並みと感動していた王子も会話を聞きつけ慌てて寄ってきました。

「道を間違えちゃったんですか？」

「間違っちゃいねえよ。俺を信用しろい」

こつちだ、と言ってルピネーは三人を率いて歩き出しました。

馬車を止めたのは市庁舎の前で、馬車は職員が引き取って庁舎内にある馬車置き場に格納し、ルピネーたちは門からまっすぐ伸びる大通りを歩いていきました。

街は特に大きな建物はありませんでしたが、いろいろなお店が色とりどりの看板を掲げ、外装もそれぞれに工夫が凝らされていて美しく、大きなガラス窓の中に商品を飾って宣伝しているお店が多くありました。日傘を差した綺麗なドレスのご婦人方が楽しそうにお店のガラス窓を眺め、乗合馬車が忙しそうに行き交っています。

街はずいぶん潤っているようです。

その潤いは接している大河のおかげでした。

大通りから河の方へ折れて入っていくと、大きな倉庫が建ち並び、裸の肩の男たちが威勢のいいかけ声を出し合い忙しく働いています。

「ねえ、もしかして」

クラリスが訊きました。

「ペテロブラーグまで船で行くつもり？」

「あたり」

ルピネーが上機嫌で答えました。

「船ってそんなに早いものなんですか？」

王子が訊きました。

「僕は川船は知らないけれど、湖に浮かべる船はずいぶんのんびりしたものでしたよ」

クラリスも王子に同意しました。

「そうよね。川船だって馬車に比べたらうんとスピードが落ちると思っわ」

「ルピネーさんは自分が船に乗りたいただけなんじゃないの？」  
オデーレも言いました。

「ま、あたしは王子様といっしょにのんびり船の旅を楽しむ方がいいんだけれど」

オデーレに流し目を送られて王子は頬を染めてデレッツとしましたが、さすがにここはのんびりしていられません。

「船旅なんかで間に合っんですか？」

「おまえら俺が自分の趣味で遊んでると思ってるだろう？」

ルピネーは三人を睨みましたが目が笑っています。

「実は、そうだ」

まあまあ怒るな、と手で押しとどめて、

「俺の趣味ってのは認めるがな、趣味だって極めれば大したものなんだぜ。大丈夫、ちゃんと間に合っよ」

倉庫の並びを抜けると大河がさーっと開けました。

「ガルボ河だ」

向こう岸がずいぶん遠くに見えます。水量も豊富で、キラキラ日の光を反射しながら緑がかった水がよどみなく流れています。

ルピネーは、一般の客船の船着き場はあっちの方なんだがな、と指さしつつ反対の方へ歩いていきます。

道は黄色いレンガが敷き詰められ、それはそのまま川岸の堤防になっっています。帆を立てた大きな船が何艘も岸に着けられ、王子はすっかり感動してあっちこっちにキョロキョロ視線を動かしました。  
「そら、そこだ」

倉庫の列が終わり、街の賑わいからすっかり遠ざかったところに、でーんと、大きな木造の小屋が建っていました。小屋とは言えない大きさですが、形は単純なただの小屋です。

小屋の前には見るからに柄の悪そうな男たちが二十人ほどもずらりと並んでいました。

近づいていくと河から小屋の前まで水路が引き込まれていました。水路から坂道が登って小屋の中に続いています。小屋の前は壁が大

きく開いて、灰色の厚い大きな布が張つてあります。

ルピネーが「おい」と大声を上げて手を振ると柄の悪い男たちも子どものように大きく手を振り返してきました。見た目ほど怖い男たちではないようです。

「よし、野郎ども、いよいよ出航だあー！」

おー！と男たちは歓声を上げました。

布が巻き上げられ、小屋の前が大きく開きました。日が逆なので中は真つ暗で何も見えません。

小屋の左右に分かれた男たちがオーエスオーエスとかけ声を合わせてそれぞれ中から引かれた綱を力いっぱい引っぱり出しました。

すると、頭上に白い丸い物が現れたかと思うと、ぬーっと、大きな船体が現れました。

ふつうの商船の二倍、三十メートル以上もある大きな白い船が坂を下つて水路にドーンと大きな波しぶきを上げて浮かびました。

キラキラ綺麗に輝く新造船は他の船とはずいぶん変わっていました。

マストが立っていました。今は帆は上に巻かれています。船体の割には小さなものでした。

代わりに、大きな水車が後部に四つ、並んで立っていました。

棧橋が架けられ、ルピネーに続いて乗り込みました。

前部の甲板に操舵輪が立ち、ちよつとした宿屋のような部屋がいくつか乗っています。その後ろにマストが立って、後部甲板がグンと下がっています。

そこに大きな四つの水車が立っていて、下四分の一が床に消えていました。でも大きさから見て水面に届いてはいないようです。四つの水車は鉄の棒が通されてつながっています。奇妙なのは、水車の上の方に水車から少し離れて鉄の棒が横にしつらえてあって、水車の間にそれを支える三角に組んだ木枠があるのですが、その棒のところまで登っていけるように階段になっています。

「どつだ、凄いだらう」

とルピネーが得意満面で言いました。

「凄い・・らしいというのは分かるんだけど、なんなの、この船？」  
三人ともこれがどういう仕掛けなのかさっぱり分かりません。

「分からんだろうなあ。へへ、百聞は一見に如かずってやつだ、試運転といってみるか！」

船を引き出した男たちが六人乗り込んできました。

一人は前部甲板で舵を持ち、四人の男たちが木枠の階段を上って鉄棒に手を乗せて足を水車に掛けました。残りの一人は下で四人を見守っています。

「よし、船長、出発だあー！」

「了解、オーナー」

船長は操舵輪脇に立つ薄い鉄のパイプの穴に向かって大声を上げました。

「動力輪回転開始イーっ！」

すると水車に取り付いた男たちの脇に伸びたパイプの端の開いたラツパから同じくらいの大声で「動力輪回転開始イーっ！」と聞こえました。

「アイアイサー！」

男たちは答えて、ソーレ、と声を合わせてぐつと水車を下に踏み込みました。

屈強な男たちに力いっぱい踏み込まれて大きな水車がゆっくり回転し始めました。ソーレ、ソーレ、とかけ声に合わせて次第に水車の回転がなめらかに速くなっていきます。

すると、ゆっくり船が動き始めました。

船は水路を進み、船長の舵に合わせて旋回し、ガルボ河に出ました。

水車の回転はぐんぐん速くなっていき、船はまるで滑るように川面をサーッと走っていきました。

このスピードなら馬車にも負けません。

王子とオデーレはすっかりはしゃいで通り過ぎていく岸の商船に

向かっておーいと手を振りました。岸で忙しく働く男たちもこの大きな見たこともない変わった船にしばし手を止め、ポカーンと口を開けて見とれていました。

「すごい、すごい、すごいですよ、ルピネーさん！」  
王子はもう大興奮です。

「いったいどうやって動かしているんです？」  
クラリスも興味津津です。

ルピネーはフフーンと得意顔で、  
「船の下に穴が開いているのに気が付いたか？」

王子は首を傾げましたが、クラリスは気付いていました。

「この下にな」  
と、床を指さして、

「船の先から尻に丸い穴が開いているんだ。その穴にスクリューが仕込まれていて、そいつをこの水車で回して水を後ろに掻き出して進んでいるんだ」

「スクリューってなんですか？」

「うーん、そうさな、棒の周りに螺旋階段を巡らしたみたいな物だ。そいつを回すとな、水が後ろに掻き出されるんだ。これを歯車やなんやでこのでかい水車と連動させてな、ものすごいスピードで回転させているわけだ。それでこれだけのスピードが出るんだが、一つ問題なのがなあ・・・」

ルピネーは頭をボリボリ掻きました。

水車を回している男のうちの一人が、

「おーい、交代頼むわ」

と言うと、下に待つていた男が階段を上っていき、こぎ手を交代しました。交代してもらった男は下に下りてきて、ハーハー息を吐きながら半ズボンから覗くパンパンに張った図太い太股をパシパシ叩きました。

「と、まあ、ご覧のように水車を回し続けるのはかなりの重労働だな、途中途中で人間を入れ替えて交代しながらでなきゃとても漕ぎ

続けられねえんだ」

だからな、金がかかっちまうのさ、とルピネーは言いました。

「なるほどねえ、よく出来ているわ」

クラリスは感心しながら「ふうん」と喉をうならせました。

「そのうち誰でも魔力なしに魔法が使えるようになってしまいそうね」

岸には徐々に人が集まりだし、子どもたちが船を追いかけて走っています。

「よし。デモンストレーションもこんなもんで十分だろう。船長、客船乗り場の先に着けてくれ。」

これから先の町々に早馬を飛ばして漕ぎ手の交代要員を準備してもらおう。あらかじめ話は付けてあるんだ。この航海がうまくいったら定期船として商売しようと思っただけだ。

船が岸に着くとすぐに黒山の人だかりになり、ルピネーは満面の笑顔で船長とがっちり握手しました。

「せっかくだから俺は客室分の客を集めてくる。出航は明日朝七時だ。寝坊するなよ。おお、そうだ、王子。釣りだ」

ルピネーは財布から数えて金貨を十五枚、銀貨を五枚、銅貨を二十枚、王子に渡しました。

「ちよつと多いんじゃないの？」

とクラリスが言っただけで、王子に余計な事を言うんじゃないと睨まれました。

「ちゃんと計算してるよ。俺は金に関してはきっちりしてるんだ。だから、ちゃんと客を乗せて行くのさ」

王子は、王女様からもらった金貨よりだいぶ少なくなっていました。でも、それでもこうして自分のお金を手に入れて嬉しくてニンマリ顔がほころんでしまいました。

「おまえら先に市庁舎に帰ってる。今夜はあそこに泊まりだ。俺はここで商売していくからな。まあはしゃぎすぎない程度に街を見物して、好きな物食って、オデーレにぶつうのドレスを買ってやれ。」

クラリス、おまえも黒っぽい服ばかり着てねえで、もうちつと子どもらしい明るい服を着たらどうだ？」

「わたしは黒が好きなんですう」

「そうそう、魔女の服と言ったら黒かネズミ色に決まってるわ」

オデーレが毒のある言葉でからかいました。

「いいよ、僕が選んでやるよ」

王子が言つとオデーレがムツと嫉妬の目つきをしました。

「君はもっと子どもらしいかっこうをした方がいい。君は言うことがいちいち説教くさくてかわいくないからな」

オデーレがオホホと笑つて、クラリスは何か言い返してやろうとしましたが、

「そうだ、王子の言うとおりだ」

とルピネーまで言つて、「そらそら行った行った」と船から追いつ出されてしまいました。

代わりに商売で船を使っているらしい金持ち風の男たちが乗り込んできてルピネーにあれこれ質問し始めました。

「さあ僕たちは街に行こう！」

オー！とオデーレがニコニコ腕を突き上げ、しょうがなくクラリスも二人に付いて歩き出しました。

翌朝。

船着き場にやってきたクラリスは首に大きなリボンを留めた白とピンクのお人形のようなかわいらしいドレスを着ていました。

あれから街の大通りに出てさんざんお店を渡り歩き、ああでもないこうでもない、けっきょく買い物仕切ったのはオデーレでした。クラリスはすっかり着せ替え人形のようにされて何十着もドレスを着替え、もうくたくたになったところで強引にこのドレスに決められてしまったのでした。

オデーレはすっかり自分のドレス選びも忘れず、まるで値段も見ずに高いドレスばかり五着を選んで、どれが似合うかしら？と王子



に決めてもらいましたが、王子は青くなつて一番安い物を選びました。それでもオデーレは王子に決めてもらったドレスがとても気に入ったようで頬を赤くしてニコニコニコしていました。

オデーレは場違いなほど色鮮やかな赤いドレスを着ています。鮮やかすぎて下品にも感じられるのですが、そう見えないのはそれ以上にオデーレの美貌が際だっているからです。ドレスに合わせた真っ赤な唇が、顔は同じでも清楚なオデット姫とはまるで別人で、華やかな顔立ちに見せていました。

クラリスはオデーレの真っ赤なドレスを最初あまり似合っていないように感じていたのですが、今はぴったりのような気がしています。

真っ赤な色はロツトバルトの娘オデールを連想させますが、今頃彼女はこうしているのでしょう。

王子もオデーレの華やかな姿にすっかりボーツと、オデーレの赤が移ったように真っ赤になっています。

「よお、かわいいじゃねえか」

と、ルピネーはクラリスのピンクのドレス姿を大喜びで褒めてくれましたが、クラリスは恥ずかしいばかりであり嬉しくありませんでした。

王子も

「君はその方が似合う」

と言いましたが、こちらはなんだか子ども扱いでバカにされているようでぜんぜん嬉しくありませんでした。

オデーレへの

「おお、素晴らしい！　美しい！　美の女神もあなたの美しさには嫉妬するでしょう！」

などという大げさな賛美とは大違いですから。

「なんでえ、妬いてるのか？」

とルピネーにからかわれて

「別にいい」

とそっぽを向いて、あら、本当に妬いてるのかしら？と、我ながら馬鹿馬鹿しくなりました。

さて出航です。

急の募集だったにもかかわらず定員いっぱいのお客様が集まり、朝早い出航だというのに珍しい高速船の出航ということで船着き場を中心にレンガの護岸は多くの見物人が集まっていました。

眩しい朝日の中、多くの人たちに見送られ、白い大型旅客高速船「大白鳥」号は華々しく処女航河に旅立ちました。

## 第18章 大白鳥号のお客たち

大型高速旅客船「大白鳥号」は順調に河を下っていきました。下るガルボ河はカカツサス山脈の雪解け水を源泉としてラピスの首都ペテロブラーグまで豊富な水量を維持してほばまっすぐに続いています。

下りでもあり山脈から吹き下ろす風を帆に受けて早駆けの馬車にも負けないスピードが出ています。ペテロブラーグまで昼夜航行し四日の予定ですが、この分なら予定通りに到着しそうです。普通の客船なら十二日はかかるそうです。

お客たちは船のスピードを実感しようと皆甲板に出たがりましたが、甲板はそれほど広くないので全員が出ることは出来ず、オーナーのルピネーが如才なく順番にお客たちを案内していきました。

お客たちは皆次々流れていく岸边の景色に驚き、ちよつとお年を召したご夫人など目を回しそうになったりしましたが、朝のさわやかな空気を十二分に堪能しました。

客室は大二室、中八室で、定員二十四人でしたが、今回は王子たちを含めて二十八人のお客が乗っていました。四人用の大部屋の一室を王子たち四人が使い、もう一室をさる夫人と子どもたちが使っていました。なんとこのご夫人、七人もの子どもたちを引き連れ、ていました。

このご夫人と七人の子どもの子どもたちが一番最後に甲板に案内されたのですが、お隣のよしみもあってクラリスたちもいっしょに甲板に出ました。

甲板はいっぱいで、王子とオデーレは脇の通路で仲良く手すりにもたれていい雰囲気になっています。

子どもたちは上は十二三歳から下はまだ生まれたばかりで母親の腕に抱かれています。上四人が女の子、下三人が男の子で、さぞかしにぎやかだろうと思いきや、みんなとてもいい子たちで、さす

がにまだ二歳になるかどうかの下から二番目の男の子はちょこまか歩き回りがつてお姉さんに無理やり手をつながれています。他のお姉さんお兄さんたちは騒いだりせず、かといって暗く沈んでいけるわけでもなく、皆子どもらしい綺麗な目をキラキラさせてこの素晴らしい高速船の素晴らしい川渡に感動しています。

母親は七人もの子どもがあるにしては、いぶん若々しく、下手をする。とちよつと年の離れたお姉さんみたいに見えました。額が広く奥からじつと見つめるような真つ青な瞳をして、とても教養の高そうな顔つきをしています。三四ヶ月といったところでしょうか、腕に抱いた赤ん坊がむずがるかわいらしい唇からまるで天使のような声でやさしい子守歌を歌い出しました。子どもたちも優しい笑顔で自分たちの一番下の弟を愛しそうに見つめ、お姉さんたちは自分たちも幼い頃に歌ってもらったやさしい子守歌に甘酸っぱい感傷を抱きました。

この素晴らしい子守歌にはオデーレもすっかり引き込まれてしまいました。

赤ん坊がやすやす眠って子守歌が終わるとクラリスは小さく拍手しました。

「素晴らしい歌声ですね。それにとつても素敵なメロディ」

「ありがとうございます。お褒めに与り光栄ですわ」

夫人は幸せいっぱいの笑顔で答えました。

一番上のお姉さんがずーっと抱きっぱなしの母親の腕から弟を引き受けました。

「はじめまして。私はクラリスと申します。あちらはジークフリート王子とオデーレ嬢」

と、クラリスは自分たちを紹介しました。

「はじめまして。私はアレクサンドラ・ダヴィドフと申します。こちらが・・・」

と夫人は自己紹介して子どもたちも紹介しましたが、七人もいるのでとても一度には憶えられません。

「大家族ですね。ペテロブラーグへはご旅行ですか？」

「ええ。兄の招待を受けまして。ああ、この大白鳥号に乗れたのは運命のように感じますわ。あの子」

と長女の腕に抱かれて眠る赤ちゃんをさして、

「のこともあつて出発がずいぶん遅れてしまつて、もう兄との約束に間に合わないかと半ばあきらめておりましたの。子どもたちは皆兄が大好きで、初めて自分たちの方から訪ねていくのでそれはもう楽しみにしておりましたのに。夫は残念ながら仕事の都合で来れないのですが、私たちもこの船がなかったらあきらめて家に帰るところでしたわ」

「そうなんですか。良かったわね」

とクラリスが言うとき子どもたちは嬉しそうに頷きました。

「兄という人は人を喜ばせることが大好きで、お金もないくせに借金をしてでも人を喜ばせるようなことがしたくてならないという、本当にいつまでも子どものもので困つたものです」

とアレクサンドラ夫人は笑いましたが、この船の船賃はかなり割高なのでこの料金を支払えるダヴィドフ家はなかなかお金持ちなのでしょう。

クラリスはちよつぱり自慢げにルピネーと船のことを説明してやりました。説明しながらルピネーの道楽も役に立つものだと感心しました。

「ところで運命とおっしゃいましたけれど、この船の名前、白鳥に何か思い入れがありますの？」

ちなみにこの大白鳥号の名前はずっと前から決まつていて、単純に白くて大きくて美しい船だからなのですが、今回の事件とは無関係ですから、これも運命と言え言えなくもありません。

「ええ」

アレクサンドラ夫人はびっくりしたように目を見張つて言いまして。

「私たち『白鳥の湖』を見に行くんですもの！」

「なに、『白鳥の湖』!？」

狭いので反対側の通路にいたルピネーが思わず声を上げて慌てて口を閉じました。さいわい赤ちゃんはぐっすり眠っています。

「どうしたの、ルピネーおじさま、なんだかかつても困った顔をしてらっしゃいますわよ？」

ルピネーは呆然と言った感じで立ち尽くし、なんだか子どもがベソをかいたような情けなしい顔をしていました。

「ねえ、『白鳥の湖』ってなんなの？」

オデーレも話に入ってきました。王子も後ろから覗くようにしています。

「バレエですわ。私の兄はピエトロ・コンチャロフスキーなんですの」

クラリスたちの誰それ?という顔に夫人も子どもたちも実に心外だという顔をしました。

「作曲家だよ」

音楽なんかぜんぜん興味なさそうなルピネーが意外にも知っていました。

「モスクリンじゃあ子どもでも知ってる人気作曲家だ」

モスクリンとはペテロブラーグの北西のラピス第二の大都市です。

「さっき私の歌った子守歌、あれは兄の曲ですよ」

なるほどあのやさしい親しみやすいメロディなら子どもたちにも人気でしょう。

「そんなに有名な作曲家さんなら知っているのも分かるけれど・・・」

クラリスは珍しくうろたえているルピネーを怪しみ、あ、と思いつたりしました。

「もしかしておじさまが言っていた『野暮用』ってそのバレエを見に行くことだったの？」

ルピネーはクラリスが王子をペテロブラーグに連れていってくれるよう頼んだときなんだか他についてがあるようなことをちらつと

言っていました。

「へー、おじさまにそう言う趣味があるとは意外ねえ」

クラリスはからかうように悪戯っぽい視線を投げかけました。

「そうじゃねえんだよ」

ルピネーは観念したようにため息をつきました。

「そうさ、確かに俺はそのバレエを見に来るように言われていたさ、親父殿にな。ユークリナの問題を言い訳に行かねえつもりでいたんだが・・・なるほどこれも運命ってやつかもしれないな。アレクサンドラさん、モデストの奴をご存じですか？」

「ええ、兄の手紙で存じております」

「モデストって、モデスト兄さんのこと？」

とクラリスは尋ねました。

「そ。モデストは私の息子でしてね。そのバレエ『白鳥の湖』のプロデューズをあいつがやってるんだ」

「ひどーい！」

クラリスは思わず声を上げて慌てて口を押さえ、ルピネーを睨みました。

「そんな大事なことどうして私に教えてくれなかったのよ！」

「だってよー」

ルピネーはしかられた子どもみたいにふてくされて言いました。

「教えればおまえ必ず行くって言うだろ？ そうしたら俺も行かざるをえなくなっちゃうじゃねえか」

おまえ一人を行かせたら後で親父殿に何を言われるか、とルピネーはブツブツ愚痴を垂れました。

「なに子どもみたいにすねてるのよ？」

クラリスはすっかり怒ってしまって目が三角になっています。

「分かった。悪かった。ごめん。許してくれ。な？」

ルピネーはひたすら頭を下げてようやくクラリスに許してもらいました。

「まあいいわ。とにかく、見られるのね、ペテロブラーグに行けば

「？」

「ボルジョー劇場で上演してますの。ひと月間の公演予定で、最終日まであとちょうど一週間ですわね」

「ギリギリじゃないの。間に合うんでしょうね？」

「大丈夫だよ、任せておけて」

「なーんだそれならペテロブラーグ行きに喜んで賛成したのにー、とクラリスはすっかりご機嫌になってニヤニヤしました。

「へー、なるほど、そのモデスト兄さんというのが君の王子様なんだ」

とジークフリート王子にまぜつかえされてクラリスはギョツとしました。

「そ、それは……」

「どうなんだろう？とクラリスは自分の胸の内を覗いてドギマギしました。

「へー、そうだったのか？」

ルピネーもニヤニヤしてクラリスの赤い顔を覗き込んでいます。

「もう、モデスト兄さんのことはいいから！」

照れ隠しに怒った声でクラリスが言いました。

「その『白鳥の湖』ってどういうバレエなの？」

「さあ、俺は題名しか知らねえ」

「私も詳しいことは……」

と、アレクサンドラ夫人。

「兄の手紙によると、人間の王子様に恋した妖精が人間に変身して恋を成就させようとするのだけれど魔女の呪いによって白鳥になってしまう、というようなお話だそうですわ」

「魔女の呪い？」

クラリスはなんだかすごく嫌な予感がしました。

「魔女が魔王なら今回の事件とどこか似た話らしく思えるのですが、そのお話は誰が考えたの？ バレエのために作ったの？ それとも元々そういうお話があったの？」



「はつきりとは分かりませんが、兄がどこからか聞き知ったお話のようですよ。兄は大の旅行好きで暇が出来るとはどこかしら旅行に出かけていますから」

どこかで仕入れたお話だとして、それが今回のオデット姫の身の上話とは思えません。

では、もしかしたら過去に似たような事件があったのでしょうか？  
それとも、それは大人が子どもを喜ばせるために話して聞かせる単なるおとぎ話なのでしょうか？

いずれにしても白鳥つながりで気になることには違いありません。  
「王子様、バレエですって。楽しみね」

再び二人の世界に戻ってきたオデールが王子に言いました。

「ええ、そうですね」

と言いながら、実は王子はどうせ見るならバレエみたいなちゃらちゃらした退屈な出し物より派手なチャンバラのある愉快な劇が見たいと思っていましたが、ともかく、すっかり旅が楽しくなってペテロブラーグへ行く目的もなんだかだんだんずれてきてしまっているようです。

「私、バレエなんて見るの初めて。王子様は？」

「いや、僕もちゃんと劇場で見るのは初めてです」

「あのね」

と、クラリスが二人の邪魔に入りました。

「ラピスでは今バレエはとっても人気があるのよ。そうですね？」  
と話を振られて、アレクサンドラ夫人も苦笑しながら話に入りました。

「ええ、国中あちこちで小ささまざまな劇場や劇団が作られていますわ。ペテロブラーグやモスクリンのような大都市では公営の大劇場がありますし、地方地方では領主たちが競って私設の劇団を立ち上げているようですわ。領民の中から才能のありそうな綺麗な子たちを集めて、お金持ちの領主はわざわざロヴィークやルービッシュから教師を呼んで特訓させているそうで、かなりの熱の入れようで

すわね」

「ふうーん、そうなの？ それじゃあ私も王子様にバレエ団を作ってもらって主演の踊り子になるうかしら？」

「主演のバレリーナはプリマドンナ、男性はプリンシパルって言うのよ」

「あつそ。じゃあ私がプリマドンナ。王子様がプリンシパルよ」

オデーレはクルクル回って王子に倒れ込み、王子は慌ててオデーレを受け止めました。

オデーレの回転はなかなか綺麗でクラリスは思わず感心して、おー、と拍手しました。

「本当は」

とアレクサンドラ夫人。

「ラピスは文化的には後進国なんです。国土が広大で国力はあっても、西の国々の洗練された文化に憧れがあるのですわね。音楽や絵画の芸術や最新のファッションを積極的に取り入れようというのはいいですけど、そのために元々ある自分たちのオリジナルの文化を卑下するようなところがあって、兄などは嘆いておりますわ」

「そういえば」

とクラリス。  
「ロヴィークでバレエって、なくはないけれどそんなに盛んではないわよねえ？」

とつくにブームは過ぎ去っているような、とまでは言いませんが、ちよっぴりそう思っていました。

国の力を比較すればラピスは圧倒的に強大ですが、そのラピスの人々が劣等感を抱いているなんて、文化の力は偉大だなあとクラリスは感心しました。

そんなクラリスの優越感を感じてでしょうか、意外に負けず嫌いらしくアレクサンドラ夫人が言いました。

「兄がおりますわ。兄の音楽はやがて世界中で聴かれるようになってラピスは文化的にも一流だと認められるようになりますわ。それ

にラピスでバレエが流行っているのは元々ラピスの人たちに舞踏を愛する心があるからですね。ラピスの文化的精神にバレエという形がぴったりはまったのですわ」

やはり見た目通りアレクサンドラ夫人はたいへん教養が高く頭の良い人のようです。クラリスは自分の浅ましい心を見透かされたように恥ずかしくなりました。

アレクサンドラ夫人は笑って、

「でもやっぱり私も西の音楽や小説が大好き。それにロヴィークは気候が穏やかで美しいところなのでしょう？ 兄ばかりあちこち旅行に出かけて、私もたまには外国に行ってみたいですわ。ま、当分無理でしょうけれど」

と、ニコニコやさしい目で子どもたちを見ました。

「おそれいます」

クラリスは夫人にお辞儀をしました。

船のお客たちはほとんどが年輩のお金持ちの人たちでしたが、一人、謎の人物がいました。

若い女性、らしいのですが、全身黒づくめで頭からマントをかぶり、黒いマスクをし、さらに黒のベールを垂らしているので、ほとんど顔を伺い知ることは出来ません。

喪中なのか、それともなにか宗教上の習慣なのか、それにしてもマントの下のドレスは光沢の強いラメが大量にちりばめられて、歩くたびにチラチラ覗く腰はまわりつく布がキラキラ光を放って艶めかしく、とても慎ましやかな印象は与えません。

話しかけても首を頷かせたり振ったりするだけで一言も声を発しません。時たま外に出てきて景色を眺めていましたが、他のお客たちは気味悪がつて声を掛けませんでした。

「怪しい」

と王子が言い出しました。

「あれはぜったい訳ありの女だぞ」

それにはクラリスも異存ありませんが、

「あの女はきつと例の女盗賊に違いない」

と言われると、実はクラリスもそれは考えないわけではありませんでしたが、

「そこまで都合良く偶然は続かないでしょう」

と思いました。

「ハルメイユーからペテロブラークに行くならずいぶん遠回りじゃない？」

二人とオデーレは部屋の中で顔を寄せ合って小声で話し合っています。壁もしっかりしていますし四人部屋でそこそこ広さもありますのでそこそこの必要もないのですが、こういう話をするときはこそそしていた方が雰囲気盛り上がりになって楽しいものです。ルピネーは夕食の支度に船倉の調理場に下りています。急の出航だったのでコックが用意できなかったのですが、お昼のサンドイッチはなかなかのもので、本当に何をやっても見た目によらず器用な男です。もっともそこそこの広さはあっても大男のルピネーにはさすがにこの部屋は狭すぎてほとんど甲板か船倉にいてこの部屋には寄りつきません。

「だからさ、捜査の目をごまかすためにわざと遠回りしたのさ。ところがよりにもよってこの船には僕らが乗り合わせていたってわけだ。運の悪い奴だな」

王子はすっかり黒ずくめの女をダイヤ「白鳥の涙」を奪った女怪盗だと決めつけています。

「そうかなあ、逃亡者がこんな目立つ船に乗るとは思えないけれど？」

「だから、裏の裏ってことさ。それに、大胆にお城から家宝を盗み出すような女だぜ、本質的には目立ちたがりなんだよ」

「へえ、なるほどねえ」

この人間観察には肯けます。

「なかなか人を見る目が出来てきたんじゃない？」

フフンと王子は得意になりました。

オデーレはあんまり興味なさそうで、あの艶めかしい腰つきを思うと王子が他の女に興味を持つこと自体面白くありません。

「あんなの単なる安っぽい男好きよ」

と、ひどいことを言い出しました。

「この船に乗っているのはお金持ちばかりでしょう？ 喪中の悲しい貴婦人を装ってバカな金持ち男を釣って財産を巻き上げようって魂胆に決まっているわ。素顔は、ぜーったいに、ブスね」

「そうかなあ、けっこう美人に思えるがなあ」

女怪盗はなにしろたいへんな美人だそうですから。

王子も女の艶めかしい腰つきを思い浮かべてニヤニヤ嫌らしい笑顔を浮かべると、オデーレのきつい嫉妬の目で睨み付けられました。

王子は大いに慌てて、

「もちろん、オデーレさんの美貌には足元にも及ばないでしょうとも！」

と、オデーレのご機嫌取りに必死になりました。

王子は言葉を尽くしてオデーレがいかにも美しいか褒め称えましたが、機嫌を直してニコニコし始めたオデーレもあんまり王子が一生懸命褒め続けると、珍しく、

「もついいわ」

とすねて背中を向けてしまいました。

王子は驚いて途方に暮れてクラリスに救助の視線を向けました。

クラリスはため息をついて王子を引っ張って部屋の反対側に連れていきました。

「あのねえ、そりゃあ美しさを褒められて嬉しくない女の子なんていないでしょうけれど、そればかり褒められていたらいいのは外見だけで、中身はまるで駄目みたいじゃない」

「そんな、とんでもない誤解だ！」

王子は泣きそうに顔をしかめて小さく悲鳴のような声を上げまし

た。

「僕はオデーレさんをとても素晴らしい女性だと思っっているよ！」  
まあたいして広くもない部屋なので囁き声でもだいたい聞こえて  
しまいます。背中を向けて聞き耳を立てているオデーレは王子のこ  
の言葉でどうやら機嫌が直ったようです。

「そつよねえー」

今度はクラリスが白い目を王子とオデーレの背中に向けて言いま  
した。

「二人はとーっても仲良しさんですものねえー、あーああ、うらや  
ましい限りだわあ」

「いいじゃないか、君にはモデスト兄さんという王子様が・・・」

と王子が言いかけたところ部屋のドアがノックされました。

訪ねてきたのはアレクサンドラ夫人の次女ヴェーラと三女ナター  
リヤでした。

「いいかしら？ 一部屋に八人なんて息が詰まりそう」

ヴェーラがランプを持ってきたのでみんなで遊ぶことにしまし  
たが、カード遊びなんていうお下品なことをしたことのないオデー  
レは王子にくつついてやり方を習うことにしました。

カード集めで圧倒的に強いのはクラリスで次がヴェーラでした。

クラリスがあんまり強いので王子は魔法を使っているんだろうと  
抗議しましたが、クラリスは決して魔法は使っていませんでした。  
ただ勘と読みが圧倒的に鋭いのです。

ぜんぜん勝てないのですっかり面白くなくなってしまった王子に  
代わってだいたいルールを覚えたオデーレが王子のサポートを受け  
ながら参戦してからなかなかいい勝負になってきました。オデーレ  
は勘がいいのかただ単に運がいいのかいつの間にか「手」が出来  
上がってしまうのでした。

「オーッホッホッホッホ」

オデーレは勝ち誇った高笑いを上げました。

これがクラリスとヴェーラの負けん気に火をつけて勝負は白熱し

ていきましたが、ちょっと気分を変えましょうとカードめくりを試みると、今度はナターリヤが圧倒的に勝ちを納めました。次がクリリスで次がヴェーラで、オデーレと王子はまるで駄目でした。

しばらくすると今度は男の子たちが遊びに来てお姉さんたちと入れ替わり、今度はババ抜き勝負になりましたが、これに大人げなく連勝して高笑いを上げたのはオデーレでした。

そんなことをしながら一日目の日が暮れて、各部屋にオーナーお手製の夕飯が運ばれてきました。食堂もあるにはあるのですがテーブルが二つしかない狭いものなのでだいたい皆自分の部屋に運んでもらっているようです。大きな船ですが「動力部」の水車が大きく場所を取っているのでお客のための施設は案外コンパクトになってしまっているのです。

夕飯のメインは昼間ルピネーと水夫たちが釣った大きな川魚でしたが、こんなスピードで船を走らせて釣りになどなるものかと思いましたが、よほど釣り人の腕がいいのか案外かかるもので、本当に器用な男です。調理も大味ですがなかなかのものでした。

客室の灯りが消えて「エイサエイサ」と水車を漕ぐ男たちの声だけが寒空に流れていきます。

その船の航行を空から見守る一つの影がありました。

あの鳥人間です。

この鳥人間、湖でクリリスたちが出会った鳥人間とは別の鳥人間のはずですが、見たところそっくりで、同じとしか思えません。本当にこんなのが何匹もいて、ずらりと一堂に集まったらさぞかし気味の悪いことでしょう。

鳥人間は人間の顔をしているくせに相変わらず無表情で、ガラスのような目玉で眼下の船を見つめながらどうやってこの航河を邪魔してやるうか思案していました。

頭のいい鳥人間にもこの新型の船がどういう仕掛けになっているのか理解できません。

「とにかくあれを壊せばいいのだろう」

と、男たちの漕ぐ水車を見ます。

「さてどうやるか？ 出来るだけわしの仕業とは見せたくないのだが・・・」

さいわい日暮れと共にどんよりと厚い雲が立ちこめてきてまるきりの闇夜です。一番の邪魔は船橋の上に建った見張り台で河図を持って川面を注視して船が浅瀬に乗り上げないように見張っているルピネーです。大白鳥号はスクリューを水面下に沈めるため他の川船より底が深くなっています。ですから浅瀬に乗り上げてしまう危険性が高くなっています。これがこの船の欠点といえます。そのおかげでルピネーはまっすぐ前を凝視して、空の上にはまるで注意が行っていません。

鳥人間は水車の横に付いてとにかく破壊工作の手だてを考えることにしました。

いったん横方向に船から離れ、高度を落とし、ルピネーや水夫たち気付かれない程度に接近していきました。

首がクルツと真横を向きました。かなり不気味です。

じーっと水車の構造を観察していた鳥人間は、ふと、客室の方を見てギョツとしました。

脇の通路に黒い人影が立ってまっすぐこちらを見ています。

偶然だろうと思いました。

鳥人間は人間の数倍の視力を持っていました。この距離でこの闇夜でこちらの姿が見えるわけはありません。

鳥人間は破壊工作のことも忘れて人影を凝視しました。

黒衣の女はベールをかぶっていました。鳥人間はますます自分の姿が見えているわけではないと思いました。しかし、どうしても胸の内にはわき起こる不安をぬぐい去ることは出来ません。

女がベールをめくり上げました。

鳥人間は素晴らしく良い目でその顔を見て、相手の正体を知ると、安堵に胸をなで下ろしました。が、しかし、すぐにそれが有り得な



いことに思い当たりました。

「誰だ？」

胸が大きく脈打ち、恐怖が背筋をはい上がりました。

女はじつと鳥人間を見つめ、あっちへ行けと手を振りました。

鳥人間は追ひ払われるように大きく船を反れ、上空高く垂れ込める黒雲の中まで逃れました。

ようやく安心してこっそり覗き見るように船を見下ろし、さてどうしたものと、じつと考え込みました。

## 第19章 追ってきた者

大型高速旅客船「大白鳥号」によるガルボ河下りの旅第二日目が  
ぶじ暮れていきました。

この日の出来事としては、アレクサンドラ夫人の子どもたちとよ  
り仲良くなったことと、ルピネーのある犯罪行為が発覚したことが  
挙げられます。

この日ルピネーは前夜の夜通しの見張りでさすがにくたびれて仕  
事が暇なときはずっと昼寝をしていました。

優雅ではありませんが単調な船旅ですから、子どもたちはすっかり  
退屈してしまつて、クラリスは「眠れる森の美女」のお話をみんな  
にしてあげました。本当の話そのままは小さな子どもに聴かせるに  
は刺激が強すぎるのでかなり脚色しましたが。

「そつえばルピネーさんは結婚しているんだなあ」  
と話を聞いて王子が言いました。

「ねえねえ、ルピネーさんの奥さんてどんな人？」

と、オデーレも乗り乗りで聞いてきました。

「あのルピネーさんの奥さんだもの、きっと凄い人なんでしょうね  
え？」

オデーレは良からぬ想像をしてクツクと笑いを噛み殺しています。  
クラリスは悪戯っぽく笑つて、

「そりゃあ、凄いわよ、何しろあのルピネーおじさまを尻にしいて  
いるんだから。でも両方とも凄い美人よ」

「え？ どういうこと？」

「ルピネーおじさまはね」

みんなの不思議そうな顔を見渡して、

「カザリンとラピスに一人ずつ奥さんがいるのよ」

生まれてすぐ誘拐されて行方不明となり、カザリンで拾われて育

つたルピネーが、その頃の名前はガドウと言いましたが、自分の出自を知って両親であるラピスの大貴族ラズベリー伯爵夫妻と再会したのが十七歳の時。実はこのときすでにルピネーは結婚してなんと一歳になる息子がいたのです。

「ええー！　じゃあもう十五歳で結婚してたのー？」

驚きですが、その通り。

奥さんのローゼは五歳年上でした。

ローゼは村一番の美人で、その美貌は彼女を巡って若者たちが毎日ケンカ騒ぎを起こしている程でした。何しろルピネーの育ったのは漁村でしたから、荒っぽい男どもがうようよしていました。

とうとう村の有力者の息子二人が手下を引き連れて刃物を持って決闘することになってしまいました。

あわや刃傷沙汰というところで両者の間に立って荒くれ男どもをぶん投げて決闘騒ぎを静めたのが当時まだ十五歳だったルピネーでした。十五歳とはいってもすでに村一番の大男に成長していました。ルピネーももちろん美貌のローゼに憧れを抱いていましたが、五つも年上でしたし、体に似合わず女性に対してはシャイだったので決闘を止めたのはあくまで人が人を出さないためでした。

しかし、このローゼもさすが漁師村の娘、ただ美しいだけの娘ではありませんでした。

日頃からこの村にはろくな男がいないとぼやいていたのがこの一件ですっかりルピネーを気に入って、その日のうちに二人の婚約を発表してしまいました。

ルピネーは驚き慌てましたが、

「なんだい、このあたしに恥をかかせようってのかい？　あたしを賭けた男と男の決闘を潰しちまったんだ、あんたにやその責任があるだろう？　それともなにかい、あんた、このあたしが花嫁じゃあ不服だつて言うのかい？」

ローゼはせいぜい姐御を気取って突っ張った物言いをしました。が、頬はポーッと赤く染まり瞳がウルウルうるんで、何とも言えずかわ

いらしく、ルピネーもよし俺も男だと覚悟を決めてローゼを花嫁に迎えることにしました。

結婚してすぐに子どもが授かり、まだ年若いルピネーに一家の主としての自覚がムクムクと芽生えました。村の寄り合いでも積極的に発言し、腕力も人一倍ありましたが、言うことがいちいち理路整然として説得力があり、且つ有言実行したのですぐに村人の信頼を得るようになり、やがて村の代表者のような役割を担うようになりました。この頃以後の特務外交官として数々の功績を挙げる基礎が作られていったと言えましょう。

そしてそれからおよそ二年、十七歳の時に守護精霊であるサファイアの精によく見つけられてロヴィーク国のお城で両親と劇的な再会を果たしたのでした。

再会の際にロヴィークのお城ではとんでもない事件が起こってしまい、親子もドタバタしながらラピス国に帰国したのでした。

ルピネーは自分が大国の貴族の子だと分かってからも村を離れるつもりはありませんでした。自分の出自がどうであろうと愛する妻と子のいる場所こそ自分の家だからです。ロヴィークで両親と再会してからもむしろ二人をカザリンの自分の家に招待して自分の家族を紹介するつもりでいました。それがなんだか事件のどさくさのうちにはラピスに連れて行かれて、ルピネーはすぐにカザリンに戻るつもりでした。

それを父の伯爵が

「まあ、待て」

と引き留め、ラピスでの自分の仕事を一通り見せました。

広大なラピスのほぼ中央にある首都ペテロブラーク。その西の文化都市モスクリン。伯爵の領地はそのモスクリンのさらに西、ラピス西端の西世界と接する位置にありました。

領国の名をラズベリーアール。

領土拡大戦争の末期にラピスに取り込まれた新しい土地に中央から派遣されてやってきたのが伯爵の父伯爵でした。

中央から父伯爵に課せられた使命はこの土地の要塞化でした。時代がまだそのような流れにありましたし、父伯爵は非常に優秀な軍人でした。

しかし徐々に時代が移り、自分の使命に疑問を感じ始めた頃に例のジャローム將軍の秘密工作があり、軍人である自分にすっかり嫌気がさしてしまいました。

優秀な軍人であった父伯爵は領土全てを360度全てに向けて要塞化してしまいました。つまり、ラピスに対してもこの地に余計なちよっかいを出したらただでは済まないぞと刃を向けたのです。

非常に危険な緊張関係を残して父伯爵は病没しました。

伯爵位と共に領地を継いだ伯爵はこの難問をしのいでいかなければなりませんでした。ジャローム將軍はすでに死亡していましたが、その残党とも言うべき貴族グループがまだ中央に力を残していました。

父伯爵は国の要塞化に力を注ぐあまり国力をずいぶん落としていました。伯爵はひたすら国力を上げ、国民を富ませることに全力を注ぎました。一方で西の諸外国と活発に外交、交易をし、国としての独立性と存在感を増していきました。なにしろラズベリーアールは外から見ればハリネズミのような要塞国家でしたから。

ジャローム將軍の残党グループが中央から追われたのは実は伯爵が方々に工作して圧力を掛けさせたせいだと言われています。

そうしてラピスの中央も平和と安定を望むようになると伯爵が西世界とのパイプ役となりラピスをも富ませるように工作しました。

こうして世界に平和を定着させた伯爵は人々の尊敬を集め大伯爵と呼ばれるようになったのです。

大伯爵は息子ルピネーに領土を案内し、私有地の管理、農業、産業の内容、行政機関の仕組み、公共事業の現状と計画、などを一通り説明した上で、

「これをおまえに継がせるつもりはない」と言いました。

「おまえが消えて十年経って、わしはおまえにわしの跡を継がせることはやめた」

やめたとは変な言い方ですが、大伯爵には何故かルピネーがどこかで元気に生きているという確信がずっとあったのでした。

それにルピネーには二歳年下のナヴィーという弟がいて、これがとても優秀な人物に育ちつつあったので今さらルピネーを跡継ぎとして教育するのも面倒だという事情もありました。

「おまえはおまえで自分の人生を生きるがいい。ただ、わしらは家族だ。互いに家族として協力し合って生きていこう」

こうしてルピネーは名前だけはラズベリー姓を名乗ることになりました。

しかしこの名前が、ルピネーが考える以上に大きなものでした。元々ラズベリー家はラピスの名門貴族の家系でしたから、中央にも一族は多くいました。

彼ら親戚筋はいまや強大な実力者となった大伯爵になんとか取り入ろうとルピネーに接近してきました。

彼らは関係を結ぶ一番の手だて、結婚を勧めてきました。

彼らは自分たちの操りやすい家の娘との結婚をしつくく勧めてきました。

とんでもない、自分には妻も子もいると断ったルピネーですが、それは自分が何者かを知る前のこと、カザリンなどという三流国のまして漁村の娘などラズベリー家の嫁にふさわしいわけではないと、まるで聞く耳を持ちませんでした。

あんまりしつこいので直接本人に事情を説明してきっぱり断つてやろうとその娘と会ったルピネーは、その足で慌ててカザリンに帰ってしまいました。

その娘というのがあまりにも美しかったので気持ちのぐらつくのを恐れて逃げ出したのでした。

カザリンの我が家に帰ってほっと出来るかと思いきや、赤ん坊の頃から育った村から、貴族の息子なんかと漁が出来るかと、銚で突

かれんばかりに追い出されてしまいました。まあ、これはルピネーの才能を見込んだ村人たちが、こんなへんぴな田舎の漁村に留め置くのはもつたいたいと村の総意で送り出したのでした。

そうはいつでも追い出されたルピネーはすっかり途方に暮れてしまいました。そこへ村を飛び出してきた妻と息子が合流して一家は新天地を求めてカザリンの都に出ました。

都では大伯爵の息子として大歓迎を受けましたが、なんと親戚連中がしつこくここまで押し掛けてきました。それもご丁寧に妻と息子への手切れ金まで用意して。折悪しく大伯爵からも「見合いの席を中座して逃げ帰るとは何事か」とおしかりの手紙が来て、この一件はすっかり妻ローゼの知るところとなつてしまいました。

すっかり怒つてしまったローゼは自分が大伯爵とその娘に会つてどういう見なのか問い質してやろうとルピネーと息子を引き連れラズベリーアールに向かいました。

ラズベリーアールに着いてみると、案に相違して大伯爵はローゼと息子モデストを大歓迎してくれ、もうこの上なく上機嫌でした。

ところがここへまた親戚連中が余計な手を回して花嫁候補の娘を連れてきてしまいました。

ローゼはルピネーに

「ちようどいいじゃない、あたしの目の前できっぱり断つてやりな  
よ」

ときつく言いましたが、実はローゼはここへ来る決心をしたときに場合によつては身を引く覚悟をしていました。

それで相手の女を見極めてやろうとルピネーといっしょに会つてみたのですが、

その娘、ユリアナというのが、何とも扱いにくい女でした。

一言で言つならば、これ以上なく高級なガラス細工でした。

ものすごく綺麗で、ものすごく繊細で、ものすごく壊れやすい、取り扱いに細心の注意が必要な代物でした。

ローゼも一目見てルピネーが煮え切らない態度のまま逃げ出した

のが理解できました。

年は十八ということでもルピネーより一つ上でしたが、姿形はそれ相応でしたが印象はまるで少女でした。

その最大の武器が無垢な笑顔でしたが、これがくせ者で、相手に決してこの娘を傷つけるような行為をしてはならないという強迫観念を抱かせる威力がありました。

限りなく好意的なキラキラ輝く綺麗な透き通った瞳をしていましたが、その瞳が見ているものは全て魔法のベールのかかったおとぎの世界でした。

この世に醜いものなど決して存在しないと信じ切った瞳でした。

彼女の家というのが中央を追われた没落貴族で、父母は娘の美しさを担保に知り合いの貴族たち、つまり大伯爵の親戚連中からお金を借りて生活しているような有様でした。いずれ有力者との政略結婚を義務づけられたユリアナは、幼い頃から仮面の笑顔をかぶり続け、すっかりそれに本来の人格を飲み込まれてしまっていました。

このニコニコキラキラ硝子細工の仮面にちよつとでもひびが入ったなら、たちまちにユリアナという人間一人がそのまま崩れ去ってしまうでしょう。

ユリアナを目の前に、いったいどうしたらいいのだろうとローゼも頭を抱えてしまいました。

ユリアナにとってルピネーは幼い頃からの許婚のようなものでした。それもおとぎ話の王子様のような。現物を見たときには内心かなり驚いたことと思いますが、完璧な無垢の笑顔でルピネーを迎えました。その笑顔を見てルピネーはこれはたまらんと逃げ出したのですが、それはやはりほんのかすかですがユリアナの硝子の仮面にひびを入らせてしまったようでした。二度目に会ったユリアナの笑顔はさらに透明に、さらにはかないものになっていました。

ローゼは息子を連れてカザリンに帰ると言いました。

ローゼはルピネーに言いました。

「いいよ、あんたあの娘を花嫁にしてやりなよ。あたしはカザリン



のあなたの妻、あの娘はラピスのあなたの妻だ。あたしは元々漁師のガドウと結婚したんだ、ルピネー・ラズベリーのあなたがその名にふさわしい花嫁をもらったってかまわないよ。もつとも、あなたがガドウとしての過去をいっさい捨てちまいたいと言うなら、あたしはきっぱりあなたと別れるがね」

そう言われてもそのままハイとは言えません。

「あなた、貿易の仕事をしなよ。カザリンとラピスを結んでさ。旅が苦になるたちじゃないだろう？ カザリンとラピス、あたしとユリアナ、半分半分暮らせばいいじゃないか」

というわけでローゼは息子を連れてさっさとカザリンに帰ってしまい、ルピネーはいいのかなあと思いながらユリアナとも結婚することになりました。

しかし結婚してしまえば中途半端にしないのがルピネーの性分です。

ルピネーはローゼの提案通り貿易会社を作り、カザリンの支店をローゼに、ラピスの支店をユリアナの父親に任せました。本店はルピネーの船であり馬車であり、ルピネー自身です。

ルピネーは一生懸命働きました。正直、楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。漁師の仕事も好きでしたが、さすが大伯爵の子、仕事が大きければ大きいほど楽しくて面白くて仕方ないのでした。

そうしてお金を稼ぎ、支店長であるユリアナの父親を商売人として徹底的にしごきました。

元々この人は周囲に流されてあつちこつちうろつろしているうちにすっかり時流から外れてしまったただけの人で、悪人でもなければまるで主義主張もない人でした。それがルピネーにしごかれてお金が入ってくるとルピネーの熱が移ったのか商売がすっかり面白くなってしまうました。それまで方々にしていた借金をすっかり返してしまうと、ルピネーの敵命で悪い仲間とはきっぱり手を切りました。ユリアナに子どもが生まれるとそれがまたかわいくてならず、家庭人としてもすっかり更生しました。

こうしてラズベリー家の親戚連中の思惑はすっかり外れてしまいました。

一方ユリアナはというと、ずいぶんたくましくなっていてしまいました。

見た目ではなく、精神的にという意味で。

いえ、見た目も硝子細工のもろさが消え、内から輝くような熱の通った美しさへと変化していきました。

これは父母と心からうち解け合い、ガラスの仮面が必要でなくなつたのと、義理の父母の愛情と、子どもを授かった母の強さと、そして夫のもう一人の妻ローゼの友情によるところが大きく作用していました。

ユリアナとローゼはほとんど三日に一度は手紙のやりとりをしてあれやこれやと話していました。

一人の男を巡って同じ立場の女が二人、さぞや内心どろどろしたものがありそうなところですが、実際あるのかも知れませんが、お互い生活が充実しているので友人として手紙の上では楽しくお付き合いしていました。

それで肝心のルピネーはというと、商売は順調でしたがそれはひとえにルピネーの行動力とラズベリー家の名前によるところでした。海を渡って国と国とを股に掛けるの商売ですからいろいろ国際上の問題が起きました。それを一つ一つ解決していくうち、名声が上がり、いろいろなところから頼られるようになりました。

そうしてついにカザリンとラピスの特務外交官の地位を与えられ、数々の功績を上げ、カザリンより侯爵位を、ラピスより子爵位を、与えられることとなったのでした。

ちなみに爵位は上から順に、大公、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、準男爵、騎士、となつていきます。ルピネーは最初カザリンの王様から気前よく侯爵の位をもらってしまい、実はこれが後々面倒の元になったりしたのですが、ラピスの国王から子爵位を授与され、だいたいラピスの子爵位で呼ばれることが多いです。

「めでたしめでたし、という訳ね」

クラリスの長い長い講釈が終わりました。

「へえー、二人の奥さんかあ・・・」

王子は何を考えているのか・・・、まあ想像はつきませんが、

「いいなあ・・・」

と思わず呟きました。

「誰と誰を天秤に掛けているのやら」

さっそくクラリスに睨まれてしまいました。

王子は赤くなつて、ばつが悪そうにふくれてクラリスを睨み返しました。

「じゃあ、聞くけどさあ、もしルピネーさんが僕の立場だったらどうする？　つまり、ローゼさんと結婚しているのに白鳥の呪いのかかったユリアナさんが現れたらつてことさ」

「ううーん、それは確かに難しいかも知れない・・・」

確かに考えようによっては三人の関係はそう捉えられなくもありません。

「ルピネーおじさまなら、呪いを解けるかなあ？・・・」

「ほーら、みる」

えっへんと王子は勝ち誇りました。

クラリスはあきれて、

「あーあ、男の人っていいわねー、奥さんがいるのに側室だの第二夫人だの愛人だの。どうして社会はこうも男の人に便利なように出来ているのかしら？」

ね？、とオデーレに同意を求めました。

オデーレは腕を組んでフンと上を向いて威張りました。

「当然あたしが第一王妃よ。オデット姫は第二王妃。あたしの気が向いたときだけデートくらいさせてやるわ」

王子はおずおず子どもがおねだりするよつな顔でクラリスに

「それでいいかなあ？」

と訊きました。

「ぶわあーか！」

クラリスは大口を開けて王子を罵倒しました。

「本気でそんなこと考えるんじゃないわよ！ いい、あんたとルピネーおじさまでは人間の器がまるつきり違うのよ！ オデーレかオデット姫か、どっちか一人に決めなさい！ 一人だつてあんたみたいなすつとこどっこいにはもつたいたいわよ！！！」

その後クラリスは一人表の手すりにもたれて景色を眺めながら

「本当に駄目かも知れないな・・・」

と、深い深いため息をついたのでした。

三日目。

前日から重く垂れ込めていた黒雲からとうとう大粒の雨が降り出しました。と同時に気温もぐつと下がってきました。王子たちは部屋で毛布にくるまりガタガタ震えていましたが、アレクサンドラ夫人の一家はわりと平気なようでした。

「今時はこれくらいが当たり前ですから」

とのことで、やはりカカツサス山脈のあちらとこちらではまるで気候が違っているのです。

外の景色は硬い土の草原とまつすぐ背の高い針葉樹の森が交代で続いています。北に行くに連れ土地が湿り、森が大きくなっていき、ペテロブラーグより北は森しかなくなるそうです。

風も強くなり、波も出てきて、船が揺れだしました。王子とオデーレは軽い船酔いになってベッドに寝てひたすら胸のムカムカと頭痛の治まるのを待ちました。

一人元気なクラリスは航行の様子を聞こうとルピネーを捜しに出ました。

すると強い風の中をピー、ピー、と警笛が聞こえてきて、クラリスは外の通路へ出てみました。

ルピネーも甲板に立って岸の方を見ていました。

黒い船体の船が一艘、やかましく警笛を鳴らし、投光器で何やら合図をしながら近づいてきます。

「ありゃあラピスの警察隊だ」

ルピネーが面倒くさそうに舌打ちして船長と相談し、機関、つまり水車を停止させました。

船腹から長いオールを何本も出したラピス水上警察の高速船が大白鳥号の横に着き、渡し板が掛けられました。

何事かと不安そうにお客たちが窓から見守る中、黒い制服に身を包んだ風雨を物ともしない警官隊が乗り込んできてルピネーと船長にびしつと敬礼しました。

「ラズベリー 特務外交官閣下」

隊長らしき男がルピネーに挨拶しました。

「どうしたね？ 何か事件かな？」

ルピネーは実に迷惑そうな顔で問い質しましたが、隊長はまったく臆することなく険しい顔つきで答えました。

「この船に国際指名手配の犯罪者が乗り込んでいるという情報がありました、まことに申し訳ありませんが船内の搜索をご許可願います」

「国際指名手配？」

クラリスはすぐに思い当たりましたしルピネーも内心「あれか」と思ったことでしょうが、顔には出さず、

「そういうことなら仕方ないな。協力しよう」

と、捜査の手順を相談しました。

食堂を取調室にし、お客を一人一人呼んで、失礼のないようにルピネーの立ち会いの下、隊長による取り調べが行われることになりました。

船員と船倉の調査は部下たちが当たります。

お客が一人一人呼ばれて取り調べが行われていきました。

しかし皆身許の確かな者たちばかりで怪しい者はありません。アレクサンドラ夫人と子どもたちはルピネーが身元を保証し取り調べ

は行われずに済みました。王子、オデーレ、クラリスも同様です。船が止まって船酔いも治まった王子は取り調べを受けなくても良いことになって「ちえっ、つまんないの」と強がりを行いました。あのおっかない警察隊長の前に出たらそんな減らず口がたたけるかどうか大いに疑問です。

取り調べは最後の一人、あの黒衣の女の番になりました。

女が呼ばれると王子は居ても立ってももられず、食堂に向かいましたが、おっかない顔の警官が立っていて中に入れてもらえませんでした。

女は椅子に座ると警察隊長にベールを脱ぐよう求められました。

女はここで初めて声を発しました。

「お断りします」

やはり若い女の声です。

隊長は剃刀のように鋭い目で女を凝視しました。

「それは困りますな。理由はなんですか？」

「わたくし、人目を忍んで旅しております。ある方に正体を知られたくございませんので」

女の声は優雅で気品を備え、まるで物怖じし震えるような所がありません。

「それでは困るのですよ」

隊長は冷静且つ決して引き下がらない押し強さで言いました。

「いずれか高貴な家のご婦人であるようだが、我々は職務上身許のはつきりしない者を見た目だけでそうであろうと判断するわけにはいかんです。もっとはっきり言うならば、我々はあなたを捜してこの船に乗り込んだのです」

「まあ、それはどういうことでしょうか？」

「あなたにはハルメイユーのリムサコフ王家より宝飾品を盗んだ嫌疑が掛けられています」

やはり、そうでした。

しかし女はまるで慌てる様子は見せません。

「わたくしが、泥棒をしたとおっしゃいますの？ まあ、なんてひどいのかしら？ どうしてわたくしがそのような疑いを掛けられおりますの？」

隊長は口元をかすかにせせら笑うように歪めました。

「あなたの相棒と名乗る者から密告があったのですよ。あなたが宝を独り占めして逃げたから捕まえてくれと、警察署に投書がされたのですよ」

隊長は鞆からその手紙を取り出しテーブルに広げました。子どものようなへたくそな字でハルメイユーのお城での顛末と犯人の女のガルボリースまでの逃走経路が書かれています。

「このへたくそな字はこの者が自分の筆跡をくらませるためでしょう」

と隊長は言いましたが、実はこれはあの鳥人間がペンを口にくわえて書いたものでした。たしか彼は人間に变身できたはずですが、手を使わなかったのは筆跡をくらませたように偽装したのかもしれませんが。

鳥人間は一昨夜黒衣の女に追い払われてから森で鳥たちを集め、昨日一日かけてこの女の情報を集めさせたのでした。そこで怪しい女怪盗の噂を聞きつけ、この女が果たして黒衣の女であるかどうかはともかく、これを利用してこの女の正体を確かめてやろうと画策して偽の密告書を警察署に投げ入れたのでした。

「さあ、いかがですか？ お見受けしたところあなたは我々が入手した犯人の特徴とも一致するようなのですかね？ 反論なさりたいのなら、まずそのベールを取ってご自分の身許を明らかにしていただかなくてはなりません」

隊長の強い態度に女はあきらめたようにため息をつきました。

「いたしかたありませんわね。どうあってもわたくしの身許を明らかにせよとおっしゃるなら、ルピネー子爵様がわたくしの身元を保証してくださいますわ」

部屋の隅で様子を眺めていたルピネーはびっくりしました。

「閣下はこの女性をご存じなのですか？」

「いや、知らねえ、というか、分からねえ。なにせ顔を見てねえんでな」

ルピネーと隊長に見つめられて女は可笑しそうに喉の奥で笑いしました。

「いやですわねえ、お分かりになりませんか？ それではロヴィーク王家のお身内のクラリスさんはどうかしら？ それともベルシアのジークフリート王子なら？ このお三人が身許を保証してくださればわたくしの嫌疑も晴れるのではないかしら？」

次々大物の名前が出て隊長もさすがに自信が揺らぎました。

「それではとにかくお二人にこちらにおいて願いましょうか」

「ああ、ついでにオデーレさんとかおっしゃるオデット姫のそっくりさんにもおいで願ってはいかがかしら？ 実はオデット姫ご本人らしいという噂を聞きましたよ」

ウフフフ、と女は隠れた顔で笑いました。

クラリス、ジークフリート王子、オデーレが呼ばれてやってきました。三人はどうして呼ばれたのか分からず、オデーレはかなり緊張して王子にしがみついています。

隊長が苦々しい顔で言いました。

「さてあなたのおっしゃる身元保証人に集まっていたいただきました。それではあなたの身許を明かしていただけますかな？」

女は頷くと思わせぶりにゆっくりベルをめぐり上げました。

その顔を見たたん、ルピネー、クラリス、ジークフリート王子はあっと声を上げて驚きました。

「ジークフリート王子様あー！」

女はマントも脱ぎ捨てて体にぴったりまとわりついたドレス姿で王子の首に両腕を回して、その際王子にしがみついていたオデーレをどんと突き飛ばして、ぎゅっと思いつきり抱きしめました。

「き、きき、君は……」



満面の笑顔で王子に抱きついているのは、あのロットバルトの娘、オデールでした。

## 第20章 三角関係その1

黒衣の女の正体がユークリナの宰相ロツトバルトの娘オデルである、ルピネー、クラリス、ジークフリート王子によって保証され、彼女がハルメイユーの女怪盗であることは日時的にあり得ないことが確認されて警官隊は去っていきました。

しかしこの女、本当にあのオデルなのでしょうか？

真つ黒な髪に真つ白な肌、丸く広いおでこに我の強そうなくつきりした弓なりの眉、大きな黒い瞳、小生意気そうにつんと上を向いた鼻、小さな真つ赤な唇。

たしかに顔はオデルに違いないのですが・・・

大白鳥号は航河を再開しました。

いつの間にやら雨もやみ、雲間から黄金の日射しが下りています。

「王子様、わたくしのこと怒ってらっしゃる？」

オデルは小首を傾げ心配そうに上目遣いにジークフリート王子の顔を覗き込んで問いかけました。

「い、いや。どうして？」

王子はどぎまぎしながら答えます。

「だって、勝手にこんな所までついてきてしまって、きつとご迷惑ですわね？」

オデルは悲しそうに目を伏せてつと王子から離れて背中を見せました。ちよつと前屈みに肩を落として、丸くなった背中を艶やかな長い黒髪がサラサラ流れていきます。シンプル極まりない黒いラメのドレスの背中は大きく開いて、うなじから腰の上辺りまで白い肌が丸見えになっています。

その艶めかしい姿に王子は思わずゴクリと生唾を飲み込みます。

「そんなことはないですよ。ただ、その、驚いてしまって、なんと

言つてよいのやら・・・」

オデルは斜めに振り向いて潤んだ瞳で王子を見つめました。

「わたくし、王子といっしょにペテロブラーグまで行っていいかしら？ それとも、ユークリナに帰らなくてはなりません？」

「そ、それは・・・」

王子はじっとオデルの目を見つめたまま視線を動かさないうで頭がぼーっとしてきてしまいます。

「僕からはなんとも・・・。ルピネーさんに聞いてみないと」

「駄目」

オデルは風のように振り向いて一歩前に出ると人差し指を王子の唇に当てました。

「王子様ご自分でお答えください。お答えがどちらでもわたくしは王子様に従います」

「僕は・・・」

王子はもうまるで魅入られたようにオデルの瞳を見つめ続けています。

「かまいませんよ。ペテロブラーグまでごいっしょしましょう」

「ああ、嬉しい！」

オデルは弾けるように言つて、ちよつとはにかんで王子の唇に当てていた人差し指を自分の唇に当てて悪戯っぽく微笑みました。

王子はただただ頭が真っ白になってしまつてオデルの笑顔を見つめるだけ・・・

「ちよ、ちよつとお！ あんた、いったい何者よ！」

すっかり自分のポジションを奪われたオデルが怒りにブルブル震えながら人差し指を突きつけました。

オデルはとたんにしらっとした目をしてオデルを見下すようにしました。背はほぼ同じで、女性にしては高い方ですが、オデルがオデルを見下したのは顔をちよつと上向かせたのと、露骨にオデルを小物扱いした態度によるものでした。

「私を知らないなんて、あなたやっぱりオデット姫の偽者だったのね」

「あたしはオデット姫なんて最初から知らないわよ！」

オデーレは今にも怒りが爆発してオデールに掴みかかりそうな様子です。

「あんだこそ何者なのよ！」

「だから、私はロツトバルトの娘のオデールだって言ってるじゃない。まったくこの人なにが言いたいのかしら？」

ねー？と王子に肩でしなだれかかって甘えるところはまさしくあのオデールです。

が、しかし……

「ねえ、なんだかベルーシアで会った時より綺麗になったんじゃない？」

と、感想を述べたのはクラリス。

「あの時はベツタベタの甘えん坊さんだったのに、なんだかずいぶん大人っぽくなったみたい」

「オホホホホホ」

とオデールは笑いました。この笑い方はいつしよです。

「だってえー、わたくし、恋しているんですもの！」

ねーえ、王子様もわたしが綺麗になっただって思う？」

「う、うん……。びっくりしちゃった」

「嬉しいっ！」

オデールは王子にぎゅうっと抱きついて、王子は今度は真っ赤になっただけでオデールを引き離そうとしましたが、結局肩に手を置いただけでそのままになってしまいました。

「なによなによなによっ！」

オデーレは地団駄踏んで悔しがりました。

「なによそんな女！ その女は、偽者よ！」

はあ？ と一同変な顔になってオデーレを見ました。

「偽者って、なんの？」

「だ、だからあ・・・」

オデールはたじたとになりながら

「その、オデールの偽者よ！」

とわめきました。

「オデールの偽者お？」

クラリスはますます変な顔になりました。

「オデット姫の偽者なら分かるけれど、この場合オデールの偽者って、何か意味あるの？」

「そっだよ」

と王子も言っただけで、

「そ、そうですね。だって、どう見てもやっぱりオデールさんですよ。僕も最初はびっくりしましたけれど・・・」

オデールは勝ち誇って、ほーらごらんなさいという顔をしました。

オデールは悔しそうに押し黙りました。

「しかし、なんだなあ」

ルピネーが言いました。

「オデットにオデールにオデレと、ややこしいったらねえな」

それは同感です。

「こんな偽者といっしょにされたくありませんわ」

「それはこっちのセリフよ！」

オデールはつんとして、オデレは敵意剥き出しに、二人はにらみ合いました。

どうやらこの二人の相性は最悪のようです。

「ところでな」

と再びルピネーが尋ねました。

「オデールさんよ、まさかあんな一人でベルーシアからここまで来た訳じゃあるまいな？」

「もちろんですわ。」

わたくし、王子様がペテロブラークに行くとき父から聞かされてそれはそれはシヨックでしたのよ。理由は、敢えて申しませんけれど」

と王子を恨めしそうに睨んで

「そこで父に私もペテロブラーグに行きたいとおねだりいたしました。父は馬車と人を用意してくれて、王子様から半日遅れで出発しましたんですけれど、・・父の話ではすぐに追いつけるはずだったのですが、なかなか追いつけず、そう思っていたら翌日にはどうやら追い越してしまつたようで」

なるほど、ロットバルトが道に罾を仕掛けて馬車を故障させたのは娘オデーレを追いつかせるためだったようです。ところがルピネーが予想以上に馬車を早く修理してしまい、ここで追いつけず、そう思っていたら今度はいざというとき花嫁に仕立て上げようと連れてきたオデーレが逃げ出して、その騒動に巻き込まれて王子が馬車を失つた間にオデーレの馬車が追い越してしまつたというわけです。ロットバルトからしからぬ「策士策に溺れる」という大失敗だったわけです。

オデーレの話が続きます。

「さてどうしようかしらと思つたのですが、父が王子様たちはカカツサス山脈を越えるのにきつと秘密の洞窟を使うだろうからと場所を教えてくださいさつていたので先回りいたしました、宿屋の主に言い含めてルピネー様が来たのをこっそり知らせてもらいましたの」

あの親爺、そんなことおくびにも出さず、がめついことです。

「そこで合流しようと思つておりましたのですけれど、なんと、どういふ訳かオデット姫がごいっしょらしいではありませんか！」

と、ジロリとオデーレを睨んで、オデーレも負けじと睨み返ししました。

「それで様子を見ることにしてこっそり後からついていきましたの。そうしましたら、まあなんてことでしょう、べたべたいちやいちやと、いやらしい、なんて恥知らずな女でしょう！」

と、王子の腕をギュッと掴んだまま自分のことは棚に上げて、

「でも見ていましたらどうも様子がおかしくつて。オデット姫がまさかあんなみつともない真似はしませんでしょう？　それで化けの

皮をはいでやろうと、こちらにも正体を隠して近づぐことにしたので、この船に乗るときに伴の者は下女一人残して別れまして」

「そういえばオデールの部屋は二人部屋で同室者がいるはずですが、はて、そういえば覚えがねえな」

とルピネーが話に割って入って、

「その女はどこにいるんだ？」

「ああ、下女なら」

とオデールはこともなげに

「もう用がないからさつき警察の方といっしょに帰しましたわ」

「なに、いつの間に」

誰も気付きませんでした。

「当然ですわ、下女ですわよ？ このわたくしが正体を明らかにした以上、影同然のあんな女に誰が注意を払うというのです」

「ずいぶん高飛車な態度です。それにしても誰も覚えていないとはその下女は下女の鏡のような女性です。」

お話を戻してもよろしいですか？と迷惑そうに訊かれてルピネーは恐縮して謝りました。

「それでわたくしはこの女の化けの皮をはいでやろうと意気込んでおりましたのですけれど、まあ、取り越し苦労だったようですわね。顔が似ているだけで中身はお姫様にはほど遠いようですから」

と、例の高笑いを発して、オデールの神経を思いつきり逆撫ですて、

「まさか王子様もこの女とオデット姫をいっしょにお考えなんてことはありませんわよね？ わたくしも恋のライバルがオデット姫ならまだしも、こんな女、あら失礼、こんなお嬢ちゃんじゃあ、情けなくなってしまうものねえ」

と、ここでクラリスもいたことに気付いて、ニッコリ笑ってもう一度「あら失礼」と言いました。

クラリスもオデールといっしょに頬を膨らませました。

こうして謎の黒衣の女の謎が解明されたところで、オデーレはクラリスを引つ張って誰もいない外の通路に出ました。

「怪しいわよ、あの女！」

オデーレはどうしてもあのオデーレに納得がいかないようです。

「ねえ、あなたもそう思うでしょっ!？」

オデーレは顔をぐいと近づけて無理やり同意させました。

「そ、そうね、なんだか部分的に印象がぜんぜん違うみたい」

「でしょお？」

「前に会ったときはもつと無邪気で子どもっぽくて・・・、そう、ちよつどオデーレみたいだったわ！」

「なんですってえ？」

「怒らないでよ、可愛いつて褒めてるんだから」

「それならよし」

「でも変よねえ、顔はやつぱりオデーレなのよねえ・・・。ちよつとほつそりして、ずいぶん綺麗になって、背もちよつと高くてスラリとした印象だけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえ、オデーレはなんで彼女が怪しいって思うわけ？ 知らないでしょ、オデーレのこと？」

「そりゃあ、知らないわよ。でも、絶対に怪しいのよ！」

オデーレはひどくイライラして、不思議そうに見つめるクラリスの視線がうるさくてプイと横を向きました。

クラリスは考えました。

あれが偽のオデーレであることがあり得るでしょうか？

あのロットバルトの娘です、オデーレが誰かに変身していることはあり得るように思えますが・・・

「あれが偽者だとして、その目的は何かしら？」

「そんなの決まってるじゃない！」

オデーレはクラリスにまったくバカねえという顔をして、

「あの女もジークフリート王子のことを・・・・・・・・」



急に黙ってしまいました。

「どうしたの？」

「な、なんでもないわよ」

「どうもオデーレは怒ってばかりいます。」

「とにかくあの女は怪しいの。絶対何か企んでいるんだわ。いい？

あなた魔女なんだからあの女の正体を暴いて企みを阻止しなさい

！ 分かったわね？」

オデーレは一方的に命令してクラリスを残してさっさと室内に戻っていきました。

さて一つ問題が起こりました。

部屋割りです。

オデーレは正体を明かしてしまったので一人でいる必要がなくなりました。そこで王子といっしょの四人部屋に合流したいと言うのですが、これにオデーレが断固反対しました。

「いいじゃない」

とオデーレは言います。

「私がそちらに移れば一部屋空きますからダヴィドフ夫人の一家に使っていただいたらよろしいじゃありませんの」

と、実にお利口な意見を述べました。

そう言われるとオデーレも反論できませんが、

「いや、困ったなあ」

と言ったのは王子です。

「男の僕が一人で若い淑女三人といっしょの部屋というのはちょっと・・・」

と恥ずかしそうに顔を赤くしています。

「あら、大喜びすると思つたら」

とクラリスが意地悪な目を向けましたが、オデーレは力を得てこそぞと、

「じゃあクラリス、あんたがオデーレといっしょの部屋に移りなさい

いよ。あたしと王子様で夫人の子どもたちを引き受けるから」

と提案しました。とにかく王子とオデールをいっしょにするのは絶対嫌なようです。

オデールはまた反対するかと思いきや、クラリスをチラリと見て、「ま、それならそれでいいわよ」

と、あっさり承知しました。

というわけでクラリスはオデールの部屋に移ってきました。

オデールの部屋はドアを開けたとたんムツと強い香水の香りがあふれ出てきました。甘い花の香りではなく、深い森の樹木を思わせる落ち着いた大人っぽい香りです。ただあまり強いので頭がクラクラしそうです。

「この船新しくして塗料の臭いが鼻につくのよ。わたしは人工的な臭いは嫌いな」

と、きつい香水の香りの中でオデールは平気でベッドにくつろぎました。ベッドは十分な大きさがあるのですが、部屋が狭いので二段ベッドになっています。

クラリスがしょうがないのでオデールのとなりに座ろうとすると、「ねえ、ちよつとマツサージしてくれない？」

と、オデールは靴を脱いでベッドにごろんと腹這いになりました。「長旅でもうくたくた。深窓の令嬢にはきついわ」

「そんなこと、それこそ下女にしてもらえば良かったじゃない？」  
「何言ってるの、このわたしの体に触れていいと言ってるのよ？」

喜んでおやりなさい」

クラリスはため息をついて天井に頭をぶつけないように気を付けながらオデールの求めに応じて脚と肩を揉んでやりました。

オデールの体は意外に筋肉質で締まっていました。  
ちよつと深窓の令嬢の体つきには思えません。

「何か運動もしているの？」

「踊るのよ。小鳥たちのさえずりに合わせてね」

からかっているのでしょうか、オデールはフフフと笑いました。

「あなたのおうちにも小鳥たちが遊びに来るのかしら？」

「お城のこと？」

「ああ、そう、あなたお母さんといっしょに暮らしているわけじゃないんだ？」

クラリスはふだんは母親の白バラの森ではなくオーロラ姫のエメラド城の方で暮らしています。

「寂しくない？」

「別に。会いたくなればいつでも会えるし、実際しよっちゅう会ってるから」

「そう。それはいいわね。うらやましいわ」

「そっか、オデールはお母さんがいないんだっけ・・・」

「いるわよ」

「え？」

クラリスはびっくりしました。てっきり亡くなったものとはかり思っていました。クラリスはまだ森の灰色の魔女がオデールの母親であるらしいとは知りません。

「死んじやあいないわよ。お父様と別れただけ」

「今はどうしているの？」

「まだユークリナで一人で暮らしているわ」

「そうだったの。知らなかったわ・・・」

「あなたはお母さんとは会ってるの？」

「ええ、しよっちゅう。もううんざりするくらい」

「ふうん・・・」

クラリスは思いました、仲の悪い両親の間で子どもとしてどちらともつき合っているというのはどういう気持ちなのだろうか。

「オデールのお母さんでどんな人？」

「そうねえ・・・」

昔はずいぶん綺麗だったようだけれど、今は、魔女ね」

「魔女？」

「そ。今もお父様のことを愛しているわ。お父様だけ。娘のわたしなんてそっちのけでね。愛しているのにもう愛してもらえないから、今は憎んでいるわ。愛しているのと同じくらい、いいえ、愛している以上にね。特に」

と、クラリスを振り向いて怖い笑い方をして、

「お父様がオデット姫と結婚しようとしていると知ってからはもっと、ずーっとね」

クラリスは思わずゾツとしました。

「さてわたしはどっちの味方をしたらいいのかしらね？ オデット姫をお父様とくっつければわたしは王子とくっつきやすくなるし、でもそうするとお母様を裏切ることになるし」

「どっちにするの？」

「うーん、問題よねえー。どっちにしようかしら？」

オデールはそう言いながらあまり深刻に悩んでいる風ではなく、むしろこの状況を面白がって楽しんでいるように見えます。

クラリスは改めて以前会ったオデールとはまるきり違った人物のように思いました。

あのオデールはもっと子どもっぽくて、王子に対してまっすぐに純粋な気持ちを持っていました。

今のオデールは、すごく大人っぽくて、冷めています。

「ねえ、オデールは今でも王子のことが好き？」

「ええ、もちろん大好きよ。かっこいいし、かわいいじゃない？」

やっぱり以前のオデールとは別人です。

「あなた、誰？」

「わたしはオデールよ。まったく見ての通りにね」

「本当かしら？」

「クラリスちゃん」

オデールは急に姉のように叱るようななだめるような口調で言いました。

「あなた、へまが多いわね。ちょっとがっかりよ」

クラリスはムツとしましたが、言い返せません。たしかに自分でも失敗が多かったなと思います。

オデールはニツと白い歯を見せて笑いました。

「ねえ、今度はあなたのことを話してよ。お母さんのカラベラスって、どんな人なの？」

## 第21章 三角関係その2

翌日。

予定では今日の夕方遅くにはペテロブラーグに到着の予定です。

さて、昨日からどうも変な様子です。

王子とオデーレのことです。

王子はぼーっと物思いに耽るようになって、オデーレもなんとなく距離を置いて話しかけることをしませんでした。

朝、おはようの挨拶をしに来たクラリスはその何とも重苦しい雰囲気についたじたじとなりました。昨夜お泊まりしたダヴィドフ家のヴェーラとナターリヤも困った笑顔でクラリスに挨拶して助けを求めました。

オデーレは暗い無表情の顔を上げてクラリスを見ると、見る見る生気がよみがえってくるように怖い顔になって、ズカズカ歩いてくると腕を引っ張ってクラリスを外に連れ出しました。

「どうだったの？ あの女のしつぽは掴んだの？」

「えーと、お友だちになっちゃった」

「はあ？ なによそれ？」

クラリスはすっかりオデーレと話し込んでしまっただけでなんだかすっかりうち解けてしまったのでした。

「考えてみれば、わたし、もともとオデーレのこと嫌いじゃなかったのよねえ・・・」

「バカ！ あんたがまるめこまれてどうすんのよ！」

まあまあ、とクラリスは苦笑いして、

「たしかにわたしもおかしいとは思っただけ。でも考えてみればあの口ツトバルトの娘ですものね、突然眠っていた才能に目覚めてまるで別人に変身してしまうことだってありえなくはないんじゃない？」

クラリスはオデーレと話をしながらそれとなくユークリナのことやお屋敷のことや宮殿のことや口ツトバルトのことを訊いてみたの

ですが、その一々に具体的な答えが返ってきて、少なくともロツトバルトやオデールのごく身近の人間、もしくはオデール本人であることは確実のようです。

「とうわけでね、あのオデールを偽者と考えるのはちょっと無理があるみたい」

「そうなの・・・」

これだけ言われるとオデールもさすがに納得しないわけにはいかず、すっかり元気がなくなって青白い顔になってしまいました。

クラリスは気の毒になってしまって、

「あんまり言いたくないんだけど、一つだけ、あなたに有利な話があるわ」

オデールはもうあんまり興味なさそうに物憂げに顔を向けました。「あのね、オデールはもうあんまりジークフリート王子のことが好きじゃなくなつたみたいなの」

オデーレの目が大きく開いて、顔にパーツと赤みが差してきました。

「口では大好きなんて言ってるけれど、わたしにはどうしても口先だけの演技にしか見えないのよね」

オデーレはすっかり元気を取り戻して明るい表情になりました。

クラリスはまったくくなんて分かり易い人だろうと内心笑っていました。

「すっかり大人っぽくなつたでしょう？ もう子どもっぽいや王子なんてまるで眼中にないみたい」

「なんですってえ！」

オデーレは怒りましたが、ほつとして、嬉しさが顔に広がってくるのを一生懸命ごまかしているみたいでした。

「あたし、王子様を朝の散歩に誘ってこようつと！」

オデーレはルンルンと鼻歌を歌いそうな上機嫌で部屋に帰ってきました。

いっぽう王子はというと、ますます物思いがひどくなってため息ばかりつくようになってしまいました。

それが決定的にひどくなったのがお昼前、甲板でアレクサンドラ夫人の一家とひなたぼっこをしているときでした。

川岸の景色はだんだん人の手で整備されて大きな建物の並ぶ都市が現れてくるようになりました。オデーレは大喜びで子どもたちといっしょにあれこれ指さして「ねえねえ王子様」と呼びかけるのですが、王子は憧れの大ラピスの景観も「うん」とか「ああ」とか言うだけでちつとも盛り上がってきません。

それが、オデーレが現れたとたんビクンと姿勢を正して、

「お、おはよう」

と、ガチガチに硬い笑顔で挨拶しました。

「あーら、ジークフリート王子、おはようございます」

オデーレはマントを羽織っていましたが、ツカツカと艶めかしくドレスのまとわりつく腰を覗かせながら歩み寄ると、ちよんとつま先だつて王子の頬にチュツとキスしました。

オデーレは嫉妬の炎を燃やしてキツとクラリスを睨みました。

クラリスは急いでオデーレの耳に

「演技よ、演技」

と囁いてやりました。

しかしオデーレは両腕を王子の首に回して真っ赤な唇を魅惑的に微笑ませてじつと王子を見つめ、なかなか離れようとしません。

王子はもう真っ赤になって今にも湯気を吹き出しそうです。

「ちよつと、離れなさいよおっ！」

とうとうオデーレが怒りを爆発させて無理やりオデーレの腕を王子の首から離しました。

「まったく、なんて恥知らずな女かしら！」

オデーレは瞳を怒りに燃え上がらせてオデーレを睨み付けました。オデーレはまったく落ち着いたもので、

「なによ、ただの朝の挨拶じゃない。もう、しょうがないわねえ」



と、オデーレを引き寄せると同じように頬にキスしてギュツと抱きしめました。

オデーレはびっくりして、

「ちよ、ちよっと、何するのよ!」

と慌ててオデーレを押し返しました。

「何って、あなたにも挨拶してあげたんじゃない。これで王子とお揃いよ。機嫌を直しなさいな、お嬢ちゃん」

「な、・・・」

オデーレは顔を真っ赤にして何か言い返してやろうと思いましたが、この騒ぎで夫人に抱かれていた赤ちゃんがぐずって泣き出してしまいました。

夫人は赤ちゃんを「おー、よしよし」と揺すってあやしましたが、赤ちゃんはますますギャーギャー泣きだしてしまいました。

「わたしに貸してくれませんか?」

と、クラリスが夫人の腕から赤ちゃんを受け取ってよしよしと揺すりながら、

「ホギヤホギヤフニヤフニヤフワフワッパー、プーパプラプラ  
ホ口ホ口ポッポー」

と高らかに歌いました。

みんな呆気にとられてポカーンとしましたが、赤ちゃんも同じくポカーンと口を開けて、クラリスがとどめに

「バアーッ」

とやると喜んでキャッキヤと笑い出しました。

「あら、笑った」

「笑った笑った」

みんなも嬉しそうにニコニコしました。

「この子の初笑いですわ」

夫人も嬉しそうにお礼を言いました。

「あら、余計なことしちゃったかしら?」

「いいえ、あのクラリスさんに初めて笑わせてもらったってこの子

の自慢になりますわ」

キャツキヤと笑っている弟ユーリイをお姉さんたちが抱きたがりましたのでクラリスは一番上のお姉さんイリーナに預けました。

「なんだい今のは？ お得意の魔法かい？」

王子がいつもの調子に戻って訊きました。

「違うわ、ただの面白い言葉よ。オーロラ姫が赤ちゃんをあやすのによくやってたのを真似しただけ」

みんな順番にユーリイを抱いていき、うらやましそうにしているオデーレも抱かせてもらいました。けれど赤ちゃんなんて抱くのは初めてで、おっかなびっくりしていると再び赤ちゃんがぐずり出しました。

オデーレが慌ててどうしようどうしようとしていると、

「ほら、貸してごらんさいよ」

と、オデーレが受け取ってあやし出しました。

オデーレは綺麗な声で優しい歌を歌い出しました。

外国語で歌詞は分かりません。

でも聴きながらクラリスはあら？と思いました。

どこかで聴いたことがあるような・・・

はっとしてオデーレを見ました。

オデーレも信じられないという顔をしてオデーレをじっと見ています。

それはいつかオデーレが亡くなった母親の話をしたときに歌ってくれた思い出の歌でした。

ユーリイはオデーレの歌を聴きながらぐっすり眠り込みました。

アレクサンドラ夫人はお礼を言ってオデーレの腕から赤ちゃんを受け取りました。

クラリスが訊きました。

「ねえ、それはどこの歌？」

「ハルメイユーの地方の民謡よ。母の出身地だから」

「ハルメイユーは言葉が二つあるの？」

「もつとあるわよ。いろんな文化が入り交じったところだから」

「ふうーん、そうなんだ・・・」

偶然でしょうか？

「有名な歌なの？」

「さあ？ わたしはユークリナから外に出たのはこれが初めてだもの」

「なんて歌ってるの？」

「村娘が王子様に一目惚れして、どうしたら振り向いてもらえるかしら？ 綺麗な花を摘んできて着飾ろうかしら？ 情熱的な恋の歌を歌おうかしら？ 美味しい料理を用意してご招待しようかしら？ それともおまじないで王子の心を虜にしまおうかしら？ なんてあれこれ夢想する歌よ」

子守歌ではないようですが楽しそうな歌です。さつきオデールが歌ったのは歌い方を変えた子守歌バージョンなのでしよう。

クラリスはちょっと心配になってオデールを伺いました。

オデールはうつむいてすこく悔しそうにしています。

てつきり外国の歌だとばかり思っていた思い出の歌が同じ国の地方の民謡だったのです。

オデールにしてみればジークフリート王子に続いて母親の思い出までオデールに奪われたような気持ちでしょう。

そんな歌の謎はまるで関知しない王子は、赤ちゃんを抱いて優しい子守歌を歌うオデールの姿にますます強く引きつけられた様子でした。

クラリスはオデールのために王子に猛烈に腹が立ちました。

何か言ってやらなければ気が治まらないところですが、ふと下から二番目の弟ボビンが一人で寂しそうにしているのに気付いてため息をつきました。上のお姉さんたちはお母さんといっしょに赤ちゃんを連れて部屋に帰ってしまいました。

「あら、あなたもだっこしてもらいたいの？」

ちよこちよこ歩き回ってばかりで危ないったらない年頃ですが、

やっぱりまだ赤ちゃんが残っていて、弟ばかりがちやほやされているのに嫉妬しているのでしょうか。

「ほら、いらつしゃい」

クラリスはよいしょとボビンをだっこしてあげました。

ボビンは恥ずかしそうにしていますが、やがてニコッと笑って頭をクラリスの肩に寝かせて甘えました。

クラリスだってこんなにお姉さんらしいところを見せているのに王子はぼーっと熱い眼差しをオデールばかりに向けています。

まったく、あんたって人は何考えてるのよ!?

と言つてやろうと、昼食後クラリスは王子を捜しに行きました。

オデールはアレクサンドラ夫人の所に遊びに行つて何やら文化的なお話をしているようで、ますますあの甘ったれたオデールらしくありません。

王子を見つけてみると、オデールと二人また外に出て今度は二人きりで景色を眺めています。

クラリスはなんとなく声をかけづらくて結果的にこっそりドアの影から二人の様子を盗み見ることになりました。

二人の間には無言の時間が長く続いているようです。

ようやくオデールが晴れやかに言いました。

「いよいよペテロブラーグに近づいてきたわね。明日から憧れの街を王子と二人で歩くことが出来るのね! ああ、そうだわ、『白鳥の湖』のバレエも見に行かなくちゃ! ものすごく豪華な宮殿の美術館や噴水がすごくたくさんある大きな公園もあるんですって!

ああ、とっても忙しくてとっても楽しそう!

「ええ、そうですね・・・」

王子の気のない返事。

せっかく雰囲気盛り上げようと頑張っているオデールもすっかり元通りうち沈んでしまいました。

クラリスは思わずすっ飛んでいって王子の頭を後ろから思い切り

ぶん殴つてやりたい気持ちになりました。

オデーレが小さな声で言いました。

「王子は、オデーレが好き？」

王子もさすがにその悲しそうな声にハツとなってオデーレを振り向きました。

オデーレはそれまで王子が見たことのない顔をしていました。

「僕は……」

王子はオデーレの顔にいたたまれなくなって顔を川の流れに向けて言いました。

「すごくシヨックで、とまどっているんです。

僕はオデーレなんてちつとも好きじゃなかった。まるで子どもで甘えん坊で威張りん坊で安っぽくて、そのくせプライドばかり高くて……」

自分のことを棚に上げてよくまあ言えたものです。

「でも、昨日再会したオデーレは……」

僕は湖でオデット姫と会ったときこの世にこれほど美しい人は二人といるはずがないと思った。人物も清楚で芯が強く気品に満ちて素晴らしい女性だった。僕は自分が生涯かけて愛し続けるのはこの人しかないと思った。今もその気持ちは変わりないと思っていました。が……

オデーレさん。あなたが現れた。

姿形はこの世で二人といたいと思っていた美しいオデット姫と瓜二つ。僕は、正直、拍子抜けする思いだった。だってこの世で最高と思っていた美女が二人も現れてしまったんだ、どっちが一番なんて決められないじゃないか？ おまけにあのクラリスだって、まあまだ子どもだけど、美人と言つていい部類だし……ルピネーさんの二人の奥さんもすごい美人だつて言うし、この世はまるで美女だらけじゃないか？ 僕がずっと憧れていた運命の美女は、ちよつと広い世界に出てみればいくらでもいるじゃないか？ 僕は……僕がどれだけオデット姫を愛していたか、愛そうとしていたか、

自分の気持ちが変わらなくなってきたんだ！

おまけに、あのオデールまで現れた。

僕がちつとも好きじゃなかった、むしろ鬱陶しいと思っていたオデールが、久しぶりに会ったらまるで別人みたいに綺麗になっていた！

僕は、初めてオデット姫と出会ったときと同じくらい強い衝撃を受けた。その衝撃は時間がたつに連れどんどん大きくなっていく、  
・・・オデット姫がどんどん遠くなっていくというのに・・・  
僕は、やっぱりオデット姫を愛する資格なんてないんだ。

こんなことを言っていないながらも一度オデット姫の前に出ればきつとまた、この人こそが運命の、なんて思うんだ。

僕はそういう意志薄弱な最低な男なんだ。あのクラリスの言うとおりさ。

僕は、駄目な男だ・・・」

クラリスが言ってやりたかったことを本人も分かってはいるようです。

でも・・・

「そんな風に自分のことを悪く言わないで」

オデールが言いました。

「それじゃああなたをこんなに好きなわたしまで惨めになってしまっわ」

オデーレの暖かい笑顔を王子はつらそうな顔で見ました。

「僕はあなたが好きだ。変な言い方だけど、女の子として普通に大好きだ。あなたといっしょにいととも楽しくて浮き浮きして、僕はいつも理想の王子様でいられる。

でも・・・

結婚相手として、たとえオデールを選ぶことがあっても、あなただけは選べない。オデット姫を選ばずにあなたを選んでしまったら・・・、僕は一生自分を許せない・・・」

オデーレの目から大粒の涙がポロポロこぼれました。

「ひどい、ひどいわ、あの、あの、オデールを選んでもだなんて・・・」

オデールは思わず王子がさしだした手を振り払って駆け出ししました。

駆け込んできたオデールをクラリスは慌てて壁にぴったり身を寄せてやり過ごしました。

追って、なぐさめの言葉をかけてやりたいと思うのですが、いったいなんと言ったらよいのか、クラリスには見当もつきませんでした。

クラリスは後部甲板で男たちが「エイサエイサ」と水車を漕ぐ様をぼーっと眺めています。

「はあ・・・」

まるで王子みたいに長い長いため息をつきました。

「よお、一人でどうしたい？」

ルピネーが船倉から登ってきてクラリスのとなりにどっかどっかと座りました。

「航海は順調だ。おっと、海じゃなかったな。予定通り夜までにはペテロブラーグの河川港に到着するぜ」

「そ、ごくろうさま」

またまた王子みたいに気のない返事をします。

ルピネーは、んん、とうなって、耳をかきました。

「どうしたものが、俺は最近すっかり耳が悪くなっちまったみてえでなあ・・・」

と、クラリスの顔をうかがいます。

それに気付いてクラリスは

「ごめんなさい」

と謝りました。

「別に謝るこたあねえが、まあ、おまえも年頃の女の子だもんな、他人に聞かれたくねえことがあって当たり前だ」

実はルピネーの地獄耳はクラリスがテレパシーで情報を送ってやっていたのですが、ここ最近はそれがすっかりなくなっていました。

「どうしたい、しけた面して」

「ひどいわね、女の子の顔にしけたはないでしょう？」

「ハツハツハ、こりやすまねえ」

クラリスもルピネーのとなりに腰を下ろしました。

「ねえおじさま、わたしをブルーシアに呼んだのは本当はペテロブラーグにバレエを見せに連れていくためだったんでしょ？」

「うん？ いや、まあ、それは・・・」

「それがロットバルトが予想以上に強敵でわたしを連れて帰る余裕がなくなっちゃったんでしょ？」

「いやあ、それはなあ・・・」

「ほーんと、テレパシーでつながっててもおじさまのそういう真心にぜんぜん気付かないんだから、オデールにへまが多いって言われるのも当然ね」

「なんだ、オデールにそんなこと言われたのか？」

「わたしにとってはロットバルト以上の強敵よ」

クラリスは、んー、と伸びをしました。

「なんだかねー、わたし、自信なくしちゃった」

「ま、たしかに、王子が成長しているようには見えねえな」

「王子のせいばかりじゃないわ。」

わたしね、王子がオデット姫を愛するのを当然のように考えていたんだけど、王子の気持ちをぜんぜん考えてなかったなっていうの。

そりゃあオデット姫は美人よ。オーロラ姫と比べたって遜色ないわ。清楚で可憐で気品があって・・・でも、もしかしたら人間としての面白みが全然ないのかもしれない。義務感ばかりで物事を杓子定規に考えすぎだわ。ああいう人につき合っていたら、男の人って窮屈でしょうがないんじゃない？」



「さあ？ 俺はオデット姫のことはほとんど知らねえんだが、ユークリナの国民の間では人気があるぜ。もっとも、最近じゃあロツトバルトの奴もずいぶん人気が上がってきているようだがな」

「ロツトバルトの方が魅力的でしょうね。オデット姫はお飾りのお人形みたいなものだもの」

「おいおい、おまえさんがオデット姫を悪く言ってどうする？ 王子の優柔不断は持って生まれた病気みたいなものだろう？ 王子の側からすりゃあそれくらいしっかりしていた方がいいに決まってる」

「オデーレ相手ならそう呑気に考えてもいられたんだけどもねえ・・・」

クラリスはまたため息をつきました。

「まさかオデールがあんな風に化けるとは思わなかったわ。わたしは今のオデールも素敵だと思っただけで以前のかわいいオデールも嫌いじゃなかったのよねえ。ま、最初はわたしも王子みたいに嫌な子って思っただけけど・・・」

クラリスはうふふと思っ出し笑いしました。

「ほんとあの頃のオデールってオデーレそっくりだったわよねえ？ 王子ったらオデーレとあんなに気が合うんだからオデールとだって仲良くなれたんじゃないかしら？・・・」

クラリスはまたため息をついてがっくり肩を落としました。

「この頃わたしオデット姫よりすっかりオデーレに肩入れしてしまっているわ。それは困るんだけど、なんだかあの子見てるとついつい応援したくなっちゃうのよねえ、わがままで困ったお嬢さんなんだけど、なんか、かわいいじゃない？」

クラリスは困った顔でルピネーに同意を求めました。

「まあな。男からしてもああいうかわいこちゃんタイプはやっぱりいいんじゃないか？」

「オデット姫もあれくらいかわいげがあればいいのにねえ。」

と、思っていたのに、なに、王子のあの態度？」

クラリスはさっきの王子とオデーレの会話を思い出してメラメラ怒りが燃え上がってきました。

「あんなに嫌っていたオデルがちょっと素敵になったとたんにメロメロになっちゃって！」

「ちよつと、でもないがな」

「まったく、王子ったらかわいい女の子と素敵な大人の女性と、いったいどっちが好きなのかしら？」

「たぶん・・・」

ルピネーが困った顔で言いました。

「どっちも好きなんだろうなあ」

クラリスはしらつとした横目でルピネーを見て、

「おじさまはローゼおばさまとユリアナおばさまとどっちが好きなの？」

「頼むからそういうこと聞くなよ」

ルピネーは本当に困った顔でクラリスに頼みました。

ずいぶん日の暮れるのが早くなりました。

昼の光が陰って灰色の薄雲が目立つようになってきた頃、河の兩岸は大きな白壁の建物がとぎれることなく連なりだしました。

大白鳥号はすでに広大な首都ペテロブラーグに入っているのです。建物に続々明かりが灯り、河岸にも油の燈火台が順々に灯っていききました。

それらの明かりが水面に映ってなんとも美しい景色を作っています。

クラリスは下船の準備に荷物の整理をするためオデルとの相部屋に戻っています。

オデルも戻ってきていましたが、荷物は小型のトランクが一つきりで簡単に道具をしまつてベッドに腰掛けてアレクサンドラ夫人から借りた小説を夢中になって読んでいます。

クラリスも同様に必要最低限の荷物だけなので整理はすぐに済み

ました。

「ねえ、オデール」

「んー・・・」

心ここにあらずの返事です。

「あなた、本当の本当にジークフリート王子が好きなの？」

「なんでえ？」

「だって、全然そんな風に見えないし・・・、からかって楽しんでるだけなら、オデールがかわいそうだなあって」

パタンと本が閉じられました。

「なに考えてるの？」

オデールは前に突っ立っているクラリスを非難するような目で見つめました。

「あの子はオデット姫の偽者でしょう？ あなたオデット姫の呪いを解くために王子とオデット姫をくっつけようとしているんじゃないの？」

「なんだ、あなたもお父さんのしていることを知っているんだ？」

クラリスはオデールが果たして魔王ロットバルトがオデット姫に呪いをかけていることを知っているのかどうか分からず、その点は避けていたのです。

「それなら、ねえ？ あなたからお父さんにオデット姫たちの呪いを解くように説得してくれない？」

「いやよ。わたしはオデット姫が邪魔なの」

「だからあ、あなた、本気で王子が好きなのって訊いてるのよ！」

オデールはフフンと面白そうに笑ってクラリスを見えています。オデールは母親を魔女だと言いましたが、今のオデールも魔女みたいです。

「その質問はジークフリート王子にした方がよさそうね。いいわ、もし王子がわたしを好きだ、愛していると云ったら、オデット姫の呪いを解くようにお父様に頼むことも考えてあげましょう。でも、もし王子がわたし以外の女を選ぶんだったら、わたしはなんにもし

ない」

クラリスは顔をしかめてオデールを睨みました。

「あなた、とつても意地悪ね」

「そうね。王子もわたしがどんなに意地悪な女か、早く気付くといいのにね」

クラリスはオデールがロットバルトに魔法を掛けられているのではないかと思いました。二人が手を組んで王子の心を乱しているのではないかと。

果たしてそれがオデール自身の意志なのかどうか・・・

辺りはすっかり暗くなっています。

ベルーシアやユークリナ、ロヴィークでも考えられない無数の街の灯りが暗い空と黒い水面に幻想的に浮かんでいます。

グワングワンと入港の合図のドラが鳴らされました。

甲板には気の早いお客たちがめいっばい立ち並んで船の着岸を待っています。

広い整備された港にも噂を聞いた見物の人たちが鈴なりに岸を埋めています。

このお祭り騒ぎを先頭に立って大喜びしそうな王子は、甲板のお客が多いのに遠慮して部屋の窓から外の様子を眺めていました。

オデーレも同じく椅子に腰掛けて黙ってあらぬ方向を見えています。

クラリスは部屋の外からそんな二人の様子を眺めてため息をついています。

王子とオデーレ、二人の恋の悩みは思った以上に深いものようです。

大白鳥号はついにラピスの首都、大都市ペテロブラーグに到着しました。

## 第22章 人の顔をした鳥たち

白鳥のオデット王女のお話。

ユークリナのお城でロットバルトの魔手から逃れたオデット王女の白鳥は、翌々日の夕方になってようやく白鳥の仲間たちに合流することが出来ました。

熊の母子に率いられた地上グループとおとりの精鋭グループも前日のうちに合流していました。

皆涙を流して再会を喜んでくれましたが、その仲間たちの中に近衛女官のレスリーと女中一名の姿はありませんでした。

オデット王女は気を取り直してみんなに言いました。

「とにかく、あなた方がみな無事で本当に良かったわ。元気を出してロヴィークの白バラの森に行きましょう。カラベラス様の力を借りてロットバルトの呪いをうち破り、きっと元の人間に戻りましょう！」

この日は森の湖でゆっくり休むことが出来ました。追っ手の黒鳥もカラスもすっかりまいてしまったようで、皆ぐっすり眠ることが出来ました。

「ふうん、あいつ、やっぱり鳥の化け物だったんだ」

オデット王女はみんなが寝静まったのを見計らってこっそりヴァイオレットと二人で話をしました。

「動物が人間に変身することってよくあるの？」

「よくはないだろうなあ。あたいはそんなの見たことないもん。おとぎ話にはよくあるけどな」

「あなたの経験じゃああんまり当てになりそうもないわね。だいたいあなた何歳なの？」

「さあ？ 妖精は年なんて考えないもん」

見た目はせいぜい十歳くらいの子どもです。

でも妖精は最初から大人の姿で生まれてくる者や、ずっと子ども  
の姿のままの者など様々ですから、見た目はあまり当てになりませ  
ん。

「じゃああなたカラベラス様とロットバルトの間に何かあったの、  
知ってる？」

「さあ？ それも知らないなあ。あたいがカラベラスに会う前の話  
じゃないか？」

「それじゃああなたがカラベラス様に会ったのって何年くらい前？」  
「えーつとお・・・、三十年前くらいになるのかなあ・・・、たぶん  
」

外見が子どもの割にはけっこう長い付き合いです。

その割には中身の方もぜんぜん成長していないようですが。

「三十年以上前かあ・・・、執念深いものねえ。」

ところで、カラベラス様って本当はどうなの？ 本当に悪い黒魔  
女だったの？」

ロットバルトは晚餐の席でカラベラスは名前ばかり有名で大した  
魔女ではないというようなことを言っていました。

「そうだなあ、村の牛を一頭残らず殺してしまったり、収穫前の麦  
畑を一面焼き尽くしてしまったりしたことがあったなあ・・・」

「んま・・・」

オデット王女は思わず顔が硬直しました。

「でもさあ、それって」

ヴァイオレットは難しそうに顔をしかめて言いました。

「その村の牛が人間にも感染する病気を持っていたり、質の悪い害  
虫が稲に大量に卵を産み付けていたりして、ほっといたら大惨事に  
なるところだったんだよ」

「なーんだ、じゃあいいことしたんじゃない？」

「そーなんだけどさー」

ヴァイオレットはすごく不満そうに、

「あいつつたらそういう理由をぜんぜん言わないで突然思い付いた

ようにやっちゃうから、人間たちは知らないんだよ。しかもあいつも悪口言われてもぜんぜん弁解しないで平気な顔でいるし」

「どうして説明しなかったのかしら？」

「あの頃のあいつは世の中にすっかりすねちゃってたからなあ。わざとワルぶってたってところはあな。ま、オーロラ姫に呪いをかけるのにそういうイメージの方が都合がいいっていう計算もあつたんだらうけどさ」

「じゃあロットバルトが言っていたのはそういうことだったんだ？」

「そうとばかりも言えないな。気に入らない奴の体をろうそくに変えちゃったり、高慢な女に鏡に映った自分の顔がものすごく醜く見える呪いをかけちゃったりしたからな。おっかない奴には違いなかったんだよ」

「けっきょくどうなのよ？」

「さあ？ どうなんだろ？」

カラベラスもなかなか複雑なキャラクターの持ち主らしいです。果たして素直にオデット王女たちの願いを聞き入れてくれるのでしょうか？

翌日からの旅も順調でした。

空を群で飛んでいる限り大型の白鳥に滅多に危害が及ぶような事態はありません。ましてこちらには天馬ナージャと、ちよっと頼りないですが火花の精ヴァイオレットがいるのです。

一番心配された三人の子どもたちも大人に負けず元気に頑張っています。

白鳥は季節に応じて長い距離を移動する渡り鳥ですから、春に生まれた雛は渡りをするために秋には親と同じ大きさに成長します。ただ色は子どもの羽毛のままなので灰色をしています。

でも彼女たちはロットバルトの魔法で白鳥の姿にされているので三人の子どもたちは色は他のみんなと同じ白色をしています。体は人間の子どものと同じで大人よりうんと小さな体をしています。そ

れで群は子どもたちに合わせたスピードで飛んでいます。子どもというのはエネルギーに溢れかえっていますので、それほど大人より遅いということはありません。

ですがやっぱ子どもたちは大人より早く疲れてしまうので一日のうち飛んでいられる時間はそう長くありません。

子どもたちのせいにしていきますが、実は大人たちだって夕方かなり早めにその日の宿である手頃な湖や沼に下りられることを内心ほつとして喜んでいきます。

皆、楽とは言いませんが、お城勤めで、農家のおかみさんのように一日中汗して働くという体の鍛え方はしていませんので、実は子どもたちより大人たちの方が疲れがたまってしまっていたいへんというところがあります。

目的に比べてずいぶんのんびりした旅になってしまっていますが、天気も晴れが続く、それまでの監視され、いつ襲われるかとビクビクした状態から解放され、すっかり心が軽くなり、空の旅を楽しむ余裕さえ生まれてきました。

しかし、王女たちは知らなかったのです、

空ではなく、地上からじつと王女たちの様子をつかがい、執拗に後をつけているものがあることを・・・

ブルーシアとユークリナに渡る大原生林を抜けてからは草原に四角く切られた畑が敷き詰められ、人家の密集があちこち見られるようになりました。もうじき麦の穂が黄金に色づき、収穫に忙しくなることでしよう。

白い天馬ナージャは目立つのですぐに人々に見つかりました。町や村の近くに下りると大勢の人たちが見物にやってきて白鳥たちにパンくずやポテトサラダなど食べ物くれました。白鳥たちは最初は久しぶりのまともな人間の食べ物に大喜びしましたが、すぐになんだか物乞いをして回っているような惨めな気持ちになってできるだけ人里は避けて飛ぶようになりました。



あれだけ「まずい」と文句を言っていたオデット王女も水草、藻、草の種と、すっかり自然派グルメになってしまいました。

「やっぱり王女たる者、誇りを持ってたくましく生きていかななくては駄目ね」

王女様なのだから下々の者どもから施しを受けるのは当然のようない気もしますが、オデット王女の哲学では違つようです。

「水草のダイナー、フルコースなら喜んでご馳走になるけどね」

ようするにちゃんとした自分のためのご馳走ならいいけれど、食べ残しや残り物は嫌だと、つまり、水草を食べるのに慣れちゃったからもういいや、ということですよ。

「慣れちゃうとけっこうおいしいわよ」

と王女にパクパク食べられては他の者は文句を言うわけにはいかず、いっしょになってなんにも味のない水草をパクパク黙って食べました。

そうして灰色の魔女の湖を飛び立って六日目、とうとうロヴィークのとなりの国に入りました。ここまで来ればヴァイオレットとナージャには勝手知つたる自分のフィールドです。

日程的にも後三日でじゅうぶんカラベラスの白バラの森に到着できそうなので、そうすると王子の誕生日まで十九日、前日の満月まで十八日と、これもじゅうぶん間に合いそうです。

『なあーんだ、案外楽なものじゃない』

と、みな内心思つてすっかり安心しきっていました。

夕方、いつもよりちょっと頑張つて遅くまで飛んで、小さな森の湖に降り立ちました。

「どうする？ あたいが先に行つてカラベラスに話をつけてこようか？」

ヴァイオレットがオデット王女に訊きました。

オデット王女はちよつと考えて言いました。

「その必要はないでしょう。カラベラス様は私たちが来ることをき

つと承知しているでしょうから」

「そつか。じゃ、いつか」

オデット王女のこの判断は正しかったのですが……

夜になりました。

この日の月は満月から八日目、黒い部分が真ん中から一つ大きくなって、空に登るのは真夜中にだいぶ近くなってからです。

それまでの間、森の中の湖は真っ暗で、夜行性の獣が獲物を狙って忍び寄るには絶好のコンディションでした。

そして、

オデット王女を狙って恐ろしい者らが忍び寄って罾を張り巡らせていました。

それは、獣の皮をかぶったプロの狩人の一団でした。

総勢五名のチームです。

彼らは茂みに潜み、恐るべき忍耐強さで決して自らの存在を白鳥たちに察知させませんでした。

実は、白鳥を捕らえるための罾は白鳥たちが到来する前にすでに仕掛けられていました。

狩人のリーダーはユークリナの森からずっと白鳥たちの後をつけ、一日の行動パターンを観察し、地形と考え合わせて今日ここでついに捕獲作戦を執行することにしたのです。

オデット王女はこの前の湖で下りようかどうしようか迷って結局もう一つ先までいくことに決めたので、その前にここに下りるだろうと予測していたこのリーダーの読みは恐るべきものです。

罾は魚を捕る網のような物です。

投げ網ではなく、広く囲って絞っていくタイプです。

あまり大きな湖ではないので白鳥たちは岸から獣に襲われるのを用心して中央に身を寄せ合って眠っていました。

それもまたリーダーの読み通りです。

そして今、リーダーの虫の鳴き声をまねた笛の合図で湖の四方に

潜んだ仲間たちが水中に黒い手を差し入れ、網を絞る引き綱をゆくり慎重に息を合わせてたぐり寄せ始めました。

湖を大きく囲んだ網がゆっくりゆっくり、じわじわと引き絞られていきます。

リーダーは白鳥を捕らえるために邪魔である天馬ナージャに近寄っていきます。

ナージャは羽を背中に引っ込め、普通の馬の姿で、ふつう馬がそうするように立ったまま眠っています。その首の上でふさふさのたてがみを枕にして火花の精ヴァイオレットが眠りこけています。

身を寄せ合って眠る白鳥たち、中央にオデット王女と三人の子どもたちがくっついて眠り、周りを二ーナたち侍女が囲み、その外を女中たちが仲の良い者どうしくっついて眠り、一番外を四羽の近衛女官が交代で見張りをしながら眠っていました。

見張りの近衛女官がほんのかすかな水の揺らめきを感じて、魚だろうと思いつつ念のため確認に静かに泳いでみると、水中をじわじわ近づいてくる網にしばらくしてようやく気付きました。

「クワツ、クワツ、クワツ！」

近衛女官は全身の羽毛が逆立つ思いで緊急事態を叫びました。

その瞬間湖の中から黒い網の壁がザーツと水を滴らせながら立ち上がり、白鳥たちを取り囲みました。

ヒヒーンとナージャが後足で立ち上がりました。

「な、なんだあ!？」

背中から振り落とされたヴァイオレットが寝ぼけてキョロキョロしているのと頭からすっぽりガラスの瓶をかぶせられ、ふたが閉められました。

「うわあ、なんだなんだ!？」

狩人のリーダーが瓶を顔の前に持ってきて慌てふためくヴァイオレットを見てニヤリと笑いました。

しきりにいなないて暴れるナージャの脚は綱の輪が絞められ、近くの木の幹に縛り付けられています。

網に囲まれた白鳥たちは羽をバタバタ、激しく水しぶきを上げて暴れましたが、白鳥はある程度距離がなくては水面から飛び立てません。天井が丸空きだというのに、まるで檻に入れられたも同然です。

リーダーは懐にヴァイオレットの入った瓶を入れ、隠してあった筏に乗ってゆうゆう白鳥たちの所へ行きました。

「暴れるな、白鳥ども」

野蛮を絵に描いたような声で命令します。

「俺たちの狙いはオデット姫一羽だけだ。大人しく縄につながれりやあ他の奴らは逃がしてやる」

彼らはロツトバルトに雇われていたのです。

白鳥たちはますますガーガー水しぶきを上げて暴れました。

「おまえらがいくら暴れたってこの網は破れん。暴れば暴れるだけ羽を痛めるだけだ」

リーダーの言葉はまったく事実であるようでした。皆を翼を広げて制して一羽が前に出ました。

気品ある美しい白鳥です。

しかしリーダーは騙されません。

「おまえじゃない。おまえだ」

ぴたりとその後ろのオデット王女を指さします。

『いいわよ、ニーナ、相手が悪すぎるようだわ』

申し訳なさそうなニーナを後にオデット王女がリーダーの前に泳いできました。

「よーしよし、大人しくするんだぞ。傷を付けちまったら礼金が減らされちまうんでな」

突然バタバタバタと水の上を駆ける足音がして三羽の白鳥が網の上へ飛び上がりました。

ジェニー、キャシー、ドミニクの三人の子どもたちです。

小さな体の三羽は滑走距離が短くて済み、飛び立つことが出来たのです。

「あつ、ちくしょう！」

リーダーの唯一の誤算でした。

三羽はそれぞれ網の引き綱を持って立っている狩人たちに突っ込んでいきました。

しかし彼らもプロ中のプロです。少しも慌てず腰から鉈を抜いて構えました。

「やめてーっ！」

オデット王女は悲鳴を上げました。

と、そのとき、ようやく月が木の上に出ました。

ギラリと光る恐ろしい鉈を持った腕に、大きな影が降り立ちました。

プロの狩人がギョツと息を飲み、ついで恐ろしさに「ギャー」と悲鳴を上げました。

悲鳴は三方で起こり、残り一人もそれを見て、身をすくませて思わず綱を離しました。

包囲を解かれた白鳥はいっせいにバタバタと飛び立ち、怒りに燃えたオデット王女は飛び上がるとリーダーの顔に蹴りを入れ、湖に突き落としました。

瓶の中で脱出しようと頑張つて火花を出していたヴァイオレットは、熱くなつた瓶が水で急に冷やされてピシリと割れて、ようやく脱出することが出来ました。

「このヤロウ！ おまえ、この白鳥が人間だつて知つててこんなひどいことしやがったな！」

ヴァイオレットに叱られ、周りを怒りに燃える白鳥たちに包囲されて、さしものリーダーも筏にしがみついて小さくなりました。

リーダーを萎縮させたのは白鳥たちばかりではありません。

仲間を襲つた大きな黒い影が地面に立ってこちらをじつと見ています。仲間たちはとくに逃げ去っています。

三人の子どもたちと白鳥たちの危機を救つた黒い影たちの正体は、あの人間の顔をした巨大な鳥たちでした。

狩人のリーダーはヴァイオレットに命令されてナー ज्याの脚の綱を解くと一目散に逃げていきました。

「もう一度来てみる、カラベラスに言いつけておまえなんか案山子に変えてやるからなー！」

ヴァイオレットは言葉といっしょに火の玉を投げつけて、火の玉の方はぜんぜん届きませんでした。言葉の方は十分届いたようでした。

オデット王女は三人の子どもたちをいやというほど抱きしめて首をすり寄せ、

「ああ、無事で良かったわ。お願いだからもう無茶はしないでね」とクドクド言いました。

さて、

岸には人間の大きさの人間の顔をした鳥が六羽、ずらりと並んで立っています。

鳥人間は本当に何羽もいたのです。

ようやく落ち着いたオデット王女は怯える白鳥たちの前に出て鳥人間たちに深々頭を下げました。

「危ないところを助けていただき、心から感謝いたします。ありがとうございます」

六羽の鳥人間たちはみんなそっくりな人間の顔をして、ギョロリと大きな目を見開いて、まったく表情というものを持たないでじつとオデット王女を見下ろしています。

六羽が何もいつてくれないのでオデット王女は困って、あの、と問いかけました。

「あなたがたはロツバルトの仲間ではなかったのですか？ 私たちはてつきりそうとばかり思っていたのですが？」

鳥人間がようやく口を開きました。

「昔はそうだった。だが、今は違う」

風邪をひいて喉を痛めたときのよくな嫌な声です。でも立派に人

間の言葉をしゃべっています。

「では敵同士なんですか？」

「我らはそうは思っていない。だが、ロットバルト様は我らを深く恨んでおいでだろう」

「仲違いしたんですか？」

鳥人間は押し黙りましたが、その沈黙がどういう意味なのか、まるで表情がないので分かりかねます。

「おまえたちはカラベラスの所へ向かっているのか？」

「はい」

また沈黙が続きました。

あんまりなんにも言わないのでオデット王女はだんだんイライラしてきました。

「あなたたちもカラベラス様と何か関係があるんですか？ 今こうしてロットバルトの邪魔をしているということは、もしかしてあなたたちもカラベラス様に何かお願い事があるんですか？」

「願いか・・・」

また黙ってしまいました。

オデット王女はもうイライラしてしょうがありません。

そんなオデット王女の気持ちを探してか、鳥人間が言いました。

「すまぬな。我らはもともと物事を深く考える習性があるのだが、あの事件以来それがさらにひどくなってしまった」

「あの事件？」

鳥人間はそれには答えず言いました。

「おまえたちはカラベラスが願いを聞いてくれると思っているのか？」

「ええ、力を貸してくれると信じています」

「そうか。おまえたちには力を貸すのか」

鳥人間はまた黙りましたが、オデット王女は今度は辛抱強く待ちました。

「もしあの女がおまえたちの願いを聞き届けるのなら、我らの願い

も聞けとあの女に伝えてくれ」

「あなたたちの願いとは？」

「それはあの女が知っている」

「あなたたちは、いったい何者なのです？」

「我らは、」

ギョロリと開いた目に重いまぶたが覆い被さってきて、怒りの表情が生まれました。

「カラベラスに恨みを持つ者ども」

「恨み？」

ロットバルトといい灰色の魔女といい、この鳥人間たちまで、カラベラスにいつたいどのような恨みがあるのでしょうか？

「我らはあの女に騙されて我らが主ロットバルトを裏切り、その報いでこのような呪われた姿になってしまったのだ」

「どういふこと？」

「あの女に聞くがいい」

六羽は大きな羽を広げていっせいにバサバサ飛び上がりました。

真っ黒な木の影から声が降ってきました。

「ゆっくり休むがよい、呪われた王女よ。我らが暗闇よりそなたらを見守つていよう。ここよりあの女の下へたどり着くまで、夜は我らがそなたらを守つてやろう」

ありがたい申し出ですが、王女はそれよりもっと鳥人間たちと話したいと思いました。

「ねえ、下りてきてもう少しお話ししてくれませんか？」

しかし鳥人間の答えはなく、ホーホー、と、やけに大きいフクロウの鳴き声が聞こえてきました。

鳥人間のおかげなのかどうか、その後二日間の旅は何事もなく順調そのもので、二日目の夕方にはとうとうロヴィークの首都カンパニアに到着しました。

カンパニアはもともとロヴィーク第一の商業都市だったので、



十八年前の「イバラの森事件」で首都を移転せざるをえなくなり、ここカンパニアに遷都されたのです。

およそ百年前伝説的な名君ジェンヌ夫人に開かれ、以来優秀な指導者に恵まれて発展してきました。

元市庁舎である王宮を中心とする大きな美しい街です。

オデット王女たちはヴァイオレットの先導で王宮の庭に降り立ちました。

そこには元カンパニアの市長にして現ロヴィークの宰相であるララベル姫が出迎えに来ていました。

「お帰りなさい、ヴァイオレットちゃん、ナージャちゃん」

と、気さくに挨拶するララベル姫は三十半ばのかわいい感じの「婦人で、とてもロヴィーク一優秀な政治家には見えません。

「えーと、それと」

と、ララベル姫は白鳥たちを見て、

「ちょっと変わったお姿ですけど、ユークリナの王女様とお供の方々かしら？」

白鳥たちはなんで分かるのかびっくりしましたが、ヴァイオレットが得意になって解説しました。

「ララベルの守護精霊は鏡の精なんだ。こいつが噂好きでさー、どうせ面白がってあっちこちから情報を集めてララベルに教えてやっただらう？」

な？と聞くと、ララベル姫はオホホと上品に笑いました。

「ヴァイオレットちゃん、ミラに聞かれるわよ」

と、手に持った銀色の手鏡を示しました。ミラというのは鏡の精の名前です。

『聞いてるわよ』

鏡の中に銀色の粒子が渦巻いて女の人の顔になりました。

『ヴァイオレット、妖精の国に戻ってきたらお姉さんたちにあんたの言ってた悪口みーんな話しちゃうわよ』

鏡の精ミラは遠く離れた妖精の国にいますが、こうして鏡を通し

てこちらの世界に現れることが出来るのです。

ヴァイオレットは鏡の顔に向かってアツカンベーとやりました。

「いいよーだ。あたいは妖精の国になって死ぬまで帰らないもん」

ララベル姫が長引きそうな口げんかをまあまあと治めました。

「ミラ、あなたいつたいたいのためのために出てきたの？」

「ハイハイ、分かっているわよー」

顔が引つ込み、銀色の粒子が渦巻きだしました。

ララベル姫は鏡をオデット王女に向けて言いました。

「ご覧のようにこれは魔法の鏡です。この鏡にあなたの姿を映せば私たちとふつうに話せますよ」

オデット王女が銀色の粒子を見つめると、それはサーツと人間のオデット王女の顔になりました。

ガーガーガー

と、白鳥のオデット王女は鳴きましたが、鏡の中の人間のオデット王女は、

『ララベル姫』

と人間の声で話しました。

『わざわざお出迎えくださってありがとうございます。私たちは白バラの森のカラベラス様に会うためにやってまいりました』

「はい。存じております」

『カラベラス様には会えますでしょうか？』

「ええ、みなさんなら問題ないと思いますが、一応念のためオーロラ姫にお口添え願いますでしょうか？ オーロラ姫の願いならあの人はいいて聞き入れますから」

『ええ、それは是非お願いいたします。私もオーロラ姫には是非お会いしたいと思っております』

「はい。ではそういたしましたよ」

ララベル姫は鏡を自分の方に向けました。

「ミラ。聞いての通りよ。ユリアさんにそのように連絡してちょうだい」

ユリアはオーロラ姫の守護精霊リラの精の名前です。ユリアはオーロラ姫の願いですと人間世界にとどまっていたしよに生活しています。

今オーロラ姫とユリアはカンパニアと白バラの森のちょうど中間位置にある第二首都エメルダにいます。

『ハイハイ。了解です』

と、軽い答えが返ってきて、銀色の粒子は消えて元通りふつつの鏡に戻りました。

「それではみなさん、長旅でさぞお疲れでしょう。この庭の池でどろぞろおくるぎください。夕食には、カボチャのパイと水藻のサラダなどいかがでしょう？」

と、ララベル姫はオデット王女に悪戯っぽく笑いました。

## 第23章 大伯爵一家

ペテロブラーグの河川港における大白鳥号到着の歓迎ぶりはまあたいへんなものでした。

到着の合図のドラに続いて三十人もいるラツパ隊が高らかにファンファーレを吹き鳴らしました。

四人の女神の彫刻に支えられた巨大な燈火台が四基並んだ一番大きく立派な船着き場に、ずらりと並んだ赤と金のおしゃれな制服に身を包んだ護衛官に守られて、偉大なるラズベリー大伯爵とご家族が、これまた豪華な金の馬車でお出迎えに来ていらつしやっています。

馬車から大伯爵とご夫人がお出になると、集まった見物の人々は盛大な拍手を送り、

「我らが英雄、ラズベリー大伯爵、バンザイ！」  
とあちこちから声が上がりました。

大白鳥号のお客たちは予想外の大歓迎ぶりにすっかり面食らってどうしようかと途方に暮れてしまいました。

ルピネーも「あちゃー」という顔をして、しょうがないので船長を先に降りさせて港の管理長官と見物人たちと大伯爵に挨拶させて、お客たちに笑顔で手を振らせて順々に下りてもらいました。

そうして最後に自分とクラリスとアレクサンドラ夫人一家と王子たちで下りました。

すると見物人たちの中から今度は

「快男児ルピネー特務外交官、バンザイ！」

と声が上がリ、さらに

「あつ、クラリス様だ、キャー！」

という声も聞かれました。

ルピネーもクラリスもペテロブラーグでは有名人で人気者のようです。

さて、いよいよラズベリー大伯爵と対面です。

大伯爵は奥さんと、綺麗なご婦人と小さい男の子と、背の高い若者と、地味な中年の紳士とごいっしょでした。

ルピネーが先頭で大伯爵に挨拶しました。

「父上。ただいま帰りました」

大伯爵はうむと厳かに頷きました。

ルピネーは母親にも丁寧な挨拶して、伯爵夫人は「はい。よく帰りました」と上品に答えました。

ルピネーはついでいかにもラピスの人らしい彫りの深い線のくつきりした綺麗な婦人とかわいらしい男の子に、ゆるみきつた笑顔で「ただいま」と挨拶しました。

これがルピネーのラピスの奥さんユリアナと十歳になる息子アナトリーです。

ルピネーは背の高い若者には「よっ」と簡単に挨拶し、もう一人、中年の紳士にはきちんと姿勢を正して丁寧な挨拶しました。

ルピネーに続いてクラリスが挨拶をしました。

ラズベリー大伯爵は、

七十五歳。

黒に銀系の刺繍のマントと服を着込み、まだふさふさの髪の毛も真っ黒。さらに内からエネルギーがみなぎっているようにひどいくせつ毛であちこちに飛び跳ねています。同じくくると巻いた鼻ひげをふさふさに生やし、太い眉毛も上にびんびん跳ねています。

眉間にくつきり二本の縦じわが刻み込まれ、間の肉がぼこんと盛り上がっています。薄い皮膚が張りつめた筋肉にぴったり張り付いています。すごいわし鼻で、高い眉の奥の大きな目もまるでわしのように鋭い光を宿しています。

大伯爵の風貌を一言で言い表すなら、

泣く子も黙る恐ろしい顔、  
です。

その恐ろしい顔が、

「伯爵様、奥様、お久しぶりです」

と、クラリスが挨拶したとたん、

「おーおー、クラリスちゃんよ、よく来たのおー」

と、クシヤツと目尻にしわの浮いた優しいおじいちゃんの顔に変わりました。

「ルピネーなんぞどうでもいいわい。わしはクラリスちゃんが来るのが楽しみで楽しみでのー」

伯爵夫人まで、

「ほんとほんと、私たちはクラリスちゃんに会うのだけが楽しみで、ルピネーなんてどーでもいいのよー」

と、すっかりはしゃいでいます。

「父上、母上、それはないでしょう」

ルピネーが情けない顔で抗議しましたが、

「うるさい。熊は黙っておれ」

と却下されました。

ちなみに伯爵夫人は十七歳のルピネーに再会して抱きしめられたとき、あまりに予想と違う成長ぶりに気絶してしまった経験があります。

大伯爵と夫人が放してくれないので、ユリアナ夫人とアナトリー、それに若者と中年紳士には簡単に頭を下げるだけで許してもらいました。

大伯爵と夫人はクラリスさえいれば後はどうでもいいようなので、失礼ながらアレクサンドラ夫人は子どもたちをせっつかれて若者と中年紳士の方に挨拶に行きました。

「兄さん。それに、モデスト様でしょうかしら？ お招きありがとうございます」

それが国民的人気作曲家のピエトロ・コンチャロフスキー氏と、ルピネーのカザリンの奥さんローゼとの子、モデストでした。

クラリスは伯爵夫妻とお話ししながら、ちらちらモデストの方を見ていました。

港での歓迎式は大伯爵のペテロブラーグの別宅までのパレードに引き継がれました。

三台の馬車に、

一台目に大伯爵夫妻とクラリス、それにオデーレが乗り、

二台目にルピネーとユリアナ、アナトリーの親子にジークフリー

ト王子がおじゃまし、

三台目にピエトロ氏とアレクサンドラ夫人と子どもたち、それに何故か夫人とすっかり仲の良くなったオデーレが乗りました。

このパレードもたいへんな盛り上がり方でしたが、港ではまるつきりその存在を認知されていなかった、音楽はとて有名でも、見た目がどうしようもなくじみーな国民的大作曲家までいっしょだといのがようやく知られて、人々はますます大歓迎で盛り上がりました。

大伯爵の別宅は大きなお屋敷ばかりが並ぶ高級住宅街にありましたが、その中でもとりわけ広い敷地を誇り、見事に手入れされた広い庭に、いったいなん室あるのか大きなガラス窓のずらりと並ぶ王宮のような巨大で豪華なお屋敷でした。

別宅がこれなのですから本拠地ラズベリーアールの本宅はどれほどすごいのかと思いきや、

「たいしたことないわよ。あつちは山城で、ふつうの家だから」

とのクラリスの解説で、大伯爵自身、

「わしはこの街は苦手じゃ。無駄にでかすぎる」

と、あまりお気に召していないようです。

「だがまあ、これだけ客人がおれば少しは落ち着くか」

と、王子一行やアレクサンドラ夫人一家に好きな部屋を好きに使ってくれるように言いました。

ふだんはほとんどの部屋が使われていません。

伯爵夫妻はとにかくクラリスが大のお気に入りようで、召し使

いに命じてお茶とお菓子を出させて、ほとんどそこしか使わない居間にすっかり腰を落ち着けて、とことんお話しするつもりでいます。ルピネー親子もいつも使う部屋が決まっています、久しぶりの夫婦親子対面で、嬉しいひとときを過ごし、

王子一行とピエトロ氏、アレクサンドラ夫人一家はモデストがお屋敷を案内しました。

お屋敷には大ホールが一つ、中ホールが三つ、小ホールが十もあって、とりわけ大ホールは壁や柱を黄金の彫刻が埋め尽くし、絢爛豪華極まりないものでした。

「ここで年一回、夏の夜に大舞踏大会が開かれるんだ。ペテロブラーグ中から貴族が集まって、社交ダンスの華を咲かせるんだね。この屋敷はそのためにあるようなものだな」

オデーレやダヴィドフ家のお姉さんたちはその豪華な夏の夜を思っって目をキラキラさせてうっとりしました。

モデストは一行を何十もある客室に案内しましたが、そのどれもが豪華なもので、見ていくうちに頭がクラクラしてきてしまいました。

モデストは笑って、

「こつちは本当にお客さんのための部屋。僕たち家族や親しい友人たちのための部屋は別にあるんだよ」

そつちの方はね、とモデストは指を立てて楽しそうに、

「お偉い貴族様でも入れてもらえないんだよ。もちろん皆さんにはそちらの方を使ってもらいたいと思っっているんですがね」

と、屋敷の裏手の別棟に案内しました。

そちらの方の部屋は小さな家がいくつか入ったような感じで、ドアを開けると小さな玄関があり、中はそれほど広くない部屋がいくつありました。部屋の造りもお客様用の部屋がごてごて派手な装飾が施されていたのに対し、骨組みの木が剥き出しになっていたりして、実に質素なものでした。でもよく見ると立派な檜の木の家具が揃っっていて、本当は丁寧にお金をかけて作られています。



「こちらでもあちらでも、好きな方をどうぞ」

ピエトロ氏はすでにひと月上滞在して、もちろんこちらの落ち着いた方の部屋を借りていました。アレクサンドラ夫人一家はその隣の二部屋を借りて、実際は子どもたちが入れ替わり立ち替わり大好きな伯父の部屋に遊びに行くのでしよう。

オデーレもその上の階の部屋を借りました。

ちなみにお屋敷のこの部分は四階建てで、一階に食堂と大きな居間があり、二階から四階までが客室になっています。

ピエトロ氏とアレクサンドラ夫人一家が二階、オデーレが三階です。

ちなみに、

「僕はここなんだよ」

と、モデストの部屋はオデーレの隣でした。

二階はいつぱいになってしまいました。三階と四階はまだ残っています。

オデーレはどの部屋にしようか迷っています。

実はオデーレはせっかくなのだから豪華な貴族のお客さん用の部屋に泊まりたいと思っているのですが・

オデーレはジークフリート王子の様子をうかがいます。

王子も迷っていました。

オデーレのとなりの部屋がもう一つ空いています。

王子もそれとなくオデーレの様子をうかがいました。

ふと、二人の目が合って、二人とも慌てて目を逸らしました。

オデーレがモデストに訊きました。

「クラリスはどうするのかしら？」

「クラリスちゃんはお祖父様お祖母様のとなりの部屋だろうねえ」  
まったく災難なことだなあとモデストは笑いました。

「あたしは・・・」

オデーレが王子の視線を気にして伏し目がちに言いました。

「クラリスといっしょがいいんだけどなあ・・・」

うーん、どうだろう？とモデストは困った顔をしました。

「そうするとしょっちゅうお祖父様と顔を合わせるようになると思  
うよ。怖いだろう？ あの顔」

たしかにそう思うとあきらめた方がよさそうで、オデーレはしゅ  
んとなりました。

王子との気まずい雰囲気もそうですが、まるで馴染みのない人間  
関係の中に放り込まれてすっかり気持ちが悪く委縮してしまっているよ  
うです。

「わたしの所に来なさいよ」

と言ったのはオデーレです。

オデーレはびっくりしました。

「なんであんなの所なんかに・・・」

と食ってかかったものの、オデーレは船にいたときはまた別人  
のような、心配を内に含んだまじめな顔をしていました。

「寝室が二つあったからわたしと顔を合わせる必要もないし、それ  
でも嫌なら、となりの部屋にすればいいわ」

オデーレはオデーレが何かまた意地悪なことを企んでいるのでは  
ないかと疑いましたが、オデーレはちよつと決まり悪そうな誠実な  
目をしていて、とても何か企んでいるようには思えません。

「じゃあ・・・、そうするわ・・・」

「よし。あとは王子様だけだね」

と、モデストが元気に王子を促しました。

「隣が空いてるけど、そこにするかい？」

「いえ、」

王子は考えながら言いました。

「僕は上を使わせてもらいます。いろいろ落ち着いて考えたいこと  
があるので」

こうして各自泊まる部屋が決まったところで本館の食堂でみんな  
ですっかり遅くなってしまった夕食を取るようになりました。

食堂もまたいくつもありましたが、人数が多いのでいつも家族で使っているところではなく、特別にお客様用の食堂を使いました。

これまた金ぴかで落ち着かないったらない部屋ですが、ぐるりと輪にテーブルがつながっていて、大人十一人、子ども七人、赤ちゃん一人の総勢十九人、赤ちゃんはアレクサンドラ夫人の隣で揺りかごで眠り、十八人がゆったり席についてぐるりと一周してちょうどよく収まりました。

「みな長旅で疲れたことだろう。ゆっくり食べてゆっくり休むといい」

と上機嫌の伯爵が挨拶して夕食会となりました。

これだけ豪華な食堂でさぞかし豪華な食事が出されるかと思いきや、牛のステーキはともかく、あとはポテトの盛り合わせとコロックと野菜スープで、田舎の旅館みたいなメニューでした。

でも味はとても美味しく、みんな物足りない思いをしながらもパクパク食が進みました。

「父上、もうちょっとこう、気の利いたご馳走は用意できないものですか？」

ルピネーが代表してクレームを付けると、

「おろか者め」

と伯爵は叱りました。

「おまえのような熊といっしょにするな。他の者は船旅で胃袋が落ち着いておらんだろうが」

「父上、わたしの船はそんなに揺れやしませんよ」

とルピネーは言いますが、他の者たちはなるほど道理だといこの食事をありがたく思いました。

食事の後は居間に移ってココアを飲みながらくつろぎましたが、ピエトロ氏とアレクサンドラ夫人一家は子どもたちが眠そうにしていますし、早く伯父さんと遊びたがっていますので早々にご挨拶して自分たちの部屋に戻りました。

ルピネーは改めて王子を伯爵に紹介してやりました。伯爵も一国

の王子を放っておく失礼も出来ないのでしょうかがなく王子と国の様子など話し出しました。伯爵夫人の方にはオデールを紹介しました。オデールの方は王子と違って頭の回転が早く、話もうまく、船旅の様子をおもしろおかしく話して聞かせて夫人を喜ばせました。

オデールは部屋でお上品なふつうのドレスに着替えています。

こうしてルピネーの配慮でようやく解放されたクラリスは、やっと、モデスト兄さんと話をする事が出来ました。

「クラリスちゃん、お疲れさま。

いやあ、見るたびに綺麗になっていくねえ。そのドレスもとってもかわいいよ」

クラリスはポーツと頬が赤くなりました。

モデストは

十九歳、

とっても素敵な人です。

ルピネーのような極端な大男ではありませんがとても背が高く、スマートです。かといってひよる長いという感じではなく、顎や肩などかなりがっしりした骨格をしています。それがとても柔らかで優雅な印象を与えるのはキラキラ輝く綺麗な青い瞳のおかげでしょう。

この目はお祖母様の伯爵夫人とよく似ています。

肌は浅黒く髪は真っ黒で、これはお母さんのローゼと、それから髪の毛の大きなウェーブはお祖父様の伯爵の血を受け継いでのことでしょう。

父親のルピネーがああの通りですし、母親のローゼも漁師の娘ですが、息子モデストはとても都会的に洗練された印象です。

今流行のボタンの多いコート風のスーツをごく自然に着こなしています。

十五歳からモスクリンに留学し、今年で四年になります。

この風貌でこの血筋ですからさぞかし女の子にもてることでしょう。

「ナー ज्याにまたがってあちこちいろいろ活躍のようだね。ユリアン母さんの手紙で拝見しているよ」

伯爵のラズベリーアールで暮らすユリアンの下には伯爵、ルピネーから、それとローゼの手紙でいろいろ情報が集まってきました。

「いやだわ、まるでじゃじゃ馬みたいだわ」

クラリスは恥ずかしさでますます顔が赤くなります。

モデストはハツハツと笑って、

「そんなことないよ。今日のクラリスちゃんは今までで一番かわいらしいよ」

「そ、そうかしら？」

恥ずかしさと嬉しさで思わず顔がにやけてきます。

大きなリボンのピンクのお人形ドレス。

ガルボリースでオデーレが選んでくれたドレスです。

ニヤニヤしながら、はつと、そういえばオデーレはと捜してみると、ルピネーが自分の家族に紹介してユリアンとお話しています。相変わらず気が利く男です。

安心してモデストとの会話に戻って、

「バレエをプロデュースしているんですって？　すごいわね！」

「うん、まあね。まあ、たまたま偶然が重なってね。」

大学の関係で王室劇場の総裁とお近づきになってね、僕が芸術を経済的に成り立たせることに興味を持っていると話したら、じゃあ何かやってみないかと言うことになってね。これもお祖父様と父さんの名前のおかげだね」

「でも成功したんですよ？」

「うーん、どうなのかなあ・・・」

モデストはちょっと困ったような微妙な表情をしました。

「公演は残すところあと三日、お客の入りは悪くないんだけどねえ・・・」

「もちろん見に来てくれるんだろう？」

「もちろんよ！」

クラリスは力を込めて言いました。

「もう明日にもさっそく！」

いやいや、とモデストは笑ってクラリスを押しとどめました。

「そうだな、あさつてにしようよ。長旅の後だろう？　ずーっと座ってたら眠くなっちゃうよ。なにしろ二時間もあるから」

「そんなにあるの？」

せいぜい一時間程度のものだろうと思っていました。

「明日は僕がペテロブラーグの街を案内するよ。いつもお祖父様といつしよじゃゆっくり見物なんてしたことないだろう？」

「ええ！」

モデスト兄さんとデートと思うともう浮き浮きして嬉しくて仕方ありません。

クラリスもあんまりオデーレのことをとやかく言えないようです。そういえばバレエといえは肝心のことを訊かなくてはならないのですが……

「ま、いつか」

とクラリスは思いました。

実際バレエを見てからの方がいいでしょう。

夕食後の団らんは、アナトリーが大あくびをしてとろとろ半分眠りかけてきたのでルピネー一家が部屋に引き上げることにして、それを潮に解散することになりました。

オデーレはオデーレと連れだって部屋に戻りました。

オデーレは、さっきは心細さでついオデーレとの同室を承知したのですが、今こうしていつしよに歩いているとどうにも気まずい思いがして、すっかり後悔してしまっていました。

でもオデーレの方は何とも思っていないようで、

「ユリアナさんで本当に綺麗な人ね。どんな人だったの？」

なんて親しく話してきます。

部屋に着くとオデーレが言いました。

「ねえ、お風呂に行かない？ もう何日も入ってないでしょう？  
わたしはもう気持ち悪くてしょうがないわ」

お風呂は一階にサウナ風呂があります。  
もちろん男女別です。

「あたしは、いいわ」

オデーレは遠慮しました。

「あら、いいの？ きれいにしなくちゃ王子様に嫌われちゃうよ」  
オデーレはムツとしましたが、オデーレは屈託なく笑っています。  
どうにも船の時とは態度が違いすぎて、まったく謎な女です。

「さ、行きましょう」

オデーレはオデーレの腕を取って強引に連れ出しました。

もわーつと熱い温室の中でオデーレとオデーレは体にタオルを巻  
いてすのこの長椅子に座っています。

オデーレは気になってついチラチラオデーレのタオルを巻いた胸  
元に視線をやっています。

さつき服を脱ぐときに見た裸身は引き締まった、彫刻の狩りの女  
神みたいに美しいものでした。

でも男の人はもうちよつとお肉がついてふつくら柔らかな方がい  
いんじゃないかしら？ なんて思ってみたりしましたが、我ながら  
明らかに負け惜しみです。

「水を浴びてこよう」と

オデーレが立ち上がり、タオルを外しました。

桃色に火照ってしっとり汗に塗れた肌が同性の目から見てもドキ  
リとするほど魅力的です。

オデーレは扉を開けて石畳の部屋に出ると瓶から冷たい水を汲ん  
で頭からザバツとかぶりしました。

頭をブルブル振って水しぶきを飛ばし、

「あー、気持ちいい！」

と声を上げ、そのまま手桶で水を汲んで戻ってきました。

「さあ、熱くするわよ」

サウナ室は角に釜があり、その上にめいっばい熱された石が乗っています。オデールがその焼け石に手桶の水をぶちまけるとジュウツとものすごい水蒸気が上がって部屋がカーツと熱くなりました。オデールは思わず「熱いっ！」と叫んで水蒸気から逃げました。

オデールは笑って、

「ほら、あなたも水を浴びてらっしゃい」

と、オデールの体からタオルをはぎ取りました。

オデールはたまらず外に逃げ出し、言われたとおりザバーツと頭から水をかぶりました。

「あー、気持ちいいっ！」

オデールと同じことを言って、ふとガラス窓からサウナ室を見るとオデールがおかしそうに笑っていました。

今までならムツと怒るところですが、何故かオデールのその笑顔にはまるで腹が立ちませんでした。

腹が立たないどころか、自分でも笑いたくなくなってしまっような、不思議と幸せな気持ちになりました。

オデールはそんな自分の気持ちが理解できません。

あんなに腹が立って、大嫌いで、そして、怖くて仕方なかった相手なのに、何故でしょう？

オデールはおずおずとサウナ室に戻ってきました。

「いらっしゃい。垢を落としてあげるわ」

オデールは新しい垢擦りタオルを用意すると軽く優しくオデールの体を撫でていきました。

「ほーら、ご覧なさい」

タオルにこすられると恥ずかしいくらいポロポロ垢が浮き出てきました。

オデールは真っ赤になりましたが、オデールはまるで嫌そうな様子も見せず、むしろ楽しそうにオデールの体の隅々まできれいに撫でていきました。



「いいわよ。もう一度水で流してらっしゃい」

オデーレはとなりの部屋でもう一度水で体を流しましたが、さっぱりして、まるで生まれ変わったような、体の中まできれいになったような感じがしました。

サウナ室に戻るとオデーレが自分のタオルで体をこすっています。

「やってあげるわ」

「そう？　お願い」

オデーレはタオルを受け取るとオデーレの体を自分がしてもらったようにやさしく撫でていきました。

オデーレの体からもオデーレに負けないくらいポロポロ垢がこぼれてきました。

「あなただつてひどいじゃない」

「そうね」

オデーレは屈託なく笑い、オデーレも釣られてつい笑ってしまいました。

「ありがとう。流してくるわ」

今度はオデーレがとなりに出て体を水で流しました。

油の灯火の下、白い肌が黄金に輝くようで、ますます魅力的に美しくなりました。

オデーレが戻ってくると、オデーレが真っ裸のまま、真剣に思い詰めたような顔で立っていました。

オデーレも笑いを引っ込めてまじめな顔で向き合いました。

オデーレが問いました。

「あなた、いったいなんなの？」

「なにって？」

「あたしをからかって、バカにしているんじゃないの？」

「そうよ。あなたをバカにしているからかっているのよ」

「なんなのよ？」

「あなたがそんなバカなことをしているからよ」

「・・・・・・・・・・あたしが、

なにバカなことをしているって言うのよ?」

「わたし、綺麗でしょ?」

「話をはぐらかさないで」

「わたしは、あなたよりずっと綺麗だわ。少なくとも今はね。それは、わたしがあなたよりずっと自分のことを知っているから。わたしは他人の名前を騙っても自分は偽らないわ」

「なにが言いたいのよ?」

「ああ、一つ、嘘をついていたわ。

わたしね、ジークフリート王子のこと、ゼーんぜん好きじゃないの」

「・・・・・・・・」

「安心した?」

「だから何故そんなことするのよ?」

「だから、あなたがそんなバカなことしているから、腹が立ったのよ。そんなことして、ジークフリート王子の気を引いて、それで、嬉しい?」

「だって・・・あたしはただ・・・王子様といっしょにいたかっただけなんだもの・・・・・・・・」

「今は、後悔しているのね?」

「・・・・・・・・」

「わたしが現れたから?」

「あなたは、・・・・いつたい誰なの?」

「あなた、ほんとのバカ?」

「なんですって!」

オデールは笑いました。

「同じ顔の人間がもう一人現れて、それが魔法で顔を変えているんじゃないかったら、答えは決まっているでしょう?」

オデールは信じられないと言うように目を大きく見開きました。

「それじゃあ、あなたは・・・・あたしの・・・」

「しっ！」

オデールは人差し指を立てて口に当てました。

「どこかに魔女の目や耳があるとも分からないわ。

クラリスはあなたにだいぶ同情的なようだけれど、彼女はオデックト姫のためにここに居るのよ、信用しきつては駄目。彼女は、結局はわたしたちの敵になるわ」

オデールは怖い目でオデールに念を押すように言いましたが、ふと、目の力を抜くと、

「でも、噂ほど大した魔女ではないわね。ほんんと、拍子抜けだわでも、やっぱりあのカラベラスの娘ですものね、油断は禁物だわ」

と、自分に言い聞かせるように言いました。

オデールはもはや目をウルウルさせて笑いたいような泣きたいような、何ともかわいらしい顔でじっとオデールを見つめています。

「まったく、なんて顔してるのよ」

オデールが手を伸ばすと、オデールは反射的にビクリと体を引きました。

オデールはオデールの頬に手を当て、反対の頬に優しく口づけしました。

オデールは感極まったようにオデールを抱きしめ、オデールもオデールの背を抱き、頭を撫でてやりました。

「ねえ、教えて、お母様って、どんな人？・・・」

「そうね、あなたにはちよっと言いづらいわね。ま、いいじゃない、部屋に帰ってからゆっくり話しましょう。」

「そうだ」

オデールはオデールの肩に手を置いて顔を向き合わせると真剣に、でも優しい目で言いました。

「王子はあなたが大好きよ。ただ、自分の本当の気持ちに気付いてないだけ。だから、自信を持ちなさい」

「はい・・・」

オデールは嬉しくてポロポロ涙を流しました。

オデールは優しく微笑みました。

「まったく、あの王子様もとんだ大バカね。あなた、あんなお坊ちやんのどこがいいの？」

「大バカは、言い過ぎよ」

オデールはオデールを睨んで、笑いました。

オデールは二人のタオルを取ると一枚をオデールに渡しました。

「さ、そろそろ帰りましょう。ゆっくりお話しするのもいいけれど、やっぱり早く寝なくちゃね。明日からは、きっと楽しいわよ」

## 第24章 大都会

朝起きると、普通の人にとってはとっても珍しいお客さんが来ていました。

「ハイ、クラリス。おひさしぶりー」

サファイアの精です。

王子とオデーレは初めて見る妖精に好奇心丸出しでしげしげ見入りました。

サファイアの精はその名の通り宝石のサファイアの妖精で、青い髪の毛、青い瞳、青いドレスを着て、青い羽根を背中に生やした、人の肩にちょこんと乗っかるくらいの大きさの若い女性の姿をしています。体からサファイアの青い光をぼんやり発していて、宙を飛ぶときや魔法を使うときはその光が強くなります。

サファイアの精はじろじろ見ている王子とオデーレに、

「あらー、妖精は初めて？ ほーら、綺麗でしょう？」

と、周りをひらひら飛んで青い光の粉を撒いてやりました。

ダヴィドフ家の子どもたちもサファイアの精を見つけると歓声を上げて駆けてきました。

サファイアの精は子どもたちにもたつぷり光の粉をサービスしてやりました。

「サファイアさん」

落ち着くの見計らってクラリスが呼びかけました。

「昨日はいなかったの？ てっきりアナトリーについてきているんだと思ってただけだ」

サファイアの精はもともとルピネーの守護精霊で、今は息子アナトリーの遊び相手になっているようです。

「それなのよ！」

サファイアの精はプンプン怒りだしました。

「まったくこれだからペテロブラーグなんて嫌いなものよ！」

アナトリーとお母さんのユリアナは伯爵夫人といっしょに二週間ほど前からこちらに来ていました。伯爵はその前から来ています。サファイアの精はアナトリーたちといっしょに来ていて、昨夜も大白鳥号の出迎えにいっしょに出かけたのですが、港に着いてから船の到着までしばらく時間があつたのでちよつと馬車の外に遊びに出たのでした。

「そしたらさー」

港はたくさんの大きな燈火台に灯が入ってとても綺麗で、おまけに大勢の見物客が詰めかけていて、楽しいことが大好きなサファイアの精はすっかり嬉しくなつてあちこち飛び回つて見物しました。

そこで、運悪く妖精の天敵に出会つてしまったのでした。

「神父よ」

神父は悪魔払いの呪文を知っています。サファイアの精はその呪文を唱えられて体が麻痺し、教会に連行されて、裁判にかけられ、有罪で懲罰房に閉じこめられ、苦勞してようやく今朝抜け出してきたのでした。

「妖精さん、悪いことしたの？」

子どもたちが心配そうに訊きました。

「なーんにもしてないわよおっ！」

サファイアの精は悔しさでじたばた光の粉を撒き散らかしました。「妖精はこの世にいちゃいけないんですって！ まったく、あの石頭の大馬鹿者どもめーっ！」

モデストとクラリスは見つめ合つて困つたものだと思つてすくめました。

「どういうこと？」

オデーレが訊きました。

モデストがため息まじりに言いました。

「簡単に言つとね、神様は一人だけで、神秘を行うことが出来るのは神様だけで、妖精みたいな訳の分からないものがこの世に存在す

ることは許されないうことさ」

サファイアの精は「訳の分からないものって何よー！」と怒りました。

「わたしもさんざんお説教されたもの」

とクラリスもウンザリしたように言いましたが、実際お説教なんていう生やさしいものではありませんでした。

クラリスは自ら魔女を名乗っていますから、もしオーロラ姫のお身内でなかったら火あぶりにされていたかもしれません。

「ま、そんな嫌な話はやめましょう」

クラリスは気を取り直すように明るく言いました。

何しろ今日は大好きなモデスト兄さんとデートですから。

サファイアの精は彼女を心配していたアナトリーと再会し、ルピネーとも久しぶりの挨拶をし、昨夜と同じように輪のテールブルでみんな朝食を取りましたが、その席上、クラリスのデート計画がだんだん怪しくなってきました。

ピエトロ・コンチャロフスキー氏とアレクサンドラ夫人、それと四人のお姉さんたちはさっそくバレエ『白鳥の湖』を見に行くことにしています。二人の男の子はルピネー一家が、赤ちゃんは伯爵夫人が預かることになりました。ルピネー一家は大きな迷路のある遊技公園に遊びに行くことにし、サファイアの精も子どもたちに懇願されてつき合うことにしました。伯爵は残念ながらお仕事でお出かけです。

オデルはバレエをいつしよに見に行くことにしました。船の中でアレクサンドラ夫人とたいへん仲が良くなり、バレエにもとても興味があるようです。

というわけで、残るは王子とオデルレなのですが、

ペテロブラーグどころか外国なんて初めてという二人ですから、放っておくわけにもいきません。お屋敷でお留守番というのめかわいそうですし、結局選択肢は限られてきます。

「それじゃあ僕たちと市街見物にいきますか？」

とモデストが言ったとき、クラリスは実に暗澹たる気持ちになって、どちらか遠慮してくれないかなとはかない期待をもって二人を見ましたが、

「それではお言葉に甘えて」

と王子が答え、クラリスの甘い夢ははかなく消え去ったのでした。

バレエの公演はお昼からと夜の二回です。

ピエトロ一行は昼からの回を見に行くことにして、それまではお屋敷でゆっくりすることにしました。

席はボックス席を全公演モデストが予約しているので、席の心配はいりません。伯爵は一回、夫人とユリアナとアナトリーは二回、すでに見ています。

モデストは知人を招待して何度も見ているようですが、どういった知人たちを招待しているのか、クラリスは気になってしょうがありませんでした。

ルピネー夫妻と元気な子どもたちは朝食を取り終わると間もなく出かけていきました。

クラリスたち合同デート組は十時を半分近く回ってようやく馬車で出かけました。

もっと早く出たかったです、オデーレがドレス選びとお化粧に手間取ったのです。

「おまたせー」

と本当にずいぶん待たせて出てきたオデーレは赤と黒のかっちりまとまったドレスに短いマントをかけ、寒いこの地らしいフワフワの毛皮の帽子をかぶり、おしゃれな日傘を持っていました。

これまでとはずいぶん違った大人な感じの装いですが、真っ赤な口紅が印象的な顔はいつも通りの子どもっぽい笑顔で、それがとてもかわいらしく魅力的に見えます。

そういえばオデーレがこういう輝くような笑顔を見せるのは久し



ぶりです。

ドレス選びはオデールが手伝っていたようですが、昨日一晩でなんだかすっかり仲良くなってしまったようです。

「どうかしら？」

オデールは王子に向かって、右に左に、クルクル回って、ポーズをつけて自分を見せました。

「う、うん。とっても綺麗だ」

王子もなんだか初々しく頬を赤らめて眩しそうな目をしました。

「嬉しいっ」

オデールは王子の腕を取って得意の甘え方をしましたが、それも本当に嬉しそうで、クラリスは嫌みな感じがまるでしませんでした。王子の方もずいぶん久しぶりな感じがして、最初戸惑いもありましたが、オデールに嬉しそうな笑顔を向けられると自然と顔がほころんで、なんとなく、うん、と頷きました。

思わずほっとして嬉しくなってしまったクラリスですが、ホールの入りに薄笑いを浮かべてこちらを見ているオデールに気付くと複雑な気分になりました。

クラリスはオデールの方へ歩いていくと尋ねました。

「いったいどんな魔法を使ったの？」

昨夜オデールとオデールが同じ部屋に泊まることにしたと知ったクラリスはとても心配したのです。

「あなたじゃあるまいし」

オデールは小馬鹿にしたような笑いを浮かべて言いました。

「わたしもあの子がかわいくなっちゃってね、応援してあげることにしたの。でも、わたしはそれでかまわないけれど、あなたはいいの？ あの子と王子がこれ以上仲良くなっちゃうと困ることになるんじゃない？」

「そんなこと、分かってるけど・・・」

「あなた、オデット姫を裏切っていいの？」

オデールは相変わらず意地悪に面白がってるようですが、心なし

その言葉には非難が含まれているように聞こえます。

王子もオデールに気付きました。

王子はオデールとくっついていて、ことに気まずい思いがしましたが、オデールはまるつきり気にしていないようにニコニコ笑いました。

「まあ、とつてもお似合いよ、お二人さん」

強烈でどろどろ鬼気迫る嫌みのはずが、オデールはまるでくつたぐがなく、王子は内心あれ？と思って、却ってざわざわ胸騒ぎがしました。

「まあ、お似合いだなんて、オデールさんったら、なあーんて正直なんでしょー！」

と、頬を赤らめてかわいいこぶりっこするオデールの反応も、考えようによってはかなり不気味です。

馬車はオープンカーです。

幸い天気は晴れですが、北の空らしく青空もどこか灰色がかった空気はぴりぴり冷たいです。

夜の街も窓の燈火が無数に浮いて、幻想的で美しかったです、こうして昼の光で全容を見るとひたすら圧倒される思いがします。

クラリスは新婚旅行でこの地を訪れたオーロラ姫からペテロブラーグは本当にまるで巨人の国のような感じと興奮して聞かされたことがありますが、クラリスもまさにそう思いました。

大きな道路の両側をはるか高い建物がまるで力カツサスの絶壁のように、と言うとさすがに大げさですが、そう言いたくなるくらいの迫力でのしかかってくるようにそびえています。

それがまっすぐな道のはるか先までえんえんと続いているのです。お屋敷街は広い庭があつたのでかえってゆったりとした感じがありました。街の中心地はとにかく建物だけがびっしり林立し、空を狭めています。

しかも、その建物が一つ一つやたらとでかいのです。

巨人の国というのは建物の大きさだけのことではなく、入り口のドアやガラス窓が、普通の人間のサイズの倍はあるのです。

どう見ても無駄です。

入り口のドアなどドアが大きすぎてドアにもう一つドアがあるようなものをいくつも見かけました。

大きさはかりでなく造りも豪華です。

それぞれに凝った装飾がなされ、ふつう王の城にあるような一流の彫刻が当たり前のようにごろごろありました。

壁の色もきれいで、石の柱に囲まれて、つるつるに磨き上げられた大きな一枚物の大理石や、淡いピンクや青や緑など、まるでおとぎの国のような美しさ、楽しさです。

初めて見る王子とオデーレは上を向いて口がずつつと開きっぱなしでした。

「さすが世界一の大都市だなあ・・・」

圧倒されてひたすら感心するしかありません。

「街自体が芸術作品だよね」

見慣れているモデストは半ば呆れて笑いました。

建物の数もすごいです、道を行く馬車の数や歩く人々の数もまためまいがするくらい多くいます。

道行く人々は皆とてもおしゃれで、高級そうな服を着ています。

港町ガルボリスもなかなかおしゃれな人々が多くいましたが、どこかそれとは様子が違って、格が一つ二つ上の印象を持ちます。

ガルボリスはしよせん庶民の街で、ペテロブラーグは紛れもなく上流貴族の街でした。

「でも、上流貴族って、そんなにいるの？」

オデーレのもっともな疑問です。

モデストが答えます。

「そうだね、たしかに多いよ。広いラピスのあちこちからこの街に集まってきているからね。でも、もちろんこの人たち全てが貴族というわけじゃない。商人や使用人が圧倒的に多いし、貴族もどきと

「いう人々がいる」

「貴族もどき？　なんです、それ？」

「貴族を気取ったちよつとした金持ちや、金持ちを装って商売に利用している人たちさ。この街には上流貴族を頂点にありとあらゆる種類の人々が集まっているんだ。僕も最初は分からなかったけれど、目が肥えてくれば君たちもなんとなく見分けがつくようになってくるよ」

王子とオデーレは今度は地上を一生懸命見だしましたが、モデストの言う人の種類はまるで見分けられませんでした。

ところで、では街の人々から馬車に乗っているこの四人はどう見られているのでしょうか？

王子などは明らかに地方からのお上りさんと軽く見られていることでしょう。リーダー格は当然モデストで、クラリスはその妹。問題はオデーレですが、これはおしゃれで一目置かれる存在感です。

地方から友人を招いてやった貴族のお坊ちゃんや、友人にくつついてやってきた恋人を、こちら風に着飾らせていい気分させておいて、友人から奪い取ってやろうと狙っている、

そんな風にこの寒い都会の空気に染まった人々は思っているかもしれない。

「人が街を作って、街が人を作る」

ふとモデストが呟くように言いました。

その横顔が、クラリスにはちよつとも悲しく感じられました。

ちなみに、クラリスの服装ですが、伯爵夫人が用意してくれた白に黄色の線の入ったかわいらしいドレスに、毛皮の襟巻きをしています。

クラリスは有名人ですから大騒ぎになりそうなものですが、そうならないのは、クラリスが変装しているからです。

クルクルの軽い茶の髪を魔法でまっすぐな黒髪に変えています。

こうするとモデストと本当の兄妹のように見えます。

レストランでお昼を取り、午後から王宮の麓に広がる文化エリア

に向かいました。

今度は町中とは思えないだっ広い空間が開けています。

オデルが行きたいと言っていた噴水の公園を歩きましたが、ずーっとまっすぐに石の階段の切られた水路が続き、その水路を大小の噴水が何百と白い水を噴き上げています。

天気はよいのですが、正直、かなり寒いです。

噴水の脇の石畳の道もぼつぼつ人が歩いていますが、多くは緑の土手の上の道を遠くから眺めながら歩いています。

オデルも四分の一くらい歩いてこの王子とのロマンチックな散歩をあきらめました。

公園の中に喫茶店があります。

「アイスクリームがこの名物だよ」

とモデストに勧められて、王子とオデルはブルブル首を振りましたが、店の中は暖かく、紅茶といっしょに注文して交互に食べるとなんとも贅沢な甘みが楽しめて、二人ともすっかり満足しました。休憩の後、馬車に戻り、もう一つ有名な豪華な宮殿の美術館に向かいました。

この美術館は通常予約制で、しかも身分の確かな人々しか入れないのですが、モデストのおかげで入場することが出来ました。

クラリスも王子もオデルも、ちょっと嫌な気分を味わいました。

しかし收藏される美術品は、絵画、彫刻、装飾品、歴史的な遺物と、それはそれは見事なものでした。

品物は世界中から集められていて、ラピス王朝の財力のすごさを改めて確認させられました。

「あら？」

クラリスが黄金の装飾品の部屋で一つの作品の前で声を上げました。

黄金の腕輪です。

細かい彫刻がなされて、人間業とは思えない超一流品です。

「これ、お父さんの作品だわ」

作者名はロヴィークの有名な工房の名前になっていますが、

「これ、絶対お父さんのよ」

とクラリスは譲りませんでした。

クラリスの父アイリスはもともと彫金師で、クラリスが幼い頃には母親と三人で作品を町に売りに行ったものです。

これはその時売っていた物の中に見覚えがありました。

「本当かい？　すごいなあ・・・」

王子は疑いながらも感心しました。

オデーレは目を輝かせています。

「ねえねえ、それじゃあねえ」

口許に笑みが浮かんでくるのを抑えられないように、

「あたしと王子様のお揃いの指輪、あなたのお父さんに作ってもらえないかしら？」

お揃いの指輪というと、婚約指輪か結婚指輪のつもりでしょう。

王子はと見ると、いつの間にもやらまたオデーレと腕を組んで、顔を赤くして何やら想像しています。

「ま、いいけどねえ・・・」

と、言いながら、わたしはモデスト兄さんと、なんて想像して、クラリスも頬を赤くしました。

「約束よ。もう絶対よ！」

念を押しながら、オデーレはもう嬉しくて嬉しくてたまらないという顔をしています。

絵画の肖像画の部屋で、クラリスがまた「あら？」と声を上げました。

若い美しい娘の肖像画です。

「今度はなんだい？　もしかして今度は君のお母さんの肖像画かい？」

と、王子はからかいましたが、

「うん。そう。お母さん」

と、クラリスは答えました。

「ええーっ!？」

と、三人ともびっくりしました。

腰から上の、椅子に腰掛けているのをちょっと斜めから見て、顔がこちらを見て優しく美しく微笑む、黄金の髪のととてもとても綺麗な娘です。

クラリスの母カラベラスは元は確かクラリスと同じ茶色の髪だったはずですが・・・

「でもこれ絶対お母さんよ」

と、今度もクラリスは譲りません。

もしオーロラ姫がこの絵を見ていたら、やはりカラベラスだと思っただことでしょう。残念ながら新婚旅行の折にはこの絵は見なかったようですが。

百年ほど前の絵で、作者はまたもロヴィークの工房、絵の題名は「若い姫」とあって、具体的なモデルは分かりません。

「そうかあ、君のお母さんはこういう人なのか」

モデストもすっかり絵に感じ入っています。

モデストもクラリスの両親には会ったことはありません。

「な、なかなか美人じゃない」

オデーレはドッキンドッキン動揺しています。

「嘘だろー・・・」

王子は信じられないと言うように絵とクラリスを見比べています。

「何が嘘なのよ」

とクラリスはふくれながら、それでも得意な気分になりました。

「ああ、来て良かった!」

クラリスはすっかり大満足しました。

北の大都会の夕暮れは早く、楽しい一日はあっという間に終わってしまいました。

帰りの馬車の中でオデーレはクラリスにしつっこく指輪の確認を

しました。

あんまりうるさいのでさすがにうんざりして、クラリスは王子に話を振りました。

「昨日偉大な大伯爵様とはどんなお話をしたの？」

「ああ、うん」

王子はなんだか釈然としない様子で思い出しながら話しました。

「木のことでばかり訊かれたなあ・・・」

昨夜、緊張でガツチガチになりながら、王子は伯爵と話したのですが、最初は当たり障りなく大まかな国の様子など話していたのですが、そのうち建物の話になり、ベルーシアには良い大工はいるのか？という話になって、この頃から伯爵は俄然話しに熱心になってきました。

大工のことなど王子が知るわけはありません。

伯爵は少しがっかりしたようで、では良い木はあるのか？と森の様子をこと細かく訊いてきて、具体的な木の種類を尋ねられたのですが、これも王子が知るわけはありません。

伯爵はたいへんがっかりしたようで、その後は王子の好きそうな馬の話などをしました。

「なんだか、田舎のおじいさんと話しているみたいだったなあ・・・」  
王子は偉大な大伯爵のイメージとちょっと違って、困惑というか、正直、がっかりしました。

そんな王子の様子をモDESTはおかしそうに眺めています。

「お祖父様の口癖はね、

『わしは職人になりたかったんじゃ』」

でね、実際家具づくりが趣味で、ほら、客室のタンスや椅子はお祖父様の作った物がいくつもあるんだよ」

へー、と感心しながら、それでも王子はまだ釈然としない様子でした。

「伯爵様はルピネーおじさまがうらやましくてしょうがないでしょうねえ」



熊、熊、と息子のことを悪く言う伯爵は、馬車や船を自分で設計して造ってしまうルピネーがうらやましいのでしよう。

伯爵の造った物といえば、父親の手伝いの国を覆う要塞ばかりです。

「お祖父様は本当は田舎で畑いじりや家具づくりをして過ごしていたんだよ」

王子には分かりません。

ぐるりと見渡せばそびえ立つ無数の宮殿の窓という窓に明かりが灯っていきます。部屋ごとに一々灯りをつけるなんていう贅沢は王子の国では考えられません。

この繁栄を極める大都会にあつて、ラズベリー大伯爵は実力者中の実力者です。

それがあのような田舎のおじいさんとは、王子にはどうしても納得がいかないのです。

クラリスは王子のそんな顔がおかしくって、

「それで、どうしたの？ ダイヤモンドのことはお願いしてみたの？」

と思わず言ってしまった、しまった、とオデーレの顔を見ました。

「なんだい、ダイヤモンドって？」

モデストが訊きました。

クラリスたちはここにモデストのプロデュースするバレエ『白鳥の湖』を見に来たことになっています。

しょうがないのでクラリスはオデーレの顔色をうかがいつつ、

「来月の王子の誕生日に婚約者を発表することになっているの。その婚約者に贈るためのダイヤモンドを手に入れるために王子はここに来たの」

と、当たり障りのないように説明しました。

ふうーん、とモデストは王子とオデーレをニコニコ眺めて、・・・

モデストはオデーレがその婚約者だと思っ込んでいるようで、

「ああ、そっいえば」

と言いました。

「僕も一つすごいダイヤモンドを知っているよ。まあ、さすがにそれを婚約指輪にして贈るのは無理だろうけれど、僕の知る限り世界一のダイヤだろうねえ」

「世界一のダイヤ？」

他ならぬモデストの言うことです、クラリスも興味を持ちました。  
「うん」

モデストはちよっぴり自慢げに言いました。

「宝石商から高いお金をだして借りていてね、バレエのクライマックスで主演のバレリーナがティアアラをつけて踊るんだ。そのティアラについているダイヤモンドがね、『白鳥の白』と言って、大きくて、ものすごく強く輝くんだ」

「白鳥の白？」

三人は揃って声を上げました。

「またも白鳥です。」

しかも世界一のダイヤモンドと、モデストが言うのです。

盗まれた「白鳥の涙」、そしてここに「白鳥の白」。

クラリスたちの行くところ行くところ現れる白鳥がらみのダイヤモンド、何か今回の事件と関係があるのでしょうか？

クラリスたちが帰ってくるとピエトロ一行はまだ帰ってきていませんでした。

ルピネー一家は明るい内に帰ってきていて、すっかり仲良くなった子どもたち三人は迷路の興奮冷めやらす、今度は鬼ごっこで屋敷中をかけずり回っています。

クラリスはオデールに早くバレエの感想を聞きたくて、帰りをまだかまだかとじりじりしながら居間で待っていました。

そこへ王子がやってきました。

「えっとー、あのさー」

と、なんだか言い出しづらそうにしていました。思い切って、

「今日はありがとう。おかげで楽しかったよ」

とまともにお礼を言いました。

クラリスは目をまん丸くしました。

「あらまあ。どうしちゃったの？」

「いやさあ」

照れくさそうに、嬉しそうにしています。

「久しぶりにオデーレさんと楽しく過ごせたから。なんかさー、君がいっしょだと落ち着くみたいでねー」

王子の嬉しそうな様子にクラリスも思わず優しい笑顔になりました。

「そう。それは良かったわね」

クラリスも良かったなどと、そう思うのですが、このままいっただら本当にまずいことになるなど、出掛けのオデールの言葉を思い出しました。

「まったくもう、さっさと帰ってこないかしら」

ようやく帰ってきたと思ったら、夫人と子どもたちだけで、オデールとピエトロ氏の姿はありませんでした。

「夕食はいっしょに取ったんですけれど、オデールさんがもう一度見たいと言うので兄と二人で夜の回を見に戻りましたわ」

とのことで、どうなのでしょう、よほど面白かったのでしょうか？

ダヴィドフ家のお姉さんたちもララーと歌いながら腕を振ったり脚を振ったり、クルクル回ったり、バレエの振り付けを真似しています。

「どうでした？」

夫人に訊いてみました。

「ええ、素晴らしかったですよ。ちょっと、分かりづらいところがありましたけれど」

子どもたちの様子を見てもなかなか良かったようです。

でもクラリスは、どうしてかオデールの評価が気になって仕方ありませんでした。

結局、オデールとピエトロ氏はずいぶん遅くなってから帰ってきました。

クラリスはわざわざ玄関ホールまで出迎えに行きましたが、クラリスの質問には「ふあーあ・・」とあくびをして、

「眠い眠い。さすがに旅の後で一日二公演は辛いわ。話は明日。どうせまた見に行くから、そのとき話しましょう」

と、さっさと部屋に帰ってしまいました。

また明日見に行くつもりのように、そんなに気に入ったのでしょうか？

つき合わされたピエトロ氏に

「お疲れさまでした」

と挨拶すると、この国民的人気作曲家は、笑っているんだか泣きたいんだか非常に曖昧で分かりづらい表情で

「どうも」

と、かすれた小さな声で答えました。

ピエトロ氏もそれきり何も言わずに奥に引っ込んでしまって、この人もどうもよく分からない人です。

クラリスはもどかしい思いで地団駄踏みながら、

「寝よう！」

と自分に命令して部屋に帰りました。

その夜さらに遅く、伯爵の広壮なお屋敷の屋根に空の高い位置からまっすぐ下りてきた黒い影があります。

「偉大な大伯爵もこの俺ならば簡単に始末できそうだな」

そつろそぶいたのは例の鳥人間です。

伯爵のお屋敷は大勢の衛兵に警護されていましたが、さすがに空までは警戒が行き届いていません。

さて、鳥人間の目的はなんなのでしょう？

もう一つの影が屋根の影から浮き上がりました。

「そろそろ現れる頃だと思っ たわ」

こちらはオデールです。

鳥人間もどうやらオデールの出現を予想していたようです。

「オデール様・・・ではありませんな。」

まさかあなたのような方がいらっしやっただとは、ロットバルト様もご存じではありませんまい？」

「ええ。知らないはずよ。」

「なるほど。それで、こうして表に現れた目的はなんですか？」

「さーて、何かしら？」

ねえ、ちよつとあなた、わたしのお手伝いしてくれないかしら？」

「気が進みませんな。どうやらあなたは良からぬことをお考えのようだ。」

「まあね。でも、いいじゃない？ あなた、本気でお父様に忠誠を尽くしているの？」

「私はそうですよ。あの方は偉大なお方だ。我らが王、我らが主であられる。ただ・・・。」

「ただ？」

「私は純粹に我らの王に戻っていただきたいと思っております。人間の王になどなろうとなさらずに。」

「じゃあ尚更わたしのお手伝いをしなさいよ。もしかしたらお父様をただの鳥に戻すことが出来るかもしれないわよ。もしかしたら、あなたもね。」

「ロットバルト様が甘んじてそれを受け入れられるとは思えませんな。あなたは、ロットバルト様を破滅させようとなさっている。」

「そうかもね。でも、いいんじゃない、あなたにとつては？ あなた、本心ではお父様に裏切られた気持ちでいるんじゃない？ 同胞である鳥たちよりも人間を選んだお父様に。」

「・・・で、私に何をしろと？」

「ちよつとした騒ぎを起こしてほしいの。ただし、クラリスがいるわよ。」

あなた方の恨むあの女の娘がね。

どうかしら、やってくれるかしら？」

「詳しいお話を伺いましょうか？」

鳥人間は相変わらぬ無表情で、オデールは、魔女の笑みを浮かべていました。

## 第25章 バレエ「白鳥の湖」

翌日、クラリスはいよいよバレエ『白鳥の湖』を見ることになりました。

ボルジョー劇場にて夜の回です。

昨日一日遊んで、今日は昼間はゆっくりお屋敷でくつろいで、お昼寝もして、コンディションはばっちりです。

古代の石造りの神殿を模した壮麗な建物が篝火に浮かび上がっています。

着飾った紳士淑女が大勢集まってきて、いよいよ気分が盛り上がってきます。

今日見に来たのは、クラリス、モデスト、王子、オデーレの昨日のメンバーです。

明日の最終公演には小さな男の子たちを除く全員で見に来る予定です。

夜の回を見に来たのは昼間疲れを取る為もありましたが、昨日二回見たオデーレが絶対夜の方がいいと勧めたせいでもあります。

理由はオデーレに言わせると、

「夜の回のプリマの方が上だったわ」

と言うことだそうです、一日二回公演を一人のダンサーが出番の多い主役を務めるのはたいへんなので、主演の妖精の姫と王子はそれぞれ二人のダンサーが交代で演じています。

週ごとの昼夜交代で、今週は夜の回のダンサーの方が上だとオデーレは主張します。

モデストに確認すると、

「どつやらそうらしいね」

と認めました。

興行主としてはどちらも素晴らしいと言いたいところでしょうが、席は壁にずらりと並ぶ豪華なボックス席の、五階ある内の最上階

の、舞台に向かつて左側です。最上階はちょっと高すぎますし、斜めから見下ろすあまりいい位置ではありませんが、興行主のモデストとしては最高の席を独占するわけにもいきませんし、この位置がお客の反応を見るためにはちょうどいいのです。

専用の階段を上って部屋のドアを開けると、オデールが待っていました。

オデールは今日も一人昼の回を見て、これからいつしよに夜の回を見るつもりでいるのです。

「あなたもほんとに好きねえ」

クラリスは感心するというより呆れました。

昼の回を見たばかりでなく、モデストに頼んで開演前の稽古までずーっと見学していたのです。

オデールは左に寄って席を空け、クラリスがとなりに座り、次いでオデール、王子が座りました。モデストは後ろの席に座ってサービス係です。

モデストはさっそく何かしに出ていきました。

「で、今日はどうだったの？」

「ええ、まあまあだったわ。でも夜の回は期待していいわよ。プリマさん、稽古もかなり気合いが入っていたから」

クラリスは今日も髪を黒くして、こうして並んでいるとオデールとも姉妹のようです。

オデールはクラリスとばかり話して王子なんか完全に無視です。

王子はそんなオデールの様子にちよつとがっかりしつつ、ちよつとほっとしました。

オデールは大きなシャンデリアの下がる豪華な劇場にすっかり興奮して子どもものようにはしゃいでいます。

モデストが戻ってきました。

「はい、どうぞ」

四人にパンフレットを配りました。オデールはすでに持っていますが、新しいパンフレットは模造皮に金字が刻まれた豪華版でし



た。

「白鳥の湖／レイジング振り付け／コンチャロフスキー音楽」

ワクワクしながら開くとモデストの、

『オペラにも負けない豊かな物語性とテーマ性を人気作曲家ピエトロ・コンチャロフスキー氏の素晴らしい音楽に乗せ巨匠ボリス・レイジング氏の華麗な振り付けにより見事に演じきる、これまでにない豪華で感動的な舞台。バレエ芸術の新時代を告げる記念的な作品として胸を張ってお贈りいたします』

と挨拶があり、ピエトロ氏ら主要スタッフと主演ダンサーの名前が大きく書かれています。

「こつちよ」

とオデルが二つ並ぶ主演バレリーナの上の名前を指さしました。

ビビアナ・デュランド

とあります。

パンフレットには全四幕の構成と物語が載っていましたが、クラリスは今は我慢して見ないことにしました。

オデルがこれほど熱心に舞台を見ている様子にちょっとライブル心が芽生えて、まずはとにかく舞台を見てみようと思ったのです。オーケストラの調律の音が消え、開演のベルが鳴りました。いよいよ、舞台の幕が上がりました。

美しい湖の情景です。

朝の目覚めを思わせるさわやかでのびのびした音楽が奏でられます。

白いヒラヒラの衣装に身を包んだ主演バレリーナが現れます。彼女は湖に住む妖精の娘です。

かわいらしく舞台を飛び回り、楽しく遊んでいる様子を踊ります。そこへ男性の主演ダンサーが登場します。青い服にかっこいい帽子をかぶった王子様です。

妖精の娘は王子様を見つけると舞台の隅に隠れます。

王子様は湖の美しさに感動した様子を身振り以示しつつ踊ります。王子様がやってくると妖精の娘はひらりと逃げて反対の隅に走ります。また王子様がやってくると、また娘は反対側に逃げ、その繰り返しがコミカルに踊られます。

王子がやがて何かの気配を感じて妖精の娘の方を伺います。娘の方もそーっと王子の方へ近づいていきます。

そこへ王子の友人がやってきて、雰囲気全台無しにします。

王子は友人に誘われるまま退場していきます。

一人残された妖精の娘は今の運命的な出会いの喜びを踊りで表現し、意を決して王子の後を追って退場していきます。

ここで観客の拍手。

音楽が軽快な楽しいものになり、いったん幕が下りると背景が明るい村の広場になります。

粗末ですが明るい色調の衣装を着た村の若者たちが登場します。

音楽はテンポのある短い舞曲が次々演奏され、若者たちがソロで男女ペアで、みんなで輪になって、楽しく踊りを披露していきます。

どうやら村はお祭りのようです。

王子と友人がやってきます。

村の若者たちはこのお客さんを快く仲間に入れて、若い娘たちが次々相手になって王子たちと踊っていきます。

妖精の娘が現れます。

白いヒラヒラの衣装は一人だけ浮いています。

妖精の娘も音楽に乗って踊るのですが、どうやら彼女の姿は他の者には見えないようで、危うく何度もぶつかりそうになって、妖精の娘は憤慨します。

しかし王子にも自分の姿が見えないのを知ると元気がなくなり、楽しそうに踊る若者たちから離れて一人しょんぼりします。

王子と若者たちは輪になって踊り、踊りながら退場していきます。

楽しかった音楽がメロディはそのままに、テンポを落とした感傷的なアレンジに変わります。

妖精の娘は若者たちの楽しい踊りを再現するのですが、それはとても寂しいものになってしまっています。

妖精の娘がとぼとぼと湖に帰って行って、第一幕の終了です。  
盛大な拍手。

幕間の間奏曲。感傷的な曲想を受け継ぎつつ、ポロポロとハーブの音が新たな展開を予感させ、静かで叙情的な極めて美しい曲に展開していきます。

幕が上がり、場面は夜の湖です。

寂しそうな妖精の娘。

大勢の仲間の白鳥たちが現れ、娘をなくさめるために見事な群舞を披露します。

妖精の娘も仲間に加わり、美しい踊りを披露します。

王子と友人がやってきます。

王子は白鳥たちの見事な踊りに心を奪われますが、お酒に酔った友人は白鳥に向かって矢を射ろうとします。王子が慌てて止めますが、矢は発射され、白鳥たちは驚いていつせいに逃げていきます。王子に怒られて友人は退場し、王子は逃げ去った白鳥たちを惜しんでたたずんでいます。

すると一羽の白鳥・妖精の娘が月光の魔力で変身したものが現れ、白鳥の舞を披露して王子を誘います。

王子は喜んで白鳥と踊ります。

白鳥たちが戻ってきますが、白鳥たちは魔女を連れてきます。

白鳥たちは王子が矢を射ったことを魔女に訴え、罰を与えるように求めます。

魔女は訴えを聞き、魔法で王子の目を見えなくしてしまいます。

妖精の娘は驚き、白鳥たちを叱ります。白鳥たちも自分たちの誤りを認め、謝りますが、魔女はすでに消えてしまい、目も見えなくなった王子は嘆きながらフラフラした足取りで退場します。

以上で第二幕終了。

盛大な拍手が送られ、十分間の休憩になります。

「いやあ、バレエって面白いなあ」

と、王子が感心して言いました。

村のお祭りが故郷を思い出させますし、夜の湖の場面など、まさにこの旅の出发点そっくりではありませんか。

まあ、こちらの王子は自分で白鳥を射ったわけではありませんが、そうか、白鳥たちが間違っつて魔女に頼んじゃったわけね」

クラリスはちよつとほつとして呟きました。

今のところ魔女は悪者というわけではないようです。

「どうかしら？」

オデルが感想を訊いてきました。

「ええ。素晴らしいわね。主演のバレリーナも素晴らしい踊りだし、とつても気持ち伝わってくるわ」

「まあ、そうね」

オデルは口許に小さく笑いを浮かべて言いましたが、クラリスはその笑いが気に入りません。

「何か言いたそうな感じね？」

「まあね。でも、後でいいわ」

人がせつかく感動しているのに、嫌な感じです。

モデストはまた何かしに出ていっています。

クラリスは我慢できずにパンフレットを広げて眺めました。

配役を見て、その役名にビクツと目が止まりました。

湖の妖精、オンデーヌ

人間の王子、ロードベルト

邪悪な魔女、カラボツス

モデストが人数分の飲み物を持って帰ってきました。

クラリスが怖い顔で振り返って問い詰めました。

「邪悪な魔女カラボツスって、何よ？」

モデストは、ああ、それ、と困った顔をして

「別にそれが君のお母さんとは言ってないだろう？」

「人間の王子ロードベルトってのもなんか気になるわね」

と、オデールを睨みましたが、こちらは、そう？ とそ知らぬ顔。

モデストは濃いクリームにコーヒーと香辛料の混じった甘い飲み物を配りながら言い訳しました。

「役名はピエトロさんがつけたんだよ。ストーリーもオリジナルは

ピエトロさんがどこから持ってきたものだし、文句を言うならピ

エトロさんに言ってくれよ」

「どうして先に教えてくれなかったのよ？」

「君がそういう顔をするだろうと思っただね」

クラリスはふくれっ面のまま前に向き直ってストローで飲み物をすすりました。

「あら、おいし」

クラリスはどうやらアイスクリームのような甘いものに目がないようです。

オーケストラが第三幕の序曲を奏で始めました。

不穏で劇的な展開を予感させる低音のうごめきから、やがて光が射すようにファンファーレが鳴り、コミカルでにぎやかなアップテンポの曲へと変化し、幕が上がりました。

王子のお城の内部です。

目を患った王子が従者に手を引かれて入ってきて、女王や大臣が大騒ぎします。

医者が診ても病気の原因が分かりません。

魔女が占い師に扮してやってきます。

魔女が何か告げると城の女たちが躍り上がって喜びます。（後でパンフレットで確認したところ、魔女は「王子は誰かと強い恋に陥

っている。再びその恋人と巡り会えば王子の目は見えるようになるだろう。心の深いところでつながっているその女性となら王子は目が見えなくとも上手に踊ることが出来るだろう」と言っています）  
そこで急遽お城で舞踏会が開かれることになり、王子に憧れる娘たちが次々王子と踊っていきます。娘たちはいかにも自分たちが上手に踊っているようにアピールするが、王子の目は一向に見えるようにならない。

王子のことが心配でならない妖精の娘が様子をつかがいに来る。  
若い貴族の娘に扮した魔女が再登場。

魔女は魔法で王子を踊らせ、自分たちがとても上手に踊っているように見せかける。

怒った妖精の娘が邪魔にはいる。

王子を取り合ってコミカルなケンカ踊りをする魔女と妖精の娘。

やがて目の見えない王子の手が妖精の娘を捕まえる。すると妖精の姿が見えるようになり、二人は息のあった踊りを披露し、女王は妖精の娘を王子の恋人と認め、目の見えるようになった王子は妖精の娘と見つめ合い、愛を誓う。

しかし嫉妬に狂った魔女が娘の正体をばらし、娘が王子の恋人になりたさに王子の目を見えなくしていたのだと言う。

皆に責められ、驚き、悲嘆にくれた娘は、再び妖精となって皆の前から姿を消し、湖へ逃げ帰る。

皆に引き止められながら、妖精を追って退場する王子。

第三幕終了。

盛大な拍手。

間奏曲。湖の神秘的なテーマと妖精の娘の悲嘆を表す甘く痛々しい感傷的な旋律。

幕が上がり、再び夜の湖。

妖精の娘と共に悲しみに暮れる白鳥たち。

そこへ王子登場。

王子は娘の姿を捜すが、妖精の姿は見えない。

白鳥たちが妖精を引き立たせるように踊り、月光の力を得た妖精は姿を現し、王子への恋心を込めて精一杯踊る。

妖精の娘の姿を発見した王子は喜びを込めて踊り、二人はそれぞれの位置で相手へ踊りを贈り、その距離がだんだん近づいていく。

そこへ、魔女が登場。

嫉妬に狂った魔女は本性を表し……………

悪魔に変身しました。

最初それは舞台の演出だろうとお客たちは思っていました。

音楽もちょうど良いタイミングでバンと大きくなり、強い風が次々舞い上がるような激しい劇的な旋律が続けざまに奏でられ、嵐のように異様な迫力でうねり出しました。

クラリスは音楽とはこんなに凄いものなのかと圧倒される思いでした。

一瞬劇場中の灯りが揺らめき、舞台上では白い煙が飛び出し、煙が天井に舞い上がると魔女が立っていた位置には異様な姿をした悪魔が立っていました。

王子と妖精の娘は抱き合い、恐ろしい悪魔の姿に怯えました。

悪魔は大きな翼を広げると嵐のような音楽に乗ってクルクル回り、翼を羽ばたかせると本当に舞い上がりました。

「あれは……………」

クラリスが気付いたときには翼を広げた悪魔は大きな風を巻き起こしながら舞台を飛び出して客席の上を飛び回り、ようやくそれが「本物」であると気付いたお客たちは悲鳴を上げて席を立ち、悪魔の行く先行く先に翻弄されながら出口求めて逃げまどいました。

翼を持った悪魔、それはあの人の顔をした巨大な鳥でした。

「魔女は怒っているぞ」

嫌なしわがれ声が天井から降ってきました。

「つまらぬ余興に自分の名を使われて、魔女はひどくご立腹だ。こ

の舞台は呪われた。踊る者は脚が腐れただれて死ぬだろう。見る者は目玉が溶けてこぼれ落ちるだろう」

呪われた言葉に人々の恐慌は絶頂を極めました。

「あの女だ！ 悪魔を手先に使うなどあの女以外に出来ることじゃない！」

「黒魔女だ、黒魔女カラベラスの呪いだ！」

男たちのどなり合う声、女たちの泣き叫ぶ声が劇場中に響き渡りました。

「でたらめ言うんじゃないわよっ！」

猛然と言い放ったのはもちろんクラリスです。

立ち上がったクラリスの髪は怒りに真っ赤に燃え上がり、本来の明るい茶色に戻りました。

「あなたこそお母さんの名前を使って何を企んでいるのよ！」

鳥人間は宙に羽ばたいて静止し、クラリスと向かい合いました。

クラリスに気付いた観客たちは騒ぐのをやめ、両者の対決に注目しました。

「クラリス。あの女の娘か」

鳥人間の口がニューツと横に広がり、笑ったような顔になりました。

「おまえにあの女ほどの力があるのか？ 母親の名誉を守りたくばこの俺を倒してみろ」

鳥人間はクラリスに向かってくるかと思いきや、グルーツと旋回し、舞台に戻っていききました。

バサリと大きく羽ばたくと、恐ろしい鉤爪の足で王子と抱き合っ  
て震えていた妖精の娘役のプリマの腕を掴んで宙に引っ張り上げま  
した。

プリマは痛みと恐怖で悲鳴を上げました。

「呪いの第一号だ」

鳥人間はプリマを掴んだままバサリバサリ天井近くまで飛び上がりました。



「なんてことを！」

怒りに燃えたクラリスが魔法を使おうとすると、その腕をがっしり捕まりました。

オデールが真剣な顔でクラリスを見つめています。

「絶対にあのプリマを傷つけては駄目よ。いいわね、絶対よ！」

クラリスもちろんそのつもりですが、オデールの異様に真剣な目に改めて考え直しました。

あのプリマを救うために自分にどんな魔法が使えるだろうか？

クラリスはこの劇場に住む「仲間たち」に応援を求めるテレパシーを送りました。

クラリスは手すりに足をかけると「えいっ！」と思い切り飛び出しました。

下からわつと悲鳴が上がりましたが、クラリスは落ちませんでした。空中を何かに掴まるようにヒョイヒョイと不思議な動きをして鳥人間に近づいていきます。

「えーいっ！」

右手を突きだしてパツと開くと眩しい真っ白な光が放たれました。「うわっ」

鳥人間は思わず目をかばって体勢を崩しました。

「キヤー！……」

鳥人間が思わず放してしまったプリマが落下していきます。

クラリスも猛スピードでまっすぐプリマに突っ込んでいき、腕を掴み、グイと抱き寄せました。二人はそのまま落下していき、あわや墜落と思ったところでググツとスピードが落ち、逆にボヨンと宙に放り返されました。

ボヨンボヨンと数回跳ね、治まると、ゆっくり地上に降り立ちました。

「ありがとう」

とクラリスはお礼のテレパシーをお友だちに送りました。

クラリスたちを助けてくれたのはこの劇場に住み着く蜘蛛たちで

した。蜘蛛たちが大急ぎで張り巡らせた糸のおかげでクラリスは鳥人間に近づくことができ、落下をくい止めることが出来たのでした。もちろん糸は魔法で強くしています。

「えいつ」

クラリスは今度は張り巡らされた糸をまとめて鳥人間に巻き付けました。

鳥人間は危うく落下しかけ、力いっぱい暴れて糸を断ち切り、宙に帰りました。

「ちっ、さすがだな。今宵は俺の負けだ。だが忘れるな、呪いが消えたわけではないぞ。この舞台は呪われているぞ！」

鳥人間はそう捨て台詞を吐くと、舞台に立ち返り、裏から逃げていきました。

ボックス席から手すりを力いっぱい握りしめてオデールが見下ろしています。

「だいじょうぶ？」

クラリスはしがみついてガチガチ震えているプリマドンナに聞きました。

震えながら一生懸命うなづくプリマ、ビビアナは、黒髪で目鼻立ちのくつきりした、驚くほどかわいらしく美しい人でした。

この騒ぎで公演は中止となり、モデストは忙しく対応に追われました。幸いあれだけの恐怖を味わったので文句を言うお客さんはほとんどなく、皆ぐったり疲れた様子で家路を急ぎました。

クラリスはビビアナを楽屋に送っていき、心配したオデールも駆けつけました。おろおろするばかりの王子とオデールもいっしょについてきました。

ビビアナは劇場専属の医者に慎重に腕の検査をしてもらっています。

「よくやったわね。あの状況で自信にあふれて、まったく、やっぱり大したものね」

オデールが褒めてくれました。

クラリスは首を振り、

「あなたが念を押してくれなかったらどうだったか分からないわ。わたしすっかり頭に血が上っちゃってたから」

と逆にお礼を言いました。

「でも」

とオデールを睨んで、

「あの鳥人間、あなたのお父さんの手下でしょう？　なんでこんなひどいことさせたのよ？」

「わたしがお父さんのする事なんて知るわけないでしょう。あなたのお母さん、よっぽど恨まれてるんじゃない？」

などと否定しますが、あの鳥人間に昨夜命令を与えていたのは他ならぬオデールのはずです。

彼女はいったい何を考えているのでしょうか？

ビビアナの腕は痛々しく掴まれた跡が残っていますが、骨や神経には異常はないようです。

オデールはすっかり力が抜けていくようにほっとして優しい顔になりました。

「ご心配いただいてありがとう」

ビビアナがようやく落ち着いた顔でオデールにお礼を言いました。

「あなたね？　稽古の時からずっと熱心に見ていたのは？」

「ええ」

オデールはクラリスなんかに見せる意地悪な顔からは想像もできない優しい笑顔で答えました。

「こんなことになってしまって、あなたの熱演を最後まで見ることが出来なくて残念だわ」

「まったく、その通りね」

ビビアナは脚を組んで椅子にふんぞり返り、憤慨して言いました。

「この私の舞台を台無しにして、あの野蛮で無知な化け物め、許せないわ」

クラリスはあら？と思いました。  
さつきまでブルブルガタガタ震えていた娘とは打って変わった横柄な態度です。

顔つきまでガラリと変わっています。

「それで、あのあと舞台はどうなるの？」

オデールに訊きました。

「魔女が二人の間を引き裂こうと嵐を起こすんだけど、二人は頑張ってお互いの手を取って抱き合うの。魔女は大竜巻を起こして湖の水を吸い上げ、二人もそれに飲み込まれて湖の底に沈んで死んでしまうの。でも二人の魂は結ばれ、天に昇って永遠の幸せを得る、となるの」

「ふうん・・・」

クラリスは考えました。

それは、悲劇なのでしょうが、それともハッピーエンドなのでしょうが？

ドタドタ大慌てで一人の人物が駆け込んできました。

「わ、わしのダイヤは無事か！？」

太った、額がずいぶん上の方へ広がってしまった鼻ひげの男性が汗だくになってせいぜい息をついています。

「わ、わしの・・・」

「ご安心くださいな、オネーギン様」

ブスツとしていたビビアナがニコツと太陽のような笑顔に変身して言いました。

「もちろんお借りしているティアラは無事ですわ」

ビビアナはお付きの娘に紫のビロード張りの小箱を持ってこさせました。

「どうぞご自分の目でお確かめくださいな」

太った中年紳士オネーギン氏は震える手で小箱のふたをパカッと開きました。

プリマのビビアナ専用の楽屋は贅沢にろうそくの灯りが三基灯つ

ていました。その三つの灯りが小箱が開けられたとたんもの凄い光の乱反射を發して部屋の明るさが二倍、いえ五倍にもなりました。

小箱には楕円形の大粒のダイヤモンドを据えた銀のティアラが納められていました。

おお、おお、と安心の声を上げるオネーギン氏の顔が乱反射するダイヤモンドの輝きで怪しく不気味に揺らめきました。

そのダイヤモンドこそ、モDESTOが世界一と自慢した「白鳥の白」であり、オネーギン氏はその持ち主の宝石商でした。

後ろから覗き込むオデーレと王子も思わず息を飲み、ついで胸の内深くからため息をつきました。

特に王子は、

「これが世界一のダイヤモンド・・・」

と、瞳にキラキラ輝きを映らせてオネーギン氏と同じ怪しい顔つきになっていました。

ビビアナはすぐく得意そうに皆の顔を見渡し、オデーレは口許にうつすら笑いを浮かべ、クラリスは難しそうに眉間にしわを寄せて、ダイヤモンドを見つめました。

「このダイヤ・・・」

ビビアナがなに？という感じで怖い目を向けました。

「もの凄い輝きね」

ビビアナは当然じゃないという顔で満足しました。

「ほんと、世界一のプリマにふさわしいダイヤモンドだね」

オデーレはいっそう口許の笑みを深くします。

ビビアナがそれに気付いてオデーレにも怖い目を向けました。

「いえ、別に。ただ、舞台を見ていると輝きが強すぎてせっかくのあなたの名演が影になってしまっていると感じただけ」

ビビアナはカツと怒りました。

「わたしの踊りがダイヤに負けているというの？」

オデーレが答えずにフツツと笑ったのでビビアナの怒りはますます激しくなりました。

オデルが訊きました。

「ところで、あなた、明日の舞台はどうするの？」

「どうって？」

「腕はだいじょうぶ？ それに、呪いは怖くないの？」

ビビアナはフンと鼻で笑いました。

「ご心配には及ばないわ。腕はこの通りなんともないし、呪いでうつて？ 笑わせるわ。このわたしは世界一のプリマドンナ、たとえ悪魔に呪われても神に祝福される美の天使よ。あんな化け物の脅しに屈してなるものですか。それに、わたしには頼もしい守護天使がついていてくれるもの」

ね？とビビアナは決して拒絶できない最高の笑顔をクラリスに向けました。

クラリスは苦笑するしかありません。

どのみちあの鳥人間は警戒する必要があります。

オデルは笑って頷きました。

「安心したわ。ぜひもう一度あなたの名演を見たいものね」

ビビアナには警護の者が付くことになり、舞台以外で鳥人間が襲ってくることもないだろうと判断して、クラリスたちは引き上げることにしました。

帰り際王子がオネーギン氏に尋ねました。

「その宝石を譲っていただくことはできないでしょうか？」

オネーギン氏はポカーンと王子の顔を見つめ、何を馬鹿なことかとひどく不機嫌になりました。

クラリスがブルーシアのジークフリート王子ですと紹介すると、オネーギン氏は「はて？ ブルーシア、ブルーシアと・・・」と上を向いて考えていましたが、やがて「ああ・・・」と思いついたように王子の顔を見て何故かひどく納得したように頷きました。

その納得の仕方にはひどく侮蔑的ところが含まれているように感じられます。

「王子様」

オネーギン氏は実に丁寧に教えてさしあげました。

「この『白鳥の白』はラピス王妃も所望したものをお断り申し上げた宝石です。わたしの命と言っていい大切な宝物です。ですから、もし本気でこれをご所望なら、王子様の命、国を丸ごとちょうだいしなければとてもお譲りできません」

オネーギン氏はニコニコ王子を眺めていましたが、例え王子といえどもベルーシアのような田舎者を相手にする気など全くないようです。

王子もさすがにカツと怒りが沸き立ちましたが、努めて冷静になるうとしました。

「一個の宝石がそんなに値打ちのあるものですか？」

「あります」

オネーギン氏は自信たっぷりに答えました。

#### おことわり

ここに描きます「白鳥の湖」はこの世界のこの物語における「白鳥の湖」であり、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー音楽によるものとはまったく別物です。

ただ、ちよつとした知識を披露しますと、

チャイコフスキーの「白鳥の湖」の初演はこんにち世界一の人気を誇る演目としては劇的な成功とはいかなかったようです。原因はいろいろあるようですが、舞台作りのまずさが総合的に言えるようです。

物語も現在公演されているものとはだいぶ違っていました。

主人公のオデット姫は人間ではなく妖精の娘で、彼女は意地悪な継母の魔女から身を守るために昼間は白鳥に変身しています。その変身アイテムとしてティアラが登場し、ストーリーがごちゃごちゃしていてよく分からないのですが、何を血迷ったか王子がこのティアラを湖に捨ててしまい、湖が氾濫し、二人は湖底に沈み、死してのち天上で結ばれるという物語であったようです。（あまり詳しい

資料が見つからなかったので興味のある方は調べてみてください)  
作曲家の死後、弟モデストと、作曲家の第二作目「眠れる森の美女」を大成功させた有名な振り付け師マリウス・プティパ、レフ・イワーノフらによって全面的に改訂され、こんにちの形が作られ、これが劇的な大成功を納めることとなります。



## 第26章 舞姫

翌朝、お屋敷のモデストの下へ慌ただしく劇場の職員が駆け込んできました。

話を聞いたモデストは

「なに!？」

と絶句してしまいました。

朝の挨拶をしに来たクラリスはショックに呆然としたモデストにびつくりして「どうしたの？」と尋ねました。

「主演のプリマがあゝの悪魔に襲われたそうだ」

ピアノではなく、もう一人、昼の回の主演の方です。

彼女は高級ホテルの最上階に泊まっていました。が、昨夜遅く物音に気付いて起きた彼女は窓の外に浮かぶあゝの悪魔の姿を見て卒倒し、消えゆく意識の中で悪魔の「舞台には立つな、おまえも呪われるぞ」という声を聞いたのでした。

明け方目覚めた彼女はホテル中の人間が起き出すほどの悲鳴を上げ、怯えきった彼女は絶対舞台には立たないと泣きわめき、駆けつけたマネージャーがどんなにだめすかしても頑として言うことを聞かないのでした。

噂はホテル中に知れ渡り、今頃はペテロブラーグ中に広がっていることでしょう。

「まったくあいつ何考えてるのかしら？」

クラリスには鳥人間の目的がさっぱり分かりません。

「困ったことになったよ」

モデストは顔を青ざめさせ、クラリスに強がる余裕もありません。「昨夜の騒ぎで今日の公演にも当然影響が出るだろうと覚悟していたんだが、どうやら公演そのものができるかどうか怪しくなってきた」

話はバレエ団の他の者にも伝わり、彼らも呪いを恐れて今日の舞

台を辞退する気配が濃厚だということです。

モデストはそれを恐れて昨夜はずいぶん遅くまで劇場に残り、団員はじめ関係者たちの説得に追われていたのです。

「どうやらその苦労が水の泡と消えそうです。」

「僕はこれから急いで劇場に行くよ。なんとか夜の回だけでも上演したいけれど、昼の回は、無理かもしれない・・・」

いつも明るくニコニコ笑顔でいるモデストが、心底まいった様子で出かけていきました。

せっかく初の大興行がまずまず成功しているというのに、大事な最終日でもたないケチが付いてしまいました。

モデストはまだまだこれからバリバリ仕事をしていこうと夢を抱いていますが、その最初でいきなり大きくつまづくことになりそうです。この後その影響は避けがたいでしょう。

クラリスは鳥人間に猛烈に腹が立ち、なんとかしなくちゃと思いましたが、バレエの舞台なんて、魔法でどうにかなるものではないでしょう。

知らせは作曲家にも届いてピエトロ氏は苦渋に満ちた表情で居間に現れました。もっともこの人はクラリスの見たところいつも何か思い悩んでいるような難しい顔をしているのでそれほど変わったようには見えませんが。

アレクサンドラ夫人と子どもたち、王子とオデール、ルピネー親子、伯爵夫妻と、居間に集まってこの困った事態に顔を曇らせました。

最後に現れたオデールが呑気な調子で唐突に言いました。

「わたしが踊ってあげましょうか？」

みんな何を悪い冗談をと思いましたが、オデールはまじめな顔でじつとピエトロ氏の顔を見えています。

ピエトロ氏はますます苦渋を深くして、「う・・・」とうなり、

「いや、僕からはなんとも・・・」

と、なんともはつきりしない調子で言うてうつむいてしまいました

た。

このピエトロ・コンチャロフスキーという国民的人気作曲家は、妙にまじめな顔をして髪をびったりきれいに分け、芸術家と言うより地方のお役人といった風に見えます。

まるで面白みのない人のように感じられますが、子どもたちからはとても好かれていますし、実際クラリスがちょっとお部屋を覗いたところ愉快そうに大口を開けて笑いながら男の子たちと遊んでいて、ふだんのむっとり黙り込んだ陰湿そうな印象とはまるで別人でした。

どうやら極端に人見知りが激しくて、特に女性に対してはそれがひどく、氏がまともに話せるのは妹のアレクサンドラ夫人とその娘たちだけのようです。

オデルのように唯我独尊自意識の固まりのような女性とまともに話せるわけはありません。

オデルはツカツカ歩いてくるとピエトロ氏の腕をグイと掴み、「さ、劇場に行きましょう」

と、有無を言わずず連行しました。

「わたしも行って来ます」

クラリスは急いで後を追いました。

馬車で劇場へ急ぎます。

クラリスがピエトロ氏と並んで座るオデルに向かい合って尋ねました。

「ねえ、本当に踊る気？」

「ええ、そのつもりよ。他にどうしようもないでしょう？」

オデルはまるで事もないように言いました。

「踊れるの？」

「たぶんね」

オデルは二日間非常に熱心に舞台を見ていたようです。でも見ていただけで突然踊れるとは思えません。

「バレエ踊ったことあるの？」

「いいえ」

ふざけているとしか思えません。

クラリスは何か言っつてよというつもりでピエトロ氏に目を向けました。

ピエトロ氏はとつても困った顔でただ見つめ返すばかりで、クラリスはこの人は当てにならないなどがっかりしました。

「ただし、わたしの方にも二つほど条件があるわ」

オデールは真剣な目でピエトロ氏を見つめました。

ピエトロ氏は蛇に睨まれたカエルのように顔を硬直させてオデールに向き合いました。

「まず一点は、あなたのオリジナルの構成で曲を演奏すること」

「どうということ？」

クラリスが尋ねました。

オデールは珍しく丁寧に教えてくれました。

「ピエトロさんの曲は舞台の演出家によってかなり順番が入れ替えられているの。ぜんぜん違った場面に使われていたり、途中を大幅にカットされていたりもしているわ」

演出家というのは振り付けのレイジング氏のことでしょう。パンフレットには巨匠と褒め称えられていましたが、

「そう、前時代の、ね。ピエトロさんの斬新な音楽には合わないわ」と、オデールはバツサリ切り捨てました。

クラリスはそうかなあ？と思いました。

途中まででしたが、素晴らしい舞台に思えました。

ちょっと長すぎるかなあ・・・とは思いましたが。

「凡庸なのよ」

オデールはまたも言い切りました。

「同じパターンの繰り返し返して、音楽が何を意味しているのかまるで理解していない、いいえ、理解しようとしていないわ。音楽なんて、踊るためのただの伴奏としか思っていないのよ」

そう言われるとそんな気もしてきます。

驚いたことにオデールは分厚い楽譜まで借りだして部屋で熱心に読み込んでいたのでした。だいたい楽譜を読めること自体驚きです。ピエトロ氏も心なし頬を紅潮させて、感動しているようです。

クラリスもオデールが本当に踊れそうな気がしてきました。

「それで、もう一つの条件ってなに？」

「それは劇場に着いて、モデストさんにね」

オデールは謎の微笑を浮かべましたが、なんだか自信たっぷりでも魅力的に見えました。

劇場に着いてみると、舞台裏はかなり悲壮なものになっていました。

恐れていたとおりダンサーたちが呪いを恐れて舞台を拒否し、モデストの必死の説得も受け入れられそうにありません。

だいいち主演のプリマがいません。

彼女はホテルの部屋から一步も外へ出ようとせず、まあ窓の外の暗闇にあの顔がぼおつと浮かんでいたらそれはそれは恐ろしいでしょうが、それにしても情けない有様です。

現段階ですくなくとも昼の公演を開催するのは絶望的なようです。

「いいわよ、あなたたちは全員舞台の袖で見てください」

突然現れたオデールが居丈高に言い放ち、団員たちは顔をしかめて白い目を向けました。

オデールはひるむことなく言いました。

「舞台はわたし一人で十分よ」

クラリスは馬車の中で言い含められていたとおりに言いました。

「こちらはユークリナの王室バレエ団のプリマドンナ、オデール・ロットバルトさんよ」

ユークリナの王室バレエ団なんて誰一人知りませんし、実際そんなものはないのですが、オデールにはそれを信じさせる迫力がありました。

「我々に見ているとはどういうことですか？」

男性の団長が不愉快そうに言いました。

「舞台はわたし一人が踊ると言っているのです」

「冗談を」

団長は嘲りました。

「二時間を一人で踊りきると言うのですか？ それとも十分間一流の見事な舞踏を見せて、さあこれで満足してお帰りなさいとお客に言うのですか？」

「もちろん、二時間踊りますわ。モDESTさん」

モDESTはすっかり困惑していましたが、クラリスがいつしよなので前向きに話を聞くことにしました。

「二時間、休憩なしで一気に踊ります。もし途中で退場者が出たら、その方にはチケット代全額お返ししてください」

オデルは何やらクラリスに持たせていた重い鞆を受け取り、その口を開きました。

中には金貨がぎっしり詰まっていました。

こうして具体的にお金の保証をされては誰も話を聞かないわけにはいきません。

「ただし、こちらにも条件があります。まず一つ目は」

と作曲家のオリジナルスコアでの演奏を要求しました。

「もう一つ。」

踊るからにはわたしをこちらのプリマと同じ一流のバレリーナと見なし、あの『白鳥の白』のティアラをつけさせること。そうでないなら代演はお断りします」

どちらも難しい条件ですが、前向きに考慮すると言うことで、まずはハリハール、オデルの実力の程を見せてもらうことにしました。

クラリスとモDEST、団員たちは客席へ、オデルとピエトロ氏は舞台へ移動しました。

舞台の袖にはハリハール用の小さなピアノが置いてあります。オ

デールがあくまでオリジナルの音楽にこだわったのでピエトロ氏自らピアノを弾くことになりました。

オデールは劇場の予備の練習着を着ています。黒のレオタードです。

オデールはピエトロ氏と楽譜を見ながら打ち合わせをし、ピエトロ氏は指馴らしにポロンポロン音を出し、オデールはそれも音楽の一部のように舞台の中央で軽く跳ねたり屈伸したりして、やがて二人は顔を見合わせ軽く頷くとリハーサルが始まりました。

第一幕冒頭、湖で妖精の娘が踊るシーンです。

このシーンはクラリスもよく覚えていきます。ピアノはとてもかわいらしく伸び伸びと楽しそうに踊っていました。

ピエトロ氏のピアノはなかなか巧みでした。しかしピアノだけのせいでしょうか、楽しいはずの音が妙に寂しく、悲しそうにさえ聞こえました。

その音に合わせて踊るオデールの妖精も、身振りはとても細かく早く、子どもが遊んでいるようなのですが、やはりどこかもの悲しく、痛々しい感じがしました。

クラリスはオデールから一瞬たりとも目が離せません。

オデールは何か求めるように宙に手を伸ばしますが、その腕はか細く、弱々しく、何度も何度も押し返されます。しかしオデールは負けません。弱々しかった腕に芯が通り、まっすぐに伸びていきます。そして何かを掴みます。オデールはそれをしっかりと胸にいだき、体の中へ取り込みます。

音楽は徐々にテンポよくなり、舞台と同じ明るい楽しいものになっていきます。か弱かったオデールの妖精は生き生きと舞台上をね回り、喜びを爆発させます。

クラリスは一連の音楽とオデールの踊りが、湖の夜明けと無垢な妖精の誕生の両方を表しているように感じました。

見事なマイムです。

そして今生きている喜びに溢れ舞台上をいっぱい跳ね回ってい

るオデールの踊りは、全身を柔らかく使い、振りは大きく、独特のタイミングで動き、腕の使い脚の使いはバラエティに富み、けれど全体は決してバラバラにならないバランス感覚を保ち、飛び跳ねるときには大きく宙を駆けるようで、回転はそのまま宙に浮き上がりそんな勢いがありました。

実際オデールは正面を向くたびに手と脚にポーズをつけながら三十回以上回転し、見ているこっちの方が目を回しそうでした。

オデールは踊りの最初の方はとても小さく見えたのが、今は身長がすごく高く見えています。

音楽が終わり、オデールがポーズをつけるとクラリスの周りから盛大な拍手がわき起こりました。

団員たちは驚嘆し、子どものように素直な顔で舞台上のオデールに賞賛の拍手と眼差しを送っていました。

「まいったな、これは」

モデストは嬉しさが溢れて涙が出てきそうな笑顔をしています。「オデールさん。ぜひ踊ってください。お金のことなんてどうでもいい。僕はお客さんを信じます。ティアラのことも任せてください。必ずオネーギン氏を説得しますから。ピエトロさん、あなたは天才だ！ あなたの作ったままの曲を演奏しましょう！ ああ、オデールさん、まったく、なんて素晴らしいんだ！」

こうなると他の団員たちは自分たちもいっしょの舞台に立ちたくて仕方なくなりました。しかし残念ながらそればかりは無理なようです。オデールの踊りはレイジング氏の振り付けとはまったく違ったオリジナルなものだったからです。いえ、自分たちと違うどころか、こんな踊り、今まで一度も見たことがありませんでした。

オデールは自分に向けられた賞賛に素直にお礼を言いました。

「ありがとう。もし午後の公演が成功したら、夜の公演はあなた方の力でぜひ成功させてください。ピアノはきつと踊るでしょう。わたしもとても楽しみにしていますから」



午後の公演は昨夜の事件で大量のキャンセルが出ていましたが、天才プリマバレリーナの一人舞台ということで、キャンセルの取り消しが相次ぎ、結局いつも以上にお客が入り、席はほぼ満席となりました。

ただいつもの客層に比べるとちょっと質が落ちるかもしれませんが、お客たちが集まった大きな理由に人気者の魔女娘クラリスの活躍が見られるかもしれないという野次馬的興味と、途中退席したものには全額チケット代を払い戻すという宣伝があったからです。

一流の上客たちはそんな安っぽさを嫌ってやはりキャンセルしてしまっています。

クラリスはお屋敷に使いを出し、王子とオデーレ、それともう一人、サファイアの精を呼びました。

ちよつと気になることがあります。

今日の席はキャンセルが出てボックス席の正面二階という特等席がとれました。

開演のベルが鳴り、客席が静まるとオーケストラの前奏曲が始まりました。指揮はピエトロ・コンチャロフスキー自らしています。楽器の演奏は皆一流のプロですから楽譜があればとりあえず出来るのですが、指揮はそうはいきません。きちんと曲を理解し、演奏者に的確な指示を与えなければなりません。そこで今回限りピエトロ氏が自ら指揮することになったのです。

幕が上がったとき、観客席が一瞬どよめきました。

昨日見たビビアナはヒラヒラの布を何枚も重ねたスカートの衣装を着ていました。

今舞台の中央で両手を合わせ身をよじり背中を見せているオデーレは、短いスカートをはいて脚が太股まで丸見えになっています。スカートが短いどころか、まるでお花が咲いているように横に張り出しています。その下に薄布が何枚も重ねられて脚の付け根を隠しているのです、本当にお花から体と脚が生えているみたいです。

張り出した部分は鳥の羽の軸を芯に使っています。

ダンサーが脚を見せるのは練習中は当たり前前のことですが舞台上でお客さんの前に脚をまるまる見せるようなはしたない真似はまずあり得ません。

客席のご婦人方は眉をひそめ、殿方はとなりのご婦人に隠れてにやけた笑いを口許に浮かべました。

オデーレも「ま・・」と息を飲み、恥ずかしさに真っ赤になりました。王子も同様です。

サファイアの精は

「あたしたちとおんなじね」

と喜びました。妖精はだいたいそのような活発なかつこうをしています。

幕が開いてもオデーレは静止したまま一向に動こうとしません。衣装のこともあり、客席には批判的な空気が漂い出しました。

しかし、そのポーズのなんと不思議で魅惑的なことでしょう。まるで一流の彫刻作品のように美しく、本当に石のようにぴくりとも動きません。あのような不自然な形でじっとしているのはものすごくたいへんなはずで。

客席にもそのただならなさが伝わり、お客たちは皆その姿に視線を釘付けにされました。

ついにオデーレの腕が動きました。

後はクラリスがりハーサルで見たとおりですが、あの時とは緊張感がまるで違います。劇場の空気が隅々までびりびり張りつめていきます。

モデストが遅れて一人お客さんを連れてきました。

ビビアナです。

ビビアナはこの突然の変更が気に入らないらしくひどく不機嫌な顔で挨拶もなしにクラリスのとなりにとかつと座りました。

オデーレは踊り続けています。

観客たちはオデーレの踊りの中に無垢な赤子に対する愛おしさを感じていきます。誕生の喜びと共に涙が溢れてくるような弱きものへ

の感傷が心にわき上がってきます。

朝の湖に遊ぶ妖精の娘はやがて素敵な王子様を見つけてます。

オデールは妖精の娘を踊り続けます。

王子役ダンサーはいないけれど、観客たちは確かにオデールといつしよにその姿を見ています。

王子を見つけた妖精の娘の驚きと初々しい好意がかわいらしく喜びいっぱい踊られます。

二人の距離が近づいたり遠のいたり、その距離感がじれったく思えます。

観客の心は今や完全に妖精の娘に重なっています。

王子が去ったとき観客はため息をつき、そして音楽が終わったとき、観客は我に返ると割れるような盛大な拍手を送りました。

拍手と共にブラボーの声がやみません。

オデールは身振りで観客の拍手に答えます。

あんまり拍手がすごいので背景を差し替えるための幕を下ろすタイミングがつかめません。

まだ始まったばかりだというのに、オデールは完全に観客を味方に付けてしまいました。

ようやく幕が下ろされ、村祭りの場面になりました。

ここでオデールは見事な構成の技を見せました。

この場面では村の若者たちの短い踊りが次々披露されていきます。オデールはそれを一人で全て踊りました。

一人ずつ舞台の立ち位置を変えていき、踊りの始めと終わりではピタッとポーズをつけ、キャラクターの入れ替えを明確に知らせました。踊りもそれぞれに個性を与え、まったく見飽きるということがありません。

驚いたことに全員が輪になって踊るシーンまで一人で表現してしまいました。

そして、オデールの踊りのすばらしさと露出した脚の威力が遺憾なく発揮されたのが第二幕の白鳥たちの踊りのシーンでした。

なめらかな腕の動きによる羽の表現と共に、見事な脚裁きによる水上を滑るように移動する様の表現が秀逸でした。

小白鳥の踊りのコミカルな振り付けは大受けし、妖精の娘の心を代弁する大白鳥の打ちひしがれた悲しみの踊りはあまりの美しさに特にご年輩のご婦人が多く感動の涙を流しました。

そしてオデールはここで初めて王子を踊りました。

ここでも脚が大きく強調されました。

女性とは明らかに違う直線的で大きくスピードのある動き。体重が一気に二倍になったかのような力強く重々しい動き。太股の張りつめた筋肉は完全に男性のものでした。

そしてまた妖精の娘を踊ったときの軽やかでなめらかな曲線的で優雅な動き。男性を踊った後でなおさら女性の優しさが印象深く感じられます。オデールは明らかに一般的な女性より筋肉質で硬い脚をしていましたが、娘を踊るときのおデールの脚はとても柔らかく魅力的に見えました。

そしてもう一人、魔女も演じました。

魔女の踊りへ移行する際、オデールはまず情景を踊りました。

白鳥たちが王子が矢を射ったと勘違いして魔女に王子に罰を与えるよう訴えるシーンですが、オデールはこれを音楽のイメージに忠実に、いわばこの場の空気として演じました。

劇的に悲劇を暗示し、怒り、不吉、愚かさ、運命といったものを、およそバレエとは思えない呪術的なマイムで目玉をギョロリとした恐ろしい顔で演じました。

そして魔女は気取って意地悪な様を静の動きで、恐ろしく力のある様を狂ったような暴力的な動きで演じました。

昨日の出来事を知る観客たちはそこにまた本物の悪魔が現れたような錯覚を持ちました。

魔女、王子、妖精の娘を、激しい音楽に乗せて忙しく交代で演じていき、その舞台上の三角形は三人の関係と逃れがたい運命を強く暗示し、オデールの描くその三角は燃え上がるような高揚感を与え、

観客たちの魂を吸い上げていきました。

ババーンとオーケストラの最後の音が鳴り響き、幕が下りていくと観客たちはどっと疲れている自分に気付き、その圧倒的な感動の強さにそうせずにはいられない衝動で激しく拍手を鳴り響かせました。

通常ここで十分間の休憩が入るのですが、今回はオデールの希望でこのまま第三幕に入りました。

幕が上がるとオデールの衣装は真っ黒になっていました。

ここでは特に魔女に重点が置かれているためでしょう。

お城の狂騒ぶりと魔女の扮する占い師の登場、王子の恋心を狙う娘たちの踊りが楽しく踊られていきます。

ここでは魔女が主人公で、妖精の娘は完全に姿が見えないものとして扱われています。

コミカルで楽しい様子が、次第に魔女の怪しい魅力に支配されていき、妖精の娘と王子の束の間の心の交流もか弱くはかないものとして悲劇的な様相を帯びていきます。

魔女の妖艶な踊りが実に濃厚で、露出した脚が今度こそ本来の意味で魅力的で、観客は異様な雰囲気の中で固唾をのんでオデールに見入りました。

魔女の勝利で幕が下ろされます。

オデールの観客に対する勝利とも言えます。

そして第四幕。

湖。

再び白の衣装で現れたオデールは、もはやストーリーは無視して流れる音楽のままに体を動かしていきます。

白鳥たちの後悔と同情、妖精の娘の悲しみと恋の傷み、王子の情熱、再び燃え上がる恋の喜び。それらが渾然一体となり、オデールに休む間もなく踊りを強要し、その激しい踊りの流れは渦を巻くように天上に向かって昇華していきます。

そして魔女の怒りによって本当の渦が生まれます。

風が起こり、嵐となり、竜巻を起こし、湖の水を吸い上げ、何もかもがそこに吸い寄せられ、飲み込まれていきます。もはや激しさだけが支配し、何もかもそこに存在しません。

そして意味をなさなくなつた激しさは潮のごとく引いていき、後には何も残らない。

オデールも舞台を去り、静寂が置き去りにされます。

コンチャロフスキー氏の音楽はいわゆる国民楽派に属するといえます。広大なラピスの土着的な旋律を、コンチャロフスキー氏の音楽家としての技術は非常に洗練されて流麗な音楽に仕上げられています。耳にすぐに馴染む親しみやすさは、しかしそんな表面的な技術によるものばかりではないでしょう。土着的な情感は、激しいものも感傷的なものも、人間の根元的な感情をごく素直に表したものです。

コンチャロフスキー氏の音楽は人の心をとて素直にする音楽です。

それ故この静寂には耐えられないほどの悲しみを感じました。

小さく美しいメロディがよみがえってきたとき、観客の誰もが神の温かな慈悲を感じました。

復活したオデールは頭に眩しいダイヤモンドの輝きを戴いていました。

それはどんな暴力にも負けない愛の勝利を表し、再び妖精の娘に戻ったオデールは王子と共に喜びを踊り、喜びの感情が溢れると、再び両者の区別はなくなり、一つの美しい魂となり、天の栄光へと登っていくのでした。

ジャジャー、ジャンジャンジャー……

オーケストラが高らかに歌い、全四幕の幕が下りていきます。

ブラボー

ブラボー

ブラボー

観客は総立ちとなって涙を流して力いっぱい拍手を贈りました。

再び幕が上がり、晴れやかな笑顔のオデールが深々とお辞儀しました。

その背からは湯気がもうもうと立っています。すさまじい力強さです。

たった一人でこの壮大なバレエを演じきったのです。

オデールは引っ込んでまた拍手に呼び戻され、また引っ込んで呼び戻され、カーテンコールは延々と続き、オデールはピエトロ氏を舞台に引っ張り上げ、オーケストラに感謝と賞賛を贈りました。途中退場したお客は一人もいませんでした。

オデールは史上最高のプリマドンナと激賞され、この舞台は伝説となりました。

天才とはいるのです。

ビビアナはそれを目の前でまじまじと見せつけられ、顔を真っ青にしてブルブル震えていました。

悔しいと思いました。

けれど素晴らしいと思いました。

涙が溢れてきそうになりましたが、それを必死でこらえました。ここで泣いてしまったら二度と踊れなくなってしまうような気がしたのです。

自分は今夜この舞台に立つ。

きつとオデール以上に素晴らしいオンデーンを踊ってみせる。

「見てらっしゃい、必ず、必ず踊ってみせる・・・」

ビビアナはギリギリ唇を噛みしめました。

## 第27章 白鳥の宝石

ボルジョー劇場におけるバレエ『白鳥の湖』最終公演は素晴らしいものとなりました。

主演のプリマバレリーナ、ビビアナ・デュランドは持てる力を全て出し切った最高の演技を披露し、他のダンサーたちも負けじと精一杯頑張りました。

モデストはとなりのボックスも確保して伯爵家の人々をみんな招待し、みんなこの最終公演を大いに楽しみ、喜びました。

しかしこの公演全体は果たして成功だったのでしょうか？

全公演通してお客の入りはまずまずで、売り上げはなかなかのものでした。ただ、舞台をかなり豪華に作っているので支出も多く、投資家にとっては期待したほどの大成功とは言えなかったようです。ではバレエとしての評価はどうであったか？

おおむね好評ではあったようです。

ただ、こちらも制作者がもくろんだ程の高い評価は得られず、「部分的に良いところもたくさんあった。コンチャロフスキー氏の音楽もバレエの音楽としては良すぎるほどであった。しかし全体としては平凡で、長すぎる嫌いがあった」

と、決して悪くはなかったのだけれど期待していたほど特別な傑作とは言えない、ちょっとたいくつだったかな、というのがおおかたの感想のようです。

それに追い打ちをかけたのが昼のオデールの特別公演で、これを見た観客は興奮してどれだけ凄かったか会う人会う人に自慢しまくりましたが、その賞賛はオデールに向けられたもので、ピエトロ氏の意図した作品本来の形に気付いた人はほとんどいませんでした。

作品の評価に関してはモデストも大いに不満でしたが、自分自身の目から舞台を見てしまうがなと思う面も多々ありました。

モデストはクラリスに、



「本当は僕はレイジング氏に演出を任せるのは反対だったんだ。でもこれだけ大きな公演になるとあちこち気を配らなくては実現できないところが多々あってね、劇場総裁の意向を無視するわけにはいかなかったんだ」

と情けなさそうに言い訳しました。

「でも、オデルさんの舞台を見て決心したよ」

と、気を取り直して元気に、

「僕はもう一度『白鳥の湖』の舞台を実現してみせる。もう一度ピエトロさんと相談して、新しい若い才能に演出を任せて、本来の素晴らしさを新しい舞台によみがえらせてみせるよ！」

実はすでに考えていることがあるんだ、とモデストは生き生きとした顔で言いました。

「今回の公演は劇場付きのバレエ団を主体に構成しているんだけど、ソリストの何人かは僕らがモスクリンでオーデイションして連れてきたんだ。そのソリストたちを連れて各地にコンサート形式で公演していこうと考えているんだ」

モデストはすっかりその気になって計画を思いめぐらせています。クラリスもモデストの空想につき合いました。

「そうね、それなら、王子の誕生日にお城で踊ってもらったら素敵でしょうね」

「それだよ！」

モデストは大喜びしました。

「ジークフリート王子、あなたのお誕生日にぜひ僕たちの公演をさせてください！」

「え、ええ」

王子はびっくりして答えました。

「それは喜んでお願いしたいです」

「よし、決まりだ！」

モデストはもう決めてしまっただけで王子の手を握ってブンブン振りましました。

という会話は舞台が終わって、招待客の特別待合室に場所を移して、モデストがあちこち挨拶から帰ってきて行われています。特別招待室はモデストがそうしたわけではなくて、劇場のマナージャーが大伯爵に気を使ってこちらに移っていたいたのです。また港のような騒ぎになってはいろいろたいへんだという配慮もあってです。「とうわけで父さん」

眠そうにしているルピネーに、

「大白鳥号の帰りの残りのチケットは全部僕が買いますよ」

「そりゃいいがな、準備は間に合うのか？俺たちやあ何がどうあつても王子の誕生日の前夜にはブルーシアの城に着いてなくちゃならねえんだ。こっちにそう何日もゆっくりしてられねえぞ」

王子の誕生日の前夜、つまり次の満月まであと十五日。往路はちよつと十日かかってますから、どんなに遅くても五日後には出発しなくてはなりません。

「三日後だ。けっこうな大人数になるんだろ？旅慣れてない人間も多いだろうし、それくらいの余裕は見なくちゃならん」

「よし、三日後だね」

モデストはさっそく部屋を飛び出ていこうとして、慌てて振り返り、

「ピエトロさん、当然あなたにも来てもらいますからね！」

と念を押して出ていきました。

「やれやれ、あいつはどうしてああせつかちなんだ？」

と伯爵が愉快そうに言いました。

「そりゃあおじさまの息子ですものね」

とクラリスが言うと、ルピネーは、

「うんにゃ、あれは親爺殿の血だ。何か思い付くとすぐに実行しないではいらねえんだ」

と言いました。

伯爵は今でこそこうしてのんびりご隠居然としていますが、若い頃にはあちこち飛び回って毎日忙しく働いて、それで結婚がずいぶ

ん遅れてしまったようです。

ところで今ここにオデールとオデーレの姿はありません。オデールは舞台の上演中は頑張つて目を開いて見ていましたが、さすがに疲れたのでしよう、幕が下りるといっしょにまぶたが閉じてしまいいルピネーに抱えられて団員の仮眠室に連れていかれ、そのまま眠っています。オデーレはその付き添いですつといっしょにいます。

オデールは昼の公演後もすぐ近くのホテルに部屋を取つて夜の公演開始ギリギリまで休んでいたようで、クラリスはぜひ確かめなくてはならないことがあつたのですが、今のところそれは出来ていません。

それとは別に素晴らしい舞台のお祝いももつときちんと言いたいのだけれど。

今日のオデールはあまりに忙しすぎました。

今日のことはいろいろと、明日ゆっくり話し合つことにしましう。

クラリスは毎度のように伯爵夫妻のお相手をしています。

ルピネーは眠そうにときどき大あくびをして母と熱心にバレエの感想を話しているアナトリーに叱られています。

ピエトロ氏はアレクサンドラ夫人と子どもたちといっしょで、子どもたちに自分たちも外国に行きたいとせがまれて困っています。

モデストもオデールもオデーレもいなくなつて、王子だけ一人でぼーっと考え事をしています。

今見たバレエのことを考えているのでしょうか？

それとも昼のオデールの舞台を思い出しているのでしょうか？

考えてみれば王子は結局三度もこの舞台を見えています。

さすがに何かしら思うところがあるのでしょうか？

それとも、ぜんぜん別のことを考えているのでしょうか？

クラリスはちよつと心配です。

翌日。

朝から、というか、昨夜から何やらずーっと考え事をしてきた王子はちよつと用があると一人で出かけてしまいました。

クラリスは王子が迷子になったり悪い人にひどい目に遭わされたりするんじゃないかと心配しましたが、王子は

「一人で行きたいんだよ」

と行く先も告げずに出ていきました。

伯爵もブツブツ言いながら仕事に出かけていきました。

今日はルピネーも仕事でお出かけです。特務外交官として中央官庁にご出仕です。これまでも手紙を出したり受け取ったり、人が訪ねてきたりと、いろいろ忙しくしていました。

モデストはあれ以来一度も帰ってきません。

オデールとオデーレはあの後ホテルに移り、昼近くに帰ってききました。

お屋敷にいる者で集まってお昼になりました。

主役はオデールで、クラリスとオデーレとサファイアの精が代わる代わるどれだけ素晴らしい舞台だったかご夫人方と子どもたちに話して聞かせました。

そのままお茶会になって、その席でクラリスはようやくピエトロ氏に『白鳥の湖』のお話の出所について聞くことが出来ました。

この人は妹のアレクサンドラ夫人がいないと本当に駄目な人のようで、今まで何度となくチャンス逃してきたのです。

お話の出所はハルメイユーでした。

五年ほど前、趣味の旅行で友だちと行ったのですが、そこで聞いた話だそうです。

これだけ人見知りが激しく引つ込み思案の人が大の旅行好きというのがよく分かりませんが、だいたいいつも友人に誘われて、誘われていながら結局自分の行きたいところに行ってしまうという、甘え上手なところがあるようです。人見知りが激しい分、友人になつてしまうと案外馴れ馴れしくなるようです。

ところで、ハルメイユーです。

オデーレが母と生活し、オデーレの母の出身地であり、リムサコフ王家が謎の女怪盗にダイヤ「白鳥の涙」を奪われたという国。そもそもどういうところなのか？

位置は王子のベルーシアのずつと北西、クラリスのロヴィークの北、北の大きなスカルディナ半島の付け根の細いくびれにあります。どういうところなのか、一言で言うと、

「世界一美しい国」  
なのだそうです。

少なくともハルメイユーの国民は皆そう思い込んでいますし、それも肯ける美しい国です。

南からの暖かい海洋風が山脈に導かれるように流れ込み、北からの寒気団とかき回されて絶妙に混じり合い、四季のはっきりした、とても分かり易い自然の美を見せてくれます。

豊かな森と水に恵まれ、湖が多くあります。

地質の関係か湖は真つ青で、宝石のような美しさなのだそうです。一方歴史的には北と南と東の交わる交通の要衝でもあり、周辺にいつも争いが耐えませんでした。

しかし驚いたことにハルメイユーの地が直接戦場になったことはリムサコフ王朝が開かれて数百年、ただの一度もありませんでした。リムサコフ王朝は常に周辺国の勢力の優劣を伺い、常に一番勢力のある国に仕えました。そしてその変わり身の早さはどんな大国の知将にも勝る、芸術的とも言えるものでした。

まあそんなあつちへこつちへ節操なくおもねっていればいつか怒りを買って攻め滅ぼされそうなものですが、リムサコフ王家代々に続く接待上手と国土の美しさが幸いし、この地を戦場にしようという気力を相手に起こさせないのです。

一つ伝説があります。

宝石のように青い湖には一人の美しい妖精が住んでいて、これが王を助け、敵將を招いて七日七晩宴会を大いに盛り上げすっかり骨抜きにして帰り、戦を免れたというものです。

いつの間にやらその時どの国がハルメイユーと結ぶかが周辺国の勢力ステータスになっていきました。

ただハルメイユーが何も努力しなかったということではなく、平和のためにはそれなりの犠牲も払いました。本来国が得るはずだった地の利の利益をその時々々の盟主国に全て納めました。国は貧しく、いわば王家を始め国全体が旅籠の経営者でその利益のほとんどをお代官様に上納して、無事に生活させてもらっているようなものでした。

それでもハルメイユーの国民に不満はありませんでした。

なんといつても世界一美しい国です。その国に暮らしていられるだけでも十分幸せだと思っていたのです。

そしてそれは領土争いが日常茶飯事の戦国時代のお話。

西の戦乱が収まり、ラズベリー大伯爵のおかげでラピスにも平和が定着すると、それまで散っていた利益が手元に残るようになります。それまでに培った外交ルートもあり、ハルメイユーは瞬く間に裕福になりました。

リムサコフ王家も、入れ替わりの激しい戦国時代の権力者たちにあつて、奇跡的に長く続く大陸最古の王族として、その高貴な血筋が貴族社会に珍重されるようになりました。

まったく継続は力なりといいますが、世の中何が幸いするか分からないものです。

ハルメイユーとはそんな国です。

で、ピエトロ氏の聞き知った伝説です。

いつの頃の話か分かりませんが、そもそもおとぎ話のたぐいのお話ですが、それほど古くからある話ではないようです。ですから先に挙げた湖の妖精の話から物語作家がこしらえた創作であるかもしれません。なにしろハルメイユーの人々は皆旅人を喜ばせることに長けていますから。

具体的なお話は、この物語の冒頭に掲げたとおり。

ただ、名前をそれぞれ、

湖の妖精、オンデーヌ

人間の王子、ロードベルト

邪悪な魔女、カラボツス

とすれば、ピエトロ氏の聞き知った伝説そのままになります。バレーは踊り主体にだいぶアレンジされています。

「だから、その名前が気になるのよね」

と、クラリスはしかめっ面でピエトロ氏に言いました。

ちなみにここまでの話はクラリスの質問に対してピエトロ氏が、  
うー、とか、あー、とか言うのをアレクサンドラ夫人がほとんど全部注釈してくれたものです。

「カラボツスって、すっごくお母さんの名前のもじりに感じられてならないんだけど、何かそういう事実はないんですか？」

ピエトロ氏は例によって「あー・・・」と困った顔をするばかりで、これについてはアレクサンドラ夫人も知らなくて、フォローできません。

クラリスがオデールを睨むと、肩をすぼめて「知らない」というポーズを取りました。

けっきょく話はこれでおしまい。

クラリスには大いに欲求不満が残ってしまいました。

お茶会が終わるとクラリスはオデールを誘って人のいない部屋に行きました。

サファイアの精もいっしょです。

部屋はお客様用の休憩室の一室です。

ごてごて凄い金の装飾がされています。

「お話ってなに？」

オデールは特に興味もなさそうに部屋を眺めながら歩いています。クラリスはそんなオデールの様子をじっと冷静な目で見つめています。

「あなたが誰か分かったわ。」

「あなたが、例の宝石泥棒だったのね」

オデルは立ち止まり、唇の端に笑いを浮かべて振り向き直した。「理由は、話してもらえるんでしょうね？」

「わたしね、あの鳥人間がなんであんなことしたのかさっぱり分かんかったの。あなたが命令したんでしょ？ あなたがプリマとして舞台上に立つたために？」

「わたしが舞台上に立って、みんなに踊りを見せびらかしたかったと？」

「宝石をすり替えたでしょ？ あなたがリムサコフ王家から盗んだ『白鳥の涙』とティアラに付いていた『白鳥の白』を」

「宝石商のオネーギン氏は何も言わないじゃない？ 宝石の専門家が、それも世界一のダイヤと自慢するほどのものを、すり替えられて気付かないとでも思うの？」

「二つのダイヤモンドが大きさも色も形もカットの仕方もそっくり同じだったとしか考えられないわね」

「すり替えられてなんかいない、とは考えないの？」

「わたしね、楽屋で最初にあのダイヤモンドを見たとき、変だと感じたの。輝き方がうるさく感じたの。ダイヤモンドって輝きが強ければ強いほどいいみたいだけれど、それでもきれいな輝き方と汚い輝き方があると思うの。あのダイヤモンドの輝き方は汚かったわ」

「大した鑑識眼ね」

「それにね、わたし、あのダイヤモンドに見覚えがあるの。あれそのものじゃなくなつて、ダイヤモンドの種類としてね。わたし、子どもの頃あれを毎日見ていたの。それを確かめるためにサファイアの精に来てもらったの。」

「あれは、妖精が作った人造ダイヤだわ」

「サファイアの精は得意そうにうんうんと頷いています。」

「まあ、そうなの？ 知らなかったわ」

「オデルはそらつとぼけていますが、確かにそれは知らなかったのでしょう。」



「でも昨日あなたが着けていたダイヤモンドはすっかりともきれいな輝き方をしていたわ。ああ、言っておくとね、あれも人造ダイヤモンド。あっちの方は純粹な、ね。夜ビビアナが着けていたのもそうだったわ。」

二つのダイヤモンドのどこに違いがあるかと言つとね、あなたが持っているはずの物はダイヤモンドの上にあらためてダイヤモンドが被せられているの。その微妙な切断面が輝きをうるさくしているのよ。」

「へー、そうだったんだ」

あつはつはつは、とオデールは愉快そうに笑いました。

「まったく、どこの誰がそんな手の込んだことをしてくれたの？」

おかげで二重の手間を取らされちゃったじゃないの。まあ、こんな大都会に来られて、大舞台にも立てて、面白かったけれどね」

「あなたはいつたい・・・」

クラリスの真剣な顔の前にサファイアの精が飛び出しました。

「あのね、あのね、

あのダイヤモンド造つたの、妖精の女王様なの。そんでねー、その妖精の女王様つて言うのが・・・」

ウフフ、とサファイアの精は嬉しそうに笑いました。

「はいはい、そうよね、あんなことが出来るのは妖精の中でもただ一人、妖精の女王様、あなたのお姉さん、ダイヤモンドの精よね」

クラリスはサファイアの精をつまんで脇にどけました。

妖精の国では前女王が突然亡くなり、力のある長老たちも軒並み女王就任を辞退し、こんな面倒な役割、若い妖精は誰もやりたがらず、嫌々ながらダイヤモンドの精が無理やり女王の座に据えられたのでした。

「ふうーん、そうなの？ これ、そんな風になつてたんだ」

オデールは黒のドレスの胸に手を突っ込み、無造作に輝く大粒のダイヤモンドをつまみ出しました。

「呆れた、あなたそんなところに隠していたの？」

「女が宝石を隠すには最適な場所でしょ？ 世界一のダイヤモンドを身につけているのはなかなか気持ちよかったわよ」

クラリスにはちよつと無理なようで、ちよつぱりうらやましく思いました。

「それで、これはどうしたら中のダイヤが取り出せるの？」

オデルは「白鳥の白」をクラリスの手のひらに載せました。

ダイヤモンドはオデルの体温をたっぷり吸っていました。

「そうか、そういうことなのね？」

クラリスはダイヤとオデルの顔を見比べました。

「表面のダイヤモンドは中のダイヤモンドの魔力を封じ込めているんだわ。あなたが狙っていたのはこの魔力を持ったダイヤモンドだったのね？」

「そういうこと。せつかく『白鳥の涙』を盗み出したっていうのに、わたしの求める魔力がぜんぜん感じられなかつたんでがっかりしたのよ。で、ユークリナに帰ろうかなと思ってたらあなたたちを見つけてね、面白そうだから付いてったの。そしたら『白鳥の白』っていうダイヤがあるって言うじゃない？ ラッキーだったわ」

「と言うことは、あなた、本当にカカツサスを越える前から後をつけていたの？」

あつ、もしかしてあの金貨！」

劇場でモデストに見せた鞆いっぱい金貨です。

「あれ、馬車から盗んだ王子の金貨だったんじゃない？」

「女の一人旅ですものね、お金は多く持っているに越したことはないわ」

かえって危ない気もしますが、オデルはどうせただ者ではありません。悪びれもせずニッコリ笑っています。

「じゃあ船でいっしょだったっていう下女もいなかったのね？」

オデルはハルメイユーのお城で幻術を操ってまんまと宝石を盗み出しています。ルピネーの目をくらますのもお手のものだったのでしょ。

「ねえ、もうそんなこといいでしょう?」

オデールがじれたように甘えて言います。

「早く中身を取り出してちょうだいな?」

クラリスはためつすがめつダイヤモンドを観察しました。

「ダイヤって案外衝撃には弱いよね。上のダイヤを割って、衝撃で下のダイヤまで割れちゃったら、まずいんでしょ?」

「ただじゃおかないわよ」

オデールは凄く怖い目でクラリスを睨みました。

「ちょっと自信ないなあ」

クラリスは頭をかいてサファイアの精を見ました。

「女王様とは話せるかしら?」

「ミラを呼び出せば話せると思うけど」

「呼んでくれる?」

サファイアの精は壁に掛かっている楕円形の鏡に向かって

「おーい、妖精のミラやーい」

と呼び始めました。簡単なものです。

おーいおーい、としばらく呼んでいると、鏡面に水のような波紋が広がり、銀色に曇りだし、女の人の顔が浮き上がりました。

鏡の精ミラです。

「お久しぶりです、ミラさん」

クラリスは挨拶しました。

「お久しぶり、クラリス。この間オデット王女に会ったわよ。無事白バラの森に向かったから安心してね」

「そう。それは良かったわ。ありがとう。ところで、女王様とお話しできるかしら?」

「ちょっと待ってねー」

ミラは軽く引き受けて顔を引っ込めました。妖精のやることは万事こんな感じです。

鏡が明るく透き通り始めました。キラキラ眩しい輝きが溢れ、今度はカラーで別の美しい妖精が現れました。

「女王様。お久しぶりです」

「女王様なんていいわよ。ダイヤって呼んで」

「親しみのある笑顔で答えたのは妖精の女王、ダイヤモンドの精です。」

「ハア―イ、ダイヤ姉さん」

「サファイアが横から割り込んできました。」

「サファイア。あなたいいわねえ、好きなところで好きなことして早く妖精の国に帰ってらっしゃい、喜んで女王の席を譲ってあげるから」

「ダイヤモンドの精は女王になってちょっとひがみつぽくなってしまったようです。」

「ダイヤさん」

「クラリスは苦笑しながら尋ねました。」

「このダイヤモンドに見覚えありますか？」

『白鳥の白』を指につまんで掲げて見せます。

「あら、それ？ わたしの造ったダイヤモンドねえ。なんだったかしら？」

「この人もやっぱり妖精の仲間です。」

「しばらく、えーとえーと、と考えて、」

「あー、ああ・・・、思い出した。たしかどこかの国の王様に頼まれて造ってあげたんだ」

「ハルメイユー？」

「ああ、そう、そこ。あの頃はまだあつちの方にも妖精がいたから何かとつながりがあつたのよねえ」

「ダイヤモンドの精は昔を懐かしんでため息をつきました。」

「ダイヤは二つ造ったんですか？」

「最初は一つ。世にもまれな美しいダイヤモンドを手に入れて喜んでいただけれど、それを身につけたご婦人が何故かひどい貧血を起こして倒れてしまふんですって。何か呪いがかけられているんじゃないかっていうんで、わたしが調べただけど、たしかに強い魔

力が込められていてね。手放した方がいって勧めただけ、それは出来ないっていうんでね、魔力封じに上からダイヤの殻を造って被せてあげたの。

でも完全には魔力を封じられなかったのね、今度は夜な夜な正体不明の白い亡霊が城をさまよい歩くようになって、王様もとうとうダイヤモンドを手放すことにしたの。でも一つ問題があつてね、・・・

あつ、思い出した！ あなたのお母さんよ！」

なんだか嫌な予感のしていたクラリスはやっぱりという顔をしました。

「そのダイヤモンドはあなたのお母さんが王様に預けた物なんですって。これを大事に持っていればよし、国は栄えるだろう、だがもし手放したり無くしたりすれば、恐ろしいあたりがあるぞーって、脅されてたんですって。それで王様は手放せなかったのね。それをわたしが余計なことしちゃったから、変な亡霊が現れちゃったのねえ」

「だったら身に付けたりしないで大事にしまっておけばよかったのに」

「無理でしょうねえ。女性なら誰だってそんな魅力的なダイヤモンド、身に付けずにはいられないでしょう？ 世の中には呪われたダイヤなんてごろごろあるのよ。それでも人はそれを高いお金を出して手に入れようとするわ」

クラリスがオデルを見ると、その通り、とニンマリ笑っていました。

「それでね、王様はもうそのダイヤを手放してしまいたいんだけど、たたりが怖い。わたしが見たところそのダイヤを手放してしまえばいさえずれば亡霊は消えると思えたの。でもばれたらカラベラスに何をされるか分からない。それでそっくりなダイヤを造ってカラベラスの目をごまかすことにしたの」

「それがあの『白鳥の涙』なのね」

クラリスはお母さんがそんな手でごまかされるわけではないと思いましたが、ダイヤモンドの精もそれは承知で、どうせこれはカラベラスのたちの悪いイタズラと考えたのでした。

ハルメイユーのリムサコフ王家はこの家宝のダイヤを滅多に表に出さず、幻の秘宝と噂されていたそうですが、それはカラベラスにばれるのを恐れてのことだったのです。

「で、もともとのダイヤはどうなったんです？」

「さあ？ どこか外国にこっそり売り払ったんでしょうねえ」

「それって、いつ頃のことなんです？」

「そうねえ、四十年くらい前だったかしら？」

その後どこでどうなったのかは知りませんが、ここペテロブラーグの宝石商オネーギン氏の手に渡り、オデールにまんまとすり替えられて、今はクラリスの手の中にあるというわけです。

「その後亡霊は現れなかったのかしら？」

「現れたようよ」

と言ったのはオデール。

「もっともつい最近、五日前くらいからだそうだけれど、舞台裏をさまよう白い女の幽霊を見た団員が何人もいるそうよ。オネーギン氏は馬鹿馬鹿しいとまったく相手にしないで、実際一度も見たことないみたい」

幽霊のどこが馬鹿馬鹿しいのかしら？とクラリスは不思議に思いましたが、

「幽霊つてのは見える人には見えるけれど、見えない人にはぜんぜん見えないのよ。とくにここには見えない人の方が圧倒的に多いわね」

とサファイアの精が馬鹿にしたように言いました。

でもクラリスはそればかりではないように感じました。

幽霊が現れるようになったのは、ひよっとして、オデールが近づいてきたためではないでしょうか？

「それで、女王様」

オデールが愛想のいい顔をして尋ねました。

「中のダイヤモンドを取り出すためにはどうしたら良いのでしょうか？」

ダイヤモンドの精のどなたかしら？という顔にオデールはぬけぬけと、

「ダイヤモンドの今の持ち主です」

と答えました。

「取り出したいの？」

「ええ！」

「貧血になるわよ？」

「体力には自信があります」

それはそうでしょう。

うーん・・・とダイヤモンドの精は考えました。

「無理ね。言っではなんだけど、わたしの魔法、完璧だから。いったん造ったダイヤモンドはわたしにも元に戻せないのよねー」

あっけらかんと言うダイヤモンドの精にオデールの神経がブチッと切れました。

「どーしてくれんのよ、この馬鹿あーっ！」

こともあろうに妖精の女王様を馬鹿呼ばわりです。

ダイヤモンドの精はなんなのよと思いつながらオデールの迫力を恐れて、まあまあ、と抑えました。

「そうねえ、クラリスのお父さんだったらうまく取り出せるかなあ？」

「わたしのお父さん？」

クラリスの父アイリスは人間業とは思えない細かい細工の得意な彫金師です。

「あと可能性があるとするれば、ダイヤモンドの本当の持ち主ね。」

現れた白い亡霊というのは指輪の魔力が持ち主を求めてアンテナを伸ばしているんじゃないかと思うの。たぶんまだ生きています。しょうね。その持ち主がそのダイヤを手にして魔力を解放すれば、

外側の殻は内から砕けるんじゃないかしら？」

そう話してさすが妖精の女王はオデールがその関係者ではないかと疑いの目を向けました。

「そう。それを聞いて安心しましたわ」

オデールは不敵に笑って女王様にお辞儀しました。

その後はダイヤモンドの精が「女王なんて面倒なだけでたいくつだったらないわ」と愚痴を言い出したのでサファイアの精に相手を任せて、クラリスはオデールと向き合いました。

「それで、結局あなたは誰なの？」

「見当は付いているんでしょ？」

「オデールの双子のお姉さん」

「当たり前」

「本当の名前はなんて言うの？」

「しばらくはオデールのままでいいじゃない。ややこしくなるから偽のオデールは意味ありげにニヤリと笑いました。

クラリスは胡散臭そうに見て、

「それじゃあ今本当のオデールはどこにいるの？」

「さあ？ ユークリナのお屋敷にいるんじゃない？」

そらつとぼけています。

「あなたもオデールといっしょに住んでいるの？」

「わたしは母の方と暮らしているわ」

「で、お母さんに頼まれてこのダイヤを捜し出したってわけ？」

「そういうことになるかしらねえ」

そっくり同じ顔をしていても妹のオデールとは人物が違いすぎます。こういう人間に成長したのは明らかに母親の影響と思われれます。

「このダイヤの本当の持ち主となるとあなたのお母さんもただ者ではないわね？」

「ようやく話の全体が見えてきたってところかしら？」

あいかわらず面白がっているような傍観者の構え。

ピエトロ氏に聞いた『白鳥の湖』のオリジナルの伝説。



あの伝説がどの程度真実なのかは分かりませんが、人間になるために若々しさをすっかり失ってしまった妖精の娘、オンデーヌ。

それがオデールの母親だったとしたら……

「あなたのお母さんは……」

オデールはクラリスの唇に指を当ててさえぎりました。

「後はあなたの頭の中だけに留めておきなさい。いずれ、時が来るまでね」

夕方になって王子が帰ってきました。

王子はまるで、聖人のようすがすがしい顔つきをしていました。

## 第28章 白バラの森

カラベラスの白バラの森は元もとロヴィークのお城のあった場所にあります。元は小さな山だったのですが、大幅に削られて今は緩やかな丘になっています。もちろん城も跡形もありません。

森は名前の通り全ての木が白バラで、一年中若々しい緑の葉が生い茂り、みずみずしい花がいっぱい咲いています。

それはこの森が自然にできた森ではなく、魔法によって作られたからです。

その魔法の主はもちろんカラベラスです。

カラベラスとその夫アイリスは永遠の命を得る代わりに、背中から伸びた緑の管によってこの森とつながり、永遠にこの森から外に出ることはできないのです。

森は数本の巨大な木が無数の枝を伸ばして、全体がこんもり巨大な傘に覆われたような姿をしています。

森の周囲は内部の緑の白バラとは違った黒い鋼のようなイバラが覆い、威嚇するように鋭い棘を怒らせています。

このイバラのせいで通常そとの人は森の中に入ることはできません。主カラベラスの許可を得た者だけがイバラの扉を開かれ、中へ通されるのです。

昼をゆっくり回って、オデット王女と仲間の白鳥たちが火花の精ヴァイオレットと白い天馬ナージャに先導されて白バラの森の上空に到着しました。

「こっちだよ」

ナージャにまたがったヴァイオレットが緑の枝を縫って森の内部へ下りていきます。オデット王女たちも後に続いて、ひときわ大きな大木の下へ向かいました。

水のないところへ上手く下りられるかしらと心配すると、地面に下りようと足を伸ばしたところ、それは人間の足に変わり、地面に

降り立つと同時にオデット王女は人間の姿に変わりました。

他の白鳥たちも次々降り立つと同時に人間の姿に変わり、皆歓声を上げ、抱き合って喜びました。

木の根元に五つの人影が立っていました。

白バラの精カラベラとアイリス。

オーロラ姫と四歳になるオーロル王子。

人の姿をしたリラの精ユリア。

オデット王女と仲間たちは五人の前に姿勢を正して並ぶと深々お辞儀しました。

「カラベラス様。オーロラ姫。ユリア様。私はユークリナ国のオデット王女でございます。どうぞよろしくお願いします」

「カラベラスねえ・・・」

白い体に薄い紫色の髪をしたカラベラスは軽いため息まじりに言いました。

「今はカラベラって名乗っているつもりんだけど、まあ、カラベラスでしょうがないか」

ユリアが皮肉っぽい視線をよこして言いました。

「悪名つてなかなか消えないものね。あきらめなさい」

ユリアも人間ではあり得ない綺麗な紫色の髪をしています。

「まあまあ二人とも。王女様の前で失礼よ。」

「ごめんなさいね、けっして仲が悪いわけじゃないのよ。ケンカするほど仲がいいって言うじゃない？」

黄金の髪をしたオーロラ姫は息子オーロルの手を握って穏やかに笑っています。

オーロラ姫は二十四歳。本当は三十四歳なのですが十年間をカラベラスのせいで眠って過ごして、その間年は取っていません。

とても綺麗で、かわいらしい印象で、オデット王女は一目見た瞬間、ああこの人は生まれてからずっと幸せな気持ちだけで生きてきたのだなと思いました。

本当はそんなことはないのだけれど、たしかにオーロラ姫は周り

の全ての人々から愛され、今も愛に満ちたととても幸せな毎日を送っています。

まさにおとぎ話の「王子様とお姫様は末永く幸せに暮らしました。めでたしめでたし」そのままの生活です。

オデット王女は幸せなオーロラ姫とは対照的な険しい真剣な眼差しでカラベラスに問いました。

「カラベラス様、私たちがこちらへまいったのは・・・」

「まあ、そう急がないで」

カラベラスは手を上げてオデット王女を抑え、にこやかに言いました。

「長旅で疲れたでしょう。他の皆さんはどうぞこの森でくつろいでくださいな。申し訳ないけれどオーロラ姫、皆さんをご案内してくださいませんか？」

「ねえねえカラベラス様」

三人の子どもたちが嬉しさを溢れさせて問いました。

「また蝶々になりたいなあ」

「それはダメ。あれは夢の中だから出来たのよ。クラリスが帰ってきたらまた夢の中で遊びましようね」

と、カラベラスはオデット王女に視線を送りました。

子どもたちはがっかりしてつまらなそうにしましたが、

「あら、どうしたの？　せつかく人間に戻れたのに。ほら、あつちに根っこで作ったトランポリンがあるわ。オーロル王子と遊んでらっしゃい。アイリス、あなたも子どもたちのお相手をしてくれる？」

「うん。それじゃあ行くこうか？」

アイリスはオーロル王子の手をオーロラ姫から受け取り、三人の子どもたちを率いてトランポリンの方に歩いていきました。

オーロル王子はアイリスにとってもなついているようです。

「ほら、あなたたちも行つてらっしゃい」

カラベラスはヴァイオレットとナージャもしつと追い払い、ヴァイオレットはアッカンベーターとやってナージャといっしょに子ども

たちの後を追いました。

「それじゃあ私たちも行きましようか」

他の仲間たちもオーロラ姫が案内して歩いていき、オデット王女、カラベラス、ユリアだけが残りました。

「さて、ゆつくりお話ししましょうか。どうぞ、座って」

大木から太い根が無数に張り出しています。それを椅子に腰掛けて、三人は旧知の仲のように三角形に向き合いました。

オデット王女がズバリ訊きました。

「ロットバルトはずいぶんカラベラス様を恨んでいるようでしたわ。二人の間に何があつたんです？」

「二人の間に、ねえ。誓ってそんな怪しいものじゃないんだけど。仲間になれって誘われたのよ。で、断ったら、じゃあおまえを倒すって攻めてきて、ま、降りかかる火の粉を払ったってだけなんだけどねえ」

「仲間ってなんの？」

ユリアが問いました。彼女もカラベラスのロットバルトとのいきさつは知りません。

「世界征服」

カラベラスはしらつとした目で答え、オデット王女とユリアは、は？ と間の抜けた顔をしました。

「あなただって、そんな誘いを受けたら断るでしょ？」

ユリアに問いました。

「そりゃまあ、そんな馬鹿馬鹿しいこと、まともに取り合えないわねえ」

「でしょー？」

「なんだかロットバルトが馬鹿みたいです。」

「その人、本気でそんなこと考えていたの？」

「マジだったみたいよ」

オーロラ姫の言うように今の二人はなかなか仲がよろしいようです。

「ミラの情報じゃあなかなか知的な悪役って感じだったけど、向こうの方は情報が少ないからねえ、買いかぶっていたかしら？」

昨日鏡の精ミラから連絡があつて、ユリアも一通り事件のことを聞きました。

「それ、いつのこと？」

「五十年くらい前ね」

「五十年。その程度だったら、妖精の国にも事情を知る人がいてもいいと思うんだけど。世界征服を企むような愉快な人、きつと話の種になると思うんだけど」

すっかり道化扱いです。

「本人は魔王を名乗っていますよ。すつごい自信過剰で、たしかに滑稽なところもあるけれど、力はそれなりのものを持っていると思うんですけど？」

オデット王女はさすがに呪いをかけられている当事者なので笑つてばかりもいられません。

「かわいそうに、わたしが出鼻をくじいちゃったから、名前を上げる余裕がなかったのねえ・・・」

カラベラスはしみじみ言いましたが、内心バカにしているのはありです。

ユリアも、

「悪い女に引つかかったものねえ」

と、半分面白がつてロツトバルトに同情しました。

「面白がつてる場合じゃないですよ」

まじめなオデット王女はちよつと怒りました。

「わたしはわたしと仲間たちにかかつている呪いを解かなくちゃならないんですからね。それとも、そんなおバカさんのかけた呪いなんてちよちよいのちよいで解いてくださいます？」

「どれどれ、見せてみて」

まずユリアがオデット王女に向き合い、両の目をじーっと覗き込むようにして、両手で王女の頭をいろいろ探りました。

「へえ、なかなか高度な魔法が駆使されているわね。」

「だいたい変身の魔法は動物系の妖精が得意なのよね。でも人に施すとすると自分が変身するのはわけが違ふものね。」

「魔力を使った霊的な変身がふつうだけど、それは変身の魔力が切れたら元に戻っちゃうから呪いとは言えないわね。」

「呪いと言うからには徐々に別のものに成り代わって行って、元に戻れなくなっちゃうわけよね。成り代わっていくってことは体の構造が別のものになっちゃうってことだから、いったん完全に変身してしまつたらちよつとやそつとじゃ元に戻れないわね。」

「今のあなたはその途中の段階にあるのね。今はまだ魔力による霊的変身の段階だけど、体の構造基盤にじわじわ新しい情報が浸透していつているから、着実に完全な変身への準備が整いつつあるって感じね。」

「解説はけっこうなんですけれど、で、けつきよくのところでどうなんでしょう？ 呪いは解けるんですか？」

「わたしは遠慮しておくわ。一度失敗しているから。」

「あなたどうぞ、とユリアは皮肉たっぷりカラベラスにバトンを渡しました。」

「そうねえ。わたしが自分の魔力でさらに上の呪いをかけ直すことも不可能ではないけれど、やめておいた方が無難でしょうね。たぶん変な人になっちゃうでしょうから。」

「白鳥になっちゃうよりましじゃないの？」

「白鳥になっちゃう方がましかもよ。」

「それは考えるとちよつと怖いです。」

「呪いを打ち消す一番いい魔法はね、正反対の魔力を同じだけ与えることなの。この種類と分量の見極めが肝心ね。でもわたしには無理ね。わたしの魔力は彼に近いから。せいぜい白鳥が白馬になるくらいかしら？ どつちがいい？」

「死が眠りになるようなものかしら？」

「ユリアがちくりと嫌みを言いました。」

「それはあなたの力不足。わたしは悪い魔女であなたは良い妖精だったからやり方は間違ってたのよ」

これも相当な嫌みです。

さあ犬でも猫でもライオンでもいいわよ、と、ふざけていると思えませんか。

「もうちよつと人間に近づけないんですか？」

「お猿さんがいい？」

「いえ、けっこうです」

オデット王女は、ロットバルトの言っていたとおりこの人は当てにならないんじゃないかしら、と頭が痛くなってきました。

だいたいこのカラベラスという人は、見た目はせいぜい二十歳くらいの若さで、今やオーロラ姫にも勝る無邪気な笑顔をしているくせに、中身の方は底なしの意地悪さです。

このおとぼけぶりは絶対にわざとやっています。

そのカラベラスが軽く挑むような視線をよこして言いました。

「この森にいれば彼の魔力を中和することは出来るわよ。ここに限りずうつと人間の姿でいられるわ。でも、呪いの魔力は進行していくから、ここを出たとたん白鳥に変身して、二度と人間には戻れなくなるでしょうね」

オデット王女は考えました。最悪の場合それも考慮に入れる必要があります。

そういえば、思い出しました。

「灰色の魔女」

ユークリナの森の灰色の魔女の小屋でもオデット王女たちは人間に戻ることが出来ました。

「灰色の魔女を知っていますか？」

「灰色の魔女？」

カラベラスは首をひねりました。

「彼女もあなたにすつごく恨みを持っているようでしたよ」

あらあらとユリアが意地悪な目を向けました。



「さあ、知らないわねえ・・・」

「あちこちで恨みを買って置いていちいち覚えてられないのよね？」

「ほんとに知らないってば」

「ヴァイオレットは彼女は元もと妖精だったんじゃないかって言うてましたよ」

「妖精？」

オデット王女は詳しく話しました。

「元妖精の魔女ねえ・・・」

カラベラスは片方の眉をつり上げて実に不愉快そうな顔になりました。

「心当たりがあるって顔ね？」

ユリアもちやかすのをやめて真剣な顔つきになりました。

「自分の陣地に入ったからって全ての魔力をうち消せるものではないわ。あなたのように特別に強い魔力の持ち主か、正反対の魔力の持ち主か、逆にそっくり同じ魔力の持ち主か。

ねえ、その灰色の魔女って、白鳥の精、オデレーヌのことなんじゃない？」

ユリアとオデット王女はカラベラスを見つめてその答えを待ちました。

「オデレーヌねえ。あなたは彼女をどういう風に知ってるの？」

「ハルメイユーの湖に一人で住んで、人間が大好きで、こっそり人間たちの手助けをして国を守ってあげてるって」

「あそこの人たちは美しい国土を愛していて、自然を大事にしていたからねえ。ま、このところすっかりお金持ちになってだんだん変わってきたようだけれど」

「ところがいつの間にか湖から消えてしまって、どこでどうしているのか誰も消息を知らない。ねえ、彼女がどうして魔女になってしまったの？」

ユリアは非難する目でカラベラスを見つめました。

「わたしが人間にしてあげたのよ、彼女に頼まれてね」

やっぱりというようにユリアは失望して痛ましい表情を浮かべました。

「何よその顔。いいじゃない、本人がそうしてほしいって望んだんだから」

「なんで人間になりたがったのかしら？」

「人間の男性を好きになっただんですって」

「ハア・・・、とユリアはため息をつきました。

「妖精が人間に恋するのろくなことにならないのよね。で、ろくなことにならなかったんでしょ、やっぱり？」

「知らないわよ、そんなこと。わたしは人様のプライベートには極力立ち入らないことにしているの」

嘘言いなさい、とユリアはあからさまに不信の目を向けました。

オデット王女も暗い表情で言いました。

「彼女はすごくあなたを恨んでいるんですよ」

「そうよ、とユリアも言いました。

「頼まれて、素直にハイハイって聞いてあげたわけじゃないんですよ？ 代わりに何を要求したの？」

「白鳥の白い輝き」

「まあ！ なんてひどい！」

ユリアは大げさに顔を作ってカラベラスを非難しました。

「よく言うわよ」

カラベラスも負けずにユリアを白い目で見ました。

「妖精が人間になるってことがどういうことか、あなたも分かっているんでしょ？」

「そりゃあまあ、とユリアは視線を逸らしました。

「どうということなんです？とオデット王女が訊きました。

「さっき言っただでしょ、変身の呪いのこと。

わたしは完璧主義者ですからね、彼女を本物の人間にしてあげたの。

例えばユリア。あなたは人間の姿をしているけれど、本物の人間

ではないわね？ 霊的変身で姿を人間にしているに過ぎないわ。魔力によつてね。体はまるで鳥の羽のように軽い。そうでしょ？

わたしは彼女を体から作り替えてあげたのよ。そのために邪魔だった妖精の輝きを頂いただけよ」

カラベラスは得意になつていますが、オデット王女には納得できません。

「でも彼女、全身灰色になつて、自分がこうなつたのはあなたのおかげだつて……」

オデット王女は辛そうにカラベラスの顔を見て答えを待ちました。「灰色？ 何よそれ？ だいたいそれがオデレーヌなら、どうしてわたしを恨むのよ？ 感謝されて当然なのよ？」

カラベラスは憤慨してオデット王女を睨みました。ユリアが疑わしそうに訊きました。

「あなた本当に彼女をふつうの人間にしてあげたの？」

「してあげたわよ。だいたいあなたみたいに人間じゃあり得ない紫色の髪の毛なんてしてたらおかしいでしょ？ 彼女に似合うように艶やかな黒髪にしてあげたわよ。肌だつてすべすべのピチピチにしてあげたし。わたしの仕事は完璧よ。特別サービスまでしてあげ……」

カラベラスは途中でやめて頬をちよつと染めてそつぽを向きました。

ユリアがニヤツと笑つて追求しました。

「特別サービスつて、なーに？」

カラベラスはふてくされたみたいに、「あなたの言うとおり、妖精と人間の恋なんてどうせ上手くいくわけがないと思つたから、普通の人間じゃなく、魔力を残して魔女にしてあげたの。肉体的変身と霊的変身の間くらいになるようにね。妖精に戻れるように妖精の輝きもちゃんどダイヤモンドに封じ込めて取つておいてあげたし」

「あらまあ。わたしはてつきりあなたがお肌のお手入れに使つてし

まったんだとばかり思っていたわ」

「わたしにはそんな必要ないわよ」

「それで！」

おちゃらけている二人にオデット王女がイライラして割り込みました。

「そのダイヤモンドはどこにあるんですか？」

「ハルメイユーのお城にあるはずよ、たぶん」

残念ながらそれはすでにありません。ダイヤモンドの精が余計なことをしてペテロブラーグに渡り、今はオデールの手にあります。

「なんであなたが持っていないの？」

「わたしが持つていたんじゃないでしょ？ 魔力を持つているんだから、ハルメイユーにいれば気付くわよ」

カラベラスは思いの外優しいところがあるようです。

ただ、その配慮は残念ながらオデレーヌには届かなかったようです。

なぜでしょう？

「じゃあ、ロットバルトのせいかしら？」

オデット王女がポツリと呟きました。

「ロットバルトがどうしたの？」

「灰色の魔女は、わたしの見るところどうやらロットバルトの奥さんだったらしいんです。別れちゃったみたいですけど」

「あらびつくり」

それはカラベラスも知らなかったようです。

「それを早く言いなさいよね」

オデット王女をしかって、うーん、そうだったの・・・と苦い顔をしました。

「オデレーヌが好きになった相手ってロットバルトだったの・・・」

「人間じゃないですよね？」

「人間じゃないわよね」

あの馬鹿、とカラベラスは言いました。

「妖精の彼女が知らなかったとも思えないし、わたしが反対する  
でも思ったのかしら？ まあ、反対したけど」

「前後関係がよく分からないわね」

とユリア。

「ロットバルトとオデレーヌ、どっちが先なの？」

「うーん、オデレーヌ、とも言えるし、ロットバルトとも言えるし  
・  
」

ユリアはカラベラスがまだ何か隠していると睨みました。

「だいたいロットバルトって何者？ 世界征服するのになんであな  
たに戦いを挑んでくるのよ？ あなた、そういうこと全然興味ない  
でしょう？」

カラベラスはあまり面白くない過去を思い出して説明しました。

「オデレーヌが人間にしてくれと頼んできたとき、わたしはロット  
バルトとはまだ面識はなかったわ。

あなたはロットバルトの正体知ってる？」

「鳥の妖怪ですよね？」

オデット王女が答えました。

「そう。何百年も生きている大フクロウの大将よ。長く生きている  
内に魔力を得て、人間に変身する術を身に付けたんでしょね。

昔ジャロームって言う最低な馬鹿男がいてね」

またこの嫌な名前が出ました。

「この男が国を一つ、その国の人間を皆殺しにして滅ぼしてね。そ  
の虐殺の時に森を一つ焼き払ったのよ。その森にロットバルトは一  
族と共に住んでいたようなの。森を焼かれてさぞ恨みに思ったこと  
でしょうね。もしかして、彼が魔力に目覚めたのはその時かもしれ  
ないわね。」

ところでその後その最低馬鹿男は、調子に乗ってまた別の国を同  
じように滅ぼそうと仲間と計画していたの。わたしもさすがに胸が  
むかついてね、その馬鹿を殺してやったの」

その死に様を思っただしょうか、カラベラスは黒魔女の笑みを浮

かべました。

なんと、ジャロームを暗殺したのはロットバルトではなくカラベラスだったのです。

やはり恐ろしい女です。

「ところが、ロットバルトはその男にそれこそただ殺すだけでは飽き足りない激しい憎しみを持っていたのね。彼はその男を殺すための別の計画を持っていたの。」

それが、ジャロームの東征計画。

この馬鹿は神の軍隊気取りで東の異教の国を同じように攻め滅ぼそうと計画していたの。

で、ロットバルトは、その作戦に参加する人間全てを同じ目に遭わせてやろうと計画していたの。

鳥の軍団を率いてジャロームの軍隊を皆殺しにしてやろうとね」

これまた凄まじい話です。

それほどロットバルトの恨みは深く激しかったのです。

「鳥が人間相手に戦えるの？」

「人間が無数の鳥のくちばしと爪にかなうと思う？」

それを想像すると身の毛がよだちます。

「鳥ってバカが多いから、強烈な親分が命令すればなんにも考えないで従っちゃうのよね」

知った風なことを言います。

「ところがそのロットバルトの計画をわたしが潰しちゃったでしょう？ もうすっかり頭に来ちゃったらしいのね」

「それで世界征服なんて極端に走っちゃって、あなたに協力しろ、さもなければ殺す、ってなっちゃうたわけね」

ユリアが腕を組んで納得しました。

「そういうことなんでしょうねえ」

カラベラスが困ったもんだとため息をつきました。

「で、ロットバルトはあなたに戦いを挑んできたのね。どんな風に？」

「計画通り。無数の鳥の軍団を率いてね。でもまず最初に仲間になれって言うてきたのよね、わたしの城に訪ねてきて」

その頃カラベラスは岩山の中の巨大な空洞に建つ華麗なお城に住んでいました。今そのお城はエメラルダに移築されてオーロラ姫たちが住んでいます。

「彼、ずいぶん熱心に人間というものがいかに愚かで地上に君臨するのにふさわしくないか演説して、自分が指導者となって人間たちをまともな生き物にたち返らせる、あなたにもぜひその手伝いをしてほしいって言ったわ。」

ね？ 笑っちゃうでしょ？

人間が愚かだなんて、今さら何言ってるの？って感じ。

で、わたしはそんなくだらないことおやめなさいって親切心で言うてあげたの。そうしたら彼ったらすっかり怒っちゃって、それならまずあなたを倒すって出ていつちゃったの」

どうも展開に飛躍があります。若きロットバルトは血気盛んな正義漢といった風ですが、それにしてもいきなり「倒す」はないですよ。

オデット王女はカラベラスがさんざんロットバルトをバカにして怒らせたに違いないと思いました。

「襲撃は明け方、夜の鳥と昼の鳥が大挙してやってきたわ。」

で……

カラベラスは上を向いたまま黙ってしまいました。

「どうしたのよ？」

とユリア。

カラベラスは、うーん……と首を傾げながら、

「あの人、必殺技があるのよ。鳥でしょ？ 翼に魔力を集中させて竜巻を起こすのよ。で、一発だけその攻撃があっただけど……」

「おしまいって何よ？ あなたが勝ったんでしょ？」

「と言うか、勝負にならなかったというか・・・」

カラベラスは目を逸らして苦笑いしました。

オデット王女がその怪しい様子に言いました。

「まだあなたを恨んでいる人たちがいるんですよ。人、ではないですけれど。人の顔をした大きな鳥たち、たぶん彼らもフクロウだと思っただけですけど、彼らもずいぶんあなたを恨んでいましたよ。あなたに騙されて主人を裏切ってしまったって」

「ああ、そう」

ユリアがジロリとカラベラスを睨みました。

「あなた、何やったの？」

「それはたぶんロットバルトの仲間の大フクロウの一族でしょうねえ」

と、ユリアを避けるようにオデット王女に向かって言いました。

「何か約束をしたようにも言っていましたよ。自分たちとの約束を果たさせて」

「ああ、そう・・・」

ますますきつくなるユリアの視線を嫌がってカラベラスは反対の空を見ました。

「めんどくさかったんでね、ちょっと、狡い手を使ったのよ。」

部隊を率いているその大フクロウたちに明るい昼の美しい景色のイメージを送って、あなたたちが暗い夜の世界で生きなければならぬのは大将のロットバルトのせいだ、彼を倒せばあなたは解放されて昼の世界で生きられるようになるのよ、って暗示をかけたの。

それで大フクロウたちは敵をロットバルトに切り替えて、いつせいに襲いかかって魔力の源である羽を全てむしり取ってしまったので、ロットバルトは地上に真つ逆さま、わたしとの勝負はそれつきりおしまいってわけ」

まさに魔女の戦い方です。

信頼しきっていた仲間に襲われ魔力を失ってしまうとは、またし



てもロツトバルトの無念は想像に余りあります。

「ひどいことするわねー」

ユリアは今度こそロツトバルトに同情して思いつきカラベラスを非難しました。

オデット王女が心配して訊きました。

「それで、その後大フクロウたちと鳥たちはどうしたんです？」

「どうもしないわよ。ロツトバルトが一人で張り切ってやっていたことだから、そのロツトバルトがいなくなっちゃったから、部隊は即解散。朝日が昇ってきて、みーんなどっかに行っちゃった」

薄情なものです。これではロツトバルトがあまりにかわいそうではありませんか。

オデット王女はロツトバルトもそうですが、ロツトバルトを襲った大フクロウたちのその後を思って心が痛みました。

襲われた方ももちろんですが、裏切つて襲つた方も心の傷はさぞや大きく深かったことでしょう。

ことが済んでしまった後で自分たちのしでかした間違いに気付いて愕然としたのではないのでしょうか？

しかもロツトバルトを倒してももちろん昼の世界で暮らせるわけはありません。全部カラベラスの嘘なのですから。再び暗い夜の世に逃げ込んで、頭の中に焼き付けられた昼の美しい世界を思い、どれほどカラベラスを恨み、また自分たちの愚かさを恨んだことでしょう。

元もと頭が良く、物事を考え込む習性のある彼らです、この悲劇を何度も何度も思い返し、ロツトバルトの一族なら多少の魔力もあつたでしょうから、とうとうあのような人そっくりの顔になつてしまったのでしょうか。

「かわいそうに・・・」

思わずポツリと呟いて、チラリとカラベラスを見ました。

ユリアにも思いつきり白い目を向けられて、カラベラスもとうとう降参して言いました。

「分かった。分かったわよ。その人になりかけのフクロウたちをなんとかすればいいんでしょう?」

カラベラスは夕方になったらコウモリたちを呼び寄せて大フクロウたちに使いを出すと約束しました。

ところで人間の娘になったはずの白鳥の精オデレーヌが灰色の魔女になってしまった理由ですが。

「それはわたしも知らないわね。たぶんロツトバルトと何か関係があるんでしょうけれど。わたしはオデレーヌの恋人がロツトバルトだったなんて知らなかったんだから」

二人はいつどこでどのように知り合ったのでしょうか?

## 第29章 魔王 対 魔女

夕闇が濃くなり次第に夜に移っていく頃、白バラの森から距離を取った別の森に待機していた人の顔をした大フクロウ六羽は、カラベラスの使いのコウモリから伝言を聞き、白バラの森へ向かいました。

白バラの森では、恩義のある鳥人間たちが来ると聞いたオデット王女の仲間たちもカラベラスの下に集まり、みんなで彼らの到着を待っていました。

オーロラ姫とオーロル王子はお城に帰りました。

リラの精ユリアは残っています。

みんなのいる周りの白バラたちがほんのり光って灯りの代わりになっています。

それが上空から大フクロウたちの目印になるはずです。

すっかり夜になってしばらくして、星空の下、六羽の巨大な鳥の影が現れました。

彼らが森に向かって降下してくると、遙か彼方から物凄い突風が吹いてきて六羽の間を通り過ぎました。

その一撃で六羽のうち三羽が切り刻まれました。

突風はゴオツと渦を巻いて旋回すると舞い戻ってきました。

さらに二羽が切り刻まれました。

残る一羽に突風が向かってきたとき、悲痛な叫びが響き渡りました。

「我が主ロツトバルト様！」

最後の一羽も切り刻まれ、森に落下してきました。

落下する大フクロウの視界に様々な色彩の溢れかえる昼の世界が広がりました。

大フクロウは笑いました。

「またしても幻か。しかし、美しい・・・」

六羽はカラベラスの足元に次々墜落し、切り刻まれた傷口からビチャツと大量の赤い血が噴き出しました。

女たちの何人かが気を失い、三人の子どもたちはひしと抱き合い、それをカラベラスの夫アイリスが守るように抱き寄せました。

「このやるう！」

いきり立つヴァイオレットをカラベラスが手をすうっと上げて止めました。

「お久しぶりね、ロットバルト」

「カラベラス」

背中に生やした大きな翼を羽ばたかせてロットバルトがカラベラスの見上げる空に静止しました。

「何故です!？」

思わずオデット王女が声を上げました。

「彼らはあなたの仲間ではありませんか？」

「おお、オデット姫。麗しいお姿拝見できて嬉しいですぞ」

ロットバルトは言って、残酷にニヤリと笑いました。

「愚か者は邪魔です」

カラベラスが皮肉に笑って言ってやりました。

「あらあら、また世界征服ごっこを始める気？」

ロットバルトは憎々しげにカラベラスを睨みました。

「相変わらず偉そうに小馬鹿にした口をきくな。」

ああ、そうさ。だがやり方を少し変えてな、もっと人間風にやることにしたよ。ところで、と」

ロットバルトはフンと鼻で笑いました。

「ずいぶんまたかわいらしい姿になったものではないか。その背中に生えているものはなんだ？　これがおまえの新しい城、新しい王国か？　こんなちっぽけな世界に縛り付けられて、おまえも落ちぶれたものだな？」

ロットバルトはざまあ見ると大口を開けて笑ってやりました。

カラベラスはウンザリしたように言いました。

「相変わらず程度の低い考え方しか出来ないのね。そうよ、これがわたしの新しい城、新しい王国、わたしの望んできた理想の世界よ。わたしはね、あなたと違って自分さえよければそれでいいの」  
ニッコリ笑うカラベラスをロットバルトはむっつりして睨みました。

ロットバルトはジロリとアイリスを見ました。

「それがおまえの人間の夫か。まったく、くだらん」

オデット王女はあら？と思いました。

ロットバルトはもしかしてアイリスに嫉妬しているのではないでしょう？

「もはやおまえは見限った。そこまでつまらん女とは思わなかったぞ。オデット王女、そこから離れていただきましようか？ あなたを傷つけるわけにはいきませんのでな」

ロットバルトはカラベラスに戦いを挑むつもりです。

カラベラスが答えました。

「いいでしょう。ユリア、オデット王女たちを頼むわ。また勝負にならなかったなんて言い訳にならないようにわたしから離れていてね。ちよつと、お仕置きしてあげるわ」

「ほざきやがれ」

ロットバルトはユリアが皆を守って移動するのを待ちました。

アイリスだけは残りました。

「わたしは動く必要がないだろう？」

「ええ、そうね。かえってあなたがいた方が彼も本気になれるんじゃないかしら？」

ロットバルトは怒りにギリギリ歯ぎしりしました。

「どこまでもバカにしゃがる。後で後悔するがいい」

カラベラスも皆の移動を待つて訊きました。

「ところで体の方はもうよろしいの？ 少しばかりご同情申し上げていたのよ」

「おかげさまでな、すっかり回復したよ。いや、回復ではない、お

まえに突き落とされた地獄から這い上がって生まれ変わったのだ。以前より遙かに強力な魔王にな」

「それはまたご大層なものにおなりね？」

「すぐに思い知らせてやるさ」

ユリアは皆を離れた大木の陰に避難させました。

「ではいいな？」

「ええ、どうぞ」

ロットバルトは両腕を広げ、翼を広げ、魔力を溜めました。

「くらえ！」

腕と翼を思い切り振り下ろすと凄まじい風の刃が生まれてカラベラス目がけて襲いかかりました。

カラベラスは指を一本軽く振りました。

風の刃は大きく広がってただの風になって地上を撫でました。

「くっ」

ロットバルトは大きく舞うようにして次々風の刃を撃ち下ろしました。

カラベラスが手を振ると木の枝がざわざわ鳴って空気をかき回しました。

風の刃は枝一本切り落とすことなくことごとくかき消えてしまいました。

ロットバルトの顔に驚愕が走りました。

「もうおしまい？」

「フン、ならば」

ロットバルトは猛然と突っ込んできました。間近から攻撃するつもりです。

しかしロットバルトが森に入ろうとしたところ、急に体の自由が利かなくなつて、宙でじたばた泳ぐようにして慌てて上空に戻りました。

「ああ、ハエよけの網が張ってあるの。大きなハエにも効果があったようね」

森の周囲にはカラベラスの魔力の幕が張つてあるのです。

それに気付かないロットバルトは、たしかにカラベラスの敵ではないかもしれません。

「おのれえ・・・」

ロットバルトは憤怒の表情になりました。

「ユリアとか言ったな！」

なんの警戒もしないでのんびり見物を決め込んでいるユリアに言いました。

「他の奴らはどうでもいいが、姫だけは絶対に守れよ。姫に何かあればおまえも殺してやるからな！」

恐ろしい言葉を吐いてロットバルトはグンと上昇しました。

「俺の力を見くびるなよ。こんな森、貴様ごと潰してくれる！」

ロットバルトは空気を大きく掴んで回転すると、空気が渦を巻き、それは次第に大きくなり、ついに天と地を結ぶ竜巻となりました。

グリグリと攻める竜巻にカラベラスのバリアーもさすがに悲鳴を上げました。

「ハハハ、どうだ、バラバラになるか、押し潰されるか、男の力を思い知れ！」

カラベラスは慌てず森に指示を送りました。

外側を守るイバラが物凄い勢いで伸びてきて、枝を布を織るように絡み合わせ、森全体を覆っていきました。

イバラは鋼のように強力で、竜巻の衝撃にもビクともしません。

「くっ」

ロットバルトは魔力を強め、竜巻をさらに大きく、強烈にしていきました。

「いつまでそうやって隠れているつもりだ！」

地上から石を巻き上げ、カチカチぶつけさせ、竜巻に電気を帯びさせていきました。

「くらえ！」

ビシビシッと雷がイバラの表面を走りました。

「いつまで耐えられる?」

ビシビシ雷が走り回るうち鋼のイバラが真っ赤に焼けてきました。「どうだ、どうだ、どうだ!」

ハハハ、とロットバルトは勝利を思いました。

ついにイバラが数本ほどけて浮き上がりました。

と、それは竜巻に巻き上げられてあっという間にロットバルトを取り囲みました。

ロットバルトがギョツとすると、巻き上げられたイバラははるか上空で再び硬く結び合つと、ギユギユギユギユツと絞られていききました。

「うわっ」

ロットバルトは慌てて竜巻を解いてイバラの包囲から逃げ出しました。

間一髪、イバラは硬く絞り上げられ、鋭いトゲを突き出す硬い綱に編み上がりました。

もし逃げ遅れていたらあの中に巻き込まれて無惨な最期を遂げていたことでしょう。

編み上がったイバラはまたバラバラほどけて獲物を探すようにのたうち回りました。

「く・・・」

ロットバルトはイバラを避けながら次はどうやって攻めてやるかを思案しました。

『あれか・・・』

ロットバルトは思いましたが、その結果を考え、一呼吸して自分を落ち着かせました。

「いいだろう、大したものだ。この勝負はここまでにしてやる」

ロットバルトは攻撃の魔力を解き、元の位置に戻りました。

「あら、もう終わりなの? わたし、まだなーんにもしてないんだけど?」

「まったく、言いやがるぜ」



ロットバルトは苦り切った顔をしました。

この勝負、どう見てもカラベラスの勝ちでしょう。

しかしロットバルトは自分が負けたとはまるで思っていないませんでした。

「一つ決定的なことがある」

ロットバルトは負け惜しみでもなく言いました。

「おまえはしょせん自分の城から外には出られん。俺がどこで何をしようとするのを止めることは出来ん」

「だから、そういうことには興味ないって言ってるでしょ？」

「いいさ、おまえはそうやって無関心を装ってればいい。しょせんおまえは女だ。男の考えは理解出来んだろうさ。だが、俺は違う。俺はおまえのようなちっぽけな理想の世界になど満足できない。俺はもつと大きな世界で理想を実現する。おまえはそうやってつまらん人間の男とつまらん毎日を送っていくがいい、永遠にな」

最後にロットバルトは本当の負け惜しみを言いました。

「おまえとの勝負はおまえの娘と続けてやる。外の世界では、おまえも娘を助けてやれんぞ」

ロットバルトはオデット王女に向かって姿勢を正しました。

「姫。お早いお帰りをお待ちしておりますぞ。ここまで来てしまったからには帰りを邪魔する馬鹿はいたしません。どうぞ、決して遅刻だけはなさらず、安心してお帰りください」

ロットバルトは深々一礼して、顔を上げるとニヤリと笑い、身を翻して一陣の風となつて去りました。

オデット王女たちがカラベラスの下に帰ってきました。

カラベラスは不機嫌そうな顔で言いました。

「たしかにロットバルトは以前より力を増しているようね。おつむの方は大した進歩はしていないようだけど。」

オデレーヌがなぜ灰色の魔女になってしまったのか分かったわ。

ロットバルトが彼女の魔力を受け継いだのよ。ロットバルトが彼女から奪ったのか、彼女が自分からロットバルトに与えたのか、それ

は分からないけれど」

オデット王女が自ら手を汚し、侍女たちも手伝って六羽の大フクロウの死骸をきちんと並べてあげました。

そっくり同じ顔が六つ並んで目を閉じ苦悶の表情を浮かべています。

カラベラスは魔法で六つの墓穴を掘りました。

オデット王女たちはその墓穴に六羽の骸を寝かせてやりました。

「朝日が昇ると同時に埋めてあげましょう。昼の世界が広がるのを見ながら天に昇れるようにね」

カラベラスは手を汚したオデット王女と侍女たちをきれいな泉に案内しました。ちょっと手を洗うのに気後れしてしまいます。

「かまわないわ。きちんと循環しているから、すぐにきれいになるわ」

手を洗うとなんだかさつきまでよりすべすべになった気がします。「この森はわたしの体といっしょだから、この水にもわたしの魔力が溶けだしているのよ。フクロウたちの血と反応してあなたたちの肌に染み込んでいったのでしょうか。水と同じように命も循環していくわ。あのフクロウたちも、また別の形でこの世に生まれ変わってくるでしょう。見方によっては、わたしよりあのフクロウたちの方が幸せかもしれないわね。わたしは、死ぬことの出来なくなった身だから」

オデット王女たちの澄んだ瞳に見つめられて、カラベラスは慌てて付け加えました。

「もちろん、わたしはそうは思っていないけれど。わたしは永遠に幸せよ」

夕食はバラの木になっているアーモンドの実でした。

とても美味しかったです。オデット王女と仲間たちにはちょっとした足りませんでした。

カラベラスとアイリスは毎日ほとんどこれしか食べていないようです。食事に対する興味はあまりないようです。だいたいこの森とつながっているのも何も食べなくても生きていられます。

カラベラスは皆に言いました。

「皆さんにかけられた呪いですが、わたしは解いてあげることには出来ません。ただ、ご覧のようにこの森にいる限りは呪いは効力を失っています。皆さんが望むなら特別にこの森に居続けることを許しましょう。さっきの戦いで分かったでしょうがロットバルトは非常に強力です。皆さんがまともに戦える相手ではありません。安全を考えるならこの森にとどまるのが無難でしょう。まあ、時間はあります。三四日滞在してゆっくり考えることです」

翌朝、朝日が昇るのと同時に墓穴に土を被せてやり、大フクロウたちの魂を送り出してやりました。

大フクロウたちは今度こそ幻ではなく本物の昼の世界をじっくり見て、名残を惜しみながら天に昇っていったことでしょう。

朝の食事も相変わらずのアーモンドだけで、オデット王女たちはずっとここにとどまるのは考え物だと思いました。

でも昼になるとユリアとオーロラ姫とオーロルがサンドイッチのお弁当を持って遊びに来てくれました。

オデット王女たちは大喜びでご馳走になりました。

オーロラ姫はカラベラスを「ダイナ」と呼びます。ダイナとはカラベラスが人間に化けてオーロラ姫に近づいたときに使った名前で、二人の友情はそれからずっと続いています。

ユリアもたまに「ダイナ」と呼びますが、そう言うときはだいたいの皮肉がこもっています。

カラベラスは見た目には二十歳くらいの娘の姿をしています。夫のアイリスも同様です。

見た目には二十四歳のオーロラ姫の方が年上に見えます。

楽しそうに話す二人を見ながらオデット王女は昨夜カラベラスが

言ったことを考えました。

時がたてばオーロラ姫はもっと大人になって、いずれは年を取って死んでいくでしょう。今は四歳のかわいい盛りのオーロル王子も同様に年を取って死んでいくのです。

それをカラベラスはずっと同じ若い娘の姿のまま見送っていくことでしょうか。

それはユリアも同様なのですが。

ただユリアは自分の意志でどこへでも行けます。別の場所に行けばまた新しい生活があるでしょう。

カラベラスは夫と永遠にここで変わらず暮らしていくのです。

娘クラリスでさえ、どうなっていくのか分かりません。少なくともあと数年でオーロラ姫同様見た目では父母の年齢を追い越していくでしょう。

永遠の若さと命。

人間なら誰でも憧れるそれを手に入れた二人は、永遠という時間を実に孤独に過ごしていくのかもしれない。

愛する人と二人なら、それも苦にならないのでしょうか？

『永遠の愛の誓い』

それを誓った二人がここにいます。

肉体は滅びても魂は永遠に生き続ける。

それでは永遠の愛を誓った二人の魂も永遠に寄り添い続けるというのでしょうか？

あのジークフリート王子と。

永遠の愛の誓いというものを改めて考えたとき、その相手がああ王子様というのは、

『やっぱり、ちょっとねえ・・・』

と、改めて首を傾げてしまっただけ。

生きている間はまだ我慢できるとして、死んでからもずっとくっついてなければならぬというのは我慢の限界を越えてしまいうな気がします。

「カラベラス様」

オデット王女は訊いてみました。

「永遠の愛の誓いだけが邪悪な呪いを退けると灰色の魔女は言っていました。それは本当でしょうか？」

「本当よ」

カラベラスはいとも簡単に答えました。

「ここに生きた証拠があるもの。オーロラ姫とシルバー王子は真実の愛で見事わたしの呪いをうち破ったのよ」

オーロラ姫は誇らしそうに微笑みました。

うーんとオデット王女は考えました。

「とりあえず呪いが解けるまでそう思い込む魔法ってかけられませんか？」

「まあ恋は盲目って言うものねえ、恋自体が魔法みたいなもので、冷めてしまったらあつという間に相手がつまらなく思えるようになるものよ。でもその程度の魔法じゃロットバルトの呪いは解けないわよ」

「やっぱり、そうでしょうねえ」

ため息をつくオデット王女をオーロラ姫は気の毒そうに見て言いました。

「愛って時間をかけてお互いにはぐくんでいくものよ。恋というのは相手への一方的な好意。愛というのはお互いに対する思いやりと責任。そうよね？」

カラベラスは頷きました。

「そのジークフリート王子だって、あなたを愛するようになれば変わるのじゃないかしら？ あなたも、きつとそうよ」

理想のカップルが二組。

『そりゃあ、あなたたちはそうでしょうとも』

と、オデット王女は内心恨めしく思いました。

誓いとは覚悟とも言えます。

相手と生涯添い遂げるといふ覚悟。

しかし死して魂となり、王女という立場から解放された後もそれに縛られるとすれば、とてもその覚悟は強く持てそうもありません。『お願いよ、クラリス。あの王子様をなんとかしてちょうだいね』オデット王女は天にも祈る気持ちでそう思いました。

カラベラスの夫アイリスという人は、およそ男性的な魅力のない人でした。

実はルピネーはこのアイリスが大の苦手でした。世界でもっとも苦手な人間と言っていていくらいです。

オーロラ姫の旦那様シルバー王子も苦手でした。

ユリアも以前は苦手でしたが、今はそうでもありません。

オーロル王子はアイリスおじちゃんが好きで、白鳥の三人の子どもたちのうちキャシーとドミニクはすっかりなついていますが、年長でしっかり者のジェニーは苦手でした。

何故か？

一点の曇りなく限りなき善意の人というのがもしいたならば、その人にひたすら優しい慈愛に満ちた眼差しで見つめられたなら、あるいは多くの人は非常に居心地の悪い思いをするのではないでしょうか？

アイリスという人にはそれに近いものがありました。

女性的というより、やっぱり男性的なところが皆無で、人間的にはとてもきれいに思えますが、限りなく自己というものがないようにも思えます。

オデット王女が訪ねていったとき、アイリスは一人で何やら彫り物の仕事をしていました。

覗いてみると、銀の女性用の王冠を作っていました。

「あなたへのプレゼントですよ。王冠というのはだいたい重いばかりで着け心地の良くないものらしいですから、ちよつとした会に出席するための軽い物をお贈りしようと思ひまして」

ティアラは八割方でき上がっていて、薄いのに細かな透かし彫り

が二重三重に施され、びつくりするくらい細密な超一級品です。」「丁寧

に内側に滑り止めの編み紐の彫りまで入っています。」「着けさせてもらうとびつたりで、下手をすると着けているのを忘れてしまいそうです。」

「クラリスが帰ってきたらあの子に持って行かせましょう」

アイリスはオデット王女が白鳥になってしまふ心配などまるでしていないようです。

アイリスは再び作業を始めました。

アイリスは何本もの彫刻刀を使ってそれだけで彫刻をしています。のみやヤスリは使わないようです。

彫刻刀だけでまるで鏡面のようにつるつるに仕上げられていきます。どんな複雑な曲面も一刀でスーッと紙のように平たくあるいは糸よりも細く一本につながった削りくずができます。

銀とはそんなに柔らかい金属ではないと思うのですが。

「それは魔法の彫刻刀なんですか？」

「いいえ。一流の鍛冶師による鋼の刃ですが、ふつうの彫刻刀ですよ」

彫刻刀は丸いもの、三角のもの、尖ったもの、平たいものが、大中小、極小と、何本も揃っています。

アイリスはそれらの中から彫る面に合ったものを慎重に選び、刃を当て、均等な力でゆっくり押ししていきます。

そうして三四回も彫ると、砥石に水をかけ、シャカシャカと念入りに研ぎます。

そうしてまた三四回彫り、また念入りに研ぎます。

「ずいぶん慎重になさるんですね？」

とてもではありませんが普通の人にはイライラしてできそうもない仕事ぶりです。

「ほんとにねえ」

カラベラスが笑いながらやってきました。

「一本でどんな形でも思いのままきれいに彫り出せる魔法の彫刻刀

をあげたのにぜんぜん使おうとしないのよ」

「以前は使っていたんだけど、あれは、怖くてね」

アイリスは申し訳ないように妻を見ました。

「何でも切れると、何でも切りたくなくなってしまふから、材料のことを考えなくなってしまう。やっぱりこうして硬さや質感を確かめながらそれに合った形に仕上げあげなくては材料に申し訳なくてね」

「金属に魂はないわよ」

「そうかなあ？ わたしにはあるように感じられるけれど」

カラベラスは嬉しそうに微笑みました。

「それはあなたの手が魂を与えているのよ。あなたに巡り会った材料は幸せね」

アイリスは馬鹿正直に銀のティアラをしげしげ見つめて語りかけました。

「そうなのかい？ そう思ってくれるのなら嬉しいけれど」

オデット王女はアイリスを子どもの心をそのまま持っている人なのだと感じました。カラベラスはアイリスのそんなところが好きなのではないでしょうか？

でもオデット王女もやっぱりジェニーのようにアイリスに苦手意識をちよっぴり感じてしまいます。

アイリスのような人はカラベラスのような保護者がいなければとっていてまともに世の中を生きていけるとは思えません。

カラベラスがニッコリ笑ってオデット王女に言いました。

「わたしこの人のことが本当に大好き。この人がいなければわたしは本当のわたしではないわ。初めて会ったときからそうだった。すごく引きつけられて、自分の中の空白をすごく感じたの。その空白を埋めてくれるのがこの人なんだって、すごく感じたの」

一目惚れというものでしょうか。ただカラベラスは魔女ですからもっと運命的な靈感があったのでしょうか。

魔女ですから、自分の中の空白というのは子どものような純粹な心だったのでしょうか、それとも別の何かだったのでしょうか？



「わたしとこの人はそっくり同じ人間なのよ」

カラベラスは後ろからアイリスを抱きしめて、アイリスは手を止めて困ったように微笑みました。

そっくり同じ人間ならば心の空白なんて埋まらないと思いますが。「孤独感よ。自分が誰とも違ってこの世に一人きりなんじゃないかっていう不安よ」

カラベラスの言葉とは思えません。

「頭と心は別のものなのよ。もちろんつながってはいるけれど、心が頭の中に間借りしているってところかしら？ 心の重さはだいたいで一定していて個体差はないわ。でも質がぜんぜん違うの。人によつては水と油みたいだね。間借りしている頭によつて心も変質していくけれど、本当に引かれ合う心というのはだいたい同じ性質のものなのよ」

この場合の心とは魂と言い換えた方がよさそうです。

人間の全体と魂とは同じではないようです。

カラベラスの魂は実は寂しがり屋の純粋な子どものようなと言いたいようです。

嘘つけて感じですが。

肉体から離れた魂。

例えば王子とロットバルトの魂を入れ替えたらどうでしょう？

どちらか一方でも好きになれるでしょうか？

「でもね」

とアイリスが言いました。

「わたしがカラベラを好きなのは美しいからだよ。心と体もやっばりつながっていて、お互いに影響し合っているんじゃないのかな？ どちらか一方だけでは人間とは言えないと思うよ」

「つまり」

カラベラスがアイリスの顔を自分に向かせて言いました。

「わたしの全てが好きってことよね？」

「うん」

オデット王女は馬鹿馬鹿しくなって二人を残して立ち去りました。

オデット王女はニーナを捜しました。

侍女と女中たちは仲の良い者どうしおしゃべりしたり散歩したり、のんびり楽園の休日を楽しんでいます。

オーロラ姫は子どもたちと遊んでいます。

ニーナはユリアと散歩していました。

姫ともっとも親しい補佐役という点で二人は共通しています。

オデット王女は散歩の仲間に入れてもらって、ニーナにしようと  
思っていた質問をまずユリアにしてみました。

「ユリアさんは好きな男性っていないんですか？」

「まあ。思いもよらない質問ね」

ユリアは目をまん丸くしてオデット王女を見つめました。

「まるつきり、思いもよらないわね」

残念でしたというように笑いました。

「妖精は恋をしないんですか？」

「しないわね、普通は。妖精って極端にいうと一人一人まったく別の生き物だから、他者と一緒になりたいって気持ちがないのね。友情や愛情はまた別よ。それに人間の恋のお話は好きね。妖精ってだいたい噂好きだわ」

その代表が鏡の精ミラでしょう。

「それじゃあ」

遠慮がちに

「ニーナはどう？ 好きな男性はいる？」

ニーナはポツと頬を染め、

「わたしは、その・・・」

とうつむいてしまいました。

どうやら意中の男性がいるようです。

オデット王女は知りませんでした。そういう話題を避けていたというのがありますが、もしここがユークリナのお城だったら、ニー

ナは即座に笑って「おりません」と否定したような気がします。

気持ちが解放されたというより、人間でいられるのが後わずかという追いつめられた状態で、心が燃え立っているような感じがします。

オデット王女はニーナのかわいらしい横顔を見て

『結果がどうあれとにかく呪いを解くのに全力を尽くそう』  
と改めて思いました。

### 第30章 王子の馬鹿

ペテロブラーグに到着して六日目。

明日はいよいよ出発です。

午前中クラリスは居間にくつろぎながらさて今日は何をしようかしらとぼんやり考えていました。

今日はみんな特に予定もないらしく居間に集まってなんとなくおしゃべりしたりしています。

いないのは仕事でお出かけの伯爵とルピネー、探検ごっこに夢中のアナトリーとダヴィドフ家の男の子たちくらいです。

モデストも眠そうな、でも満ち足りた顔で紅茶をすすっています。どうやら新しい興行の計画はうまく進んでいるようで、今はひとときの休憩中です。

ダヴィドフ家のお姉さんたちが不思議そうにサファイアの精に尋ねました。

「ねえ、妖精さんたちはどうしてあたしたちの所に来てくれないの？」

妖精の女王様が新しくなって、人間たちとの交流の規制が緩くなりました。ロヴィークや西の国々、ラピスでもラズベリーアールにはしょっちゅう妖精の国から遊びに来ています。

でもその他のラピス本国や周辺のラピスに同盟する国々にはほとんど妖精はやってきません。

「教会の力が強いからよ。わたしたち迫害されてるんだもん」

「ねー？と同意を求められてクラリスは苦笑しました。

「魔女や妖精は神様と仲が悪いの？」

「悪いわよ。はつきり言つて。わたしたち魔法を使って勝手に神様の法則を変えちゃうからね、あんまりやりすぎると神様に罰を与えられちゃうわね」

「ねー？とまた同意を求められてクラリスはますます苦笑しました。

「妖精さんと仲良くするとあたしたちも神様に罰を与えられるのかな？」

子どもたちが心配そうな顔をします。

「神様はそんな心の狭い人じゃないわよ。」

神様が一番大嫌いなのはね、自分の名前が利用されることよ。」

子どもたちは首を傾げました。

「神様の教えって、人間の言葉で書いてあるでしょ？ 言葉なんてあいまいなもの、いくらでも解釈のしようがあるわよね？ だから、頭のいい悪い人は自分の都合のいいように神様の言葉を読み替えて、人々を操ってお金儲けをしたり、権力を手に入れたりするの。どんなに間違ったことでも、偉い人に神様はこうおっしゃっているって言われたら、はいそうですね？ 頷くしかないでしょ？」

子どもたちは難しそうに考え込んでいます。

どうして神様を熱心に信仰すると妖精たちと仲良くできないのか、子どもたちの純粋な心には理解できません。

「あなたたちのおうちにも遊びに行けたらいいんだけど」

サファイアの精も自信なさそうに言いました。

「なんでクラリスさんのお国では魔女や妖精がいっぱいいるの？」

ロヴィークでも現在表だって魔女を名乗っているのはクラリスぐらいですが、ロヴィークでは魔女も妖精もごくふつうに親しまれています。良い意味でもあんまり良くない意味でも。

「そういえばそうね。ロヴィークにだって教会はあるし神様は信仰されてるけど、こっちみたいに極端なことはないわよね？」

「いや、そうでもないみたいよ」

サファイアの精は腕を組んで難しそうに言いました。

「ダイヤ姉さんが女王に就任するときいろいろお勉強させられたみたいんだけど、ロヴィークでも一時教会の力がすごく強まって妖精たちが敬遠していた時期があったんですって。でも他の国と違って短い期間で復帰したみたい。なんでだったかなあ？」

どうせサファイアの精はまじめにお勉強なんてしていません。お

姉さんにさんざん聞かされた愚痴を上空に覚えているだけです。

「それはたぶん」

モデストがからかうように言いました。

「クラリスちゃんのお母さんのせいだろうねえ。神様の言うことなんて全然聞かないで大いばりでいる魔女がいたから、教会の言う神様もあんまり当てにならないなと思っただんじやないか？」

クラリスは眉を寄せて変な顔になりました。

いいんだか悪いんだかよく分かりません。

でもロヴィークは精神的にはずっと幸せな状態だと思います。

クラリスは言おうか言うまいか迷って、結局やめました。

クラリスの母カラベラスは、神様に会ったことがあるそうです。

カラベラスの言うことには、本物の神というのは人間が思うような生やさしいものではないそうです。

人間の言う神様は、神様のほんの指の先程度のものだそうです。

人間にも片手に五本の指があります。

神の手にはもっとたくさん指があるそうです。

人間にはそれがまるで分かっていません。

神は全知全能だと言います。

全知全能である神をしょせん人間の言葉で全て分かった気である自分たちの浅はかさを人間はまるで理解していません。

本物の神は、圧倒的に恐ろしいものだったとカラベラスは言いました。

そのカラベラスでさえ、目に見たのは神のほんの手の先だけだったと言います。

もし本当の本体を目の当たりしていたなら、自分の存在は一瞬にして引き裂かれ、永遠の無となっていたらうと言います。

そんな神の巨大さを人間はまるで理解していません。

神を自分たちの物とし、あまつさえ自分たちを神と同列に見なすなど、人間はなんと愚かでおごり高ぶっていることか。

そんなことを思いながら、クラリスは黙っていました。

少なくとも今の人間たちにそんなことを言ってもまるで分かってもらえないでしょう。

難しい話が済んでみんなまた思い思いのおしゃべりを始めました。そんななか王子は一人、聖人のような穏やかな顔でぼんやりクラリスを眺めていました。

昼を回って三時過ぎ、ルピネーが帰宅しました。

そして四時ちょうど、ルピネーを訪ねて客がありました。

あの宝石商オネーギン氏です。

オネーギン氏を迎えたのは王子でした。

王子はルピネーにも面会の約束をしていて、三人は客室の一室で相對しました。

話を聞いたルピネーは驚き、苦虫を噛み潰したような顔になりました。

「それはクラリスは知っているのか？」

「いいえ。言えば反対するに決まっていますから」

「そりゃそうだ。俺も反対だ」

「わたしもおよしになった方がいいと申し上げたんですがね」

オネーギン氏のへらへら嫌らしい顔をルピネーは思いつきり不愉快そうに睨みました。

昨日王子は一人で街を歩いてみました。

一人で歩く街はクラリスたちと一緒にの時と違ってひどく無愛想でとげとげしい感じがしました。

王子は孤独感でくじけそうになる気持ちを抑えて歩き続けました。そして夕方オネーギン氏の宝石店に行きました。

全面石造りのがっしりした店構えです。

店に入ると一つのフロアーにガラスの陳列ケースが何列も並び、きらびやかな宝飾品がぎっしり並べられています。

店員がやってきて一番隅っこの一番安い品物の並ぶケースに案内

しました。

王子が「『白鳥の白』を見たい」と言うと店員はあからさまに馬鹿にした顔をしました。

「そういう品物は店にはお出ししません」

ショーケースに並べて見せびらかしている商品はしょせん二流品で、一流品は特別なお客様用の特別室で一つ一つ金庫から出してきて一流のお客様にのみ手に取ってご覧頂くのです。

王子はオネーギン氏に会いたいと言いました。

「一昨夜お会いしたブルーシアのジークフリートがぜひお会いしたいと伝えてください」

オネーギン氏は会ってくれたものの、明らかに迷惑顔でした。

王子はもう一度「『白鳥の白』を見せてください」と頼みました。オネーギン氏は断りましたが、王子があんまり熱心に頼むので嫌々ながら金庫から持ってきてくれました。

王子は白い手袋をはめさせられ、「白鳥の白」のティアラを手に取りました。

世界一の輝きはまことに素晴らしいものでした。

王子はぜひこれを譲ってくれと頼みました。

オネーギン氏は笑って相手にしません。

「僕は来月の誕生日に婚約を発表し、母上から国を託されることになっていきます。その僕の国をそっくりあなたに差し上げます」

オネーギン氏は笑いましたが、王子の真顔を見ているうちに笑いが引っ込み、間延びした顔が硬直していきました。

「本気ですか？」

「本気です」

オネーギン氏は考えました。

「白鳥の白」は自分の一番の宝物には違いありませんが、財産の全てではありません。

この宝石一つで一国の王となれるのです。

たとえそれがブルーシアのような田舎の国だったとしても。



「い、」

オネーギン氏は喉をひきつらせて言いました。

「いいでしょう。お譲りしましょう。ただし、事が事です、お互い冗談でしたでは済まされない、確かな保証が必要です。一国の王子に対して失礼ですが、身許の確かな保証人が必要ですな」

「それではルピネーさんに頼みましょう」

というわけで、今日現在のこの会合となったのでした。

「おい王子、自分が何を言ってるのか分かってるんだろっな？」

「はい。十分考えた上で決めたことです」

「だそうですよ」

オネーギン氏は汗をかきながらへらへら笑いました。

ルピネーは最悪に不機嫌な顔で、

「本っ当にいいんだな？」

「はい」

思いつきり力を込めて、ペン先が突き刺さるくらい強く、オネーギン氏の差し出す書類にサインしました。

クラリスはルピネーに書斎に呼び出されて王子が「白鳥の白」を国と引き替えに買う契約をしたことを聞かされました。

クラリスは足元の床が抜けるくらい驚き、頭の中が真っ白になり、落ち着いてくると今まで感じたことのない怒りがふつふつとわいてきてルピネーに怒鳴りました。

「なんでそんな馬鹿な契約させたのよ！」

「王子の決めたことだ、俺は知らねえ」

クラリスはなおも言いつのりでしたがルピネーは「俺は知らねえ」の一点張りで、クラリスは怒りを沸騰させたまま王子を捜しに飛び出しました。

王子は最上階にある小ホールの窓にオデーレと並んで立って暮れ

ていく空に次々灯っていくお屋敷街の明かりを眺めていました。

王子はズカズカやってくるクラリスの顔を見てすぐに用件を察しました。

クラリスは怒りで何も言えずしばらく王子の顔を睨み付けていました。

王子は悟りきったような実に穏やかな顔をしています。

「やっぱり怒っているね？」

「当たり前でしょう。なんて馬鹿なことをしたのよ」

オデーレは何も知らされていないらしく怪訝な顔で二人を見比べています。

クラリスは王子に当てこするようにオデーレに王子のした契約のことを話しました。

オデーレもびっくりして大きく目を開いたまま何も言えず王子の顔を見つめました。

「何故？」

クラリスは押し殺した声で王子に尋ねました。

王子は語り出しました。

「僕はね、この街に来て自分がいかにちっぽけな人間か思い知ったんだよ。

いいや、ここに着く前から、旅の中でルピネーさんや君を見ていて、僕はいかに何もできない役立たずか教えられたよ。

君はすごいね。さすがに伝説の黒魔女の娘だ。劇場での鳥人間との戦いは見事だったよ。

ルピネーさんは言うまでもないよね？ あの人はとても大きな人だ。体もそうだけれど、考えていることも、実際にやることも、とつともなく大きい。僕なんかまるで想像もできない大きさだ。

大伯爵は・・・あの人はよく分からないなあ。でもきつとすごすぎて僕なんかには理解できないんだろう。

モテストさんもすごいよね。僕より一つ二つ上なだけなのに、あんなすごいバレエを公演するんだから。

ピエトロさんの音楽も素晴らしかったなあ。

オデルさんも、あの舞台は本当に感動したなあ。見ていて涙が出そうになったよ。

そんなすごい人たちを見ていて、僕はいつたいなんなんだろうと思っただよ。

同じ人間なのにどうしてこんなに違うんだろうって」

王子の話しぶりは実に正直で、クラリスもだんだん怒りが落ち着いてきました。

しかし次に王子の言った言葉、

「僕は考えたよ。

僕に足りないもの、

それは、お金だ」

クラリスは再び頭の中が真っ白になりました。

「だってこの街を見てごらんよ、素晴らしい！

ラピスはいったいどれだけお金持ちなんだ？

お金があればこんなものすごい街が作れるんだ！

僕は金貨を持ったときすごく嬉しかった。

僕はルピネーさんの金時計がうらやましくてしょうがなかった、

あの山の民にあげた金時計だよ。僕もあんな時計がほしくてほしくてたまらなかった。

僕は王子だよ、未来の王様だ！

それなのにどうしてこんな惨めな思いをしなければならないんだ？

答は簡単だよ、国が貧乏だからさ。

一国の王子がたかが宝石商から田舎者扱いされて馬鹿にされるん

だよ？ そんな国の王子でいることになるの得があるって言うんだ？

僕は嫌だ。

僕は貧乏な国の王子でいるよりお金持ちのただの人の方がいい。

お金なんかどうだっていい、僕は人がうらやむような素晴らしい

物が欲しいんだ！

世界一のダイヤモンドを持っている僕、

世界一のダイヤモンドを愛する女性に贈ることのできる僕、  
貧乏な田舎の国の王子様でいるよりずっと素晴らしいじゃないか  
！」

クラリスは王子がなんだか痛々しく感じられてきました。

王子は熱弁を振るいながら、となりにいて王子の顔を見つめ続けるオデーレを決して見ないようにひたすら前を見ていました。きつとクラリスの顔もろくに見ていないのでしよう。

王子の聖人のような顔が崩れて自嘲するように言いました。

「僕みたいな愚か者の若造に治められるよりオネーギン氏のような商売上手に治められる方がブルーシアの国も幸せだろう。

僕のことは気にしないでいいよ。

世界一のダイヤモンドだよ？

これを贈ればオデット姫はきつと僕の愛が真実だと分かってくれて僕の愛を受け入れてくれるよ。

そうしたら僕はブルーシアではなくてユークリナの王様だ！

国が違うだけで王様には変わりはないさ。

だから、そんな顔をしないでおくれよ」

「王子、あなたは・・・」

クラリスは王子に背を向け、部屋を出ていきました。  
涙が流れました。

クラリスは部屋に閉じこもったまま夕食も取りませんでした。

真っ暗な部屋でベッドに突っ伏していました。

ドアがノックされました。

「クラリス、俺だ」

ルピネーです。

「入るぜ」

返事がないので入ってきてしまいました。

「なんでえ、真っ暗じゃねえか」

カーテンは開きっぱなしですが、空は例によって夕刻から濃く曇

り、おまけに今の月は昼の月で、しかも昨日が新月で出ても線のよ  
うに細い月です。

もう何もかも今のクラリスの暗い落ち込みに拍車をかけています。  
「まったく今日の夕食会是最悪だ。誰も一つ言もらやべりやがらね  
え」

どうやら王子の契約は皆に知られたようです。

「親爺殿もさすがに今日は怖い顔のままだ」

伯爵はひどく不機嫌で夕食の最中何度となくものすごい目でルピ  
ネーを睨みました。

ルピネーは「ほらよ」とクラリスの好きそうなケーキの皿を枕元  
の机に置き、ランプに火を入れました。

クラリスはむっくり起きると伯爵に負けないくらい不機嫌な目で  
ルピネーを睨みました。

「そう怒るなよ。」

どうせな、王子は『白鳥の白』なんか買えやしねえよ。考えても  
みるよ、あの女王様がそんな馬鹿な契約を許すわけねえだろ？」

「それで、平気なの？」

「平気とはいかねえだろうなあ。莫大な違約金をオネーギンの野郎  
に支払わなくちゃならねえ。俺も連帯保証人だからな、ま結局は俺  
が全額払うことになるだろうな。でなきゃ、王子は詐欺で刑務所行  
きだな」

「外国の王子を逮捕はできないでしょ？」

「王子ならな。だが、女王はおそらく王子を縁切りして放り出すだ  
ろう」

クラリスはそんなこと考えてもみなかったと丸い目でルピネーを  
見ました。

「おじさまはそこまで考えて？」

「当たり前だろ、俺は特務外交官だぜ」

クラリスは自分の浅はかさを思っつきちんと座り直しました。

「食えよ。好きだろう、こういうの？」

「はい」

クラリスは素直にケーキを食べました。

「おいしい」

「女の子ってのは甘い物が好きだな」

ルピネーは優しい目で笑って、クラリスも満足そうに笑い返しました。

「機嫌も治ったところで、なんで王子はあんな事を考えたと思う？」

クラリスは大きくため息をつきました。

「オデーレのためでしょうねえ」

「ほお？　なんで？」

ルピネーはとぼけてクラリスにしゃべらせました。

「オデット王女に振られるためでしょう」。

王子は本心ではオデーレが好き。

でもオデット王女は裏切れない。

苦肉の策で、自分の全財産を投げ出してオデット王女に誠意を見せて、その上でその馬鹿さ加減で王女に振られる。その後オデーレとどうなるかは、そこまで計算するほど王子も恥知らずじゃないでしょうねえ」

ルピネーは、なんでえ、分かってるんじゃないか、という目でクラリスを見ました。

「さて、そうなるのだ」

難しそうな顔になりました。

「王女の呪いを解くのに王子は本格的に当てにならねえな」

どうする？と問いました。

「どうしましょうかしらね」

クラリスもなかば以上王子のことはあきらめていましたからその点それほど大きな失望もありません。

むしろ清々した気持ちです。

「もともとこれは俺の仕事じゃねえ・・・いや、本当は俺の仕事だったんだがな、結果的におまえに任せることになっちまったな。ど

うなんだ？ 奴に勝てる見込みはあるのか？」

「さあ、どうなのかしらねえ？」

もちろん投げやりになっただけではないです。

ヒントはまだ残されています。

オデル、いえ、オデルの双子の姉。

そして本物の「白鳥の白」。

あのダイヤに秘められている魔力とはいったいどんな力を持っているのでしょうか？

それは、ロットバルトの野望を砕く味方となるのでしょうか？

七日目。

とうとう出発の日です。

出発は夜です。

モデストが出発のセレモニーを何やら考えているようです。

昼間クラリスは伯爵夫妻と居間でのおしゃべりして過ごしました。

伯爵もクラリスが元気な様子なので機嫌を直しています。

伯爵夫妻が本当の孫のようにかわいがってくれるのをクラリスは心から感謝して嬉しく思います。

オーロラ姫の父母の王様王妃様も懇意にしてくれていますが、やはりお互いに遠慮というかわだかまりがあります。

その点伯爵夫妻とは心からリラックスしてくつろげます。

伯爵はクラリスのもっとも尊敬する人間です。

夫人も優雅な見かけによらず楽しい人で、大好きです。

王子に伯爵の偉大さが分かってもらえなかったのは残念でなりません。

クラリスは今正直なところ王子をペテロブラーグに連れてくるべきではなかったと後悔しています。

夕食はのんびりしていられないので、最後の昼食会がこれまでに

一番豪華な食事会となりました。

場所を小ホールに移し、ピエトロ氏指揮による弦楽四重奏のコンサート付きです。

人気のレパートリーに、まだ未完成ですが小編成用に編曲し直した「白鳥の湖」組曲の初お披露目です。

「白鳥の湖」組曲ではみんなの要望に応じてオデールが素晴らしいバレエを披露しました。

衣装はもちろんお行儀良く長い裾付きですが。

コンサートが終わると楽団のメンバーにも食事とお酒が振る舞われました。

この四人がバレエ巡業に参加する選抜メンバーです。

モデストがほとんど無理やり引つ張り込んだ被害者たちでもありませんが、この待遇の良さにみんな上機嫌になっています。

楽器だけ持つてくれば後はこちらで全部準備するということで昨晩はお屋敷に泊まり、これからみんなといっしょに港に行つて他の巡業団のメンバーと合流します。

残念ながらモデストはいません。夜まで一日中忙しく駆けずり回っていることでしょう。

食後いつものように居間で団らんしていると、アナトリーが一大決心をしてお父さんとお母さんにおねだりしました。

「お父様。お母様。僕もモデスト兄さまといっしょにお父様についていってはいけないでしょうか？」

母親のユリアナはびっくりしておろおろ夫を見ました。

ルピネーも驚きましたが、そこは父親、どっしり構えてじっと息子を見つめました。

アナトリーは十歳。

母親似のとても綺麗な子です。

その綺麗な顔を精一杯頑固に引き締めてじっと父親を見つめ返しています。

ルピネーはニヤリと笑いました。



「行くか？」

「はい！」

アナトリーは元気に答えました。

「だがたいへんだぞ。あの力カツサス山脈をくぐり抜けるんだぞ？  
ちゃんと自分で歩けるか？」

「はい！」

ルピネーは「だとさ」と笑って妻を見ましたが、ユリアナは目をウルウルさせて恨めしそうに夫を睨みました。

「お父様！ お母様！」

ユリアナは伯爵と夫人に応援を求めました。

「アナトリー。あなたまで行ってしまったらお祖母様は心配で寝込んでしまいますよ」

と夫人は言いましたが、アナトリーの悲しそうな顔を見るとつい微笑んでしまいました。

伯爵は

「このバカモンが」

とルピネーを睨みましたが、

「アリーとマリをつけるぞ」

と言いました。

アリーとマリは兄妹の護衛官で、腕利き揃いの伯爵の護衛官の中でも特に優れた二人です。

「ずいぶん余計な人数が増えちまったな」

とルピネーはぼやきました、

「分かってます。分かっておりますです、ハイ」

と伯爵に肩をすばめました。

「よかったわね、アナトリー」

クラリスが言うとアナトリーは

「はい。クラリス姉さま」

と嬉しそうにニッコリしました。

とっってもいい子です。

その後今度はダヴィドフ家の子どもたちがごねだして、クラリスたちのペテロブラーグ滞在は最後までにぎやかなものになりそうです。

### 第31章 再び船旅

午後八時。

大型高速旅客船「大白鳥号」はガルボリースに向けペテロブライグの河川港を出発しました。

今回も到着時同様大勢の見物客が詰め寄せてファンファーレ付きの派手な出発となりましたが、今回の仕掛け人はモデストでした。

モデストはいずれ「白鳥の湖」をここで再演するつもりでいますから、大評判のうちに終わった舞台を外国に輸出するという印象を街の人々に植え付けたかったのです。

ビビアナはじめ主演のダンサーたちはスター扱いで、地味なピエトロ氏も精一杯おしゃれをさせて大々的に持ち上げました。

人気者のルピネーとクラリスにも友好的な演出に一役買ってもらいました。

伯爵夫妻とはお屋敷を出るときにお別れしました。伯爵が出てきては警備がたいへんですし、大物過ぎるのでモデストがご遠慮願ったということもあります。

大勢の街の人たちとダヴィドフ家の夫人と子どもたちに見送られて大白鳥号は出航しました。

ダヴィドフ家の子どもたちは大いに不満でしたが、このまま伯爵様のお屋敷に滞在するのでそう悪くはありません。

街の無数の明かりを見ながら船は快調に進んでいきます。

クラリスはルピネーに一応確認しました。

「次の満月までに間に合うんでしょうね？」

まだ昼間の月で今は出ていませんが、今日は三日目の月です。思えばオデールが舞台で踊ったあの日が新月でした。満月までは十二日です。

「そうさな、昼間のうちに出ちまいたかったのにモデストの野郎の

せいで遅れちまった。間に合わなかつたらあいつのせいだからな」  
「間に合わせてよ、ねっ」

モデストのこととなるとクラリスも恐い女の子になります。

「分かつてるって。ここからがこのスクリュー高速船の本当の実力の見せ所だ」

行きは下りで追い風でしたが、帰りは上りで向かい風です。

「行きと同じ四日ではっちり到着してやるぜ」

ルピネーは目をらんらんと輝かせて楽しそうに答えました。

傍らには急きよ参加の決まったアナトリーも手すりに掴まって目をキラキラさせて河岸の光の行列と高速船の切る水の波紋を代わる代わる見えています。

そしてアナトリーのとなりには黒い騎士の服をばっちり着込んだ若い娘が、後ろにはルピネーをほんのちよっと小さくしたような大きな男が同じ服を着込んで立っています。

この二人が伯爵がアナトリーの護衛につけた腕利きの護衛官兄妹のアリーとマリです。

この二人の誰の目にも留まる特徴は、肌が黒いということです。

二人は南の大陸からの難民で、伯爵に特に腕を見込まれ、護衛官に取り立てられたのです。

護衛官中、伯爵への忠誠心は誰にも負けません。

アナトリーと護衛の二人が加わったことでちよっとしたトラブルがあつたのですが、

まず今回のメンバーを紹介すると、

クラリス。

ルピネー。

オデル。

オデーレ。

ジークフリート王子。

モデスト。

アナトリー。

サファイアの精。

アリーとマリ。

ピエトロ氏と四重奏団。

ビビアナと女性三人、男性二人のダンサー。

見習い兼雑用係の女の子二人、男の子一人。

以上二十三名と一匹。そして問題なのが、

宝石商のオネーギン氏。

ルピネーはオネーギン氏が同行するのをひどく嫌がりました。クラリスもそうです。

しかしオネーギン氏はどうしてもついていくと言って聞きませんでした。宝石と交換にブルーシア国を譲り受ける契約を交わした以上これはもつともな主張でしょう。

実際に国を譲り受ける確約がとれるまで宝石は渡さないと言い張りますし、どうしても連れていかれないわけにはいかず、頭の痛いことです。

オネーギン氏は宝石の警備員も数名連れていくつもりでいました。これはルピネーが船の定員を理由に断りました。

「宝石が心配ならクラリスかマリに預けておけばいい。この二人ならおまえさんの用意した警備員よりはるかに信頼できるぜ」

オネーギン氏は熱心な聖教信者でしたから魔女のような胡散臭いもの信用していませんし、マリの黒い肌を見えますます警戒の色を強めました。

「けっこうだ。ダイヤはわしが持っておる。あんたらはせいぜいわたしを守っておくれよ」

クラリスは足手まといになったら絶対に置いてきぼりにしようと思いました。

オネーギン氏は二人部屋にルピネーと同室ですが、ルピネーはど  
うせ客室になんか入りません。

二つある四人部屋は、一つをアナトリー、アリー、マリ、クラリ  
スが、一つを四重奏団が使うことになりました。

オデーレはオデーと、王子はダンサー見習いの男の子と、モデ  
ストはピエトロ氏と同じ部屋です。

王子だけ仲間はずれのような組み合わせですが、これは王子の希  
望でもあります。

オネーギン氏と同室にしてやるうかという意地悪な考えもありま  
したが、それはあまりにかわいそうなのでやめました。

王子は契約の一件以来すっかりみんなから距離を置かれるよう  
なつてしまい、王子もあまりみんなの仲間に入りたがらなくなつて  
いました。

オデーはあからさまに冷笑し、モデストも余計なことを吹き込  
んでしまったと後悔し、ルピネーはずつと腹を立てたままですし、  
クラリスも無視を決め込んでいます。

ただ一人、オデーだけが心配そうに王子の様子をうかがって  
います。

そんなオデーレに王子は力無く微笑むだけです。

来るときの意気揚々とした楽しい雰囲気とは正反対です。

出航が夜で幸いだったかもしれない。

とりあえず、寝ればよいことです。

朝になり、昼になり、

もう一つ二つ往路とは違ったことが起こりました。

一つはダンサーたち。

一つは演奏家たちです。

両者とも毎日の練習は欠かせず、一日休むだけで十日からひと月  
は体が元に戻らないという厳しい職業です。

演奏家たちはピエトロ氏の仕上げてくる「白鳥の湖」組曲の楽譜を受け取って室内で練習に余念がありません。

コンサートで聴く音色と違って何度も何度も納得いくまで同じところを練習されるのは聞かされる方にはかなり迷惑なことです。

さてではダンサーたちは？

狭い室内ではとても練習になりません。

一番広い場所というと後部甲板の漕ぎ手がエイサイエイサと水車を踏んでいる麓の控えの床です。

次いで漕ぎ手たちの休憩所の船倉の大部屋です。

ダンサーたちは可能な限り広い場所を確保するために控えの漕ぎ手たちを追い出し、自分たちが大部屋に引っ越してきて合宿体勢を敷きました。

気位の異常に高いピアノまで積極的に仲間に加わっています。

そのピアノを中心に振り付けが練り直されています。

アンドウートオ、アンドウートオ、

とかけ声を響かせ、こちらも練習に余念がありません。

モデストがピエトロ氏と四重奏団とバレエ団の間を往復して連絡役を務めています。

クラリスとアナトリがモデストを捕まえて聞くと、ピエトロ氏は耳に綿を詰めて机に向かっていているそうです。

高速船の甲板は昼でも風を切ってかなり寒いのですが、アナトリはブルブル震えながらそれでも外に居たがりました。クラリスはペテロブラーグでやっと返してもらった火龍のマントを貸してあげました。

流れていく景色を眺めたり、暇を見つけたルピネーが釣りをしているのを面白そうに手伝わったり、後部甲板でダンサーたちが練習しているのを珍しそうに見学したりしています。

一周して前部甲板に戻ってくるとオデルとオデレが出てきました。

オデーレはアナトリーに眉をしかめて耳を押さえておどけました。護衛のアリーとマリも邪魔にならないように常にいつしよにいます。クラリスがもつと普通にお友だちのようにしていけばいいと言うのですが、職業的に身に付いた立ち位置というのがあるようで、クラリスでもふと二人がいるのを忘れてしまうことがしょっちゅうあります。

オデーレが訊きました。

「どう？ 旅は楽しい？」

「はい」

アナトリーはかわいらしい笑顔で元気に答えます。

アナトリーといっしょにいると女性はみんないいお姉さんになってしまいます。

「ところでクラリス」

オデーレもアナトリーには笑顔で、クラリスには意地悪な質問をしました。

「あなたどうしてルピネーさんや伯爵様の一家と仲がいいの？ 恨まれて当然な立場でしょ、あなた？」

アナトリーの前でよくもそんな意地悪なと睨みましたが、アナトリーもオデーレも、見るとアリーとマリまで聞いたそうな顔をしています。

「しょうがないわねえ。話してあげるけれど、実はわたしもよく知らないのよね」

クラリスは肩をすくめて、それでも話し出しました。

たしかに伯爵夫妻は息子ルピネーのことでカラベラスにはかなりの恨みがあるはずです。

それなのにオーロル王子の命名式に招かれてやってきて、最初に出会ったときから今と同じようにかわいがってもらいました。

今から六年前、クラリスが九歳の時のことです。

伯爵は



「わしらはおまえの母親に息子の成長を見る楽しみを奪われたからのお、娘のおまえにその楽しみを返してもらわねばならん」

と言いますが、普通だったら同じように島流しの目に遭わせるところでしょう。

その後クラリスは伯爵のラズベリーアールに連れていかれ、以来年に一二度は必ずラズベリーアールの伯爵の下を訪れ、何度か伯爵のお供でペテロブラークにも来ています。

伯爵は以前クラリスの母に何度か会ったことがあるようなことをチラツと言ったことがあります。

確かにそうとは言えないが、何度か自分の命と国の危機を救われたことがあるように思うとのことでした。

それはルピネーが生まれるずっと前のことで、もしかしたらカラベラスは将来の計画に利用するつもりで伯爵に白羽の矢を立てていたのかもしれない。

そもそも伯爵が夫人と巡り会ったのもカラベラスの導きだったようです。

夫人はルピネーのラピスの妻ユリアナ同様彫りの深い線のくつきりした典型的なラピス美人ですが、出身はラピスに征服されたこの地のもともとの王族の血筋でした。

一族は困窮し、ラピスの代表である伯爵親子に深い恨みをいだいていました。

ある日夢に魔女が現れ、おまえたちの恨み重なる伯爵の息子が森に一人で迷い出るから殺してしまえと言いました。

半信半疑ながら森の言われた場所に行ってみると、伯爵が熱を出して倒れていました。伯爵は通い慣れた道を従者とはぐれ、なぜかまったく別の場所のここに迷い出てしまったのでした。

伯爵は当時三十七歳。

夫人は二十四歳でした。落ちぶれたとはいえ血筋の高貴さが災いしてまだ結婚相手に恵まれずにいました。

夫人は伯爵を殺そうなどということは少しも考えていませんでした。

た。伯爵はすでに国を富ませるために大いに働き、近隣諸国との間に平和的な関係を築いていた偉大な指導者だったからです。

夫人はただ、それがどんな人なのか見てみたかったのと、もし他の者に殺されるようなことがあつたらたいへんだという思いから確かめに来たのでした。

夫人の看病で回復した伯爵は旧王家の一族が困窮していることを知るとすぐに城に迎え入れ、仕事を与えました。

しばらくの付き合いの後、伯爵と夫人は結婚しました。

そしてルピネーが生まれたわけです。

ルピネーは王家の復活をもくろむ夫人の弟に誘拐されて行方知れずとなりますが、伯爵と夫人の間には第二子ナヴィーが生まれ、夫人の弟は失意のうちに事故死しました。

ルピネーが消えたとき、伯爵は直感的にあの女の仕業かと思いましたが、なんの為には分かりませんが、何度となく自分を救ってくれた報酬に連れて行ってしまったのだらうと。

伯爵がルピネーの無事を信じていたのはあの女ならルピネーをただ利用するような真似はするまいと考えたからです。

いつか必ず立派に成長した息子に会えるに違いないと考えたのです。

それがまさかあのような立派な成長の仕方をするとは夢にも思いませんでしたが。

夫人はもちろん平気ではいられませんでした。夫の話に一応は納得しました。それでも夢に見た十七年後の我が子との再会は・・・夫人にとっては悪夢のようでした。夫人にとってはクラリスの父親の方がよっぽど自分の息子として納得できるほどでした。ちなみに弟のナヴィーはすらりとした母親似のハンサムです。

伯爵が息子を「熊、熊」とバカにした呼び方をするのは男同士の仲間意識からのことですが、母親の夫人の場合案外本気でお腹を痛めたかわいい赤ちゃんが『あーあ、こんな風になっちゃって』という思いがあるのかもしれない。

夫人がクラリスをかわいがるのはまだ女の孫がないというのもあるかもしれませんが。あれやこれやかわいい服をいっぱい用意して、クラリスに着せるのを楽しみにしていますから。

「ナヴィーも結婚して三人の子どもに恵まれています。みんな男ばかりです。」

「ふうーん、やっぱりあなたのお母さんが関わってるんだ」

オデールは納得がいったと頷きました。

「ひよっとしてルピネーさんが今のような大物になったのもあなたのお母さんの計略だったかもしれないわね」

「それはどうかしら？」

クラリスは首を傾げました。

「それはむしろあの人のおかげなんじゃない？」

と、ちよつど気ままなお散歩から帰ってきたサファイアの精を指さしました。

「え、あたし？ 何よ、なに？」

何を言われているのか知りもしないでニコニコ好奇心丸出しで飛んできます。

サファイアの精はいつものようにアナトリーの頭の上に腹這いになって手を組んで顎を乗せました。アナトリーの小さな頭の上では大きく見えますが妖精に重さはほとんどありません。

オデールはその様子に肩をすくめて

「こんなお嬢ちゃんがねえ」

と疑わしそうな視線をクラリスに送りました。

こう見えてもサファイアの精は力だけは強い妖精です。

翌日。

昼前、何故かものすごく怒ってビビアナがオデールの部屋を訪れました。

練習用のレオタードに薄ものを引っかけ、額に汗を光らせてハア

ハア大きく息をついています。

同室のオデールはびっくりして怯えましたが、ピアノはものすごく怒っていたかと思うとさっと神妙な顔になり、頭を下げました。「お願い、あなたの踊りをわたしに教えてちょうだい」

ピアノはきのう一日必死に練習して、いいえ、最終公演の翌日からずっと厳しい練習を続けて、なんとかオデールの踊りを習得しようとして頑張ってきたのですが、どうしてもできないのでした。

できないというより、分からないのです。

形をなぞってもオデールのような迫力や情感が踊っている自分にさえまるであいてきません。

できない、駄目だ、と思い詰めて、自分にどうしようもなく腹が立って、その勢いで二人の部屋にやってきてしまったのです。

「いいわよ。行きましようか」

オデールは快く引き受けてピアノと後部甲板に向かいました。

オデールは何故かピアノにだけは全面的に優しいです。

一人になったオデールはこれ幸いと王子の部屋に向かいました。

部屋には思いがけずモデストがいました。

「ピエトロさんは作曲中はひどく神経質になるんでね、自主的に逃げ出してきたんだ」

モデストも一人きりの王子を心配していたようです。先にクラリスのところに行ってしまうと来づらくなってしまう。クラリスはすっかり王子のことを見限ってしまったようですから。

王子と二人きりになりたいような心細いようなオデールは優しいモデストということではっとしました。

モデストは舞台を設置する場所の相談ということで王子のお城のことをあれこれ聞きました。

半月前のお祭りの様子やふだんの生活の様子など、話しているうちに王子には懐かしく故郷が思い出され、オデールは王子の暮らしぶりを聞くことができ嬉しく思いました。

オデールの指導で稽古を再開したビビアナですが、オデールの指導は子どもに教えるような甘いもので、気持ちの高ぶっているビビアナは痙攣を起こしてしまいました。

「馬鹿にしないでよ！ わたしはあなたのように踊りたいのよ！ それともなに、わたしにあなたの踊りは無理だって言うの？」

ビビアナはオデールを睨み付け、悔しさに涙をにじませました。仲間のダンサーたちは恐れを感じて控え室に引っ込んでしまいました。

オデールは怒ることなく静かにビビアナを見つめています。

「あなたにわたしの踊りは無理ね」

ビビアナは唇をかねで血をにじませました。

「まあ、見なさい」

オデールはトントンと軽く助走して飛ぶとクルクルクルと空中で四回転してきれいにさっと着地しました。

オー、と漕ぎ手の大男どもが感嘆の声を上げました。

「できないでしょ、こんなこと？」

負けん気の強いビビアナは思い切り助走して力いっぱい飛んで回転しましたが、二回転したところでバランスを崩し、危うく手すりに激突しそうになってオデールに受け止められました。

「無理しちゃ駄目よ」

「できるわよ！ 練習すれば！」

「いいえ。できないわ。普通の人間にはね」

オデールに静かに見つめられ、ビビアナは子どものように顔を歪ませて泣きそうになりました。

「ちよつと休憩にしましょう」

オデールはビビアナを自分の部屋に誘いました。歩きながら

「今オデールは恋人のところよ」

と笑って言います。

オデルにはオデルの行動が手に取るように分かるようです。

「どうぞ」

と部屋に招き入れます。

「座って」

とベッドを指さしてコップに水をついで渡してあげます。

「最初に言っておくけれど、わたしはあなたのファンなのよ。あなたはわたしの目で見て最高のプリマだわ」

「でも、あなたにはかなわない」

ビビアナは恨めしそうな目でオデルを見上げました。

「ちよつと遊びましょうか」

オデルは鞆から金貨を一枚出すと右手に握りました。

左手も握り、右手と左手、上に下にサツサツと交互に重ねて元に戻すとビビアナの目の前に突き出しました。

「金貨はどっちに入っていたかしら？」

ビビアナはこっちでしょと右手を指しました。

オデルが右手を開くと、金貨は入っていませんでした。

「残念。こっちでした」

金貨は左手に移動していました。

「もう一回」

左手に握ったままサツサツとやります。

今度はビビアナもよく目を凝らしています。

「さあどっち？」

ビビアナは左手を指しました。どう見ても持ち替えてはいません。

「あら、またまた残念」

金貨は右手に移動していました。

「もう一回」

ビビアナもこの遊びに乗ってきました。

しかし何度やってもビビアナは当てることができませんでした。

どう見ても持ち替えているところが発見できず、いいかげん当てずっぽうで反対の手を指すとその時に限って元の手に握っているの

です。

「ビビアナはだんだん焦ってきました。

オデルは黒の袖のびったりしたドレスを着ていますが、わざわざ肘まで袖をまくり上げてくれましたがそれでもまるで当てられません。」

ただの手品なのでしょうがどうしても種が見破れません。

「しまいにはただ両手をつきだしてどっち？と訊かれましたが、それさえ何度やっても当てられませんでした。」

とつとつビビアナは降参しました。

「分からないわ。どういう種なの？」

「種なんかないわよ。ただ持ち替えているだけ」

「嘘よ。ぜんぜん見えないもの」

「じゃあ見ててごらんなさい」

オデルは右の手のひらに金貨を乗せましたが、それが瞬間的に消えて同じく開いた左の手のひらに移動しました。

オデルは今度はゆっくり左手から右手に金貨を手渡しましたが、だんだんそれを早くしていき、ビビアナの目がその動きについての苦勞するようになると、一瞬オデルの両手が消えたように見えて、その後はまったく動かなくなり、ただ手のひらの上の金貨だけが右へ左へ、消えたり現れたりを繰り返しました。

「ビビアナは声のない悲鳴を上げました。こんな動き信じられませんか。」

「いいわ、分かった。もうやめて！」

「ビビアナは大きく息をつき、どつとベッドに倒れ込みました。」

「普通の人間じゃ駄目だっていうの、分かってもらえたわね？」

オデルはニッコリ笑いましたが、

実はインチキです。

確かにオデルの身体能力は普通の人間をはるかに超越していますが、目にも留まらない動きというのは度を超しています。

オデルの種は催眠術。

例の花火の化け物の種といっしょです。でもビビアナは見事に騙されています。

「ビビアナはすっかりあきらめてすっかり落ち込んでしまいました。やっぱりわたしじゃ駄目ってことじゃない・・・」

「あなたがわたしになる必要はないわよ」

オデールは膝についてビビアナのにも手を乗せて顔を覗き込みました。

「あなたは素晴らしいわ。バレエの素質に溢れている。

恵まれた身体、運動能力、センス、頭の回転、努力、根性、欲、美しい顔、美しい体。何より踊りを愛する心。

あなたはバレリーナになるために生まれてきたような人じゃない。わたしはそんなあなたが愛しくてならないわ」

ビビアナは不思議そうにオデールを見ました。

「あなたはいったい誰なの？ まるで人間じゃないみたい。まるで、美の女神のようだわ」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね」

オデールはビビアナのにも手をポンと叩いて立ち上がりました。

「いいでしょう、あなたにだけ特別にわたしの本当の姿を見せてあげましょう」

オデールの体が白く光り、オデールの「本当の」姿が現れました。ビビアナは大きく目を見開き、口を開いてわなわな震え、慌ててひざまずくと手を合わせました。

「あなた様は・・・」

目の前に現れた、現れてくれた奇跡に涙を流して感動し、感謝しました。

白いオデールは言いました。

「あの日わたしが舞台上に立ったのはあなたにわたしの踊りを見せたためでもあったわ。

あなたならわたしの踊りの意味を、コンチャロフスキー氏の音楽を、理解してくれると思ったから。



でも、あなたがわたしになる必要はないわ。そんなんじやつまらない。

わたしはね、あなたのファンなのよ。

あなたは必ずわたしを越える素晴らしいバレリーナになるわ」

「本当でしょうか？」

不安そうに訴えるビビアナにオデールは微笑んで言いました。

「わたしの目は確かよ。あなたが望むならいくらでも修練のお手伝いをしてあげるわよ」

「ああ、是非お願いします、・・・女神様・・・」

ビビアナの目に映る女神のようなオデールの姿。

果たしてそれは本当に本当のオデールの姿なのでしょうか？ それともまた催眠術によるまやかしなののでしょうか？

白い光が消え、オデールは元の黒いドレス姿に戻りました。

「さ、立ちなさいな」

オデールはビビアナの手を取って立ち上がらせました。

「そろそろお昼にしましょう。稽古はまた午後からたっぷりね。

それと」

オデールはビビアナにぴったり顔を寄せて、いたずらっぽく覗き込むようにして言いました。

「わたしの正体は誰にも内緒よ。あなただけ、特別なんですからね。特にクラリス。あの子には絶対感づかれては駄目よ。魔女ですからね」

「やっぱり、敵、なんですか？」

神妙に心配そうな顔をするビビアナにオデールは「うっふっふっふ」と笑いました。

「まあ、そうね。でもあなたが心配するような深刻な間柄じゃないわ。まあ、ケンカ友だちってところね」

ビビアナはほっと息をつきました。

### 第32章 社会の授業

オデールの指導でビビアナたちダンサーの稽古は一段と熱が入り、活気に溢れたものとなっています。

特にビビアナは生き生きとし、踊っていることが楽しくて楽しくてたまらないようです。

モデストが王子、オデーレといっしょに見学に来ました。

次いでクラリスとアナトリーもやってきました。

「なんだかずいぶん様子が変わっているようね」

クラリスがめざとくビビアナの変化に気付きました。

オデーレを見る目が尊敬に溢れ、指導されることに心底喜びを感じているようです。

「今度はビビアナかあ・・・」

クラリスはチラとオデーレを見ました。

オデーレといいビビアナといい、最初強い反発を感じていたものが次々オデーレと親密になっていきます。

そういうクラリス自身もそうかもしれません。

「あの人こそ生まれながらの女王様みたいね」

クラリスは不思議そうな目でオデーレを見ました。

「それにしてもビビアナは一生懸命頑張っているわね」

クラリスはモデストと話したくて話題を振りました。

「うん。彼女は・・・」

何か言おうとしてモデストは口をつぐみ、ちょっと深刻そうな表情を浮かべました。

またニコツといつもの笑顔を浮かべると、

「アナトリー、寒いだろう？ せっかくだ、みんなで船倉の見学に行かないか？ 台所で熱いココアを作ろう」

と、みんなを誘いました。

オデーレは王子といっしょに残りたかったのですが、

「君たちもおいでよ」

とモデストに言われ、仕方なく後に続けました。

船倉に下りるとゴトンゴトン歯車の回る音と、シャーッと激しく水を弾く音が木の壁の向こうから響いてきました。

中央が高くなり、特にそこから床下からも激しい水の音とゴロゴロ何かの転がる音が足裏に響いてきます。

船首の方に向かうと台所があります。

その手前の通路でルピネーがごろんと転がってグーグー大いびきをかいて眠っています。昨夜も川底の見張りにほとんど徹夜だったようですが、それにしても

「こんなひどい騒音の中でよくまあ眠ってられるなあ」

なあ？とモデストはアナトリーと顔を見合わせて笑いました。

んん・・、とうなってルピネーが目を開きました。

「なんでえおまえら、ぞろぞろとむっくり起き上がりました。」

「起こしちゃってごめんよ。みんなにココアをご馳走しようと思っ  
てね」

「んん、そうか。ま、好きにやってくれ」

ルピネーもアナトリーを見るとニツコリ機嫌が直りました。

今度は一流とはいきませんが若いコックが一人乗っています。

腕より口が達者という軽いお調子者です。

「へいへい、まいど」

と、コックというより安宿のバーテンみたいな軽い乗りで親切にお湯を沸かしてココアを作ってくれました。

ココアのカップを受け取るとみんな通路にぞろっと並んで座ってふーふーやりだしました。

「なんだおまえらここに居座るつもりか？」

ルピネーが訊くとモデストは苦笑いして

「うん、ちよつとね」

と言いました。

「ビビアナさんのことだけねど」

とみんなに向かつて、

「彼女はね、農奴出身のダンサーなんだ」

アナトリーが不思議そうに訊きました。

「のうどつて、なに？」

「農奴つていうのはな」

ルピネーが父親らしく教えました。

「自分の土地を持たないで地主に使われている農民のことだ。主に貴族に土地を借りて作物を作る代わりに食料や賃金をもらって暮らしているんだ」

「ラピスの恥だね」

と思いがけずきつい調子でモデスト。

「もちろんその農奴制度がさ。君たちの国にはそんなものないだろう？」

訊かれて王子は「たぶん・・・」と自信なさそうに答えました。

「ベルーシアにはねえよ。ロヴィークもだ。ユークリナには部分的に残っているな」

とルピネー。

「もつとも多くの農民が貴族に使われているのはどこの国でも似たようなものだが、ラピスの奴隷制度はひでえ。もちろん、ラズベリールには農奴なんて一人もいねえ」

父親に言われてアナトリーは安心しました。

すっかり陰に隠れて目立ちませんがアリーとマリももちろんいます。彼らの父母は似たような境遇にあった者たちです。

モデストが珍しく怒りを含んだ早口で言います。

「ラピスの農奴は本当にひどい。人として扱われていない。地主の持ち物だ。人間として労使契約が結ばれているのなら仕事を離れれば自由なはずだ。しかし農奴は違う。地主の持ち物として取り扱われ、自由もなければ人間としての尊厳もない。農奴として生まれれば仕事を選ぶ自由もなく一生農奴として生きるしかない。結婚にも

地主の許可が必要で恋愛なんてできやしない。安い賃金で重労働を課せられ、使い捨ての家畜程度にしか思われていない」

モデストは怒りとも悲しみともつかない表情で王子を見ました。

「ペテロブラーグのあの繁栄を支えているものが何か分かるかい？ 農奴制度さ。ラピスの広い国土を農奴という安い労働力が食うや食わずで耕して、その恵みをごく一握りの貴族たちが享受している。それがあの大都市の正体さ。あんなばかげた街が、まともな仕組みで動いていると思うかい？」

王子はなんと考えたらいいいのか、血の気を失って黙っていました。ルピネーも面白くなさそうな顔で言いました。

「ラピスを支配しているのはほんの一握りの貴族だ。そして人口の九割以上が農奴だ。この広い土地で、まったく馬鹿げた話だ。

親爺殿は今もラピスの貴族どもに命を狙われている」

ルピネーに目を向けられ、アリーとマリも小さく頷きました。

「親爺殿はたしかに世界に平和をもたらした。しかしそれは国と国の争いをなくしたに過ぎん。ラピスの多くの人民が支配されていることに変わりはない。

だがラズベリーアールは違う。

基本的な構造は違いはしねえが、領民は自由だ。仕事をすりゃあそれに見合った当然の報酬を得る。雇い主が誰だろうと、不当な契約なら拒否できる。特別な金持ちはいねえが、飢えて死ぬような貧乏人もいねえ。

それがラピスの貴族どもには脅威なのさ。

ごっそり抱えている農奴どもが自分の権利や自由を主張してみろ、今の贅沢三昧の生活なんぞ維持できるわけはねえ。

親爺殿はふた月ラズベリーアールで過ごすとひと月ペテロブラーグで過ごす。来たくて来ているわけじゃねえ。ペテロブラーグでの親爺殿の仕事は外交特別顧問ってことだが、まあ、お飾りのどうでもいいような役職だ。中央の狙いはとにかく親爺殿を目の届く範囲に置いておくことだ。奴らは親爺殿が恐くて仕方ねえのさ。親爺殿

が農奴たちに号令して貴族を殺せと言えば、農奴たちは喜んで自分の主を殺すだろう。親爺殿にはそれだけの力があるのさ。

だが、そうなれば戦争だ。

おそらく戦争には勝つだろう。しかし、親爺殿もけっこうな年だ。戦争後の混乱した社会を立て直す時間は残っちゃいなえだろう。そして混乱を利用して貴族の後がまに座ろうという奴が必ず現れる。

それを見越しているから親爺殿は決して自分で動こうとはしねえ。ただ、自分の国を守っているだけだ。いずれ全ての領国がこうなればいいがと願いながらな。

屋敷で年に一回、夏に大舞踏大会が開かれるって聞いただろう？

あれはな、貴族どもに自分に翻意がないというのを見せて安心させてやるためだ。クーデターを起こすための武器も兵力も隠しちゃいなえよというのを見せてやるためさ。

ついでに言うとな、あの土地屋敷は国王から下されたものだ。平和を樹立した功績に対してな。だがこれにも意図があつてな。

あの屋敷は最初はボロボロの廃墟同然だったそうだ。ラピスの中央にあるあの屋敷を、親爺殿がどうするか、それを見て親爺殿の中央に対する態度を見極めようってわけだ。

親爺殿はあの通り屋敷を貴族好みの派手な装飾で再建した。年一回大舞踏会を開くなんていういかにも田舎出の成り上がり貴族のやりそうなことまでしてみせてな。だが、あの金ぴかの装飾は、見る奴が見りゃあとんでもねえ安物だつてのはすぐ分かる。頭の悪い馬鹿貴族どもは親爺殿を陰で田舎者呼ばわりして笑ってやがる。フン、そんな馬鹿どもはどうでもいい、いずれ、自分たちの愚かさに気付くだろう。

そついや親父殿に公爵位を贈ろうって話があつてな。俺はラピスから子爵位をもらつてるが、その前にカザリンから侯爵位をもらつちまつてる。それでラピスでも俺に侯爵位をやるうって話が出てな、侯爵って言ったら伯爵の上だ、俺がラピスから親父殿より上の爵位をもらうわけにはいかねえ。それで親父殿には更に上の公爵位を贈

ろうつて話でな。

だが、これにも裏の意図がある。公爵って言やあ大公様の次の位だ。大公って言やあ国によっちゃあ王様の位だ。その下となればこれはもう王様の位を伺える位置だ。つまり、場合によっちゃあ王様にもなれようって立場だ。

それを親父殿がもらっちゃまったらどうなるか？ すわ、やはり中央に対する謀反の気持ちあり、ってことになる。自分が国王に取って代わって国を支配するつもりだ、とな。

くっだらねえ、いかにも権力争いに明け暮れているクソ貴族どもの考えそんな駆け引きさ。しょうがねえんで俺はあれこれ理由を付けて侯爵位をもらうのを断った。俺が侯爵にならなきゃ親父殿も公爵になる必要もないからな。あゝあ、バツカバカしい。

親爺殿はせいぜい中央に上って大喜びしている田舎者を演じて安心させてやってるのさ。だが内実、あの馬鹿げた大都会には心底ウンザリしているんだ

ルピネーはフーと太息を吐いて、アナトリーにつまらねえことを聞かせてしまったなと苦笑いして頭をポンポンと叩いてやりました。

「アナトリー」

クラリスが言ってあげました。

「あなたのお祖父様はあなたが心から誇りに思っているいい素晴らしい人よ」

幼いアナトリーに全て理解できているとは思えません。しかしアナトリーは尊敬する父と大好きなクラリスお姉さんの言葉は信じました。

「はい。僕もお祖父様は大好きです」

クラリスは嬉しそうにニッコリ笑ってあげました。

「で、そのピアノナさんの話なだけれどね」

モデストが自分の方に話を戻しました。

「今ラピスではバレエがたいへんなブームだというのは知っている

よねえ？　そこで地方でも金持ちたちが自分の劇場や劇団を持っていたりするんだ」

来るときの船でアレクサンドラ夫人も言っていました。

「ところが、金持ちつてのは飽きっぽいからね、作っただけがいいが思い通りにならなかったり、経済的に負担が大きくなったりすると簡単にやめちゃうんだ。劇団は解散して建物は転用したり解体したりね。」

地方で金持ちが趣味で作った劇団はだいたい自分の農奴の中から団員を選んでいるから、解散となると彼らはだいたい元の農奴に戻される。特に優れた少数の者だけが特別に大都市の大きな劇団にそれなりの値段で売却される。

ビビアナさんは、そうしてモスクリンに来たんだ。

両親が農奴で、自分も幼い頃農奴の生活の苦しさを身を以て知っているからね、職業的なダンサーでいることに精神的に必死なんだよ」

踊れなくなったら、劇団に捨てられたら、また元の農奴に戻される。

そんな脅えが彼女の心に根深く染みついているのかもしれない。胸が苦しくなる辛い話です。

「僕には父さんやお祖父様のような力はない。社会を革命しようなんて大それた考えもない。でも、少しでも多くの人に自由と誇りを持ってもらいたいんだ。そのために文化の力とお金の力はすごく有効だと思うんだ。だから僕は、この仕事を絶対成功させたいんだ」

モデストの心の中にも祖父や父と同じ熱い理想を求める思いがあったのです。

クラリスはもう一度アナトリーに言いました。

「あなたのお兄様も偉いわね」

ところで一つ気になることがあります。

「おじさま。さっきユークリナには部分的に農奴制度が残っているって言ったわね？　それ、どういうこと？」



「あそこはラピスと政治的なつながりが強いからな」

ルピネーはラピスの代表としてユークリナに入っています。苦い思いがあるのでしょうか。

「さつきも言ったが、どこの国でも金持ちの貴族がいてその下に平民がついて生活しているという構造に大した違いはない。要は程度の問題だ。ラピスの農奴は極端にしても、どこの国でも貴族が威張っている暮らしをしていることに違いはない。それは、ロヴィークでもいっしょだ。

だが、それが社会のシステムとしてバランスよく働いていれば、使役される平民の方でもそんなに強い不満はない。現にロヴィークでは貴族の親玉の娘であるオーロラ姫やオーロル王子が人気者だろう？

ユークリナは、残念ながら貴族の方になりにかなり比重が偏っている。しかもそれがラピスの肩入れで年々ひどくなっている。ラピスは体制的な同盟国が多く欲しいのさ、自分たち貴族の生活を安定させるために。

ロットバルトの奴はそこところでも国王に不満があつたんだろ  
うなあ・・・」

ルピネーのロットバルトに対する態度の煮え切れなさはここに原因があるようです。

クラリスもユークリナの政治情勢に対する無知を知らされて気分が落ち込みました。

「やっぱりロットバルトが王様になった方がいいのかしら？・・・」

何も言ってくれないルピネーが恨めしく思えました。

それではベルーシアはどうなのでしょう？

クラリスはチラと王子を見ました。

王子は固まった表情でじいっと床を見えています。

王子もたぶん、クラリス同様国の政治など何も知らないのでしょう。

「すっかり暗くなつちまつたなあ」

ルピネーがみんなの顔を見渡しました。

「行こうぜ、明るいところへ。」

モデスト。おまえの仕事を見ようじゃねえか。農奴出身のビビアナ嬢がどれだけ踊れるものか、ちよつくら見物させてもらおうじゃねえか」

冬の近づくラピスの空は相変わらず灰色にどんより曇っています。しかしクラリスは空が微妙に明るくなっているような気がします。思えばペテロブラーグではどの建物も煙突からもうもうと黒い煙を吐いていました。夜の灯りの数もとんでもないものです。あの灰色の暗い空は、人間の作り出した部分が多かつたのではないでしようか？

ビビアナは踊り続けています。

アンドウトオ、アンドウトオ、

レオタードはぐっしより濡れ、顎から汗がしたたり落ちています。けれど表情はとても明るいです。

オデルという良い師を見つけて、なんの不安もなかつただ踊る喜びにのみ心が満たされています。

動きも伸びやかです。姿勢も軽やかです。

ほんの短時間で確実にビビアナの踊りは進化しています。

意識の解放。

自由でいること。

それが進化の秘訣であるように、自由の象徴であるようなオデルを見てクラリスは思いました。

### 第33章 問いかけ

ペテロブラーグを出発して五日目の夜、大白鳥号はガルボリースの河川港に到着しました。

往路は三日半、復路は丸四日かかった計算です。

流れをさかのぼる上に向かい風、おまけにバレエの練習で場所を取られてのことですからかなり頑張ったと褒めてあげなくてはならないでしょう。

満月まで後八日、特に障害がなければまだ十分間に合う時間ですが・・・

時間をさかのぼること六日、オデット王女たち白鳥の群れも白バラの森を飛び立っていました。

白バラの森には四日間滞在しました。

朝、みんな揃ってカラベラスとアイリス、ユリアに挨拶しました。相談の上、やはり全員でベルーシアに向かうことにしました。

オデット王女は自分と三人の近衛女官だけで行きたかったのですが、三人の子どもたちがどうしてもいっしょに行くと言って聞かず、そうなる大人たちも残りたいとは言えなくなっていました。子どもたちにはロットバルトへの恐れも、呪いが解けない心配もまるでないようです。

それより奇跡の瞬間に立ち会いたいという思いの方がずっと強くありました。

「オーロラ姫もそんなことを言っていたわよねえ。まったく女の子ってというのは素敵な恋のおとぎ話が好きねえ」

とユリアが苦笑いしながら言いました。

「ま、あたいらがいっしょだから心配ないけどな」

とヴァイオレットがナー ज्याの頭の上でえっへんと威張ります。

「でもさー、ほんとはさー」

とカラベラスを恨めしそうに見て、

「またあたいとナー ज्याを合体させてくれりゃいいんだ。そしたらロツトバルトなんかこてんぱんにやっつけてやるのにさ」

「わたしがいつしよに行きましようか？」

とヴァイオレットの話を無視してユリアがカラベラスとオデット王女に訊きました。

「どうします？」

とカラベラスはオデット王女に訊きます。

オデット王女は少し考えましたが、

「いいえ。お気持ちだけ」

と答えました。

「あちらでクラリスさんと落ち合うことになっています。彼女と会えば問題は解決できると思います」

オデット王女は自信を持って言いますが、他の大人たちは心配です。

クラリスと会うという事は、ジークフリート王子と会うということ事です。

あの頼りない王子様が問題を解決できるとは、誰一人期待していませんでした。

「そうですか。それではお気を付けて行ってらっしゃい」

カラベラスはオデット王女を抱きしめてお別れの挨拶をしました。

「クラリスにもよろしくね」

「はい。お伝えします」

二人は何事か心通じ合うように微笑み合いました。

カラベラスは三人の子どもたちも抱きしめてお別れました。

「また夢の中で遊びにいらっしやい。クラリスといつしよにね」

お別れが済むとオデット王女たちの体が白銀に輝きだしました。

オデット王女はカラベラスに頷き、駆け出すと、腕は翼となり、

羽ばたいて地面を蹴ると、その姿は完全に白鳥へと変身しました。

子どもたちが続き、大人たちも遅れじと続きました。

「じゃ、行つてくるねー」

ヴァイオレットがお気楽にバイバーイと手を振ってナージャと共に天に駆け上がりました。

「頑張りなさいね」

カラベラスは夫アイリスと共に我が子を励ますように暖かい眼差しを送りました。

久しぶりの空の旅です。

オデット王女はナージャに並ぶとヴァイオレットに訊きました。

「ねえ、二人で一つの体になるって、どんな感じ？」

火花の精ヴァイオレットと天馬ナージャは以前カラベラスの魔法で一つになって火龍ヴァイオレットでいた時期があります。

「そうだなー」

ナージャの頭の上でらくちんを決め込んでいるヴァイオレットはのんびり考えました。

「自分が広がった気がしたなあ。感じ方とか考え方がうんとたくさんになるんだな」

「ナージャの意識とケンカしたりはしなかったの？」

「何かしようとしたときに自分の考えじゃないなって時はあったけれど、それでイライラしたりおかしくなっちゃったりってことはなかったなあ。龍にいるときはあくまで龍で、あたいてもナージャでもないんだなあ。ま、あたいらは最初から気が合ったみたいだな」

「な？とナージャに同意を求めましたが、ナージャはじろつと一瞥をくれただけです。」

馬と融合するほど気が合うというのはいかにもお気楽な妖精らしいですが、それだけカラベラスの魔法が完璧だったということでしょう。

「カラベラス様とアイリスさんもくっついてるのよね。あの二人はどうなのかしら？」

オデット王女は魂の不思議を思いました。

ロヴィークの空は青く晴れ渡っています。少なくともベルーシアに入るまでは危険はないでしょう。オデット王女はあれこれ心配するのはやめて、普通では絶対味わえないこの快適な空の旅を楽しむことにしました。

お話戻ってバレエ巡業団と王子一行。

ガルボリースに一泊して翌日は五台の馬車に分乗してカカッサス越えの登山路の宿場町に泊まりました。

翌日、まだ朝のうちに鍾乳洞窟の入り口に到着しましたが、来たときは様相が一変していました。

まだ土台の段階ではありますが、立派な入場門と山小屋が作られています。

伯爵の早速の指示によるものですが、なるほどモデストのせつかちは祖父譲りであるようです。

山小屋はかなり本格的な物になるらしく、さすが要塞作りでならした伯爵の指示です。

行きに案内してくれた山の民ジローが出てきて迎えてくれました。髪をきれいになでつけ、立派な服を着て、まるで見違えるようです。

「ああ、ルピネーさん！」

ジローは顔をほころばせてルピネーの手を両手でがっしり握りました。

「見てください、まるで夢のようですよ！　ここが我々の家になるんですよ！　もちろん中の宿屋も営業しますが、明るい太陽の下でどうどう暮らしていけるんですよ！　早く爺様にも見せてやりたいですよ！」

ルピネーも嬉しそうに笑ってジローの手をポンポン叩きました。

「よしよし、そりゃあよかった。だが浮かれてばかりもいらねえぞ。権利書はしっかり持つてるな？　悪い奴らに決して騙し取られちゃならねえぞ」

「はい。権利書は二枚一組でなければ効力がないようにして一枚は伯爵様の下へ届けられているはずです。一枚はもちろん、・・おつと、どこに隠してあるかは内緒ですよ」

伯爵はさすが抜け目がありません。

ジローたち一族はこれからこの洞窟の管理者として通行人から通行料を受け取り、他にこの山小屋と向こうの出口の山小屋と中の宿屋で旅人相手の商売をして生活していくことになります。

「散っていった一族全部を呼び寄せて、他にも使用人を雇わなくちゃなりませんね」

これから多くの旅人がこの便利な抜け穴を利用するでしょうからどれほど忙しくなるか分かりません。もともと洞窟内は酸欠になっってしまう危険があるので通行規制をしなければなりません。

「それじゃあ俺たちが新装開店第一号のお客様ってわけかな？」

「はい。これからもどうぞご鼻屑に」

ジローは今回とは断りましたがルピネーは人数分の通行料をきっちり払いました。

入り口も広げられ、かがまなくても十分くぐれました。ルピネー以外は。

内部は正しい道の壁に鉄の杭が打ち込まれ丈夫な綱が手すりとして張られています。これで万が一灯りが無くなっても道に迷うことはありません。

予想通りオネーギン氏が足手まといとなりました。

「わしは一日中歩くななんて聞いておらんぞ！」

オネーギン氏は大力カツサスを口バの背に揺られてのんびり越すつもりでいたようです。

ルピネーが面倒くさそうにいました。

「別にあんたは無理してついでにこなくてもいいんだぜ。二日安全な道を歩いて越えるか、六日間凍える寒さの中を高山病に苦しみながらゆっくり越えるのがいいか、ま、好きな方を選んだな」

オネーギン氏は苦々しげに考えましたが、自分の国を持つという

夢のために我慢してついでいくことに決めました。

とはいえ足手まといには変わりなく、幼いアナトリーもいることです。一行は二つのグループに分かれることになりました。

先行グループはこの洞窟に慣れたルピネーが先導し、後続グループはジローが案内することになりました。

ルピネーはジローに意地悪に笑って言いました。

「これから先こういう客の相手もしなければならねえんだ。練習と思つて頑張るんだな」

後続グループはオネーギン氏と、アナトリー、アリーとマリ、四人の楽団員、それとアナトリーがかわいそうなのでクラリスとモDESTもつき合うことにしました。アナトリーのお友だちのサファイアの精もいっしょです。

グループにはそれぞれ二人ずつ荷物持ちに屈強な男たちがついています。

オネーギン氏の愚痴にはモDESTがかかりきりで相手になって、クラリスはがっかりしながらアナトリーと楽しくおしゃべりしながら歩きました。

灯りはランタンですが、サファイアの精の青い光は洞窟の暗闇ではたいへん重宝しました。

途中お昼を取る頃には先行グループはすっかり灯りも見えなくなつてしまいました。

時間の感覚がすっかり狂つてしまう洞窟の中ですが、アリーが伯爵からもらった懐中時計を持っていました。

時間を教えてもらつたびに

「まだそれしかたっていないのか!？」

とオネーギン氏は行きの王子と同じ事を言いました。

王子は先行グループにオデーレといっしょに行きましたが、どうしていることでしょうか？

鍾乳洞が所々現れてアナトリーが歓声を上げました。

オネーギン氏は不気味がってあまりお気に召しませんでした。



先行グループから二時間遅れて夜七時、後続グループも洞窟内の宿屋に到着し、ジローの奥さんが笑顔とホットワインとココアで迎えてくれました。

先行グループも食事は待つてくれていました。

宿屋周辺は大規模な鍾乳洞がたくさんあるので退屈はしません。ピエトロ氏もさぞかし新しい曲のインスピレーションを受けたことでしょう。

ダンサーたちは見物もしましたが、柔軟運動もたっぷりしました。みんな揃って夕食になり、オネーギン氏もこのワインには十分満足しました。

頑張ったアナトリーはさすがに眠くなり、食事後すぐマリといっしょに毛皮のベッドで眠ってしまいました。

ここは父親の出番のはずですが、ルピネーは絶品のワインに上機嫌になって同じく真っ赤になったオネーギン氏と愉快に乾杯しています。

王子とオデーレ、ピエトロ氏とオデルも小さな灯りの中でなんだかいい雰囲気にいるようです。

クラリスはやっと解放されたモデストに鍾乳洞を案内してあげました。

大小さまざまな柱が林立して森のようになっているところや、縞模様のつるつるの壁がぐねぐね湾曲してせり出している通路や、蓮の葉が幾層にも段々に重なった池や、天井の高い聖堂のような場所に敵かな祭壇までありました。

「ここで結婚式を挙げたらまさに神に祝福されているような気になるねえ」

モデストが感心して言いました。

クラリスは結婚衣装を着て立っている二人を想像して頬を赤らめました。

「王子もここで結婚してしまえばいいのにねえ」

王子の事なんて言うのでせつかくのロマンチックな気分が台無しです。

クラリスがちよっぴり非難の目を向けるとモデストは静かなちよつと寂しそうな目で天まで続いていそうな祭壇を見て言いました。

「僕は王子はてつきりオデーレさんと結婚するんだとばかり思っていたよ」

そうなのです。

モデストばかりでなく伯爵家やダヴィドフ家のみんながそう思っていたのですが、ダイヤの件でそうではないということを知られてしまいました。

クラリスもちよつと悲しい目になって祭壇を見ました。

クラリスは今やすっかりオデーレに同情的で、二人が結婚できればいいと思っっていますが、それはクラリスの立場ではまずいことなのです。では、もし王子がオデット王女と本当に結婚するようなことになったとしたら、残されたオデーレはどうなってしまうのでしょうか？

あんなに王子を愛している、おそらく世界でただ一人の女性が・

クラリスは遠慮がちにモデストに訊いてみました。

「モデスト兄さんは、オデーレのことをどう思ってる？」

「かわいい女の子だよね」

モデストは微笑ましく言いました。

「あんな子と友だちだったら楽しいよね」

「美人でしょ、彼女？ いいなあって、思わないの？」

この頃なんとなく忘れがちですが、オデーレはオデット王女と瓜二つの顔をしています。

「美人だよねえー。あんなに美しい人、ユリアナ母さん以外では初めて見たよ」

モデストは感心してうんうんと頷きましたが、

「でも、」

と苦笑いしました。

「僕にはちよつと荷が重いかな？　僕は父さんと違ってまだまだ自分のことで手一杯だからねえ」

クラリスが不思議そうに覗き込むと、

「彼女、すごく甘えん坊だろう？　君や王子やオデルさんにいつもべったりくっついていないか？　あんな美人に甘えられたらそりゃあ嬉しいけれど、そうそういつもいっしょにいられるわけじゃないし、いつもいつもくっついていられるのは正直なところ辛いねえ」

「ユリアナさんはそういう風だったの？」

「もつと扱いづらかったようだよ。ちよつと気のないそぶりをしただけですぐに死にそうなほど落ち込んだみたいだから」

おつと、これは内緒だよ、とモデストは笑いました。

「あのね、それじゃあ・・・」

クラリスは恥ずかしそうにうつむいて、目だけチラチラモデストを見て訊きました。

「わたしは、どうかなあ？・・・」

モデストはちよつぴりしかめつ面になってじーつとクラリスを見つめて、ため息をつきました。

「さて、それを訊かれるのは、実は困るんだ」

クラリスがハツと顔を上げるとモデストは正面から見つめて微笑みました。

「僕はそれに答えられるほどまだ人間ができていない。

君は僕の、世界一大切な女性だからね」

クラリスは目をいっぱいに開いて真っ赤になりました。

モデストは愛しているとは言いません。

でもそれ以上に誠実に一人の女性としてのクラリスに好意を告白してくれているのではないでしょうか。

クラリスは慌てて祭壇に向き直って、神秘に浮かび上がる超自然

の美を見つめました。

「ここでこのままモデストと愛を誓い合えたらどんなに素敵でしょう！」

しかし、自然ではあり得ないその奇観に、今の自分を思いました。今の自分に、今の自分のこの好意をモデストに告白する資格はありません。

クラリスは思いがけず涙をポロリとこぼしてモデストを振り返りました。

「ありがとう。すごく嬉しいわ。でも、私は、今は……」  
モデストは優しくクラリスを抱きしめました。

「いいんだよ。僕たちにはまだ十分時間がある。時が僕たちをもっともつと成長させていくだろう。僕たちの心もそれに連れて変わっていくだろう。ただ今は僕が君をとても大切に思っているということだけ、分かっているからええそれでいいんだ」

クラリスはモデストの優しさが嬉しく、そして悲しく、胸に顔を埋め、ぎゅゅと抱きしめました。

翌日カカッサスの南側に向かって残りの道のりを歩き出しましたが、距離はこちらの方が短いので時間的な余裕があります。

アナトリーは昨夜はすぐ眠ってしまったので大喜びであちこち寄り道して鍾乳洞見物をしながら歩きました。

オネーギン氏は疲れと二日酔いでますますご機嫌斜めです。

ルピネーとクラリスは緊張しています。

ロットバルトが自分と王子の帰国を邪魔してくるとすればここを出たときが一番狙われやすく危険が大きいと見えています。

「バレエ団のみんなやアナトリーを巻き込むわけにはいかないわ。やっぱりわたしたちで先行しましょう」

クラリスが提案し、ルピネーも同意しました。

ルピネー、クラリス、王子の三人で先に行くことにしました。この三人が危機を脱してしまえば他のみんなが巻き込まれることはな

いでしよう。

モデストにそれとなく事情を話し、三人は先を急ぎました。急いでいますから歩くことに集中していますが、クラリスはたまに見る王子の顔つきが最初会ったときとはずいぶん違っているのを感じました。

引き締まっているようにも感じますし、苦悩しているようにも感じます。

クラリスは王子もいい加減自分のオデーレに対する気持ちに気付いているだろうと考えています。そしてそれが道義的に許されない気持ちだということも十分分かつているはずです。

自分のオデーレへの思いを成就させるためにはやはりロットバルトと対決しオデット王女の呪いを解かなくてはならないでしょう。動機のでどころは違っていてしまいましたが、真実の愛を貫くために悪と戦うという気持ちでようやく本気でロットバルトと戦う決心をしたようです。

クラリスはちよっぴり王子を見直しました。

しかしただ戦って済む問題でもありませんし、真つ正面から戦って勝てる相手ではありません。

とにかく、満月の夜に間に合って城に帰ることです。ずいぶん急いで歩いて、昼をそう回らないうちに出口近くまで来ました。

地面が幾分乾燥してきて坂道になってきました。

「よし、頑張ったな。ここを登り切れば出口だ。明るい内に出口まえばちつとは有利だろう」

暗さに慣れた目に先の方にかすかな明かりが見えました。

「出口だ」

先頭のルピネーがそう言ったとき、ふとその明かりがかげり、次の瞬間ゴオツともものすごい突風が吹き込んできて王子とクラリスは坂道を転げ落ち、巨体のルピネーでさえたまらず尻餅をつきました。「な、なんだあ!？」

続いてゴンゴンガン、ガガンツ！とものすごい音と振動が響いてきて、出口の明かりは完全に見えなくなってしまうました。

「おい、だいじょうぶかあ？」

出口も気になりますが、ルピネーは消えてしまった灯りをつけ直してまず下に駆け下り転げ落ちた二人の様子を確かめました。

クラリスはとっさに魔法で空気のクッションを作って衝撃から身を守りましたが、王子は倒れて気を失っていました。

声をかけると目を覚ましましたが「イタツ」と左肩を押さえました。クラリスが診てあげると骨は折れていませんがひどく打って内出血しています。

クラリスが王子の手当をしてあげているうちにルピネーは出口の様子を見に行きましたが、

「ちつくしよ、やりやあがったな！」

と大声で悪態をつきました。

出口から二十メートル近く、太い角材や丸材や、板やなんやかんやと、おそらく表の入場門と山小屋のものでしょう、頭の上までぎゅうぎゅうに木材が詰め込まれています。

隙間や地面に枯れ葉や枯れ枝がいっぱい落ちていますからきつとあの突風で建物が破壊されて穴になだれ込んできたのでしょうか。

そんなものすごい風を起こせるのはもちろんロツトバルト以外にいません。

ルピネーは一通り調べるとクラリスと王子のところへ戻りました。「やられたよ。まったく迂闊だった。奴の力を見くびっていた」

ルピネーが状況を説明するとクラリスも王子も底抜けの暗闇に放り込まれたような気分になりました。

王子の肩はクラリスの魔法の力でなんとかゆっくりり上げ下げできるくらい回復しました。

三人は揃って出口の惨状を見に行きましたが、まさに絶望的な有様でした。

ルピネーは

「なんとかできねえかやってみるからおまえたちはとりあえず休んでろ」

と一人材木の山に立ち向かっていきましたが、いかにルピネーといえども外からならまだしも中からではどうにもならないでしょう。ジローが一人仲間をこちらの出口に連絡にやっていますからルピネーたちの到着は知っています。急いで復旧作業をしてくれるでしょうが、通れるようになるまでおそらく三四日はかかるでしょう。

肩以外にもあちこち体を打って痛みのある王子は壁の丸い窪みを見つけて言われたとおり休ませてもらいました。

クラリスも他にどうしようもないので王子につき合っとなりに座りました。

「今回ばかりは君もどうしようもないようだね」

王子が嫌みでもなく力無く言いました。

「君の世話になってる僕はさらに役立たずだ」

「情けないこと言わないでどうしたらいいか考えなさい」

とは言うもののクラリスも、

「正直言ってわたしもどうしたらいいのか見当もつかないわ」

と肩を落としました。

二人して暗く黙り込んでしまいましたが、

「やっぱり駄目よ」

とクラリスが顔を上げました。

「わたしは絶対ロットバルトに負けない！ なんとかしてもここから脱出して絶対満月に間に合わせてお城に行ってみせる！」

王子を見て、

「あなたも元気を出しなさい！ 真実の愛の力はこんな事くらいでくじけるものではないでしょう？」

王子も顔を引き締めて頷きました。

「そうだな。こんなことでくじけたらオデット姫に会わせる顔がないな」

よいしょと立ち上がって、クラリスも立ち上がりました。

「君はやっぱり強いなあ。尊敬するよ」

「あなたも、バカは相変わらずだけど、気持ちはちょっと強くなっ  
たようね」

「やっぱり相変わらずきついなあ。君はほんと僕に対しては容赦な  
いよな。ま、言われても仕方ないけどさ」

「自覚してるんじゃない。少しはおつむも利口になったのかしら？」  
「君にバカバカ言われたおかげでね、心にグサグサ突き刺さってい  
るよ。僕はこれから一生自分はバカなんだってへりくだって生きて  
いなくちゃならなくなってしまうたよ」

減らず口が少し戻ってきて、王子も少し元気が戻ってきたみたい  
です。

クラリスとずうつとまともに口をきいてませんでしたから、こう  
して悪口でも言ってもらう方がまだしも気が楽になるのでしょう。

でもクラリスは思いました、

王子はクラリスが考えている以上に自分の行動をしつかり考えて  
いるのではないのでしょうか？

クラリスは思わず以前よりちよっぴりかっこよくなった王子の顔  
に見とれて、ポツと頬を赤らめました。

「あのね、王子・・・」

そのお・・・、わたしってどうかしら？

やっぱりオデーレやオデルと比べて、ぜんぜん女の子としての  
魅力ってないのかしら？・・・」

王子は意地悪な細い目になってクラリスを見ました。

「なんだい急に。知ってるぞ、モデストさんだろう？ いいか、君  
のために言ってるけどな、モデストさんに好かれたければもう少  
しおしとやかなかわいい女の子になるんだね。まったく君ったら年  
下のくせにまるで姉さんみたいな口をきくからな。」

あ、いや、君もモデストさんの前じゃかわいい普通の女の子なの  
かな？ 君が姉さんぶるのは僕に対してだけか？ 君こそ僕のこと  
なんか一人前の男としてなんか見てないんだろ？



ハハーン、ちょうどいいや、僕も君のことを口やかましい姉さん  
みたいにしか思っていないよ」

「おあいにくさまでしたー、と子どもみたいにワルぶる王子にクラ  
リスはポカーンとして、しばらくしておかしそうに微笑みました。

「そうね、わたしはあなたの姉さんみたいなものなのね」

クラリスはなんだか吹っ切れたようなさわやかな顔になりました。

「さーて。余計なおしゃべりはこのくらいにして、本当にどうしよ  
うかしら?」

と考えているところに奥の方から青い光が飛んできました。

### 第34章 秘密の暴露

「遅い！」

クラリスは文句を言いました。

飛んできた青い光はサファイアの精でした。

「なによー、胸騒ぎがしたから様子を見に来てやったのに」

サファイアの精は言い返しましたが、

「だからそれが遅いのよっ。ユリアさんやダイヤ姉さんならとっくに来てくれてるわよっ」

とクラリスはさらに睨み返しました。

サファイアの精は妖精の中でも一二を争う呑気者です。

クラリスはため息をついて力を抜きました。

「まあ見てきてごらんなさいな。ひどいものだから」

クラリスに指さされてサファイアの精は出口に向かいましたが、キヤー、とか、なにこれー、とか、たーいへん、とか騒ぎ立てて、ルピネーにうるさがられて追い払われてきました。

「でしょ？」

「なになに？ あれがロットバルトって奴の仕業なの？ ずいぶん

力持ちなのねえー」

どうも感心する点がずれている気がします。

王子が訊きました。

「あなたは何か特別な力ってないんですか？ 風を起こすとか火を起こすとか？」

「光魔法！」

サファイアの精が王子の頭に向かってパツと手を広げると青い光の粉が散って髪の毛が青くなりました。

「効果は一日間！」

「これ、なんの役に立つの？」

「目立って人気者になれるわよ。あと、運が良くなるから賭事に強

くなるわ」

そうです、サファイアの精の最大の力は運の良さです。

今はあまり役に立つようには思えません。

サファイアの精と無駄に時間を浪費しているうちに後続グループが到着してしまいました。

「まあ、すてき！」

とオデールは王子の青い髪を喜んでくれましたから多少の効果はあったようですが、今はそんなゆるんでいられる状況ではありません。

仕方なくクラリスがみんなを出口に案内するとその惨状にみんな目を見張り、ざわざわ動揺しました。

ルピネーもどうにかしようとするのをあきらめました。

「ごらんの通りだ。こうなっちまったらみんなにも本当のところを話さないわけにはいかないな」

ルピネーはクラリスに頷き、クラリスは頷き返すとみんなにオデット王女に呪いがかけられていること、その呪いを解くためには王子が必要で、そのため王子が呪いの主に狙われていてこういうことになってしまったことを話しました。

みんな初めて聞くこの事実には驚きましたが、とりわけオネーギン氏は、

「なんだと！　これがそんな危険な旅だったなんてわしは聞いておらんぞ！　いったいどうしてくれるんだ！？」

と激怒して大騒ぎしました。

あんまりうるさいのでクラリスは魔法で眠らせてしまいました。

うるさいオネーギン氏が黙ってしまうと勝手にシーンと静まり返りました。

「隠さなくたっていいわよ」

オデールが腕を組んで言いました。

「その呪いの主ってというのはね、このわたしの父、ロットバルトなのよ」

衝撃的な告白ですが、クラリスは今やそれどころではありません。「とにかく、わたしたちはなんとしても満月の夜までにお城に帰り着かなくてはならないの。ここで足止めを食っている場合ではないのよ」

ルピネーが言いました。

「とはいえ、今から北側に戻って山を越えるってわけにはいかねえ。どんなに急いだって三日はかかる。それに俺とクラリスはともかく王子には無理だ。だいたい三日後にはこの出口が使えるようになっていくかもしれん。逆に言えばどうしてもそれだけの日数は無駄になっちまうってことだ」

「ねえジローさん」

クラリスがショックですっかり落ち込んでいるジローに尋ねました。

「この洞窟には他に出口はないの？」

これだけあちこちに枝分かれしているのですから他にも外に通じている穴があってもよさそうです。

ジローは首を振りました。

「ありません。少なくともわたしたちは知りません」

クラリスは握った手を唇に当てて考えました。

お母さんならどうするでしょう？

カラベラスなら簡単に木材を吹き飛ばしてしまえばいいのですが。

ルピネーも他のみんなも考えていますが、誰からもいいアイデアは出てきません。

王子がついチラとオデールを見ました。

別にオデールが悪いわけではないと王子も分かってはいるのですが・・

そんな王子の視線が気になったわけでもないでしょうが、オデールはくるりと奥の方に向かうと突然、

「わたしはオデール！ ロットバルトのしもべよ、出てきなさい！」と大声で呼びかけました。

しばらく何もなく時間が過ぎていきましたが、  
やがて、ひたひたと軽い奇妙な足音が聞こえてきました。  
ルピネーが前に出てランタンを掲げました。

「誰だ？」

ひたひたひた。

やがてランタンの黄色い光の中に現れたのは、あの鳥人間でした。

ヒイツと皆に脅えが走り、特に鳥人間に宙づりにされたビビアナは全身鳥肌が立ち、ブルブルふるえが止まりませんでした。

「おまえは」

ルピネーもぐつと身構えました。

そのルピネーを追い越してオデールは鳥人間の方に歩いていき、  
くるとこちらを向きました。

「紹介するわ。これは父の部下のバルバツサというものよ。誰にも  
危害を加えるつもりはないから安心していいわ」

とは言うものの、みんなの怯えた目はオデールも化け物の仲間と  
見えていました。

ビビアナに怯えきつた目を向けられ、さすがにオデールも少し辛  
そうな目をしました。

「バルバツサと申します。先日は失礼をいたしました」

鳥人間バルバツサはしわがれた声で言っつて翼を片方胸に当て紳士  
風に頭を下げました。

「それで」

先頭のルピネーが体の力みを解いて言いました。

「こいつを呼んだってことは何か策があるってことか？」

「さあ？」

とオデールはバルバツサを振り返って、

「どう？ この出口以外にここから出られる道はある？」

「さようでございますな」

とバルバツサはオデールにかしこまって、

「一つ、あるにはありますが、かなり難儀ですぞ。

まずは皆さまのお宿の近くまで戻りませんと」

ということ、せつかくここまで来たのにまた逆戻りです。

みんな文句の一つも言いたいところでしようが鳥人間が恐くて押し黙っています。

オネーギン氏は起きると面倒なので眠らせたままにしておくことにしました。

「立て。歩け」

オデルが催眠術で半眼のオネーギン氏を人形のように操りました。

みんなのオデルを見る目にますます脅えが濃くなりました。

みんな精神的な落ち込みと緊張でへとへとになって宿の近くまで帰ってきました。

鍾乳石のたくさんある場所です。

「こちらに」

バルバツサの案内したのは王子とオデレがいたく感動した高い天井から深い亀裂に固まった滝がなだれ込んでいる場所です。

相変わらず底なしの亀裂が真っ黒に口を開けて思わず足元からふるえが走る怖さです。

「この穴の底を川が走っております」

バルバツサが説明します。

「雪解け水が岩の間を通って出来た川ですが、今の季節は水量が少なく出口の穴を通ることができません」

みんなあの穴を下りるのかと恐れおののきました。

バルバツサは、イツイツイツ、と喉の奥に引っかかる嫌な音を立てました。笑っているのでしょうか。

「普通の方には無理でございます。足を滑らせて転落するか、迷路に頭がどうにかかってしまいます」

「俺ならどうだ？」

バルバツサはルピネーを値踏みするように見渡して、

「まあ、やれるかもしれませんが」

と偉そうに言いました。

脳天気なサファイアの精がしゃしゃり出ました。

「あたしが様子を見てきてやるうか？」

バルバツサは胡散臭そうに青い妖精を眺め回しました。

「できるのかね？ お嬢さん」

「水の流れを追っていけばいいんでしょう？」

「そうはいきませんな。途中で岩の中に消えて、ぜんぜん別の場所に現れるような箇所がいくつもありますからな。下の迷路はこの迷路よりはるかに複雑ですぞ」

「だいじょーぶだいじょーぶ。確かに外に通じているんなら風のおいで分かるから。妖精の力を信じなさいって。それにあたし、運が強いから、迷路なんか楽勝よ」

それがサファイアの精の最大にして唯一の力です。

「おい。時間がねえんだぞ。いつもみてえにのんびりしてんじゃねえぞ」

心配するルピネーに、

「超特急！」

とウインクしてギユンと亀裂に飛び込んでいきました。

二時間がたちました。

バレエ団のみんなは宿屋に帰って休んでもらっています。

ここにいるのはルピネー、クラリス、王子、オデーレのいつものメンバーに、オデーレとバルバツサです。

クラリスはこの二時間の間にバルバツサにロットバルトの昔を聞かせてもらいました。

ロットバルトはやはりこの北の森に住む鳥の王でした。

それがジャローム将軍に森を焼かれ、一族を連れて穏やかな西の森、ハルメイユー国に逃れました。

ケガをした者も多く、そこでしばらく養生しました。

ロットバルトはジャローム始め人間どもに復讐するため、まず人間に化けて人間の社会を研究しました。そこで改めて人間及び人間社会の不条理さに怒りを覚え、復讐から肅清へと考えを変えたようです。

つまり、腐った人間どもを一掃し、自分がこの世界全ての王となり、人間たちも自分が正しく管理してやろうと考えたのです。

ハルメイユーで人間として暮らしている間にオデルの母と知り合ったようです。

ただ、バルバツサたちはロットバルトほど強い魔力を持たず人間に変身することはできなかつたので、この時期は距離を置いていてロットバルトの生活がどうであつたかは知りませんでした。

ロットバルトはさらに人間社会に深く入り込み、ハルメイユーからも外に出ている情報を集め、ジャロームのおごりぶりとのジャロームを支持する無知な大衆と、ジャロームの新たな野望を知り、いよいよ具体的な攻撃計画を練りだしました。

しかしその矢先、当のジャロームが暗殺されてしまいました。

犯人はカラベラスでした。（この事実を知ってルピネーもクラリスも激しい衝撃を受けました）

見張りに付けておいたカラスからジャロームご自慢の金メダル（カラスは光り物が大好きですから）と共に暗殺の事実を知ったロットバルトは激怒しました。

ロットバルトは人間を攻撃するために準備していた鳥の軍隊を率いてカラベラスを襲いました。

しかしカラベラスの卑怯な策略によってロットバルトは敢えなく敗北。魔力の源である全身の羽根をこともあろうにもっとも信頼していた一族の者たちにむしり取られ、地上に落下して大けがをしまいました。

その後ロットバルトを裏切ってしまった一族の者たち、つまりバルバツサたちはことの重大さに恐れおののきその場を逃げ去り、以後罪の重さに脅えながらひっそり暮らしました。



後年、一人バルバツサだけは罪に脅えながらも主ロツトバルトを慕い、殺されることを覚悟で居場所を探し当てました。

ロツトバルトはなんと、人間の女と森の中の小屋でひっそり生きていました。

それがオデールの母であるわけですが、その頃まだオデールは生まれていませんでした。

ロツトバルトは傷も癒え、徐々に魔力を回復しつつあるところでした。

この再会の頃にはバルバツサは今のこの鳥人間の姿に変わっていませんでした。

ロツトバルトはそんなバルバツサを見て意外に優しい言葉をかけてくれました。

「俺は疲れたよ。おまえもその様子ではだいぶ疲れているようだな。休むがいい。俺も今はこの通り、愛する女と二人で自分の生活を楽しんでいる。こういう生き方も、まずまず、いいものだ」

バルバツサはほっとするやら悲しいやら、以来ロツトバルトの近くで暮らし始めました。

しかしバルバツサの出現はロツトバルトに微妙な変化を与えただけです。

ロツトバルトの妻は、バルバツサを不吉な者として忌み嫌いました。

この見てくれでは当たり前ですが、彼女のバルバツサへの警戒心は異常なものでした。

そしてそれは、女の勘の正しさを証明することとなりました。

最初のんきに森の静かな生活を楽しんでいたロツトバルトですが、年を経るうちたびたびバルバツサにいろいろ命令するようになりました。

人間社会の動向です。

最初は夢破れた未来への未練と好奇心であったものが、だんだんと今現在の野心へと形を変えていきました。

ロットバルトは今度はどうしたら失敗しないか真剣に考えるようになり、ついに、下級貴族から爵位を買い、都会へ出るようになりました。

この頃には愛していると言っていた妻とも険悪となり、毎日言い争いばかりするようになっていました。

この女も、人間の姿をしてはいますがただの人間ではないのは十数年まるで年を取らないことでバルバツサも気付いていました。

バルバツサのせいと言われても仕方ありませんが、二人はとうとう別れ、ロットバルトは女を森に置いて一人都会に引っ越しました。バルバツサも夜の闇の中ひっそりロットバルトに付き従いました。それから一年ほどしたある日、女が女の赤子を連れて屋敷を訪ねてきました。

「あなたの子よ。あなたが育ててちょうだい」

ほとんど押しつけるように渡して女は去っていきました。

その赤子が、オデールでした。

というのがバルバツサの語るロットバルトの昔物語なのですが、これをオデールはどう聞いたのでしょうか？

それと、王子にぴったりくっついていいるオデレは・・・

ここでオデールを名乗っているのはその実オデールではなくオデールの双子の姉であると本人が認めています。

オデールの姉は母親に育てられたと言います。

そしてバルバツサも双子の姉の存在を知らず、おそらくロットバルトも知らないだろうということですよ。

さて、では今、妹のオデールはどこでどうしているのでしょうか？本当にユークリナのお屋敷に大人しくしているのでしょうか？

王子にくっつきながらカタカタふるえの止まらないオデレはどううしてしまったのでしょうか？

そこへサファイアが亀裂からポンと飛び出して帰ってきました。

「いやあー、こりゃたいへんだわ！」

ビックリという感じで軽く言います。

「確かに外には出られたわよ。ここからまただいぶ東の方にずれて  
いるけれど。」

グネグネねじ曲がっているし、あっちこつち分かれているし、川  
の縁なんてつるつる滑ってたいへんだろうし、腹這いにならなきゃ  
通れないような狭い道がたくさんあるし、寒いし冷たいし、とにか  
くもうたいへん！

ルピネー。あんたでもちよつと無理かもねえー」

「うるせえな。どうでも行かなきゃならねえんだよ。人間の足でど  
れくらいかかりそうだ？」

「一日じゃ無理ね。二日、下手すりゃ三日はかかるわ。」

ねえ、あきらめたら？ 今さらあなたが行ったってたいして時間  
の短縮にはならないわよ。っていうか、かえって遅れて足引っ張る  
ことになるわよ」

「一日だ。俺なら一日で抜けられる。もう一日であの穴通してみせ  
るさ」

ルピネーは馬鹿力で壁から鉄の杭を五本引き抜き、頑丈なロープ  
をナイフで切り、グルグル巻き取りました。

「せっかく張った手すりを申し訳ねえがな。今は、」

胸から新しい懐中時計を引っ張り出して

「八時か。クラリス、あさつてのこの時間には出口を開いてやるか  
ら、遅れずに近づくにきているよ。約束だぞ」

ルピネーは亀裂の縁の地面に杭を打ち付け、ロープを結わえ、亀  
裂の底にたらしめました。

「じゃな。行ってくるぜ」

「気を付けてね」

「あたしがついてるのよ、だいじょーぶ。それ、光魔法！」

スルスル闇の底へ下りていく青い髪のルピネーとサファイアの精  
をクラリスも王子も胸を熱くして見送りました。

特に王子は、本来これは自分の仕事です。

自分がもつと強ければと、願うと共に、自分の非力さが惨めでな  
りませんでした。

「さて、わたしたちは宿に帰りましょうか？」

クラリスが気持ちを切り替えるように言いました。

「ところで、バルバツサさんはどうするの？」

「わたしは闇の世界が自分の居場所です。どうぞお気遣いなく」

バルバツサは飛び立ち、高い天井のどこかの穴に消えていきまし  
た。

うち沈んだ重苦しい夜が明け、翌日の一日をバレエ団はプロフェ  
ッショナルに自分たちの日課を過ごし、クラリスたちは鍾乳洞探検  
で過ごしました。

夜になり、といってもずーっと真つ暗なので宿に大事に飾ってあ  
るルピネーが山の民に友情の証として贈った金時計を見て一日の経  
過を知るしかないのですが、夕食後鍾乳洞の舞台で弦楽四重奏によ  
る組曲「白鳥の湖」が演奏され、毛皮を敷いた上でダンサーたちが  
新しい振り付けの踊りを披露しました。どちらもなかなか良く仕上  
がっています。

演奏会をオデルは後ろの方に一人離れて見ていました。今日は  
もうダンサーたちの指導はしていません。

ビビアナは一つ踊り終わるたびに複雑な思いの眼差しをオデル  
に向けました。

みんなが眠りについて、真夜中。

前回から宿は倍近く広げられ、ベッド数も増えていましたが、そ  
れでもまだ足りないので二つをくっつけて三人で寝るといふ形にし  
ていました。もちろんオネーギン氏は一人で寝ていましたが。

クラリスはアナトリーとマリといっしょに寝ていました。

オデルはおとといはオデルとビビアナと寝ていたのですが、  
昨日はビビアナは仲間のダンサーといっしょに寝ていました。今日

もオデールと二人で寝ているのですが、そこへビビアナがやってきて枕元に立ったままじーっとオデールを見下ろしました。

オデールが目を開けました。眠っていなかったようです。

「寒いでしょ？ 入る？」

オデールが隣を示すと、ビビアナは黙って入ってきました。

ひんやりした冷気が入ってきてさすがにオデールはブルツと震えました。

「体を冷やしちゃ駄目よ。あなたは大切な身なんだから」

オデールはビビアナの背中を抱いて肩や腕を撫でてやりました。

ビビアナはビクリと体を縮めましたが、抵抗せずにされるままになっっていました。

「わたしが怖い？」

息がかかるほど間近でも少ない小さな灯りのさらに陰になって顔の表情は見えません。

「すっかりばれちゃったけど、わたしは女神でもなんでもないわ、鳥の化け物との合いの子よ。だから人間にできないような動きも楽々できるわけ。どう、がっかりした？」

「わたしは・・・」

声がかすれてビビアナは唾を飲んで喉を湿らせました。

「美しいものを信じるわ。どうせわたしも卑しい身の上だもの、化け物だろうと悪魔だろうと、美しく、わたしに美しさを与えてくれるものならなんだって崇拜するわ」

「ほんとう？ でもそれだけじゃないのよ。あのバルバツサに命令してあなたの舞台をめちやくちやにしたのもわたし。あなたを脅すために宙づりにさせたのもわたし。それでも許せる？」

「どうしてそんなことをしたの？」

「どうしても舞台上立つ必要があっただけ」

オデールは狭い無理な体勢ながらビビアナの手を自分の胸に入れさせ、「白鳥の白」を握らせてやりました。

ビビアナの驚き息を飲む様が伝わってきます。

「でもそれだけじゃなくてね、あなたにわたしの踊りを見せたかったのも本当。美しいものを信じるって言ったわね？ わたしもそう。わたしもあなたを信じたわ。あなたはとても美しく、かわいらしいから」

「先生・・・」

「そう呼んでくれるの？ 嬉しいわ」

「ビビアナは顔の見えないもどかしさに衝動的にオデールに口づけしてしまいました。」

「ハッとして慌てて身を引こうとするのをオデールは逃しませんでした。」

「ほんとう、あなたってかわいいわ」

「フクロウの血を引くオデールにはこの暗がりでもビビアナの顔がはっきり見えていました。」

「オデールはビビアナを抱き寄せ、凍えた脚まで自分の脚を重ねて引き寄せました。」

「そうだわ、一つだけ、あなたにバレリーナとして決定的に欠けているものがあつたわ」

「ビビアナはドキッとして尋ねました。」

「それはなんです？」

「オデールはいたずらっぽく笑って言いました。」

「恋する喜びよ。あなた恋愛なんかしたことないでしょう？」

「ビビアナはカツとなるかと思いきや、ひどく心配そうな怯えるような顔をしました。」

「ありません。いけないのでしょうか？」

「いけないわねえ。いいのよ、わたしが教えてあげて」

「オデールは妖しくビビアナに迫りました。」

「ビビアナは力を抜きオデールにされるままになりました。」

「オデールはビビアナの耳に熱っぽく囁きました。」

「あなたはわたしの宝物。どんな大きなダイヤもあなたの輝きにはかなわないわ」

ビビアナはこれまでバレエだけを頼りに常に自分の価値を高く見せる努力をしてきましたが、こんなに自分を理解し、信じ、愛してくれる人に出会ったのは初めてで、心の緊張が解け、限らない安心と喜びが広がっていきました。

オデーレはオデーレが目を開くのと同時に目が覚めました。でもなにやら妖しい雰囲気にならずと寝た振りを続けていました。

となりのゴソゴソ伝わってくる動きに女同士で何してるのかしらと恥ずかしさに真っ赤になりましたが、一つ嬉しいことがありました。

ビビアナが「美しいものを信じる」と言ってくれたこと。

オデーレが言われたその言葉を我がことのように嬉しく感じたのですが、同時に今の自分を考えるとその言葉がとても悲しくも感じられました。

王子が全てを知ったとき、王子も果たして自分にそう言ってくれるでしょうか？

それとも王子はその言葉を、今の自分の美しさにのみ言ってくれるのでしょうか？

翌日。

「王子、あの・・・」

昨夜あれから考えて、オデーレは何度も王子に本当のことを話してしまおうと思いましたが。

でも、

「ああ、オデーレさん、ごめんなさい。あなたはここに残ってみんならいいですよ。後から来てください」

王子はこれから向かう出口のことで頭がいっぱいで他の話を聞いている余裕がありません。

オデーレは仕方なく今告白することはあきらめました。

ルピネーは夜の八時には出口を開くと約束しました。

クラリスと王子はその二時間前、六時に間に合うように早めにお

昼を取って出かけました。

他のみんなは二時間後の十時に到着するように出発する予定です。オデルは、またダンサーたちの指導に復帰しています。ビビアナの説得でオデルは父親とは別行動ということでもみんなの理解を得られたようです。

歩きながら王子はクラリスに訊きました。

「本当に出口は開くと思うかい？」

クラリスも半信半疑でしたが、

「信じるしかないわね。おじさまは約束を守るために必死に頑張っているはずだわ。結果がどうあれ、わたしたちはおじさまとの約束を守らなくてはならないわ」

と答えました。

ちょうど六時頃、出口近くまで来てみると、すでに変化がありました。

音です。

ゴトンゴトンと木材のぶつかり引きずられる音がまだまだ奥の方からですが響いてきます。

ただそれがルピネーの指示によるものかどうかは分かりません。しかし音は確実に近づいてきて、どんどん大きくなってきています。

そして一時間ほどして、ついに上の方で柱の角材が一本引き抜かれ小さな穴が開いたかと思うと、夜目に眩しい青い光が飛び込んできました。

「ヤッホー！ もう少しよ」

サファイアの精です。

クラリスと王子は歓声を上げました。

「ちよつと待ってねー」

とサファイアの精はルピネーに報告に帰り、すぐまた戻ってきました。

「いやあー、あたしも驚いちゃった。ほんと、あの人頑張るわ」



サファイアの精はうんうんと感心しながら言いました。

地下の迷宮を抜けるのは本当にたいへんだったようです。

上り下りが激しく壁をよじ登ったり飛び降りたりしなければならぬ箇所もあり、鍾乳石の道はつるつる滑り、岩石の道はゴツゴツ刃物のように尖り、特に巨体のルピネーには這って進まなければならぬ狭い穴が一番応えました。

それでもとうとう宣言通り丸一日で地下川の出口から外に脱出しました。

しかしさらに問題があつて、川の出口はこちらの出口からかなり離れていて、また半日歩かなければならない距離がありました。サファイアの精は金貨を一枚もらつて先に穴を出て近くの村に行つて荷馬車と馬二頭、御者（といっても農家の若者ですが）を借りて大急ぎで川の出口に向かわせました。

ルピネーが出てくると荷台に乗せて今度は山の出口に向かつて大急ぎで走らせました。

到着まで三時間、ゴトゴト揺られながらルピネーは荷台に横たわつて大いびきをかいて眠りました。

到着はもう真夜中過ぎでした。復旧隊は麓の町と村から男たちを募つて行われていましたが、とつくに一日の作業を終えて引き払つていました。ルピネーは金貨をばらまいて彼らを呼び寄せ、盛大にかがり火を焚いて作業を再開させました。とんだ散財です。

穴にはやはりここに建てられつつあつた入場門と山小屋が解体されて詰め込まれていました。入り口に折り重なつていた残骸は昼間のうちにあらかた片づけられていましたが、ぎっしり穴に詰め込まれた材木はどこから手を着けていいか途方に暮れているといった状態でした。ルピネーは材木の組み合わせを見てチョークで番号を振つていき、番号順に杭を打ち込み、ロープをかけ、男たちに引っぱり出させました。

ある程度作業が進むとルピネーはまた少し仮眠を取りました。

また三時間ほどして振つた番号が残り少なくなり、夜が白々明け

始めるとむっくり起きだし、今度は自分で指示して作業を続けさせました。

ルピネーの物の構造を見る目はたいしたもの、男の背丈よりはるか高く詰め込まれていた材木が的確な指示で見る見る片づいていきました。

そうしてついに、何層にも詰め込まれた材木の最後の層にたどり着いたのでした。

ゴトンゴトンと材木が引き抜かれていきます。外のかがり火の赤い光がだんだん大きく差し込んでいきます。

ついに王子の顔の高さまで穴が広がりました。

「よお。元気だったか？」

ルピネーの頼もしい声がしました。

「ルピネーさん！」

「おじさま！」

「よしよし。もう少し待てよ」

ゴトンゴトン、引き抜かれる材木に勢いがつきました。

さらに穴が広がり、クラリスにも向こうの様子が見えました。

男たちがかけ声を合わせてロープを引っ張り、材木が外に運び出されていきます。

腰の低さまで穴が広がり、いったん作業が中止されました。

ルピネーが足場を確認しながらこちらに渡ってきます。

きらりと輝く懐中時計を取り出し、ふたを開きました。

「へへエ、ちょうど八時だ。どうだ、間に合っただろうか？」

「おじさま・・・」

ルピネーの姿を見てクラリスは思わずぼろぼろ涙がこぼれてきました。

ルピネーの服はボロボロに破け、あちこち血が滲み、そしてルピネー自身、頬がげっそりこけ、体は一回りも二回りも細くなり、目の下は真っ黒な隈ができていました。

クラリスはルピネーの腰に飛びつき、ぎゅうっと抱きしめました。

「おいおい泣いてる場合じゃねえぞ。おまえと王子はさっさと山を下りて安全な宿屋に入らなけりゃならねえ。そら、さっさと行け。俺はこの後片づけをしちまうからよ」

ルピネーはこちらも感動でいっぱい王子の肩をがっしり押さえました。

「王子。クラリスを頼むぜ」

「はい」

王子は力強く頷きました。

### 第35章 正体

クラリスと王子はルピネーの呼び寄せた信頼できる警護の者十人に守られた馬車で山を下り始めました。

クラリスは森にいる間中ずーっと木々の上から姿の見えない鳥たちに見張られている気がして緊張しどおしてましたが、幸い馬車は何事もなく森を抜け、麓の町の宿屋に到着しました。

「ロットバルトは出口を塞いでもう十分だと思ったのかしら？」

「そりゃそうだろう。ルピネーさんがあんな無理してくれなきゃ僕らは後二日は確実に足止めだ。今だって、満月まで後たった三日だ。十分ギリギリじゃないか？」

「そうよねえ・・・」

クラリスは拍子抜けする思いでしたが、一方何か見落としているようなもどかしい思いもしていました。

そう、満月まで後三日。

昼の月から夜の月に帰ってきて、十二日目の月が西の空低く大きく黄金に輝いています。

「なんだかなつかしいなあ。ついこの間のことなのになあ」

王子がしみじみ言いました。

二人は食堂で遅い夕食を取っています。

「この町に到着したのはやっぱり夜中で、初めてカカッサスを間近に見てこんな山越せっこないってすっかり怖じ気づいちゃったっけ」

王子はアハハハと白々笑いました。

「あの時僕はすっかり物語の英雄気取りだったのが初めて現実の厳しさを目の当たりにして途方に暮れちゃったんだよなあ」

クラリスも微笑んで王子に問いました。

「それで、今はどんな気分？ あなた、あの山を越えて憧れのペテロブラーグまで行ってきたのよ？」

「そうだねえ・・・」

王子も感慨深げに目を閉じ思いを巡らせました。

「僕が行ってきたんだ、憧れのペテロブラーグに……。大きな街だったなあ……。大きすぎて、僕には何も見えなかったようだけど……。」

君には感謝しているよ。ルピネーさんにも。本当にお世話になったね。ありがとう。本当にいい経験をさせてもらったよ。」

王子に真顔でお礼を言われてクラリスは照れくささに笑いました。「もう一人大事な人を忘れていてでしょう？ オデーレ。彼女のおかげであなた王子様のプライドを持ち続けられたんじゃない？」

王子も笑いました。

「そうだね、本当にその通りだ。彼女にも大いに感謝しなくちゃ」オデーレのことを思う王子はとても幸せそうで、見ているクラリスも思わず優しい微笑みを浮かべました。

ふと、クラリスの顔から表情が消えました。

「どうしたんだい？」

クラリスはしばらく顔を凍り付かせていましたが、やがて険しい表情で考えを巡らし始めました。

「おととい洞窟でバルバツサは一族でロットバルトの下に戻ったのは自分一人だって言ってたわよね？」

「ああ、そうだね。それがどうした？」

「つまり、ロットバルトの部下の鳥人間はバルバツサー人だけってことよ。」

「だから？」

「だからあ……。」

クラリスは王子のお坊ちゃんなお人好しの顔を見て黙りました。「いいの。なんでもないわ。」

クラリスは食事を切り上げると席を立ちました。

「おいおい、なんでもないってことないだろう？ なんなんだよお？」

背中に聞く王子の間抜けな声が腹立たしくなりませんでした。

およそ二時間後、ルピネーといっしょに他のみんなも宿に到着しました。

アナトリーは疲れてルピネーに抱かれて眠っていました。ルピネーはクラリスの忠告で新しいきれいな服に着替えています。多少なりともモDESTとアナトリーのショックを和らげるためです。

王子がみんなを出迎えましたが、クラリスは自分の部屋から出てきませんでした。

クラリスはベッドにうつぶせになってふてくされていました。

自分に腹が立って腹が立って仕方ありませんでした。

鳥人間はやはり一人しかいなかった。

自分が湖で見た鳥人間と森で馬車を奪って走り去った鳥人間はやはり同じ鳥人間、バルバツサだった。

ということとは、

時間的にバルバツサがハルメイユーにオデーレを迎えに行ったこととはありえない。

つまり、

オデーレは嘘を言っていたことになり、

オデーレの言ったことが全て嘘だったとしたら、

オデーレの正体は自ずと知れてくるではありませんか？

大白鳥号でオデーレに会ったとき、何故オデーレはあんなに頑固にオデーレを偽者と言い張ったのか？

あんなに仲の悪かったオデーレとオデーレが一晩いっしょに過ごただけで何故あんなにうち解け合ったのか？

オデーレが自分の正体をオデーレにうち明けたからでしょう。

ロットバルトも知らないオデーレの双子の姉の存在を妹が知っていたとは考えられません。

正体をうち明けられてあんなにうち解け合う相手といったら、決まっているではありませんか？

オデーレの姉の妹、つまり、

本物のオデール。

どうしてそんなことに思い当たらなかったのだろうか？

クラリスは考えれば考えるほど深い自己嫌悪に陥っていききました。

ロットバルトは鳥が魔力で人間に姿を変えたもの。

そんな変身ができるのなら自分の娘の顔を思うように変えることもできるでしょう。

そもそもオデット王女だって白鳥に変身させられているのです。

どうしてオデールの正体を見破れなかったのか？

それは、

信じたから。

オデールをオデット王女の妹と信じてしまったから。

最初は自分もあんなに疑ったのに、一度信じてしまったらころつと騙されてしまった。

「あなた、へまが多いわね」

オデールの姉は初対面でクラリスにそう言いました。彼女は最初からオデールの正体に気付いていたのです。

「伝説の黒魔女の娘が聞いて呆れるわ」

あー、もう、わたしのバカバカバカー！

クラリスは果てしなく自己嫌悪の沼にはまっていき、同時にオデールとオデールの姉妹に猛然と怒りがわいてきました。

ところで、ロットバルトはどうしたのでしょうか？

本当に出口を塞いで安心しきって帰ってしまったのでしょうか？

ロットバルトは確かに大風を起こして出口を塞いだ後ユークリナに帰りました。宰相として忙しい身ですから。

しかしただ帰ったわけではありません。

すっかり要所要所に見張りを立てていました。

その一つが地下川の流れ出ている河口です。

ここからサファイアの精が飛び出し、ルピネーが現れると、見張りのミミズクはさっそく御注進に飛びました。朝になるとハイタカが引き継いでお昼にはロットバルトに報告されました。

ロットバルトは夕方仕事が終わって帰宅するとすぐさまカカツサスに向かい、一時間もしないで洞窟の出口に到着しました。

木の上でのんびりルピネーの指示ぶりを見物していると、やがてクラリスと王子が出てきました。

ロットバルトは思わずチツと苦笑いしました。

ルピネーは残り、クラリスと王子だけが護衛に守られて馬車で出発しました。

ロットバルトは馬車の追跡を開始しました。

邪魔な二人を襲うには絶好の機会ですが、

「ここで殺せばルピネー閣下が怒るだろうな」

クツクツクツクと笑います。

ロットバルトに王子を殺すつもりはありません。最初からライバルなどとは思っていませんから。

カラベラスにはまたも煮え湯を飲まされてはらわたが煮えくり返っています。娘クラリスはひどい目に遭わせてやらねば気が済みませんが、ただ殺すだけというのは面白くありません。

「もつといい舞台を用意してやるさ。それよりも」

ロットバルトは出口に戻りました。

またしばらくしてどやどや大人数が出てきました。

「ほお、どんな手みやげを持ってくるか楽しみにしていたが、面白い者どもを連れてきたものよ」

ロットバルトはものすごく良い目をしています。暗闇でかなり遠くからでも人の顔をはっきり見分けることができます。

ロットバルトは出てくる一人一人を観察し、

「フフフ、無事旅を楽しんできたようだな」

オデーレを見つけて言いましたが、そのとなりの娘を見てギョッとしました。



オデールです。

どういうことか、オデールと見比べて一瞬考えましたが、

「あの女め、そういうことだったのか」

一瞬ギラリと怒りがよぎりました。

「なるほど、それで奴め俺を裏切りおつたな」

今度はむっつり不愉快な顔になりました。

みんなが穴を出してしまうと脇に寄せてある木材を魔法でガタンと動かし、そちらに気を逸らした一瞬に目にも留まらぬ素早さで木を下り、穴に飛び込みました。

真っ暗な中も平気でズンズン歩いていきます。

ここいらだろうと見当を付けて、

「おい、バルバツサ」

と呼びました。

バルバツサは人の通らぬ脇道からヒョコヒョコ現れ、主に頭を下げました。

ロットバルトはそ知らぬ顔で

「ご苦労だったな。向こうでの様子を聞こうか」

とバルバツサに報告させました。

王子の国と交換に世界一のダイヤモンドを買う契約の話には思わず呆れて失笑しました。

全て聞き終わると、といってもバルバツサは聞かれてはまずいかなりの部分を黙っていました。ロットバルトは頷き、冷ややかな目つきで言いました。

「ところでだ、何故ルピネー殿はその抜け道を知っていた？ 人間に見つかる道ではないぞ」

チクリと嫌みな言い方ですが、バルバツサの無表情は変わりません。

「サファイアの精はああ見えてなかなか力のある妖精のようで」

「そうか。そうかもしれんな。俺はてつきりおまえが教えたのではないかと心配したぞ。」

ところでだ、出てきた人数の中によく知った顔があつたが、あれは誰だ？」

「本人はオデール様の名を語っております。正体は私にも」

「バルバツサよ」

冷たく威圧的な言い方です。

「顔を上げて俺の目を見る」

バルバツサは顔を上げました。

「一族の者は皆死んだぞ。また俺を裏切つてあの女の下に走つてな」  
バルバツサの表情は変わりませんが、顎がかすかにカタカタ震えました。

ロットバルトは恐ろしい猛禽類の目になってバルバツサを睨み付けています。

「一族はおまえと俺、二人だけになってしまったぞ。なあ、悲しいと思わないか？ おまえが死ねば誇り高きオオフクロウ族は俺一人だ」

バルバツサは耐えきれず羽を開き地面にひれ伏しました。

「我が主よ。一度は死を覚悟した身、いかなようにも好きにしてください」

ロットバルトは龍の手を伸ばしバルバツサの頭をがっしり押さえました。

グリグリと撫でて、手を離しました。

「去れ。二度と俺の前に姿を現すな。次に見かけたら、殺すぞ」

ロットバルトは歩み去り、バルバツサはいつまでも地に伏していました。

肩を震わせ、大きな目玉からぼろぼろ涙をこぼしていました。

翌日。

王子一行とバレエ団は馬車五台に分乗して大急ぎでベルーシアに向かいました。

なんとしても明日中にお城に着いて、一日くらいはしっかり準備

して本番に望みたいところでは。

バレエの公演も、オデット王女との対面も。

森の中を駆けていきます。

カカツサスの北とは明らかに違う緑の濃い煩雑で濃密な森です。バレエ団のみんなとアナトリーは暖かさにびっくりしています。

王子も自分たちの森はこんなに暖かかったんだと改めて新鮮な気持ちになりました。

クラリスはアナトリー、アリーとマリ、モデストといっしょの馬車に乗っています。今は腹が立つてとてもまともにオデールやオデーレと話せそうにありません。

アナトリーはまだ眠い中強行軍を頑張っていますが、心地よい暖かさと馬車の振動でうつらうつらしてきています。

クラリスはとなりに座ったモデストとアナトリーを起こさないようにひそひそ話をしているうちにだんだん機嫌が良くなってきました。モデストと話しているとこんな楽しい毎日が当たり前のようにずうっと続いていくような気がしてきます。

クラリスがすっかり緊張感を解いていると、前の方で馬のいななきが聞こえたような気がして、すぐに馬車にブレーキがかけられ、やがて止まりました。

クラリスの馬車は一番後ろです。

「どうしたのかしら？」

クラリスが窓を開けようとガラス窓から外を見て、ギョツとしました。

ギユンと黒い影が通り過ぎました。

カラスです。

気がついてみれば道の脇の木々にやたらカラスが止まっています。馬車がまた動き出しました。でも今度はゆっくりした歩みです。

先頭の馬車はルピネーが操縦しています。乗っているのは王子、オデーレ、オデール、それに馬車の後ろに後続の馬車に指示を出すために見張り役の若者が立っています。

クラリスは注意して森を観察しました。  
茶色の葉が目立つ木々の枝に黒い実のようにカラスたちが大量に  
止まっています。

後ろの窓を見てみると、通り過ぎていった木々からカラスたちが  
飛び立って馬車を追いかけてきますが、その数が進むごとにどんど  
んどんどん多くなっています。

何百、何千、いえ、何万・・・  
再び馬車が止まりました。

クラリスは前の方がどうなっているのか居ても立ってもいられず、  
外に出ていこうとしました。

「待つて」  
モデストが止めました。

「君が行くことはない。僕が行って様子を見てくるよ」  
「でも・・・」

「いいから、君はここにいたまえ」  
モデストがチラツと目で合図しました。

アナトリーが窓の外を見て不安そうにすっかりマリの腕を掴んで  
います。

クラリスはますます自分がなんとかしなくちゃと思いましたが、  
モデストは真剣な目でクラリスを押しとどめました。

「アリー。すまないけど君も来てくれ。クラリス、アリーの代わり  
を頼むよ」

アリーは常に腰に長剣、胸に二本の短剣を差しています。

モデストも座席の下から長剣を引っ張り出し手に握りました。  
クラリスはモデストが剣を持つのを初めて見ました。

「じゃあ、ちよつと行ってくるよ」  
モデストとアリーは素早くドアをかいぐり出ていきました。

クラリスは向かいの席に移り、マリと二人でアナトリーを挟んで  
守りました。

不安な時間が過ぎていきます。

ギリりと馬車が揺れました。御者が急に体勢を変えたようです。カンカンと天井から音が降ってきました。カラスが数羽屋根に乗って歩き回っているようです。御者が驚いたのはそれでしょう。アナトリーは天井を見つめて足音を追っていきます。クラリスはアナトリーの手を握りしめてルピネーは何をやっているのだろうと気が焦ってしようがありません。

馬車を降りたモデストとアリーは先頭車に急ぎながら何故止まってしまったのかだんだん分かってきてぞっとしました。

先に行くことに周りの木々ばかりでなく、馬車脇の地面にまでカラスたちが下りてきていて、先に行くことにその数がどんどん増えていき、先頭車にたどり着いてみると、その先の道にはびっしり真っ黒なカラスたちが地面を覆っていました。

「父さん」

モデストはカラスたちを刺激しないように低い声で御者台のルピネーに呼びかけました。

ルピネーはチラリとモデストを振り返りました。

「なんだ、おまえが来たのか」

モデストはムツとして言い返しました。

「クラリスに危ない真似はさせられませんよ」

「そりゃそうなんだがなあ」

ルピネーは分かっているんだがとうなりました。

「こりゃ俺たちには手の打ちようがないぜ」

カラスたちはルピネーをあざ笑うように後ろの客車の屋根に乗って歩き回ったりくちばしでつついたりしました。

モデストも忌々しげにカラスどもを睨みました。

「シンバルでも持つてくればよかったな。派手に鳴らせばカラスは驚いて逃げるでしょう」

「持つてねえよな？」

「持つてませんねえ」

二人は他に何かカラスたちを驚かせるようなものはないかと考えました。

サファイアの精が頑張りすぎのルピネーを心配して付いているはずなのですが姿が見えません。彼女は馬車の中で隠れています。カラスだけは苦手です。光り物大好きのカラスとピカピカ綺麗な宝石系の妖精は相性が最悪なのです。

ルピネー、モデストの親子がじりじりしていると馬車の扉が開いてオデルルが出てきました。

「おいおい、危ねえぞ。中に入ってる」

オデルルはズイズイ前に歩いていきます。

オデルルはスーッと息を吸って、よく通る大声で言いました。

「わたしを誰だと思っているの！ ロットバルトの娘オデルルよ！道をどけなさい！」

カラスたちは戸惑い、顔を見合わせました。

「さっさとお退き！」

オデルルの一喝で手前の数羽が飛び立つと、後に続いてザーツとカラスたちは飛び上がっていきました。

「おー、すげー、すげー」

ルピネーは喜んで手綱を握り直しました。

カラスたちは宙に羽ばたき、木々を行き交い、馬車を睨んでいきます。

「へへエ。大将のお嬢さんには手が出せねえか」

しかし、

上空高くから大型のカラスよりはるかに巨大な影がオデルル目掛けて急降下してきました。

大驚です。

こんな者までロットバルトは配下に従えているのです。

オデルルは負けじと睨み付けました。

大鷲は羽でブレーキをかけると両の鉤づめをクワツと開いてオデルルの頭すれすれを掴むとまた上空に帰っていきました。

大鷲の羽ばたきでオデルの髪は千々に乱れました。

大鷲はオデルの睨みに怖じ気づいたのではありません。明らかに意図的な威嚇です。

俺はおまえなど何とも思っていないぞ、という。

さすがのオデルも顔を真っ青にして心臓がドクドク鳴ってガタガタ震えが止まりませんでした。

大鷲親分のお墨付きで調子に乗ったカラスたちがオデルに向かって飛んできました。

思わず顔をかばった腕にカラスの爪が引っ掻き傷を付けていきました。

モデストがオデルの腕を引っ張り下がらせました。アリーが突進してきたカラスを手刀で叩き落としました。

ルピネーも凶々しくとなりに止まったカラスどもをなぎ払い、やかましい一羽をぶん殴りました。

「クソガラスどもが、調子に乗るんじゃねえぞ！ オデル、乗れ！ モデスト、行くぞ！」

ルピネーが鞭をくれようと身構えると、再び大鷲が急降下してきました。真っ正面、距離を取って下りてきてまっすぐ突っ込んできます。今度は威嚇のつもりはないようです。

ルピネーは鬼のような形相になって拳を握りしめました。

後方からゴオツと枯れ葉を大量に巻いた風が吹き付けました。

大鷲は目をかばって上空に舞い戻りました。

クラリスです。とうとう我慢できずに馬車の屋根に乗って魔法の風を起こしたのです。

「おじさま！ 今のうちに早く！・・・」

ドンツ、と、クラリスの後ろに大きな重いものが落ちてきました。「やっと現れたか。待ったぞ、クラリス」

クラリスは身のビリビリするような威圧感に恐る恐る振り返りました。

ロットバルトでした。

しかしクラリスの見知っているロットバルトではありません。人の形をしていません。鳥というより、羽を生やした巨大な豹のような形をしています。顔も人間とフクロウの中間といった感じです。目が魔物のそれです。

完全な妖怪です。

「どうしたクラリス？ 今さらこの姿に驚いたか？ これは俺が最初に変身した姿だ。人間どもへの怒りに魔人に成り変わろうとしたな」

ロットバルトの足元から剣が飛び出しました。マリの狙い澄ました必殺の一撃は、しかし、あっさり避けられ、足の一振りであっけなく剣はへし折られてしまいました。

「子どもを守りたければそこで大人しくしている！」

ロットバルトの雷のような怒声に中のマリは完全に沈黙してしまいました。

ロットバルトは巨大な翼を広げてクラリスを覆いました。

「さあ、どうするカラベラスの娘よ？ この俺からどうやって逃げる？ それとも、俺を倒せるか？」

優雅な人間の姿からは想像もつかない恐ろしい肉食大型鳥類の顔がクラリスに迫りました。

クラリスは、目を見開いて、震えていました。

「こおら、ロットバルト！」

先頭車からルピネーが大声で怒鳴りました。

「てめえ、勝負は王女との結婚でつけると言っただろうが！？ クラリスに手え出すんじゃないやねえっ！！！」

「ルピネー卿！」

ロットバルトもクラリスの頭の上で怒鳴り返しました。

「この娘のこととは別だ！ この娘が関わってきたのは、いわば母親の代理戦争だ！ 関わってきたからには、母親の恨みは娘で晴らさせてもらう！」

ちきしょう、てめえー！とルピネーはわめき立てましたが、ロッ



トバルトは無視しました。

「さあクラリス、どうしてくれようか？」

ロットバルトは残酷に笑いました。

クラリスは震え、見開いた目に涙を滲ませました。

ロットバルトはクラリスの目の中の恐怖をじいつと見つめました。

ロットバルトはくつくつくく、と笑い出しました。

「そうか、そういうことだったのか」

はっはっはっはっ、と大笑いしました。

ロットバルトは羽を引き、クラリスを解放しました。

「クラリス。まったく大した娘だ。

この勝負は、またいずれ」

ロットバルトは背中に羽の生えた人間の姿に変わり、紳士的に深々礼をしました。

もう一度クラリスを見てニヤリと笑うと優雅に飛び立ちました。

「者ども、下がれ。通してやるがいい。我らの力、人間どもは十分思い知っただろう」

ロットバルトの号令でカラスたちはいつせいに飛び立ちました。

耳が痛くなるほどの騒がしい音が消えると、まるで夢から覚めたように森は静まり返りました。

「クラリス！」

モデストが全速力で駆けてきました。

クラリスは馬車の上へたり込み、モデストが駆けつけるとズルズル御者台に引き下ろされ、

「だいじょうぶかい？ 奴はもう行ってしまったよ」

モデストに優しく肩を抱かれると、

「モデスト・・・兄さん・・・」

わーっと声を上げてモデストの胸に顔を埋めて泣きじゃくりました。

ロットバルトは行ってしまいました。

しかし空を見上げるオデルの耳にオデルにしか聞こえないロツトバルトの声が聞こえました。

『我が娘よ。俺は待っているぞ。すぐにゆっくり話せる時が来るだろう』

オデルはフンとバカにして鼻を鳴らしました。

「あたしはあんたと話す気なんてないわよ。あたしはただ、見ているだけさ」

ビビアナが駆けてきてオデルに抱きつきました。

ピエトロ氏も馬車から身を乗り出して心配そうにオデルを見ている。

馬車の中の王子は、しっかりオデレを抱きしめてずっつと守っていました。

### 第36章 母と子

ロットバルトとカラスたちが去った後は何も起こらず、翌夕方に一行はベルーシアのお城に到着しました。

ジークフリート王子の母である女王はルピネーと息子たち、有名な音楽家に一流バレエ団、となりのユークリナの宰相の娘オデール、オデット王女のいとこ（ということにして）のオデーレまでいっしょということでも喜んで迎え入れてくれました。

部屋の割り当て、係の使用人、晚餐の手配にと大忙しのルービン卿も満面に喜びを溢れさせて大張り切りです。

「いやあ、王子殿下、見違えましたぞ！」

とジークフリート王子を何度も褒め称えて大きく頷きました。

王子は「そんなことないよ」と迷惑そうな顔をしましたが、いっしょに旅をしているとは分からないかもしれないかもしれませんが、城の者たちの目には確かに王子が凜々しく、一回り大きくなったように見えました。

連れてきたいかにも都会人らしい音楽家たちやダンサーたち、見違えるように美しいオデール、絶世の美女オデーレという連中といっしょということもありますが。

楽しい晩餐会です。

音楽家、踊り子たちも一流どころとモDESTのお墨付きで、格式にうるさいルービン卿も問題なく皆同じテーブルに席を用意しました。

高名なラズベリー大伯爵にもお会いしたということで女王も王子のペテロブラーグ滞在の様子を大いに興味深く聞きました。

女王は話を聞き、王子を旅に出したのは正解だったとたいへんお喜びになりました。

ところで、女王には一人どういう人物なのか理解できていない者がいるのですが、

オネーギン氏です。

オネーギン氏はもうすぐこの城と国が自分の物になるのだとニコニコ上機嫌でいます。

モデストが余計なことをしゃべられて晚餐が台無しになる前に

「こちらはバレエの公演で宝石をお借りしたご縁でご同行くださいました高名な宝石商であらせられます」

と当たり障りのないように紹介して、女王も

「ああ、そうですね」

とご理解いただけました。

が、そうそうごまかしておけることではありません。

食事が済むと、王子は旅の成果のご報告ということで女王の私室でいよいよ契約の話を切り出しました。

王子は自分の心に決めた人がとなりの国の女王オデット殿下であること、オデット女王はいとこのオデーレとそっくりのこの上なく美しい婦人であること、旅立つ前に愛の証として永遠に変わらない物を求められたことをうち明けました。

女王はとなりの国の女王がお相手ということに驚きましたが、女王は今故あってルピネーの保護下にあるということで一応納得しました。

ここで王子は母親を説得するためにオネーギン氏から借り受けた「白鳥の白」のティアラを取り出しました。

「これが僕が姫との約束、永遠に変わらない物として選んだ品物です」

と、母親に胸を張って差し出しました。

女王はそれを見たとたんに白けた目になりました。

「そのがらくたはなんですか？」

王子は母親の予想外の反応に面食らいました。

「何を言うのです、これはあのモデストさんも世界一と認めた最高のダイヤモンドですよ？」

ダイヤモンドは小さなランタンの灯りの中、キラキラ眩しく輝いています。

しかし女王の白い目はますます冷淡になりました。

「嘘を言いなさい。おまえに預けた金貨でそんな大粒の一流品が買えるわけではないでしょう。あのオネーギンとかいうインチキ宝石商に騙されているのです」

この眩しい輝きを目の前に見せられても女王のかたくなな態度に変わりはありません。

王子は実に言いづらそうに言いました。

「母上。実は、母上に頂いた金貨は途中で賊に襲われて盗まれてしまったのです」

「なんですって!?!」

女王の目が一気にきつくなりました。

「おまえはあのお金をなんだと思っているのです！ あれは生前父上がおまえのためにと・・・」

まあ、それはいいでしょう。では、なおさらそんな一流品がおまえに買えるわけではないではありませんか？」

女王の息子を見る目はすっかり元通り信用できないものに戻っています。

「実は・・・」

この国と交換に譲ってもらうことになっているのです」

王子は言つと、甘えた子ども目の目で母親の目を覗き込みました。

女王は顔をしかめて王子が何を言ったのか考えています。

「何と交換ですって?」

「この国とです。僕が結婚したらこの国は僕のものになるんでしょう? そうしたらこの国をオネーギン氏に譲って、僕はこの世界一のダイヤモンドを受け取るんです。世界一のダイヤモンドですよ！ 永遠にこの輝きは変わりません。オデット姫の出した条件にまさにピッタリじゃないですか？ 心配には及びませんよ、僕がこの国の王じゃなくなってもオデット姫と結婚すれば僕はユークリナ国の

王です！ 失礼ながらユークリナは我がベルーシアよりずっと広く土地も豊かで国力は数倍もあります。この国の王よりずっといいではありませんか！ だいじょうぶですよ、このダイヤモンドを見ればオデット姫はきつと僕との結婚を承知しますよ！」

しゃべりながら王子はさすがに汗をかきました。

「誰がおまえに国を譲ると言いました？」

母親は眉間にくつきり縦じわを刻み、きりりと吊り上げた眉の下から息子を睨み据えました。

「国は民のものです。王の持ち物だなどと、思い上がりも甚だしい」  
「しかし、母上」

王子も内心ビクつきながら言いつのりました。

「オネーギン氏はラピスの上流社会に顧客を多く持つ一流の商人ですよ。僕なんかが国を治めるよりずっとこの国を良くしてくれるでしょう」

「国を良くする？ どう良くすると言つのです？」

「ペテロブラーグみたいにですよ！ いやあ、ビックリしました！

素晴らしい大都会でしたよ！」

「おまえはその大都会にすっかり踊らされてきたようですね」

「いや、僕は踊ってませんよ。踊ったのはオデールさんで・・・」

「出ていきなさい」

「母上」

「今すぐ、この城から出ていきなさい。おまえにここに居る資格はありません」

「母上、僕だってこの国のことを考えて・・・」

「出ていきなさい！ わたしはもうおまえの母親ではありません。

わたしはこの国の女王です。おまえのような馬鹿を息子として置いておくわけにはいきません。さあ、出ていきなさいっ！」

王子は母親の剣幕にたまらず逃げ出しました。

オネーギン氏が女王の部屋を訪れました。

氏はラピス国家の正式な契約書類を大いばりで掲げて女王に国を明け渡すよう言いました。

「あんなガラス玉一つで国をよこせですって？

この痴者が！ 首を切り落とされたいか！」

オネーギン氏も女王の剣幕にたまらず逃げ出しました。

オネーギン氏に訴えられてルピネーが女王の下を訪れました。

「女王陛下。

すまねえな、こんなことになっちまって」

「ルピネー卿。

ずいぶんお痩せになりましたね？」

女王は両手で眉間を押さえ、しばらくうつむいていました。

顔を上げると、女王はいつもの誇り高い顔とは違った弱々しい心細い母親の顔になっていました。

「あなたといっしょに旅をして、いっしょに同じものを見て、おまけに大伯爵様とまで親しくお話をしていたでいて、その結果があれでは、もう救いようがありません」

「俺の責任だ。あの契約に関しちや俺が連帯責任を負わなくてはならないことになっている。後始末は俺がつけるよ」

「お金ですか？ その必要はありません。あの子の責任です。この国の王子として生まれたのなら、せめてそのくらいの責任は取らなくてはなりません」

「ラピスに連行されて投獄されることになるぞ？」

「ご迷惑おかけします。申し訳ありません」

女王は頭を下げ、いつまでもその頭を上げようとしませんでした。た。

「分かった。

本当に済まなかったな」

ルピネーも深々と頭を下げ、退出しました。

王子は廊下の先でルピネーが出てくるのを待っていました。

「女王はおまえさんを見限ったらしい」

「そのようですねえ」

ティアラはルピネーに託してオネーギン氏に返してもらっています。

「僕はこの城を出ていかなくてもなりません」

「それじゃあ送るよ」

二人はすり減った石畳の上を出口に向かって歩き出しました。

「ベルーシアは古い国だ」

ルピネーが語りました。

「王の形も古い。」

船で貴族について話したな？

こここの貴族は古い、元々の形を保っている。

貴族つてのが何故生まれたか？ 力のある者が他者を効率よく支配するために作った仕組みなのかもしれない。だが、そうじゃない貴族の起源もあったんじゃないか？

民をまとめ、より良い方向へ導き、困難が起こったときには知恵を絞って克服し、民が苦しいときには自分の財産を分け与えて時をしのぎ、敵が攻め込んできたときには率先してこれと戦い民と土地を守る。時には国と民を守るため、自ら首を差し出すこともある。

そんな古い貴族の理想を、この国の王家は守っている。決しておごらず、贅沢をせず、力は国のために蓄え、自身は常に誇り高く一段高い存在として民から慕われ頼られ、民の誇りにも思われる。

おまえさんの母上は立派な貴族だよ。

一生懸命頑張って、そうあろうと努力しているんだ。

俺はラピスの人間で、中央の手先だ。そんな俺が言うのもなんだが、この国は微妙な立場にある。説明したがラピスは自分たちの優位を保つために周りの国を自分たちの体制に取り込もうと躍起になっている。そんなラピスにとってベルーシアは案外手強い相手だ。

ベルーシアの人間は信心深い。だがその信心深さはラピスの宗教



から見れば迷信に属するものだ。ラピスにとって手っ取り早い富みを欲する相手は取り込みやすい。だが迷信深く清貧であるうとする者に対しては同じ宗教が土台であるだけにやりづらい。

ベルーシアは外から見れば貧しい国だろう。だが、この国に飢えて死ぬ人間がいるか？ 貧しくとも収穫は平等に分かち合い、民は自由で、精神的に幸福だ。この国では貴族が国を守るため、民を守るために機能しているからだ。

ユークリナは豊かな国だ。だがその豊かさを一部の貴族が独占し、実りの乏しい年には餓死者が出る。貴族が今年のワインの出来は悪いとぼやきながらためえは贅沢三昧の暮らしをしているというのだ。

ユークリナには近年ますますラピスの干渉が激しくなり、ユークリナの一部の貴族たちもラピスと組んで自分たちの体制を強化しようとする動きがある。ここベルーシアも、もしあのオネーギンが国王になるようなことがあれば、国は豊かになるだろう、王子、おまえさんが憧れるペテロブラーグのような都会を作るのも夢ではないだろう。だが一方、民は確実に二つに割れるぞ。貴族に寄生して少しでも甘い汁にありつこうという者と、それにさえなれずひたすら労働を搾取される者にとだ

ルピネーの声は静かでしたが、語り口はついつい熱くなるのを抑えるよう努力していました。

本当は自分の口から言わず、王子に自分で気付いて欲しかったことです。

女王も同感でしょう。

ここは古い城です。

歴代の偉大な王たちが国を守るため、民を守るため、戦ってきた要塞です。

その戦いが戦争ばかりでないことを王子は知るべきでした。

王子はさすがにしょげて元気なく言いました。

「僕は歴代最低の王位継承者でしたね」

「残念だよ」

二人は入り口のホールに到着しました。

「さようなら、ルピネーさん。お世話になりました」

ルピネーはただ小さく頷き、とぼとぼ歩いていく王子の後ろ姿を見送りました。

王子は馬にも乗らず長い長い坂道を下り、森に入っていきました。そういえばここであの生意気なクラリスと馬の駆け比べをしたっけと思いつながら、湖への道をたどりました。

湖に白鳥たちの姿はありませんでした。

最初の夜のように空から下りてくるかもしれないと王子は岸に腰掛けて待ちました。時刻はもう真夜中近くになっています。ひと月前は夕方遅くの月の出でしたが、今はだいぶ早まって、真円に近い月が晴天の空にすでにだいぶ傾いています。

明日の満月のオデット姫たちの変身はいつ頃から始まるのでしょうか？

満月の白銀の輝きによって呪いが効力を失うそうですから、空が夜の黒になって月が輝き出すと変身が始まるのでしょうか。

ひと月前には王子の十八歳のひと月前を祝うパーティーが開かれたわけですが、明日は一日前、前夜祭のパーティーが開かれる予定になっていました。

こんな有様になってはどうなることやら分かりませんが。

傾いていく月を見ながら王子は今夜は姫たちは来ないようだと思つて、正直ほつとしました。心苦しい再会が明日に伸びてまた一日重苦しい気分には悩まなくてはならないだけなのですが。

とにかく王子はひと月後の再会という最低限の約束だけは守れそうです。

このまま姫が現れなければ、と、つい思ってしまったって、自分はなんて卑怯な人間なんだろうとますます自己嫌悪に陥ってしまいます。今夜はここで一晩明かすことになりそうです。

寒さはそれほど感じません。ラピスの寒さに体が慣れてしまっています。

王子はこの森はなんて暖かいんだろうと思いました。

ベルーシアが貧しい国だなんてとんでもない、こんなに豊かな国ではないか、と、今の王子には分かります。

でも、とも思います。

自分はそんなに間違っているだろうか？

この国がペテロブラーグのような都会の国だったらという憧れもやっぱり捨て切れません。

国民を奴隷にしてまで自分たちが贅沢をしようとは思いませんが、ああいう発展の仕方をすべきなのではないかとやっぱり思います。

自分がそうしようとしなくても、いずれは国民の方からそういう働きかけをしてくるでしょう。

世界はそういう風に動いているのです。

王子がこの旅で一番はつきり分かったのは、自分がいかに国王に向いていないかということです。

ルピネーやクラリスに事あるごとにそう教え込まれました。

やっぱり自分が王になるよりもやり手の商人であるオネーギン氏に王になってもらった方が国民も幸せなのではないだろうか、と、先ほどのルピネーの話には今ひとつ納得できかねる気がするのです。

「ルピネーさんだって元はといえばオネーギンと同じやり手の商人じゃないか」

と、ついついふてくされて考えてしまいます。

王子はますます自己嫌悪に陥っていききました。

はて、

遠くで若い女性の悲鳴が聞こえたようなと思ったら、

キヤー、キヤー、

と騒がしい悲鳴がだんだん近づいてきて、すぐそこまで来たかと思ったら、

「キヤーツ！」

王子の愛馬にまたがったオデーレが飛び出してきました。

馬はくるりと後ろを向くとブヒヒーンといなないて前足を宙に掻き、背中から放り出されたオデーレを王子は慌てて抱き留めました。「オデーレさん。いったいどうしたんです？」

髪を乱したオデーレはハアハア激しく息をつき、びっくり大きく見開いた目で王子を見るとせき込むように言いました。

「どうしたじゃないわ。王子、お城を追い出されたって本当？」

王子は苦笑いしてやけっぱちのように言いました。

「ええ、本当ですとも。母上に勘当されましたね。これで僕も晴れて自由の身だ！」

「冗談じゃないわよ！」

オデーレは感情が先走って泣きそうになりながら言いました。

「あなた、詐欺罪で逮捕されるのよ！ ラピスに連行されて牢屋に入れられるのよ！」

「え？・・・」

王子はなんとも間抜けな顔になって、やがてサーツと顔を青ざめさせました。

そういうことはまったく考えてなかったようです。

お城ではあれからオネーギン氏が大騒ぎしてルピネーとルービン卿に違約金の支払いを求め、払わないのならラピスの裁判所に訴えて逮捕させると息巻きました。まあ、オネーギン氏にしてみれば結果的に騙されてこんな田舎まで連れてこられたわけで、拳げ句の果てに女王に首を落とすと脅されたのですから怒って当然でしょう。

お城では今ルービン卿が必死になってオネーギン氏を説得しているのですが、すべては、王子の浅はかな思いつきのせいです。

「どうするのよお？」

オデーレは心配と情けなさで今にもベそをかき出しそうです。

「どうしよう？・・・」

王子も泣き出した気分でしかし泣くわけにもいかずひたすらお

るおろするばかりです。

王子の情けなさにオデーレの頭のスイッチが力チツと入れ替わりました。

王子の腕をがっしり掴んで、

「逃げましよう、ユークリナへ。ロツトバルト様に保護を求めましよう」

と強く迫りました。

王子はちよつと考えましたが、

「い、いやだつ！」

と拒否しました。

「ロツトバルトは僕の敵だよ？ そんなみつともない真似、僕にはできないね！ 君だってあいつに利用されて花嫁にされるところだったんじゃないか？ それにあいつは、鳥の化け物だぞ！？ 実際のところ何をされるか分かったものじゃないじゃないか！？」

オデーレは苦しそうにひるみましたが、

「鳥の化け物だろうと、あの人がどういう立派な人か、王子だって分かったでしょう？ ねえ、落ち着いて考えて、あなたには他には道はないのよ？」

と真剣な目で諭しました。

王子は考えました。たしかに城を追い出された自分に味方はいません。ルピネーももう自分を見限ったのです。

「クラリス・・・」

ポツリと呟きました。

「そうだよ、クラリスだよ。彼女は何やってるんだよお？」

王子は泣きそうな顔でお城の方を見ました。

クラリスなら、自分がどんな馬鹿をやっても、本気になって怒って、本気になって叱って、でも、けっして自分を見捨てず、力になつてくれるような気がします。

でも、そのクラリスもあの怪物ロツトバルトと対峙してからすっかり気弱な女の子になってしまつて、今日はずうつとしょげ返つて

ばかりでなんにも物事が目に入らない様子でした。

「あたしがいるじゃない！」

オデーレが怒って言いました。

「クラリスじゃなくあたしを見て！ そりゃあたしはなんの力もないけれど、あなたを思う気持ちは誰にも負けないわ！ あたしが一番あなたを好きなの！ オデット姫なんて忘れて！ あたしを見てよ！ あなたに愛してもらえないんだったら、あたしだって白鳥になって何もかも忘れてしまう方がましょ！」

オデーレはとうとうこらえきれずに涙をこぼすと、ヒックヒックとしゃくり上げて、綺麗な顔をくしゃくしゃにしてわーわー子どもみたいに泣き出しました。

王子はそんなオデーレの様子にじーんと胸を熱くし、思わずぎゅうつと抱きしめました。

「僕だって・・・君が好きだ！」

オデーレの泣き声が一瞬やんで、またもつとすごくわーわー泣き出しました。

王子は切なそうにオデーレの背中を抱きしめ、恨めしそうに天を仰ぎました。

「ああ、もうどうして君が先に現れなかったんだ？ オデット姫より先に君に出会っていたらこんなに悩むことなんてなかったのに！  
・・・」

王子は決心を固めました。

オデーレの肩を押さえて顔を向かい合わせました。

「行こう、ユークリナへ！ もうかまうものか、僕はロツトバルトさんに付く！ 人になんと言われようとかまうものか僕には君がいる！」

「ああ、王子、嬉しい！」

二人は再びひしと抱き合いました。

「逃げましょ、ふたりで」

「逃げましょ、新天地ユークリナへ！」

二人は退屈そうに草をはんでいる王子の愛馬に乗り、ユークリナへの道を進み始めました。

どうせ明日にはロットバルトはここベルーシアに来るはずなのですが……

馬を歩ませ始めてすぐに、足元から徐々に霧が立ちこめ始めました。

「珍しいな、朝にはまだ間があるというのに」

と、キヨロキヨロしているうちに、王子は急に眠気が差ってきて馬からずり落ちそうになってしまいました。

オデーレは慌てて王子を捕まえ、「王子、王子！」と呼びかけましたが、王子はすっかり眠り込んでしまっています。

馬も歩みを止め、こちらも目を閉じ、眠ってしまったようです。

「いったいどうしたのかしら？」

オデーレは馬を下り、よいしょと重い王子を下ろし、木の根元に寄りかからせました。

辺りはすっかり白い霧に覆われ、道も何も見えなくなってしまいました。

これは魔法の霧だ、とオデーレも思いました。

「クラリス、あなたなの？」

呼びかけましたが、答えたのは別の声でした。

オデーレ、オデーレ、オデーレ……

遠くかすかに、オデーレの名を呼ぶ声がします。

「誰？ 誰なの？」

オデーレ、オデーレ、オデーレ……

どこかで聞いた声です。

ずつと前、懐かしくももの悲しい感情が呼び覚まされます。

「お母さん?!」

それはまだ幼い頃、母のいない寂しさに一人泣きながら寝入ってしまったときに夢うつつのうちに聞いたあの子守歌の声です。

「お母さん！ どこ、どこにいるの？」

しかしどこを向いても真っ白な霧が覆うばかりです。

「お母さん！ お母さん！ お母さん！」

オデーレは居ても立ってももられず、無我夢中で声のする方に駆け出しました。

あっ、と木の根に躓いて転びました。起き上がって駆け出します。二度三度と蹴躓きながら、白い霧の中からぬっと現れる木の幹に危うくぶつかりそうになりながら、母の声を頼りに駆け続けました。

あっ、と足元の地面が消え、水の中に転落しました。湖の岸から飛び出してしまったのです。

あつぷあつぷと身も凍る冷たい水に呼吸を奪われながら、必死に水を掻き、母の幻を求めました。

「お母さん！・・・」

涙が流れ、気が遠くなり、水の中へ沈んでいこうとしたその時、霧が渦を巻き、まるで手のように哀れに天に差し出されたオデーレの手を掴み、宙に引っ張り上げました。

ザバンと宙に舞い上がったオデーレの体が白く輝き、背中に大きな羽が生えました。

「お母さん・・・」

夢の中で空を飛んでいるように、オデーレは湖の反対側の母の声のする方を目指して羽ばたきました。

オデーレが岸にふわりと降り立つと、急に霧が晴れだし、木々が姿を現しました。

その向こうに、二つの人影がありました。

つえをつき、灰色のマントを頭からかぶった女と、長い見事な銀髪、黒いドレス、そして背中に大きな純白の羽をたたんだ、全身から淡く白い光を発した神々しい美しい若い女性。

オデーレはその翼を持つ白い女性を母だと思いました。



嬉しさを溢れさせて呼びかけようとした、その時、

灰色の女が白い女性に言いました。

「ご苦労だったね、オデーレ」

オデーレは自分が呼ばれたのかとギクリとしました。

しかし呼びかけられたのはやはり白い女性で、女性は何やら灰色の女に手渡しました。

キラキラ輝く、それはあの「白鳥の白」のダイヤモンドでした。

「まったく大したご苦労様だったわよ」

答えたその声は、オデーレでした。

いいえ、妹オデーレの名を騙る、それは双子の姉オデーレでした。

そして、オデーレを騙る双子の妹オデーレは、気付きました。

あの歌声は、母ではなく、この姉、オデーレの声だったことに・

・  
・  
・

### 第37章 姉妹

時間をさかのぼって、

クラリスです。

魔物の姿をしたロットバルトと対峙して、その恐怖に屈し、完全に魔女としての自信を失ってしまいました。

一日明けても恐怖は去らず、モデストに支えられながらずっとつむぎ、震えてばかりいました。

それまでも危ない目には何度か遭って、死の危険を感じたこともありましたが。しかし母から受け継いだ魔力によってきっとだいじょうぶと安心した心がいつもありました。

しかし、ロットバルトの全身からみなぎる攻撃的で圧倒的な力を感じたとき、自分の魔力では勝てないと思いました。そうしたら、魔法という鎧を剥がされ、クラリスは普通のか弱い女の子に戻ってしまいました。

魔法という力に、クラリスはずっと守られてきたのです。

その力が、絶対に通じないと感じた相手と対峙したとき、クラリスの自信はものの見事にへし折られてしまいました。

ルピネーもアナトリーもずいぶん心配してくれました。しかしそんな心配に答える心のゆとりもすっかりなくなってしまいました。ベルーシアのお城に着き、女王の喜びの歓待を受け、楽しい晩餐が終わり、それでもクラリスは落ち込んだままでした。

部屋で一人きりになるのが恐くて居間の暖炉の前でずっとモデストに肩を抱いてもらいました。

そこへ、オネーギン氏がわめきながらやってきました。

俄然お城が騒がしくなり、クラリスは王子が城を追い出されたことを知りました。

でも、もう王子を責める気も起きませんでした。

王子ばかりが悪いわけではありません。

自分も、ロットバルトに敗れたのです。

モデストが暗い声で言いました。

「父さんもたいへんだな。王子がどうなるかと、ラピス国内で父さんの責任が追及されるのは間違いないね。敵が多いからなあ。特にオネーギン氏のお仲間には」

「あーあ、あんな人の力を借りるんじゃないやなかった、とモデストは大きくため息をつきました。

それもモデストの責任ではありません。あのティアラを借りたのはいわばスポンサーのご機嫌取りです。いろいろ人脈的に難しいいつながりがあるのです。

クラリスはモデストにも申し訳ないなと思いました。それもこれもみんな自分が王子をペテロブラーグに連れていったせいです。

オデールがやってきました。

「まったくいつまでそんな鬱陶しい顔しているの？」

オデールは腕を組んで恐い顔でクラリスを見下ろしています。

「あんた力で父さんになうとも思っていたの？ まったく、バツカみたい」

クラリスは恨めしそうにオデールを睨みました。

この親子とこの姉妹に、どれだけ悩まされていることが。

オデールはニヤリと意地悪く笑いました。

「少しはオデールを見習ったらどう？ あの子、王子様を追って飛び出していったわよ」

クラリスはちよつとビツクリしました。あの甘ったれのオデールにそんな行動力があつたとは意外です。

「わたしもちよつと出かけてくるわ。あんたはそこでせいぜいモデストお兄様に甘えていなさい」

オデールはフンと笑って歩いていきました。

クラリスはなんだか猛烈に腹が立ってきました。

「オデールさん、一人で外に出かける気かな？ だいじょうぶかな？」

モデストが心配そうに言いました。

クラリスはすつくと立ち上がりました。

「だいじょうぶよ、わたしが見張っているから。そうそうあの人の好き勝手にさせてなるものですか！」

クラリスは両の拳を握りしめて、ふと我に返ると、優しいちよつと寂しそうな顔でモデストを見ました。

「モデスト兄さん。ありがとう。わたし、あなたが大好きよ」

顔を寄せて、頬にチュツと軽く口づけしました。

「それじゃ、わたしもちよつと行ってきます」

クラリスは晴れ晴れした顔で手を振って廊下に出ていきました。

クラリスは厩舎から馬を一頭借りて門へ急ぎました。

オデルは馬を使っていないようです。歩いてその辺をちよつと散歩するだけなのでしょうか？

城門を出て辺りを見渡してみましたがおデルの姿も気配もありません。

先の山門まで行ってみようかと馬の鼻を前に向けたとき、

上の方で強烈な魔力を感じました。

馬を少し前に出して見上げると、城壁の上にはぼんやり白い光が漏れて、動いたかと思うと、大きな白い鳥が飛び出しました。

「あれは！・・・」

鳥ではありません、背中に純白の大きな羽を生やしたオデルです。黒かった髪の毛も銀色に光っています。

オデルは優雅に羽ばたいて森のあの湖の方へ向かいました。

クラリスは「お願い」と囁いて馬に合図の鞭を軽く叩きました。

茶色の馬は心得たとはかり猛烈な勢いで坂道を下り始めました。

オデルは湖のあちら側へ行くようです。

クラリスは森の中に入るとオデルの魔力の痕跡をたどりながら湖をぐるりと回っていきました。

湖の城から一番遠い岸におデルは下りたようです。

クラリスは距離を置いて馬を下り、静かにオデールの下りた辺りに近づいていきました。

「ご苦労だったね、オデーレ」

灰色の魔女です。

灰色の魔女がオデールから「白鳥の白」を受け取っています。

「まったく大したご苦労様だったわよ」

オデール、いえ、双子姉妹の姉オデーレは大儀そうに答えました。

「ハルメイユーのダイヤは偽物だったじゃない。わざわざペテロブラーグまで行ってきたのよ、十分感謝してほしいわね」

「おまえのことだ、どうせ遊びながら楽しんできたのだろう？」

そうか、ハルメイユーのダイヤは偽物だったのか。フン、あの女の子そうなことだ」

それは違うわ、と言いながらクラリスが二人の前に姿を現しました。

「ダイヤをすり替えたのはダイヤモンドの精。お母さんはあなたがいつでも取り戻せるようにハルメイユーの王様にそのダイヤを預けていたのよ。そこに封じ込められている魔力はあなたのものなんですよ？」

「おまえが、あの女の娘か」

灰色の魔女はオデーレを睨みました。

オデーレは

「あら、後をつけられちゃったみたいねえ」

ととぼけました。

灰色の魔女は娘を忌々しそうに睨み、手に持ったダイヤを調べました。

「これも細工が施してあるな？」

ギロリと恐い目でクラリスを睨みます。

「それもダイヤモンドの精がやったことよ。彼女の話だと、本当の持ち主が魔力を解放すれば外の殻は中から碎けるそうよ」

灰色の魔女はまた娘を睨みました。どうしてこの小娘がそんなことまで知っているのか、娘に不信感を持ったのです。

「仕方ないじゃない、この子なかなか鋭くてねえ」

オデーレはさんざんクラリスをこき下ろしていたくせに平然と持ち上げました。たっぷり嫌みな笑みを込めて。

「ねえ、灰色の魔女さん。あなたどうしてお母さんをそんなに悪く言うの？ お母さんがあなたに何かしたの？」

クラリスは心配そうに顔を曇らせて「白鳥の白」を見ました。

「それとも、あなたじゃなくて、旦那さんのロットバルトのことで恨んでいるの？」

「元、旦那」

とオデーレが余計なことを言っただけでまた母親に睨まれました。

オデーレはニヤニヤ笑い返して、

「オデーレに聞いたわよ、カラベラスってすごい美人なんですってねえ。案外父さん彼女に惚れていて、ふられちゃったんじゃないの？」

「ごまかさなくっていいわよ」

とクラリス。

「オデーレって、オデット王女の妹じゃなくって、あなたの妹、オデルなんでしょ？ ああ、もう、ややこしいなあ。ロットバルトが魔法でオデット王女そっくりの姿に変身させていたんでしょ？」

「そういうこと」

オデーレが藪の方をチラリと見て軽く首を横に振りました。

「くそつ、ふざけおつて！」

突然灰色の魔女が怒りを爆発させて大声を上げました。

「あの男め、自分の娘を愛人の姿に変えるなど、何を考えているのだ！」

怒りの激しさにさすがにオデーレも黙っています。

「そつだ、あいつはそういう男なのだ。自分の欲望を満たすためなら妻も娘も平気で利用するのだ。」

「そうだと、」

灰色の魔女は憎しみに満ち満ちた目でクラリスを睨みました。

「あの男は本当はおまえの母親が好きだったのさ。わたしが気付いていないとでも思ったか！」

それでも、わたしはあの人が好きだった。愛していた。

恋した女に心も体もぼろぼろに傷つけられ絶望のどん底にあったあの人を、わたしは救ってやった。きつとわたしを愛してくれるようになると思っていて、わたしの全てを捧げて看病してやった。わたしに残っていた魔力をも、全てだ！

あの人は本当に打ちのめされ、絶望しきっていた。献身的なわたしに感謝し、わたしを受け入れてくれた。わたしたちは愛し合うようになり、夫婦となり、二人にとって関わり合いのない東の土地に移り静かな暮らしを送るようになった。

わたしたちは幸せだった。この幸せがずっと続くと、わたしは信じた。しかし、

あの男が現れた。あの女に操られ主であるロットバルトを直接はずたにした愚かな家来が！・

あの男にわたしはなんの感情もなかった。ただの愚か者だ、気にするほどのものではない。ロットバルトに引き裂かれようと殺されようとどうでもよかった。しかし、

ロットバルトはあの男を許した。どうしてなのかわたしには理解できなかった。あの男は凶々しくも近くに住むようになった。

ロットバルトが何故男を許したのかじきに分かった。彼はまだ人間たちの王になることをあきらめていなかったのだ。

ロットバルトは男を使い人間たちの社会を探らせ、自分自身人間の社会に接近していった。わたしはロットバルトに人間に関わるのをやめるよう頼んだ。人間たちがどうという生き物か、彼よりわたしの方がよく知っている。

しかしいくらわたしも人間に関わることの無意味さを説いても彼は聞く耳を持たなかった。

何故か？

カラベラスさ。

滅多に人に関わろうとしないあの女が何故かロヴィークのオーロラ姫にちょっかいを出し始めた。彼はあの女と同じ世界に住むために人間たちに関わろうとしたのだ！

彼はとうとうわたしの下を去り、人間の世界に住むようになった。わたしがあんなにも頼んだというのに！

しかし、ざまあないさ、あの女がオーロラ姫に関わったのはなんと人間の男に恋いこがれてのことだったのさ！ わたしは笑ったね、このときばかりは大笑이었다。あのカラベラスが人間の男に恋していたとはね！

ロツトバルトと別れてからすぐわたしは双子の女の子を産んだ。

そして姉の存在を隠したまま妹を彼に託した。彼がわたしとの間に生まれた子をどうするのか、見てやりたかった。

そのために姉であるこの子の目は大いに役立ったよ。

わたしは彼に魔力を分け与えてこんな姿になってしまったが、それでも時がたつて少しは魔力が回復した。しかしこの子の持つて生まれた魔力にははるかに及ばなかった。しかもこの子は双子の特質で妹と強くテレパシーで結ばれていた。妹の見るもの聞くものがこの子には我がことのように分かるのさ。

わたしはこの子を通してロツトバルトの様子をずうっと見てきた。面白くもあり、不愉快でもあった。

案の定彼は娘を持て余した。最初の頃は顔を見るのも嫌という感じだった。大方わたしを思い出すせいであったろう。乳母を雇って任せっきりさ。そのうちカラベラスが人間の男と結婚して子どもまで産んだと知ると、荒れて、人間の愛人を困うようになった。それまで心密かにカラベラスへの純愛をいだいていたかと思うとおかしいやら憎らしいやら。

つまりこのわたしも、あの女の身代わりの愛人程度にしか思っていないかったということか？……



数年経ち、彼が突然娘をかわいがり始めた。

人間たちのやり方を学んで、娘が政略結婚という己の野望を実現するための有効な道具になると気付いたからさ。おお、かわいそうな我が娘オデーレよ。

そして彼は自分もそれが可能だと気付いた。

オデット姫さ。

自身はユークリナ国の宰相という権力の座に着いていたが、それでも限界があると知っていた。絶対的な権力を持つためにはやはり王にならねばならないのだ。そのため、彼は国王夫妻を暗殺し、オデット姫を女王にし、彼女と結婚することで自分が王になるうと企てたのだ。おお、かわいそうなオデット姫よ、利用して捨てられたこのわたしと同じ運命か。

おまけに今度は我が娘オデーレさ。

となりの国のバカ王子と結婚させて、この国も裏から支配するつもりだ。

あの男の野望に際限はない。

自分の野望を実現するために、利用できるものは何でも利用するのさー！」

怒りの丈をぶちまけて、灰色の魔女はゼイゼイ息をつきました。

クラリスは彼女の話に非常に強い不快感を持ちました。

ロットバルトはそこまでひどい悪人でしょうか？

彼女の話には多分に被害妄想的な偏見が含まれているように感じられました。

オデーレがウンザリしたような細い目をクラリスに向けて言いました。

「こつという人なのよ、この人は。わたしがこんなひねくれた傍観者のな人間に育っちゃったのも分かるでしょ？」

灰色の魔女がカツとなってオデーレを叱りました。

「おまえもその目で父親のやることを見てきたはずだ！ 彼がどん

なにひどい男か、おまえにも分かっているだろう!」

オデーレは軽蔑の目で母親を見て言いました。

「でもそんな父を母さんはまだ愛しているんでしょう? そのダイヤに封じられた魔力を、母さんはどうする気なの?」

そうですね、クラリスの一番考えなくてはならないのはその点でした。もはや王子は当てにならず、唯一ロットバルトの呪いをうち砕く希望が持てるのがこのダイヤに封じ込められた魔力なのです。

あの「白鳥の湖」の伝説が真実を含んでいるとしたならば・・・  
「あなた、お母さんに頼んで人間にしてもらった白鳥の妖精なんですよ?」

美しく白銀に輝くオデーレのこの姿。これがこの灰色の魔女の本来の姿だったのではないのでしょうか?

灰色の魔女はこれ以上なく不機嫌になって黙り込みました。

今のロットバルトは魔力のかかなりの部分、しかも根源に近い部分を灰色の魔女から分け与えられた魔力に頼っているはずですよ。

その灰色の魔女のオリジナルの魔力がここに封じ込められているのです、これはロットバルトに対する強力な武器になるはずですよ。

「さあ、母さんはこれをどうするつもりなの?」

オデーレが灰色の魔女に迫りました。

「これを使えば母さんは自由な妖精に戻るんじゃない?」

オデーレはいつになく真剣で真心こもった目で灰色の魔女を見つめました。なんだかんだ言っても母親のことを愛して心配しているのです。

クラリスはそんなオデーレの様子に心打たれ、発言するのをためらいました。

ロットバルトの呪いをうち砕くためにその魔力を使わせてほしい、それは、灰色の魔女に今の灰色の惨めな姿で一生を過ごせと言うのと同じなのではないでしょうか?

しかし、

灰色の魔女は憎々しく笑いました。

「今さら妖精に戻ってどうする？ 何も知らない無邪気な妖精にどうやって返ろうというのか？」

復讐さ。わたしをこんな惨めな姿にした者に復讐してやるのさ！」

「どうして!？」

クラリスが悲痛に叫びました。

「今さらお母さんに復讐してなんになるって言うのよ!？」

灰色の魔女はうるさそうにジロリとクラリスを見ました。

「誰がカラベラスに復讐すると言った？ あの女にかなわないことくらいわたしにも分かるよ。」

ロットバルトさ。

わたしの愛をもてあそんで捨てた、あの人に復讐するのさ！」

「そんな!」

クラリスがまたまた悲痛に叫びました。

「それこそなんの意味があるのよ!？ ロットバルトを殺して、あなたの人生に何が残ると言うのよ?」

クラリスにも灰色の魔女が未だにロットバルトを愛していることは容易に想像できます。憎しみは愛情の裏返しです。ロットバルトがいなくなってしまうたら、彼女の人生も空っぽになってしまいうでしょう。

「ねえ、お願い。それならオデット王女たちの呪いを打ち破るのに力を貸してよ。ロットバルトの野望を阻止すればそれも復讐になるでしょ?」

灰色の魔女はせせら笑いました。

「どうしてこのわたしが王女を助けてやらねばならない？ 白鳥の生活もなかなか良いものだよ」

クラリスは腹が立って、悔しくて、涙が出てきました。

「あなたは、ロットバルトを非難する資格はないわ。あなたは、ロットバルト以上に最低の人間よ!」

灰色の魔女は言い返しました。

「フン。わたしを人間などといっしょにするな」

かつてハルメイユーの湖に住む妖精は人間を愛し、陰ながら人間たちを助けていたと言います。

灰色の魔女はどうしてこうも嫌な魔女になってしまったのでしょうか？

「母さん」

オデーレが静かな悲しそうな目で灰色の魔女に言いました。

「わたしからも言わせてもらっけれど、あなたも本当に救いようのない愚か者だわ」

灰色の魔女は憎々しげに娘を見ましたが、つい、その目が弱々しく逸らされました。

「おまえには分からないよ、まだ死にもぐるいの恋というものを知らないおまえにはね・・・」

「知りたくもないわ、そんなもの」

オデーレは言い捨てると突然上を向いて大声を上げました。

「分かったでしょ、わたしたちがどういう両親の下に生まれたか？」

灰色の魔女もクラリスもギョツとしてオデーレの呼びかけた相手を捜しました。

木の影からオデーレが現れました。

それは紛れもないオデーレでした。

ただ、背中にオデーレと同じ大きな、しかし、真つ黒な羽を生やしていました。

「まったく気が付かなかったわ」

とクラリス。

「わたしが魔力を発してオデーレを覆い隠していたからね」

力の強さはともかく、術においてはオデーレの方がクラリスより一枚上手のようです。

現れたオデーレは、恨めしそうに母を見つめ、大きな目に涙をいっぱい溜めていました。

「お母様がこんな人だったなんて・・・」

オデーレがいたわりながら言いました。

「ごめんなさいね。こんな母親だから、あなたには知らせたくなかったの。あなたの知っている夢の中の母親は、わたしがテレパシーで送った幻なの」

さすがに気まずい思いをしながら、作り笑いをして灰色の魔女はオデーレに歩み寄りました。

「おお、愛しい我が娘よ、辛い思いをさせて悪かったね。全ておまえの父親が悪いのだよ。さあ、おまえもこの母の復讐に力を貸しておくれ」

オデーレが二人の間に割って入りました。

「母さん。いいかげんこの子を利用するのはやめて。わたしもお断りよ。復讐したいなら、自分で勝手におやりなさい。わたしが手を貸すのはここまでよ。わたしも、もう、ウンザリ」

オデーレはオデーレを抱きしめ、涙に濡れた頬に口づけしました。「こんな人たちに比べたらバカだろうと単純だろうとあなたの王子様の方が素敵かもね。さあ、お行きなさい、あなたの翼で。誰に命令されることも、利用されることもないわ、あなたはあなたの力であなたの幸せを掴みなさい」

「姉さん」

オデーレは泣き笑いしながら姉に呼びかけました。

「愛しているわ。わたしのお母さんは姉さんだったのね。わたし、姉さんが大好きだった・・・」

オデーレは妹に愛しそうに微笑みました。

「わたしも愛しているわ。わたしのかわいいオデーレ」

姉に送り出されオデーレは空に羽ばたきました。

月はほとんど沈みかかっています。

しかし今や持って生まれた魔力に目覚めたオデーレには湖面に映る自分の黒い影もはつきり細部まで見極めることができました。

黒い髪、黒い瞳、黒い翼。

姉オデーレは美しい銀髪、美しい金色の瞳、美しい純白の翼をしていました。

母は白く美しい姉を手元に置き、黒く醜い自分を夫に送りつけたに違いありません。

しかしオデーレは自分のこの姿を醜いとも残念とも思いません。

姉オデーレが愛していると言ってくれたから。

大好きな姉、美しい姉の言葉が心からのものだと思じられるから。しかし、

ジークフリート王子がこの姿の自分を好きになっってくれるかどうか、そこまでの自信はありませんでした。

クラリスとオデーレは馬に乗ってお城への帰り道をたどっています。

オデーレは元の人間の姿に戻っています。

「悪いわね、そういうわけでオデット王女のことはいくらもあきらめてちょうだい」

「ハアー……。分かったわよ、もう当てにはしないわ」

と言いながらも、クラリスは背中のおデーレに訊きました。

「あなたやオデーレからお父さんに頼んではくれないの？ ロットバルトがオデット王女との結婚をあきらめてくれさえすればこの話はうまくまとまるのに」

「父はすでに王女の両親を殺しているのよ？ 王女はそんな父を許せる？」

それはクラリスにとっても難しい問題ですが、

「ただ許すというわけにはいかないでしょうねえ。国外追放。でもいいじゃない、王子がオデーレと結婚すれば、あの王子だもの、どうせロットバルトの言いなりになるわよ。ロットバルトもこの国を悪いようにはしないでしょ。あなたのお母さんが言うほどあなたのお父さんは悪い人じゃないと思うわ」

「それはどうも、お気遣いありがとう。でも父はあなたを目の敵に

しているし、王子は今や城を追い出されてお尋ね者の身よ？」

「わたしに関してはね、ま、なんとかなるでしょう。王子については、オデールとの結婚で上手く話がまとまるならルピネーおじさまがなんとかしてくれるでしょう、女王様がなんとのおうとね」

「それはありがたいわね。姉のわたしからもお礼を言っわ。そうね、父に言っであげてもいいわよ。たぶん明日会うことになるだろうから」

「ありがとう。まさかあなたに頼ることになるとはねえ」

「カラベラスの娘としてはちよつとプライドが傷ついたかしら？」

「わたしはね、いいの、そういうことは。有名人もちよつと疲れたわ」

さて、あと残った問題は、とクラリスは考えます。

夫ロツトバルトへの復讐を企てる灰色の魔女の存在です。

まさか彼女がああロツトバルトにかなうとは思えません、何か恐ろしい悲劇を招く予感がしてなりません。

「夫婦って、難しいものねえ・・・」

ハアー、とため息まじりに言いました。

オデールがおかしそうに笑いました。

「あなたのところはどうなの？ 夫婦喧嘩とかしたりしないの？」

「しないわね。もう毎日いちゃいちゃべたべた、こっちが恥ずかしくなってくるわ」

言いながらクラリスもおかしくなっただけ笑いました。

ふと、思い出しました。

「あの『白鳥の湖』の伝説。あれ、もしかしてあなたのお母さんが広めたんじゃない？」

「多分そうでしょうね」

灰色の魔女、元白鳥の精オデレー又はカラベラスに破れたロツトバルトを自分の住みかであるハルメイユーに連れて行って看病し、その時愛しい男の崇高な魂を称えるためと、自分たちの愛の永遠を願っであのようなモニュメントを残したのではないのでしょうか？

恋人を傷つけたカラベラスへの恨みもちよつと込めて。

「愛つてなかなか続いていかないものなのね」

今となつてはその美しい伝説もむなしばかりです。

「いいじゃない」

オデーレが晴れやかな声で言いました。

「おかげであのバレエが生まれたんだから。人生は短く、芸術は生き続ける。母さんの願った永遠の愛はバレエの中で生き続けるのよ」

「それじゃああなたのお母さんにもあのバレエを見てもらいたいわね」

「そうね。まあ、素直に感動してくれる心が残っていてくれるといいただけれどね」

芸術は生き続ける、永遠に。

オデット王女はジークフリート王子に永遠に変わらないものといふ宿題を出しました。

例えば、これがその答えにならないでしょうか？

そういえばオデット王女はどうしたのでしょうか？ もうこちらに着いていてくれなくては困るのですが……

夜が明け、王子が目覚めるとゴトゴト馬車の振動に揺られていました。

ルピネーの馬車にも負けない大きな、しかも豪華で居心地のいい内装の馬車です。

「おはよう、ジークフリート王子」

向かいの席からニコニコ笑顔で呼びかけたのはロットバルトです。

王子は慌てて起き上がりました。

ロットバルトはよそ行きに品よく着飾ったかつこうをしています。そして、そのとらにはきらびやかな金の刺繍を施した眩しい白

のドレスを着たオデーレ。

「紹介しましょう」

ロットバルトは上機嫌で言いました。



「わたしの娘、オデールです」

王子はポカーンとオデールを見つめました。

オデールは努めて笑顔で言いました。

「そういうことなの、王子。ねえ、かまわないでしょう？ お父様はわたしたちの味方になってくださるのよ」

王子は啞然とするばかりで、どういふことなのかさっぱり分かりません。

### 第38章 囚われの身

お話戻って、

白バラの森を飛び立ったオデット王女一行のその後。

ベルーシアへの旅は順調そのもので、クラリスたちがカカツサスの洞窟にいる頃にはすでにベルーシアに入っていました。

十分間に合うとなると王女に欲が出てきました。

「やっぱりロットバルトに対抗する味方がほしいわよねえ」

「また熊さんみたいなの？」

話し相手は例によって火花の精ヴァイオレットです。

「そうじゃなくって、ロットバルトに馬鹿なことはやめるようにって説得できる人よ」

「いるかなあ、そんなの？ あいつ、世界で一番偉いのは自分だっ  
て思ってるよ、ぜったい」

「でしょうけどねえ・・・」

でも思うんだけど、あの人、鳥の大將ってことだけど、もともと  
フクロウで、夜の世界の王様だったわけよね？ 昼の鳥たちの王様  
っていなかったのかしら？」

「野生の動物たちにそんな意識なんてありゃしないよ。みんな自分  
のテリトリーを守って、外のことなんかおかまいなしさ。ロットバ  
ルトだけ特別なんだよ。あいつは人間の真似をしているのさ」

「だったら、自分のテリトリーを侵されてロットバルトに反感を持  
っている力の強い鳥っていないのかしら？」

「そういうことなら、いるかもね」

「そういう鳥が何羽か集まって他の鳥たちにロットバルトに協力し  
ないように言ったらどうかしら？」

「でももし鳥たちの協力がなくなったらってロットバルト一人で十分  
強いよ。火に油って結果にならなきゃいいけどねえ」

「このまま何もしいよりはましでしょ？」

「それじゃああたいが鳥たちに探りを入れてもいいけど、あたいが居なくてだいじょうぶ？」

「だいじょうぶでしょう。ナージャもいるし、ロットバルトもこれ以上わたしに嫌われたくもないでしょうから」

というわけで、ヴァイオレットは一人一行から離れて森の鳥たちにロットバルトに反感を持っている者がいないか探りに出かけました。

オデット王女は

「白鳥でいられるのもあとわずかだから今のうちに空の散歩を楽しんでおきましょう」

とお城の麓の湖の周辺及び西の方にかけて一日中のんびり行ったり来たりしました。

他の者には言いませんでしたが、もしかしたら、この森からの脱出の際脱落した二人、近衛女官のレスリーと女中のジジがどこかで生きていて自分たちを待っているのではないかと一縷の望みを持つてのことでした。

残念ながら二人は発見できず、一日経ち、二日経ちました。

ヴァイオレットの方もなかなか芳しくないようです。どうやら思った以上に鳥たちに対するロットバルトの支配は強いようです。

そしてとうとう満月の前日になりました。

朝出かけてすぐにヴァイオレットが喜び勇んで帰ってきました。

「いたいた、見つけたよー！ ものすごい鳥の王様を！」

ヴァイオレットの案内でオデット王女たちは北の方の湖に向かいました。

そこで待っていたのはロットバルトにも負けない立派な大鷲でした。それも三羽。彼らはこの辺りを縄張りとしているライバルたちでした。

彼らは地面から大きく突きだした岩に止まり、王女はその足元に

歩み寄って対面しました。

「ロットバルトの奴は腹に据えかねる」

一羽が迫力満点に言いました。

「大風をまき散らして俺の縄張りを荒らしやがるし、奴の子分のチビ助どもが徒党を組んで大いばりで俺の獲物を横取りしやがる。ふざけるなど叩きのめしたら奴が出てきてこの有様だ」

この大鷲は額に大きく引き裂かれた傷跡がありました。

別の大鷲が言いました。

「他の鳥どもは奴に騙されているのさ。奴は人間の王になりたがっているのだ、人間の王になってしまえば鳥のことなど見向きもなくなるさ、同じ仲間のくせにな」

もう一羽も言いました。

「あいつは俺たち鳥のためにならねえ。さつさと殺してしまわねば俺たちの世界はめちやくちやになっちゃう」

三羽はただでさえ恐い顔を怒りでこれ以上なく凶悪にして今にも獲物に飛びかかりそうに羽を怒らせました。

王女は危うい雰囲気警戒して言いました。

「まあ待ってください。ロットバルトを王の座から引きずり下ろすのはけっこうなんですけれど、争いになっては困ります。だいたい、申し上げにくいんですけれど、あなた方が彼に戦いを挑んで勝てるんですか？」

王女はチラリと一羽の額の傷跡を見ました。

大鷲たちは怒りました。

「鳥の世界で俺たちになかう奴なんていねえ！ただ、奴は俺たちにはない魔法を使う。だがそれも奴に近づければ問題はない。俺たち三羽が力を合わせれば必ず奴を倒せる！」

オデット王女はますます困りました。

「倒されてしまうのも困るんです。わたしはただ彼を無力にしたいだけなんです。彼も元々は人間に対する怒りから立ち上がったわけですから、同じ鳥のよしみでなんとか殺すのは勘弁してあげてくだ

「さいません？」

と、大鷲たちをなだめました。

大鷲たちは面白くなさそうでしたが、そこはさすが鳥の王者、誇り高く慈悲を示してくれました。

「よし。ではおまえたちに俺たちの力を見せてやる。このままこの湖に遊んでおれ。森中の鳥たちを味方にして奴からおまえたちを守つてやる」

オデット王女はそれも迷惑な話だと思いましたが、相手は何しろ巨大で強力な肉食鳥です、あんまりごねて機嫌を損ねてはたいへんなので申し出をありがた迷惑に受けることにしました。

湖で待つ仲間たちのところへ向かいながらオデット王女はヴァイオレットを睨み付けました。

「なーにが鳥の王様よ、ただの頭の悪い乱暴者じゃない」

ヴァイオレットはむくれました。

「あたいが悪いんじゃないよ、ロットバルトが嫌われているだけだよ」

仲間の白鳥たちも不安そうに各々飛び立っていく大鷲たちを見上げています。

オデット王女は羽をすくめて言いました。

「わたしたちを守ってくださいるそうだから、ま、お任せしましょう」

湖の周辺に続々鳥たちが集まってきました。

鷲に鷹に鳶にミミズク、カモにサギにカワセミ、キツツキにシジュウカラ、ツグミにヒタキにホオジロ、スズメにヒバリ、ハト、そしてあのにくつたらしいカラスたちまで、湖の周りに、森の木々に大量に集まってやかましく鳴き声を上げています。

あまりの騒々しさと数の多さにさすがにお気楽なヴァイオレットもだんだん不安になってきました。

「なーんかヤバイ雰囲気じゃないか？」

三人の子どもたちはすっかり脅え、天馬のナージャもイライラし

たようにブルブル鳴きました。

しかし今さら脱出しようにも上空をあのに三羽の大鷲が見張るよう  
に旋回しています。

ヴァイオレットが申し訳なさそうに王女に言いました。

「もしかしてさー・・・」

「どうやらそうのようね」

王女はすっかりあきらめたように答えました。

そして夕方。

不安は的中して大きなたむじ風がゴオツと湖の上にやってきて、  
中から大きな翼の持ち主が現れました。

ロットバルトです。

今度のロットバルトは人間の体の背中に翼を生やして、顔は、フ  
クロウそのものでした。

オデット王女はロットバルトに言いました。

「ゼーんぶお見通しで、毘だったってわけね？」

「そういうことですか」

ビククリしたようなまん丸い巨大な金色の目のロットバルトは無  
表情に言いましたが、その声は得意満面でした。

ヴァイオレットが悔しそうに上空の鷲たちに叫びました。

「こらーっ！ この卑怯者ーっ！ なーにが鳥の王者だ、バツカヤ  
ローッ！！！！」

「彼らを責めるのは間違いだな」

ロットバルトが鷲たちを代弁して言いました。

「彼らは誇り高き鳥の王者だ。だが、偉大な王も森がなくなつては  
生きていけないのでな。わたしが約束したのだよ、わたしが人間の  
王になつたら必要以上に森を開発することはさせないとな」

やっぱりロットバルトこそが鳥の王だったので。

「念のため訊くけれど」

オデット王女が言いました。

「彼の額の傷はあなたが付けたものじゃないの？」

「わたしが付けたものだよ。この森を代表する彼と決闘してな。もちろん鳥のわたしとしてだ。結果は、もちろんわたしの勝ちだ」

ロットバルトはスーツと下りてきて水の上に立つと人間の顔に変身しました。

「さあまいりましょうか、オデット姫。もちろん姫お一人ですぞ。お友だちの皆さんはこちらで待っていていただきましょうか。もちろん、嫌とは言わせませんぞ」

「仕方ないわね」

オデット王女はロットバルトに従う振りをして横をすり抜けるとバシヤバシヤ駆けて飛び上がりました。

森の鳥たちがざわめきましたが、ロットバルトは手で制してつむじ風を巻いて飛び上がり、簡単にオデット王女を捕まえてしまいました。

「鳥どもが追ってくると思ったか？ 残念だったな」

オデット王女の白鳥はロットバルトの腕の中でもがきました。

ロットバルトは残酷に笑いました。

「この程度の戒めからも抜け出せないか、クラリス？」

オデット王女はもがくのをやめてロットバルトを見ました。

「妖精！ ヴァイオレットとか言ったか？ それにペガサス！ おまえたちにも来てもらおうか？」

ヴァイオレットは悔しそうに歯ぎしりしながら、仕方なくナージヤを伴ってロットバルトのところへ飛びました。

ロットバルトは片手でヴァイオレットをムンズと捕まえ、気分良さそうにナージヤにまたがりました。

「ねえ、ロットバルト」

オデット王女が訊きました。

「仲間たちの安全は保障してくれるんでしょうね？」

「それは姫の態度次第、と言いたいところだが、まあいいだろう。」

鳥たちには手を出させない。ただし、ここでおとなしくしていれば

だ

王女は頷き、下で心配そうに見上げる仲間たちに言いました。

「わたしはだいじょうぶよ。みんな、きつと人間に戻してあげるから安心して待っていてね」

ロットバルトは声を出して笑い、

「それ行け！」

とナー ज्याの脇腹を叩き、風の絨毯に乗せてものすごい速さで駆けさせました。

ロットバルトを乗せたナー ज्याはあつという間にユークリナの王宮に到着しました。

ロットバルトはナー ज्याを厩舎につなぎ、嚴重に鍵をかけました。ヴァイオレットは頑丈な鳥かごに入れられ、こちらも嚴重に鍵がかけられました。

オデット王女は、白鳥の姿のまま王女の寝室に連れていかれ、ベツドの足に足かせをつながれました。

「それもそれでいい姿だな」

ロットバルトはバカにして笑いました。

「だが、」

気障にパチンと指を鳴らすとオデット王女は人間の姿に変身しました。

ロットバルトはフムと感心しました。

「やはり姿を変えているだけでなく精神を入れ替えたようだな」

「さて、なんのことかしら？」

「とぼけるな。おまえが本当はクラリスなのはお見通しだ」

オデット王女はあらあらと肩をすくめました。

ロットバルトはちよつと不愉快そうに顔をしかめました。がすぐに余裕を取り戻してニヤリと笑いました。

「どつりでオデット姫にしては品がないと思った。しかし精神を入れ替えるとはな、小娘のくせにしゃれた魔法を使いやがる。正直、



見事なもんだよ。もつとも、ばれてしまつては自分を窮地に陥れるだけだな。しくじつたな、クラリス」

「ばれちゃつたらしかたないけれど、オデット王女には会わせてもらえるんでしょうね？」

「なぜ」

「だつて、王女に会わなきゃわたしたち元に戻れないもの。このままじゃあなたも困るでしょ？」

「さあ、どうだろうな？」

ロットバルトは考える振りをして嫌らしくオデット王女の姿のクラリスをじろじろ眺め回しました。

「俺はどつちでもかまわんかもな。オデット姫の姿をしたあの女の娘を妻にするのも悪くはないか。それともあくまでオデット姫本人を妻にするか？」

「わたしがあなたの奥さんになると思う？」

「拒否するか？ 友だちの白鳥どもは一生あの姿で過ごすことになるぞ」

「たぶんそうはならないわよ」

ロットバルトは笑いました。

「この期に及んでまだ俺に勝てる気にいるのか？ 言っただろつ、俺は最後にはなんとしても欲しいものは手に入れる、と」

ロットバルトは王女の首目がけて手を伸ばしました。

王女の額がキラキラ輝き、ロットバルトの手がブスブス煙を吐き、ロットバルトは顔をしかめました。しかし目が攻撃的にキラリと光ると腕から黒い光が発して額の輝きを圧倒しました。

ロットバルトはがっしり王女の白い首を掴みました。

「祝福の口づけがなんだ。そんなもの俺がちよつと本気を出せばどうということはない。きのう俺の会つたクラリスは魔法を使つていたぞ。体を取り替えて魔力も渡してしまつたか？ つくづくバカな真似をしたな。今のおまえにできるのはせいぜい人の目を惑わしてグラスを入れ替えることぐらいか？ 無力だな、クラリス。今のお

まえに俺は拒否できない」

ロットバルトはぐっと王女に顔を近づけました。

しかし王女は静かな力強い目でまっすぐロットバルトを見つめ返していました。

ロットバルトは面白くなさそうに言いました。

「もう一つ選択肢がある。おまえをこのまま括り殺しておまえの姿のオデット姫を花嫁にする。それともこのまま呪いで完全に白鳥にしてしまうか。さあ、どっちがいい？」

王女がフツと笑いました。

「いい年して幼い女の子がご趣味？」

「ああ、そうさ。あの女の娘と思えばなおさらな」

「ねえ、ロットバルトさん？」

王女があどけなく首を傾げて言いました。

「もしかしてあなたわたしのお母さんが好きだったの？」

ロットバルトはギクリとしてカツと怒りました。

「誰があんな女を。くそっ」

ロットバルトは王女を乱暴に突き飛ばしました。

ロットバルトは忌々しげにベッドに腰を下ろした王女を見て言いました。

「おまえの母親は俺がこの世でもっとも軽蔑する女だ。あれだけの力を持つていながらそれをくだらんことにしか使おうとしない。この世が神が作ったものであるならば、あの女は神の最大の失敗作だ！」

「おおげさねー、と王女は呆れました。

「お母さんは人間のすることに興味がないっていうか、興味を持たないようにしているのよ、たぶん。だってお母さんが本気になったら、言うことを聞かない人間なんていやじゃないもの。この世で生きている人間にとっては神様より恐いんじゃない、とりあえずは？」

ロットバルトはチツとますます忌々しそうに舌打ちしました。本当は自分がそういう存在になりたかったのでしょうか。

「いいか、クラリス、おまえの母親がいかにも強かろうと今俺の手からおまえを救い出すことはできないのだ。おまえは、俺の心一つでどうにでもできるのだ。それを忘れるな」

ロットバルトは憎々しげに凄みましたが、王女は平気な顔をしていました。

「まったく、腹の立つ小娘だ。姫と中身を入れ替える可能性が残っているから許してやるが、俺が心を決めたときは、おまえはただではすまんからな、いずれの場合にしてもだ」

ロットバルトは残酷な想像をしてニヤリと笑うと背中を向けて出ていきました。

オデット王女の姿のクラリスはベッドに座って足をぶらぶらさせて、足首に重くジャラジャラつながら足かせの鎖を面白くなさそうに睨みました。

「このくらいなんとかかなりそうだけど・・・さて、時間稼ぎのつもりが困ったことになっちゃったわね」

しっばいしっばい、と自分の頭をコツンと叩いて、これからどうしようか考えました。

深夜。

背中に羽を生やしたオデールが眠ったままの王子を抱えて宮殿に帰ってきました。

見張りの鳥たちが騒いで、ロットバルトはバルコニーに娘を迎えに出ました。

ロットバルトもオデールの姿にちよつと驚きました。

「おお、オデールよ、なんと美しい姿になったものよ。

ただ、わしは本当はおまえには普通の娘のままできてほしかったのだがな」

ロットバルトはオデールをリラックスさせ、背中の羽をしまわせました。

部屋へ招き入れ、王子はとりあえずソファに寝かせました。

オデールは思い詰めた表情で母と会ったこと、母と姉の会話、母が父を殺そうとしていることを話しました。

話しているうちにオデールは感情が高ぶってきて涙を流してしゃくり上げました。

「母親の思いもかけぬ姿にショックを受けたのだろう。かわいそうに。だがな、オデールや、母も最初からああではなかったのだ。出会った頃は、それはそれは輝くほどに美しい娘だったのだよ。あれをああしてしまったのはこのわしだ。あれはわしをいつまでも自分だけのものにしておきたかったのだ。だがわしにはやらねばならぬことがあった。この力の持ち主としてなすべき使命があったのだ。それを、あれはとうとう分かってくれなかった」

オデールは尊敬する父に分かつていますと頷き、不安そうに言いました。

「お母様はお父様を殺そうとお姉さまに妖精の力を封じ込めたダイヤモンドを手に入れさせました」

ロットバルトはうむと頷きました。

「それは少しばかりやかいかいだな。しかしおまえが心配することはない。おまえも父の偉大な力は見ただろう？ わしは無敵だ。誰にも負けはせぬ」

オデールは心強そうに頷きましたが、また悲しそうな顔になりました。ロットバルトが勝つということは、母が負けるということです。その結果を思うと、やはり胸が張り裂けそうな痛みを感じます。ロットバルトも娘の心の痛みを思いやり、肩を抱き、頭を優しく撫でてやりました。

「男女の仲というのはなかなか上手いかないものだな。母にしてみればそれだけこのわしを愛していたということなのだろう」

ロットバルトはこれ以上娘を悩ませないように話題を変えました。「ところでおまえの方はどうなのだ？ 王子とは仲良くなれたのかね？」

オデールの表情が複雑に変化しました。いろいろな感情が溢れか

えって、どれか一つに納まらないのです。

ロットバルトは眉を曇らせて尋ねました。

「オデット姫に化けたのはまずかったかな？」

オデールはそれにもはつきり答えることができませんでした。

ロットバルトは難しそうに頷きました。

「おまえが王子についていきたいと言ってもそのままの姿ではどう  
てい連れていつてはくれなかっただろう。かといってこのままこち  
らにとどまっけていても、おまえにはかわいそうだが、おそらく王子  
の心がおまえに傾くことはなかっただろう」

オデールは悲しそうにこっくり頷きました。

「姿というのは大切なものだ。特に顔はだ。人は結局のところ見た  
目で判断することしかできないのだ。しかしまったく同じ姿の人間が  
二人いたら、人は中身を見て判断しなくてはならなくなる。わしは、  
王子は必ずおまえを好きになると見たが？」

父に顔を覗き込まれてオデールはちよつと嬉しそうに頬を染めて  
恥ずかしそうにうつむきました。

そんな娘の様子にロットバルトは微笑みました。

「そうか、なかなかうまくいったようだな。それでは、今おまえが  
悩んでいるのは、ではいったいどうやって王子に自分の正体を知ら  
せようかということだな？」

オデールは潤んだ瞳ですがるように父を見ました。

「さて、何しろ男女の仲というのは難しいものだからな。王子に下  
手にへそを曲げられてはおまえがかわいそうだし。どうやって王子  
におまえの真心を伝えるか？」

ロットバルトはふとずるい考えをしてニヤリとしました。

「王子には一つ大きな弱みがあったな。それで城を飛び出してきた  
のだろう？」

オデールは父の悪い企みに不安を覚えました。

「お父様。どうか王子を惨めな気持ちにさせるようなことはしない  
くださいね」

「ああ、分かっているよ。わしは王子をそついう境遇から救つてやるうと思つておるのだよ」

ロットバルトの企みもオデールの心配も知らず、王子はソファの上でのんびり眠りこけています。

翌朝。

オデット王女も久しぶりのふかふかベッドの上で快適な睡眠を楽しんでいましたが、まだ眠りの途中で女中に起こされてしまいました。

眠い目をこすつて起き上がると女中がかしこまつて言いました。

「ロットバルト様とお嬢様が出立の挨拶をなさりたいとおいでになつております」

まだ夢うつつでぼーっとしながら、ああ、そつえば娘がいたんだわ、とようやく目が覚めました。

女中にドアを開けられ、ロットバルト父娘が入ってきました。

二人ともまだ早朝だというのに気合いの入つた盛装をしています。

「オデット姫。ずいぶんとよくお眠りになられたようで、さすが高貴な身分の方は神経が尋常ではあらせられないようで」

ロットバルトは深々お辞儀をしながら小馬鹿にして言いました。

オデット王女は面倒なのでベッドの上ではいはいと手を振つて答えました。

「あらー、オデールさん。まあ、少し見ない間にずいぶんお綺麗になられたわね！」

本当に、ひと月前の甘つたれた子どもつばい顔に比べて思いやりのある大人の女性の顔になっています。

オデールはオデット王女がなぜ自分を見知っているのか不思議に思いました。

ロットバルトは可笑しそつに喉の奥で笑つてオデールの肩を押さえてオデット王女に近づけました。オデールは怖じ気づいたように身を固くしています。

「さあ、見てごらんオデール。これが、あの、オデット姫だよ。おまえの目にはどう見えるかな？」

オデールは怖々、でも目を背けることができずにじいっとオデット王女を見つめました。

綺麗な顔です。

ほぼひと月間自分がこの顔でいたというのに、改めてオリジナルを見てみるとやはりなんと綺麗な顔なのだろうと感心せずにはいられません。

でも、もしひと月前にこの顔を見ていたら悔しさで腹が立って腹が立って仕方なかっただろうと思いますが、今はそれほど強い感情は持ちません。

おかしいことなのですが、

「お姉さまの方が綺麗だわ」

と、双子の姉の方が美しく感じられます。

「お姉さま？」

オデーレの存在を知らないオデット王女は不思議そうな顔をしました。が、ロットバルトは愉快そうに大笑いしました。

「そうかそうか、姉の方が美しいか？ それは良いことだ。オデールや、顔というのは心の持ちようで美しくも醜くもなるものだ。姉を美しいと思うのは姉の心の方が姫の心より美しいということだ」

それはオデット王女の中のクラリスが醜いと言うことでしょう。

オデット王女は思いつきりむくれました。

ロットバルトはおかしそうに笑いながら、

「姫よ。おまえには面白い手品を見せてもらったからな、今度は俺が面白いものを見せてやろう」

ロットバルトは広げた両手に白い光を溜めると、それをオデールの顔に撫で付けました。するとオデールの顔が白く輝き、驚いたことに、黄金の髪のおデット王女そっくりの顔に変身しました。

「あら、びっくり」

王女は正直に目を丸くしました。

得意満面のロットバルトに、

「なるほど、お互い考えることはいつしょということね」

と、王女様らしくないにやけた顔で言いました。

「さすが勘がいいな。まあ、そういうことだ。勘がいいついでに、もう分かるだろう？ この勝負は俺の勝ちだ」

「さあ、どうかしらね？」

二人は譲らず余裕の笑顔でにらみ合いました。

ロットバルトが身を引き言いました。

「わしと娘はこれから勝負の決着を付けに行ってくる。姫はどうぞごゆっくりここでおくつろぎを」

オデールは父に背を押されながら、想像していたのとはずいぶん違うオデット姫を振り返り振り返りしながら部屋を出ていきました。



### 第39章 入れ替わり

朝の光の差し込む森の中、二頭立ての青いエナメルの外装の大きな立派な馬車がベルーシアのお城への道を進んでいきます。

ロットバルトとオデーレ（本当は妹のオデーレ）に見守られてジークフリート王子はようやく眠りから覚めました。

「おはよう、ジークフリート王子」

向かいの席からニコニコ笑顔でロットバルトに呼びかけられ、王子は慌てて起き上がりました。

ロットバルトは都会の夜会に出席するような洗練された青いコートを着込んでいます。

そしてそのとなりにはきらびやかな金の刺繍を施した眩しい白のドレスを着たオデーレが優しい微笑みを浮かべて座っています。

「紹介しましょう」

「ロットバルトは上機嫌で言いました。

「わたしの娘、オデーレです」

王子はポカーンとオデーレを見つめました。

オデーレは努めて笑顔で言いました。

「そういうことなの、王子。ねえ、かまわないでしょう？ お父様はわたしたちの味方になってくださるのよ」

王子は啞然とするばかりで、どうということなのかさっぱり分かりません。

ロットバルトが顔をしかめて腕を組みました。

「まったく困ったものだ。いや、わたしの娘オデーレのことだよ。あいつめ、無理を言って君の後を追っていったというのに、どういうわけかすっかり心変わりしてしまったようだ、今では君にまるで興味がなくなってしまうようだ」

ロットバルトは片眉をつり上げて王子を覗き込むようにしました。王子は、はあ、どうもそのようで、と間の抜けた相づちを打ちまし

た。

「困るのだよ、それでは。わたしのベルーシア支配の野望が駄目になっってしまう」

王子はドキリとしましたが、ロットバルトはいたずらっぽくニヤリとしました。

「まあ、それはついでのことだ。わたしはあれがどうしても言うから王子の後を追わせたのだ。ところがどうだ、こちらのオデーレお嬢さんの言うことにはバレエなどに入れ込んですっかりスター気取りと言うのではないか？」

ロットバルトに尋ねられるようにして王子は、

「いやあ、それはもう素晴らしい舞台でしたよ！ まさに天の女神が乗り移ったような・・・」

と調子に乗っておしゃべりしかけて、口をつぐむと、はあそのようです、とだけ答えました。

ロットバルトはうむと重々しく頷いて、

「わたしはそれでもかまわんのだ、あれがそうしたいのならな。ま、そう思ってたとしてもベルーシアのことはあきらめようかと思っただのだが・・・昨夜遅くこちらのオデーレお嬢さんが馬の背に君を乗せて必死の様子で宮殿に駆け込んできた」

本当は羽を生やして飛んできたのですし、となりの国とはいえそんなに近い距離ではないのですが、王子はロットバルトの怪しく光る瞳に見つめられてなけば催眠状態になっているようです。

「オデーレさんに聞いたのだが、君は今たいへんな窮地に陥っているようだね？」

王子はハッと目が覚める思いがしました。

そうでした、自分は今女王に縁切りされて城を追い出された身の上であるのです。

王子はすっかりうろたえ、青くなりました。

ロットバルトは慈父のように優しく言いました。

「オデーレさんはいたいそう君のことを心配してわたしに味方になっ

てほしいと頼んだんだよ。とても良いお嬢さんではないか！ 君も承知だろうがわたしは彼女を自分のために利用しようと思っただけで呼び寄せたのだが、彼女の君への一途な思いを知って考えを改めた。いやまったく、彼女を利用しようとしていたなど、自分の心の浅ましさを恥じ入るばかりだよ」

ロットバルトはとなりのオデーレを称えて芝居がかった身振りをしました。

「ジークフリート王子。このわたしにぜひとも君たち若い二人の手助けをさせてくれたまえ！」

ロットバルトはいかにも人が良さそうにニコニコしましたが、果たして王子は本当にそれでいいのでしょうか？

王子は心を震わせながら一心に自分を見つめるオデーレに申し訳なく思いながらロットバルトに言いました。

「それはつまり、僕にオデット姫のことはあきらめろということですか？」

ロットバルトはこれは心外だと目を丸くしました。

「それでは君はこのお嬢さんを愛していないと言うのか？ これほど君のことを思ってくれているこのお嬢さんの心に君は答えてやれないと言うのか？」

王子はオデーレの悲しそうな目を見て観念しました。

「分かりました。おっしゃる通りです。僕も彼女を愛しています。・  
・オデット姫を裏切ることになりませんが・・」

ロットバルトは満足して頷きました。

「それでよいのだよ。自分の気持ちに正直にならなければ相手に対しても失礼になる。姫のことはこのわたしに任せておきたまえ」

自信満々のロットバルトに王子はちよっぴり悔しい思いをしましたが、仕方ありません。こうしてすっぱり姫のことをあきらめてしまえば今目の前で瞳を潤ませて嬉しそうに自分を見つめている恋人がこの上なく愛しく感じられます。

『クラリスは怒るだろうなあ・・』

と、後ろめたい気持ちも決して捨て切れませんが。

嬉しそうに手をこすり合わせていたロットバルトですが、ふと深刻な顔になりました。

「ところで、彼女と結ばれることを承知してもらったところで、わたしは君たちに非常に難しい提案をしなければならぬ」

オデーレはビクリと身を震わせ、王子は怪訝に二人を見比べました。

ロットバルトは深刻な顔で王子の目を覗き込んで言いました。

「君はたいへん馬鹿なことをしてかしてしまっただね？ つまらんガラス玉のために城を追われ、莫大な違約金を支払わねば君はラピス大帝国のお尋ね者だ。そうだね？」

「はい・・・」

王子は力無く頷きました。今さらながら自分はなんと考えが甘かったのだろうと思えます。

「その違約金をわたしは払ってやってもよい」

王子はびっくりして口を半開きにしました。

ロットバルトはその証拠だと足元のトランクを引っ張り上げ、重そうに膝の上に載せるとふたを開けました。

中には金の延べ棒がぎっしり詰まっています。

王子は口を開きつばなしにして思わず覗き込みました。こんな大金想像すらしたことがありません。

ロットバルトは目の毒だとばかりとふたを閉めました。

「これを君のため、いや、君たちのために使ってあげよう。考え違いいしてはいけないよ、この金がわたしにとってははした金だと思ったら大間違いだ。これだけの金額、わたしにとってもとんでもない大金だ。その重みを、君にもぜひとも分かってもらわねば困る」

王子は真剣に頷きました。お金の大事さはあの旅で十分身に染みんでいます。

ロットバルトも確認するように頷き話を続けました。

「君たちの手助けはしたい。しかしわたしとしてもただこの大金を

くれてやることもできない。そこでだ、君にはやはりベルーシアの王となつてもらわなければならぬ。有能な王となり、財産を作り、この金をわたしに返してもらつて。心配しなくていい、少しずつ、君が死ぬまでに払い終わつてくれればいいのだ、何しろわたしは君たちよりはるかに長生きなのでね」

その柔らかな色男ぶりについて忘れてしまいましたが、このロットバルトはあの恐ろしい鳥の怪物なのです。

ロットバルトは色男の顔をニヤリとさせて続けました。

「わたしも担保はもらつよ、当然だろう？ わたしが欲しいのは、ベルーシアの宰相の座だ。つまり君の補佐役となつてベルーシアの国をより良く発展させていつてやろうというのだよ。かまわんだらう？？」

ロットバルトはここユークリナでも宰相の座にありました。しかしそれだけでは飽きたらさずオデット姫との結婚を利用して国王になろうとしているのです。

王子の顔に警戒の色が走りました。

ロットバルトは王子の考えなど全て承知で言いました。

「わたしはベルーシアでまで王になろうとは思わないよ。君が、よい王になってくれさえすればね。わたしの言いなりになれというのではない、国のための真に正しい王になつてもらいたいのだ。言うなれば、ユークリナの次期国王であるわたしの同士になつてもらいたいのだ」

ロットバルトがそもそもどういう動機で王になろうとしたのかは王子も知っています。多少過激なところを嫌つてはいますがあのルピネーもロットバルトの信念は認めています。

王子もロットバルトを信じることにして頷きました。

「けつこう。さて、そこで問題だ。

君のお母上だよ。たいへん優秀な政治家ではあられるが、一面非常に頑固でもあられる。一度放逐した君を再び暖かく迎え入れてくれるとは考えにくいが、どうか？」

王子は母の怒りを思っただけで思わずブルリと身を震わせました。

「そうだろうねえ。君を王の座につけるのはちと難しそうだ。そこで、こちらのオデーレお嬢さんだが、」

ロットバルトに視線を向けられ、オデーレはついに来たとき身を固くしました。

「失礼ながらどこの誰とも身元の分からない娘を婚約者だと連れ帰っても女王はますます怒りを強めるだけだろう。だがもし彼女がわたしの娘だったら、どうかな？」

そう、ロットバルトは最初にオデーレを自分の娘オデーレだと紹介しました。

「わたしが娘の嫁入りの持参金として君の契約の違約金を支払い、君を立派な王とするために宰相に就任すると言えば、お母上も考えてくださいるのではないかな？ 幸いわたしはお母上への受けは良いようだから」

女王はあれで人を見る目はあります。ユークリナの国内情勢、宰相ロットバルト対貴族政治家たちの対立も承知でしょう。女王はもちろん頑固な国民至上主義です。

確かにロットバルトの全面的な後ろ盾があれば女王も王子の愚かさを許すかもしれません。

「しかし・・・」

王子は問いました。

「オデーレさんをオデーレさんだと偽るのはどうでしょう？ 顔がぜんぜん違いますし、第一本物のオデーレさんがいるじゃないですか？」

何も知らない王子はちょっと滑稽です。

ロットバルトは余裕を持って言いました。

「君はわたしが誰か忘れたのかな？ 顔を変えるくらい魔法で造作もないことだよ」

ロットバルトは例の変身の魔法を掛けるべく両手に白い光を集めました。

「ちょっと待って!」

オデーレが悲鳴のように言って王子の膝に手をつき、顔を寄せました。

「ねえ、王子。わたしの顔が変わったら嫌? どうしてもこの顔のままがいい?」

「そりゃあ・・・」

王子は戸惑いながら言いました。

「そのままの君の方がいいに決まっているさ。だって、これが君の顔じゃあないか? 君は、顔が変わっても平気なのかい?」

「わたしは・・・」

オデーレは蒼白の顔であえぐように言いました。

「あなたが愛してくれればどっちでもいい。あなたが好きなのはわたしの顔? それともわたしの心? わたしの心は、どんな顔をしていても変わらないわ。ただ、あなたを愛するだけ・・・」

王子はオデーレが強い決心をしているのだと考えました。この美しい顔を変えてもいいだなんて、ふつう女性だったら絶対拒否するでしょう。

オデーレは、それほど強く王子を愛してくれていると言うことです。

王子はジーンと感動しました。オデーレへの愛しさがこみ上げてきます。

「もちろん僕は君の全てが好きだ! でも僕が一番大切に思うのは君の心だ! ああ、すまないオデーレ、君がどんな顔をしていようと僕は君を愛するよ!」

オデーレはポロリと涙を流して頷き、体を元に戻しました。

ロットバルトが手のひらに溜めた白い光を塗りつけると、オデーレの顔が眩しく輝き、黒髪のおデーレの顔に変身しました。

オデーレはしばらく目を閉じて細かく震えていました。

怯えるようにゆっくり目を開いて、じいっと自分を見つめる王子を見ました。

王子は言いました。

「不思議だ……。まるでそのままの君に思える。オデールさんの顔でいる君がまるで自然に思えるよ……」

真実を知っていればそれは当たり前のことなのですが、王子はただただ不思議そうにオデールの顔を見つめ続けました。

「この顔、嫌いじゃない？」

オデールが心配そうに訊きました。

「うっん。ちつとも。と言っているのかなあ？ とにかく、その顔も僕はとても好きだ」

オデールはほっとして笑みが溢れてきて、思わず王子に飛びついて抱きしめました。

王子もオデールを受け止めて黒髪の頭を撫でながら、その実に自然な感触に改めて不思議な感じがしました。

ロットバルトが満足して言いました。

「それでは彼女にオデールになってもらうことは承知してくれたかね？」

はい、と答えて、ふと王子は顔を曇らせました。

「でもやっぱりずっとこのままというのはかわいそうです。まさかもう二度と元に戻らないなんてことはないでしょうね？」

ロットバルトはため息をついて言いました。

「それでは夜、二人きりの時心からの口づけを交わしたまえ。そうすれば魔法は解けて彼女の本当の顔が現れるから」

王子はその状況を思っと思わずポーツと顔が赤くなりました。

オデールはまた一つ心配事ができてロットバルトを見ました。

ロットバルトは娘を安心させるように微笑んで頷きました。

次の課題です。

「オデールさんはどうするんです？ 彼女は今僕の城にいるんですよ？」

「あれはオデールではない。オデールの双子の姉、オデーレだ」  
オデーレはドキッとして、ロットバルトはニヤリとしました。



「と、いうことにしよう。君もわたしに別れた妻がいることは知っているだろう？ オデーレは彼女が引き取って育てていたオデーレの姉だ。それで上手く納まるだろう」

「オデーレさんがそれで納得するでしょうか？」

「かまわんさ。あれはすっかり自由な空気に染まってしまったようだからな。今さら城暮らしもできんだろうさ」

言われると王子もまったくその通りに思います。もうすっかり舅の言いなりです。

こうして嘘の上に嘘を重ねて、この双子姉妹はようやく本当のところになりすました。

夕刻。

ロツトバルトの馬車はベルーシアのお城に到着しました。

到着してみると、王子の十八歳の誕生日の前夜祭のはずが、ルピネー特務外交官来訪記念バレエ特別上演会になっていました。

ロツトバルトは城の者に言い含めて王子とオデーレを一室に控えさせ、自分一人で女王への挨拶に向かいました。バレエ上演会という王女の苦肉の策に苦笑いしながら。

女王は挨拶をするロツトバルトに例によってくどくど息子の突然の病氣とそれに伴うパーティーの内容の変更を説明し謝りました。

委細承知のロツトバルトは辟易しながら小声で、

「いやいやお気遣いはご無用。事情は承知しております。それにつきましてはぜひ女王閣下にご相談したいことがございまして」

と別室に誘い、例の提案をしました。

口の上手いロツトバルトのこと、女王の王子への怒りを巧みに汲み取りつつ、本心の子を思う親の気持ちを引き出しました。決して甘くない女王はロツトバルトの甘言を一方で怪しみつつも冷静に吟味し、これは願ってもない良い話だと判断しました。

「おお、ロツトバルト殿。あなたはなんと心の広い立派な方でしようー！」

ロットバルトは王女の果てしなく続きそうなお礼の言葉を遠慮の態度で押しとどめて、ルービン卿を呼ぶように進言しました。この城、いえこの国のことは全て何がなくともこの人なしでは立ち行きません。

ルービン卿が来ると女王はさすがに嬉しそうにロットバルトの提案を話し、卿も大いに喜んでロットバルトに感謝し、大急ぎで王子の誕生日の前夜祭に立ち戻る準備に走りました。

この後女王は王子を呼び、王子にとってはありがたくも実に居心地の悪い会見となりました。

女王はオデールにも会い、下にも置かぬ態度で明日の花嫁を歓迎し、この出来の悪い息子を頼むとクドクドとお願いました。王子はもういたたまれないほど恥ずかしい思いをしましたが、感激屋のオデールは女王の言葉にいちいち頷きこちらこそよろしくお願いますと涙を浮かべて明日の義母と固く握手を交わしました。この二人はなかなか良いコンビのようです。

軽い食事が振る舞われ、お客が集まったのを見計らって中庭の急ごしらえの舞台で弦楽四重奏によるバレエコンサート「白鳥の湖」が上演されました。あり合わせの材料で子どもを指示してあつという間に舞台を仕立て上げたのもちろんルピネーです。

組曲版「白鳥の湖」は素晴らしい出来で、本舞台に負けないほど感動的なものでした。

本当は今日は準備と練習に費やして、明日の王子の誕生日日本番で上演するはずだったので、王子の放逐騒ぎで急ぎよ今日も上演することになり、主演のピアノはかなり神経をピリピリさせて文句を言っていたのですが、オデール（オデーレ）に

「まあいいじゃない。リハーサルのもりで伸び伸び思い切り踊りなさいよ」

と言われて機嫌を直しました。まあオデールの「まあいいじゃない」は彼女の口癖のようなものなのですが、ピアノにとって彼女

はもはや絶対的な存在になっていますから。

そのビビアナは特に気負ったところもなく実に素直に曲をなぞった踊りを披露しました。元々曲が素晴らしいので情感豊かでユニークな実に魅力的な踊りに仕上がっています。コスチュームもオデーレにならって、さすがにあそこまで大胆ではありませんが膝上までの薄布の裾のチュチュを着て、実にかわいらしく魅力的な妖精になっています。

お客は五十人ほどとそう多くはありませんが、この都会の新しい芸術を大いに楽しみ盛り上がりました。

その五十人に混じったロットバルトは、自分が主要登場人物であるこのバレエ物語を苦笑いしつつ素直に拍手を贈りました。

終了後のアンコールではオデーレが特別出演し、ビビアナと息の合ったデュエットを踊って喝采を浴びました。

王子とオデーレ（オデーレ）は建物の窓からこの舞台を見ていました。

二人ともペテロブラーグの劇場で見た舞台を思い出しながら見ていました。まだついこの間と言っていい日数しか経っていないのにもうずいぶん昔のように懐かしく思われます。バレエのことばかりでなく、二人で過ごしたこのひと月間はその前の全ての時間に匹敵するほど内容の濃い日々でした。

二人は手を握り合って舞台に見入り、最後の王子と妖精の娘が天に昇っていくシーンでは自然と共に涙を流しました。やはり自分たちの姿を重ね合わせずにはいられません。

ただ、

「僕は妖精の娘を裏切ってしまったんだ」

と王子がポツリと言いました。

オデーレはハツとして王子の手を放しかけて、ぎゅうつと力を込めて握り返しました。

振り向いた王子にオデーレは言いました。

「後悔しているの？」

王子は首を振りました。

「いいや。でも僕は悪魔の誘惑に負けて姫を裏切った卑怯な愚か者としてありとあらゆる人々から軽蔑され攻撃されるだろう。そんな僕を愛してくれる君に心からすまないと思う」

「そしてわたしは王子を誘惑して姫から奪ったみだらな悪魔の娘だわ。それでもかまわないわ、世界中でただ一人、あなたが愛してくれさえすれば」

「オデーレ・・・」

「駄目。これからはオデーレって呼ぶのよ」

二人は悲しく微笑み合って額を寄せ合いました。

舞台ではアンコールに応じてピアノとオデーレがまるで鏡に映ったような左右で見事にシンクロした踊りを踊っています。

オデーレは周りに誰もいないのに王子の耳に口を当てて洞窟の夜ピアノがオデーレのベッドに忍んできたときのことを囁きました。王子はその艶めかしい情景に顔から火が出るほど真っ赤になりました。

舞台では踊り終わった二人が盛大な拍手のなか互いを称えて抱き合っています。

舞台が完全に終了するとロットバルトは庭の一隅でオデーレを捕まえました。

「オデーレ、と言うのだそうだな？ おまえのような娘がいたことを父は嬉しく思うぞ」

ロットバルトは妹に対するのとは明らかに違った裏の顔でオデーレに笑いかけました。

オデーレはいつもの調子でフンと小馬鹿にしたような顔をしました。

「わたしは嬉しくもないけれどねえ。ただあなたがわたしの父親だつて言うのはよく分かるよ」

ロットバルトは愉快そうに声を上げて笑いました。

「おまえとは気が合いそうだな。どうだ、わしの元へ来ぬか？ あんな女のところにいてもつまらんだろう？」

「お断りよ。母さんのところにももう戻る気はないわ。母さんとあなたの夫婦喧嘩につき合うのはもうウンザリ。わたしはわたしで好きに生きていくわ」

「そうか。頼もしいな。さすがは我が娘だ。健闘を祈るよ。」

ところで、では自立した大人の女のおまえに相談なんだが」

と、ロットバルトは例の改名の件を話しました。

話を聞いてオデールは笑いました。

「わたしもそれに反対する資格はないわね。いいわよ、あの子のためだって言うならね。でも聞いておきたいわね、それは本当にあの子のため？ それとも、父さんの野望のため？」

オデールはきつい目で父を見つめました。

「母さんは父さんが預けられたあの子を乳母に任せきりにしていたのが突然かわいがるようになった、それは自分の野望を達成するために利用しようと考えたからだと言っていたけれど、わたしも父さんの態度の変化は知っているのよ。さあ、どうなの？」

ロットバルトはうんざりした目でオデールを見ました。

「まったくあの女め、どうしてこうも陰湿なことを考えるのか。双子の姉であるおまえを通じて妹の目と耳を使ってわしの様子をうかがっていたのだろう？ ああ、嫌だ嫌だ。」

おまえもその目で見ていたのなら知っているだろう、子どもとはいかに手の掛かるものか？ ましてわしは生まれて間もないオデールを突然押しつけられたのだぞ、困惑して腹が立って拒否して当然だろう？ だが、自分の子だ、やはりかわいくないわけがない。無垢な笑顔を見れば情がわくのが自然だろう？ わしだってあの子の親になるためにそれなりの時間と学習が必要だったのだ。ずーっと腹の中におまえたちをばぐくんでいた母親とは違う」

「つまり、オデールは我が子としてちゃんと愛している？」

「当然だ。だがおまえもわしに似た性質なら理解できるだろうが、わしはこういう人間だ、娘の愛し方も母親の愛し方とは違う。あいつこそおまえとオデールを利用しているではないか？ あいつに娘のことでやかく言われる覚えはない」

オデールはおかしくて笑いました。今の父は本当に人間らしく見えます。

「信じましょう。まあ、わたしはどっちでもいいの、あの子が幸せならそれでね」

「感謝するよ。あの子の父親としてね」

「ただ一つお願いがあるんだけど。」

それでブルーシアが思い通りになるんだったらユークリナのことにはあきらめてくれないかしら？ つまりオデット姫のことはってこと

「ロットバルトは嫌そうな目でオデールを見ました。」

「嫌だつて顔ね？ ま、一応言ってみたの。クラリスに頼まれたんでね」

「そういえばあのお嬢さんは姿が見えないな」

と、ロットバルトは周りを見渡して意地悪な笑みを浮かべました。「おまえも一人前の大人なら父の幸せも思ってくれよ。わしは国も欲しいが姫も欲しいのだ」

オデールは肩をすくめました。

「ま、お好きなように。でも、あまり無茶はしない方が身のためよ。父さんの方が圧倒的に強いみたいだけれど、あの子は底知れないところがあるわ。どうも怪しいのよね、実力をわざと隠しているように」

ロットバルトは平気を装っていましたが内心ドキリとしました。オデールの勘は信憑性があります。

やはりこのまま殺してしまった方がいいか？

と、考えました。

そこへ着替えたビビアナがやってきました。

オデールは手を上げて呼んで、ロットバルトに紹介しました。

「これがわたしの父よ」

「初めましてプリマドンナ。いやあ実に素晴らしい感動的な舞台でした」

ビビアナは差し出された手をおっかなびっくり握りました。

「だいじょうぶよ。父は美人には優しいから。でもお父様、この子は駄目よ」

オデールは握った手を離させてビビアナの手をだいじに自分の胸に握りしめました。

「この子はわたしのもの。わたしはこの子といっしょに生きていくって決めたの」

ビビアナはポツと嬉しそうに頬を染めました。

ピエトロ氏が遠くからそんな二人の様子を例のこの世の終わりのような深刻な顔で見えています。一時はオデールといい雰囲気だったようですが、残念ながらこの恋は失恋に終わりそうです。

「それとね、ビビアナ。実はわたしの本当の名前はオデーレだっていうことは、あなたにだけは話したわよね？」

オデールはいたずらっぽいでロットバルトを見ました。

ロットバルトは苦笑いして、

「これも母親の影響か」

とぼやきながらも、

「娘のことをよろしく頼みますよ」

と笑顔でビビアナに挨拶しました。

満月が中空に登って眩しい白銀の光を放ちだしたその頃、クラリスはたいへんなことになっていました。

## 第40章 迫る刻限

時間をさかのぼって、ユークリナの宮殿に捕らわれたオデット王女のお話。

のんびり二度寝して遅い朝食を取って昼食にはワインをねだって断られて、夕方まで何もすることなくいたら過ぎました。

給仕は前回と同じ若い女中でしたが、相変わらず愛想がなく、そもそもこの宮殿の主人が足かせをされてベッドの脚につながれているというのになんとも思わないというのが異常ですが、どうせ恩あるロットバルトに何事か吹き込まれているでしょう。

ドアの外には常に屈強な衛士が二人見張りに立っていました。

よいしょと重い鎖を引きずって窓に寄りかかると下の湖には白鳥に取って代わって黒鳥たちが我が物顔で悠々泳いでいます。窓の外の手すりや周囲の段になったところにはつくきカラスどもが何羽もとまっています、王女を見つけると首をクリクリ動かしてバカにしたように鳴きました。王女も負けずにベーツとやってやりました。

王女、いえ、王女の体を借りたクラリスは当然ここを抜け出すつもりでいました。ただ昼間のうちに逃げ出しても宮殿を出たとたん、いえもしかしたら部屋を出たとたんに白鳥に戻ってしまうかもしれない。そうになったらこの警戒の中逃げ出すのはさすがに無理でしょう。

というわけで、夕方になり、大きな黄色い満月が東の空に現れ、だんだん登っていつて白銀に輝き出すのを待って行動を開始しました。

ガシャンと派手にガラスの割れる音がして見張りの衛士二人は顔を見合わせ、鍵を開け、慎重に中の様子をうかがいました。

窓ガラスが一枚割れています。

灯りはありませんが大きな窓から月光が差し込んで床を照らして



います。

その床にオデット王女がうつぶせに倒れています。

足元にキラリと光る物があります。そしてその周りをひたひた黒い液体が広がっていつています。

衛士たちはギョツとしました。黒ではありません、赤です。オデット王女が血を流して倒れているのです。

おそらく窓ガラスを叩き割って尖った破片を手に入れ、なんとか足かせを外して逃げようとしたのが誤って自分の足を深く切ってしまったのでしよう。

これはたいへんだと部屋に駆け込もうとして、「おい、待て！」と一人が立ち止まりました。

「ロツトバルト様に何があっても絶対に一人はドアの前を動かなくつきつく言われたらどう？ 俺はここにいるからおまえ姫の様子を見てこい」

と、一人が残って一人が王女の様子を見に来ましたが、「姫、オデット姫」と声をかけながら足かせの足を覗き込んだ衛士は思わず「わっ」と声を上げました。バツクリ開いた傷口から真っ赤な血がドクドクと流れ出しています。

衛士は大急ぎでベッドからシーツを剥いで応急処置の包帯を巻いて、

「駄目だ！ 急いで医者を呼べ！ このまま姫に死なれたら俺たちもどうなるかわからんぞ！」

と叫びました。

こうなっては外の一人も落ち着いていられません。「分かった。絶対に姫のそばを離れるなよ！」と言って「おい、医者だ！ 医者を呼べ！」と大声でわめきながら走っていきました。

部屋に残った衛士は

「おお、姫よ、なんてバカなことをしてくれたんだ！ ああ、俺たちやロツトバルト様に何されるかわからんぞ」

と嘆きましたが、その首にすーっと白い手が伸びていつて耳の後

る辺りをきゅつと指で押しました。衛士の意識は一瞬で飛び気を失ってドサツと倒れました。

オデット王女はむっくり起き上がりました。

「あなたたち、ありがとうね」

昼食のチーズで釣って台所から赤ワインをくすねてきてくれたネズミたちにいたずらっぽいな笑顔でお礼を言いました。

床に流れた血は赤ワインでした。もちろん足にケガなんてしていません。妖精の祝福の口づけの魔力を使って得意の幻覚を衛士に見せたのです。

「つたく、あいつめ。鍵を預けていないのね」

王女は衛士のあちこちのポケットを探りましたが足かせの鍵はありません。

「仕方ない」

王女は額に力を込めて魔法の火花を発し、足かせを破壊しました。「これで魔力はほとんど使ってしまったわね」

ドアを駆け出し、集中して勘を高め、人のいない廊下、人のいない部屋を通ってなんとか広い宮殿を駆け抜けていきます。

しかし王女の脱走はすぐに宮殿中に知れ渡り、特にナージャのつなされた既舎は警備が厳しくなり、王女搜索の手もじわじわ王女に迫ってきました。

「仕方ない。いったん外に逃げましょうか」

王女はせっかく逃げてきた道を元に戻りだしました。

向かうのは最上階の王の私室です。

実はここに地下に下りて外へ通じる秘密の隠し通路があるのです。出口は宮殿からかなり離れてしまいましたが、この際仕方ありません。

幸い王女は下に逃げたとばかり思われてこちらの方は警備が手薄でした。

王女は警備の目をかいくぐり王の部屋に飛び込みました。  
が、

そこには大勢の衛士が潜んでいました。

衛士たちは王女が飛び込んでくるとわらわらと現れて王女を取り囲み、ランタンに火を入れて掲げました。

王女は思わずちつと舌打ちしました。魔力が残り少ない上にプロの衛士たちが息を潜めていたので気配がつかめなかったのです。

「わたしがここに来るとどうして思ったの？」

隊長が答えました。

「姫が消えたらきつとここに現れるだろうとロットバルト様がおっしゃられましたな」

どうやらロットバルトは秘密の隠し通路のことも承知だったようです。

その隠し通路は隊長が背にしている大きな暖炉の裏にあります。

絶体絶命です。

「剣をよこしなさい」

「は？」

「わたしはどうしても行かねばならない所があるのです。それを邪魔しようと言うならこのわたしを殺しなさい」

「そのような無茶を」

「この国の王はわたしですか！？ それともロットバルトですか！？」

隊長はニヤニヤ子どもをあやすような顔をしました。

「姫。姫はただいまご病気で頭がどうかしておられる。国のことはロットバルト閣下にお任せになって、さあ、どうか寝室に戻ってお休みになってくださいませ」

王女は肩をすくめました。

「こりゃ駄目ね」

目を閉じ、最後の魔力のありつたけをロットバルトの私室の鳥かごに閉じこめられている火花の精ヴァイオレットに送りました。

たすけて！

とメッセージを込めて。

「さあ、まいりましょう」

と隊長が王女の手を取ろうとした、その時、

「この無礼者！」

突然勇ましい女の声が響いて、あっと思ったときにはすでに数名が峰打ちでその場にもんどり打って倒れていました。

「お、おまえは！？」

暖炉の裏の隠し扉から現れたのは、なんとあの近衛女官レスリーでした。

レスリーは怒りにみなぎる力で次々手練れの大男どもを剣で叩き伏せていきました。

あっという間に残るは隊長のみ。

「そら、剣を構える時間くらいくれてやる。この不忠義者のうすのろめ」

「お、おのれえー・・・」

隊長は剣を抜いて斬り合いましたが、ずうつと不自由な白鳥の姿に耐えてきていいかげん堪忍袋の緒が切れかかっているレスリーの凄まじい打ち込みに押される一方で、素早い動きにあっさり肩と胸を続けざまに剣でぶん殴られて、うおつと声を上げてぶっ倒れました。

「レスリー！ あなたって最高だわ！」

王女は剣を納めたレスリーに駆け寄り、大喜びで手を握りしめました。

女中のジジも出てきました。

「ああ、あなたも無事だったのね！ よかったわ！」

「ご心配をおかけしました。我ら二人半死半生の状態で湖に浮いていたのですが、翌日になってあの熊の親子が岸に引っ張り上げて介抱してくれたのです」

ああ、なんと律儀なことか。あの母親熊は白鳥たちを安全な場所に逃がして帰ってくる道すがら、鳥たちの騒がしい様子を気にかけてわざわざ遠くの湖まで様子を見に来てくれたのです。そうでなければ

ば二人は確実にあの世に旅立っていたでしょう。

「そしてケガをいやしながら鳥どもの様子を見張り、いざというときのために隠れて過ごしてきたのです」

そしてロットバルトが王女をさらってきたのを見つけ、王女救出のため月の力で人間に戻るのを待って王女以外では自分しか知らないはずのこの秘密の抜け道をさかのぼって部屋に出ようとしたところだがたまたま先ほどの王女と隊長のやりとりに行くわたのです。

「さすがは我が女王。あの場であの気高き態度、感服いたしました」  
王女は肩をすくめました。

「ねえー。あんなセリフ言うなんて自分でびっくり」

三人は顔を見合わせてクスツと笑いましたが、レスリーが顔を引き締めて言いました。

「さあ、急いでここを脱出しましょう」

「ナージャがいるわ。普通の馬では月が落ちるまでに王子の城に着けないわ」

「それではわたしが。王女たちはここでお待ちを」

レスリーが行きかけたとき、

「待つて」

王女は気配を感じて窓に駆け寄りました。

「おい、王女様ー！」

なんと、ヴァイオレットがナージャの頭に乗って意気揚々手を振っています。

王女は窓を開けて手を差しのばしました。

「ヤッホー！」

ヴァイオレットが大得意の大喜びで飛び込んできました。

「あなたあの頑丈な檻からよく逃げ出せたわね？」

「いやー、必死になればなんとかなるもんだなー」

王女の助けを求めるメッセージとなけなしの魔力を受け取ったヴァイオレットは俄然燃え立ちました。もちろんこんな所に閉じこめたロットバルトへの怒りもあります。

おりやつ、と重い鳥かごを持ち上げて床に落とし、壁にぶつけ、めちやくちやに暴れ回りました。王女を捜していた衛士が何事かとドアを開けた隙に廊下に飛び出し、そのまま厩舎へ全力で飛びました。

厩舎に窓から飛び込むとナー ज्याを見つけ、かごを蹄で蹴り破ってもらい、柵を開き、慌てて駆けつけた衛士どもを火花でびっくりさせてナー ज्याと共に飛び出しました。

そして王女の霊波をたどってここへやってきたわけです。

「ヴァイオレット。あなたもやる時はやってくれるのね！ 見直したわ！」

王女はヴァイオレットに感謝の口づけをしました。

「さあ、脱出よ！ いざ、ベルーシアの湖へ！」

と、三人がナー ज्याの背に乗り移ろうとしましたが、ロットバルトの手下の黒鳥どもがナー ज्याの白い姿を見つけて集まってきました。

レスリーが王女一人をナー ज्याの背に乗せて言いました。

「残念ながら三人乗ってはさすがにスピードが鈍るでしょうし身動きが取れません。どうか王女お一人でおいでください。さあ、急いで！」

あなたたちは、と言いかけて、王女はレスリーの強い決意の顔に頷き返しました。

「待っててね。あなたたちの努力は決して無駄にはしないわ。必ず呪いを解いてみんなを人間に戻してあげるからね」

黒鳥たちに追いついて立てられながら王女を乗せたナー ज्याはヴァイオレットと共に宮殿を飛び立ちました。

「では我々も退散といくか」

レスリーとジジは再び秘密の隠し通路に消えていきました。

それからしばらく後、倒れていた衛士たちが気がついて出ていった王の部屋に秘密の扉からまた一つ黒い影が現れました。

灰色の魔女オデレーヌです。  
オデレーヌは宮中の慌ただしい様子にほくそ笑み、静かに部屋を出ていきました。

「これはこれはルピネー閣下。ややや、これはまたずいぶんとスリムになりましたな」

「ったく、誰のせいだよ」

ルピネーはにこやかに近づいてきたロットバルトを睨みました。

バレエの上演終了後中庭はテーブルが出され、大皿の料理がたくさん運ばれ、立食パーティーの会場になっています。

「てめえなーにが、勝負は姫との結婚で付ける、だよ、邪魔ばっかりしやがって」

「おやおや？ わたしは妨害はしないなど一言も言ってますんが？」

ロットバルトは、ささどろろと強いカクテルのグラスを渡しました。

「そう怒らずに。それだけお痩せになればおしゃれは自由自在ですよ。なんならお詫びにわたしの服を何着かさしあげましょうか？」

「てめえのちやらちやらした服なんざ着れるかよ」

ルピネーは相変わらず濃い紺色の地味なコートを着ていますが、すっかり痩せてしまったのでダブダブです。

「ところで、クラリス嬢の姿が見えませんか？」

「ああ、そうだな」

ルピネーはそらっとぼけていますが、クラリスはあれほど楽しみにしていたバレエの舞台の時もいませんでした。王女と会うために湖に向かったのですが、クラリスもさすがに相当焦っているようです。

ロットバルトはルピネーの顔色を探ってこっそり笑いました。

「王子が戻っているのはご存じですかな？」

「ああ、女王から聞いたよ」

ルピネーはジロリとロツトバルトを睨みました。

「やつぱりおまえの工作か？」

「ええ、まあね。あのオネーギンとかいういけ好かない宝石商に大金を支払いましたよ」

オネーギン氏はロツトバルトから金塊を受け取ると大喜びで契約書を渡し、部屋に閉じこまりました。明日さつそく人を雇ってラピスに帰るつもりなのですが、あんな大金を持ち歩いて山賊などに襲われなければよいのですが。

「感謝していただきたいですな、あなたの肩代わりですぞ」

「王子に肩入れしてどうする？ 今さら娘のオデールと結婚させようなんて思ってるんじゃないかねえだろうな？」

ルピネーも王子の婚約の件はまだ知らされていません。女王がびつくりさせてやろうとないしょにしているのです。

「王子もまさかそこまで恥知らずじゃねえだろう。第一オデールは、  
ルピネーはピアノと仲良く談笑しているオデールを指さしました。  
た。」

この双子姉妹のこともまだクラリスから聞かされていませんでした。クラリスも自分のことで精一杯でこの込み入った話をする気になれないでいたのです。

ロツトバルトは哀れっぽくルピネーを見ました。

「ルピネー殿。あれがわたしの娘だということを忘れられてはいけませんな」

「オデールが王子との結婚を承知するって言うのか？」

ルピネーにはとうてい信じられません。

ロツトバルトは余裕綽々微笑みました。

「さあ、そろそろ本日の主役がおいになるようですよ」

ルービン卿が「皆さん、どうぞご注目を」と食事をしたりお酒を飲んだり談笑したりしているお客さんたちに呼びかけました。

場が静まるとルービン卿は女王様に場を空けました。



女王は前に出ると上機嫌で言いました。

「皆さま、本日は遠路はるばる我が息子ジークフリートの誕生日前夜の集まりにお越しいただきまことにありがとうございます。いろいろと手違いがございまして皆さまにたいへんご迷惑とご心配をおかけしてしまいました。まことに申し訳ございませんでした。しかし、皆さま、ジークフリートは皆さまに祝福いただいたこの素晴らしい夜に素晴らしいご報告をさせていただくことができます！さあ、ジークフリート、皆さまにおまえの選んだ素晴らしい婚約者をご紹介なさい！」

本館から中庭への下り口が白いカーテンで飾られ、階段にろうそくが並べられています。

その幻想的に浮かび上がった道をジークフリート王子は花嫁衣装とも見える白いドレスを着た女性の手を取ってゆっくり下りてきました。

ルピネーはさすがに目を丸くし、オデルと見比べました。

他のお客たちも同様です。

「皆さま、混乱させて申し訳ない」

ロットバルトが申し訳なさそうな、得意そうな顔で両手を上げて注目を集めました。

「わたしからご紹介申し上げましょう。我が愛する娘、オデルです。そして先ほど皆さまに踊りを披露いたしましたのはその双子の姉オデルでございます」

オデルはスカートをつまんでちょこんと挨拶しました。

そしてオデルは、ろうそくの光を瞳にいっぱい集めて、うるうる揺らめかせていました。

オデット王女を乗せた天馬ナージャは全速力で空を駆けていました。

そのしっぽに掴まって火花の精ヴァイオレットが追いかけてくる

黒鳥やフクロウたちに火花をありつたけ投げつけています。

オデット王女はさすがにもう何もできないで振り落とされぬように必死になってナー ज्याの首にしがみついています。

フクロウはホオーホオーと森の手下どもに召集の合図を送りました。眼下の木々から続々鳥たちが集まってきて夜目の利くフクロウ隊長の指示で目立つナー ज्याに攻撃のくちばしを迫らせていきます。

「あと少しよ、お願いナー ज्या、頑張つて！」

すでにユークリナの領地を抜けブルーシアに入っています。目指す湖の目印である城ももう見えてくるはずです。

しかし鳥は木のあるところならどこにでも潜んでいます。ホオーの鳴き声に呼応して後から横から前からどんどん空に登ってきます。

主力はやはりあのにっくきカラスどもです。

「わーん、バカあ、だからあたいらを合体させろつて言っただよおー」

ヴァイオレットが鳥どもに火花を投げつけながらそのあまりの数の多さに泣きそうになってわめきました。

「ええ、わたしも反省してるわよ。だから頑張つて！」

すっかり魔力がなくなつてしまつと人間の体とはなんと不便なのだろうと恨めしく思つてしまいます。

ついに横に並んだカラスどもが徐々に距離を縮めて迫つてきました。

「こらつ、あんたたち、魔女とカラスは昔からお友だちでしょう？」

王女は口で攻撃しましたがカラスはカアと笑っただけでした。

カラスのくちばしがナー ज्याの羽根を一枚引き抜きました。

ナー ज्याはたまらず上に跳ねて速度が鈍りました。あつという間にカラスたちが群がってきます。

ようやく城が遠くに見えました。

「ナー ज्या！ スペシャルハーブのサラダをご馳走するから頑張つて！」

ナージャも必死でカラスどもを蹴散らし駆けました。

王女は前方の城にふと気配を感じて顔を輝かせました。

「ナージャ、ヴァイオレット、目をつむって！」

二匹が慌てて目をつむると城の方からヴァイオレットの火花など問題にならない強烈な真つ白に輝く光の玉が飛んできてナージャの脇をすり抜けていきました。

まるで空の満月が目の前に飛んできたような強烈さに鳥たちは悲鳴を上げて逃げまどい、仲間どうしぶつかって大混乱になりました。白銀の光の玉は三つ四つと続き、鳥たちはすっかり蹴散らされてしまいました。

「ヒュー、さつすがー！」

王女は嬉しさに思わずお行儀悪く口笛を吹きました。

「クラリスか？」

ヴァイオレットが王女の肩に登ってきて訊きました。

「さあ、どうかしらね？」

王女はいたずらっぽく言って教えてくれません。

城はどんどん近づいてきて、ついに、麓の湖のきらめきが見えませんでした。

こちらの森にも当然多くの鳥たちが潜んでいるはずですが、先ほどの光の玉を恐れてでしょうか、一羽も飛び立ってきません。

「あっ、クラリスだ！」

ヴァイオレットが叫んで指さしました。

白鳥たちがクラリスと出会ったあの岸でクラリスがナージャを見つけて手を振っています。

「ゴール！」

ナージャの大きな翼がバサリと湖に派手な波紋を描き、その上に降り立ちました。

トコトコ歩いていって岸に王女を下ろします。

「お待たせ、王女様」

と言ったのはオデット王女の方です。

「よく、戻ってくださいました」

よほど心配したのでしょうか、クラリスはすっかり力の抜けた崩れるような笑顔で王女に言いました。

「え？ なになに？」

二人の入れ替わりを知らされていないヴァイオレットはちんぷんかんぷんで二人の顔を見比べました。

ナージャはわたしは分かっていたわよという風にヴァイオレットを小馬鹿にして笑いました。

王女は、

「さ、早く元に戻りましょう。あっちの方がなんだか怪しい雰囲気なのよね」

と言って城の方を顎でしゃくりました。

## 第41章 真実の恋人たち

オデット王女とクラリスは額を合わせて目を閉じました。

しばらくそうしていると合わさった額がかすかに白く光りました。さらにしばらくたってゆっくり目を開けると二人は離れました。

クラリスは賢そうな顔でじいっと自分の頭の中を探っていました。

「よし。正常に元に戻れたようね。王女様、だいじょうぶですか？」  
「ええ・・・」

オデット王女もちよつとぼうつとした夢から覚めたような顔ですがしっかり頷きました。

「えーっ、なんだよー、二人は中身が入れ替わってたのかー？」

ヴァイオレットが素っ頓狂な声を上げました。

「道理で、ずいぶん乱暴なお姫様だと思った」

うんうんと腕を組んで納得するヴァイオレットを王女は困ったような笑顔で見ました。

「でもさー、あたいにまで黙ってることないだろー？」

「敵を欺くにはまず味方から。だって、あんた口軽いんだもん」

ブーツとむくれるヴァイオレットにクラリスは笑って、

「あなたには感謝しているわよ。ま、細かい解説は後でね。今はお城に急がなくちゃ。ところで王子様との仲はどうなったのかしら？」

とこのひと月間のことを一生懸命思い出しました。

「ふうーん、なるほどねー、いろいろあったんだあー・・・」

難しい顔で感心するクラリスを王女は申し訳なさそうに見ました。

「すみません。せっかくこんな機会を作ってくださいだったのにご期待に添えなくて・・・クラリスさんにもずいぶん危険な目に遭わせてしまったようすわね」

すまなそうにうつむく王女にクラリスは「気にしない気にしない、ぜーんぜん楽勝よ」と笑いました。

「とにかくお城に行きましょう。どういうことになるか、しっかり

見届けましょう」

二人は再びナー ज्याの背にまたがり、お城に向かって飛び立ちました。

ナー ज्याを城壁の上に降りさせ、クラリスはオデット王女を抱きかかえるとポーンと数メートル下の地面に飛び降りました。王女は悲鳴を上げましたが、二人は地面に激突することもなくポーンと空気のマットに弾かれるようにして、クラリスはそのまま中庭への通路に猛ダツシュしました。衛士が驚いて反射的に槍を構えましたが、クラリスの指の一振りです上に跳ね上がりました。

そうして二人が中庭に駆け込んだとき、

ロットバルトが階段から下りてきたジークフリート王子とオデールに言いました。

「さあ、愛し合う若者たちよ、婚約の誓いの口づけを」

王子とオデールは言われるままに見つめ合い、王子はオデールの肩を抱き寄せると顔を寄せ、オデールに口づけしました。

お客たちから祝福の拍手が贈られました。

王子とオデールは口づけの感動を味わいながらゆっくり目を開き、顔を離しました。

そして見つめ合う視線の端にハッとオデット王女とクラリスの姿を捕らえ、一瞬にして甘い感動が消え失せて真っ青な顔を向けました。

王女はすっかりあきらめたように目を閉じ顔を伏せると、一呼吸置いて顔を上げ、二人に軽く微笑んで、背を向けました。

王子は王女の歩み去る後ろ姿を冷水を浴びせられたような思いで見送りました。

クラリスは王子に失望したというように頭を振ってみせ、王女の後を追いました。

王子はすっかり体の感覚が消え失せて立ち尽くしました。オデールがギュツと王子の手を握りました。

王子はすっかり呆けたような顔でオデールを見ました。

オデールはきつい目で王子を見つめています。

オデールは言いました。

「あなた一人のせいにはさせないわ。あなたはわたしだけを見ていて」

王子はかろうじて小さく微笑みました。

「ああ、そうだったね。僕たちはもう決心したんだったね」

オデールも弱々しく微笑みました。

「わたしは幸せよ。世界一幸せだよ」

王子はオデット王女には申し訳ないけれどこの人こそが自分の真実の愛を捧げる相手なのだと再確認しました。

オデット王女は歩いているうちにふらふらしてきて石壁にもたれてずるずるとくずおれました。

うっうっ、と嗚咽がせり上げてきました。

別に王子に振られたことがショックなわけではありません。王子とオデールが結ばれることは自分でも望んでいたことです。少なくともクラリスの体の中にいたときには。それなのにこうして自分の体に戻ってきてみるとそれまでやはりどこか他人事のように感じていた自分の身の上に対して感情が生々しくわき起こってきます。ただもう自分が惨めで、仲間たちを救ってやれないのが申し訳なくて、何がなんだか分からなくて、暗い感情が溢れかえってきてどうしようもないのでした。

「王女様」

クラリスが優しく背中をさすりました。

「なんと申してよいやら分かりませんが・・・」

クラリスは逆に子どもで王女の複雑な心境を推し量れないでいるのか、あまり深刻でもない風に言いました。

「えーと、とにかく元気を出してください。まだ希望がなくなつたわけではありません」

背後から、クラリス、と小さく呼ぶ声がありました。

クラリスが振り返ると、

「あら、モデスト兄さん」

王女の背がギョツと震えました。

モデストは王女の様子を気にしながら遠慮がちに近づいてきました。

「クラリスちゃん。どこへ行っていたんだい？ バレエの時もいなかったよね？ 心配したんだよ」

心配というよりがっかりしたという感じです。モデストは誰よりもクラリスに見て欲しかったのですから。

「ああ、ごめんなさいね。ちょっと用があつて」

あつけらかんと行ってしまつてからモデストの怪訝な顔にしまつたと思ひました。

王女が立ち上がつて涙を拭いてこちらを向きました。

「わたしは湖に戻つて時が来るのを待ちます。クラリスさん。本当にありがとうございます。あなたのご恩は生涯忘れません」

それから涙に濡れた目でモデストを見て、

「モデスト様も。どうかいつまでもお元気で。バレエの成功をお祈りしております」

と頭を下げてふらふらおぼつかない足取りで歩いていきました。

「オデーレさん、だいじょうぶかな？ まさか王子がオデーレさんと婚約するなんて・・・って、あのオデーレさんはあのオデーレさんじゃないんだよね？ で、オデーレさんが本当はオデーレさんで・・・、ああもう、ややこしい」

クラリスはそうかと思ひました。モデストはあれがオデット王女とは知らず、いっしょに旅したオデーレだと思つているのです。

モデストはオデーレと結婚するとはかり思つていた王子の不実にすっかり腹を立てているようです。



ふらふらの王女の後ろ姿を心配そうに見送って、

「本当にだいじょうぶかなあ……。でも、彼女あんなに綺麗だったかな？ 失恋のせいかな？」

と、首を傾げています。

クラリスはモデストのそんな横顔を眺めつつこのひと月の記憶をよーく思い出しました。

大きいため息をついて、

「なるほどねえ……」

と呟いて、ふと中庭の方を見ました。

大勢のお客に囲まれてお祝いを言われているロットバルトが目だけこちらを見ています。

クラリスは腹が立って思い切りアツカンベーとやってやりました。ロットバルトはほんの一瞬忌々しそうな顔をして、クラリスはちよつぷり気分が晴れました。

「モデスト兄さん、ちよつと待っててね」

と言って王女を追って駆け出しました。

クラリスはグルグル回る外の通路で王女を捕まえるといっしょに外に向かいました。

王女は精神的に疲れ切って何も話す気力がないようです。

一方クラリスは無神経とも思える気安さで王女に尋ねました。

「王子が駄目になった以上ロットバルトの求婚を受け入れるしかありませんね。どうします？」

「それは……」

王女はクラリスはこんな馬鹿な子だったかしらと恨めしく思いながら大儀そうに言いました。

「それはできません。仲間たちには本当に申し訳ありませんが、わたしはあなたのお母様に魂は永遠であることを教えられました。仲間たちを救うためとはいえ自分の魂を汚したくはありません」

「なんだかロットバルトもそんなに嫌な奴じゃなさそうですね」

ねー？」

「それでも、わたしにとってやはり親の敵です」

クラリスは王女の怒気を含んだ声にちよっと肩をすくめて黙りました。

やがて長い通路を抜け、城門を出ました。

しばらく坂道を下ったところでクラリスはテレパシーでナー ज्याを呼びました。

白い天馬はすぐに二人のとなりに降り立ちました。

「王女様、どうぞこの馬をお使いください。お仲間の所へお連れします。レスリーとジジだけはかわいそうだけど今は仲間外れね。あとで謝りましょう。ナー ज्या、頼むわね」

クラリスは王女をナー ज्याに乗せると空に飛び立たせました。

白銀の月はそろそろ天頂に登り切ろうとしています。

ナー ज्याにくっついてきていたヴァイオレットがナー ज्याを見送って心配そうにクラリスに訊きました。

「鳥たちはだいじょうぶか？ あたいが付いていった方がいい？」

「鳥たちは心配ないわよ。ほら」

クラリスが指さすとナー ज्याの後をもう一つの月のような眩しい白銀の光が追っていきます。

「あれ？ あれってクラリスじゃなかったの？」

「どうやら違ったようね」

「誰だろっ？」

ヴァイオレットは腕を組んで考えました。

「ほら、置いてくわよ」

クラリスが城に向かって戻り始めて、ヴァイオレットは怪しみながら後を追いました。

歩きながら、

「わたしとオデット王女は魂を交換していたわけ。交換するときにちゃんと頭に馴染むようにしていたからお互い相手の記憶も残って

いるし、行動におかしな所もなかったはずよ」

「けっこう変だったけどな」

「お黙り。まあ、たしかに王女様もこの体にはずいぶん戸惑ったみたいね。何しろ生まれ始めて始めて魔法なんか使うんですもの。でもずいぶん頑張ったみたいね。たいしたものだわ」

「なあ、魂ってそんなに簡単に交換できるものなのか？」

「それ自体は案外簡単よ。だってほら、悪霊が人に取り憑くことだってあるじゃない？」

魂ってというのは純粹に『物』なのよ。

魂は永遠って言うけれど、あれは嘘よ。ただ肉体よりうんと強くて柔軟なだけ。老いて死ぬっていうメカニズムがないから何かアクシデントがあつて壊れない限りは確かに永遠ね。

魂は一度生まれるとたいいてい何世代にも渡つて生まれ変わるの。より良い魂に成長して天国に行くためにね。逆にどうしようもなく墮落して地獄に堕ちることもあるけれどね。残念ながらそういう魂の方が圧倒的に多いかしら？

魂には生まれてから何世代も生きてきた記憶が全て書き込まれているの。ただそれは言葉にならない簡略化した記号で書かれていて、魂自体にそれを読みとる機能はないの。魂はほとんど記憶だけの固まりね。幽霊が馬鹿の一つ覚えでおなじことばかり繰り返して言うのはそのせいね。記憶を再生する機能が極端に少ないからごく限られた行動しかできないのよ。ま、例外はなんにでもあるけどね」というのはかつての親友ベラのことでしょう。

「魂ってというのは環境にすごく影響されるのよ。記憶を再生しやすい環境に居ればほとんど生きている人間と同じ行動が取れるわ。分かる？ あなたたち妖精みたいなもののことを言ってるのよ。」

人間の肉体がそもそもそう。魂が前世の記憶を持っていても人間の脳にそれを再生する機能はないわ。まあ、稀に前世の記憶を思い出しちゃう人もいるけれど。それは例外。

魂に記された記憶を完全に読みとることができるのはあの世の特

別な場所だけでなんでしょうね、わたしもさすがにそこまで詳しくは知らないけれど。

魂にもいろいろあつてね、もちろん人間と動物の魂も別だけど、ま、これもたまに混同することがあるわね。でも間違つて人間の魂が動物の体に入り込んでしまつても人間の行動はできないし、動物の魂が人間に入り込んでても人間の行動はできないわ。

人間と人間の魂もそうよ。

例えばわたしとオデット王女の相性が最悪に悪かったら魂を交換してもとうていまともな人間にはなれなかつたわね。わたしたちはかなり相性も良くつてお互い高いレベルの魂をしていたからまずまず上手くいったけれど、それでも完全にお互いの脳を使いこなすことはできなかつたわ。オデット王女のわたしが完全に高度な魔法を使いこなせなかつたのはもちろんだけど、わたしだつてこの体に戻つてきてようやく理解できたこともあるし、逆に理解できなくなつてしまったこともあるわ。

人間つてというのは魂と肉体が揃つて初めて人間と言えるのよ。魂も肉体もお互いに影響し合つて、お互いに制限されているのよ」

クラリスの早口の解説をヴァイオレットは半分も分からずに頭が痛くなつてきました。

「ようするに、自分はすごく頭のいい魔女だつて自慢したいんだらうっ？」

「そういうこと」

などと冗談を言っているうちに城の中庭に戻つてきました。

モデストはお客のご婦人に掴まつて話し相手にされていました。

クラリスはモデストの所に行く前にふとアナトリーを見つけて挨拶に向かいました。

「ああ、クラリスお姉さま」

アナトリーはずっと姿のなかつたクラリスに安堵の声を上げ、いっしょのヴァイオレットを見つけて歓声を上げました。

「アナトリー」

クラリスはニコニコし過ぎるくらいの笑顔で言いました。

「あなたはモデストお兄様よりうんとうーんといい男にならなくて  
は駄目よ。いいわね」

なんだか押しが強くてアナトリーはちょっぴり脅え気味に「はい」と答えました。

クラリスはモデストに近づいていくと

「さ、お兄様、まいりましょう」

と袖を掴んで有無を言わず連れ出しました。

クラリスはモデストを城壁の上に連れ出しました。

はるか広がる景色を眺めて、はあ、とため息をついて、モデスト  
に向き直りました。

「モデスト兄さん。これから兄さんがある人に会わせるけれど、ど  
うぞ正直な気持ちでその人と会って欲しいの。分かった？」

「あ、ああ・・・」

モデストはさっぱり分かりませんでした。がとりあえず頷きました。  
「では」

クラリスは目を閉じて深呼吸するとカツと目を開き魔力を集中し  
ました。

すると、背中に白い光が走り、バサリと、純白の大きな翼が生ま  
れました。

モデストもヴァイオレットもびっくりしました。

「君、まさかそれで空も飛べるのか？」

「ええ。これでも空を飛ぶベテランなのよ」  
「いたずらっぽく笑って、」

「さあ、行くわよ」

とモデストを抱えて宙に浮き上がりました。

バサリバサリ浮かんでいって、モデストは宙ぶらりんの頼りなさ  
に思わず震え上がりました。

クラリスは北に向け徐々にスピードを上げてやがてビュービューものすごいスピードで飛んでいきました。

「おーい、待ってよー！」

ヴァイオレットが付いていけずにわめきました。

モデストも恐ろしさに叫び出したい気持ちでした。

先に北の湖に到着していたオデット王女は仲間たちに王子がロツトバルトの娘と婚約して王子の真実の愛の誓いはなくなったことを重い気分で話しました。

人間に戻っていた仲間たちは、やっぱり、と肩を落とし、王子の不実を恨み、もはや人間に戻る望みが絶たれたことを思っしくしく涙をこぼしました。

みんなの悲しみを見ると王女の心が再びぐらつきました。

やはりロツトバルトの求婚を受け入れるべきであろうか？

この世一代限りの試練と思えば地獄の辱めも耐えることができるだろうか？……

ところが、

「だから言ったのよ！」

と言ったのは子どもたちの中のジェニー。

「あんなへなちよこ王子様当てにならないって」

「そうよそうよ」

と今度はキャシー。

「恋に妥協は禁物よ！」

ドミニクまで、

「姫様にはもつとふさわしいかつこいい王子様がいるわよ」

とこの期に及んで目をキラキラさせて言います。

王女は三人にすまなそうに言いました。

「あなたたち、本当にごめんなさいね……」

思えばこの子たちにまでこのひと月ずいぶん苦勞をかけてしまい

ました。

王女は決心しました。

「決めました。わたしはやはりロットバルトと・・・」  
と、その時、

「あ、あれ！」

子どもたちが空を指さしました。

「おつきい鳥。またロットバルト？」

「違うわ、白いもの。他の鳥たちも出てこないわ」

「人よ！ きつと天使様だわ！」

オデット王女も月を背にこちらに近づいてくる大きな翼の持ち主  
を目を凝らして見ました。

目が驚きに大きく開かれました。

三人がいつせいに叫びました。

「クラリス様！」

ザーツと湖の表面に波を立ててクラリスが降り立ちました。

みんなのいる岸まで滑るようになんてやってきて、ほとんど気絶しかか  
っているモデストをよいこらしよと下ろしました。

子どもたちは歓声を上げてクラリスの周りに集まってきました。

「クラリス様、素敵！」

「クラリス様もお空を飛べたの？」

「クラリス様。まーたこんなへなへなな人連れて来ちゃってえー」

「モデスト様！」

と、今度声を上げたのはオデット王女。

クラリスは微笑んで三人を避けて王女にモデストを任せました。  
子どもたちに

「さ、恋人たちの邪魔をしちゃ駄目よ」

とウインクをして。

オデット王女はハツと頬を赤らめクラリスを見つめました。

「でも、あれはクラリスさんの心だったんじゃない・・・」

「モデスト兄さんにも言ったのよ、自分の心に正直に、って。王女

様も、どうかそのように」

クラリスは王女の目を見つめてニツコリ笑いました。

「本当は王女様も希望を持っていてるんでしょう？」

クラリスは、邪魔者退散、と自分もいつしよにみんなを二人から離しました。遅れてヒーヒー言いながら飛んできたヴァイオレットも魔法で引き寄せて捕まえました。

後に残ったのはオデット王女とモデストと一応護衛に白馬ナージヤだけ。

王女はすっかり腰砕けのモデストを手を取って立たせてやりました。

「ああ、ありがとうオデーレさん。

・・・オデーレさん、ですよねえ？ なんだかずいぶん雰囲気が違うようだけれど。

ところでここはどこです？ クラリスったら何も言わないでいきなり空に連れ出すからすっかり目が回っちゃって何が何やら」

王女は優しいなんとも嬉しそうな目でじっとモデストを見つめています。

「わたくし、オデーレさんではありません。

わたくしがユークリナの王女オデットです」

モデストは、ええっ！？ と驚きました。

王女はおかしそうに笑って、ロットバルトに呪われた自分と仲間たちの身の上を改めて話して聞かせました。

話しながら、モデストを見つめる王女の目はとても親しみがこもって温かく、モデストを不思議な気持ちにさせました。

「それはたいへんなことですね。ところで、王女様は僕のことをご存じなのでしょう？ 失礼ながら僕もあなたとはずいぶん親しい間柄のような気がしてならないのです。そっくりな女性を知っているせいかもしれません」

「それは・・・」

王女は自分がクラリスと入れ替わっていたことを話そうかどうかどうし



ようか迷いました。

王女は別のことを思い付きました。

「それは、わたくしの身の上があなたのバレエの妖精の身の上と少し似ているからではありませんか？ わたくし、先ほどの舞台を陰で見させていただきましたのよ」

見ていたというのは嘘ですが、舞台も稽古も何度も見ているので、でたらめではありません。もっともバレエの妖精の身の上は伝説からかなりアレンジされているのであんまり似ているとも思えません  
が。

しかしモデストは一心にオデット王女を見つめ返し、その美しさにすっかり心奪われてそんな些細なことに気が回る状態ではなくなっています。

なんと美しい女性だろう。

自分が懸命に作り上げようと努力してきた舞台の理想のヒロインが今現実目の前にいる……

二人は言葉をなくしてただただ見つめ合い、

モデストはハツとするとようやく現実的に頭を働かせました。

クラリスはなぜ自分をここに連れてきたのだろう？

王女に掛けられた呪いと関係あるとしか思えません。

「王女様。王女様たちに掛けられた呪いはどうしたら解けるのですよう？」

「そ、それは……」

王女は口ごもりましたが、期待を押さえきれずに思い切って言い  
ました。

「永遠の愛の誓いだけがこの呪いを打ち砕くことができるそうです」  
言ってしまうから王女は頬をかわいらしく真っ赤に染めて唇を  
わなわな震わせました。

『正直な気持ちでその人と会って欲しい』

クラリスの言葉の意味が解りました。

モデストはこれまでクラリスに優しい恋心をいだいてそれを大切

にしてきました。でも今感じている劇的な気持ちの高ぶりは、これこそが本物の自分の感情だとはつきり分かりました。

クラリスちゃん、ごめんよ。

モデストはオデット王女の両手を握りしめ、しっかりと見つめて言いました。

「オデット王女。その名譽をどうかこの僕にお与えください。あなたを永遠に愛すると誓います。この誓いを、どうぞお受け入れください」

「モデスト様・・・」

王女が喜びに溢れて、はい、と返事をしようとしたとき、モデストはふとあることを思い出しました。

「そうか、それで王子はあのダイヤを・・・」

王女も思いだしてすまなそうな顔をしました。

「わたくしが永遠の愛の証として何か永遠に変わらないものをくださるように約束させたのです。そのため王子にも辛い思いをさせてしまつて、申し訳なく思っています」

「そうか、それでは僕もあなたに何か永遠に変わらないものを贈らなければいけませんね」

「いえ、よろしいのです。わたくしはただその思いが確かであるという誠意を見せて欲しかっただけなのです」

王子の勘違いとはいえ無茶な約束をした王女の責任でもあるでしょう。王女はせっかく捕まえた理想の相手にまた逃げられるのではないかと浅ましくも気が焦ってしまいました。

「いいえ、そういうわけにはいきません。それでは王子に対して申し訳ない。でも僕にあなたにあげられるものが何かあるだろうか？

・

「そうだ！」

モデストは月光の美しく浮かぶ湖を眺めて思い付きました。

「あのバレエをあなたに捧げましょう！」

あの素晴らしいバレエは永遠に人々に受け継がれ、踊り続けられ、

人々に感動を与え続けることでしょう！」

「でもあれはピエトロさんのものではありませんか？」

「僕はあのバレエの総合プロデューサーですよ！ 譜面に一行『美しきオデット王女に捧げる』と記してもらうくらいの権利はありますよ！」

そうだ、あの妖精の娘は人間のお姫様にしよう！ 二人の愛が魔女の呪いを打ち砕くんだ！ いやいやそれじゃクラリスちゃんがあるな。よし、魔女は魔王にしよう。魔王を打ち破り、二人の愛は永遠に祝福されるんだ！ うん、やっぱりおとぎ話はハッピーエンドでなくちゃあね。よしよし観客もきつと喜ぶぞ！」

勝手に一人で盛り上がるモデストに王女は呆れて笑いました。

「そんな勝手に物語を変えたらピエトロさんに怒られますでしょう？」

「まあ、そこはなんとか話し合いで。でも、多分喜んでくれると思いますよ」

モデストは笑って、真剣な顔に戻ると改めてオデット王女と見つめ合いました。

王女は問いました。

「わたくしの夫となつてくださいますか？」

「はい。喜んで」

二人は顔を寄せ、唇を重ねました。

その瞬間、

オデット王女たちは白鳥の羽を思わせる白い薄い衣をまとっていましたが、それが呪いを掛けられたときに着ていた衣服に変わりました。

オデット王女は王女にふさわしい慎ましいながらよい仕立てのしつかりしたドレスに。

他の者たちもそれぞれお城で働いているときの衣服に。

ロットバルトの呪いは完全に消え去ったのです。

幸せな口づけを終えた王女は微笑んで、ちよつと心配そうに尋ね

ました。

「でもそうするとあなたは王様にならなければなりませんよ？ 今までのように飛び回って好きなことをされては困ります」

「いやしまった、これは迂闊だった」

モデストは眉をしかめて、冗談だよと笑いました。

「僕は王になんかなりませんよ。僕はあくまで女王様の旦那さんです。いえいえ、もちろん全面的に公務のサポートはいたしますよ。でも僕は自分の仕事を捨てるつもりはありませんよ。ただこれからユークリナでそれをやりましょう。僕は素晴らしい文化は必ずや国を助けると信じています。だからユークリナで文化的な事業を行うのはユークリナのためにもなりますよ。もちろん僕はそれを一部の金持ち貴族のためにやるつもりはない。国民みんなに文化の喜びを分け与えますとも。文化的な喜びは生きる喜び、この国の一員である喜びにつながります。ユークリナはきつと素晴らしい国になりますよ」

オデット王女はたのもしそうに愛する夫を見ました。

「あなたはきつと素晴らしい王におなりになりますわ」

クラリスはヴァイオレットといっしょに抱き合つて喜びを溢れさせている王女の仲間たちから離れてこっそり強力な助っ人を迎えました。

「なーんだ、けつきよくわたしはいらなかったじゃない？」

「わざわざごめんなさいね。でも、やっぱり助かったわよ」

現れたのは白銀に美しく光る月の精ルナでした。

月の精ルナは妖精の中でもリラの精やダイヤモンドの精と並ぶ強い力の持ち主です。

鳥たちの追撃から救ってくれた光の玉はこのルナが放つたものでした。

ヴァイオレットはおっかなびっくりついクラリスの後ろに隠れるようにしました。ルナは妖精の国でもトップのお嬢様でヴァイオレ

ツトのようなはみ出し者のいじめられっ子なんか口をきいたことがありません。

ルナはそんなヴァイオレットを見て優しく微笑みました。

「あなたはいいわねえ、こんな楽しい冒険をいつもしていて」

ヴァイオレットは嬉しくなっつてつい減らず口をたたきました。

「まったくクラリスにくつついてるとトラブルに巻き込まれてばかりだよ」

クラリスは指先でヴァイオレットの頭をグリグリやりました。

「ところでさー、ルナはなんでこっちに来たの？」

「もちろんクラリスに呼ばれたからよ。直接にはリラに頼まれたからだけど」

ヴァイオレットはなんで？とクラリスを見ました。

「ロツトバルトの呪いを解くためにね。どうやら強い白い光が効くらしいんでね、だったら月の精ルナさんに頼むのが一番だろうと思っただの」

「ロツトバルトの呪いは解けたのか!？」

「たぶんね。ま、王女様が自分で解いてわたしがやる必要がなくなっちゃっただけどね」

「ふうん、なんだ、そうなんだあ……。待てよ、クラリスと王女は入れ替わってたんだろう？ 元に戻った王女がなんでそれを知らないんだ？」

「元に戻るとき記憶を隠しておいたの。知らない方が呪いが解けたときの感動が大きいでしょ？」

クラリスは笑いましたが、もしできなかった場合の心配もしてでした。

クラリスは王女の体にいるとき自分なりに呪いの仕組みを調べていました。けれど普通の人間の脳では理解できないところがあつて、こうして元の魔女の体に戻って再検討してみて、改めて「できると確信したのでした。」

「なーんだ、ロツトバルトの呪いもやっぱりクラリスにはかなわな

「かつたんだな？」

「ヴァイオレットがざまあみると嘲りました。

「ま、満月の一番光の強い時間にルナさんの協力が得られればの話だけれどね」

「クラリスは控えめに自慢しました。

「三人の子どもたちがこつちにやってきました。

「それじゃ、わたしはこれでね」

「ええ。わざわざありがとう」

「またあなたの武勇伝が加わったわね。いい土産話ができたわ」

「じゃね。ヴァイオレット、あなたもたまには里帰りなさい、と手を振ってルナはひっそり去っていきました。邪悪な呪いに対する人間たちの愛の勝利の感動に水を差さないためです。なんとも奥ゆかしいお嬢様の妖精です。

「クラリスも子どもたちと手を取り合って喜びました。

「ほらね、モデストお兄様ならきつと王女様と上手くいくって言ったでしょう？」

「登場の仕方が王子とどっこいどっこいのへなへなだったモデストを不安がるみんなにクラリスはモデストがいかに素晴らしい男性か一生懸命説明していたのでした。

「賢いジェニーが訊きました。

「ところでクラリス様、あたしたちここからどうやってお城に帰るの？ もうお空は飛べないわよ？」

「もうちよつと待っててね。じきにルピネーおじさまの馬車が迎えに来てくれるわ」

「クラリスのテレパシーも復活して、ルピネーにメッセージは送っています。

「実際大きな馬車が三台連なって大急ぎでこちらに向かっているところですよ。

「ユークリナの宮殿近くに潜むレスリーとジジにも迎えが向かっています。」

何もかも上手くいきました。  
オデット王女に関しては。

ロットバルトはひどく苛立っていました。

彼は自分の勝利を完全に信じて疑うことはありませんでした。しかしそれにしてもこの不安感は何なのでしょう？ まさか？ 思っている頭を振って打ち消しました。自分の完璧な呪いが破れるわけはないと。

しかし。

ロットバルトは北の湖の様子を見に行くことにしました。

つい柄にもなくはしゃいでしまつて疲れてしまったと周りに言い訳して祝宴の席を辞しました。

去り際さすがに嬉しくてオデールを呼んで話しました。

「おめでとう、オデール」

オデールはすでに匂い立つような幸せな花嫁の顔になっていました。

「父は用ができてしばらくここを去るが、おまえはもうここを我が家と思つてごやかになりなさい」

オデールはその用件の内容 pensando 顔を曇らせました。

「これこれそのような顔をするな。おまえは何も心配することはない。幸せのみを噛みしめておればよいのだ。わしは強い。父を信用せよ」

さあ、とロットバルトはジークフリート王子とオデールを手で示しました。おまえの愛する家族はここでいっしょにおるぞということでしょう。

オデールは父に親愛と感謝の口づけをしました。

「お父様、どうぞお気を付けて」

「案ずるでない」

ロットバルトは笑つて娘を残して歩き出しました。

ロットバルトは自分の客室に入ると窓から飛び立ちました。翼を広げ、風に乗り、猛スピードで飛んでいきます。

眼下の森に先を急ぐ三台の馬車を見つけました。

先頭の一台をルピネーが御しています。

ルピネーの姿が見えなくなったのもロットバルトの不安をあおっていました。

なぜ奴が湖に向かう？

不安はますます大きくなり馬車を追い越しさらに先を急ぎました。湖の見当が付いたとき、ロットバルトはギョツと立ち止まりました。

凄まじい強力な視線が自分に向けられているのを感じたのです。実際の目ではありません、心の目です。

「クラリス・・・」

馬車の屋根で追いつめたときの怯えた目とはまるつきり違います。全てを冷静に見つめて刺し貫く本物の魔女の目です。

今度はロットバルトが冷たい汗をかく番でした。

「おのれ、何故俺がたかが小娘ごときに・・・」  
歯ぎしりする思いで視線を睨み返しました。

さらに飛び、湖が見えてくるとロットバルトはまたもギョツと立ち止まり、今度は身の張り裂けそうな猛烈な怒りがわき上がってきました。

呪いが解かれています。

オデット王女の嬉しそうな笑顔と、そのとなりにはルピネーの息子モデストが。

「くっそおーっ！」

ロットバルトは吠えました。思わぬ伏兵でした。偶然には違いありませんが見事にクラリスの作戦が当たったかっこうです。

自分の娘だつて王子と婚約したのですからおあいこですが、ロットバルトの怒りは納まりません。



幸い湖の岸です。

「皆殺しにしてくれようか・・・」

ロットバルトは怒りの魔力をみなぎらせましたが後から迫るルピネーを考えてかろうじて思いとどまりました。

「見てるよ、カラベラス。娘との決着は必ず付けてやるからな・・・」  
呪詛の言葉を吐いてロットバルトは引き返そうとしましたがともベルーシアの城に帰る気にはなりません。

ロットバルトはユークリナの宮殿向けて飛び去りました。

深夜に及ぶ祝宴がようやく引けて、オデールは一人お姫様の寝室にたたずんでいました。

ドアがノックされました。

ジークフリート王子です。

「入ってもいいかな？」

オデールは招き入れました。つい辺りをはばかりさつとドアを閉めます。

王子はベッドの方を向いて立っています。

オデールは心臓が早鐘のように高鳴っています。

月明かりに青く染まって王子がこちらを向きました。

「嫌だったら、いいけれど・・・僕は、今夜君と結婚したい」

オデールは驚いて何も言えません。

王子は視線を落として言いました。

「今夜この月が落ちればオデット姫は二度と人間の姿に戻れなくなる。そうなってしまったら君と結婚したら、人間ではなくなくなってしまったからオデット姫を裏切って君と結婚したと、君に対して僕が卑怯者になってしまう」

オデールは喉につかえるようにして言いました。

「そんなことないわ・・・」

「僕はそう思ってしまう。君にまで一生卑怯な恥ずべき思いをいだ

いていかなければならない。それは、正直、つらい・・・」

オデルは手を差しのばして王子の頭を抱きました。

「かわいそうなジークフリート。いいわ。わたしはあなたの全てを受け入れてあげる。わたしも早くあなたを全てわたしのものにした  
い」

「愛している」

「愛しているわ」

王子は熱い思いを込めてオデルに口づけしました。

オデルはハッと思い出しました。

王子は顔を離してつくづくオデルの顔を見つめました。

オデルは青く凍り付きました。

王子は優しく微笑みました。

「僕は、多分こうなることを知っていた。もう一度心を込めて言うよ。僕は君を愛している」

オデルの目から熱い涙があふれ出しました。

二人は狂おしく口づけしました。

きつく抱き合い、ベッドに倒れ込み、切なく求め合い、涙が出るほど深く強く互いを受け入れました。

王子とオデルはこの夜真実の夫婦となりました。

## 第42章 呪い

ロットバルトは宮殿に舞い戻ると荒々しくドアを開けて衛士を驚かせました。

王女脱走の報告を遠慮しいしいする衛士を「馬鹿者め！」と怒鳴りつけました。ふだんのロットバルトにはまずないことです。

自分の私室に入るとそこもヴァイオレットがむちゃくちゃに暴れたせいで荒れていました。

「ちつくしょう！」

思わず半分欠けた高価な花瓶を壁にぶん投げて粉々に割りました。

ふふふふふ。

女の含み笑いがして思わずギョッと振り返りました。

カーテンの陰から灰色の魔女オデレーヌが出てきました。

「このわたしに気付かぬとはよほど気が立っているね？ どうやらあの女の娘にご自慢の呪いが解かれたようだね？」

ロットバルトはチツと忌々しくオデレーヌを睨みました。

「勘違いするな。あの小娘の手柄ではない。たまたま姫がいい男を見つけたまでだ」

「ほお。それもたいしたものじゃないか？ あなたの呪いはちよつとやそつとの愛なんかで破られるほどヤワなものではないのだろうか？」

ロットバルトはますます忌々しそくに元妻を睨みました。

「王女を逃がしたのはおまえか？」

「逆だよ。王女の脱走騒ぎを利用して潜り込んだのさ。ま、その気になればいつでも潜り込めたんだけれどね、こっちもちょうど準備が整ったところだったんでね」

ロットバルトは内心警戒しながら言いました。

「おまえも少しは母親らしいことをしたらどうだ？ オデールは立派な花婿を見つけて婚約したぞ。祝福を言いに行つてやつたらどうだ？」

オデレーヌが憎々しげに鼻の上にしわを寄せました。

「黙れ。娘を利用して己の野望を達成しようなど、つくづく情けを持たぬ男め」

ロットバルトは心底うんざりしました。

「そのことでおまえと議論するつもりはない。いいか、おまえは俺に娘を押しつけたんだぞ、姑息にも双子の姉の存在を隠してな。姉の方を利用して何をしていた？」

オデレーヌはぐつと言葉に詰まりましたが、もう自分を正当化することしか考えていません。

「全てはおまえの不実のせいだ！」

袖から「白鳥の白」のダイヤモンドを取り出しました。

ロットバルトはダイヤを睨み付けました。

オデレーヌは薄ら笑いを浮かべて言いました。

「これが何か知っているようだね？ そうさ、わたしが人間になるときにあの女に取り上げられた妖精の輝き、妖精の魔力の源さ。ようやく奪い返したよ」

愛しそうに頬ずりました。

薄目をギョロリと開いてロットバルトを嘲るように睨みました。

「わたしがなけなしの魔力を与えて瀕死のあなたをここまで回復させてやったというのにその恩を忘れおつて。いいや、おまえのことだ、最初からわたしを利用してつもりでいたのだろう？」

「言い寄ってきたのはおまえの方だぞ」

「黙れ！ うるさい！ おまえは不実な男だ。その報いを今こそ受けてもらうよ」

オデレーヌはダイヤを前に突き出しました。

目をカツと開いて魔力を注ぐとパキンと外の殻が割れてそれまでと比べものにならない輝きがあふれ出しました。

オデレーヌは、ははははは、と笑いしました。

「みなぎってくるぞ、我が妖精の力が」

ロットバルトは眩しそうに目を細めながら負けじと睨み返しました。

「フン、今さらその程度の魔力でこの俺が倒せるものか。やめておけ、返り討ちになるだけだぞ」

「強がりな止せ。今のあなたの魔力はわたしの与えてやった白の魔力が基礎になっている。それを利用して姫に呪いを掛けたのだから？ それがあなたの弱点だ。この封じ込められた魔力を一気に解き放てばそれに呼応してあなたの中にあるわたしの魔力が一気に爆発する。果たしてあなたの体がその衝撃に耐えられるかな？」

ロットバルトは脂汗を流しながら強気に言い返しました。

「そうなるかどうかやってみよ。俺の魔力はすでに完全に回復している。おまえの魔力ごときにビクともせんわ」

「ははははは。それではせいぜい後悔するがいい！」

パアンツ！とものすごい音がしてダイヤが粉々に砕け、真っ白な光が爆発しました。

ロットバルトは思わず硬く目を閉じ、その光の中で女の手が心臓を鷲掴みにするのを感じました。一瞬の激痛。しかしそれはそれきり瞬間で終わりました。

ロットバルトはおっかなびっくり目を開けました。

眩しい光は消え、ただ月明かりが妙に暗く部屋を照らしていました。

ロットバルトは自分の体を確かめました。特に何ともありません。オデレーヌを見ると、彼女は壊れてしまったようにへらへら笑っています。

「どうしたオデレーヌ？ 俺はこの通りなんともないぞ」

オデレーヌはますますへらへら笑いました。

「なんともない？ うふふふふふ、そうなの、なんともないの？ それはそれは、うふふふふふ」

ロットバルトは笑う女が気味悪くなつてきて、同情も失せてひたすら憎たらしく思えてきました。

「これで気が済んだか？ ではこの俺に刃を向けた報いを今度はおまえが受けてもらおうか」

ロットバルトは人差し指を突き出し、軽くつむじ風をまとわせました。

オデレーヌはそれでもへらへら笑い続けています。

「殺すの、このわたしを？」

ようやく笑いが治まって静かな真顔になりました。

「いいわよ、どうぞ殺しなさい。でも、よく見て、この顔を。忘れないでね？ あなたをこの世で一番愛した女の顔よ」

ロットバルトはオデレーヌの豹変をいぶかしがりました。

「さようなら、あなた」

「俺もおまえとこんな風にはなりたくなかったぞ。だが仕方ない。

さよならだ」

つむじ風が強くなり一点に集中して槍のように尖りました。

「さらば」

風の槍が放たれる寸前、窓ガラスを派手に割って大きな白い影が転がり込んできました。

それは放たれた風の槍を広げた羽ではねのけ、オデレーヌを抱えると元の窓から素早く飛び立っていきました。

ロットバルトは呆然としてそれを見送りました。

「なんだ、今のは……」

ロットバルトにはそれが自分の娘オデレーヌだとは分からなかったようです。

オデレーヌは丸く木の並ぶ森の小屋に飛ぶと母親を下ろしました。

オデレーヌは今度こそすっかり呆けてしまったように表情が失せきっていました。

中に運び込み、数少ない家具のうちの小さな椅子に座らせました。

「何故・助けたの？」

オデーレは小首を傾げてうそぶきました。

「そりゃあまあ母親ですからね。むざむざ父親に殺されるのを黙って見ていられないわ」

オデーレ又は力のない目でちらりと娘を見ると顔を背けて泣き出しました。

子どもがイヤイヤをするようにオデーレを追い立てました。

「わたしはひどい母親だよ」

「とつくに承知しているわよ」

オデーレは呆れたように母親を見下ろしています。

「でも、それ以上に父さんを愛しているんですよ？」

一瞬オデーレ又の体が止まり、より激しく背中を震えさせました。

「それじゃあ、さよなら。今度こそ本当に戻らないわ。母さん、元気でね」

オデーレは震えるばかりの母親を残して十八年間暮らしてきた家を後にしました。

オデーレはベルーシアの城の自分の客室の窓に帰ってきました。

ベッドにはビビアナが寝ていましたがオデーレの帰宅を知って起き上がりました。

「あらごめんなさい、起こしちゃったわね」

オデーレは笑顔を作りましたがすぐに痛そうに顔を歪めました。

ビビアナがびっくりして飛び出してきました。

「どうしたの？」

「夜遊びばかりしているから父親にお仕置きされたのよ」

オデーレは強がって減らず口をたたきました。がひどく痛そうに背中を気にしました。

「見せて」

ビビアナはオデーレのドレスの背中を広げて肌を露出させました。気を急いでろうそくを灯すと、右の背中にひどいみみず腫れが走っ

ていました。

「ああ、ひどい・・・」

何か薬をと駆け出そうとするビビアナをオデーレは腕を掴んで引き止めました。

「優しくキスしてくれる？ この傷にはその方が効くの」

みみず腫れは痛めた羽をしまった痕です。羽は魔力によるものですから確かに思いやりのこもった口づけの方が薬より効きそうです。

ビビアナは一心に優しい口づけを繰り返しました。

「ああ、ありがとう。気持ちいいわ」

オデーレはうっとり言いました。

しばらくそうしていて、

「ねえ、ビビアナ。わたし、帰る家をなくしてしまったわ。ずうつとあなたといっしょに居ていいかしら？」

ビビアナは念入りに口づけして、言いました。

「もちろん。先生が嫌だって言っても放しませんからね」

オデーレは幸せそうに微笑みました。

「また飛べるようになるかしら？」

我慢してここまで飛んできましたが、相手手ひどく痛めてしまっています。

「飛べるわよ。舞台の上でだって、どこでだって」

「そうね」

オデーレは体を巡らせてビビアナを引き寄せると愛しそうに抱きしめました。

ロットバルトには一人愛人がいました。

ロットバルトが選ぶだけかなりの美人でした。

恋などという面倒なことをするより豪華なお屋敷で裕福な生活をしている方がずっといいという女でしたから今の境遇にはなんの不満もありませんでした。むしろ旦那様のロットバルトを愛していま



した。その財産も含めて。

そんな女でしたからロットバルトはこれを妻にしようとはまるで思わず、互いに気の向いたときだけ恋人の付き合いを楽しんでいました。

今もこの宮殿に部屋を与え、そこに住まわせています。まあ潔癖性のオデット王女が嫌うわけです。ロットバルトにしてみればそれだけ自分の男性としての魅力に自信があるのでしょう。

部屋をめちやくちやにされたロットバルトはこの愛人の部屋に泊まることにしました。

廊下を歩いていてももう深夜でもありますしロットバルトの荒れ具合は宮殿中に知られて誰も恐れて出てこようとはしません。

ロットバルトは勝手に鍵を開いて女の部屋に入りました。居間を抜けて寝室に向かいます。

ベッドに女が寝ていました。  
が。

「んん……。なに、こんな夜中に?・・・」

迷惑そうに寝返りを打って顔を上げたのはロットバルトの愛人ではありませんでした。

ロットバルトは目を剥き、吐き気を催し、怒りを沸騰させると野獣の雄叫びを上げてそのモノに躍りかかりました。

宮殿中に女の悲鳴が響きわたりました。

ロットバルトの愛人が泣きわめきながら部屋を飛び出してきました。かわいそうにその頬は殴られて無惨に腫れていました。

さすがにただごとではなく衛士や男どもが集まってきました。女どもはこわごわドアの隙間や廊下の端から覗いています。

愛人は薄ものを着たままの姿で無惨にけつまずいて転げました。

ドアの向こうから憤怒の形相のロットバルトが迫ってきて愛人はまたありったけの悲鳴を上げました。

「きさま、何者だ? どこから入ってきた?」

「何言ってるのよお？」

愛人は泣きわめきました。

「あなた頭がどうかしちゃったの？」

「この無礼者が！」

ロットバルトは怒りの拳を振り上げました。

衛士が慌てて駆け寄りました。

「ロッドバルト様、いったい何事がありますか？」

「この馬鹿者！　このような汚らわしい浮浪者をなぜ……」

ロットバルトは衛士を見て固まり、真っ青になったかと思うと部屋に引っ込みボタンとドアを閉め鍵を掛けました。

衛士は何がなんだか分からず、とにかく今のうちに愛人を女に引き取らせ、ドアを叩きました。

「ロットバルト様、ロットバルト様。どうされたのです？　ロットバルト様！」

やかましい！　あっちへ行け！　と部屋の奥から怒鳴り返してきました。

衛士はドアを叩くのをやめ、集まってきた仲間と顔を見合わせ、頭を指さしました。

どう見ても先ほどのロットバルトは異常でした。

ロットバルトはベッドに上がり、布団をひつつかんで震えています。した。

どうやらあれは自分の愛人であったようです。

しかし、自分の見たあれはともそうは見えませんでした。

しかし、今廊下で見た部下の衛士もまた、まともな姿ではありませんでした。

さらに廊下のそここで自分を見ていた顔顔……。

まるで、地獄の亡者のようでした。

病み衰えた薄い皮膚の下に腐臭の漂ってきそうな膿んだ脂肪がぬめぬめ詰まっています。それだけで十分でしたが、一番ロットバ

ルトを怒らせ恐怖させたのはその目でした。白目が灰色にくすぶり、黒目はほとんど色が落ちて瞳孔だけがくつきり開いていました。まるで暗黒を内に秘めたように。そしてそれが一様に自分を睨み付け、それがまたなんと敵意と憎悪を露わにしていたことか！ まるでこの世でロットバルト以上に憎い人間などいないように。

ロットバルトは歯を食いしばり、無理やり自分を落ち着かせました。

原因は分かりました。

「あの女め！・・・」

ロットバルトはベッドを飛び降り、窓からゴオツと風を巻いて飛び立ちました。

「ああ、嬉しい。あなたがここに帰ってきてくれたのは何年ぶりかしらっ。」

オデレー又はロットバルトを待っていました。

ろうそくに火を入れ、掲げて夫の姿を見ました。

ロットバルトはひどくすさんだ顔つきをしていました。

オデレー又は疲れて仕事から帰った夫を迎える良き妻のように優しく微笑みました。

ロットバルトはオデレー又の微笑みを無視しました。

「おまえ、俺に呪いを掛けたな？」

「ええ、そう」

オデレー又は微笑んだまま言いました。

「わたし以外の全ての人間が醜く見えるように呪ったの。ね？ わたしはぜんぜん普通に見えるでしょ？」

オデレー又は嬉しそうに笑いました。

「何故だ？ 何故こんな馬鹿げたことをした？」

「何故？ あなたを愛しているからに決まっているじゃない。あなたに以前のようにわたしだけを見ていて欲しいから」

「くだらんことを」

オデレーヌの微笑みが少しだけ神経質にひきつりました。

「くだらなくなんかないわ。だって、あの頃のわたしたちは幸せだったじゃない？　ここで毎日二人きりで過ごして、あなたもわたしにしょっちゅう笑いかけてくださったじゃない、とつても嬉しそうに」

「さっさとこのくだらん呪いを解け」

「できないわ。わたしの魔力はすっかり使い果たしてしまったもの。もしできたとしても、嫌よ。絶対に解いてなんかあげない」

「おまえ、いいかげんにしろよ」

「ねえ、ここでまたわたしと暮らしましょうよ？　わたしたちきつとやり直せるわ。きつとまた以前のように幸せに暮らせるわよ」

オデレーヌはロットバルトに近づき、さすがにためらいがちに胸に身を寄せました。

「ね、思い出して、わたしたちの幸せな時を。あの時に戻りましょう？？」

「どうしても駄目かね？」

「愛してるわ、あなた」

「俺はもう愛していない」

ロットバルトの籠の手がオデレーヌの心臓を突き破りました。

ロットバルトはオデレーヌの体を乱暴に投げ捨て小屋を出ました。

朝になるとロットバルトは街の視察に出かけました。

活気に溢れる街の市民がロットバルトに尊敬と親愛の念を込めて笑顔で挨拶してきます。ロットバルトはかろうじて笑顔を作って手を上げて答えました。しかし歩くたび、人に会うたび、声をかけられるたび、その目を向けられるたび、苦痛は重くなり脂汗がじわじわわいてきて、とうとう耐えきれず角にうづくまって内蔵の物を吐き出しました。善意の市民が敬愛するロットバルト閣下を心配して駆け寄ってきます。しかしロットバルトの鼻腔には腐臭が満ち、喉

の奥にこびりつき、胃が喉にせり上がってくるのを涙を流してこらえました。ロットバルトは振り回したくなる手を必死で止めて市民をかき分け逃げ出しました。

宮殿に戻ると誰も近づけずベッドに横になりました。

心底まいりました。

目を閉じれば無数の市民の憎悪に満ちた目が睨み付け、喉にはいつまでも腐臭がこびりついていました。

ロットバルトは己はなんだ？と考えました。

指導者である。

人の上に立つ者は畏怖されて当然である。そうでなければ強力な指導者にはなれない。

全て幻だ。

だがそれさえどうした？

理想を貫こうと思えば敵は必ず現れる。

今さら人の何を恐れるか。

これは戦いだ。何より自分の理想を実現するための。

ロットバルトは自分の理想を思いました。

平等で豊かな社会。

なんと当たり前の理想。しかしそんな簡単なことが愚かな人間どもにはできない。だから自分のような力も知恵も強い意志も持った者が立たねばならぬのだ。

圧倒的な力で人間どもを従え束ねようとした。

失敗した。

愚か者の卑怯な策略で敗北した。

より人間たちに合ったやり方を探るために勉強した。

今度こそやれるはずだった。半分以上成功していた。後ほんの少  
しだけ。

最後の障害がまたしてもあの女の娘だった。

何故だ？ 何故おまえはいつも邪魔をする？

俺は学習した。確かに世界征服など馬鹿げていた。何故なら世界

が変わっても人は変わらないからだ。

理想を実現するためには人を変えねばならぬのだ。

それをどうするか？

それを示したのは腹立たしいが人間だった。

ラズベリーアールのラズベリー大伯爵。

彼も世界を変えるには人一人一人を変えるしかないことを知っていた。だから頑固に自分の領土のみに固執し、確実に目の届くその小さな土地で自分の理想郷を作り上げたのだ。

第二第三のラズベリーアールが後に続くのを期待して。

しかしなかなか第二のラズベリーアールは現れなかった。

ロットバルトは恥ずかしくて決して誰にも言いませんでしたが自分がユークリナをその第二のラズベリーアールにしようと思ったのでした。

あわよくばベルーシアも。

この俺のやり方のどこが悪い？ 誰が傷つく？

悪いのは人間だ。欲に駆られ己の利権にしがみつき、それを強化しようとする社会のダニ。

しかし人間にそれを非難はできない。何故なら、みんなそうだからだ。同じ地位につけば人間はみんな同じことをする。

だから自分なのだ。

自分も当然欲はある。だが人間よりはるかに広い視野を持ち物によく見える自分はそれがどこまで許されるかを知っている。際限なく食い散らかす人間とは違う。自分は己を律することができる。人間には己を律することができない。

どこで間違った？ 何を間違った？

オデレーヌか？ オデット姫か？ クラリスか？・・・

カラベラスか？

女、女、女。忌々しくも愛おしいどうしようもない存在。

確かに俺の失敗は女だな、とロットバルトはようやく笑いしました。ロットバルトは思い付いて笑い転げました。

そつだ、あの女、カラベラスだ！

この状態であの女を見たらどうなる？

あの高慢知己な綺麗な顔が、憎悪に歪んだ醜い濃み崩れた顔に見えるのだ。これは傑作ではないか！？

ロットバルトは元気に起き上がりました。

「待っているカラベラス。今おまえの顔を見に行つてやるぞ！」

窓を開け放ち、澄んだ高い青空の下、人目も気にせず羽を広げると飛び立ちました。

ユリアは朝から白バラの森に来ていました。

昨夜からどうも胸騒ぎがしてなりません。何かひどく悪いことが起きそうな予感がしてならないのです。

カラベラスも同様の予感がしていました。

「クラリスに何かあったのかしら？」

「いいえ。あの子に何かあればもつとはっきりしたメッセージがあるはずよ。でも、確かに、嫌な感じがするわね」

カラベラスは珍しく気弱に娘の身を案じました。

昼近くになり悪い予感の元凶が近づいてきました。

「ロットバルトね」

カラベラスはきつい目で見上げ、よく見えるように枝葉をよけさせました。

急速に近づいてくる黒い風を見てカラベラスは眉をひそめました。

「アイリス」

夫に呼びかけます。

「悪いけれどあなたは木の陰に隠れていて。今度はちょっとこの間のようにはいかないようだよ」

アイリスは素直に妻の言うことに従いました。

風を払って翼を広げたロットバルトが立ち止まりました。

「カラベラス！」





あの、憎悪に満ちた民衆の目です。

ロットバルトにとって唯一の救いは人間の肉の腐臭がなく、高貴なバラの芳香が全身を包み込んでいてくれることです。

ロットバルトは情けなく笑いました。

世界の全てが自分を拒絶している。

誰にも尊敬されない愛されない憎しみだけを向けられる世界で王になつてどうする？

女神の哀れみの眼差しを受けてロットバルトは完全な敗北を知りました。

「いいや、まだだ。世界が俺を拒むなら、俺が世界を破壊してくれる！」

ロットバルトは狂いました。

### 第43章 悲愴

ロットバルトは魔力を最大限に發揮して五本も六本も巨大な竜巻を作り上げました。

地面が剥がれ、木々が根こそぎもぎ取られ、大気は吸い寄せられて黒雲が急速にわき上がりました。

カラベラスはすぐさま鋼のイバラで森を覆いました。凄まじい衝撃が連続して襲ってきます。

ロットバルトは大笑いしました。

「まだだ。これで終わると思うなよ！」

ロットバルトは竜巻を操って離れた湖から大量の水を巻き上げました。

「食らえ！」

それまでとは比べ物にならない衝撃がドーンとぶつかってきました。さしもの網の目状に編まれた鋼のイバラも軋んで悲鳴を上げ、隙間からザーザー水が降ってきました。

「ちよつとー、だいじょうぶなの!？」

さしものユリアも悲鳴を上げました。

カラベラスはカツと目を見開き、魔力を最大限に引き上げました。イバラの森が竜巻に対抗するように縦にドーンと成長しました。

「しゃらくせえ、バラバラに引きちぎってやる！」

ロットバルトは竜巻を全て引き寄せて伸び上がった巨大な森を襲いました。ブチブチブチブチ枝が引きちぎられていきます。

面白いように森が解体されて小さくなっていきます。

「どこだカラベラス？ 出てこーい」

ロットバルトはアハアハ笑って森の根元に下りていきました。

森はやせ細っていき、その代わり木々の破片を含んで肥大した竜巻の勢いが弱まってきました。

ロットバルトはグングン下に降りていきました。

手を伸ばしました。

ロットバルトの心はひどく飢えていました。

心の奥底で本当は何を求めているのか……

柔らかな緑が見えました。

ロットバルトの心に瞬間安らぎが芽生えました。

が、

鋭く伸びた二本のイバラがロットバルトの両の翼を貫きました。

ギャーッ、とロットバルトは悲鳴を上げました。

すぐ目の前にカラベラスが立っていました。

カラベラスは嘲りもごまかしもない真剣な顔でロットバルトを見

ていました。

「わたしも今度は全力を出したわよ。これで気が済んだでしょう？」

カラベラスはふと本当に哀れみの表情になりました。

「あなた、呪いを掛けられているわね？ オデレーヌは……あなたが

殺してしまったのね？ 彼女のことはわたしにも責任があるわ。

さあ、おとなしくして。なんとか呪いを解いてあげるから」

カラベラスに優しく手を差し伸べられロットバルトは少年のよう

な顔になりました。

でも彼は救いの手を拒否しました。

ロットバルトの放った風の刃がカラベラスを襲いました。

カラベラスはよけず、頬にさつと切り傷が走りました。

ツーツと紫色の血がたれてきます。

ロットバルトは世にも悲痛な顔をして吠えました。

突き刺された翼を無理やり暴れさせて引きちぎり、きりきり舞し

ながら空に翔け登りました。

「ロットバルト！」

カラベラスの叱る声にべそをかきながらロットバルトは飛び去り

ました。

「まったくひどい有様ね」

枝葉を払いのけながらユリアが幹の陰から出てきました。

アイリスも無事でカラベラスはほつとしました。

「あいつまずいんじゃない？」

「ええ、そうね」

カラベラスは娘に警戒のメッセージを強く送りました。

「やっぱりクラリスの所へ？」

「それともオデット姫の所か。いずれにしても非常に危険ね」

「追いつけるかどうか、わたしが行きましょう」

「すまないわね」

カラベラスの珍しい言葉にニツと笑ってユリアは飛び立ちました。

上空から見ると白バラの森の惨状はひどいものでした。

この凄まじい破壊力が小さなクラリスを襲うかと思うとユリアはゾツとしました。

「急がなくちゃ」

しかし暴走するロットバルトの勢いは凄まじく、その煽りの気流の乱れも大きく、軽いユリアは翻弄されてなかなか思うように飛べませんでした。

「クラリス。気を付けてね」

ユリアもやはり警告を発するのがやつとでした。

ベルーシアのお城をユークリナの代表が訪れました。

オデット王女とその婚約者モデストです。

付き添いでクラリスと王女不在中の監視官ラピス特務外交官ルピネーもいっしょです。

四人はルービン卿に丁重に外国の王を迎える間に案内されました。女王が挨拶に見えるということでしたが、王女は先にジークフリート王子と婚約者オデルとの会見を所望しました。

オデット王女が見えられたと聞いてジークフリート王子は天地がひっくり返るほど驚きましたが、安堵もしました。

でも会いたいと言われて胸にズドンと重いものが降りてきました。

婚約者もいつしよにということで王子は救いを求めるようにオデールを見ました。

オデールは力強く王子を見つめ、手を握りしめました。朝の目覚めを思い出しました。

あの幸福で胸がいつぱいの目覚め。

世界一優しい微笑みとなりで向ける王子。

愛する喜びを知ったオデールはとても強くなっていました。

「行きましよう。何も恐れることはないわ。あなたにはわたしが、わたしにはあなたがいるんですもの」

王子も覚悟を決めて微笑みました。

「うん、そうだね。僕には君がいる。もう何事も恥じることはない」二人はきちんとした服に着替え会見の間に向かいました。

並んで入室し、直角に曲がって王女たち四人に対面した二人はさすがに緊張していました。

テーブルに着いていた四人は立ち上がり二人を迎えました。

王女はすっかり二人を見つめて言いました。

「ジークフリート王子。オデールさん。ユークリナ国次期女王オデット・プリティーンです。こちらはわたくしの婚約者モデスト・ガドウさん」

王女はチラツと得意そうに微笑みました。

「わたくしの呪いを解いてくださった方ですわ」

モデストは優雅に微笑んで、力強く王子を見据え、挨拶しました。

王子は衝撃を受けました。王女の呪いが解けたと知ったとき、てっきりそれをクラリスのおかげだと思ったのです。

まさか他の男性が、しかも自分の知っているこのモデストが王女の呪いを解いたなど露ほども思いませんでした。

オデールも驚きましたが、それよりもとなりの王子の反応が気になりました。

オデールは焦りを感じてオデット王女を見ました。先ほどまでの自信が危うくなっています。

この美しさはなんなのでしょ？

昨日の朝見た人物とはまるで別人ではありませんか？

透き通るように美しく、優雅で、上品で、しかも線が引き締まって内なる芯の強さと強固な意志を感じます。

あのふやけた寝起きの顔とはまるで違います。

もちろん、ひと月間自分がかぶっていた仮面とも・・・

その本物の美しさが段違いのものであることは王子の横顔を見ていれば分かります。

なによ、こんなの、インチキじゃない・・・

オデルは怪しく心を乱して王子の横顔と王女の美しい顔を見比べました。

王子を愛しているのはこのあたし。あたしなんだから！・・・・・・朝のあの目覚めの幸福感がスーッと遠のいていきます。

「どうぞ。かけましょう」

王女は王子に声をかけ、リラックスするように微笑みました。

「王子」

呼びかけられて王子は「ハイッ」と腰を伸ばしました。

王女は、

「あなたには本当に迷惑をかけてしまいました。苦しい思い辛い思いをさせてしまったでしょう。申し訳ありませんでした」

と頭を下げました。

「どうか許してください。

しかし」

と今度はオデルを見て言いました。

「ロットバルト氏の罪を許すわけにはいきません。宰相の解任、領地の没収、財産を整理し次第国外追放といたします」

王女のきつい視線と言葉にオデルは膝の上に置いた手をぎゅーと爪が食い込むほど握りしめました。

そのロットバルトはここにはいません。どうやら昨夜の内にお城を出ていったようです。

「でも」

と王女は軟らかい表情になりました。

「政治家としてのお父上には教えられることが多く、このような事態になってしまったことを心苦しく思います。ユークリナへの帰国は生涯許されないでしょうがあなたの方ならすぐに次のお仕事が決まるでしょう。そこで今度は正しく政治的手腕を発揮されることを期待しています」

オデルはほっとしましたがその偉そうな言い方が感に触りました。

こんなお嬢様にお父様の偉大さの何が分かるというのか。

しかし王女の顔を見るととても賢そうで、自分よりはるかに父のことを理解していそうだがっかりしました。

王女は目を閉じてほっと息をつきました。

目を開けるとニッコリ笑いました。

「気の重い話はこれでおしまい。」

ジークフリート王子、オデルさん。ご婚約おめでとう。あのね、実はわたし・・・」

その時、クラリスがビクンと立ち上がりました。

みんなどうしたのかとクラリスに注目しました。

クラリスは黙ってメッセージに耳を傾け、深刻な顔でみんなを見渡すと言いました。

「ロットバルトがこちらに向かっていているそうです」

「お父様が？」

祝福に来てくれるのだらうとオデルはのんきな声を出しました。クラリスは厳しい顔で言いました。

「オデレーヌの呪いによって恐慌をきたしています。非常に危険です」

「オデレーヌ・・・お母様!？」

クラリスは辛そうに視線をオデールに向けました。

「ロットバルトはおそらくわたしか王女を殺すつもりです。これかわたしが向かいますが、残念ながら結果に責任は持てません」

「そんな!」

事態の深刻さが今ひとつ分かっていないオデールは怒りました。

「あんななかがお父様になうわけないじゃない! ここに大人しくしていなさいよ、あたしがお父様に話してあげるわよ」

クラリスはますます辛そうな顔になりました。

「ロットバルトは、あなたのお父さんは・・・おそらくオデレーヌを殺しています」

オデールは冷水を浴びせられたようにビクンと押し黙りました。

クラリスは「行ってきます」と小さく言って部屋を出ていきました。

部屋を出ると廊下を走り、塔の屋上に向かいました。

外に出ると背中に翼を広げて飛び立ちました。

すでに大気が怪しくざわめいています。

西の空が灰色に煙っています。

嵐が近づいてきます。

会見の間にも窓はありません。しかし安全のためはめ殺しになって太い格子が斜めに渡されています。

みんな窓に群がってその隙間の狭いガラスからクラリスの飛び立つ姿を見ていました。

「ずるいなあ、自分で飛べるんだ」

と相変わらずとんちんかんな感想を述べたのは王子。

「クラリスさんだいじょうぶかしら?・・・」

王女は自分がクラリスの中にいたときに怪物ロットバルトと対峙したときの恐怖を思い出して身震いしました。あの悪い感情を置いてきてクラリスに影響がなければよいのですが。



ルピネーとモデストはふだんのクラリスを知っているだけに先ほどのただならなさを思っただけで緊張しています。

オデールは父が母を殺したという言葉を考えていました。

母が父を呪ったと言います。しかしあの偉大な父が呪いごときに負けるわけないと思えました。母が殺されたのは自業自得でしょう。オデールはあの灰色の醜い母が大嫌いでした。

オデールはふととなりで困ったような微笑みを浮かべて自分を見ているオデット王女に気付きました。

「こんなことになってしまつて。クラリスさんを信じましょう。あなたの方はわたしたちには想像もつかないほど強いわ」

オデールは怒りがこみ上げました。あなたはお父様に睨まれて震えていたあの子を知らないんだ、と。

オデット王女は親しみのこもった笑顔でさっきの続きを言おうとしました。

「あのね、実はわたし、クラリスさんと入れ替わつてずっとあなたたちと……」

しかしオデールはまったく聞いていませんでした。

オデールはいきなり王女をがっしり抱きしめました。

「なにを……」

王女が驚きの声を上げるとオデールは魔力を集中して背中に黒い羽を生えさせました。

みんな、わっ、と離れました。

オデールは部屋の中で無理に羽ばたいて浮き上がり、魔力を込めて窓の格子を蹴り破りました。

「オデール！」

王子が叫びました。

オデールは無理に笑顔を作つて振り返りました。

「あたしに任せておいて。だいじょうぶよ、お父様がわたしの言うことを聞いてくれないわけじゃない。すぐに、帰ってくるわ」

モデストが婚約者を奪い返そうと飛びつきました。しかし王女を

抱えたオデールはパツと高い窓から飛び降りました。王女の長い悲鳴が響き渡りましたが、バサリバサリ、黒い翼を羽ばたかせてオデールは舞い上がりました。

オデールが血相変えて飛び込んできました。

窓に取り付き、

「オデール！」

と叫びました。

オデールはチラツとだけ振り向いて飛び去りました。

「あの馬鹿」

目のいいオデールにはオデールの笑っている顔が見えました。しかし双子の姉にはそれがべそをかく一歩手前だというのも十分分かりました。

「お仕置きしてあげる！」

オデールは白く輝き銀髪の白い姿に変身しました。しかし、背中の羽は片一方だけでした。

「ちっ」

それでもオデールは窓から飛び出そうとしました。

その背中にビビアナが飛びついてしがみつきました。

「駄目よ！ 行っちゃ駄目！」

「放しなさい、ビビアナ」

「嫌です！ 絶対放しません！」

オデールも自分が飛べないことは分かっていました。

あきらめて戻ると愛しいビビアナを抱きしめました。

「オデール。戻ってらっしゃい！……」

最愛の妹へのありったけの思いを込めてテレパシーを送りました。モデストは苛々とオデールを見送ると何か思い付いて部屋を飛び出していきました。

王子は白いオデールの姿を綺麗だなとぼーっと眺めて、オデールも早く帰ってこないかな、と思いました。

王子もオデール同様事態の深刻さがちっとも分かっています。

した。

王女を抱えてオデールは一心に父の元へ向かいました。恐怖の悲鳴を上げていた王女もだんだん落ち着いてきました。よく考えてみれば白鳥になってさんざん見慣れた景色です。

王女はオデールに呼びかけました。

「オデール。オデール。ねえ、オデールったら」

「うるさいわね！」

しつこい王女にたまらずオデールは怒鳴り返しました。

「馴れ馴れしく人の名前を呼ぶんじゃないわよ！」

「ねえ、オデール」

王女は甘ったるい声で呼びました。

「ねえ、人の話を聞いてよ。さっきの話ね。わたしはあなたがわたしの腹違いの妹オデールを名乗っていたのを知っているのよ。わたし、クラリスさんと入れ替わってずうつとあなたたちといっしょに旅をしていたのよ」

「誰がそんな嘘信じるものですか。助かりたいからってつまらない作り話するんじゃないわよ」

オデールはこの王女様とにかく腹が立ちました。

美人で、知的で、地位も財産もあって、大金持ちの婚約者までいて。

何もかも全部自分より上ではありませんか。こんな女、女性全ての敵です。

でも王子だけは自分のもの。

そもそもあんたが大人しくお父様と結婚していればこんなことはならなかったのよ。

オデールも向かう空の怪しい色とざわめく風にようやくただならなさを感じて不安に思ってきました。

こうなればこの女を差しだしてさっさとお父様に怒りを納めても

らわなければ・・・

「嘘じゃないわよ」

王女がなおも言いました。

「あなたが森で初めてわたしたちに会ったときのことを思い出してごらんなさいよ。わたし、クラリスはぜひいぶんあなたを怪しんだでしょう？ それはクラリスさんの心の中のわたしが絶対自分にあなたのような妹はいないって思っていたからよ」

オデルも言われてみれば確かにそうだったと思つて少しだけ王女の話に耳を傾ける気になりました。

「でもあなたの作り話が上手で、実際はあなたのお父様が考えたんでしようけれど、自分の妹なんだって納得してからはぜひいぶんあなたの味方をしてあげたじゃない？」

オデルもあの旅を思い出しました。

ひたすら旅が楽しかった初めの頃。

王子との恋に真剣に悩むようになった中盤。

王子といっしょにいられることがとにかく幸せに思えるようになった後半。

確かにいつもなんだかんだ言つてクラリスが味方になってくれていたように思います。

オデルは本当にこの王女様があのクラリスだったんだとジーンと感動する思いがしました。

王女は言いました。

「だからね、あなたが本当はオデルだって知ったときものすごく腹が立ったのよ。ずうつとあなたを自分の妹だって信じていたんだから！」

「それは、・・・ごめんなさい」

王女は明るく笑いました。そして本当にオデルを心配するように言いました。

「ねえオデル。だからわたしが本当に心からあなたと王子を祝福しているのが分かるでしょ？ あなたがどれだけ王子を愛している

か、王子があなたを愛してしまつてどれだけ苦しんだかよく知っているわ。だから、ね、お願いよ、お城に戻りましょう。王子の所へ、ね？ 見てよあの空を、本当に危ないわ」

オデルもだんだん恐くなつてきました。

「クラリスさんに任せましょう？ あの人は本当に強いわ。わたしやあなたが知っているよりもはるかに」

オデルは考えました。あのクラリスが本物ではなかった。劇場での鳥人間を撃退したあの強さが借り物でしかなかった。

オデルの心に新たな不安がわき起こつてきました。

「いいわ。分かった」

オデルは下の森に向かって降下しました。

大きな木の根元に王女を下ろしました。

「ありがとう」

王女はお礼を言いました。

「仕方ないわね、風が収まるまでここで待ちましょう」

次第に嵐の様相を増してきている空を見上げて言いました。

「そうね。あなたはここで待っていないさい。もうすぐあなたの王子様が白馬に乗つて迎えに来るから」

オデルの素晴らしく良い目は白い天馬ナージャに乗つて翔てくるモデストの姿を捉えていました。

オデルはバサリと羽ばたきました。

王女はびっくりして止めようとした。

「どうする気？ 戻つてらっしゃいよ！」

オデルは王女に微笑みました。

「だいじょうぶよ、ちょっとお父様と話してくるだけ。すぐに戻るわ」

王女は必死に言いつのりました。

「駄目よ！ あなたもここで待ちなさい！ あなたの王子様も今頃必死に愛馬を駆けさせてあなたを追っているわ！」

オデルは本当に嬉しそうに微笑みました。

「王女様。ありがとうございます。」

できたらまたみんなで旅がしたいわね」

「オデール！」

オデールは手を振って飛び立ちました。

王女がどうしようもなく不安な気持ちでオデールを見送ってしばらくして

「オデット王女！」

と呼ぶ声がしてモデストを乗せたナージャが現れました。火花の精ヴァイオレットもいっしょです。

王女はナージャにすがりつくようにして言いました。

「すぐにあの子を追って！ 止めなきゃ！」

モデストが辛そうに首を振りました。

「もう遅い。僕たちももう飛び立てない」

そう、間一髪だったのです。

上空を黒雲が走ったかと思うとものすごい風が吹き付けてきてみんなナージャにしがみつきました。

「クラリス・・・」

いつも陽気なヴァイオレットが本気で心配そうな顔で空を見上げました。

妖精のヴァイオレットには分かります。すごいのは風ばかりでないことを。ものすごい魔力の乱れが痛いほど放射されています。

王女たちは無力に木陰で嵐をやり過ごすことしかできませんでした。

ロツトバルトは風を巻いて邁進しました。

クラリスでもいいオデット姫でもいい、彼の求めているのはまともな女でした。この憎しみしかない世界で彼に安らぎを与えてくれる優しい女でした。彼がまともならこの二人がその安らぎを与えてくれるなんてまず思わなかったでしょうが、彼の頭の中にはこの二

人の女性以外もう残っていませんでした。

前方に白い翼の天使が立っていました。

いぶかしんで目を凝らし、その正体を知るとロットバルトは喜びに相手を崩しました。

「クーラーリースー」

ゴオツと風を掃き散らしてロットバルトは止まりました。

「ハハハハハハハ」

ロットバルトは嬉しさで笑いが溢れました。

「おまえだ。おまえの顔が分かるぞ」

ロットバルトの目にクラリスはまともに見えました。

クラリスが言いました。

「よかったわ。とりあえず口はきけるようね」

しかしロットバルトはおよそまともな姿をしていませんでした。

衣服はずたずたのボロ布と化し、露出した体はもはや人間ではなく羽毛の生えた鳥のものでした。手も足も節くれ立った鉤爪の指が伸び、そもそも顔が半分化け物になっていました。

あのスマートな伊達男の面影はみじんもありませんでした。

ロットバルトはだらしなく笑って言いました。

「いいぞクラリス、おまえを俺の花嫁にしてやる。オデット姫などもういらぬ。世界もいらぬ。この世の何もかもどうでもいい。おまえだけでいい。さあクラリス、二人きりで二人だけの楽園で暮らそうぞ」

クラリスは冷たい目でロットバルトを見据えて言いました。

「そうとう脳をやられてるわね。とにかくおとなしくなさい。今すぐ治療しないとあなた死ぬわよ」

ロットバルトは聞いていませんでした。

「さあ結婚式だ。誓いの口づけを交わし二人の愛の生活を始めようぞ」

迫るロットバルトにゾツとしてクラリスは後退しました。

クラリスは困りました。ロットバルトは完全に色惚けしています。

まだ若いだけにこういうのだけは駄目です。

拒否されたロットバルトはムツと押し黙り、やがて怒りを募らせてクラリスを睨みました。

「そうか、おまえも俺を拒むか。やはり誰一人俺を愛さぬか」

「ちよつと落ち着きなさいってば」

「それならばおまえも目障りだ。死ねえっ！」

いきなりものすごい風がドオツと叩き付けてきてクラリスは「きやあっ」と悲鳴を上げてクルクル吹き飛ばされました。でたために乱れ飛ぶ魔力の波動にクラリスも勘がつかめ切れません。

ロットバルトは勝ち誇って笑いました。

「空で俺に勝てると思うか？ そうだ、おまえの体をむさぼり食ってやるう。首だけ残して花瓶に生けてやる。魔女の首だ、少しは長持ちするだろう」

クラリスは駄目ねこれとは思いました。救いようがありません。

「冗談じゃないわ！ 返り討ちにしてやるわよ。かかってらっしやいー！」

こうなったら魔力を使い果たさせるしかありません。

ただ問題はこの身の震えるような凄まじい魔力の暴走に、この世界そのものがどこまで耐えられるか。

「いくぞおっ！」

ブオンと瞬時に二本の竜巻が立ち上がり、クラリスは引きずり込まれるのをなんとか耐えました。その竜巻が左右からいっぺんに投げつけられます。二本は激しくぶつかり合ってクラリスの体を木っ端みじんに破壊しようとしてきました。

クラリスは丸くなって真球のバリアを張りました。

コロコロ転がって、向こう側へブオンとはじき出されました。球はもつとも安定した立体です。ほんのちよつと力の不均衡があればそこから衝撃をすり抜けられます。

はじき出されたクラリスはバリアーを解くとえーいと白い光の玉をロットバルトに投げつけました。



「ちょこざい！」

ロットバルトは振り払いました。光の玉は弾けて白い粉を撒き散らしました。

クラリスは次々球を投げつけました。

「こんなヤワな攻撃通用するか！」

ロットバルトも次々叩き割りましたが、やがて異変が襲いました。

「あぐっ……」

呼吸ができず喉をかきむしってのたうち回りました。

白バラの花粉攻撃です。大量の花粉が喉や鼻腔に張り付いて空気の穴を塞いでしまったのです。

「おおおおお！」

ロットバルトは魔力で花粉を焼き落とし、口と鼻から煙を吐いてゼイゼイ言いました。

「おのれえ！」

でたらめに風の刃を投げつけるだけ投げつけました。

しかしこれはクラリスにはまったく効きません。全て手前で解けてそよ風になってしまいます。

逆にクラリスの放った一振りの刃がロットバルトの翼を切り裂きました。

「くううう……」

ロットバルトは激昂しました。

体を旋回するとドンツと自身が巨大な竜巻と化しました。

クラリスも小さな竜巻を巻いて上手く巨大竜巻から逃れました。

離れて眺めているとミシミシツと太古の森から樹齢何百年という大木が次々巻き上げられゴォゴォうなりを上げて旋回しています。

クラリス一人のためには巨大すぎる凶器です。

「困ったわ。森が壊れちゃう」

のんきに困っているとその大木がブーンとうなりを上げて飛んできました。

巨大な槍が次々襲ってきます。クラリスは忙しくよけましたがさ

すがにこれはよけ切れません。目の前にゴオツと太い枝が迫ってきた。たまたま衝撃波を放って粉碎しました。魔法も何もあつたものじやないただ魔力を力任せにぶつけただけです。

竜巻の中でロットバルトが笑いました。

「追いつめられてきたな。おまえもそろそろ本気を出さんと本当に潰れてしまふぞ」

森がきしみをあげて次々ロットバルトの竜巻に吸い上げられていきます。

「いいかげん怒るわよ」

クラリスは竜巻に向けて大きな魔力を放ちました。

吸い上げられた木々が平たく形を変え、枝を根を成長させ結びつきました。一つの巨大な固まりになってロットバルトを閉じこめていきます。

ロットバルトは笑いました。

「馬鹿め。母親と同じ手が通用するか！」

ロットバルトは風の刃を放って切り刻み竜巻に解体させようとなりました。しかし太古の森の生命力はロットバルトの予想をはるかに超えていました。刃で切り刻まれた傷はブクブク泡のように肉塊を吹き出し、巨大な木の固まりは解体されることなくどんどん成長して太っていきました。魔力も中に封じ込められ竜巻も勢いを失っていきます。ロットバルトは迫り来る巨体に悲鳴を上げました。

クラリスは木々に魔力を浴びさせ森全体の霊体エネルギーを呼び起こしたのです。森は自分が育んでやった生命の裏切り行為に激しく怒りました。

やりすぎちゃったかしら？とクラリスが心配すると、巨大な木の固まりはポオツと激しく火を噴いて炭となり竜巻にまき散らされました。

炭と共に竜巻も立ち消えました。

現れたロットバルトは真っ黒にすすけてゼイゼイ激しく息をつきゴホゴホ咳き込みました。

「おのれええええ！・・・」

呼吸困難と悔しさで目が真っ赤に燃えたぎっています。

きれいに真っ白なままのクラリスが腰に手を当てて言いました。

「ねえ、そろそろおしまいにしませう？ これだけ暴れて気が済んだでしょう？」

「ふざけるなあっ！」

ロットバルトはまた竜巻を巻く構えをしました。

と、その時、

黒い翼を広げたオデルが飛んできました。

「あっ、バカっ」

と、思わずクラリスは思いました。

オデルもこの凄まじい戦いを見てすっかり怖じ気づいていたのですが、どうやら父親が苦戦しているらしいと見てこの隙を幸いと避難していた木陰から飛び出してきたのでした。このまま森にいたのではいつか父の竜巻に巻き上げられてしまいそうです。

「お父様、おやめになって！」

オデルは呼びかけながら近づいていきました。

ロットバルトは目を細めてじいっとその姿を凝視しました。

クラリスは敏感に危険を感じて叫びました。

「駄目よ！ 帰りなさい！」

それが悪かったのでしょうか？

ロットバルトはニヤリと笑いました。

風の刃が乱舞してオデルを襲いました。

瞬間、

クラリスの脳に凄まじい電流が走って時間が止まりました。

しかし自分の時間もいっしょに止まってしまったのでただ見ているだけしかできません。

ゆっくり、オデルの首が胴を離れていきました。

腕が、脚が、翼が、下半身が、バラバラに外れて宙に浮き上がる

と、上昇の力を失ってゆっくり下降を始めました。

クラリスは声にならない悲鳴を上げました。

オデールはバラバラに別れて森に落ちていきました。

時間が戻りました。

ドクンドクンすさまじく心臓が脈打ち、顔がカアツと熱く、耳がジンジンと痛みました。

その耳にロットバルトの笑い声が入ってきました。

クラリスはゆっくりロットバルトの方を向きました。顔から急速に血の気が失われていきます。

「ハハハハハハ」

ロットバルトは確かに笑っていました。

さもおかしそうに腹を抱えて。

「ざまあみろ、余計なお節介をするからだ」

残念だったな、とロットバルトはクラリスを見て笑いました。

クラリスは死人のように蒼白な顔で言いました。

「あなた、何笑っているの？ あなた、自分が何したか分からないの？」

アハアハ笑っていたロットバルトはクラリスのおかしな様子にようやく笑いを納めていきました。

「俺が、何をしたって？」

ロットバルトは地獄の女幽鬼を退治したのでした。

羽を生やして飛んでくるなど、どうせくだらない仲間の妖精だろうと決めつけたのです。

自分に呼びかける声などまったく気にも留めませんでした。

いえ、もしかしたら耳には聞こえていたのかもしれない。しかしロットバルトはそれを判断するのを放棄したのでした。

自分が何をしたか？

今クラリスにただならぬ様子で問われても何をしたのか思い出す気力もありません。

ロットバルトはくだらないことを考えるのはやめました。

「どうでもいい。おまえに味方するもの、俺に刃向かうものはみんな滅びるがいい」

クラリスは力無く言いました。

「そう。分かったわ。もういい。」

さあ、いらっしやい、ロットバルト。決着を付けましょう」

森にはあちこち多くの湖があります。ロットバルトは竜巻を操りその水を次々大量に吸い上げ始めました。白バラの森を襲ったロットバルト最大の攻撃法です。

ドオドオと水を巻いた巨大竜巻はそれまでと十数倍質量と攻撃力を増していました。

これを一気にクラリスにぶつける。

魔女だろうが肉体を持つものがこの破壊力に耐えられるはずがない。球体バリアーだろうがこの圧倒的な力に意味をなすはずがない。ロットバルトはあくまで力で邪魔者を叩きつぶそうとしました。クラリスは竜巻から距離を取って天に向けてまっすぐ右の人差し指を立てています。

その手にいつもポケットに忍ばせている蜘蛛を軽く握って糸を一本吐き出させました。

蜘蛛の糸はスルスル長く伸びて、風に吹かれてゆらゆらなびきました。

クラリスはその一本の細い糸に魔力を集中させていきました。

鋼よりも硬く、ダイヤモンドよりも硬く、地球上のいかなる物質よりも硬く、ひたすら細く、ゼロへ限りなく近づく……

風になびいていた糸が徐々に立ち上がり、とうとう人差し指に沿ってまっすぐ天を向きました。

もはや微動だにしません。

「行くぞクラリスー！」

ドドドドドドドド、

とロットバルトの巻く大竜巻が迫ってきました。  
切る。

クラリスはただ静かに腕を振り下ろしました。

腕を振りきったクラリスに竜巻が襲い、クラリスは素早く体の向きを変えて竜巻に飛び込みました。

あっという間に天に放り出されました。

そこは青空が広がり、太陽が眩しく照りつけていました。

クラリスは思わず、くっ、と涙を流しました。

クラリスは翼を広げ黒雲の下に舞い戻りました。

ザーザーと雨が降っていました。

雨が上がると雲の隙間から日が射し込み虹が架かりました。

ロットバルトは宙に立っていました。

肩を落としてしょぼくしていました。が伊達男の人間の姿に戻って  
いました。

「俺は、オデールを殺してしまっただな？」

「思い出さなくてもよかつたのに」

クラリスは悲しそうに言いました。

ロットバルトも悲しそうにフツと笑いました。

天から射す光を眩しそうに見上げました。

「信じないだろうが俺は本当にオデット姫を愛していたのだよ。あの高貴で清らかな心を。もちろん美しい姿もだがな。

俺が国王夫妻を殺したのは彼らが姫をラピスのくだらん貴族の次男坊にくれてやろうとしたからだ。馬鹿な取り巻きの甘言に乗っ  
たな。

俺はそれがどうしても許せなかった。

姫は国のためとなんの不満も言わずその話を受けただろう。そして姫の清らかな心は体は肥え太った醜い貴族の男の食い物にされて汚されていくのだ。

俺は、それが我慢できなかった・・・」

「王女も自分ももつと賢くあるべきだったと後悔していたわ」

「そうか・・・」

ロットバルトはポツリと一筋涙を流しました。

クラリスに顔を向けました。

「俺は結局一度もおまえら親子に勝てなかったな」

「魔女はね、戦いは避けるのが一番賢いやり方だって知ってるのよ」

「狡いぞ、おまえら」

ニヤリと笑ったロットバルトの顔がずれました。

顔面の中央を赤い線が走り、それは首に続き、下まで走っていくと、股が裂けドロツと赤い物が漏れ出すと、ロットバルトの体はバツクリ左右に裂け、血が霧となつて噴き出しました。

ポタポタ下に滴っていくロットバルトの肉塊が地面を割り真つ赤に煮えたぎる地獄のふたを開きました。

幽鬼と餓鬼どもをまといつかせて鬼女と化したオデレーヌが嬉しそうに笑って立ち上つてきました。

オデレーヌは裂けた肉体から現れたロットバルトの幽体に取り付きました。真つ赤に血の滴る舌を寄せてロットバルトの二枚目の顔をなめ回しました。

ロットバルトはもうあきらめた顔でオデレーヌの好きにさせてやりました。

「分かった。負けたよ、おまえには」

クラリスに目を向けるとニツと笑って手を振りました。

「あばよ」

ロットバルトは幽鬼と餓鬼とオデレーヌに引っ張られて地獄の口に沈んでいきました。

## フィナーレ・歩くような速さで悲しげに

オデールの葬式はベルーシアの正式な王子妃として城の聖堂で行われました。ただまだ結婚式は挙げていなかったのでごく身内の親しい者だけでしめやかに行われました。

オデット王女はルピネー特務外交官に尋ねました。

「わたしは間違っていた気がしてなりません。結婚はともかく、国のことは全てあの人に任せるべきだったのではないのでしょうか？」

こういう場ではばかられますがあの人というのはもちろんロツトバルトのことです。

ロツトバルトはこの後ユークリナで国葬が執り行われる予定です。眞実はともかくユークリナの国民にとつては国民のために働いてくれた貴重な恩人ですから。

ルピネーはすっかり痩せた顔でフムと頷きました。

「俺には分かん。が、多分上手くいかなかったと思うぜ」

何故？と王女は問いました。

「奴の言っていたのはしょせん頭の中の理想論だ。立派な王様一人に頼り切った社会なんてどうせあちこちほころびが出てくるに決まっている。ま、それが分かっていたから奴はどうしても自分が絶対的な権力の座、王にならなきゃならなかったんだろうな」

王女はルピネーの言い方がちょっと気に入らませんでした。

「でもそれはどんな社会でもいつしょではないですか？」

「そうさ。だからな」

ルピネーはいたずらっぽく、ちょっと悲しそうに、言いました。

「正直、俺はあいつに一つ国をくれてやりたかった。あいつがどこまで実際の社会で理想を守っていけるか、この目で見てみたかった」  
聖堂の壁に、昼日中だというのに大きなフクロウがさまよい現れて激突して死にました。

恐らくロツトバルトの忠義なしもべバルバツサであったでしょう。



クラリスは白バラの森に帰っていました。

あの後オデールの体を集めてなんとか蘇生できないか試しましたが、しかし心臓を切り裂かれ、血液をすっかり失っていて、蘇生に必要な新鮮さは保っていませんでした。

オデールの首は大きな木の根元に湖の雨でできた水たまりに浮いていました。目を開いて口を何か言いかけた形に半開きにして、自分が死んだなんてこれっぽっちも気付いていませんでした。

クラリスはオデールの体を形だけきれいに元に戻すと王子に渡してあげました。

その時の王子の顔を、クラリスはとても見ていられませんでしたが、クラリスはその足でナージャに乗ってヴァイオレットと共にロヴィークに帰りました。とてもその場にいたたまれませんでした。

今クラリスは母を手伝って白バラの森の復旧に努めています。

クラリスは父母に事件について何も言いませんでした。

ただ黙々と作業をして、ふとした拍子に何か思っただしては呆然として時折辛そうに涙を滲ませました。

カラベラスはそつと優しく娘の肩を抱いて言いました。

「だいたいのことはユリアから聞きました。あなたはよくやりました」

「オデールを死なせてしまったわ。彼女は死ななくてよかったのに、死んじゃ駄目な人だったのに、わたしは、救ってやれなかった・・・」

クラリスはそれまで我慢していた感情が溢れだして母の胸にすがりついてわーわー泣きました。

カラベラスは娘の背を抱き頭を優しく何度も何度も撫でてやりました。

「クラリス。」

この世に生きてはいけないうんなんかいくらでもいるけれど、

死んじや駄目な人なんていないのよ。それはわたしとお父さん、この世に二人だけ」

魂は永遠だと言いたいのでしょうが今のクラリスにはなんのなくさめにもなりませんでした。

クラリスはいいかげん泣き飽きると恨めしそうに母を見ました。

カラベラスは魔女流になぐさめました。

「あなたは本当によくやったわ。本当よ。

わたしだったら、ロットバルトもオデールも王女も王子も白鳥たちも、みーんな殺していたわ」

本っ当になんのなくさめにもなりません。母ならやりかねないと、少なくとも自分の方がまだましだったとクラリスは一応納得することになりました。

母の方がはるかにこの世の真実に精通しているのですから仕方ありません。

クラリスは改めて母という人を不思議に思いました。

ロットバルトはあれほど自分のことを魔王だと豪語しておきながらちよつと呪いを掛けられて人の心の闇を見せられた途端、それが幻だと分かっていたはずなのに、あっさり自滅してしまいました。

伝説的な黒魔女として人々に恐れられていた頃の母は心の中においていどれほどの闇を抱えていたのでしょうか？

その母がどうしてこんなに優しくなれたのでしょうか？

それはやはり父のおかげなのでしょうか？

クラリスは父の所に遊びに行きました。

アイリスは相変わらずのんきに何か彫っていました。

「指輪？」

男性用と女性用、ペアの銀の指輪を彫っています。

相変わらず見事な細かい細工です。

「誰の？・・・」

と訊いてクラリスは思い出しました。オデール、いえオデールに

王子とペアの指輪を頼まれていたのです。

でもそれを父にはまだ言っていない。

もう言う気もありませんでした。

悲しみがまた襲ってきました。

「なんとなく、作ってみたんだ」

父は相変わらずひたすら優しい笑顔をしています。何があってもこの笑顔は変わらないでしょう。

「よかったらクラリスにあげるよ。おまえにはまだ大きいと思うけれど」

不思議です。父にはまったく魔力を感じませんがたまにこうして不思議な偶然があります。

クラリスは笑顔で父のとなりに座り込みました。

「あのね、お父さん。」

わたしオデット王女の中にいたときにちょっとお父さんのことを苦手に感じちゃったの。変ね、今はぜんぜんそんなことないのに。わたし、お父さんみたいな男性ってタイプじゃないのかなあ？」

アイリスは愉快そうに笑いました。あくまで優しくお上品に。

「そうなんだろうね。わたしを愛してくれる女性はカラベラただ一人だよ」

クラリスも嬉しくなって笑いました。

唐突に地獄の底から立ち現れたオデレーヌの姿を思い出しました。クラリスは父に問いました。

「お父さんはずっとお母さんを愛し続ける自信ある？」

アイリスはあっさり答えました。

「うん。あるよ」

「じゃあ、ずっと幸せでいられるわね？」

今度はちよつと考えて答えました。

「そうだといいいね。でもね、時々どうしようもなく恐くなることもあるんだ。幸せな気持ちが強ければ強いほどその幸せがいつか失われてしまっじゃないかってね」

「幸せを壊す敵が現れるってこと？」

「そうじゃない。カラベラは絶対誰にも負けないよ。」

「幸せが失われるのは幸せを幸せと感じなくなっただけだ」

「お母さんを愛し続ける自信はあるの？」

「うん。人の心は難しいからね。人の心どころか自分の心も本当には信じられない。わたしが確かに信じられるのはカラベラと、クラリスの心だけ」

「わたしはお父さんの心を信じているわよ」

「ありがとう。嬉しいよ」

クラリスは今回生まれた二組のカップルのことを思いました。残念ながら一組は失われてしまいました。

オデット王女とモデスト兄さんはずーっと幸せでいてくれるでしょうか？

アイリスが唐突に言いました。またたまたま偶然の一致です。

「人を好きになるには大まかに二通りあると思うんだ。一つは自分と同じだから好きになる場合、一つは自分と違うから好きになる場合。わたしとカラベラは完全に同じだから好きになったタイプだね。相手を愛し、相手に愛されることで自分を愛することもできる。心が傷ついてもお互い治療し合えるんだ」

クラリスは王女とモデスト兄さんはどちらかという違うから好きになったタイプかな？と思いました。

アイリスは続けました。

「ジークフリート王子とオデルさんもそうだったんじゃないかな？ だから王子は今心が半分引き裂かれたみたいになすごく胸が痛んでいると思うよ」

クラリスは思いました。二人とずっといっしょにいたのは心の中にいたオデット王女ですがその記憶を思い出してみると本当にこの二人は笑っちゃうほどそっくりです。

クラリスは思い出し笑いして、くっくくく、と笑っていたのが涙に変わってきました。

でもクラリスはその涙をぬぐい去りました。

「これ、王女様の王冠よね？」

完成して布にくるんである銀のティアラを取り出しました。

頭に乗せてみると耳までずり落ちてしまいました。

「欲しければおまえにも作ってあげるよ」

「いずれそのうちね。これ、王女様に届けるのよね？ ついでにこ

の指輪ももらっていい？」

「いいよ」

アイリスは最後の一刀を入れると見事に完成させて娘に渡ししました。

クラリスは元気に立ち上がりました。

「わたし、ベルーシアに戻るわ！ オデールに約束の指輪を届けなくちゃ！」

お葬式の最後にピエトロ氏が弦楽四重奏団を指揮してレクイエムを演奏しました。不謹慎ながらアンコールにオデールも大好きだった「白鳥の湖」のワルツも演奏しました。

あのオデールが双子の妹の死がよほどショックだったのでしょうか、ずっと泣き続けで時折こらえきれないようにしゃくり上げ、ビビアナにずっと抱き支えられていました。思えばオデールは妹ばかりでなく父も母もなくして天涯孤独になってしまったのです。無理もありません。

そんなオデールのためにもピエトロ氏は心を込めて指揮しました。残念ながらオデールはピアノに取られてこの恋は実りませんでした。だが、恐らく生涯忘れ得ぬよい思い出となり、これから先も多くの傑作を生みだしていくことでしょう。

演奏が終わり、一人一人祭壇に安置されたオデールの遺体に最後のお別れをして聖堂を出ていきました。

モデストがお別れをし、オデット王女がお別れをし、最後に王子

だけが残りました。

王子はオデールの頬を撫で、唇をたどり、いつまでもいつまでもそうしていました。

王女は出かかって、どうしても気になってそっと王子の後ろに戻ってきました。

王子はぶつぶつぶつぶつ何か言っていました。

「オデール、オデール、どうしたの？ 目を開けておくれよ。すぐに帰ってくるって言っただじゃないか？ 僕は待っていたんだよ、君の帰りをずっと。迎えに行かなかったのを怒っているのかい？ だって、君は天使みたいに空を飛んで行っちゃうんだもの。クラリスは狡いよね、自分で飛べるくせに天馬まで持っていて。僕はあの馬がすごく欲しかったんだ。あの馬があれば僕だって君の後を追っていったんだ。今度クラリスに貸してもらおうよ。そうしたらあの白馬にまたがって君と空の散歩を楽しめるよ。ね、楽しそうだろ？ だから、ねえ、オデール、もう許して目を開けておくれよ……」

王女は思わず口を押さえて顔を背けました。

「ねえ、オデール、オデールったら……」

王子の首筋にフツと温かな風が触りました。

耳の奥で声がしました。

『ごめんね』

風はそれきり消えてしまいました。

「オデール……」

王子は顔を歪めるとオデールの遺体にすがりついて泣き出しました。わんわんと大声を上げて子どものように。

オデット王女はぼろぼろ涙を流しながら王子の背にそっと触れて言いました。

「あなたの心に真実の愛がありました。

あなたのオデールへの愛は永遠です」

終わり



フィナーレ・歩くような速さで悲しげに（後書き）

ありがとうございました。

2008.2.15（2004.6.28）2005.3.22（



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6683d/>

---

白鳥姫

2010年10月8日13時25分発行